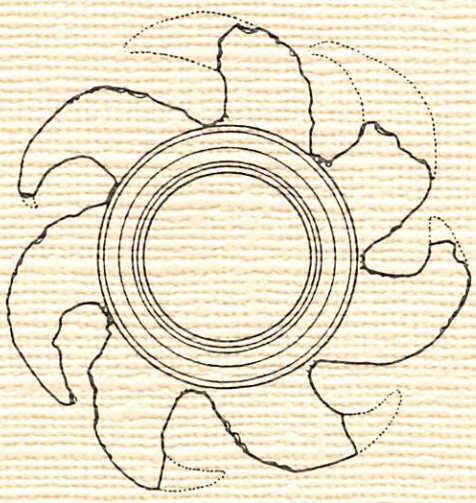
方保田東原遺跡



1982

山鹿市教育委員会

方保田東原遺跡

かとおだひがしばる

山鹿市立博物館調査報告書第2集

1982

山鹿市教育委員会







巻頭図版説明

方保田東原遺跡出土青銅製品

銅鏃（左Ⅰ次調査出土、右鹿本高校調査出土）
小形仿製鏡（Ⅳ次調査出土）
巴形銅器（Ⅰ次調査出土）

序

山鹿市は古代文化の集積地として知られたところである。しかし、それは装飾古墳の所在などによって、山鹿と言えば古墳文化ということが大方のイメージであったように思う。弥生時代の状況については、偶発的に、ときどき報道されることはあっても、本格的に注意されることはなかった。

これが、断続しながらではあるけれども、昭和47年度以来12年間に及ぶ調査によって、ここに報告書が出来したことは望外の喜びである。

昭和56年度に始まる第Ⅲ次調査の直接の契機となったのは相互建設株式会社が山鹿工業株式会社から工場敷地の一部を購入されて、分譲住宅の建設に着手されたことであった。しかし、その一帯が第Ⅰ次調査の段階で県下初例の巴形銅器や銅鏃等を出土していたこともあって県文化課の要請も強く、調査に着手し今日にいたったわけであるが、この間、企業の利益を犠牲にして、こころよく待っていただいた相互建設の社長川端洋右氏に対してあつく御礼を申し上げるものである。

調査に当っては文化庁、県文化課、それに外部にあっては市議会、文化財関係者各位の激励があったことも忘れられない。

また、発掘調査、遺物の実測整理に終始協力いただいた坂本重義、城よう子、田嶋美和子、原久美子の各氏に謝意を表し、深い感慨をこめて序とする。

昭和 57 年 3 月 31 日

山鹿市教育長 弓 掛 正 久

例　　言

1．本書は、山鹿市教育委員会が国庫補助をえて実施した昭和56年度重要遺跡確認調査の報告書である。

2．本調査は、方保田東原遺跡における範囲確認および遺跡密度を目的として実施したものである。

3．調査に際しては、山鹿市教育委員会が主体となり、山鹿市立博物館において実施した。

4．本書の執筆は、1章～4章を中村幸史郎、5章を中村・倉原謙治・坂本重義、6章を倉原・坂本、7章を中村、8章を倉原、9章を中村・倉原・坂本、11章を中村があたり、各分担は文末に銘記した。また、専門調査員の先生方の玉稿を付論として上梓した。

5．本遺跡の遺構・遺物の実測図作成は挿図目次に示すとおりである。また、製図は倉原・坂本があたった。

6．本書に掲載した写真は、遺構・遺物共に中村があたり、また、現像・引伸しも中村が行なった。

7．本書の編集は、原口長之の指導のもとに中村・倉原・坂本があたった。

8．鉄器の保存処理に関しては、熊本県教育庁文化課主幹上野辰男氏の手を煩わせた。

9．表紙タイトルは山鹿市長中原　淳の揮毫である。

本　文　目　次

序

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1
第３節　調査の組織 …… 8

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境 …… 11
第２節　歴史的環境 …… 11

第３章　第Ｉ次調査

遺構と遺物

1　１号住居跡 …… 17
2　２号住居跡 …… 18
3　３号住居跡 …… 20
4　４号住居跡 …… 23
5　５号住居跡 …… 25
6　６号住居跡 …… 25
7　７号住居跡 …… 27
8　８号住居跡 …… 28
9　９号住居跡 …… 31
10　10号住居跡 …… 32
11　11号住居跡 …… 34
12　12号住居跡 …… 36
13　13号住居跡 …… 36
14　14号住居跡 …… 37
15　15号住居跡 …… 37
16　16号住居跡 …… 38
17　17号住居跡 …… 38
18　18号住居跡 …… 40
19　19号住居跡 …… 41
20　20号住居跡 …… 41
21　21号住居跡 …… 43

22　22号住居跡 …… 43
23　23号住居跡 …… 45
24　24号住居跡 …… 47
25　25号住居跡 …… 47
26　溝状遺構 …… 47
27　貯蔵穴 …… 48
28　巴形銅器 …… 48
29　石蓋土壙墓 …… 51
30　遺構に伴なわない遺物 …… 51

第4章　第II次調査

遺構と遺物

1　A－1号住居跡 …… 55
2　A－2号住居跡 …… 58
3　A－3号住居跡 …… 61
4　A－4号住居跡 …… 63
5　B－1号住居跡 …… 66
6　B－2号住居跡 …… 69
7　D－1号住居跡 …… 71
8　D－2号住居跡 …… 71
9　D－3号住居跡 …… 72
10　A－1号木棺墓 …… 73
11　C－1号木棺墓 …… 73
12　C－2号木棺墓 …… 73
13　C－3号木棺墓 …… 74
14　C－4号木棺墓 …… 75
15　C－5号木棺墓 …… 75
16　C－6号木棺墓 …… 75
17　C－7号木棺墓 …… 76
18　D－1号木棺墓 …… 76
19　D－1号石棺墓 …… 76
20　D－2号石棺墓 …… 77
21　B－1号土壙墓 …… 78
22　B－2号土壙墓 …… 78
23　B－3号土壙墓 …… 79
24　B－4号土壙墓 …… 80

25　B－5号土壙墓 …… 80
26　C－1号土壙墓 …… 81
27　D－1号土壙墓 …… 81
28　D地区土器溜め …… 81
29　遺構に伴なわない遺物 …… 86

第5章　第III次調査
調査区の遺構と遺物

1　中央グリッド …… 92
2　北側トレンチ …… 101
3　南側トレンチ …… 105
4　西側トレンチ …… 108
5　資材廃棄用土壙 …… 109
6　溝追跡トレンチ …… 110
7　農協東側トレンチ …… 111
8　I－1トレンチ …… 115
9　I－2トレンチ …… 115
10　I－3トレンチ …… 117
11　II－1トレンチ …… 117
12　III－1トレンチ …… 118
13　III－2トレンチ …… 118
14　東側トレンチ …… 119
15　№1ピット …… 119
16　№2ピット …… 120
17　№2拡張ピット …… 133
18　№3ピット …… 136
19　№4ピット …… 137
20　№5ピット …… 139
21　№6ピット …… 140
22　№7ピット …… 141
23　№8ピット …… 144
24　№9ピット …… 145
25　№10ピット …… 145
26　近江工業内第1トレンチ …… 147
27　近江工業内第2・6トレンチ …… 150
28　近江工業内第4トレンチ …… 153

29　近江工業内第3トレンチ …… 160
30　近江工業内第5トレンチ …… 164

第6章　第Ⅳ次調査
遺構と遺物
1　1号住居跡 …… 174
2　2号住居跡 …… 177
3　3号住居跡 …… 177
4　4号住居跡 …… 180
5　5号住居跡 …… 182
6　6号住居跡 …… 184
7　7号住居跡 …… 185
8　8号住居跡 …… 186
9　遺構に伴なわない遺物 …… 188
10　土器溜め …… 192

第7章　鹿本高校調査 …… 216

第8章　方保田東原遺跡出土の縄文式土器 …… 219

第9章　考察

第1節　方保田東原遺跡出土の土器の編年（案） …… 229
第2節　熊本県下における弥生時代青銅製品出土分布について …… 236
第3節　巴形銅器の用途に関する一考察 …… 240
第4節　ヘラ記号をもった弥生式土器の存在について …… 246
第5節　特殊な遺物 …… 248
第6節　方保田東原遺跡出土の石庖丁について …… 252
第7節　方保田東原遺跡出土の鉄器について …… 258
第8節　方保田東原遺跡における祭祀行為について …… 263

第10章　付　論
第1節　^{14}C年代測定結果報告書 …… 270
第2節　方保田東原遺跡出土木炭について …… 271
第3節　方保田東原遺跡出土石器について …… 275

第11章　結　語
第1節　遺跡の規模 …… 279

第2節　遺跡のもつ意義 …… 281
あとがき …… 283

図　版　目　次

巻頭図版　　方保田東原遺跡出土青銅製品
図　版　1　　上空から見た方保田東原遺跡
第　I　次　調　査
2　1　北より望む方保田東原遺跡
2　第I次調査遺構全景
3　1　2号住居跡
2　3号住居跡
4　1　4号住居跡
2　5号住居跡
5　1　10号住居跡
2　石蓋土壙墓
6　1　巴形銅器出土状況
2　巴形銅器出土地点
7　1　銅鏃出土状況
2　異形土器出土状況
8　1～4号住居跡出土遺物
9　6～8、22号住居跡出土遺物
10　3、9、10号住居跡出土遺物
11　11、12、17、18、23号住居跡出土遺物、鉄器
12　遺構に伴なわない遺物
13　遺構に伴なわない遺物、自然遺物
第　II　次　調　査
14　1　方保田東原遺跡遠景
2　A・B区遺構全景
15　1　A－1号住居跡遺物出土状況
2　A－1号住居跡
16　1　B－1号住居跡
2　B－2号住居跡
17　1　D－1号住居跡
2　D－2号住居跡

図　版　18　1　D－1号石棺
2　D－2号石棺
19　1　C－1号木棺墓
2　C－3号木棺墓
20　1　C－1、2号木棺墓
2　D－1号木棺墓
21　1　B－2号土壙墓
2　B－1～4号土壙墓
22　1　C－1号土壙墓
2　墨書埦出土状況
23　A－1、2号住居跡出土遺物
24　A－2、4号、B－1号住居跡出土遺物
25　B－1、2号、D－1号住居跡出土遺物
26　D－2、3号住居跡、II次調査区内土壙墓出土遺物
27　D地区内東側土器溜め出土遺物
28　D地区内東側土器溜め出土遺物、鉄器　遺構に伴なわない遺物
29　遺構に伴なわない遺物
第　III　次　調　査
30　1　方保田川を挟んで対峙する方保田東原遺跡
2　結団式風景
3　発掘風景
31　1　北側より遺跡を望む。
2　遺跡より馬見塚古墳群を望む。
32　1　中央グリッド全景
2　中央グリッド1号住居跡
33　1　南側トレンチ全景
2　南側トレンチ1号住居跡遺物出土状況
3　南側トレンチ1号住居跡
34　1　西側トレンチ全景
2　西側トレンチ1号住居跡砥石出土状況
3　西側トレンチ1号住居跡
35　1　資材廃棄用土壙内溝東側断面
2　資材廃棄用土壙内溝北側断面
36　1　資材廃棄用土壙内溝検出状況
2　農協東側トレンチ溝出土状況（西側より）
37　農協東側トレンチ溝出土状況

図　版　38　1　Ⅰ－1トレンチ
2　Ⅰ－1トレンチ遺物出土状況
3　Ⅰ－2トレンチ遺物出土状況
39　1　東側トレンチ全景
2　No.1ピット遺物出土状況
3　No.1ピット全景
40　No.2ピット土器溜め全景
41　1　No.2拡張ピット
2　No.3ピット全景
42　1　No.4ピット全景
2　No.5ピット全景
43　1　No.6ピット全景
2　No.7ピット全景
44　近江工業内第1トレンチ溝出土状況
45　1　近江工業内第2トレンチ遺物出土状況
2　近江工業内第2トレンチ遺構状況
46　1　近江工業内第6トレンチ　スプーン出土状況
2　近江工業内第6トレンチ溝発掘状況
47　近江工業内第3トレンチ全景
48　近江工業内第3トレンチ遺物出土状況
49　1　近江工業内第4トレンチ全景
2　近江工業内第4トレンチ遺物出土状況
50　近江工業内第5トレンチ全景
51　1　近江工業内第5トレンチ北側溝底炭化米出土状況
2　近江工業内第5トレンチ上面遺物出土状況
3　近江工業内第5トレンチ北側溝出土状況
52　1　近江工業内第5トレンチ北側溝断面
2　近江工業内第5トレンチ遺物出土状況
53　中央グリッド1号住居跡出土遺物
54　中央グリッド1、4号住居跡出土遺物
55　北側トレンチ黒色ピット内出土遺物
56　北側トレンチ、南側トレンチ出土遺物
57　南側トレンチ住居跡、資材廃棄用土壙溝内、農協東側トレンチ溝内出土遺物
58　農協東側トレンチ、Ⅰ－1、2トレンチ出土遺物
59　No.1ピット、No.2ピット出土遺物

図　版　60　　№2ピット出土遺物
61　　№2ピット出土遺物
62　　№2拡張ピット、№3ピット、№4ピット出土遺物
63　　№5、6、7、9ピット、近江工業内第1、2、6トレンチ出土遺物
64　　近江工業内第4トレンチ出土遺物
65　　近江工業内第3、5トレンチ出土遺物
66　　近江工業内第5トレンチ出土遺物
67　　近江工業内第5トレンチ出土遺物
68　　近江工業内第5トレンチ出土炭化米、土製品、鉄器
第Ⅳ次調査
69　1　第1調査区遺構全景
2　土器溜め全景（↑）印鏡出土地点
70　1　1、2、3号住居跡
2　3号住居跡
71　1　4号住居跡
2　5号住居跡
72　1　6号住居跡
2　土器溜め
73　1　土器溜め断面
2　鏡出土状況
74　　第1調査区遺物出土状況
75　　土器溜め遺物出土状況
76　　鉄器出土状況、鉄器
77　　1、3、7号住居跡出土遺物
78　　4、5、6、8号住居跡出土遺物
79　　遺構に伴なわない遺物、土製品
80　　土器溜め出土遺物（甕）
81　　土器溜め出土遺物（甕）
82　　土器溜め出土遺物（壺）
83　　土器溜め出土遺物（壺）
84　　土器溜め出土遺物
85　　土器溜め出土遺物
86　　土器溜め出土遺物
87　　土器溜め出土遺物（土製品、石器）
88　　鹿本高校調査区出土遺物
89　　縄文式土器

図 版 90　縄文式土器
91　巴形銅器
92　巴形銅器
93　小形仿製内行花文鏡、銅鏃
94　菊池川中流域出土青銅製品
95　ヘラ記号をもった弥生式土器
96　孔穴を有する軽石

挿　図　目　次

第 1 図　周辺遺跡分布図（1／25,000）（中村幸史郎作図）……折込み
第 2 図　方保田東原遺跡周辺の立地と環境（1／10,000）（中村作図）……折込み
第 3 図　方保田東原遺跡地形図（1／2,000）（倉原謙治実測、坂本重義製図）……折込み
第 I 次 調 査
第 4 図　I次、II次調査遺構配置図（中村実測、倉原製図）……折込み
第 5 図　1号住居跡実測図（垣田知治実測、倉原製図）…… 17
第 6 図　1号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 18
第 7 図　1号住居跡出土ミニチュア土器実測図（中村実測、倉原製図）…… 18
第 8 図　2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 19
第 9 図　2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 20
第10図　3号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 21
第11図　3号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 22
第12図　4号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 23
第13図　4号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 23
第14図　4号住居跡出土土製品実測図（中村実測、倉原製図）…… 24
第15図　5号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 24
第16図　5号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 25
第17図　5号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 25
第18図　6号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 26
第19図　6号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 26
第20図　7号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 27
第21図　7号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 28
第22図　7号住居跡出土土製品・鉄器実測図（中村・坂本実測、倉原・坂本製図）…… 28
第23図　8号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 29
第24図　8号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 29

第25図　8号住居跡出土青銅器・鉄器実測図（中村実測、倉原製図）…… 30
第26図　9号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 31
第27図　9号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 31
第28図　10号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 32
第29図　10号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 33
第30図　10号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 34
第31図　10号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 34
第32図　11号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 35
第33図　11号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 35
第34図　11号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 35
第35図　12号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 36
第36図　12号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 36
第37図　13号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 36
第38図　14号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 37
第39図　15号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 37
第40図　15号住居跡出土ミニチュア土器・鉄器実測図（中村・坂本実測、倉原
坂本製図）…… 38
第41図　17号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 39
第42図　17号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 39
第43図　18号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 40
第44図　18号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 41
第45図　18号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 41
第46図　19号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 42
第47図　19号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 42
第48図　19号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 42
第49図　20号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 43
第50図　20号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 43
第51図　22号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 44
第52図　22号住居跡出土土製勾玉実測図（中村実測、倉原製図）…… 44
第53図　22号住居跡出土異形土器実測図（中村実測、倉原製図）…… 44
第54図　23号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 45
第55図　23号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 45
第56図　25号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 46
第57図　溝実測図（中村実測、倉原製図）…… 47
第58図　貯蔵穴実測図（垣田実測、倉原製図）…… 48
第59図　貯蔵穴出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 48

第60図　巴形銅器出土地区実測図（中村実測、倉原製図）…… 49
第61図　巴形銅器実測図（中村実測、倉原製図）…… 50
第62図　巴形銅器周辺出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 50
第63図　石蓋土壙墓実測図（隈昭志実測、倉原製図）…… 51
第64図　遺構に伴なわない遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 52
第65図　遺構に伴なわない遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 53
第66図　遺構に伴なわない鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 53
第67図　遺構に伴なわない鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 53

第 II 次 調 査

第68図　A－1号住居跡実測図（東幸雄実測、倉原製図）…… 56
第69図　A－1号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 56
第70図　A－2号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 57
第71図　A－2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 59
第72図　A－2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 60
第73図　A－2号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 60
第74図　A－3号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 61
第75図　A－3号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 62
第76図　A－4号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 64
第77図　A－4号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 65
第78図　A－4号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 65
第79図　A－4号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、坂本製図）…… 65
第80図　B－1号住居跡実測図（大森勲実測、坂本製図）…… 66
第81図　B－1号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 67
第82図　B－1号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 68
第83図　B－2号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 69
第84図　B－2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 70
第85図　B－2号住居跡出土鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 70
第86図　D－1、2号住居跡実測図（東実測、倉原製図）……折込み
第87図　D－1、2号住居跡出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 71
第88図　D－3号住居跡実測図（中村実測、倉原製図）…… 72
第89図　D－3号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 73
第90図　C－1号木棺墓実測図（東実測、坂本製図）…… 74
第91図　C－2号木棺墓実測図（東・大森実測、倉原製図）…… 74
第92図　C－3号木棺墓実測図（東実測、坂本製図）…… 75
第93図　C－4号木棺墓実測図（東実測、坂本製図）…… 75
第94図　C－5号木棺墓実測図（東実測、坂本製図）…… 76

第95図　C－7号木棺墓実測図（東実測、坂本製図）…… 76
第96図　D－1号木棺墓実測図（中村実測、坂本製図）…… 77
第97図　D－1号石棺墓実測図（中村実測、倉原製図）…… 77
第98図　D－2号石棺墓実測図（東実測、坂本製図）…… 77
第99図　B－1号土壙墓実測図（中村・東・大森実測、坂本製図）…… 78
第100図　B－2～5号土壙墓実測図（中村実測、坂本製図）…… 78
第101図　B－3、4号土壙墓出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 79
第102図　B－4号土壙墓出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 80
第103図　C－1号土壙墓実測図（東・大森実測、倉原製図）…… 81
第104図　C－1号土壙墓出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 81
第105図　D地区東、西土器溜め実測図（中村実測、倉原製図）…… 82
第106図　D地区東側土器溜め出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 83
第107図　D地区西側土器溜め出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 85
第108図　遺構に伴なわない遺物実測図（A地区）（中村実測、倉原製図）…… 87
第109図　遺構に伴なわない遺物実測図（A地区）（中村実測、倉原・坂本製図）…… 87
第110図　遺構に伴なわない遺物実測図（C地区）（中村実測、倉原製図）…… 88
第111図　遺構に伴なわない遺物実測図（C地区）（中村実測、倉原製図）…… 88
第112図　遺構に伴なわない遺物実測図（D地区）（中村実測、倉原製図）…… 89
第113図　遺構に伴なわない遺物実測図（D地区）（中村実測、坂本製図）…… 89
第114図　墨書土器、共伴土器実測図（中村実測、倉原製図）…… 90
第115図　遺構に伴なわない鉄器実測図（坂本実測、製図）…… 90

第 Ⅲ 次 調 査

第116図　Ⅲ、Ⅳ次調査トレンチ配置図（中村実測、倉原製図）……折込み
第117図　Ⅲ次調査、遺跡北端部トレンチ配置図（中村実測、倉原製図）……折込み
第118図　Ⅲ次調査、近江工業内トレンチ配置図（中村実測、坂本製図）…… 91
第119図　中央グリッド遺構配置図（中村・倉原実測、倉原製図）…… 93
第120図　中央グリッド1号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 94
第121図　中央グリッド1号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 95
第122図　中央グリッド1号住居跡出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 96
第123図　中央グリッド1、2号住居跡出土遺物実測図（中村・倉原実測、
倉原・坂本製図）…… 98
第124図　遺構に伴なわない遺物実測図（倉原実測、製図）…… 100
第125図　中央グリッド内出土手捏土器、鉄器実測図（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）…… 100
第126図　北側トレンチ実測図（中村実測、坂本製図）……折込み
第127図　北側トレンチ黒色ピット内出土遺物実測図（中村・倉原実測、坂本製図）…… 103
第128図　北側トレンチ出土遺物実測図（倉原実測、坂本製図）…… 104

第129図　北側トレンチ出土手捏土器実測図（中村・倉原実測、坂本製図）…… 104
第130図　南側トレンチ実測図（中村実測、坂本製図）……折込み
第131図　南側トレンチ１号住居跡出土遺物実測図（倉原実測、製図）…… 105
第132図　南側トレンチ出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 106
第133図　南側トレンチ出土遺物実測図（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）…… 107
第134図　南側トレンチ出土土錘実測図（中村実測、坂本製図）…… 108
第135図　西側トレンチ実測図（中村実測、坂本製図）……折込み
第136図　西側トレンチ住居跡出土遺物実測図（中村・倉原実測、坂本製図）…… 109
第137図　西側トレンチ出土遺物実測図（中村・倉原実測、坂本製図）…… 109
第138図　資材廃棄用土壙内溝出土遺物実測図（倉原実測、製図）…… 110
第139図　資材廃棄用土壙内溝実測図（桑原憲彰実測、坂本製図）……折込み
第140図　溝追跡トレンチ出土遺物実測図（倉原実測、製図）…… 111
第141図　農協東側トレンチ実測図（倉原実測、坂本製図）…… 111
第142図　農協東側トレンチ出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 112
第143図　農協東側トレンチ出土土器実測図（中村実測、坂本製図）…… 113
第144図　Ⅰ－１トレンチ実測図（倉原・城よう子実測、倉原製図）…… 114
第145図　Ⅰ－２トレンチ実測図（中村実測、坂本製図）…… 115
第146図　Ⅲ－１トレンチ実測図（樋口純子・城実測、坂本製図）…… 116
第147図　Ⅲ－２トレンチ実測図（樋口・城実測、倉原製図）…… 116
第148図　Ⅰ－１・２、Ⅲ－２トレンチ出土遺物実測図（中村・倉原実測、倉原製図）…… 117
第149図　東側トレンチ実測図（中村実測、坂本製図）…… 118
第150図　№１ピット実測図（山城敏昭実測、坂本製図）…… 119
第151図　№１ピット出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 120
第152図　№２ピット、№２拡張ピット実測図（中村・樋口実測、倉原製図）…… 121
第153図　№２ピット出土遺物実測図（甕）（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 122
第154図　№２ピット出土遺物実測図（甕）（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 124
第155図　№２ピット出土遺物実測図（甕）（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）…… 126
第156図　№２ピット出土遺物実測図（壺）（倉原実測、製図）…… 128
第157図　№２ピット出土遺物実測図（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）…… 130
第158図　№２ピット出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 132
第159図　№２ピット出土遺物実測図（倉原実測、坂本製図）…… 133
第160図　№２ピット、№２拡張ピット出土遺物実測図（倉原実測、坂本製図）…… 133
第161図　№２拡張ピット出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 134
第162図　№３ピット実測図（鹿本高校考古学部員実測、坂本製図）…… 136
第163図　№３ピット出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 137
第164図　№３ピット出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 137

第165図　No.4 ピット実測図（中村実測、倉原製図）…… 138
第166図　No.4 ピット出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 139
第167図　No.4 ピット出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 139
第168図　No.5 ピット実測図（中村実測、坂本製図）…… 140
第169図　No.5 ピット出土遺物実測図（倉原実測、坂本製図）…… 140
第170図　No.6 ピット実測図（中村実測、坂本製図）…… 141
第171図　No.6 ピット出土遺物実測図（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）…… 141
第172図　No.7 ピット実測図（中村実測、倉原製図）…… 142
第173図　No.7 ピット出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 143
第174図　No.7 ピット出土土製品実測図（倉原実測、坂本製図）…… 144
第175図　No.8 ピット出土遺物実測図（倉原実測、坂本製図）…… 144
第176図　No.8 ピット出土土錘実測図（倉原実測、坂本製図）…… 144
第177図　No.9 ピット出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 145
第178図　No.9 ピット出土土製品実測図（倉原実測、坂本製図）…… 145
第179図　No.10ピット出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 146
第180図　近江工業内遺構配置図（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）……折込み
第181図　近江工業内第1トレンチ実測図（中村実測、倉原製図）……折込み
第182図　近江工業内第1トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 148
第183図　近江工業内第1トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 150
第184図　近江工業内第1トレンチ出土石鏃実測図（中村実測、坂本製図）…… 150
第185図　近江工業内第2、6トレンチ実測図（中村実測、倉原製図）……折込み
第186図　近江工業内第2トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 151
第187図　近江工業内第2トレンチ出土手捏土器実測図（中村実測、坂本製図）…… 152
第188図　近江工業内第6トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 152
第189図　近江工業内第6トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 153
第190図　近江工業内第4トレンチ実測図（大森実測、倉原製図）…… 154
第191図　近江工業内第4トレンチ出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 155
第192図　近江工業内第4トレンチ出土遺物実測図（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）…… 157
第193図　近江工業内第4トレンチ2号溝底出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 158
第194図　近江工業内第4トレンチ出土手捏土器実測図（中村実測、倉原製図）…… 159
第195図　近江工業内第3トレンチ実測図（倉原実測、坂本製図）…… 161
第196図　近江工業内第3トレンチ出土遺物実測図（中村・倉原実測、坂本製図）…… 162
第197図　近江工業内第3トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 163
第198図　近江工業内第3トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 164
第199図　近江工業内第5トレンチ実測図（中村・倉原・大森実測、坂本製図）……折込み
第200図　近江工業内第5トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 166

第201図　近江工業内第5トレンチ出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 168
第202図　近江工業内第5トレンチ出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 169
第203図　近江工業内第5トレンチ出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 170
第204図　近江工業内第5トレンチ出土遺物実測図（中村実測、倉原製図）…… 170
第205図　近江工業内第5トレンチ出土遺物実測図（中村実測、倉原・坂本製図）…… 171
第206図　近江工業内第5トレンチ出土鉄器実測図（中村実測、坂本製図）…… 171

第 Ⅳ 次 調 査

第207図　Ⅳ次調査区遺構配置図（中村実測、坂本製図）…… 173
第208図　第1調査区南側壁面土層図（最上敏実測、坂本製図）…… 174
第209図　1号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 175
第210図　1号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、倉原製図）…… 175
第211図　1号住居跡出土遺物実測図（倉原・坂本実測、坂本製図）…… 176
第212図　2号住居跡実測図（最上実測、坂本製図）…… 176
第213図　2号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、倉原・坂本製図）…… 177
第214図　3号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 178
第215図　3号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）…… 178
第216図　3号住居跡出土遺物実測図（倉原・坂本実測、坂本製図）…… 179
第217図　3号住居跡出土遺物実測図（倉原・坂本実測、製図）…… 180
第218図　4号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）…… 180
第219図　4号住居跡実測図（山城実測、坂本製図）…… 181
第220図　4号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）…… 182
第221図　5号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 183
第222図　5号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、製図）…… 183
第223図　6号住居跡実測図（山城実測、坂本製図）…… 184
第224図　6号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、倉原・坂本製図）…… 185
第225図　7号住居跡実測図（山城実測、坂本製図）…… 185
第226図　7号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、倉原製図）…… 186
第227図　7号住居跡出土遺物実測図（坂本実測、倉原製図）…… 186
第228図　8号住居跡実測図（中村実測、坂本製図）…… 187
第229図　8号住居跡出土遺物実測図（倉原・坂本実測、坂本製図）…… 187
第230図　8号住居跡出土鉄鏃実測図（坂本実測、製図）…… 187
第231図　遺構に伴なわない遺物実測図（倉原・坂本実測、製図）…… 189
第232図　遺構に伴なわない遺物実測図（坂本実測、製図）…… 190
第233図　遺構に伴なわない遺物実測図（倉原・坂本実測、坂本製図）…… 191
第234図　土器溜め実測図（倉原・山城・最上実測、倉原製図）……折込み
第235図　小形仿製内行花文鏡実測図（倉原実測、製図）…… 193

第236図　土器溜め出土遺物実測図（甕）（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 194
第237図　土器溜め出土遺物実測図（甕）（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 196
第238図　土器溜め出土遺物実測図（甕・壺）（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 198
第239図　土器溜め出土遺物実測図（壺）（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 200
第240図　土器溜め出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 202
第241図　土器溜め出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 204
第242図　土器溜め出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 206
第243図　土器溜め出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 208
第244図　桜町東原出土把手実測図（倉原実測、製図）…… 210
第245図　土器溜め出土遺物実測図（脚）（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 211
第246図　土器溜め出土遺物実測図（倉原実測、倉原・坂本製図）…… 212
第247図　土器溜め出土遺物実測図（倉原・坂本実測、製図）…… 213
第248図　土器溜め出土石器実測図（中村・倉原実測、倉原・坂本製図）…… 214

鹿本高校調査

第249図　鹿本高校調査区域内出土遺物実測図（中村実測、坂本製図）…… 216
第250図　鹿本高校調査区域内出土石器実測図（中村実測、坂本製図）…… 217
第251図　鹿本高校調査区域内出土ガラス小玉実測図（倉原実測、製図）…… 218

遺跡出土の縄文土器

第252図　縄文土器実測図（中村実測、坂本製図）…… 220
第253図　縄文土器実測図（中村実測、坂本製図）…… 222
第254図　縄文土器実測図（中村実測、坂本製図）…… 224
第255図　縄文土器実測図（中村実測、坂本製図）…… 225

考　　察

第256図　熊本県下弥生時代青銅器出土遺跡分布図（中村作図）…… 237
第257図　菊池郡内出土青銅器拓本（坂本経堯・中村作製）…… 238
第258図　佐保遺跡出土巴形銅器実測図（永溜久恵『九州考古学』32より）…… 240
第259図　森弘遺跡・西山遺跡出土巴形銅器実測図（杉原荘介『日本青銅器の研究』より）…… 242
第260図　ヘラ記号をもった弥生式土器実測図（中村実測、坂本製図）…… 247
第261図　黄海道黒橋面出土笠形金具・№2ピット出土笠形土製品実測図（『朝鮮考古資料集成』17より、中村実測、坂本製図）…… 248
第262図　石庖丁未製品実測図 …… 253
第263図　板状、棒状、不定形、三角形の鉄製品 …… 260
第264図　方保田東原遺跡出土祭祀遺物出土分布図 …… 264
第265図　方保田地区における古墳群 …… 283
第266図　馬見塚古墳群 …… 283

第267図　昭和30年調査石棺実測図 …… 284

表　目　次

表　1　周辺遺跡一覧表 …… 13
表　2　方保田東原遺跡出土縄文土器一覧 …… 226
表　3　方保田東原遺跡遺構重複関係一覧 …… 229
表　4　方保田東原遺跡遺構編年表 …… 230
表　5　熊本県下青銅製品出土一覧 ……折込み
表　6　巴形銅器出土地名表 …… 244
表　7　方保田東原遺跡出土石器一覧 …… 254
表　8　方保田東原遺跡出土祭祀遺物一覧 …… 266
表　9　方保田東原遺跡出土石器石材一覧 …… 275
表　10　各石器に用いられた材質（岩石） …… 276
表　11　方保田東原遺跡調査年次別遺構一覧 …… 280
表　12　方保田東原遺跡および周辺遺跡の存続期間 …… 281

付　図　目　次

付図　1　方保田東原遺跡遺構配置図
付図　2　方保田東原遺跡出土土器編年表（案）

第1章　調査の経過

第1節　調査に至る経過

最近、山鹿市においても、宅地造成が盛んに行われるようになった。特に、ここ十数年にわたっては、個人による建設や、不動産業者による開発が多く、年間300件を越える申請がなされている。

このような中で、文化財密集地とも言える山鹿市では、文化財保護行政と開発行政との話し合いは、ようやく同じテーブルで話し合えるところまで来たと言えよう。

昭和53年4月山鹿市立博物館のオープンに際し、文化財保護行政は博物館で取り扱うこととなり、博物館活動と並行して行なっている。そのため開発申請に対するチェック体制が十分に行われないまま、工事が着工されているのが現状である。

方保田東原遺跡も、昭和47年までは畑地として利用されていたが、昭和48年遺跡のほぼ中心と考えられた約15,000㎡が、工場用敷地として造成され、二期にわたる工場建設が実施された。この頃から、遺跡周辺の宅地化が進み、虫喰い状態となりつつあった。

そして、昭和55年、工場経営不振に伴ない敷地の一部売却が行われ、市内の不動産業者の手に渡ったのである。不動産業者からは、分譲住宅地として販売する計画をたて、市都市計画課への申請が出されていた。市教委はこの時点で、初めて計画を知ったのである。遺跡の重要性を考慮して、市都市計画課、県鹿本土木事務所と協議を重ね、ついに、熊本県教育委員会文化課の指導のもとに国庫補助事業として、今回の遺跡の範囲確認調査を行なうこととなったのである。

調査は、山鹿市教育委員会が主体となって、市立博物館がその実務に当り、昭和56年4月から6月までと、昭和57年1月から3月までの二次にわたって実施した。調査にあたっては、文化庁、県文化課をはじめ、相互建設株式会社の多大なる協力を賜わった。記して、感謝の意を表わしたい。

第2節　調査の経過

方保田東原遺跡に関しての調査は、これまでに数度にわたって行なわれている。特に、工場建設に伴う調査では、中九州で初めての出土となった巴形銅器と銅鏃を出土しており、さらに、今回の調査では小形仿製鏡も出土し、遺跡の重要性を証明したともいえるものであった。そのため、これまで調査された経過および成果を、今回の報告の中に含め、方保田東原遺跡の全容を明らかにしたいと考えるものである。

1　遺跡の発見[註1]（昭和30年）

方保田東原遺跡の存在は、昭和30年12月原口長之氏（当時山鹿高校教諭）の調査によって初めて明らかにされた。この調査は、民家建築の際、多量の土器が出たという通報で、山鹿高校考古学部の手によって実施された。その結果、弥生時代後期の竪穴式住居跡１軒と箱式石棺１基が検出された。また、出土した遺物の量には目を見張るものがあった。

２　予備調査[註2]（昭和47年）

遺跡の在る方保田地区は、民家と畑地が主で、昭和40年頃までは、あまり状況の変化は見られなかった。

しかし、その後、全国各地では列島改造論と高度成長のあおりを食って、大規模な遺跡の破壊が行なわれていった。そのような状況の中で、山鹿市にも圃場整備事業や企業誘致による工場建設等の遺跡破壊の波が押し寄せ、ついには、方保田東原遺跡にも破壊の魔の手が伸びてくることとなった。

山鹿市は、地域振興の一環として、山鹿市農協を窓口に、大阪府堺市の山合工業株式会社（工場完成後、山鹿工業株式会社となる）を誘致し、進出させることとなっていた。そのため工場用地として、遺跡の中心部に約15,000㎡の広さで造成整地されたのが昭和47年11月のことであった。その際、付近をパトロールしていた山鹿文化財を守る会によって、石棺１基と多量の土器が散在していることを確認したのである。

なお、市教委では、この時初めて、遺跡が工場用地となる事を知ったのであった。早速、市商工課、農協との折衝に当り、石棺の調査を申し入れた。この時までは、行政内での事前協議は全く無いという状況であったが、これを機会に開発行政の文化財に対する認識が芽生え始めたのは一つの成果であった。

協議の結果、調査は上妻信寛氏（鹿本高校教諭）の指導のもとに鹿本高校考古学部と山鹿文化財を守る会の協力を得て実施する。期間は、冬休みを利用し、昭和47年12月26日から、翌年１月10日までとした。正月返上で調査した結果、箱式石棺１基と隅丸方形の竪穴式住居跡１軒を検出し、他にも遺構が存在することを確認できた。

３　第Ⅰ次調査（昭和48年）

市教委は、先の調査の成果に鑑み、再度、学術調査の必要性を企業に対し訴えた。県文化課の強力な指導もあって、企業側が調査費15万円を支出するということで合意に達した。ただし、調査区域は、工場建設予定地内(1,080㎡）に限り精査することとなった。調査は、山鹿市教育委員会が行なう事となり、中村がその任に当った。県文化課からも、多大なる応援を受け、昭和48年２月９日から、３月22日まで実施した。期間中、調査費はむろん、たちまち底をつき、幸平和氏（山鹿市文化財保護委員）の助言で、市長（古閑一夫氏）から、調査費を捻出していただいたことは、身に余る喜びであった。また、調査終了後の埋め戻しに際しては、別途、市で予算化し、工場建設に耐え得る状況にしたのも忘れてはならない。発掘調査は、予想以上の成果を得ることができ、竪穴住

居跡25軒、石蓋土壙墓1基が検出された。何といっても、中九州初の出土である巴形銅器[註3]と銅鏃の出土は、各方面から注目を浴び、方保田東原遺跡の重要性を確たるものにしたと言える。この他にも、多くの土器、石器、鉄器も出土し、相変らず遺物の多い遺跡であることを再確認させられた。

第Ⅰ次調査日誌（昭和48年）

2月9日(金)　鹿本商工高校卒業予定者7名と発掘調査を開始する。調査は、工場建設予定部分45m×24mの範囲で行なうことになった。表土は、すでにブルドーザーによって除去していたため遺構検出に努めた。トレンチ西側より巴形銅器を検出するに至った。大至急で県文化課に連絡をとる。

2月10日(土)　トレンチ内で、遺構検出作業を行ない、住居跡が確認される。
鹿本高校・鹿本商工高校より40名の応援が来る。

2月11日(日)　石蓋土壙墓1基を検出、実測を行なう。県文化課より、限参事の指導を受ける。

2月12～16日　遺構検出作業を行ない、住居跡の発掘を進める。

2月18日(日)　昨夜の雨で、多少現場の状況が悪かった。トレンチ東側で、住居跡が出ている。

2月22日(木)　現場で、工場建設業者と基礎工事の許可について、いがみ合う。
結果、外側の基礎については許可をし、中については発掘終了まで、手を出さないこととなる。

2月24日(土)　九州歴史資料館々長、鏡山猛先生の視察を受ける。

2月25日(日)　8号住居跡より、銅鏃1点が出土する。

3月5日(月)　今日から県文化課の応援で、調査員に江本直氏と安達武敏氏を迎える。さらに、地元作業員と城南町塚原より作業員を加えて調査を実施することとなった。特に、城南町の5名は、塚原古墳群発掘作業員で力強い応援である。

3月6日(火)　本日午前中で、全面の清掃を終了、その時点で10軒の住居跡が確認できた。さらに、3軒が見られ、掘り下げる。床は、今までと同じで堅いが、壁は非常に見分けにくい。

3月8日(木)　13・14・15号住居跡は不整形で、重複しているため外形線の確認が困難である。

3月9～17日　発掘はこの間で終了し、今後は実測を主体として行なう。

3月22日(木)　日曜返上の調査も22日で終る。内外からの圧力の強かった調査も、ようやく終わりを迎えることができた。

4　第Ⅱ次調査（昭和49年）

工場が完成し、経営も軌道に乗り始めた昭和49年には、工場増築の話が持ち上った。工場側の話では、現在の工場の東側に増築するという計画である。先の調査の経験から、工場側より積極的に相談に出向かれ、市教委としても県文化課まで同伴して話し合いを進めた。

今回の調査経費は、原因者負担で行ない、調査については山鹿市教育委員会が、県文化課の指導を得て実施することとなった。

調査区域は、工場東側に接する528㎡（22m×24m）を対象とし、期間は、昭和49年5月20日から7月15日まで実施した。

調査の結果、竪穴住居跡10軒、石棺2基、木棺墓9基、土壙墓6基を検出した。特に、竪穴住居2軒の中から、鉄器および鉄片が多量に出土したことは注目された。

第II次調査日誌（昭和49年）

5月13日(月)　結団式。山鹿工業株式会社関係者、山鹿市文化財保護委員会、山鹿文化財を守る会、山鹿市教育委員会で実施、作業は5月20日からとし、トレンチは10m×11.5m 4ヶ所を設定し、A～D区とする。

5月20日(月)　本日より発掘開始、工場建設の際、道路として利用されていたため、非常に堅く作業に困難をきわめる。

5月23日(木)　本日でC地区を、－50cmの深さまで掘り下げる。この地区は堆積土が移動して、層位も明確でなく、出土する土器片も小く、磨滅を受けている。堆積土の中ににプラスチックも含まれていることから考えると、現在発掘している層位は工場建設の際、造成を行なったので、（昭47年11月）その時、堆積したものと判断された。

5月25日(土)　C地区の地山レベルは、北に高く、南に低くなっている。－60cmのレベルで、北側では、地山層が見えるのに反し、南側では、まだ、攪乱層が見られる。
なお、CおよびD地区は、作業員の話によれば、壁土として採土しており、地下げが行なわれたとの事で、遺構の検出に多くの期待はできそうにない。
山鹿文化財を守る会の応援あり。

5月27日(月)　本日からD地区の表土剝ぎを行なう。C地区では、遺構検出を行なったが、焼土、その他住居跡の存在を証明する資料は何ら見られず、落ち込みが見られても住居跡とは判断できないものである。鹿本農業高校郷土研究クラブ見学。

5月29日(水)　C地区では、遺構検出を行なった。焼土が昨日に続き1ヶ所見られたが、現在の段階では、住居跡とどのような位置的関係にあるかは明確でない。
なお、C地区東側のほぼ中央に土壙墓が1基検出された。

6月1日(土)　午前中、C地区遺構検出を行ない、午後からは、鹿本高校、鹿本商工高校の考古学部員（87名）の応援で、D地区の清掃を行なえども、人間が多過ぎて仕事にならず、ついにA・B地区の表土剝ぎ作業を開始する。

6月2日(日)　A・B地区表土剝ぎ、D地区遺構検出、C地区実測を行なう。
今日も、高校生（69名）及び、山鹿文化財を守る会の応援を得て発掘を行なう。

6月4日(火)　C地区において、木棺墓を新たに検出する。D地区では、住居跡と土壙墓が確認される。

6月6日(木)　D地区南側、住居跡の検出を行なう。住居跡内より石棺が検出された。

6月7日(金)　D地区内より、墨書埦出土する。A、B地区遺構検出作業を行なう。

6月10日(月)　A地区では、今のところ遺物の出土が少ない。昨年度の調査から考えて、A・B地区

は、住居と墓地の関連性を解明する上において重要な地点である。

6月13日(木)　A地区は、C地区より地山レベルがいくぶん低い位置にあるようだ。

6月16日(日)　A地区では、住居跡を検出する。B地区でも住居跡の存在が見られる。

7月1日(月)　今日で、ほぼ遺構検出作業は終了したといえよう。今月は実測を行ない、不十分な点を補充して行く予定だ。

7月2日(火)　夜7時半から9時半まで地元公民館で発掘調査説明会を実施した。

7月3～15日　実測、測量を実施。15日をもって終了。器材撤収を行なう。

5　鹿本高校調査[註4]（昭和55年）

昭和50年代に入ると、塚の本遺跡周辺に民家が建ち始め、方保田東原遺跡の周辺もチラホラと、民家建築の話がされるようになった。

昭和55年夏には、工場敷地北側の一段下りの畑地が宅地化されることとなった。この場合は、地権者からの事前打合せもあって、鹿本高校考古学部で調査することになった。調査は、上妻信寛氏の指導で、昭和55年10月から11月までの土・日曜を利用し、L字形にトレンチを入れた。

その結果、竪穴住居跡の一部を確認する事ができた。遺物としてはガラス製小玉1点と、銅鏃1点の出土を見た。銅鏃は、巴形銅器の出土地点から、わずか北へ80mの地点であった。

6　第Ⅲ次調査（昭和56年）

遺跡の中心部を占める山鹿工業株式会社は、構造不況のあおりで工場経営に暗いかげりが見られるようになり、不況対策として工場敷地の一部売却を行なったのである。この時、約10,000㎡が市内不動産業者の手に渡り、分譲住宅地とする計画であった。市教委は開発許可申請書が提出されていた昭和55年5月に初めて情報を入手したのである。市教委、および山鹿市立博物館では、過去の調査の成果を考慮し、遺跡調査の必要性を開発業者、および市都市計画課、県鹿本土木事務所に訴えた。再三にわたる協議を重ね、県文化課の指導もあって、昭和56年度国庫補助事業として重要遺跡確認調査を実施することとなった。

調査は、遺跡の範囲を確認することを目的としたため、遺構の存在を確認するのみで、掘り下げは、基本的には行なわないこととした。

発掘は、山鹿市立博物館が、鹿本高校、菊池高校、鹿本商工高校の各考古学部の協力を得て、春休み期間中に開始した。

調査の主旨に従い、広範囲にわたりトレンチ、ピットを入れて遺構の検出に努めた。その結果、住居跡33軒、溝状遺構5本、土器溜め等の遺構が確認された。

第Ⅲ次調査日誌（昭和56年）

3月26日(木)　結団式。山鹿市教育委員会、山鹿市文化財保護委員会、区長、鹿本高校、菊池高校、

鹿本商工高校、山鹿中学校各考古学部で実施する。
調査は春休みを利用し、クラブ活動の一環として実施した。
宅地造成予定地東端に２ｍ×２ｍのピット７個を設定し、遺構の検出を行なう。

3月27日(金)　今日は、８個目のピットを設定した。№１ピットから、弥生終末期の遺物が出土し、№３ピットから高坏２個出土する。

4月１日(水)　工場北側に中央グリッドとして10m×12mを設定し、表土をブルで剝ぐ。
№２ピットで土器溜めが検出される。

4月２日(木)　南側トレンチ、北側トレンチ、西側トレンチを掘り始める。

4月６日(月)　相互建設が資材廃棄用に６ｍ×３ｍの広さで、深さ 3.5mの穴を工場の東側に機械で掘り下げていた。壁面に溝状遺構を確認することができた。方保田東原遺跡では、未だ溝が検出されておらず、貴重な発見となった。

4月７日(火)　溝状遺構実測を行なう。その結果、溝内土層中に焼土が見られ、住居跡の存在をうかがわせた。

4月８日(水)　今日で、高校生の調査は終了する。今後は、作業員を手配して行なうこととなる。

4月17日(金)　本日から作業員を入れて調査を実施する。人集めに関しては、山下洋子氏の御尽力で行なうことができた。
作業は、北側トレンチ、西側トレンチの遺構検出を行なう。北側トレンチでは落ち込み内より石庖丁が、西側トレンチから砥石がそれぞれ出土した。

4月21日(火)　中央グリッドと北側トレンチで、住居跡を確認することができた。
山鹿市文化財保護委員会と、山鹿市立博物館協議会との合同遺跡見学会。

4月23日(木)　南側トレンチ西端で住居跡を検出、南へ約３ｍ拡張して掘り下げた。

4月24日(金)　№２ピット清掃。礫と土器がびっしりと出土、器台が多く見られる。

5月１日(金)　№２ピット南側に№２拡張ピットとして掘り下げ、土器溜めの全景を出す。
№７ピットで住居跡を検出する。

5月４日(月)　平板測量および実測開始

5月12日(火)　今日から、台地北側斜面の調査にかかる。Ｉ－１トレンチとする。

5月14日(木)　Ｉ－１トレンチの西側にＩ－２トレンチを設定し、掘り始める。この段で台地北端部が確認できた。

5月15日(金)　Ｉ－２トレンチで確認された地山層の北側斜面から土器が出土した。地山が下るにもかかわらずその中位に残されており、当時の地形を知る上で重要なものである。
Ｉ－１、２トレンチの西側に、Ｉ－３トレンチとして西に延びる傾斜ラインを追跡し始めた。中央グリッドをブルドーザーで埋め戻す。

5月19日(火)　Ｉ－３トレンチでは、現地形と平行する形で地山が傾斜する様子が判明した。遺物の出土は少ないが、出土した土器は細片が多い。

5月20日(水)　Ｉ－１・２・３トレンチの下段畑地にトレンチを入れる。
II－１トレンチと、III－１・２トレンチとする。ＲＫＫ－ＴＶより取材。

5月21日(木)　地山層の傾斜については、現況と基本的に似ていることが判明した。さらに、遺構はⅠ－1・2・3トレンチの段まで確認された。ＴＫＵ－ＴＶより取材。

5月23日(土)　№1～№7ピットの埋め戻し作業。

5月26日(火)　本日より、地形測量開始。

5月29日(木)　本日より、近江工業内へ移りトレンチを入れる。県文化課隈係長より指導を受ける。また明治大学教授杉原荘介氏、巴形銅器と遺跡の視察に来られた。

6月3日(水)　近江工業内第1トレンチでＶ字溝が確認される。県文化課より岩崎課長、隈係長視察。

6月5日(金)　近江工業内第1トレンチの西側へ第2トレンチを設定。Ｖ字溝の追跡を始める。

6月8日(月)　遺跡西端を調査するため山鹿市農協大道支所東隣りの畑にトレンチを入れる。

6月10日(水)　農協東側トレンチにおいて、溝状遺構が存在し、東西に延びることを確認した。

6月11日(木)　本日で発掘作業は終了し、今日から実測のみを行なう。

6月12～24日　実測を行ない、不明確な点の補充を行なった。24日で一応終了したが、大道小学校改築に伴なって、大道小学校校庭遺跡の発掘調査を7月から開始するため、器材等の移動を行なった。

7月8日(水)　文化庁と県文化課より現場視察。

7　第Ⅳ次調査（昭和57年）

市教委と県文化課は、方保田東原遺跡の保存に関して、国指定史跡として保存するという方向でⅢ次調査を実施してきた。県文化課の計らいにより文化庁からの視察を受けることとなり、現地での検討会が行なわれた。その結果、国指定史跡としての価値判断の材料として関係資料を作成し提出することとなり、その後国指定史跡になり得るか否かの連絡をするとの結論に達した。

市教委は早速、書類を作成し文化庁あてに提出した。その結果、文化庁からは再度調査を実施し、遺跡の密度について調査をして欲しいとの連絡で、新たに、国庫補助を得て第Ⅳ次調査を昭和57年1月19日から3月14日まで実施した。調査は、山鹿市立博物館が行ない、竪穴住居跡9軒、7ｍ×5ｍの広がりをもつ土器溜めが検出された。さらに、土器溜め東端からは、小形仿製内行花文鏡1点が出土した。

第Ⅳ次調査日誌（昭和57年）

1月19日(火)　結団式。午前中器材搬入を行ない、県文化課、市文化財保護委員、市教育委員会の出席のもと、午後結団式を挙行する。
調査区域は、次回開発予定区域内に、10m×10mの調査区域を設定。

1月20～23日　表土剝ぎを行ない、地表下30cmまでを清掃する。

1月25日(月)　土製勾玉出土。

1月27日(水)　調査区域内で土器の密集が見られる東北隅と、鉄製鋤先の出土した西南隅の拡張を行なう。

1月28日～2月9日　土器溜め部分の拡張および、土器露出作業。
2月10日(水)　調査区域内の住居跡を追跡、4軒分を確認する。
2月13日(土)　午後は博物館友の会主催の遺跡見学会を行ない、約30名が参加する。土器溜めの実測を昨日よりとりかかる。
2月18日(木)　住居跡8軒分を確認する。
2月23日(火)　県文化課限係長の指導を受ける。土器溜め東端確認のため幅1mで拡張する。その中から小形仿製内行花文鏡が出土する。
2月27日(土)　住居跡の実測を進める。
3月3日(水)　土器溜めの実測、本日で終了。遺物のとり上げは1m四方の区域に分けて行なう。
3月6日(土)　住居跡の実測が終り、遺物をとり上げる。
3月14日(日)　今日まで、土器溜め内の遺物をとり上げ、調査は終了した。

第3節　調査の組織

1　第Ⅰ次調査の組織

調査主体　山鹿市教育委員会
総　　括　弓掛　正久（山鹿市教育長）
調査事務　森川　恒臣（教育次長、社会教育課長）
〃　古閑　保男（社会教育係長）
調査指導　田辺　哲夫（熊本県教育庁文化課長）
〃　限　昭志（〃　文化課参事）
調 査 員　中村幸史郎（山鹿市教育委員会嘱託）
〃　安達　武敏（熊本県教育庁文化課調査員）
〃　江本　直（〃　）
作 業 員　野中公四郎、野中帝二、垣田知治、中村尚大、宮本好郎、新原章、安武民憲、牧野幸雄、松田泰宏、森晃生、高田早苗、金子公子、田畑みさ子、原口まさえ、米村とめ子、堀川ハツエ、田中秋子、前田キミエ、武知春子、緒方光子、緒方ミキ、竹熊フミ子、吉里静子、迎田、吉井、西国、
地元協力者　山合工業株式会社
調査協力者　緒方勉、上妻信寛、鹿本高校考古学部、鹿本商工高校考古学部、山鹿文化財を守る会

山鹿市教育委員会社会教育課斉藤保行氏には、城南町塚原まで、毎朝夕作業員の送迎をしていただいた、深く感謝致します。

2　第II次調査の組織

調査主体　山鹿工業株式会社
総　　括　山合　亮三（山鹿工業株式会社取締役社長）
調査事務　岡田　良一（山鹿工業株式会社所長）
調査指導　隈　　昭志（熊本県教育庁文化課参事）
調 査 員　中村幸史郎（山鹿市教育委員会社会教育課文化係）
調査補助員　東　　幸雄（熊本商科大学学生）
　　大森　　勲（　　〃　　）
作 業 員　出雲良人、斉藤正義、吉本ヤエ子、前川キミエ、坂本安子、前川トシエ、山下洋子、
　　福永シゲカ、稲土ツユ子、家入カズヨ、吉井啓子、吉川洋子
調査協力者　鹿本高校考古学部、鹿本商工高校考古学部、山鹿文化財を守る会
地元協力者　吉井　壮一（区長）

3　第III次調査の組織

調査主体　山鹿市教育委員会
総　　括　弓掛　正久（山鹿市教育長）
調査団長　原口　長之（山鹿市立博物館館長）
調査指導　隈　　昭志（熊本県教育庁文化課文化財調査係長）
専門調査員　山田　　治（京都産業大学理学部教授）
　　大迫　靖雄（熊本大学教育学部助教授）
　　長谷　義隆（熊本大学理学部助手）
調査事務　蟲木　正斗（山鹿市立博物館副館長）
　　次木万理子（　　〃　　事務吏員）
調査主任　桑原　憲彰（熊本県立菊池高等学校教諭）
調 査 員　中村幸史郎（山鹿市立博物館学芸員）
　　倉原　謙治（　　〃　　）
調査補助員　山城　敏昭（奈良大学文学部学生）
　　最上　　敏（別府大学文学部学生）
作 業 員　原一倫、原田智文、前川誠一、吉里勝正、竹下義徳、竹下正国、本田直純、
　　吉里シズコ、山下洋子、樋口純子、早田宜江、池田一子、高森ミサヲ、城よう子
地元協力者　相互建設株式会社、近江工業株式会社、山鹿市農協大道支所
　　福山功、若杉高明、大道小学校、川辺小学校、木村則親
調査協力者　上妻信寛（県立鹿本高等学校教諭）有働憲次郎、石渕博人（県立鹿本商工高等学校
　　教諭）鹿本高校考古学部、鹿本商工高校考古学部、菊池高校考古学部、山鹿中学校

考古学部、山鹿文化財を守る会

4　第Ⅳ次調査の組織

調査主体　山鹿市教育委員会
総　　括　弓掛　正久（山鹿市教育長）
調査団長　原口　長之（山鹿市立博物館館長）
調査指導　隈　　昭志（熊本県教育庁文化課文化財調査係長）
調査事務　藤木　正斗（山鹿市立博物館副館長）
　　次木万理子（　　〃　　事務吏員）
調 査 員　中村幸史郎（　　〃　　学芸員）
　　倉原　謙治（　　〃　　）
調査補助員　山城　敏昭（奈良大学文学部学生）
　　最上　　敏（別府大学文学部学生）
作 業 員　前川誠一、野田辰起、竹下義徳、吉里勝正、緒方泰男、山下洋子、吉里シズ子、
　　杉本チサト、上妻たつ子、田嶋美和子　原久美子、城よう子
地元協力者　相互建設株式会社　木村則親
調査協力者　鹿本高校考古学部、鹿本商工高校考古学部、山鹿文化財を守る会

調査にあたって、冬季の極寒期という気候条件にもかかわらず、多大の御協力をいただいた地元の方々に厚く感謝するものである。

5　遺物整理の組織

整理担当　中村幸史郎、倉原謙治、坂本重義
整理補助員　中村徹也、田嶋卓浩、緒方ひとみ、田嶋美和子、原久美子、城よう子

（中村幸史郎）

註1　原口長之氏教示
註2　『チブサン』27号　鹿本高校考古学部報
註3　中村幸史郎「熊本県山鹿市方保田東原遺跡出土の巴形銅器」『熊本史学』45号　1975
註4　上妻信寛氏教示

第2章　遺跡の環境

第1節　地理的環境

阿蘇外輪山西麓から西に延びる標高100～200ｍの洪積台地は、有明海を背にそそり立つ金峰山系の山々にぶつかっている。この台地の北側を流れる菊池川は、菊池渓谷に源を発し、有明海に注ぐ全長61.2kmの河川である。この川には、大小65の支流が流れ込み、総延長は326.96kmの長さになり、流域面積は996㎢で、熊本県下でも球磨川水系、緑川水系と並んで最大級のものである。

中流域においては、洪積台地沿いに流れており、また、多くの支流が集中して合流しているため肥沃で広大な沖積平野を形成している。この平野は、東は菊池市から西は山鹿市まで達し、東西15km、南北２～３kmの広がりがある。また、下流域においても河口を中心として広大なデルタ地帯が発達しており、これらは、熊本県下における重要な穀倉地帯となっている。

方保田東原遺跡は、熊本県山鹿市大字方保田字東原に所在する。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡である。ここは、山鹿市街地から東へ約 3.5kmの地点で、菊池川中流域に位置し、広大な沖積平野を南に望む標高35～40ｍの菊池川右岸の河岸段丘上に立地している。この地は南は菊池川の流れ、北はその支流の方保田川の流れによって挟まれ、西に延びる舌状台地を呈して、いる。特に、南側は年々、菊池川によって浸食され断崖を呈しており、西側と北側も急傾斜を呈している。現在、この台地の裾部に数ヶ所の湧水地が点在し、重要な生活用水として利用されている。

さらに、方保田川沿いには湿地が広がり、菊池川沿いにおいても水田が営まれており、当時も水稲耕作が出来る環境であったことは容易に推察することができる。

第2節　歴史的環境

装飾古墳が多く分布する菊池川流域の中で、チブサン古墳や弁慶が穴古墳といった全国を代表する古墳が残されている山鹿市には、旧石器時代から今日に至るまでの、永い歳月にわたって人々が生きてきた。そして、その時々の人達が残した足跡をたどって見ることができる。特に、それらは川に沿って分布しており、川の流れが、時代を生きた人々の生活にどれだけ深く関わっていたかを考えることができよう。川の重要性と、その恵みによって人々が生きてきたし、川の恐ろしさも十分熟知していたものと思われる。

菊池川は、地形的要因から毎年のように氾濫している。そのため人々は、川より一段高い台地に好んで生活を営なんでおり、遺跡もこのような地形の所に多く残されている。菊池川の支流、吉田川と、内田川との間は山鹿市街地から鹿本郡鹿本町に達する台地を形成していて、多くの遺跡が分布している。（第１図参照）

これらの遺跡について歴史的に概観してみることにしよう。



第 1 図 周 辺 遺 跡 分 布 図　　1/25,000

熊本県下においては、ここ数年の間にようやく旧石器時代に関する資料が整理されつつある現状において、長沖遺跡の細石核の発見は古い。[註1]

さらに、中尾下原遺跡の細石核も貴重な資料と言える。[註2] ただし、これらは表採資料で、層位の確認まで至っていないことは残念である。しかし、これが菊池川中流域に住んだ人達の最初の足跡とも言うべきものである。この他に、山鹿市内では城下原遺跡で、有舌尖頭器が発見されている。[註3]

縄文時代になると、押型文土器を出土する長沖遺跡[註4]、その近くの天の川遺跡、蛇頭土製品を出土した成竹遺跡[註5]などがあり、方保田東原遺跡からも土器片が数十点出土している。

弥生時代になると遺跡の数も急増し、その規模も大きくなってくる。台地東側では、西久保遺跡が弥生時代後期における標準資料としての位置を確立し、津袋大塚遺跡[註6]においても、終末期における集落形成の構造の一部を明らかにすることができた。

また、台地西端では、桜町遺跡[註7]が環溝集落の姿を見事に見せてくれた。さらに、中尾下原遺跡においては、大小90基余の合せ口甕棺が出土し、副装品として銅戈（図版94－6）が出土した事は重要である。

この他に、銅鉾を出土した鹿本町御宇田の鹿本商工校庭（図版94－4）と鹿本町大字庄字太郎丸（図版94－3）の遺跡もある。（太郎丸は、内田川沿いの沖積平野より出土）

また、方保田東原遺跡を中心とした地区には、弥生時代終末期から古墳時代前期にわたった遺跡が集中しており、詳細については、後で述べることとする。

古墳文化の中でも、菊池川流域に分布する装飾古墳は特殊な文化である。その前段階とも言える中期の古墳が、方保田東原遺跡周辺の菊池川沿いの台地南端に集中している。前方後円墳として亀塚、神社裏古墳、それに大道小学校南西にあった経塚古墳、円墳として、清水山古墳、端山塚古墳、方保田古墳がある。

また、これら古墳の北に位置するこんもりとした林の中には、円墳ばかりの馬見塚古墳群がある。

古代関係には、中村廃寺心礎がある。ここは心礎の規模から、三重塔が建立されていたものと推察されている。また、奇勝地不動岩の麓からは、久安元年の銘をもつ滑石製経筒も出土している。

中世には、方保田城が方保田に築かれており、現在の大道小学校に存在したのではと言われている。古城考[註8]によれば、「菊池家庶流方保田與三郎重兼、其後方保田三郎武明在城と云、地は今の方保田の東村外にあり。」と記され、現在の推定と異なっている。

さて、文献上に方保田と見えるのはいつ頃であろうか。廣福寺文書によれば、興国３年（1342）８月10日、菊池武士起請文[註9]の中に「かたほたとのも」（片保田殿も）という名が出て来る。

さらに、正平十七年（1362）七月十九日、菊池武明寄進状[註10]によれば、「肥後国山鹿庄片保田村内也……」という地名が見られる。菊池武明こそ、先に述べた方保田三郎武明のことで、この頃には「かたほだ」と呼んでいたことが判る。

現在では、この２点の資料が方保田の地名の歴史を知る最古のものである。しかし、これ以前に呼ばれていたことは明白で、さらに新しい文献の出現を望むものである。

なお、遺跡の詳細については、別表（表－１）に譲ることとする。

さて、ここでは、方保田東原遺跡をとりまく周辺の遺跡について見てみよう。（第２図）

表1　周　辺　遺　跡　一　覧　表

番号	遺跡名	所在地	種類	時期	文献
1	方保田東原遺跡	山鹿市大字方保田字東原	集落趾	縄文後期・弥生後期・古墳前期	①
2	大道小学校校庭遺跡	山鹿市大字方保田字本村	集落趾、中世城	弥生後期・中世	②③
3	方保田遺跡	山鹿市大字方保田字六田	箱式合棺・散布地	弥生後期～古墳前期	③④
4	白石遺跡	山鹿市大字古閑字白石	散布地	弥生後期～古墳前期	
5	古閑ノ上遺跡	山鹿市大字古閑字古閑上	散布地	古墳前期	
6	石原遺跡	山鹿市大字方保田字石原	散布地	古墳前期	
7	馬見塚遺跡	山鹿市大字方保田字馬見塚	散布地	古墳前期	
8	旧大道中学校校庭遺跡	鹿本郡鹿本町大字来民字今古閑	集落趾	弥生後期	
9	塚の本遺跡	山鹿市大字方保田字塚の本	甕棺・住居跡	弥生後期	⑤
10	銅鉾出土地	鹿本郡鹿本町大字来民		弥生中期	⑥⑦⑩
11	桜町遺跡	山鹿市大字山鹿	環溝集落	弥生後期・奈良時代	⑧
12	長沖遺跡	山鹿市大字古閑字長沖	集落趾、貝塚	旧石器・縄文早期・弥生後期	⑨⑯
13	八の峰遺跡	山鹿市大字久原字八の峰	散布地	弥生後期	
14	天ノ川遺跡	山鹿市大字古閑字天ノ川	散布地	縄生後期・弥生中期	
15	鹿本高校校庭遺跡	山鹿市大字古閑字十三部	散布地	古墳前期	
16	垣之内遺跡	山鹿市大字蒲生字垣之内	散布地	弥生後期	
17	中尾・下原遺跡	山鹿市大字蒲生字下原	甕棺群	旧石器時代～縄文後期 弥生中期～後期	⑩
18	西久保遺跡	鹿本郡鹿本町大字御宇田字西久保	散布地	弥生後期	⑩⑬
19	乙丸遺跡	鹿本郡鹿本町大字御宇田字乙丸	甕棺群	弥生中期	⑩
20	御宇田成竹遺跡	鹿本郡鹿本町大字御宇田字成竹	集落趾	縄文早期・後期 古墳時代	⑩⑪
21	津袋大塚遺跡	鹿本郡鹿本町大字津袋字大塚	集落趾	弥生後期	⑩⑫⑬
22	鹿本中学校校庭遺跡	鹿本郡鹿本町大字来民	散布地	〃	⑩
23	平町遺跡	鹿本郡鹿本町大字中川字平町	甕棺群	〃	⑩
24	藤井前田遺跡	山鹿市大字藤井字前田	散布地	古墳前期	
25	日置古墳	山鹿市大字方保田字日置	箱式石棺	古墳時代	
26	清水山古墳	山鹿市大字方保田字一本杉	円墳	古墳中期	
27	亀塚古墳	山鹿市大字多保田字塚の本	前方後円墳	〃	
28	端山塚古墳	山鹿市大字方保田字塚の本	円墳	〃	
29	方保田古墳	山鹿市大字方保田字本村	円墳	〃	
30	経塚古墳	山鹿市大字方保田字本村	前方後円墳	〃	
31	神社裏古墳	山鹿市大字方保田字宮田	前方後円墳	〃	
32	馬見塚古墳群	山鹿市大字方保田字辻	円墳　7基	〃	
33	木下古墳	山鹿市大字方保田字木ノ下	円墳	〃	④
34	白石古墳	山鹿市大字古閑字白石の上	円墳	〃	
35	双子塚古墳	山鹿市大字中字双子塚	前方後円墳	〃	
36	八の峰横穴群	山鹿市大字久原字八の峰	横穴群	古墳後期	
37	八の峰古墳	山鹿市大字久原字八の峰	円墳	〃	

38	湯の口横穴群	山鹿市大字蒲生字湯の口	横穴群	〃	
39	茶臼塚古墳	鹿本郡鹿本町大字高橋字内原	円　墳	古墳時代前期	⑩
40	小町古墳	鹿本郡鹿本町大字高橋字内原	円　墳	古墳時代中期	⑩⑰
41	津袋大塚古墳	鹿本郡鹿本町大字津袋字大塚	円　墳	古墳時代前期	⑩
42	御霊隠穴古墳	鹿本郡鹿本町大字津袋字広江	円　墳	古墳時代後期	⑩
43	御霊塚古墳	鹿本郡鹿本町大字津袋字広江	円　墳	〃	⑩
44	中村廃寺	山鹿市大字中字権現森	寺院趾	古　代	⑭
45	凡導寺経筒出土地	山鹿市大字蒲生字百畝町	祭　祀	平安末期久安元年	⑮

周辺遺跡一覧文献註

註1　中村幸史郎「熊本県山鹿市方保田東原遺跡出土の巴形銅器」『熊本史学』45号　1975

註2　小原由昭「大道小甕棺調査」『チブサン』16号　1969

註3　隈昭志氏教示

註4　隈昭志・杉村彰一「方保田調査概報」『チブサン』13号　1968

註5　立山広吉・徳丸達也「塚の本遺跡調査報告」『石人』8巻2号　1967

註6　川村真一「熊本県鹿本郡来民町御宇田発掘の銅鉾」『考古学雑誌』25－1　1935

註7　坂本経堯「熊本県下に於ける銅鉾・銅戈－小林久雄先生の霊前に捧げる－」　1967

註8　隈昭志・杉村彰一「熊本県山鹿市桜町環溝遺跡調査報告」『熊本史学』34号　1968

註9　隈昭志・杉村彰一・桑原憲彰「長沖遺跡調査概報」『チブサン』13号　1968

註10　富田紘一「原始・古代」『鹿本町史』　1976

註11　隈昭志「熊本県成竹出土の蛇頭型土製品」『考古学雑誌』57巻4号　1973

註12　隈昭志「成竹遺跡速報」『チブサン』14号　1969

註13　高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集　1979

註14　桑原憲彰「中村廃寺について」『熊本史学』18号　1960

註15　原口長之「熊本県山鹿市大字蒲生凡導寺所蔵の経筒について」『石人』3号　1960

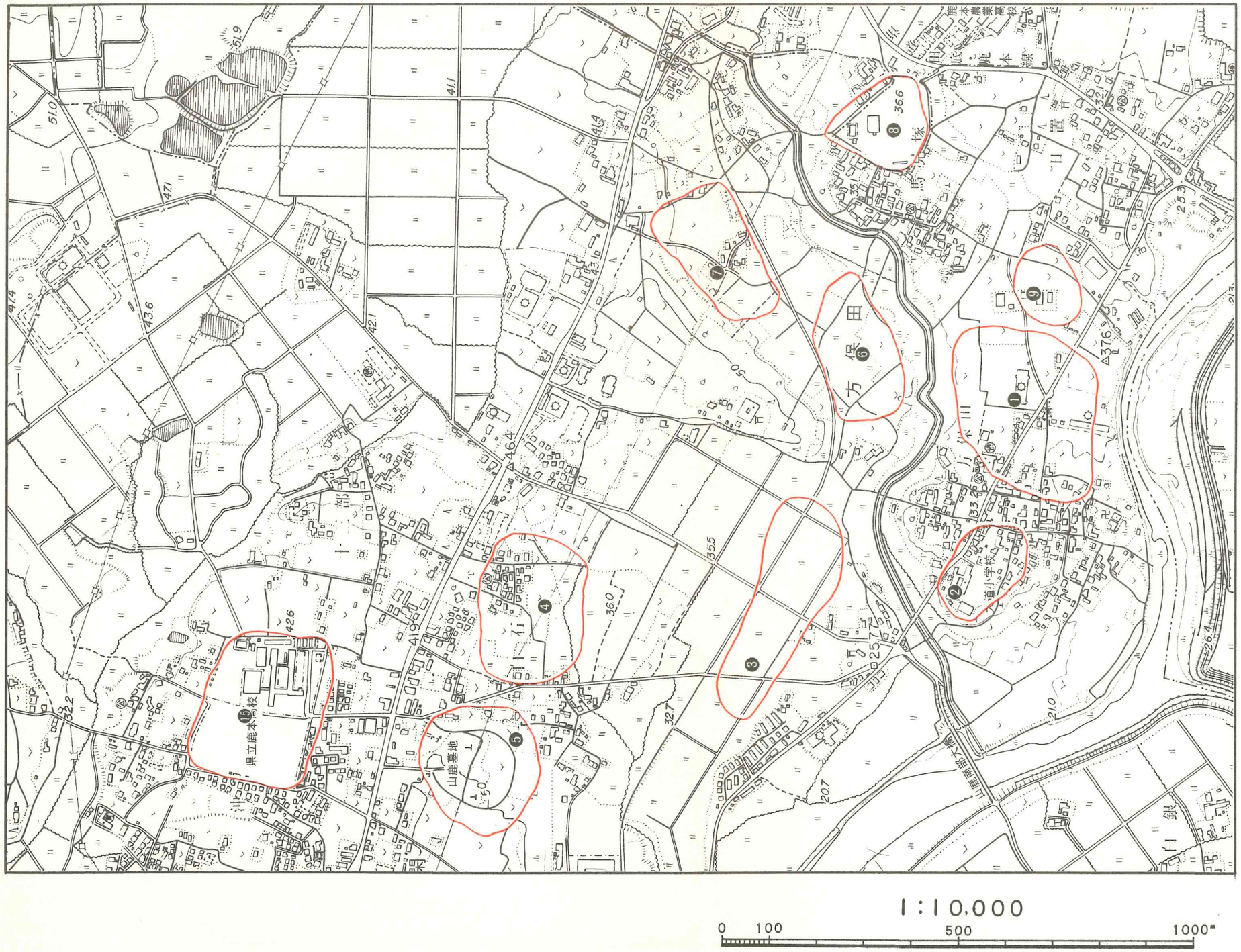
註16　平岡勝昭「熊本県発見の無土器文化資料の一例」『熊本史学』第19・20合併号　1960

註17　肥後国誌

大道小学校校庭遺跡

山鹿市立大道小学校敷地内に存在する弥生時代後期の遺跡、さらに、中世、方保田城跡とも伝えられている。方保田東原遺跡の西隣りに位置し、菊池川と方保田川の合流点を脚下に眺め、舌状台地の先端に立地している。

大正年間の学校の記録によれば、校舎南西の墓地の横に、ひょうたん形をした塚があったが壊されたとの記録があり、経ン塚と呼ばれていたことが判る。また、グラウンド造成中に多くの遺物が出土したとの話もあり、その様な状況の中から、舶載方格規矩文鏡（図版94－2）が出土したのである。



第 2 図　方保田東原遺跡周辺の立地と環境　1/10,000

また、昭和44年10月体育館建設中に甕棺および丹塗土器が出土、隈昭志氏の指導のもとに、鹿本高校考古学部の手によって調査された。これは、恐らく祭祀遺構と考えられる。

また、昭和56年８月には、校舎改築に伴なって発掘調査を実施し、住居跡、石棺、さらに、方保田城関係の空堀り等の遺構の検出を見た。

方保田遺跡 註11

大道小学校校庭遺跡のさらに西側に位置し、方保田川を挟んで対峙している。方保田遺跡は、昭和43年３月、構造改善事業の一環として、畑地から水田への切り替えを行った際に、膨大な遺物と共に、箱式石棺４基が検出された。その中の１基から、小形仿製内行花文鏡が出土した。

また、隈昭志氏によれば、さらに、鏡片１点が出土したとのことであるが、現在その所在は明らかになっていない。なお、この遺跡も弥生終末期から古墳時代前期、古式土師器を出土している。

なお、ここは、方保田白石遺跡とも呼ばれているが、正確に言えば大字方保田字六田で、方保田には、白石という小字は無い。だから、ここでは方保田遺跡として、今後もこのように称した方が適当と考える。ただし、大字古閑には字白石が存在し、ここにも遺跡が存在しており、古閑白石遺跡という名称を称している。

白石遺跡

方保田遺跡から北へ500ｍの所に位置し、方保田遺跡と同じ台地上に立地している。この遺跡もやはり、弥生時代終末期に位置付けられる。ただ、この遺跡に関する調査は実施されていない。

塚の本遺跡 註12

方保田東原遺跡の東に接した遺跡で、昭和41年立山広吉氏と徳丸達也氏の手によって調査が実施され、弥生後期の甕棺２基と箱式石棺１基の検出を見た。

旧大道中学校校庭遺跡

鹿本中学校新設に伴ない、この中学校は廃校となった。その後、敷地内は社会体育施設として、一般開放されているが、グラウンド整備に際して、昭和51年５月遺構確認調査を実施した。

その結果、住居跡数軒の遺構を確認し、ジョッキ形土器をはじめとして、弥生時代終末期の土器を多数出土した。この地から、銅鉾を出土した鹿本町来民までは、わずか500ｍの地点である。

石原遺跡

方保田東原遺跡の北に位置し、方保田川を挟んだ台地上に対峙している。ここは、昭和50年耕作中に、古墳時代前期の土師器を多数出土した。

馬見塚遺跡

石原遺跡のさらに北へ200ｍの地で、馬見塚古墳群の東に位置している。鹿本高校に採集されている資料からは、馬見塚古墳群の時期に近いと判断される。恐らく、石原遺跡に続く時期であろう。

地理的環境に優れた方保田地区には、時間的にも、相前後した時期の遺跡が密集しており、このような地域は他では見ることができず、その意味からも方保田東原遺跡の重要性が理解できよう。

（中村）

註1　前掲周辺遺跡一覧註16文献

註2　〃　註10文献

註3　山鹿市教育委員会『城下原遺跡発掘調査報告書』　1980

註4　前掲周辺遺跡一覧註9文献

註5　〃　註11、12文献

註6　〃　註13文献

註7　〃　註8文献

註8　「古城考」『肥後文献叢書』第1巻

註9　「廣福寺文書」『熊本県史料－中世篇』第1巻

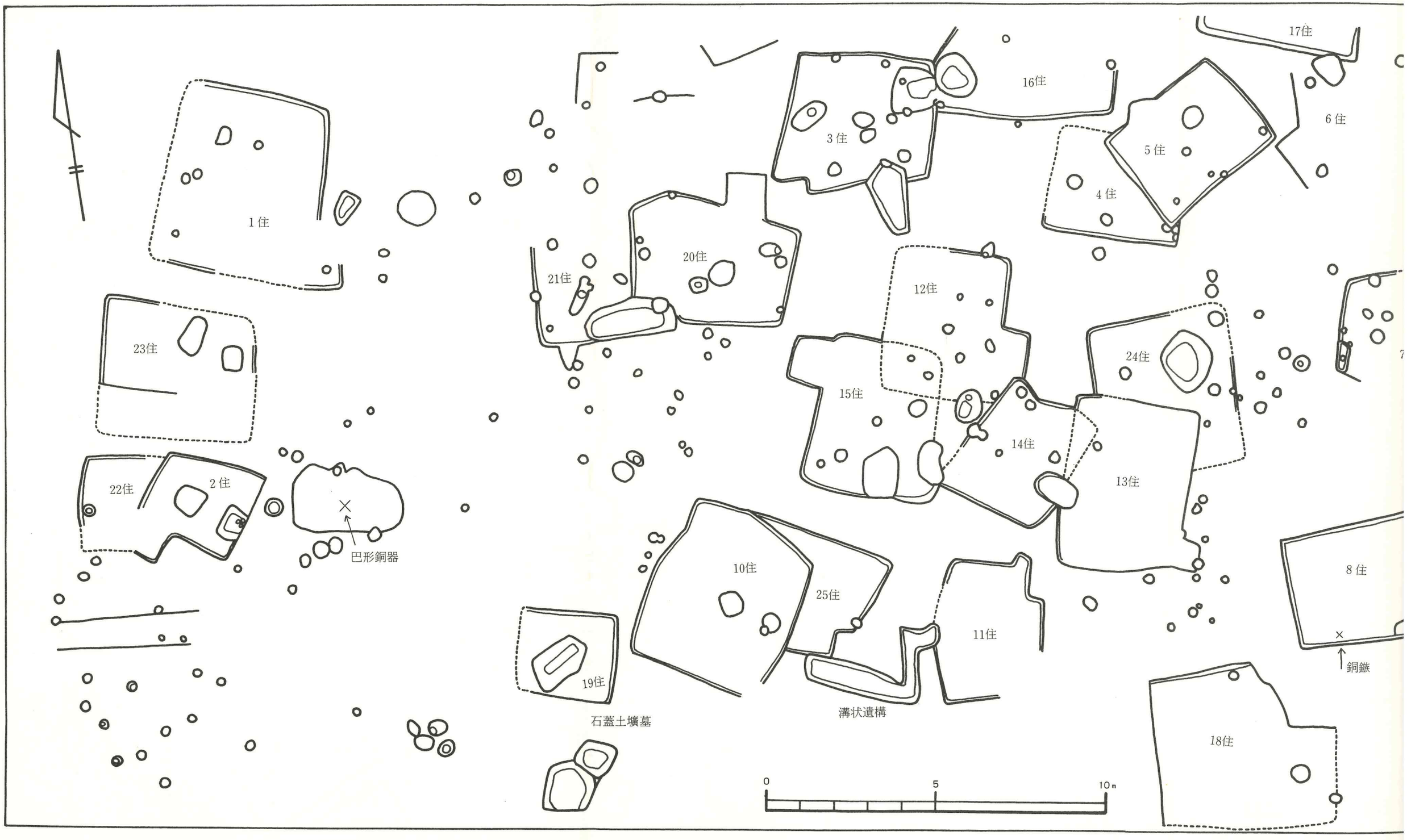
註10　註9に同じ

註11　前掲周辺遺跡一覧註4文献

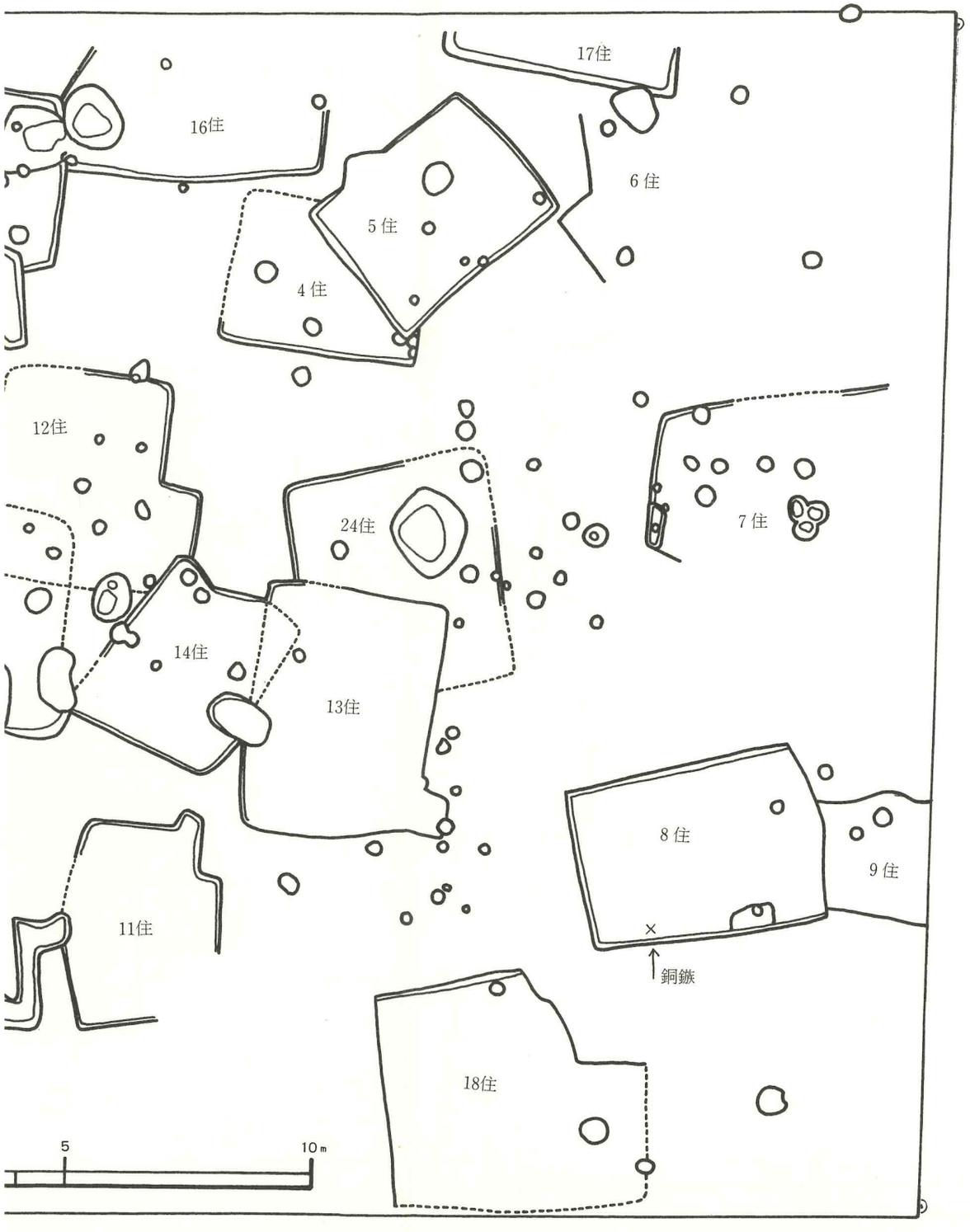
註12　〃　註5文献

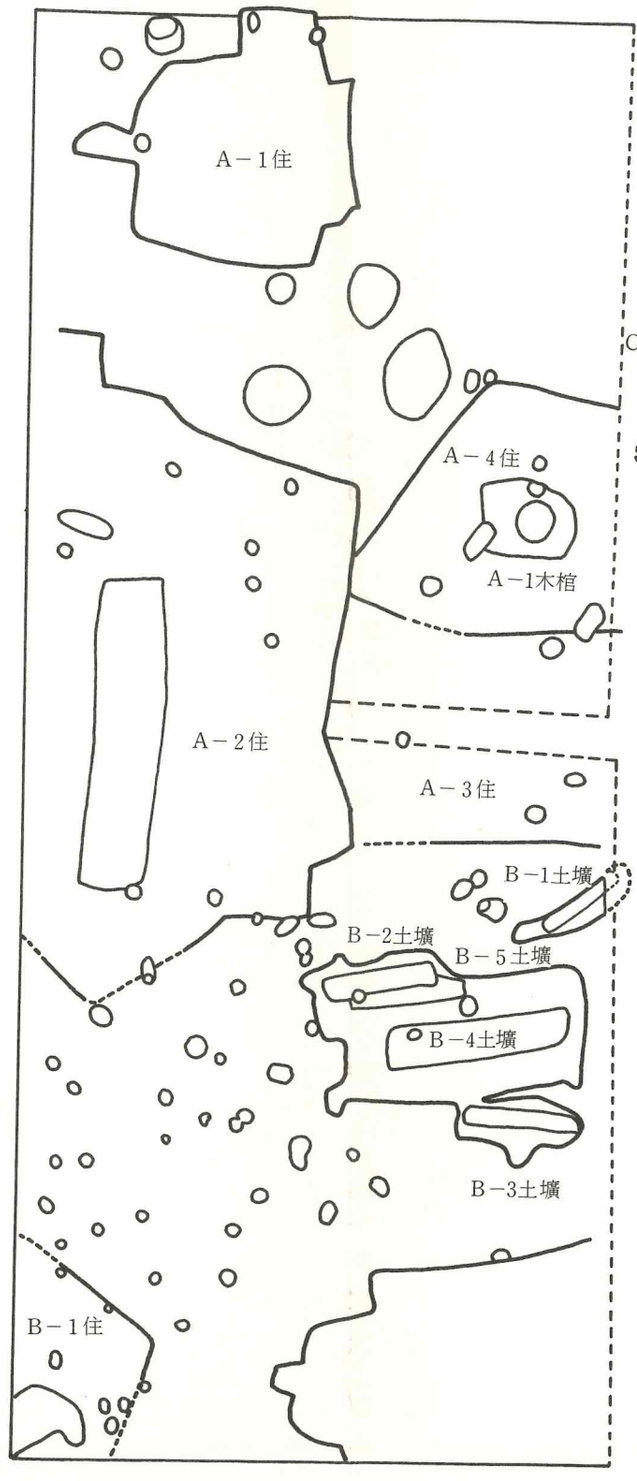


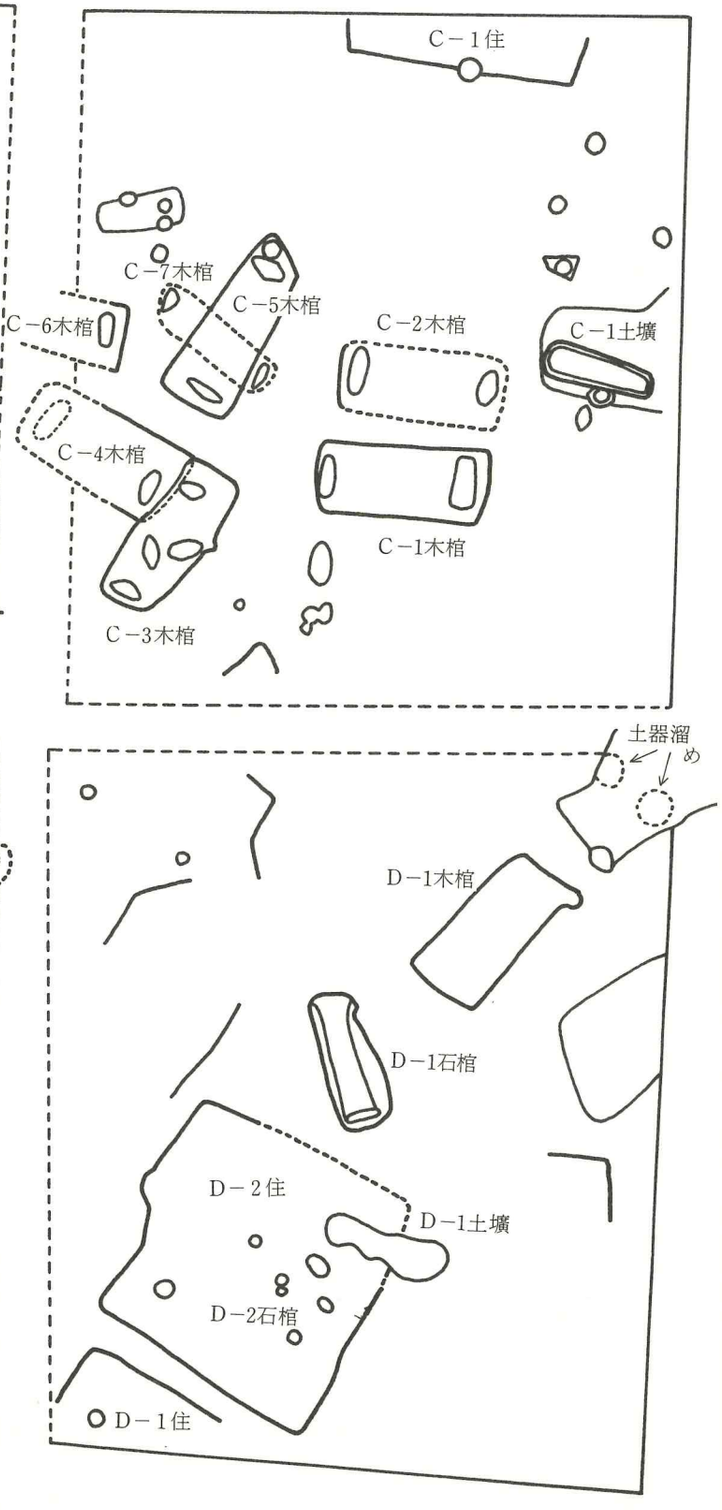
第３図 方保田東原遺跡地形図 1/2,000



第４図 第Ⅰ次、Ⅱ次調査遺構配置図







4図　第Ⅰ次、Ⅱ次調査遺構配置図

第3章　第Ⅰ次調査

45m×24mの調査区域は工場建設予定地内で、ほぼ東西に主軸をもって設定してある。(第4図)この遺跡は火山灰土層で覆われているため、土層の識別、遺構の切り合い等の判断に困難を極めた。また永年にわたって畑地として耕作されていたため、堆積土は攪乱を受けたように時期の異なる土器が混在していた。その意味からも非常に難しい調査であった。遺構の主なものは竪穴住居跡と石蓋土壙墓である。とくに住居跡は調査区中央部から東寄りの地点で集中して検出された。なお住居跡の番号は掘り始めた順で付した。

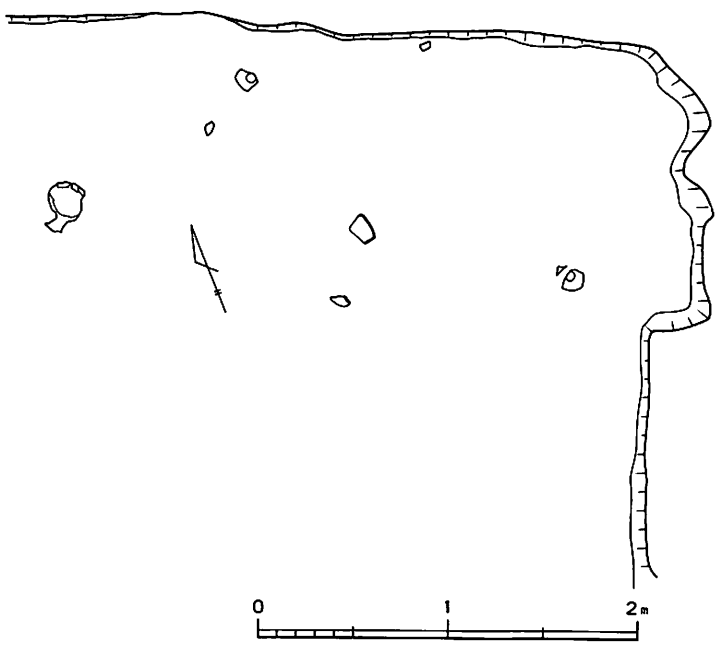
遺構と遺物

1　1号住居跡(第5図)

調査区西北隅に位置するこの住居跡は北側と東側の壁面を残すのみである。住居跡は方形プランになるものと思われるが、東北隅では一部張り出している。他の壁面についてはついに検出することができなかった。現況での規模は3.3m×2.9mを計る。

遺物(図版8－1・2、第6・7図)

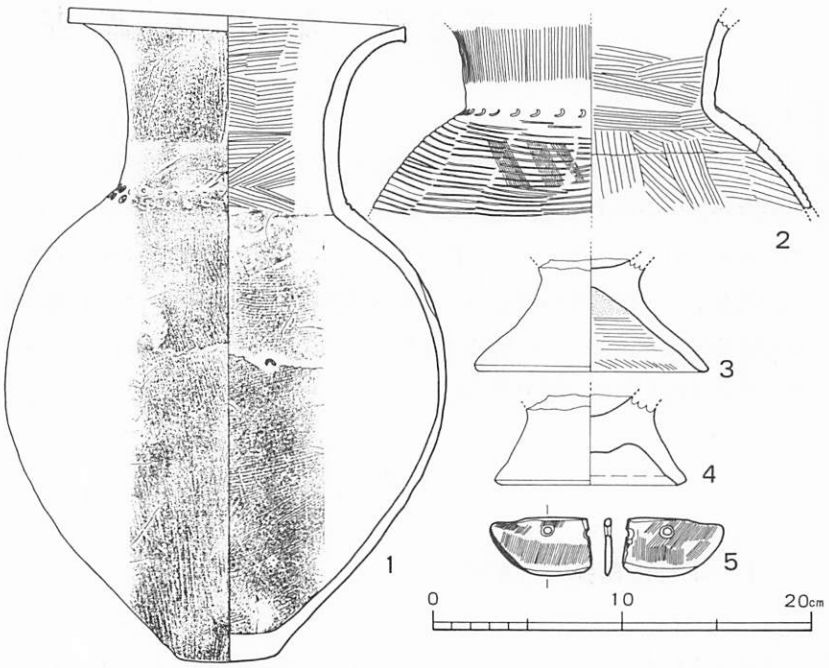
遺物は住居跡内の北側に寄って出土しており特に5の石庖丁は壁面に沿って出土した。1を除いて他は破片の状態で出土している。



第5図　1号住居跡実測図

1は口径17.7cm、高さ34cm、最大径23.3cmを計る。口は大きく開き、口縁部は一部を残し欠損し、口唇部をわずかにつまみ出している。また頸部には竹管文を二列に配している。肩部から胴部中位において器面の剝離が見られる。器面調整は内外共ハケ目を施している。特に外面は頸部を除きタテ方向のハケ目を施し、内面はヨコ方向のハケ目を施している。またハケ目は少なくとも二種類を見ることができる。胎土は砂粒を含み、焼

成は良好である。全体に黄褐色を呈しているが、一部焼成段階により黒色を呈している。2は頸部を中心として残す破片で、器高、口径等不明の壺である。1と同様に頸部に一列の半載竹管文を施している。器形は口を大きく開き、基本的には1と類似する。口縁部外面はタテ方向のハケ目を施し、胴部外面はハケ目の後タタキ目を施している。口縁部内面はヨコ方向のハケ目を、胴部内面はハケ目を不規則に施している。さらに胴部内面において粘土接合面を観察することができる。砂粒の少ない胎土で焼成も堅く焼き締っている。

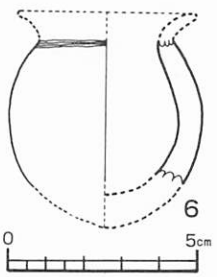


第 6 図　1号住居跡出土遺物実測図

3と4は脚部で上部を欠損している。3は基部が細く裾部をわずかに内湾しつつ大きく開いている。内面は上部に砂粒を含んだ状態で、下部においてはヨコナデを主に、わずかにハケ目を観察できる。4は3に比べ脚の高さや、広がりが小さくなっている。内面においては中心部が一段隆起していて、ヨコナデによる調整を施している。共に胎土は砂粒を含んで、焼成も堅く締って良好である。5は石庖丁で全面に研磨条痕を残している。また、背部先端においては、指当て状の凹みが施されている。刃部は中央部では両刃で、先端部においては荒い片刃となっている。孔は2個有し、外径6㎜、内径3.5㎜で孔間は2.18cmを測る。石材は粘板岩である。

先端部を欠損しているため、全長は不明だが約8㎝程度になるものと思われる。身幅は3㎝を測り、石庖丁としては小型のものに類している。

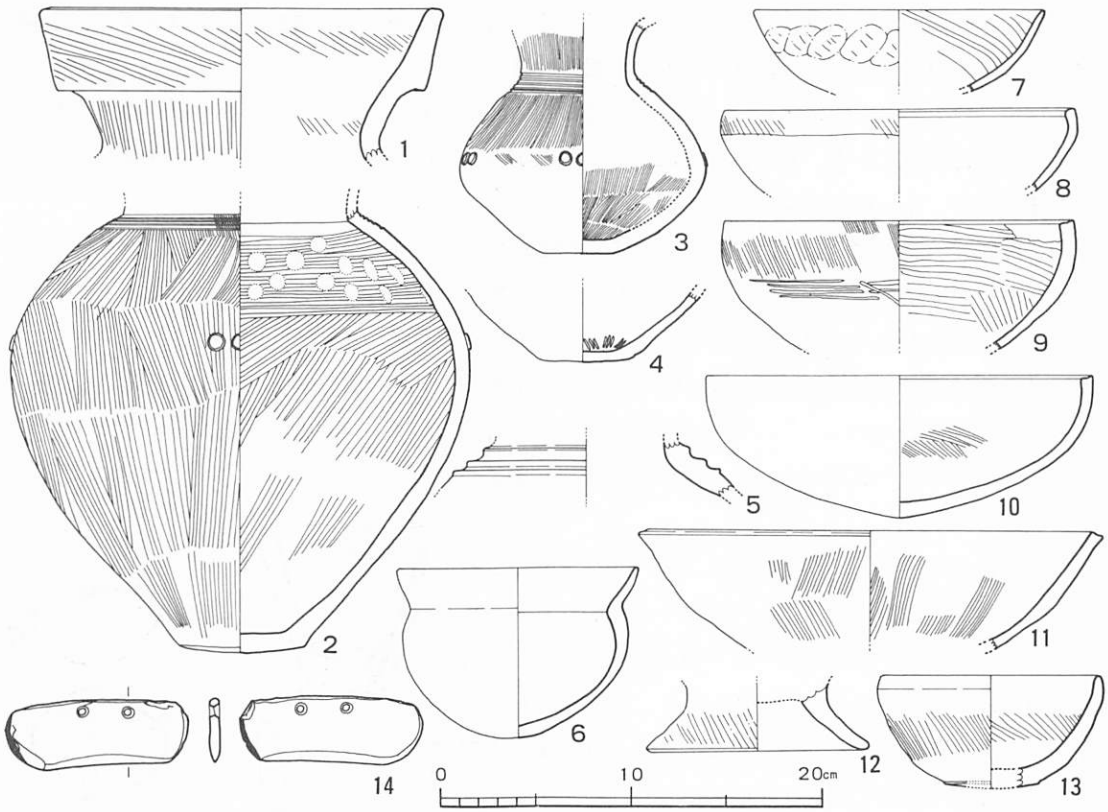
6はミニチュア土器で、口縁部と底部を欠損している。頸部には数本の沈線をめぐらし、胴部は球形を呈している。砂粒を多く含む胎土で焼成は良好である。



第 7 図　1号住居跡出土ミニチュア土器実測図

2　2号住居跡　（図版3－1）

3ｍ×2.7ｍの隅丸方形の竪穴住居跡で、西南隅に1.2ｍ×1ｍの方形の張り出し部を有している。また、調査区域の西端に位置し22号住居跡を切っている。



第８図　２号住居跡出土遺物実測図

住居跡中央部には擂鉢形の炉を配して、中には炭化物を残していた。さらに東側壁面に沿って落ち込みがあり、その中から同じ大きさの小石14個が出土した。また床面は堅く締っていた。

遺物（図版８－３～６、第８・９図）

遺物は床面に近い所から比較的良い状態で出土している。特に16は炉趾内より出土している。１は複合口縁部の破片である。砂粒はあまり含まず、焼成は悪い方である。器面は荒いハケ目調整を行なっている。２は口縁部から頸部にわたって欠損している壺である。頸部にはヘラによる沈線を９～10本めぐらしている。最大径24.1cmを胴部上位に有するが、そこには円形浮文２個を４箇所に配している。器面調整は内外両面荒いハケ目調整を施し、肩部内面においては指頭圧痕を見ることができる。さらに内面は赤色顔料の付着が見られる。

３は口縁部を欠いた小型壺で頸部に８～９本の沈線をめぐらしている。最大径は13cmを測り胴部やや下位に見ることができる。また、２と同様円形浮文２個を５箇所に配している。頸部から胴部上位にかけては細いハケ目を施し、胴部下位はナデ調整である。底部付近では器面の破損が著しく、使用によるものと思われる。内面は底部近くでハケ目調整が施されている。

４は平底のみを残し、５は突帯３本をめぐらす壺の頸部の破片である。

６は広口壺で口縁部に最大径を有し12.7cmを測る。高さ8.9cmを測ることができる。頸部を上位に

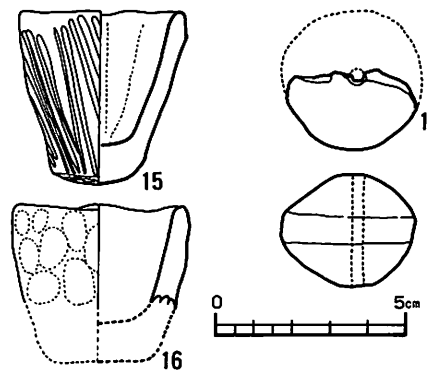
有し、口縁部は短く、外湾しつつ大きく開いている。器面は外面をヘラ調整、内面はナデによる調整を行なっている。胎土はきめ細かな土で、焼きも良い。

7～11は口を大きく開いた鉢で、7は外面にヘラケズリを見ることができる。他はハケ目調整とナデ調整を行なっている。8～10は口縁部が立ち上がりつつ内湾している。また、7・8は口唇部が丸味を帯び、9～11は平坦になっている。

12は脚部で、径に比べ脚が短くなっている。13は鉢で器壁が厚く手捏様の作りである。特に平底部分は不整形になっている。器面は内外面共にハケ目調整の後口縁部近くをヨコナデによって整形している。砂粒を含み焼成は良いとは言えない。黒褐色を呈している。

14は粘板岩製の石庖丁である。長さ9.6cm、幅3.3cmを測る。孔は2個有し、孔の外径5.9mm、内径3.3mm、孔間2.38cmを計る。この資料は刃部が内湾し、背部もわずかに反りが見られる。また1号住居跡出土の石庖丁（第6図－5）と同様指当て状の加工が見られる。両端部は荒い片刃となっている。

15は手捏土器である。口径4.2cm、高さ4.5cmを測るこの土器は、外面を荒いハケ目で、内面はナデ調整を行なっている。また指圧痕が表面に残り、角張った感じのする土器である。砂粒の少ない土で、焼成も良く、堅く締った焼き上がりである。内外共黄褐色を呈している。16も手捏土器で、底部を欠く破片である。器面は内外共ナデによる調整を行なっている。それも表面にかなり乱れた指紋が見られるところから、指に水分を多く含ませて器面調整を行なったものと判断された。胎土は砂粒をあまり含まない良い土を使い、焼成も良いようだ。表面は二次的に火を受けたためか部分的に赤褐色を呈しているが、基本的には内面と同じく黄褐色を呈している。なお表面には指圧痕が多く見られる。



第 9 図　2号住居跡出土遺物実測図

17は算盤玉形土製品である。中心部から半分を欠損しているが現況で長径3.5cm、短径2.9cm、孔径4mmを測る。器面はナデにより調整を施している。砂粒を含む土は堅く焼き締められ、少し赤味を帯びた黄褐色を呈している。

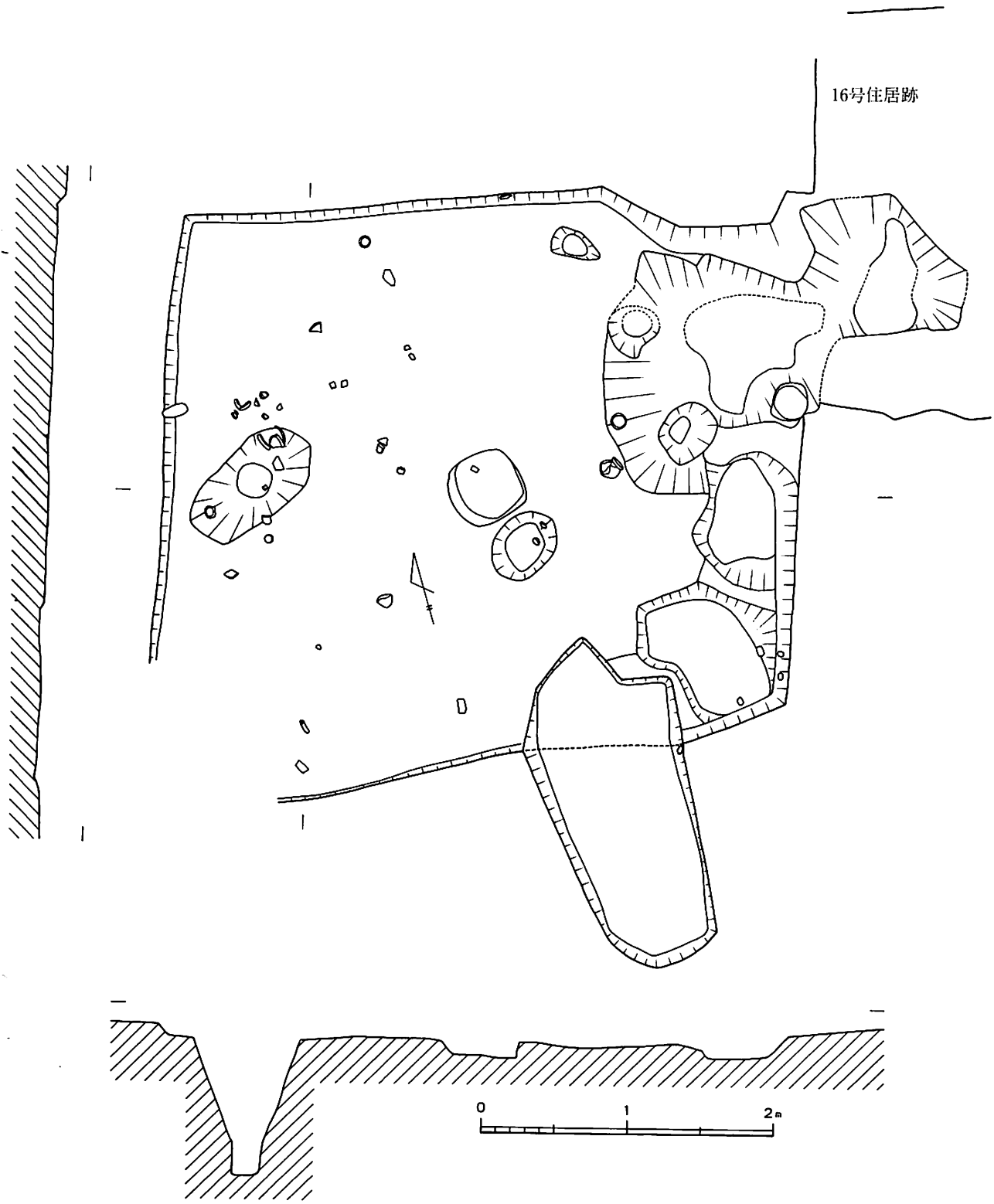
3　3号住居跡（図版3－2、第10図）

調査区中央部北側に在るこの住居跡は16号住居跡と接している。南西隅においては壁面が消え、あたかも入口であるかのようだった。また、南側壁面においては土壙によって切られ、東北隅においては大きな掘り込みが見られる。長軸はN－19°－Eを測り、4.1m×4.4mの大きさを測る。

遺物（図版8－7～9、10－1、第11図）

住居跡円に残された遺物は土器片だけであった。その多くは西側に片寄って出土していた。

1は小形の甕で、口径13cm、高さ14,9cmを測り、最大径13.1cmは胴部中位よりやや上部に位置したところに見られる。口縁部はやや外反しハケ目調整の後ヨコナデ調整を行なっている。胴部にお



第 10 図 3 号 住 居 跡 実 測 図

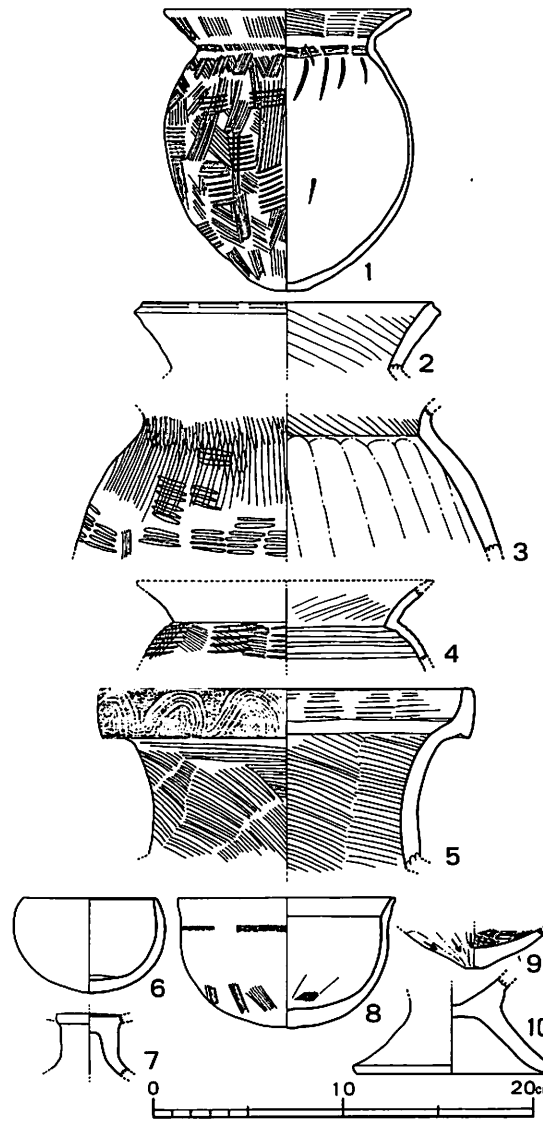
いてはタタキ目を行なった後ハケ目でかき消すように調整を行なっている。内側は口縁部と頸部にハケ目が見られ、ヘラ状の刻目を数本見ることができる。きめ細かな土を使い器壁を薄く仕上げられ焼成も良いようだ。

2は甕の口縁部で口径15.1cmを測る。やや外反気味だが、直線的に広がる口縁部はわずかにヘラ調整の痕跡が見られる。口唇部は浅く凹み、端部をつまみ上げている。実際は口唇部に工具を当て引いたような状態であり、つまみ上げという表現は、この土器に関しては不適当とも思える。口縁部は頸部との接合面近くで剝離している。砂粒を多く含むが焼成は良いようである。

3は肩部のみの破片である。内外面にススの付着が見られる。器壁は厚く、外面はタタキ目をかき消すようにハケ目が施され、頸部から下向に施文されている。内面は口縁部にハケ目を、胴部はヘラケズリを行なっている。胎土は砂粒が少なく、焼成も良い。

4は頸部のみの甕の破片である。右上がりのタタキ目を細かいハケ目で消すように調整を行なって、内面はヨコナデによる調整を行なっている。

5は口径19.5cmを測る複合口縁をもつ壺である。口縁部外面には粗末な櫛描波状文をめぐらしている。頸部になればハケ目調整を行なっている。内面もハケ目を施しているが、指圧痕が頸部から口縁部にかけて見ることができる。小さな砂粒を含み焼成は良いようだ。



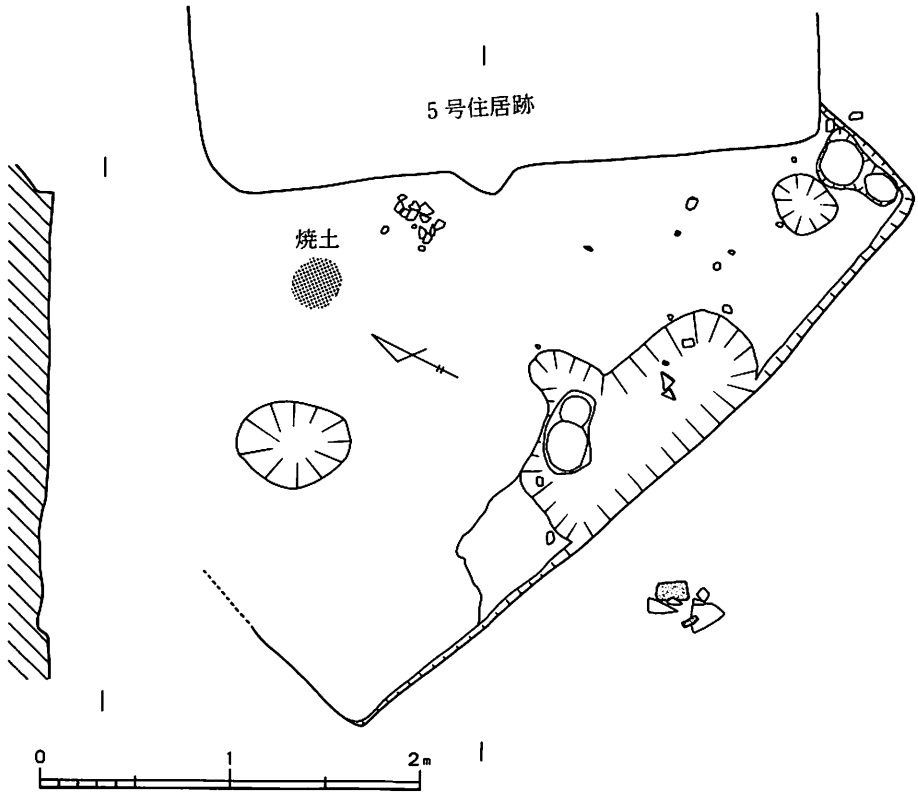
第 11 図　3号住居跡出土遺物実測図

6は小型の鉢で完形品である。口径7cm、高さ5cm、最大径8cmを測る。全面ナデ調整で美しく仕上げられた土器である。底部と胴部には小さな器面の剝離が集中して見られる。

7は高坏脚部である。坏部と脚裾部を欠損している。器面はナデ調整で脚内部はヘラケズリの後ナデ調整を施している。

8は口縁部に最大径11.3cmを有し、高さ6.8cmを測る。口縁部はヨコナデが見られ、頸部には小さなハケ目が施され、胴部から底部にかけては荒いハケ目が見られる。しかし器面剝離が胴部から底部にかけて著しく、ハケ目もわずかに確認される程度である。内面は全面ナデ調整であるが、底部

近くに1.5cm×2.2cmの大きさで平織りの布圧痕が見られる。糸は細かくかなり良い織物のようだ。圧痕の部分は表面が凹んでおり強い力で押されたものと判断される。現在この部分しか圧痕が無く、どのような目的で圧痕をつけられたのか不明である。きめ細かな粘土で、焼きも良く、土師器とも言えるような土器である。9は底部で、外面はヘラケズリ、内面は蜘蛛巣状にハケ目調整を行なっている。10は脚部で、全面ナデ調整を行なっている。



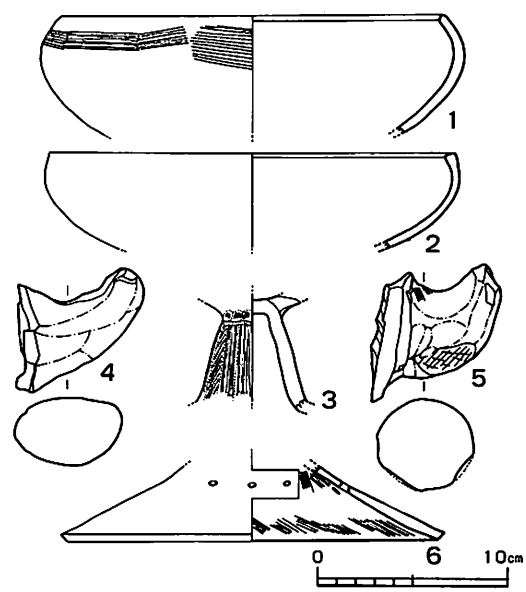
第 12 図　4号住居跡実測図

4　4号住居跡（図版4－1、第12図）

5号住居跡に切られたこの住居は、南側壁面をわずかに残している。この南側壁面は 4.1m を測り、壁面に沿って1.4m×0.6mの規模で掘り込みが見られ、南東隅においても柱穴を確認することができた。しかし、北側壁面と西側壁面の確認は出来なかった。

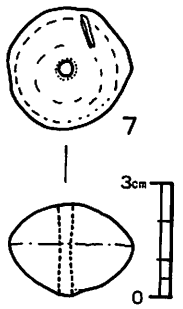
遺物（図版8－10、第13、14図）

4・5は土師器把手で、時期的に他の遺物と差異が認められるところから、混入したものと思われる。1と2は鉢の破片で、1は20cm、2は21.3cmの口径を測る。共に底部を欠き、高さ

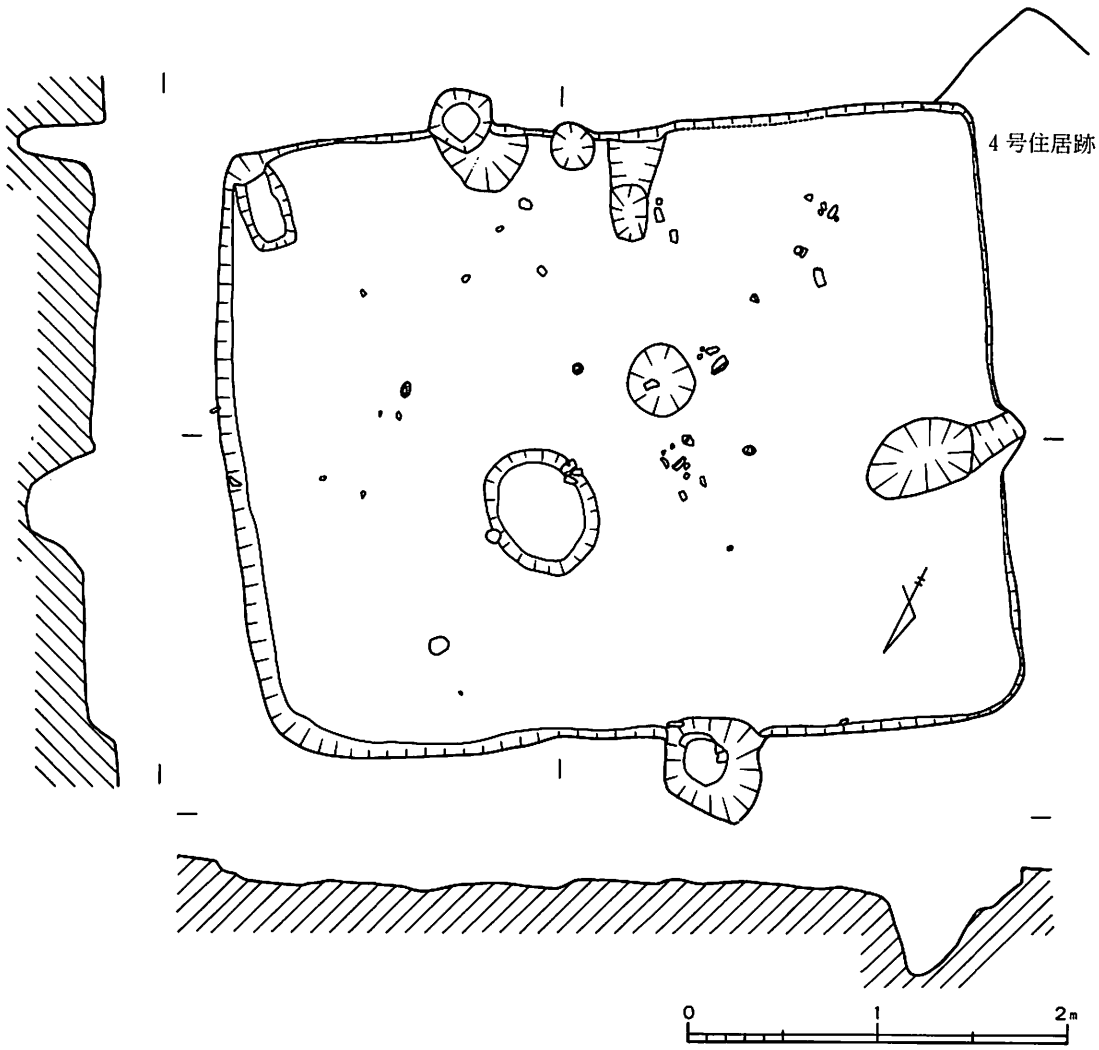


第 13 図　4号住居跡出土遺物実測図

は不明である。口唇部は、1が丸味を帯び、2は平坦に切られていた。なお、1は口唇部において器面の剝落が著しい。3は高坏で、坏部と脚部を欠いている。外面はヘラ調整の後、ハケ目調整を行なっており、内面はナデ調整を行なっている。土は砂粒を含まず、焼成も良い。赤褐色を呈している。4・5は土師器の把手である。4は接合面から剝落し、5は器面内側を伴なって剝落している。6は脚部で、裾部は19.4cmの径を測り、3個の孔を有し、2箇所、もしくは4箇所配するものと思われる。また、内面においては籾圧痕を見ることができる。また、裾部外面においては、器面の剝落が見られる。外面はナデ調整、内面はハケ目調整を行ない、その後、ナデ調整を行なっている。7は算盤玉形土製品で、長径3.5cm、短径2.4cm、孔径4㎜を測る。器面はナデ調整を行なっている。



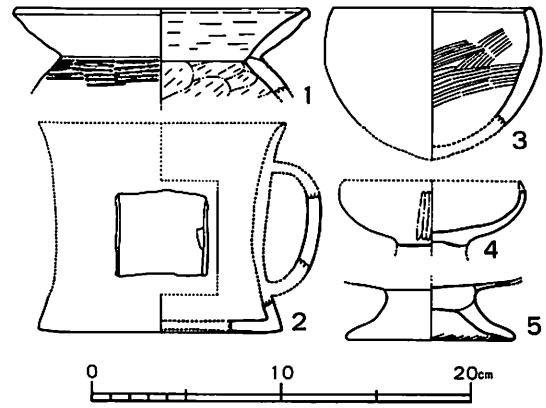
第14図 4号住居跡出土土製品実測図



第15図 5号住居跡実測図

5　5号住居跡（図版４－２、第15図）

４号住居跡を切ったこの住居跡は 4.1m×3.2mの隅丸方形のプランをもち、長軸はN－58°－Eの方向を有している。壁面はしっかりしており、容易にプランを確認することができた。床面はわずかに堅くなっており、遺物も主に破片が出土している。

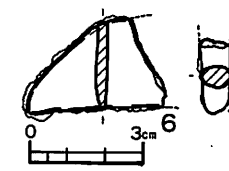


第 16 図　５号住居跡出土遺物実測図

遺物（第16、17図）

住居跡全域に破片が散在した状態で出土している。また、この住居跡においては鉄器片２点が出土している。

１は口径15.3cmを測る。甕の口縁部片である。口縁部は「く」字に大きく開き、中位は肉厚となり口唇部がわずかにふくらんでいる。頸部内面は稜を有している。口縁部は内外面共にナデ調整を行ない、胴部外面には水平方向のタタキ目を、内面にはヘラケズリを施している。口縁部と胴部にススの付着が見られる。２はジョッキ形土器で、底部と把手の破片である。全面ナデ調整で、砂粒を含む土で焼き締めている。３は口径10.5cmの鉢で、底部を欠いている。砂粒を多く含み、焼きもあまり良くない。内面はハケ目を施している。４は台付鉢で、台接合部で下部を欠損している。接合部は、先端に刻みをもつ工具で器面に凹凸をつけている。器面は外面をヘラ調整、内面はナデ調整を行なっている。赤褐色を呈し、きめこまかな土を使用しているが、焼きはあまり良いとは言えない。５は台付鉢の台部で、上部を欠損している。器面はヘラ調整を施し、きめ細かな土を堅く焼き締めている。６と７は、鉄器片である。６は一辺に刃部を形成しているが器種不明である。７は鉄鏃の茎の一部になるものと思われる。



第 17 図　５号住居跡出土鉄器実測図

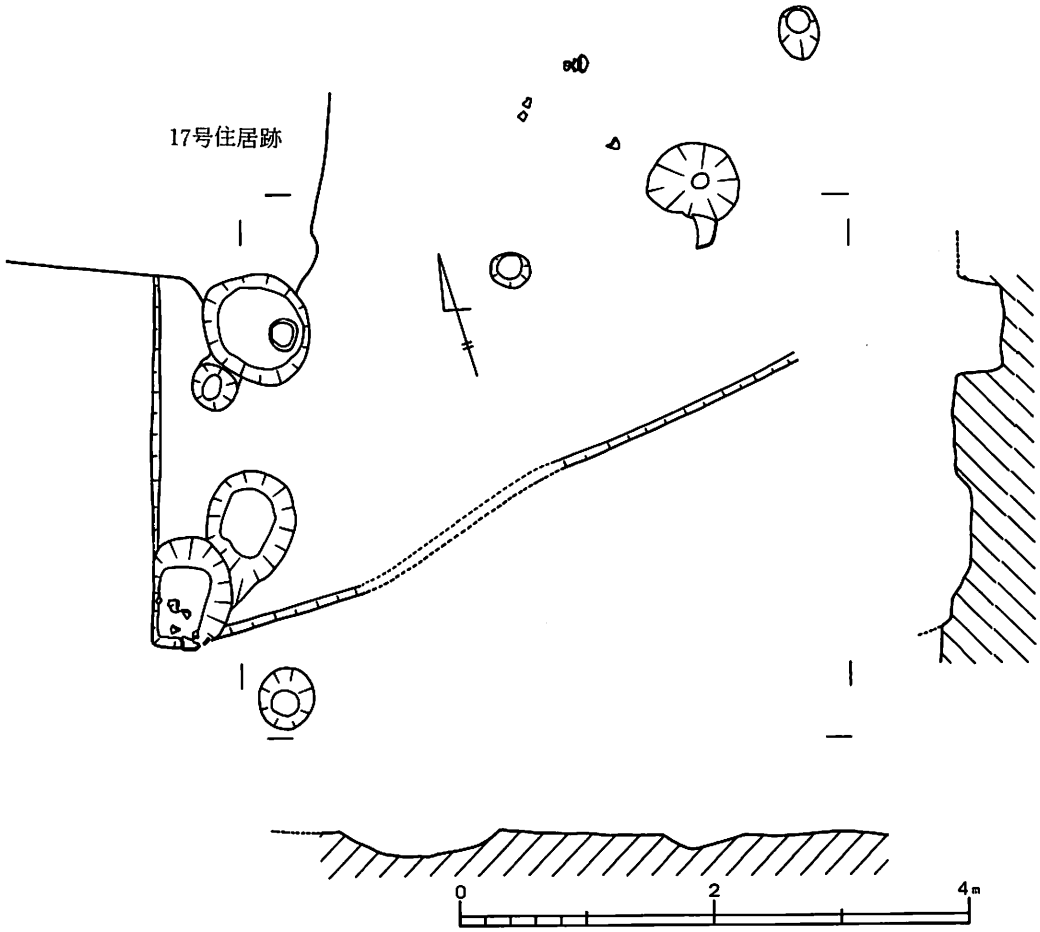
6　6号住居跡（第18図）

調査区内東北隅に位置し、17号住居跡によって切られている。南側と西側壁面の一部が確認されている程度で、あまり良い状態では残されていない。

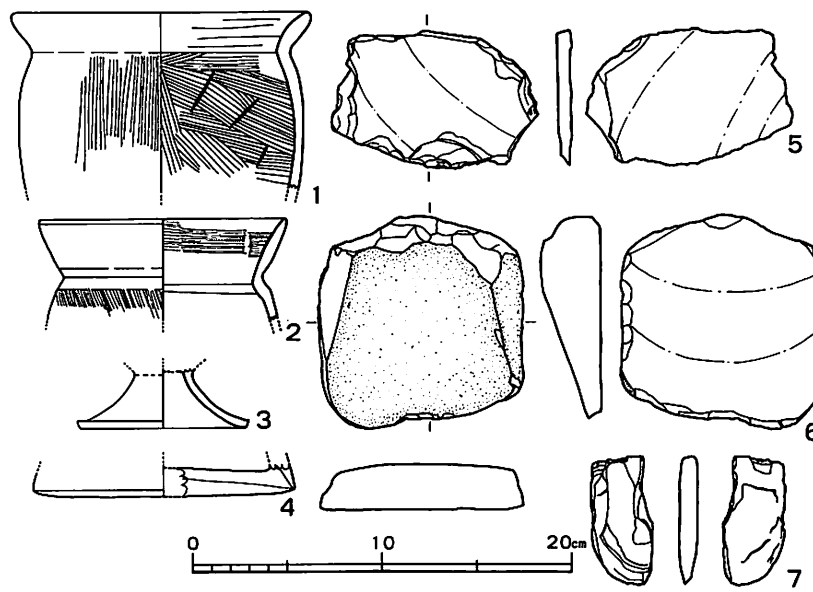
遺物（図版９－３、第19図）

遺物の量は少なく、わずかに数点を残している。

１と２は甕で、口縁部のみである。共に肩の張りが少ない。１は、口縁部は外反し、肉厚であり、内外面共にハケ目調整を行ない、外面においてはススの付着が著しい。砂粒を多く含む土で、焼成は良くない。２は口縁部が１に比べ長く、先端がつまみ気味である。外面はハケ目調整を行なっている。口縁部内面もまた、ハケ目調整である。この土器は、胎土に砂粒が少なく焼成も良い。３は



第 18 図　6 号住居跡実測図

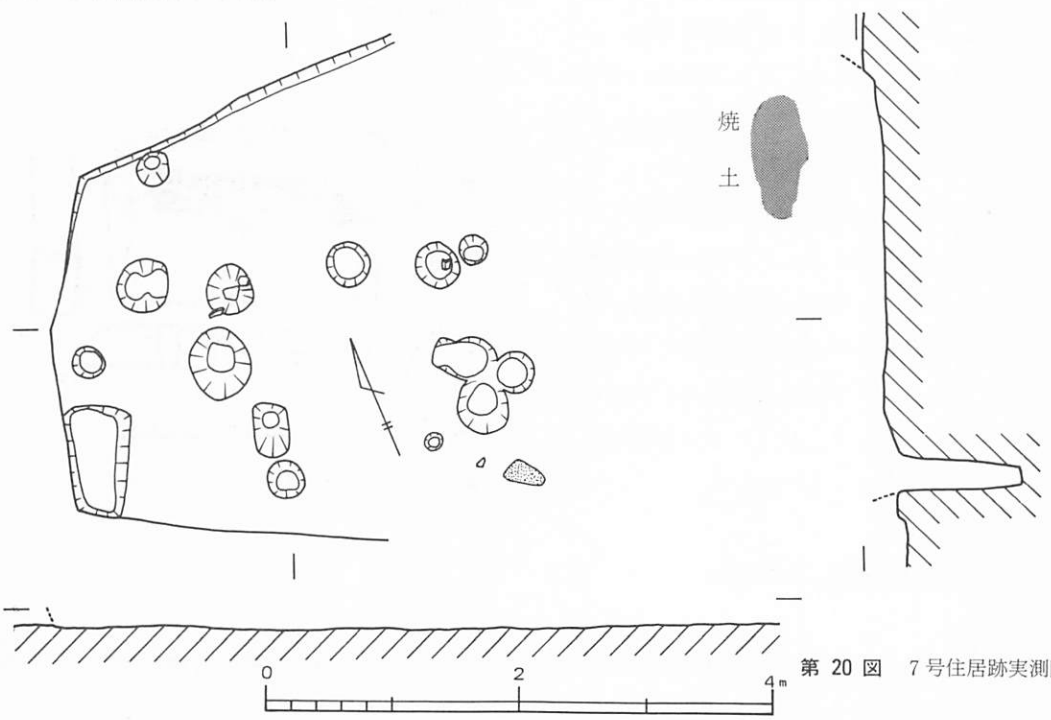


第 19 図　6 号住居跡出土遺物実測図

台付鉢の台部である。裾部をつまみ上げていて、鉢部との接合面で剝離している。器面は、ナデ調整で、焼成も良好である。4はジョッキ形土器の底部である。断面には粘土接合の面を見ることができる。砂粒を含む土で、焼成は良く、堅く締っている。5は石庖丁未製品である。石材は結晶片岩で加工初期の段階である。表裏、主要剝離面を残し、周辺に二次加工を施している。しかし、刃部の形成はこの段階では見られない。6はアルコーズ質砂岩の砥石である。自然面を砥石として利用し、裏面には主要剝離面を残している。さらに、その剝離面の一部には研磨の跡が見られる。7は、局部磨製の石斧片である。刃部のみを研磨している。他の面は、あまり手を加えていない。石材は結晶片岩である。

7　7号住居跡（第20図）

調査区東端に位置するこの住居跡は、壁面の確認が難しく、床面が堅く締っていたため、床面からプランを確認していった。西側壁面は、すでに上部を欠しており、わずかに床面近くの部分で確認することができた。東側壁面については確認できず、西側壁面から東へ5.5mのところに、焼土を見ることができ、住居跡の規模から考慮し、別の住居跡が存在するものと思われたが、遺構を検出することは出来なかった。

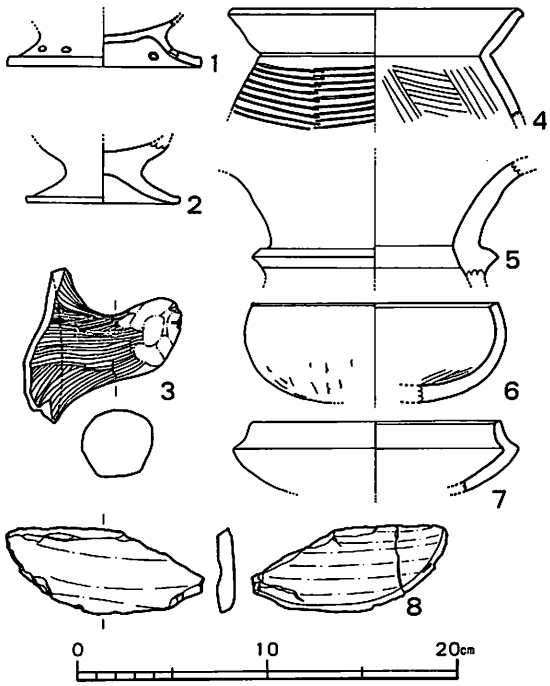


第 20 図　7号住居跡実測図

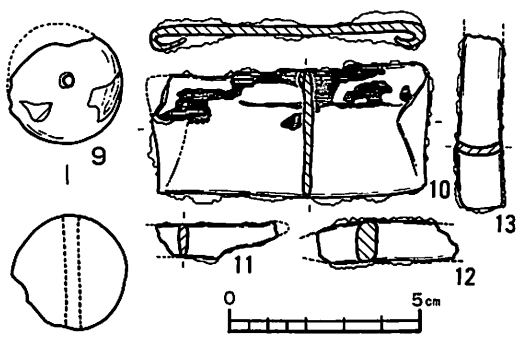
遺物（図版9－4・8、第21、22図）

3と7は住居跡東側より出土し、時期が異なるところから、別の住居跡に伴うものと判断される。1は台付鉢で、短い台部に2個の孔を3箇所に配している。器面は全面ナデ調整である。器壁は薄く、焼成も良い。2も台付鉢で、上部を欠損し、台部のみである。台部は1と共に器高に比べ低く

全面ナデ調整を行なっている。赤褐色を呈し、きめ細かな土で焼きも良い。4は甕の口縁部片である。口径15cmを測り、口縁部は「く」字に開き、口唇部外側がわずかにつまみ気味にふくらんでいる。胴部は水平方向のタタキ目を施し、内面はハケ目調整である。砂粒を含む胎土で、焼きは良くない。5は壺の頸部片で、頸部には三角突帯を貼付している。6は鉢の破片で口径13cmを測る。最大径は胴部上位に見られ、13.8cmを測る。器面は、外面ではハケ目の後にヨコナデ調整を行なっている。また、底部近くではヘラケズリも見られる。内面は底部近くでハケ目が見られるが、主にヨコナデを施している。砂粒の少ない土を堅く焼き上げている。3と7は、7号住居跡東側に存在する焼土に関した遺構に伴うものと思われる。3は把手で、ハケ目調整を施し、内面はヘラケズリである。7は土師器の坏である。8は石庖丁未製品である。形を整えたのみで、刃部の加工までは至っていない。結晶片岩を使用している。9は球形土製品である。直径3cmの球形を呈し、中央に直径3mmの孔を穿っている。算盤玉形土製品と同一目的をもつものと思われる。10は手鎌の完形品である。長さ7.5cm、幅3.4cmを測り、内面には木質を付着している。11としては不明鉄器で、13は鈍になるものと思われる。



第 21 図　7号住居跡出土遺物実測図



第 22 図　7号住居跡出土土製品、鉄器実測図

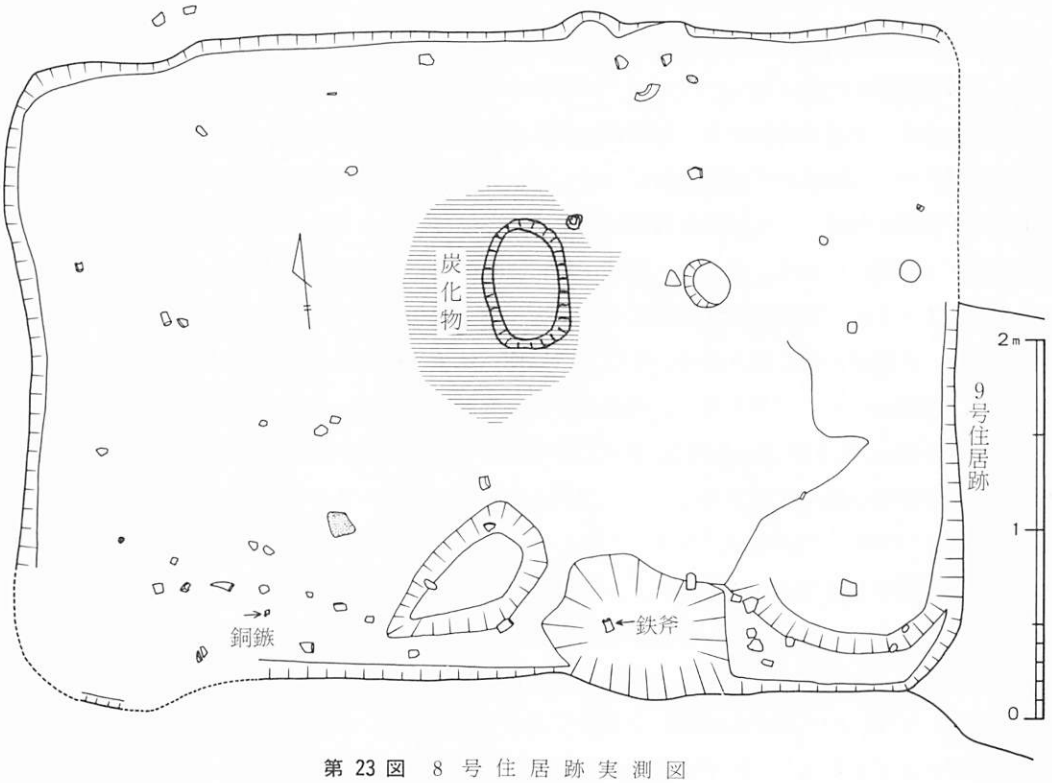
8　8号住居跡（第23図）

調査区域東端に位置し、9号住居跡を切るこの住居跡は、5m×3.5mの隅丸方形のプランをもち、中央部に炉趾を見ることができる。主軸は、ほぼ東西に向けN－86°－Wとなっている。

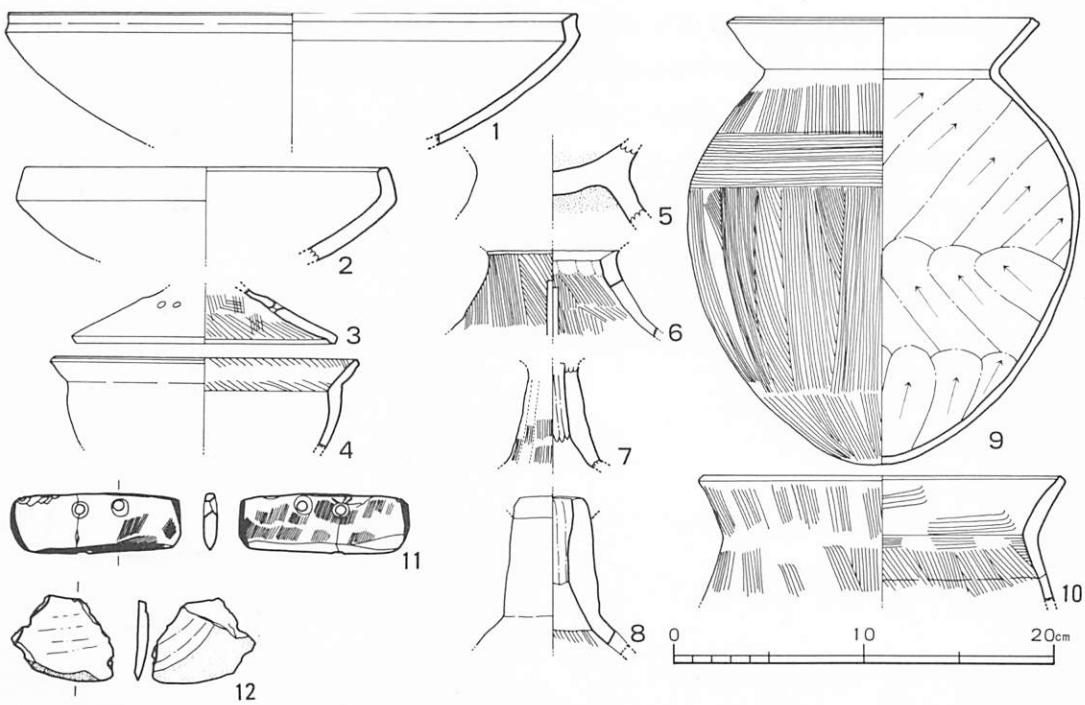
住居跡南側壁面に沿ってピットを配しており、住居跡としては非常に良く残っているものと言えよう。

遺物（図版7－1、9－5・7、93－2、第24、25図）

住居跡全域に散布する状態で遺物が出土している。南側に在るピット内では鉄斧1点が出土し、



第 23 図　8 号 住 居 跡 実 測 図

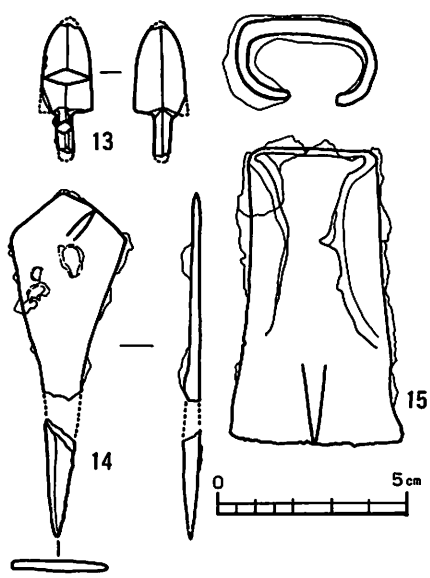


第 24 図　8 号 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

その近くからは、県下初出土の銅鏃1点が検出された。

また、石庖丁が半切の状態で、1.3m離れて出土している。

1・2は口縁部が内向し短い。さらに、口唇部は水平に切られており、これらは高坏の坏部になる。3は脚部で、上部が鉢になり、裾部には円孔2個を有し3箇所に配するものと思われる。内面はハケ目調整で、外面はナデ調整を行なっている。4は、鉢の口縁部片で、口径16cmを測る。口縁部は「く」字形に外反し、口唇部には浅い沈線がめぐっている。5と6は脚部で、6は裾部に長方形の透しを4個配している。透しはヘラ状工具により切り込んでおり、器面にその痕跡を見ることができる。7と8は、高坏の柱状部である。7は手捏気味の高坏で、胎土も砂粒を多く含んでいる。器面も荒いハケ目が一部に見られる。8は、7に比べ胎土、焼成とも優れていて、裾部に円孔を穿っている。内面はヘラケズリを施し、外面はヘラ調整を行なっている。9と10は甕で、9は口径15.5cm、最大径20.6cm、高さ23.7cmを測る。最大径を倒卵形の胴部上位に有し、口縁部は内湾しつつ「く」字に開き、口唇部は浅い沈線をめぐらし、内側をつまみ上げている。口縁部は、内外面ヨコナデで、胴部は外面をハケ目、内面をヘラケズリを施している。器壁はきわめて薄く仕上げられ、胴部においては器面剥離を見ることができる。ススの付着が多い。外来系の甕である。10は、在地系の甕で、口縁部片である。口径18.8cmで、ゆるやかに頸部から肩部へと移行している。内面には、粘土接合面を確認することができる。器面は、全面をハケ目調整を行なっている。11と12は石庖丁である。特に11については、円孔部から半切した状態で出土したもので、刃部に打撃痕を残している。さらに、切断面は手ずれを生じ、わずかに摩滅を見ることができる。短冊形をしたこの石庖丁は、全面研磨されており、使用中に半切され、その後も使用されていたものと判断された。石材は粘板岩である。12は破片で、両刃の刃部をわずかに残すもので、全体の大きさについては不明である。13は銅鏃である。先端部と茎端部を欠損するが、全長3.8cm程度になるものと思われる。表面に土が付着し、保存状況はあまり良くない。有茎のこの銅鏃は鏑をもち、茎と共にその断面は菱形を呈している。14は鉄鏃である。茎の一部を欠損しているが全長18.4cm程度になるものと思われる。15は鉄斧である。長さ7.8cm、刃部間4.5cmを測り、完全な姿をとどめている。この鉄斧は、端部を折り曲げて袋を形成している。また、袋部の内径は2.7cm×1.6cmを測ることができる。



第25図 8号住居跡出土青銅器、鉄器実測図

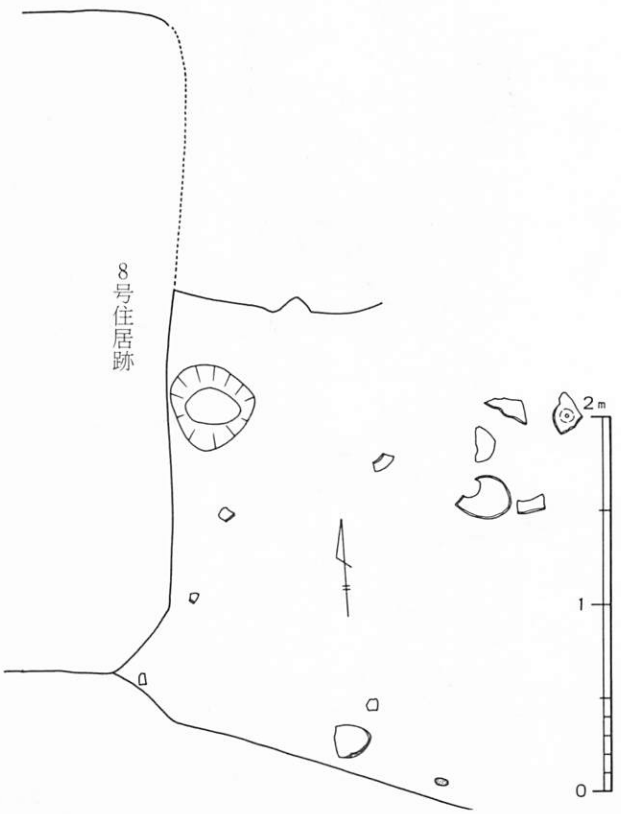
9　9号住居跡（第26図）

調査区東端に位置し、8号住居跡に、西側壁面を切られ東側壁面は調査区外へと延びている。そのため、南側壁面と北側壁面の一部を残すのみである。

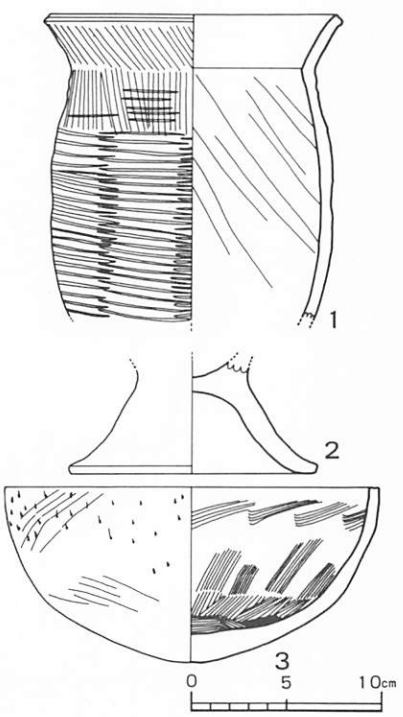
遺物（図版10－2、第27図）

住居跡内に散在する状態で出土した遺物は土器ばかりであった。

1と2は在来系の甕の破片である。1は口縁部を「く」字に開き、肩部の張りが少なく、胴が長くなっている。そのため最大径を口縁部に有し、胴部の張りも中位に位置している。この土器の底部については、脚を付けるか、丸底になるかは不明である。器面は、胴部外面には水平方向のタタキ目を施し、口縁部から頸部直下まではハケ目を施している。特に頸部直下においてはタタキ目をかき消すようにハケ目を施しているのが観察できる。内面は、口縁部ではヨコナデ、胴部上位ではハケ目を施している。また、胴部下位においては器面の小さな破損を多く見ることができる。土は、砂粒を含まず、焼きも良い。2は脚部で、裾部が長く開いている。全面ナデ調整を施し、内部における砂粒の付着は見ることができない。胎土は砂粒を含み、良く焼き締められている。3は鉢で、口径19.7cm、高さ9.3cmを測り、口縁部は直口している。また、口唇部は平坦で、わずかに凹んでいる。底部は尖り気味の丸底である。また、口縁部から胴部中位にかけては、右上がりの条痕を見る



第 26 図　9号住居跡実測図

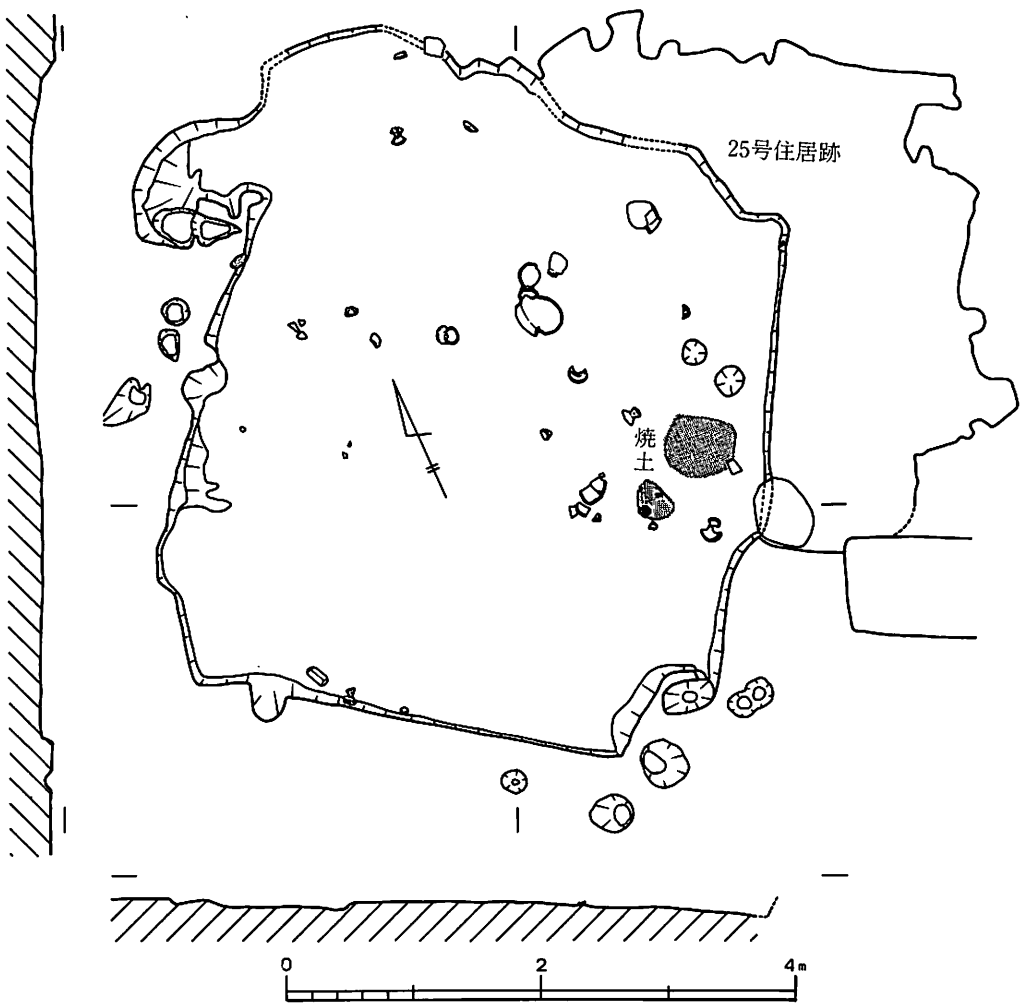


第 27 図　9号住居跡出土遺物実測図

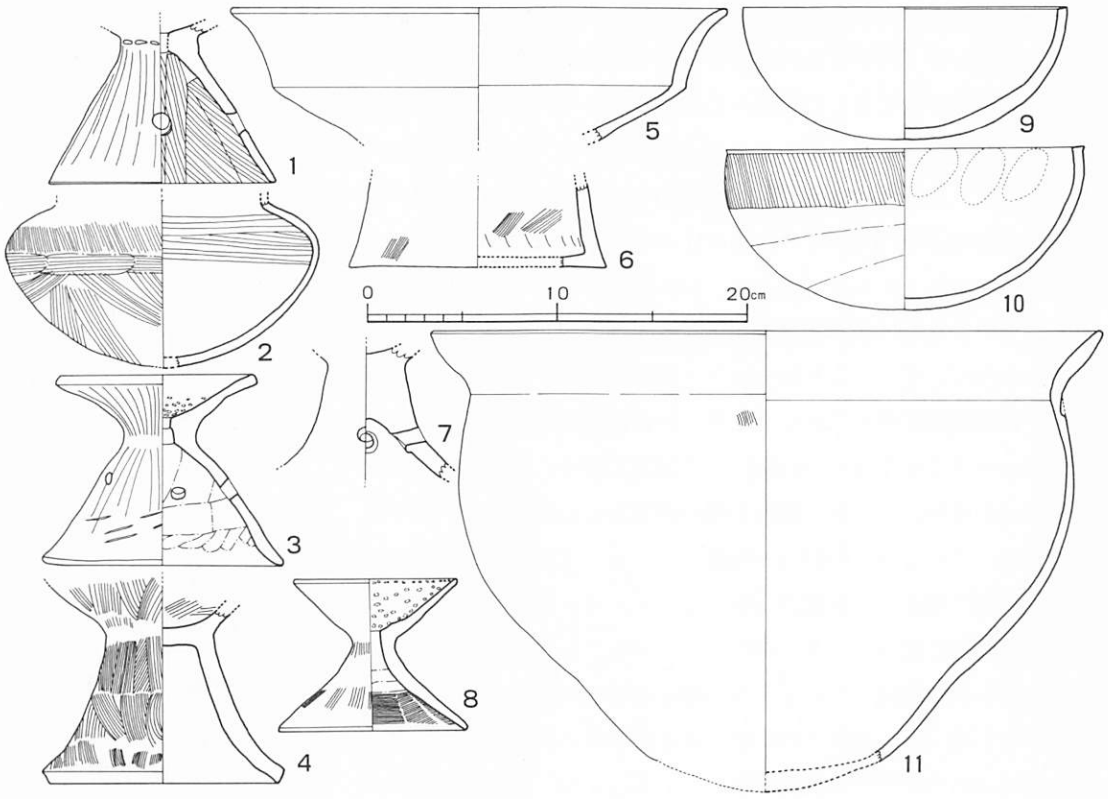
ことができる。5㎜～6㎜の間隔で見られるが、場所によっては器面調整の段階で消されている。この条痕は、タタキ目とは異なっているが、条痕か否かは判断できなかった。また、胴部中位から底部にかけては、ヘラ調整を行なっている。内面はナデ調整の後、ハケ目調整を施している。きめ細かな土で焼きも良い。

10　10号住居跡（図版5－1、第28図）

調査区中央部南側に位置するこの住居跡は25号住居跡西側、および南側壁面の一部を切っている。基本的には隅丸方形のプランを有するが、北側壁面において張り出しが見られ、変形したプランになっている。5m×4.5mの規模で主軸はN－36°－Eとなっている。東側壁面寄りに焼土の広がりが見られる。なおここからは自然遺物として果実の炭化物が出土した。



第28図　10号住居跡実測図



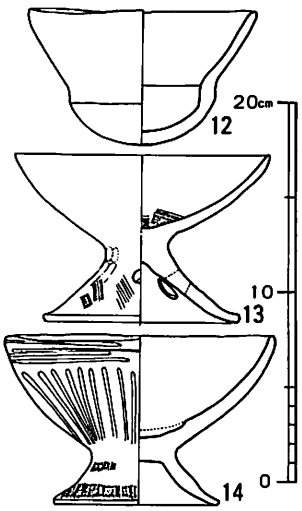
第 29 図　10 号 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

遺物（図版10―３～10、13―５・６、第29～31図）

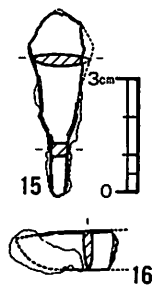
住居跡全体に散布した遺物は、あたかも残された如く出土し、完全な姿で見ることができる。

１・３・８は高坏状を呈し、中央部に円孔を穿った器台である。１は裾部に４個の円孔を配しているが、上部を欠している。外面はヘラ調整を施し、内面はハケ目調整を見ることができる。胎土はきめ細かな土を使用しており、焼成も非常に良く洗練された美しささえ感じることができる。３は口径10.2cm、裾部径12.7cm、高さ10.1cmを測り、裾部に５個の円孔を配している。受部は直線的に大きく開き、裾部はわずかにふくらみをもって広がっている。また、裾部下位においてはタタキ目をかすかに残し、全面ヨコナデをしたのち、ヘラ調整を施している。また、内面では受部でもヨコナデの後、ヘラ調整を行なっているが、小さな器面剝離が集中的に生じており、使用段階におけるものと判断される。裾部内面は、ヘラケズリが見られる。この土器も１と同様洗練された土器である。８は、１・３と比べ小型の器台である。口径8.5cm、裾径10cm、高さ８cmを測り、裾部に円孔を見ることはできない。受部は内湾しつつ開き、内面においては小さく、器面が剝離し、３と同様、使用時の破損と思われる。外面は全面ヘラ調整で、裾部内面は、ハケ目とヘラケズリを施している。２は、広口壺の胴部片である。最大径16.6cmを胴部上位に有し肩の張った土器である。胴部上位は細いハケ目で、下位は荒いハケ目を施している。内面は上位にハケ目を残している。砂粒を含む土を堅く焼き締めている。４は脚台で、上部を欠いている。裾部はあまり開かず高い脚である。外面

はハケ目調整で、上部内面にはタタキ目を見ることができる。脚内面においてはナデ調整に際して乱れた指紋が多く残されているところから、水分を含ませた指で仕上げている。5と7は高坏で、5は坏部中位に稜を有し口縁部へと広がっている。7は坏部と脚裾部を欠いているが裾部に4個の円孔を配している。6はジョッキ形土器の底部片である。内面にハケ目を残しているが、多くはナデ調整である。9と10は鉢で、9は口径17cm、高さ6.9cm。10は口径19.8cm、高さ8.5cmを測り、9は10に比べると小型になっている。口唇部は平坦に仕上げられているが、10は両端にふくらみが見られ、あたかもつまみあげたようである。口縁部は直口しているが、10はわずかに内向している。9は全面ナデ調整を施し、内面において器面の小さな剝離を見ることができる。10は口縁部直下はハケ目、その下はヘラケズリを施し、内面はナデ調整である。共に砂粒を含む土を堅く焼き締めている。11は大型の鉢である。口径35cm、高さは底部を欠いているが、約24.3cm程度になるものと思われる。口縁部は「く」字に開き、口唇部は山形を呈している。胴部は、中位に張りをもち底部に向って「S」字状にカーブしている。器面はハケ目調整後ヘラ調整を施している。きめ細かな胎土で、堅く焼き締められ1・3と同じく、洗練された美しさを感じる。13と14は台付鉢である。13は裾部に3個の円孔を配している。また、台部と鉢部の接合点が器高中位に位置し、14においては下部に位置している。13においてはハケ目調整が残されているが、14は全面ヘラ調整を行なっている。特に鉢部底においては器面の剝離が著しい。12は鉢で、坩とも言えるものである。この土器は、住居跡の西側から出土したもので、口縁部が全体の半分を占めている。胴部の張りは頸部直下に在り、浅い丸底となっている。頸部内面および肩部にわずかに稜線を認めることができる。器面は全面ヨコナデ調整を施し、砂粒を多く含み焼成は良くない。15は鉄鏃である。長さ4.7cmを測り、有茎柳葉式である。16は刀子片で現長2.6cmの切っ先を残すのみである。



第 30 図　10号住居跡出土遺物実測図



第 31 図　10号住居跡出土鉄器実測図

11　11号住居跡（第32図）

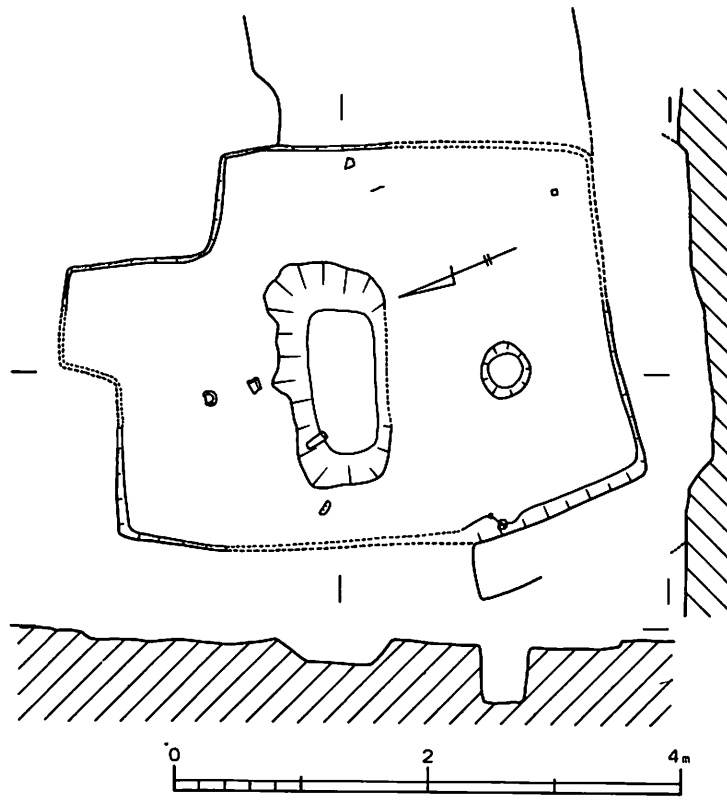
この住居跡のプランは張り出し部分が多く、変形した隅丸方形プランを呈している。中央部には長方形の掘り込みも検出された。

遺物（図版11－1・7、第33、34図）

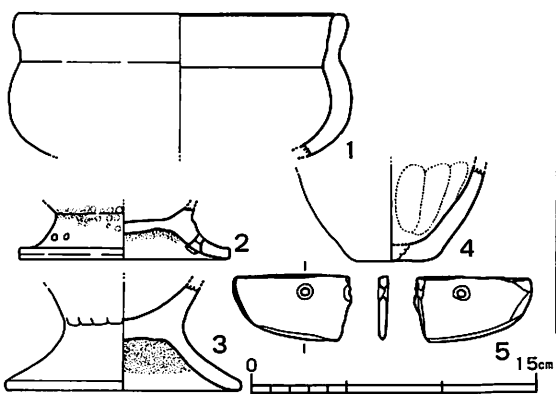
量的には少ないが、質的には良いものが出土している。中央部掘り込み内から鉄鏃を出土し、そ

の周辺に遺物の出土を見ることができる。

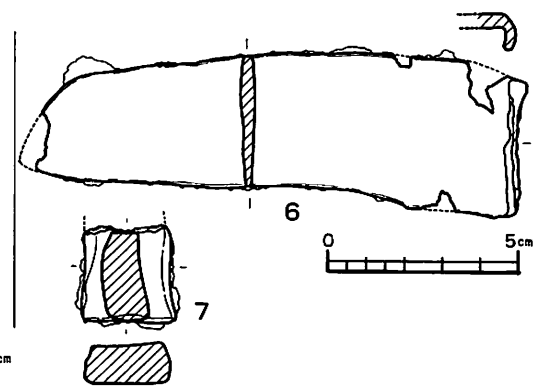
1は鉢で、口縁部は短く直口している。最大径は胴部中位に位置し、底部は丸底になるものと思われる。頸部内面には稜を有し、全面ハケ目を施した後、ヨコナデにより調整を行なっている。器壁も厚く、砂粒を多く含み、焼きも良いとは言えない。2は台付鉢の台部で、裾部は短く2個の円孔を3箇所に配している。器面は剝離が著しく全面に見ることができる。3も脚台で甕になるものと思われる。内面は砂粒が付着し、器面も荒くなっている。4は上部を欠損した壺で、砂粒を多く含む土で厚手に作られ、焼きも悪い。内面には指圧による痕跡を見ることができる。5は石庖丁で、円孔より欠いている。半月形の直線を背とし、刃部は弧を描いている。刃部の両端は荒砥仕上の片刃となり、中央部においては両刃となっている。背においては荒仕上であるが、端部に近い所に指当て状に研磨による凹みを観察することができる。石材は粘板岩である。6は鉄鎌である。長さ12.7cm、幅4cm、刃部長9.8cmを測る。基部は端部を折り曲げ、刃部はわずかに湾曲している。7は、扁平なサイコロ状をした鉄片である。厚手でわずかに反りを見ることができるが、器種は不明である。



第 32 図　11号住居跡実測図



第 33 図　11号住居跡出土遺物実測図



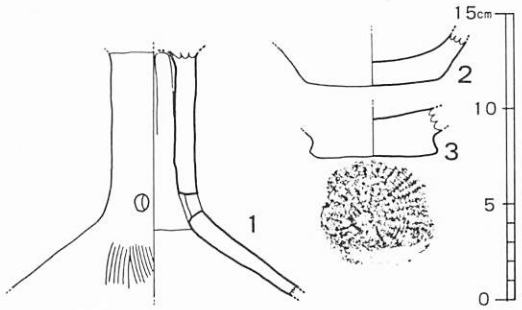
第 34 図　11号住居跡出土鉄器実測図

12　12号住居跡

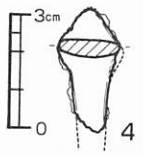
この住居跡は、14号住居跡から切られ、15号住居跡とも重複していたが、切り合い関係は不明であった。東側壁面は確認することができたが、他の壁面については検出するに至らなかった。東側壁面には、方形の張り出しが見られ、推定では隅丸方形プランで4.4m×4.4mの規模になるものと思われる。

遺物（図版11－2、第35、36図）

遺物は破片が多く、実測に耐え得る資料は4点に過ぎなかった。1は高坏で坏部と裾部を欠いている。柱状部は高く、裾へと広がる所に4個の円孔を配している。器面はナデ調整を主とし、裾部の一部でハケ目を見ることができる。2・3は底部で共に平底である。2は全面ナデ調整である。3は底部に網代痕を残している。底部中心から放射状に縦材が走り、横材は円形に走っている。この網物の材については不明であるが、底部のみに圧痕が見られるところから、土器製作段階で下敷きにしていたものと判断された。内面はヘラ状器具による調整を行なっている。4は鉄鏃で茎を欠いている。



第 35 図　12号住居跡出土遺物実測図



第 36 図　12号住居跡出土鉄器実測図

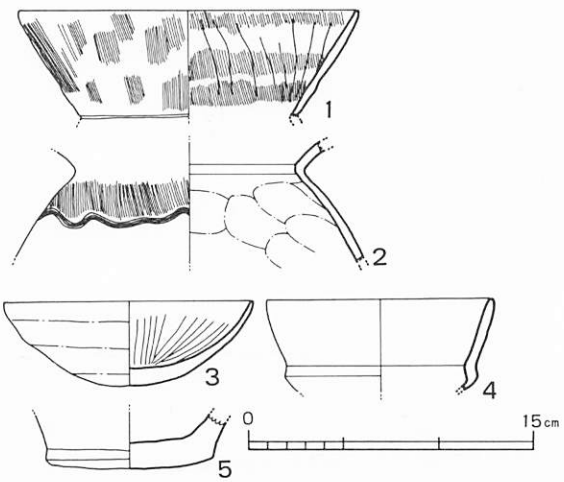
13　13号住居跡

24号住居跡を切り、14号住居跡とは重複しているが、その関係は明らかにすることはできなかった。しかし、遺物から考慮し、14号住居跡が先行するものと判断された。南側と東側壁面をわずかに残し、隅丸方形のプランを呈している。また、南東隅においては張り出しを見ることができた。5m×3.7mの規模になるものと思われる。

遺物（第37図）

遺物は少なく、散在した状態で出土している。

1は壺の口縁部片である。直線的に広がる口縁部で、頸部に沈線をめぐらしている。器面は全面ハケ目調整を施し、その後ヘラ調整を行なっている。器壁は薄く非常に堅く締っている。2は甕で、頸部から肩部にかけての



第 37 図　13号住居跡出土遺物実測図

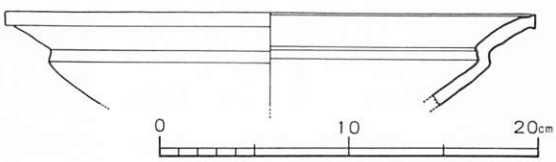
破片である。肩部には、波状文をめぐらし、ハケ目調整である。内面は口縁部においてはナデ調整で、胴部においてはヘラケズリである。３は鉢で、口径13cm、高さ4.5cmを測り、全面ナデ調整で、内面はその後ヘラ調整を施している。４は口縁部から頸部にかけての破片で、浅い胴部を有する。５は底部で平底となっている。砂粒を含んだ土で焼き上げている。

14　14号住居跡

この住居跡は12号住居跡を切り、13号住居跡から切られている。さらに15号住居跡と接している。13号住居跡との関係は先に述べたとおりであるが、その間には円形のピットが見られる。直径1.4mで深さ50cmの規模で、中には炭化物等が堆積しており貯蔵穴の可能性が強い。しかし、住居跡との関係は不明であった。北側と南側壁面を残していて3.7m×3.3mの隅丸方形プランになる。

遺物（第38図）

高坏片のみで、他は実測に耐え得る遺物の出土は見なかった。高坏は坏部のみの破片で、口縁部と胴部の接点においては、わずかながら直角に立ち上り直線的に口縁部が広がっている。口唇部は両端をつまみ上げ、全面ナデ調整である。



第 38 図　14号住居跡出土遺物実測図

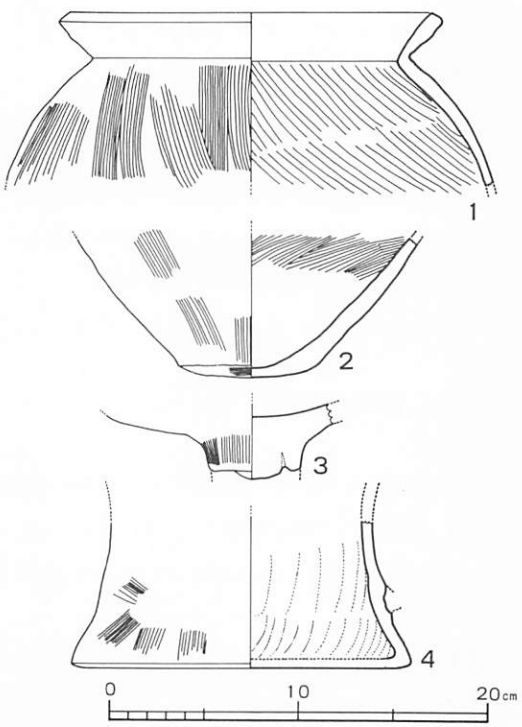
15　15号住居跡

12号住居跡と重複しており、その関係は判明できなかった。遺物からも時間差は認められず、短時間での切り合い関係が生じたものと判断される。この住居跡も西北隅に方形の張り出しが認められる。規模は、4.6m×4.5mの隅丸方形プランになるものと思われる。

遺物（第39、40図）

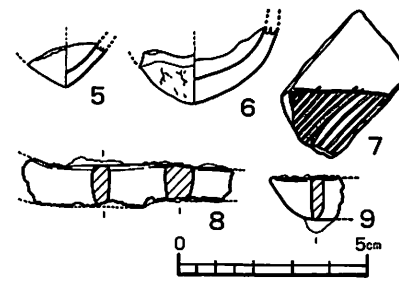
ここでは、ジョッキ形土器と共にミニチュア土器２点が出土している。また、器面に斜行沈線文を描く土器も出土し、祭祀的要素をもっている。

１は広口壺で、口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は短く、「く」字形に広がり肉厚となっている。器面は全面にハケ目を施しているが剝離が著しく、外面では、わずかにハケ



第 39 図　15号住居跡出土遺物実測図

目を認めることができる。砂粒を含む土で、焼成はあまり良い状態ではない。2は壺の底部で平底となっている。平底といっても、わずかに膨らんでいて安定性は少ないようだ。器面は、ハケ目調整後ナデを行なっている。砂粒の少ない胎土で、焼き締っている。3は高坏で口縁部、脚部を欠いている。坏部と脚部の接合点においては、坏部から脚部内へ粘土を詰め込んでいることが観察できる。さらに、器面はハケ目調整を行なっていて、坏内面においてもハケ目調整を施している。4は、ジョッキ形土器で、口縁部を欠いていて、器高は不明である。胴部には幅広把手が付くが、剝離しており残っていない。把手は本体を作り、その後、貼付けていて、接合面は粘土で、周辺を補強している。外面はナデ調整で、把手接合面の周辺において、ハケ調整を施している。内面には胴部をしぼった痕がみられる。焼きは非常に良く、器面でわずかに砂粒が見られる。5・6はミニチュア土器で、5は尖底部のみで、16は丸底となっている。砂粒を含む土で、焼成は良い。7は器面にヘラ描きの斜行文を施している。13本の沈線は平行に走り、横線で区画している。なお、この土器は小片ではあるが、ほぼ扁平で、板状をなしているものと思われる。そのため、器種については判断しかねている。内面にはハケ目を、外面はヘラ調整を施していて、文様を施した面が外になるのは明らかである。焼成は良く、堅く焼き締っている。8と9は鉄器で、共に刀子になる。恐らく同一個体になるものと思われる。



第 40 図　15号住居跡出土ミニチュア土器、鉄器実測図

16　16号住居跡

3号住居跡と接するこの住居跡は、調査区中央部の北端に位置し、住居跡の大半が調査区外へ延びている。南側壁面と、東西壁面の端部を残すこの住居跡は隅丸方形プランを呈し、一辺5m程度になるものと思われる。また、3号住居跡との関係については、重複した部分にピットが掘り込まれているため、前後関係は不明である。

さらに遺物も出土数が、きわめて少なく、小片のため実測することができなかった。

17　17号住居跡（第41図）

6号住居跡を切るこの住居跡は、北側の大半を調査区外へと延ばしている。そのため、南側壁面と東、西壁面の一部を検出するのみであった。

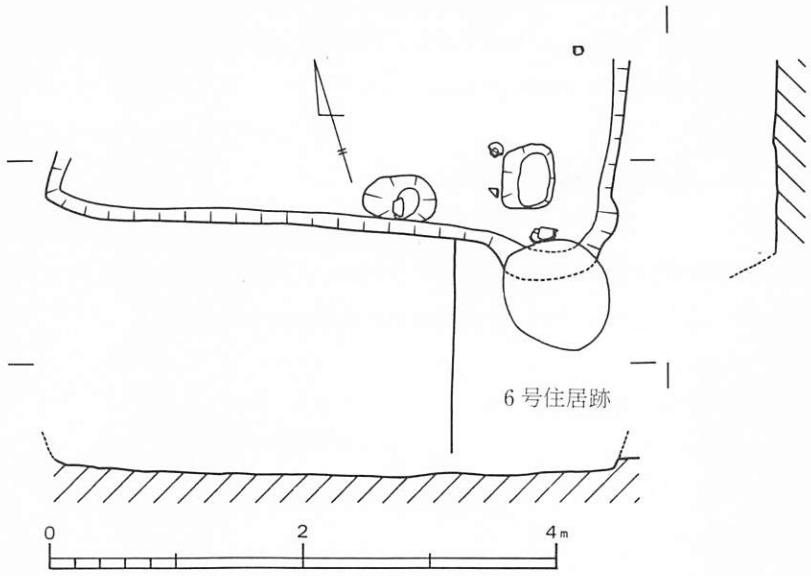
一辺4.6cmを測り、隅丸方形のプランになるものと思われる。住居跡の南東隅においては、ピットを配している。

遺物（図版11－3・4、第42図）

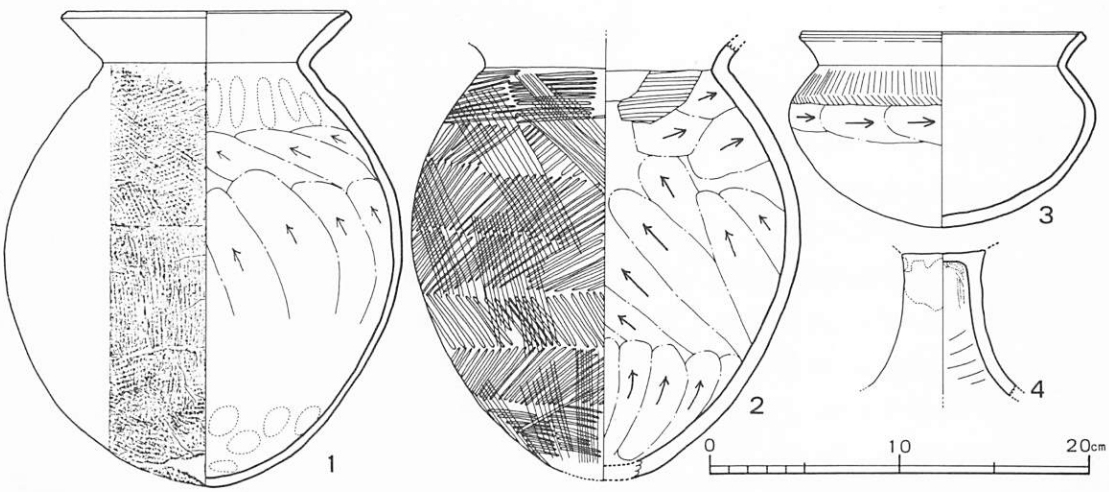
遺物は、住居跡南東隅に散在した状態で出土した。

1と2は甕である。1は口縁部を「く」字に開き、口唇部は内面をつまみ上げている。また、口

縁部中位においては肉厚となり、外面に粘土接合面を観察することができる。口径16.4cm、高さ25.2cmを測り、最大径20.9cmは胴部中位に有し、丸味を帯びた倒卵形を呈している。外面、頸部直下から肩部にかけて右下がりのタタキを施し、その後、ハケ目を行なっている。さらに、底部近くにおいても、右上がりのタタキをかき消すようにハケ目を施している。内面は口縁部においてはヨコナデ、頸部以下はヘラケズリを行なっている。また、器面全体にススの付着が著しい。2は口縁部と底部を欠いているため器高等不明だが、最大径20.4cmを胴部中位に有し、底部は尖り気味で倒卵形を呈している。外面頸部直下から肩部にかけては、水平方向のタタキがあり、その下から胴部中位にかけては右上がりのタタキを、さらにその下に右下がりのタタキ、底部近くにおいては、右上がりのタタキを見ることができる。タタキの上からは、ハケ目を施している。内面では、頸部近くにハケ目を見るが、ヘラケズリによって、一部分を残すのみである。1・2共砂粒を含む土で焼きは良い。3は鉢で、口径14.5cm、高さ10.4cmを測り、最大径16.1cmは、胴部上位に位置している。口縁部は短く、口唇



第 41 図 17号住居跡実測図



第 42 図 17 号 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

部においては浅い凹みが見られ、内部を少しつまみ上げている。肩部はハケ目を施し、胴部においてはヘラケズリを見ることができる。内面はナデ調整である。砂粒を含み焼きは良くない。4は高坏で坏部と脚裾部を欠いている。

18　18号住居跡（第43図）

この住居跡は壁面の検出に困難をきわめた。床面は非常に堅くなっていたが、壁面の残りが少なく、ついに、完全なプランをつかむことはできなかった。

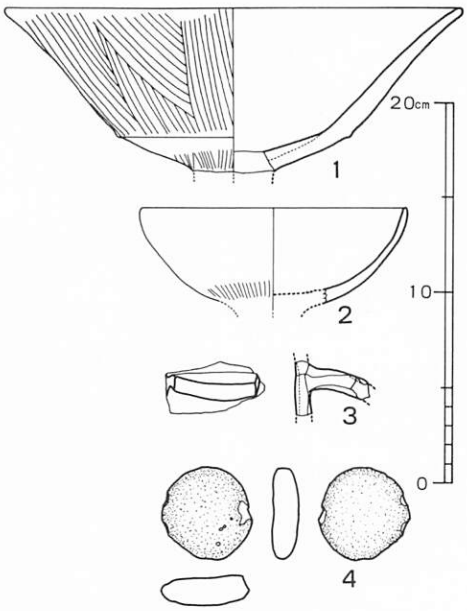


第43図　18号住居跡実測図

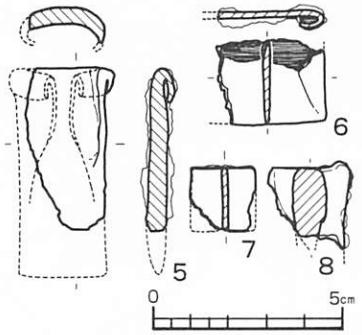
遺物（図版11－6・7、第44、45図）

出土した遺物は少ないが、特徴ある遺物ばかりであった。

1は高坏で脚部を欠いている。この高坏は口縁部が非常に大きく、胴部がきわめて浅くなっている。また、脚部との接合面から剝離しているため、坏部中心に円孔が見られる。この部分は粘土貼合せ面が見られ、接合に際し補強したものと思われる。口縁部と坏部との間には稜を有し、器面は全面荒いハケ目を施し、坏部下位においては、ヘラ調整によりかき消している。内面においては、縦方向のヘラ調整を見ることができる。2は台付鉢で、鉢部の破片である。この土器は、現在3片の接合資料であるが、そのうち1点のみに火を受け、ススの付着を受けている。他の2点には、まったくその痕跡は認められないところから、土器破損後火を受けたものと判断された。3は、ジョッキ形土器の幅広把手で、本体との接合面のみの破片である。把手は中央部が凹み湾曲している。



第 44 図　18号住居跡出土遺物実測図



第 45 図　18号住居跡出土鉄器実測図

4 は扁平な礫の石錘である。両端にノッチを加えたもので角閃石安山岩を使用している。重さ40ｇを測る。5～8 は鉄器である。5 は、鉄斧片である。基部を折り返し、袋部も端部を折り返すものである。6 は手鎌片で端部を折り返している。また、基部には横方向の、木質の付着が見られる。7・8 は、鉄片で器種は不明である。

19　19号住居跡（第46図）

調査区中央部南端に位置するこの住居跡は、北側と東側の壁面を残し、西側においては検出することができなかった。さらに、住居跡内に石蓋土壙墓が１基作られ、住居跡より新しいと判断された。当初、石蓋土壙墓の外にめぐる浅い土壙とも考えたが、壁面と石蓋土壙墓の主軸が異なり、住居跡になるものと判断した。住居跡は隅丸方形プランとなり、ベッド状遺構を見ることができる。

遺物（第47、48図）

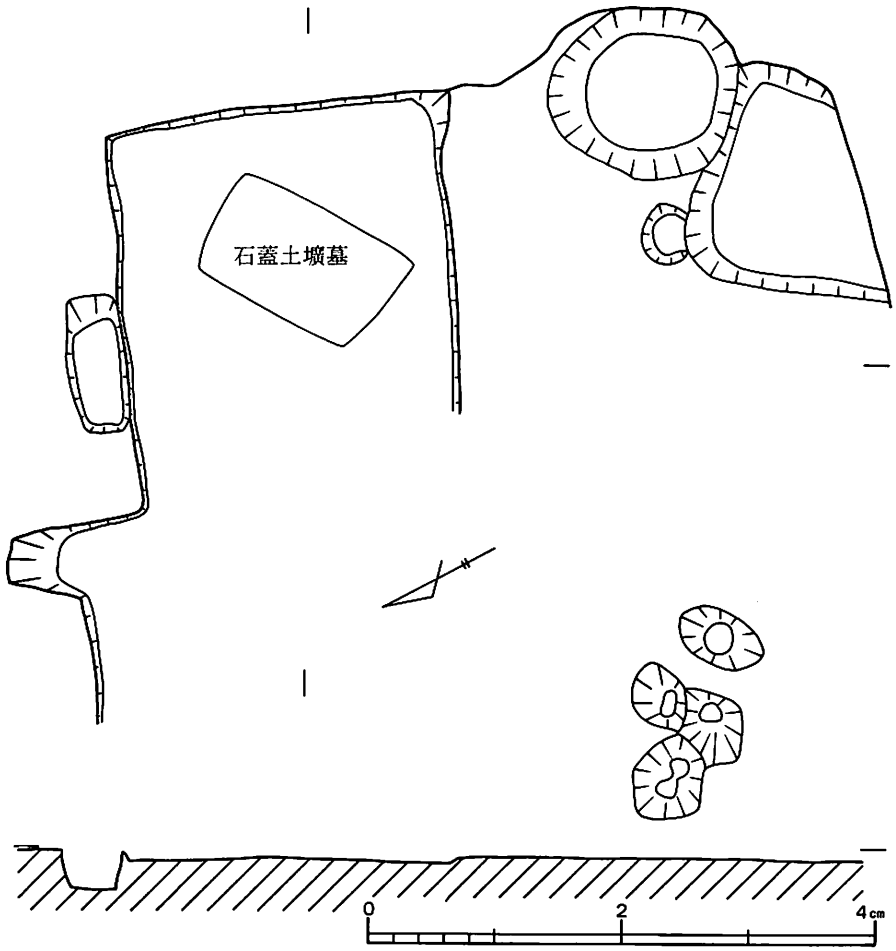
出土した遺物は少ない。１はミニチュア土器で、中心部に小さな円孔を見ることができる。外面は、ヘラ調整が見られ、内面においてはハケ目と、しぼった痕跡を見ることができる。砂粒を含まず、焼きも良い。２は、壺の底部で丸底となっている。器面は、ハケ目調整を施している。砂粒を含み、あまり良い焼きとは言えない。

20　20号住居跡

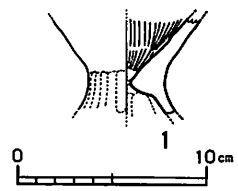
調査区中央部北寄りの位置に在るこの住居跡は、21号住居跡を切っている。約4.7m×3.5mの規模をもち、隅丸方形のプランになるが、北側壁面において方形の張り出しが見られた。

遺物（第49、50図）

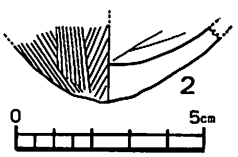
１は高坏で坏部の破片である。口縁部は短く開き、わずかな頸部は稜を有し、深い胴部へと続い



第 46 図　19号住居跡実測図

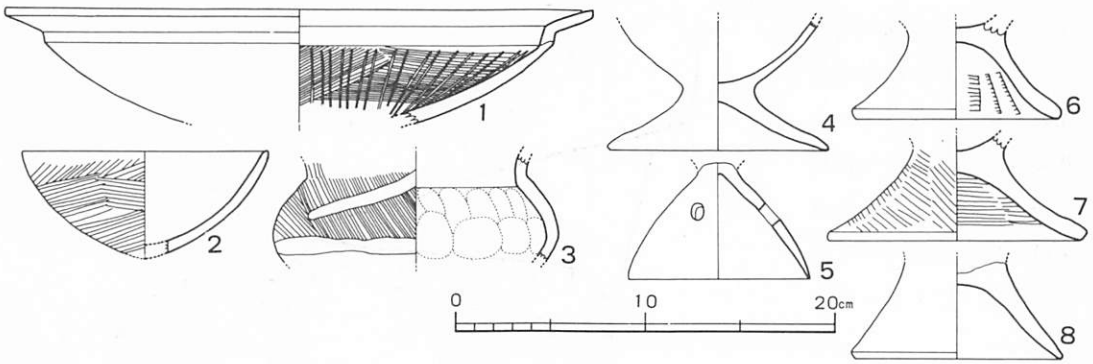


第 47 図　19号住居跡出土遺物実測図



第 48 図　19号住居跡出土遺物実測図

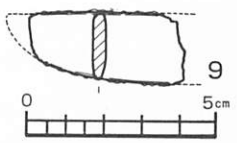
ている。外面は全面ナデ調整を行なっている。胴部内面は、ハケ目調整後、縦方向のヘラ調整を施している。砂粒を含む土で、焼きはあまり良くない。2は鉢で、器面はハケ目を施して、口縁部はヨコナデ調整を行なっている。砂粒を含む土で焼き締められている。3は広口壺で、最大径を胴部中位に有している。口縁部は欠いているが、短く外反するものと思われる。頸部内面においては、指頭圧痕を残し、外面においては密なハケ目を施している。4は台付鉢で、口縁部を欠いている。裾部を大きく開き、外面と鉢内面には黒漆を塗っている。5も台付鉢で鉢部を欠いている。裾部には3個の円孔を配し、外面は横方向のヘラ調整を行なっている。4・5もきめ細かな土を使用し、焼成も良い。6・7・8は、脚台で



第 49 図 20 号 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

上部は甕になるものと思われる。9は、鉄器で刀子破片である。

21　21号住居跡



第 50 図 20号住居跡出土鉄器実測図

20号住居跡に、東側壁面を切られ、北側壁面は検出することができなかった。住居跡は3ｍ×3ｍの規模で残され、隅丸方形になるものと思われる。また、遺物の出土も小片のみで実測しうるものを見なかった。

22　22号住居跡（第51図）

2号住居跡によって、東側を切られたこの住居跡は、西側と北側の壁面の一部を残している。また、壁面の確認が困難で、明瞭なプランを検出することができなかった。

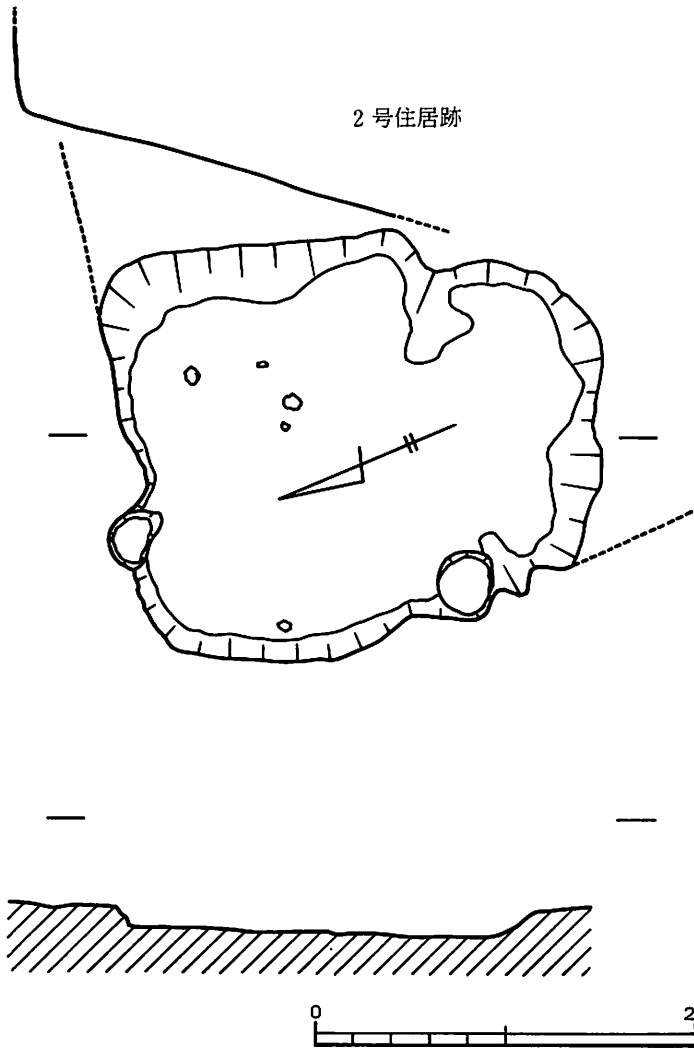
遺物（図版7－2・9－1、2、第9図－18、第11図）

出土した遺物は少なく、さらに破片ばかりで実測に耐え得るものがわずか2点であった。しかし2点とも祭祀資料とも言えるもので、この住居跡の性格を暗示しているようだ。第11図は、頭部を欠損した土製勾玉の破片である。きめ細かな土で、よく焼かれている。第12図は、熊本県下益城郡城南町隈庄出土の台付舟形[註1]土器に基本的に類似している。この土器は、口縁部から底部にかけて半分を欠損しているため、脚台が存在したか否かについては不明である。しかし、現況から推察するに脚台は無いものと思われる。胴部中位には、先端を欠いた長径1.5cm、短径1.3cmの注口部を付け、径3㎜の孔を穿っている。この孔は外から内に向って穿ったため、内側において粘土の盛り上がりが見られる。この土器の内面を観察するに、胴部先端から口縁部に向って、粘土貼合せの痕跡が見られ、さらに、器面ナデ調整が、その貼合せ部分にくい込んでいることが観察された。

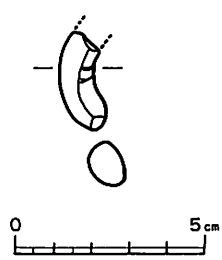
このことから、この土器を作る工程として、粘土を薄板状に広げ、ナデにより器面の整形を行ない、その後、端部をつまみ合せるように接合したものと判断される。接合に際しては、水分を含ませた指先で圧力を加えており、胴部先端に行くほど整形がまずく接合面を残し、口縁部近くに

なると貼合せの線が消されている。また、全体に乱れた指紋を残している。外面はハケ目調整を施している。砂粒を含んだ土を良く焼き締めていて、器壁も薄く仕上がっている。

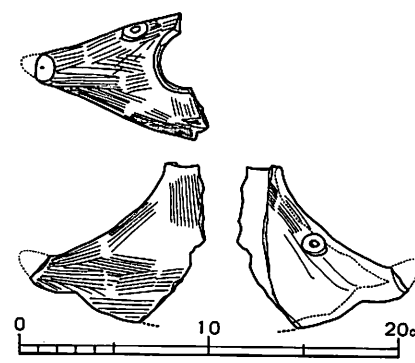
用途については、胴部中位に注口部を残しているところから、注口土器とも考えられるが、注口土器としては、先に述べた宮地出土の資料や長野県飯山市岡峰[註2]遺跡出土の資料があり、これらを見れば、注口部は胴部先端部に孔を穿っている。しかし、この土器は胴部中位、それも横についているため、注口土器としての用途に耐えるか疑問が残るところである。先端部に在る場合は、土器を傾け注ぐ時、口縁部と注口部の位置は上下にならび、その差位は最大のものとなる。この場合口縁部から液体があふれることは生じないのである。しかし、この土器は胴部中位、それも側面に注口部があるところから、土器を傾け注ぐ場合、注口部より口縁部が前に出なければならず、また、そ



第 51 図　22号住居跡実測図

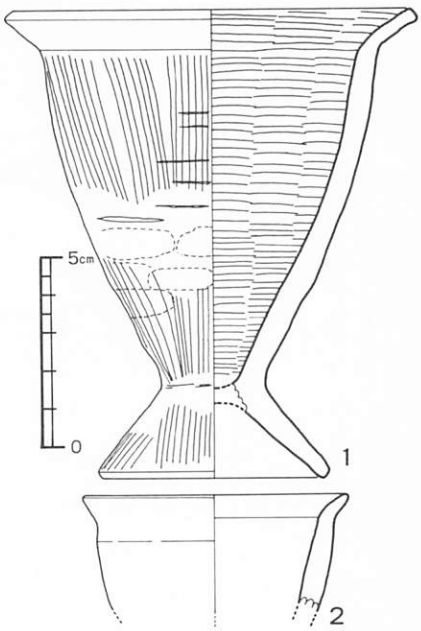


第 52 図　22号住居跡出土土製勾玉実測図



第 53 図　22号住居跡出土異形土器実測図

の差位も正常な位置にある時が最大で、傾けるほど水平に近くなるのである。とすれば、液体を注ぐ時、口縁部よりあふれる可能性が十分考えられ、注口土器としての用途には耐えないものと判断される。現在この土器の用途を考える場合、オカリナ状土笛として使用した可能性が最も強い。なお、類似資料として大阪府枚方市鷹塚山遺跡出土の異形土器[註3]があるが、手捏で孔も見られず、用途としては異なるものと思われる。土笛は、綾羅木郷遺跡等で出土しており、卵形を呈しているものが知られている。それらは吹き口が1個と音孔を4個有しており、このオカリナ形の土器も外観こそ異なっているが、機能的には共通点を多く含んでいると言えよう。



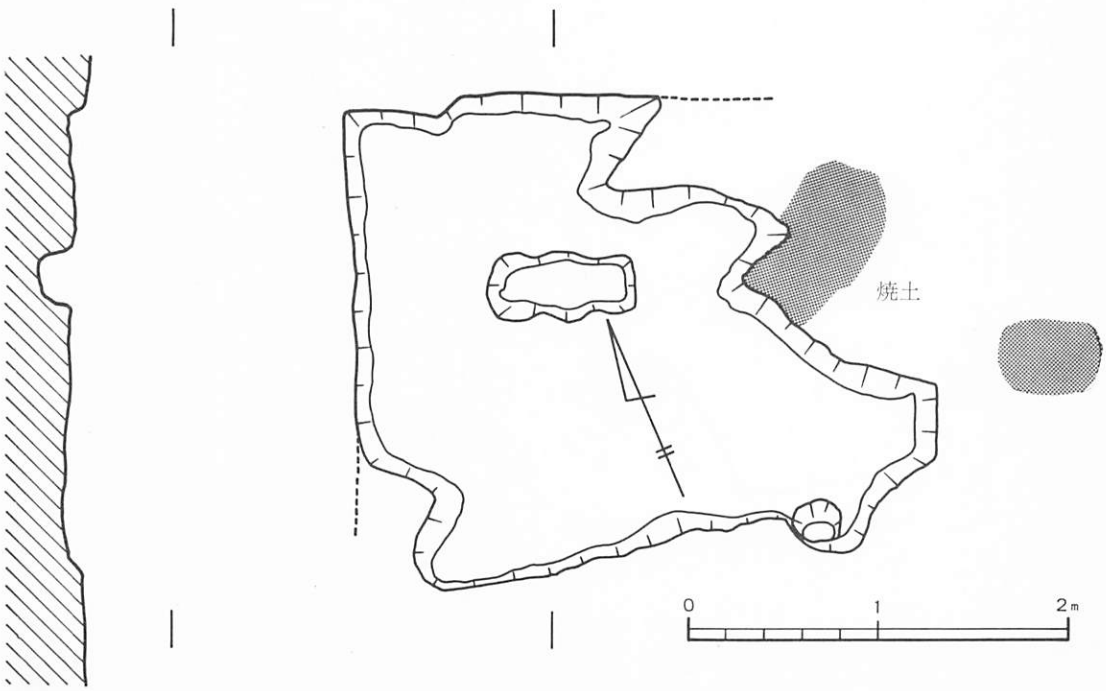
第 54 図　23号住居跡出土遺物実測図

23　23号住居跡（第54図）

1号住居跡と2号・22号住居跡に挟まれて位置するこの住居跡は、北西隅を残す程度で、壁面を確認することができた。また、住居跡内には二箇所に焼土が見られる。

遺物（図版11－5、第55図）

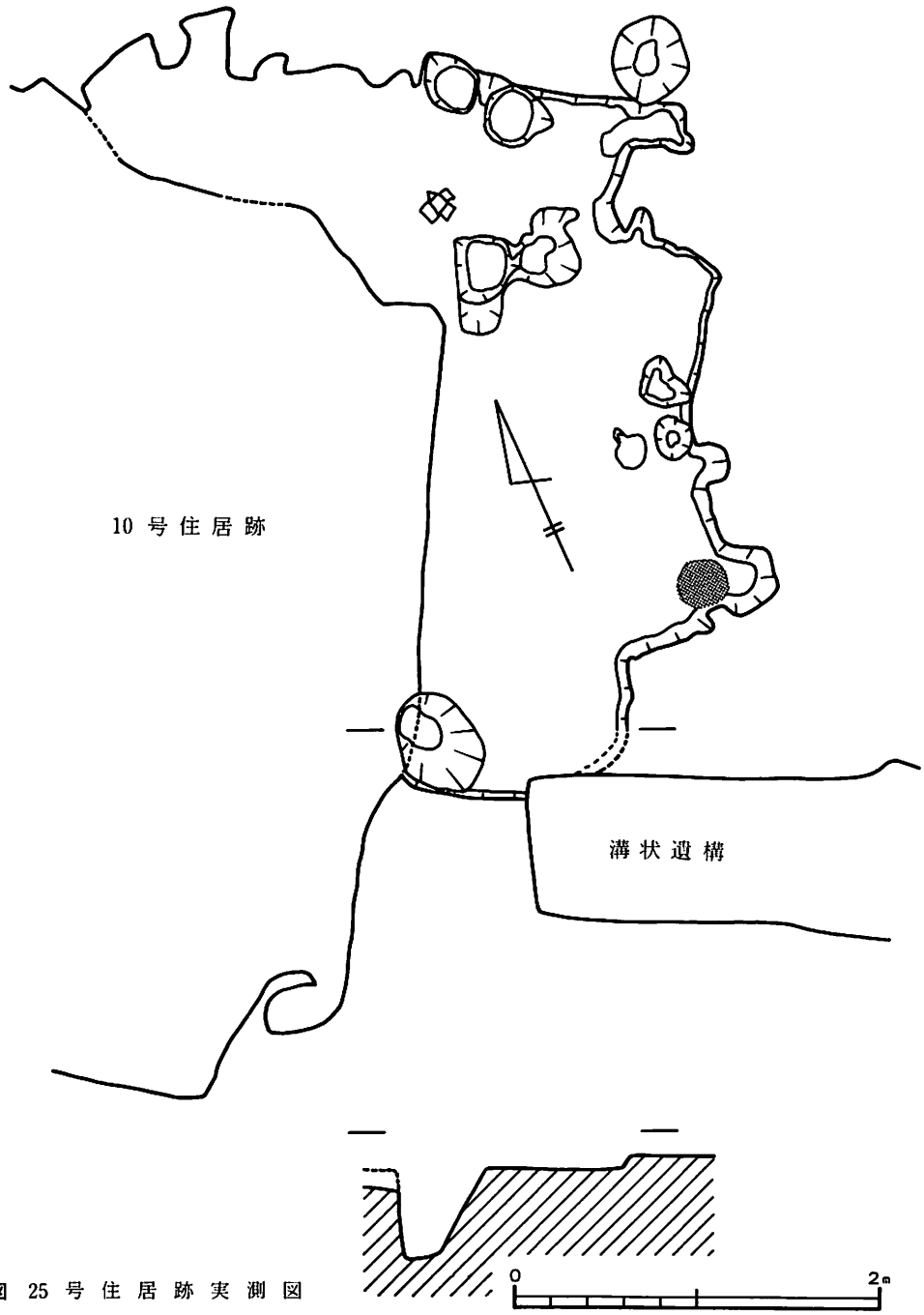
ミニチュア土器2点を出土している。22号住居跡と



第 55 図　23 号 住 居 跡 実 測 図

同様、祭祀関係の資料である。

1は、脚付甕のミニチュアである。口径10.4cm、高さ12.4cmを測り、器面にはわずかにタタキ目を残し、その後、ハケ目調整を施している。内面は全面ハケ目が施されている。また、胴部下位においては指圧痕を残している。2は鉢の破片で、口径71cmを測り、底部を欠いている。口縁部はわずかに外反し、ヨコナデ調整を施している。



第 56 図　25 号 住 居 跡 実 測 図

24　24号住居跡

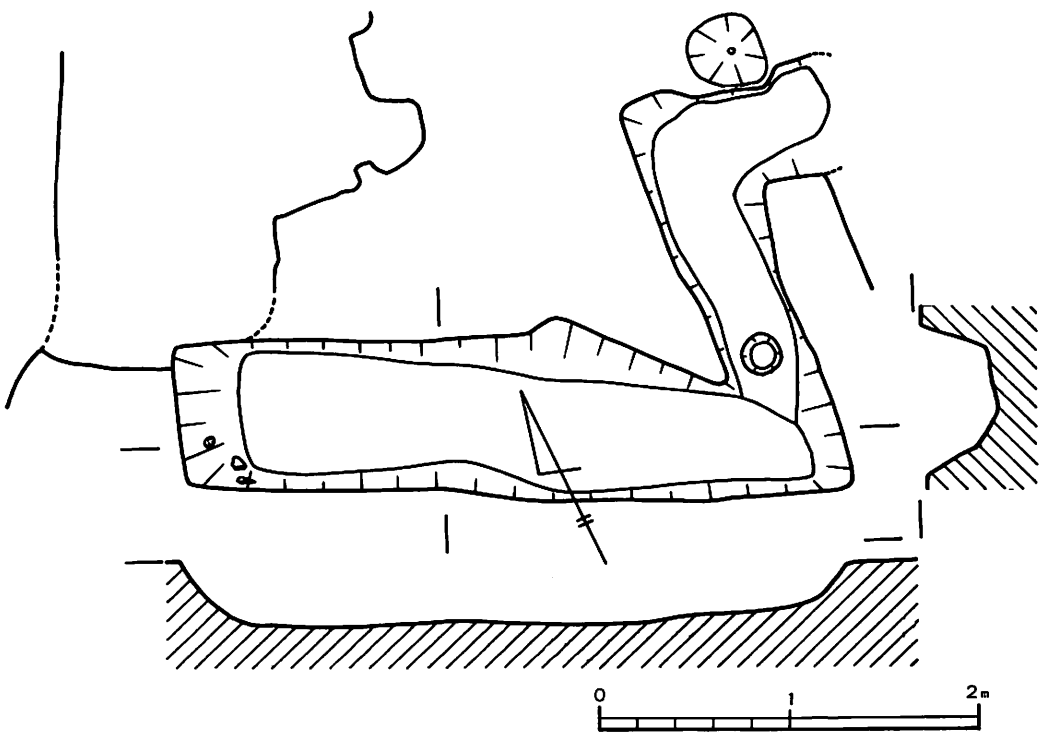
13号住居跡に南側半分を切られたこの住居跡は、北側と西側壁面の一部と東側の壁面を残している。壁面の検出も土層の変化が見分けにくく、困難をきわめた。この住居跡は隅丸方形のプランで、4.7m×4.2mの規模になるものと思われる。遺物の出土も小片ばかりで、量的には少なかった。なお、住居跡中心部に円形貯蔵穴が掘られているが、住居跡とは同伴しないものと思われた。

25　25号住居跡（第56図）

10号住居跡に西側の大半を切られたこの住居跡は、北側と東側の壁面を残すのみである。また、それらの壁面も不整形な形で検出されている。住居跡の規模は、3.8m×3.5m程度の隅丸方形のプランになるものと思われる。また、住居跡は東側に寄って貯蔵穴が見られるが、住居跡との関連が疑問視されたので、別途記載した。住居内での遺物の出土は見られなかった。

26　溝状遺構（第57図）

11号住居跡と25号住居跡の間に「Z」字状に延びるU字溝が検出された。長い溝で、3.5m、幅0.8

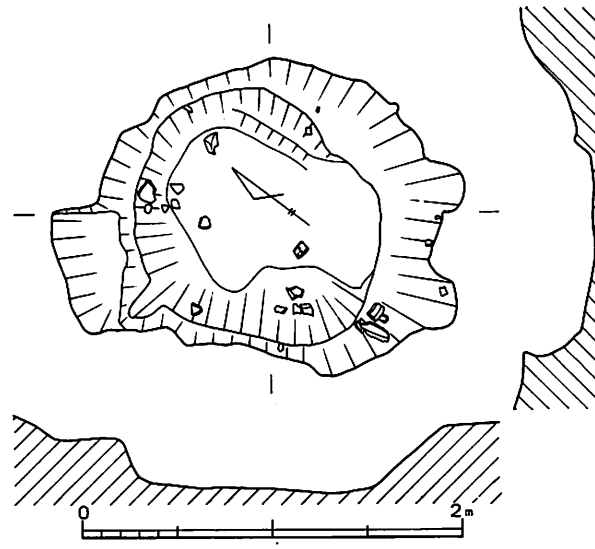


第57図　溝　実　測　図

m、深さ0.4mを測り、遺物の出土は少なかった。溝の性格については不明である。

27　貯蔵穴（第58図）

直径2mの円形に深さ30cmの規模で、24号住居跡内に掘られたこの貯蔵穴は、13・14号住居跡で見られたように、住居跡と伴わないものが多く、住居跡内に、貯蔵穴を有する例が少ない。この場合、24号住居跡との関連性は少ないものと判断される。擂鉢形をした内部には遺物が散在し、破片が多く出土している。

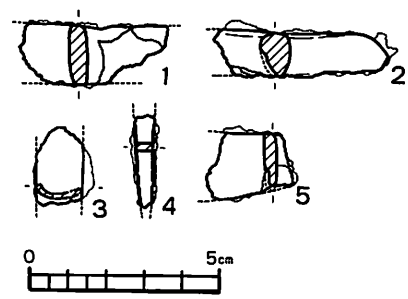


第 58 図　貯蔵穴実測図

遺物（第59図）

いずれも鉄片で、器種の判明するものが見られない。

1は両端を欠き、錆の付着が著しく、器種の判断が難しい。刃部の形成は見られないが、刀子の茎になるものと思われる。2は、断面が三角形を呈して、先端部を欠いている。器種不明。3は両端を欠いているが、断面が湾曲しているところから、鉈の破片であろう。4は、鉄鏃片で茎になる。また、5については器種不明である。



第 59 図　貯蔵穴出土鉄器実測図

28　巴形銅器（図版6、第60図）

2号住居跡の東側に1m離れて楕円形のピットが在る。長径3.5m、短径1.7mの規模で擂鉢状を呈していた。長軸をほぼ東西に向け、その中心にほど近い地点で巴形銅器が出土した。ただ、写真（図版6－2）で見られるように、ピット上面から出土しており、ピット埋土堆積後、置かれたものと推察される。このことから、巴形銅器とこのピットとの関係については疑問が残るところである。

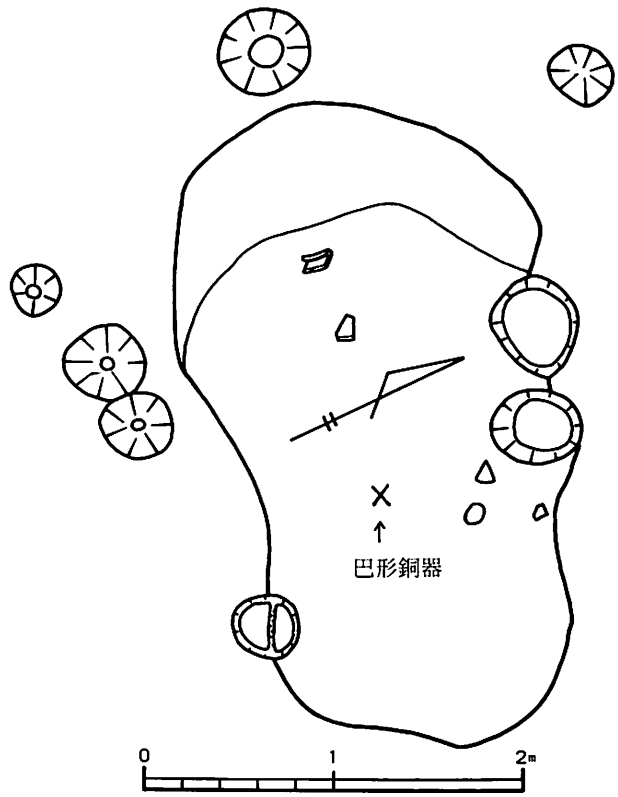
巴形銅器は裏面を上にし、さらに、その面を西に向けて、斜めに立てかけた状態で検出された。

また、全面にイネ科植物の繊維が付着しており、特に表面においては、明確に認めることができる（図版92－1）。このことは、巴形銅器を置いた際、意識的に植物で巻いたものと推察することができよう。

巴形銅器の出土状態と酷似する例を、第Ⅳ次調査時に出土した小形仿製内行花文鏡で見ることができる（図版73－2）。これらは、共に面を西に向け、斜めの状態で検出されており、放置した際の祭祀的意識が作用しているものと推察される。

遺物（図版91・92、第61、62図）

巴形銅器は直径12.3cm、高さ1.8cmを測り、截頭円錐形の台座に左向きの脚を７本配している。脚の先端に一部器面本来の光沢が見られるが、他の面はすでに光沢を失い、土と植物性繊維の付着が著しい。特に、裏面、脚基部においては錆による器面の剝離が生じている。しかし、青銅製品としての保存状況は良好と言えよう。



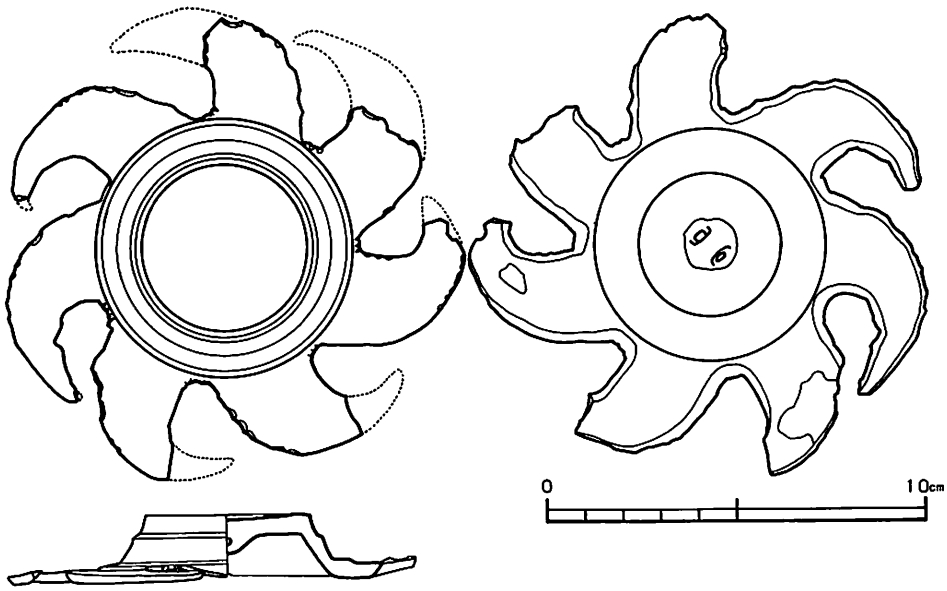
第 60 図　巴形銅器出土地区実測図

台座　直径6.7cm、高さ0.9㎜の円座が７本の脚を結ぶように一段高くめぐっており、その上に截頭円錐形の台座が置かれている。台座は下段で、直径5.7cm、上段で直径4.3cm、高さ1.2cmを測り、台座中位に一条の段をめぐらしている。台座の上面は、ほぼ正円に近いが、わずかに歪んでいる。また、上面は外周から５㎜までは平坦で、そこから中心部に向って1.3㎜の深さで凹んでいる。裏面は中空で、ほぼ中心部に1.4cm×1.5cmの鈕を配し、直径２㎜の孔を穿っており、鏡に見られるそれと同じ形式である。

脚　左向きの７本の脚は、基部において幅2.7cm～2.5cmを測る。脚は円座から、ほぼ直角に1.2cm程伸び、そこから左へ曲がり、極端に細くなるのである。また、裏面の中央が、わずかに凹んでいる。周囲は、裏面からの剝離による片刃の刃部状を呈している。しかし、よく観察すると脚内縁において刃部先端がひだ状をなす部分がある。これは製造段階において生じたもので、刃部とするための加工の痕跡は認めることができなかった。

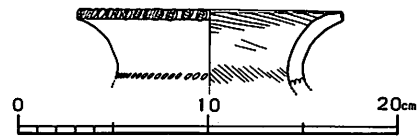
７本の脚の先端は全て欠損しているが、特にその中でも４本については、単に折れた時に生じる直線的な切断面ではなく、ちぎれたような状態で、切断面に凹凸が多く見られる。さらに、これらの脚部は、切断部の右側（外側）がめくれるように上へ反り返っており、その部分には小さな凹凸が密集して見られる。（図版92－４）これは、明らかに衝撃を加えられたものである。

また、他の脚においても、外縁に刃こぼれ状の剝離を見ることができる。脚と脚の間には、４～５本のシャープな刻目を見ることができる。（図版92－５）幅は0.2㎜～0.1㎜で、鋭利な刃物で刻まれたものと判断された。これは、巴形銅器を製造し、脚部の整形を行なった際、生じた痕跡であろうとも推察されるが、現段階においては判断しかねている。７本の脚のうち、２本について、鋳かけを見ることができる。（図版92－２・３）このことについては、後藤直氏の指摘[註4]もあるが、気



第 61 図　巴 形 銅 器 実 測 図

泡の痕跡や銅の付着といった表現で、製作技術の問題として注目していたところ[註5]である。第61図に見られるように、2箇所の鋳かけは、裏面において明確に見ることができる。1箇所は脚裏面中位に長さ、1.1cm、幅0.6cmの銅の盛り上がりが見られる。これが表面においては、長さ1cm、幅0.4cmにわたり、かすかに充てんの痕を認めることができる。



第 62 図　巴形銅器周辺出土遺物実測図

さらに、もう一箇所においては、長さ1.7cm、幅1.4cmにわたり、鋳かけを行なっている。脚外側に近い部分においては、鋳かけの足[註6]がかりとなる円形の穿孔を見ることができる。表面においては、十分に補修できず、気泡が入ったような凹みを見ることができる。

また、台座中位においても凹みが見られる。これらのことから、製造技術に関しては、未熟な点も見られ、優れた製品とは言えないだろう。

用途　先に述べた如く、脚部外縁に見られる凹凸と、先端部欠損の状況を考える場合、古墳時代の使用例[註7]から、盾飾り金具と推察している現況に対し、多少疑問が残るところであるので、詳細については項を譲ることとする。

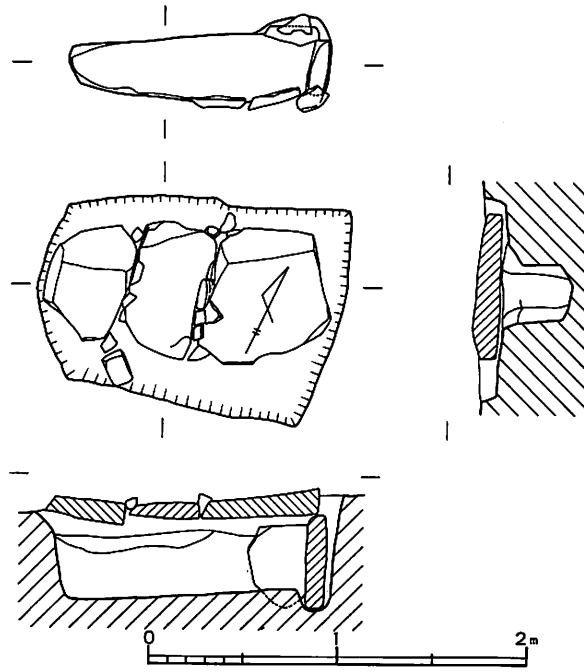
第62図は、巴形銅器が出土したピット内より検出された壺の口縁部片である。口唇部と頸部に刻目を施し、口唇部のそれには、三条の線を見ることができる。器面は、全面ナデ調整で、内面にハケ目を残している。

29　石蓋土壙墓（図版５－２、第63図）

19号住居跡内に築かれたこの石蓋土壙墓は、安山岩と凝灰岩の割石を利用して作られている。

周囲は長さ1.6m、幅1.1 m、深さ0.1mに土壙を掘り、その中に石蓋土壙墓を配している。石蓋土壙墓は主軸をN－66°－Eにとり、内測で長さ1.27m、幅0.3m、深さ0.4mを測る。

石蓋は安山岩と凝灰岩の板石を３枚使用し、それらの間には凝灰岩の小片をかませていた。土壙内は、東側端石と側石の一部に計４枚の石材を使用し、他の部分には石材を使用した痕跡もなく、石棺と土壙墓の中間形態をとっている。副葬品の検出はなかったが、埋土中に土器片が多く、流入していた。なお、山鹿市周辺においては、竜宮石棺[註8]群、中尾石棺[註9]群、東鍋田[註10]、成竹遺跡、粕道遺跡[註11]の５箇所で、石蓋土壙墓を見ることができる。

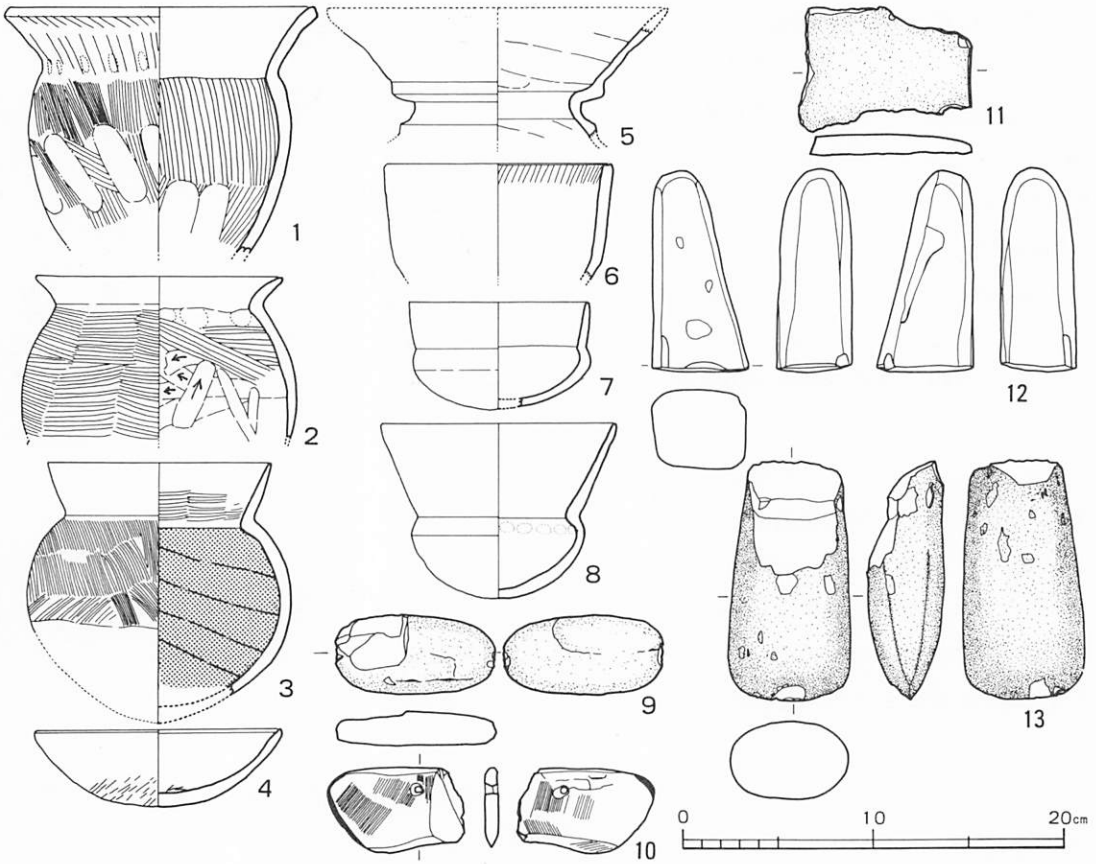


第 63 図　石蓋土壙墓実測図

30　遺構に伴わない遺物（図版12・13、第64～67図）

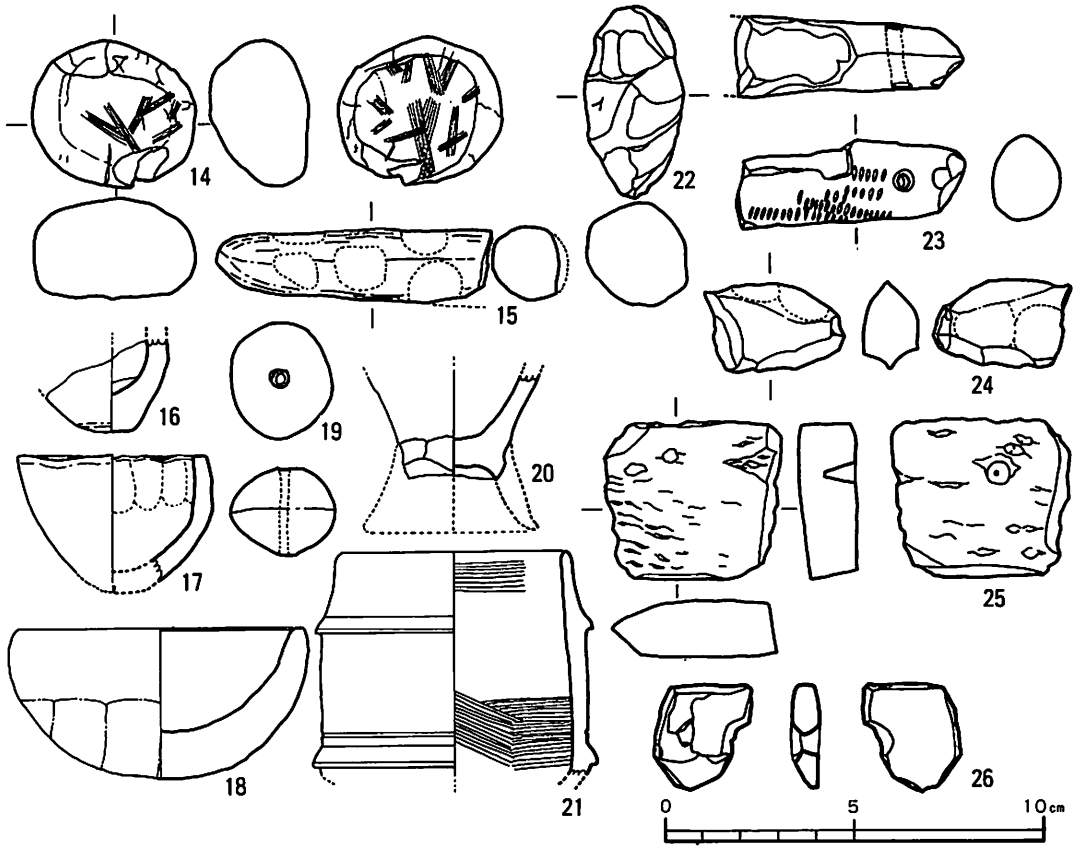
ここでは、調査区内より出土した遺物で、遺構に伴わないものを、主にとり上げた。

１は甕で、口縁部が大きく開き、肩部の張りの少ない土器で、底部を欠いている。口縁部には、荒いハケ目をわずかに残し、ヨコナデ調整を行なっている。胴部外面には密なハケ目を施し、中位ではヘラケズリを行なっている。内面も、荒いハケ目を施し、下部ではヘラケズリを行なっている。甕としては小形で、手捏的土器である。２と３は壺である。２は、外面にタタキ目を施し、内面では、ハケ目とヘラケズリを行なっている。また、頸部内面においては、指頭圧痕を残している。３は、口縁部は直口し、胴部が球形を呈している。胴部外面はきめ細かなハケ目と底部近くで、ヘラケズリを残している。なお、部分的にハケ目の下に、タタキを見ることができる。内面はヘラケズリで、頸部より下に赤色顔料の付着が見られる。なお、この顔料は全面ではなく、部分的に施されている。４は鉢で、口径12.8cm、高さ４cmを測る。口唇部は山形を呈している。５は鼓形器台の破片である。上下を欠き、頸部のみのため、大きさについては不明であるが、頸部の上下にそれぞれ段をめぐらしている。器面は外面をナデ調整、内面をヘラケズリで調整している。６は鉢で、底部を欠いている。口径11.8cmを測り、口縁部内面においてハケ目を見ることができる。また、口唇部は浅く凹んでいる。７・８も鉢で、７は口縁部は直口し、頸部は器高の中位に位置し、胴部は浅く

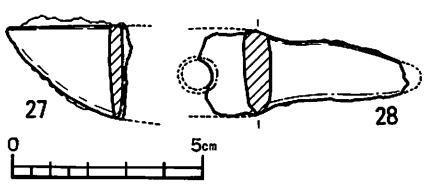


第 64 図 遺 構 に 伴 な わ な い 遺 物 実 測 図

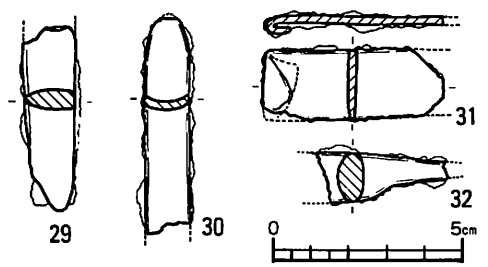
丸底になる。８は、口縁部が大きく開き、胴部は丸底で口径12.3cm、高さ9.2cmを測る。なお、頸部内面において指頭圧痕を残している。９は、楕円形の礫を利用した石錘である。両端にノッチを加えたもので重さ88gを測る。石材は結晶片岩である。10は石庖丁片である。そのため穿孔は１個を残している。孔は外径6.5㎜、内径4㎜を測り、表裏からの穿孔が多少ずれている。背はわずかにカーブし研磨され、刃部も内湾している。器面は全面研磨されているが、端部においては、荒砥仕上げで片刃となっている。石材は粘板岩である。11は砥石である。上面に研磨面を残し、他の面は剝離されている。砥石として使用中に周辺を剝離したもので、石材はアルコーズ質砂岩である。12は、全面研磨の棒状の磨石である。角柱状の握りは面どりをして手になじむよう研磨している。また、下画においては光沢が生じるまで磨かれ、その使用頻度を推察することができよう。石材は、アルコーズ質砂岩である。13は、磨製石斧で、基部を欠いている。刃部は蛤歯で、使用痕を残している。石材は砂岩である。14は、使途不明の粘土塊である。球形の粘土を押し潰した形をし、表面にはイネ科植物の繊維圧痕を残している。器面は粘土を押し潰した際に生じた亀裂を見せている。15は土製品で、長さ7cm、直径1.9cmを測り、棒状を呈している。先端部を残し、基部を欠き、さらに側面において器面の剝離が見られる。断面は丸形を呈し、その形から土製柄杓の柄になるものと思われる。16と17は、ミニチュア土器で、共に破片である。16は、口縁部を欠き、底部のみで、わ



第 65 図　遺構に伴なわない遺物実測図



第 66 図　遺構に伴なわない鉄器実測図



第 67 図　遺構に伴なわない鉄器実測図

ずかに平底を見せている。砂粒を含む土で良く焼かれている。17は底部を欠き、口径5.1cmを測る。口縁部は波状を呈し、器面も手捏のため凹凸が見られる。18は土師器である。口径7.5cm、高さ4 cmを測り、器壁が非常に厚く作られている。内面はナデ調整で、外面底部近くにおいてヘラケズリを見ることができる。19は、算盤玉形土製品で、直径3 cm、高さ2.2cmを測り、中心部に直径3 mmの円孔を穿っている。器面は全面ナデ調整である。20はミニチュア土器で、脚付甕になる。胴部と脚裾部を欠いている。21は、筒形の胴部に2本の突帯をめぐらし、下位の突帯の上には沈線をめぐらしている。底部を欠いているため、器形および、器高については不明であるが、現在残されている最

下部において底部へ向っていくことが判る。器壁は薄く、外面はヘラ調整で美しく仕上げている。内面はヨコナデによって調整している。22は土製の投弾である。この資料は指圧痕を明瞭に見ることができ、指紋も残している。23は端部に孔を配する土錘で、半切の状態である。器面には網代痕を認め、一部は器面の剝離も見られる。なお、この剝離面は粘土接合面となっていた。24は全面に赤色顔料を施した用途不明の粘土塊である。背に当る部分は、山形に尖り他の部分は器面が剝離している。しかし、それらの部分においても赤色顔料の付着が見られるところから、この顔料は二次的に施されたものと判断される。25は、軽石製の石製品である。全面を、研磨調整し、一面には直径6㎜、深さ7.5㎜の孔穴を見ることができる。なお、この石製品に類似した資料が他にも出土しており、詳細は考察の項に譲ることとする。26は、結晶片岩製石庖丁の破片である。穿孔部をわずかに残しているが、風化が著しく、その形状は不明である。27～32は鉄斧片である。27は刀子の切っ先で、28は茎になる。30は鉇で、31は手鎌の破片である。　　(中村)

註

註1	乙益重隆「中九州地方」『弥生土器集成』本編	1964
註2	「岡峰遺跡発掘調査報告書」　飯山市教育委員会	1976
註3	「鷹塚山弥生遺跡調査概要報告」　鷹塚山遺跡発掘調査団	1968
註4	後藤　直「人面付銅戈—人面と鋳かけ—」　福岡市立歴史資料館研究報告第4集	1980
註5	中村幸史郎「熊本県山鹿市方保田東原遺跡出土の巴形銅器」『熊本史学』第45号	1975
註6	近藤　喬一「青銅器の製作技術」『古代史発掘』5	1974
註7	末永雅雄「主要遺物の観察（盾）」『和泉黄金塚古塚』	1954
註8	「熊本県山鹿市大字小原竜宮遺跡」『チブサン』6号	1966
註9	「牛草遺跡調査概報」『山鹿市教育委員会』プリント	1967
註10	倉原謙治「鍋田東石蓋土壙発掘調査手記」『チブサン』13号	1968
註11	小原由昭「植木町粕道石棺実測調査」『チブサン』17号	1970

第4章　第II次調査

第II次調査は第I次調査区域の東側に22m×24mの区域内を調査したものである。調査区は工場東側に1m離れて設定した。十文字に通路を残して4区画（10m×11.5m）を定め、それぞれ西側の北からA、B、東側の北からC、D地区と定めた。そのため遺構には、それぞれの地区名を冠し称している。特にこの第II次調査においては木棺墓、土壙墓が新たに検出され、住居跡との重複も見せている。（第4図）

C、D地区は畑地耕作時（昭和47年以前）までは段下りとなっており、さらに採土作業が行われていたため、旧地表が地山のわずか20cm程度の深さに見られた。

遺構と遺物

1　A－1号住居跡（図版15、第68図）

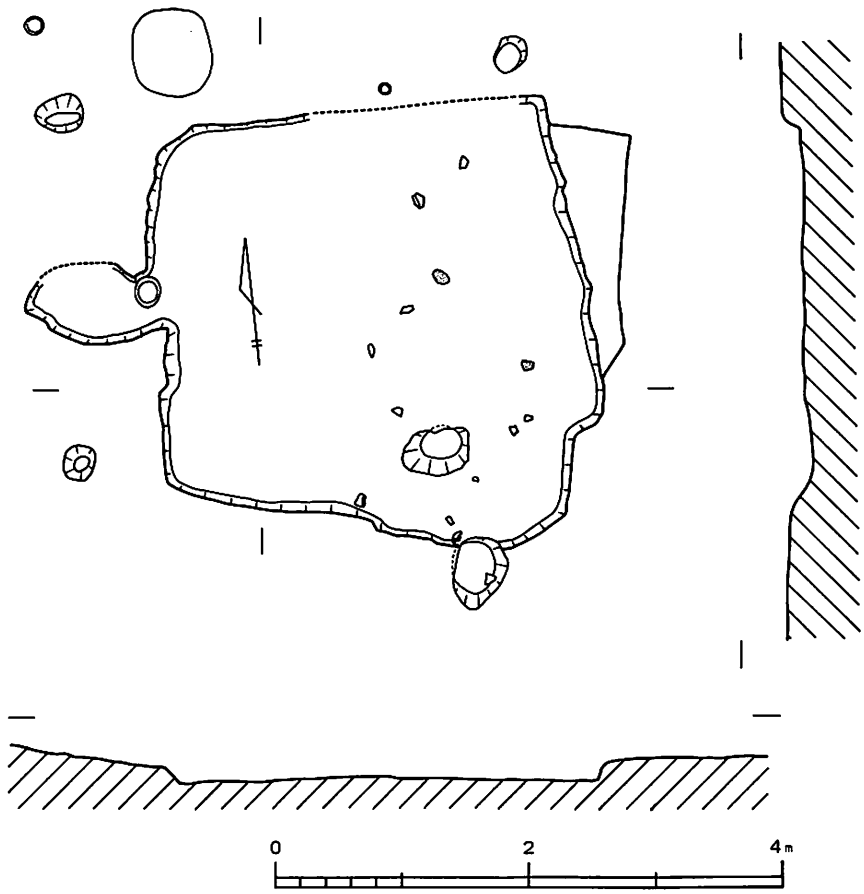
A地区北端に位置するこの住居跡は、3.5m×3.2mの隅丸方形を呈している。西側壁面においてはわずかな張り出しが見られ、南側壁面も曲線を描いている。

遺物（図版23－1・2、第69図）

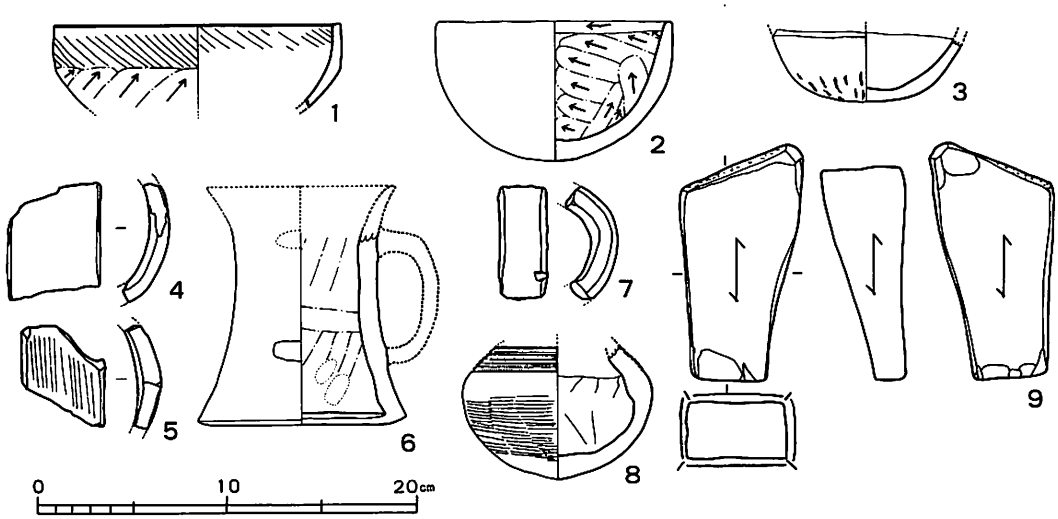
遺物の多くは住居跡の中心より東側に寄って出土し、大きな破片の状態であった。また砥石の出土も見られ、ジョッキ形土器は把手片も含め4点出土した。

1は鉢の破片で、口径15cmを測る。口縁部は直口し、口唇部は平坦に仕上げられている。外面は口縁部でハケ目調整を施し、胴部以下においてはヘラケズリを施している。内面では口縁部にハケ目を認めるが、全面をナデ調整によってかき消している。なお、外面においてはススの付着が著しい。3は本来壺になるものであるが底部のみである。胴部から上を打ち欠き、口縁部を形成している。そのため端部には、内側から外側に向って行った剝離面を認められる。壺から鉢への二次使用をうかがわせる資料である。外面においては指圧痕および、シワを見ることができ、また内面はナデ調整を行っている。砂粒を含み、焼成も良く、堅く焼き締っている。

4～7はジョッキ形土器で、6は底部から胴部にかけて残っている。4、5、7は把手片で、4、5は幅広把手で中央部が凹んでいる。6においては把手接合部にスタンプを残している。また胴部内面においてはしぼり込みの痕跡を見ることができる。8は小型の壺で、頸部から底部にかけての破片である。頸部には9～10本沈線をめぐらし、胴部においては横方向のハケ目調整を施している。内面には頸部においては粘土接合面を残し、シワも認められる。器壁が厚く、焼成も内面まで火がまわらず灰色を呈している。2については住居跡の外から出土したもので、土師器である。器壁が厚く、内面はヘラケズリを施し、外面はナデ調整である。9は砥石で端部を除き、四面を研磨しており、上・下面においてはわずかに凹んでいる。石材は砂岩である。



第 68 図　A － 1 号住居跡実測図



第 69 図　A － 1 号住居跡出土遺物実測図



第70図　A－2号住居跡実測図

2　A－2号住居跡（図版14—2、第70図）

この住居跡はA、B区にまたがり、さらに西側部分をトレンチの外に延ばしている。また住居跡としての規模があまりにも大きく、壁面の形からも複数の住居跡が重なっているものと思われる。しかし、住居跡の全面に柱材と屋根材としてのカヤ等の炭化物が堆積し、焼土も数箇所で確認されていることからも火災による家屋の消失が考えられた。また床面においても重複の跡を認め得なかったので、単一住居と判断したのである。住居跡中心部には長さ 5.8m、幅1m、深さ 0.4mの土壙を配していた。土壙は長方形を呈し、底にはジョッキ形土器片を残していた。またこの住居跡においては鉄器が鉄片も含め22点出土し、砥石にも鉄錆を残しているものさえ出土し、鉄器製造の施設とも思われた。なお、この住居跡はA－3およびA－4号住居跡を切っていた。

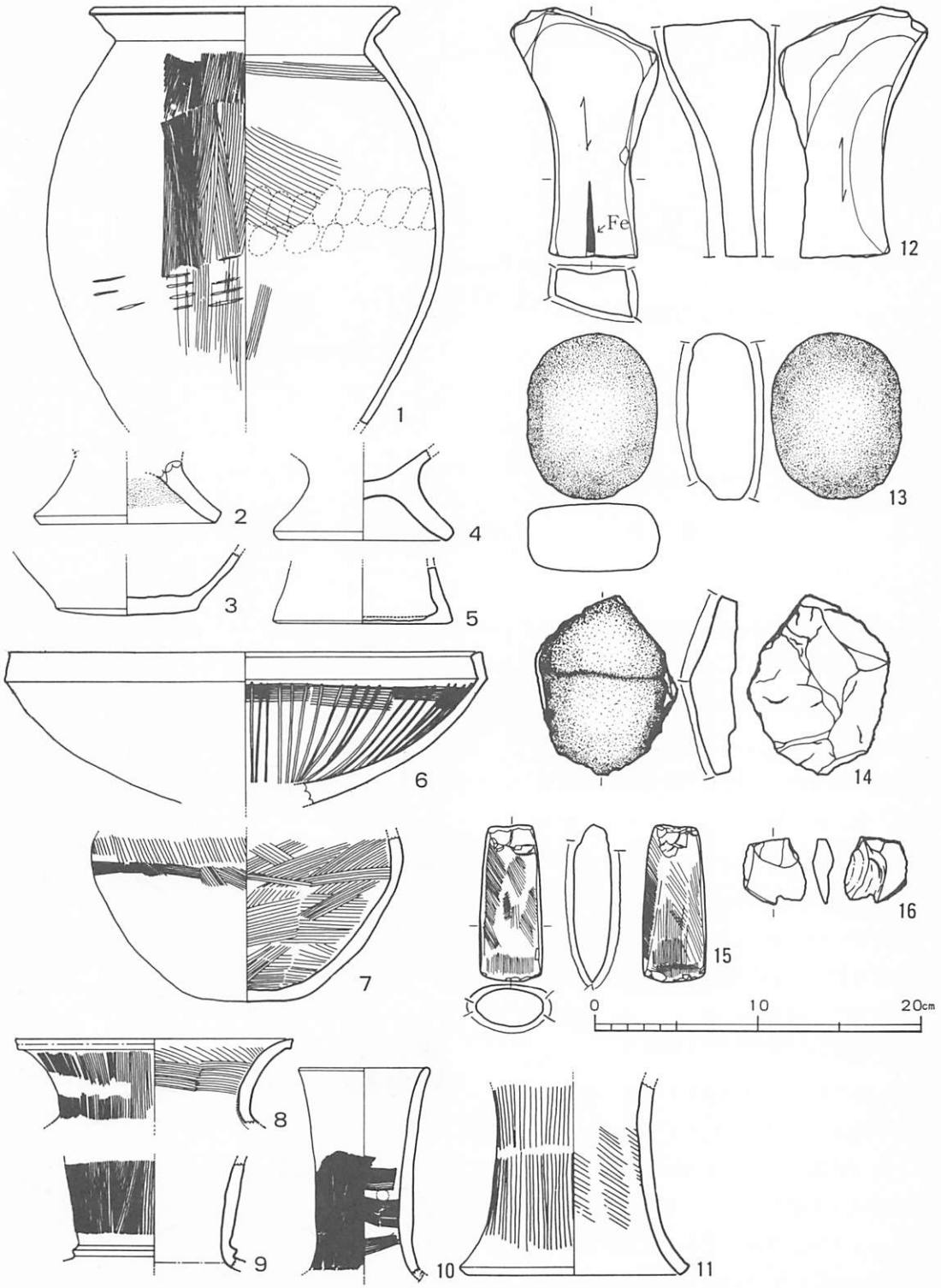
遺物（図版23－2～6、24－1、第71～73図）

ここにおいては先に述べたとおり、鉄器の出土に注目すべき点が見られた。22点の鉄片のうち三角形を呈した鉄片が3点見られる。他の住居跡からもこの形を呈した鉄片が出土しているところから、この形で製品になるものと思われる。

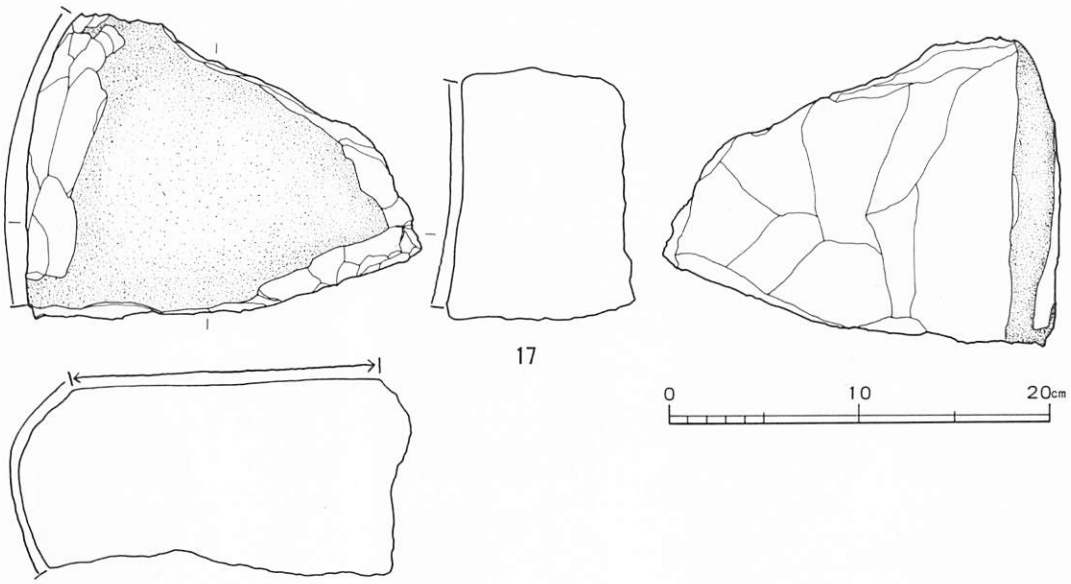
遺物の多くは、床面に残された状態で出土している。

1は甕で底部を欠いているが、脚台を有するものである。口縁部は短かく「く」字に外反し、中位では肉厚となり、口唇部外縁にわずかなふくらみを見ることができる。最大径は胴部中位に位置し、底部へ直線的に続いている。器面は胴部中位でわずかながらタタキ目を残しているが、全面きめ細かなハケ目調整を施している。口縁部においてはヨコナデ調整である。内面においては胴部中位に指圧痕を残し、ハケ目調整を行っている。砂粒を含まない胎土であるが、焼成は良くない。
2は脚台で上部を欠いている。また剝離面は粘土接合面となっており、脚台をドーナツ状に作り、その後胴部に付着させたものと考えられた。脚内面には砂粒の付着痕が認められる。3は底部のみの破片で平底を呈している。底面は正円にならず、わずかに歪んでいてハケ目調整を施している。底面より上においてはナデ調整で、内面においてもナデ調整を行っている。砂粒を多く含み、焼成は良い状態である。4は脚台で上部を欠いている。5はジョッキ形土器の破片で底部のみである。6は脚部を欠いた高坏である。坏部は胴部が大きく、口縁部は短かく直口し、わずかに内側に傾いている。口唇部は平坦となっている。器面は内外面共きめ細かなハケ目を施し、内面においてはその後ヘラ調整を中心部に向って施している。7は壺の胴部から底部にかけての破片である。器面調整は外面では胴部中位に荒いハケ目を残し、底部はナデ調整である。内面は全面荒いハケ目である。8、9は壺の口縁部と頸部の破片である。9においては頸部に1本の突帯をめぐらしている。10は長頸壺の口縁部庁で、口縁部から頸部まで12.5cmを測る。口唇部はわずかに丸味を帯び、器面はきめ細かなハケ目調整を行っている。11は器台片である。

12は基部に自然面を残し、4面を長期間にわたって使用された砥石である。そのため先端部に向って大きく曲線を描いている。また自然面には鉄分の付着が著しく、特に砥石研磨面の上面では中央部がわずかに凹んでおり、その中に鉄錆が長さ 3.7cm、最大幅 0.7cmにわたり付着している。この



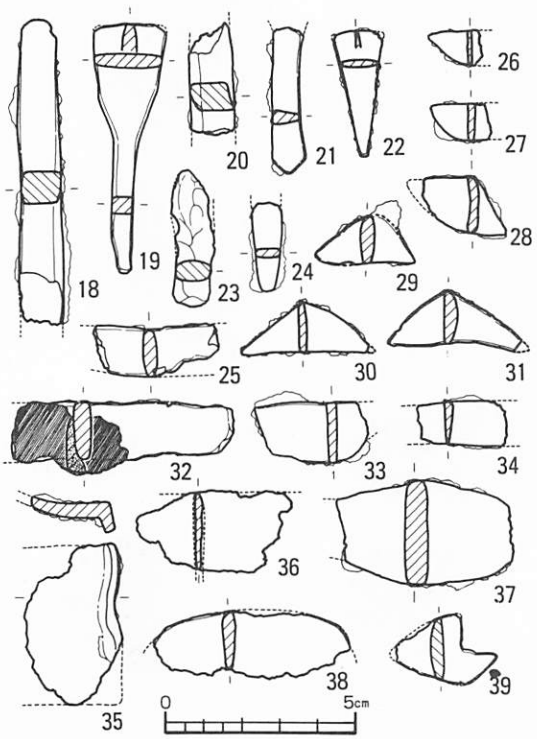
第 71 図　A － 2 号住居跡出土遺物実測図



第 72 図　A － 2 号住居跡出土遺物実測図

ことから、この砥石が鉄器を主として砥いでいたものと判断される。石材はアルコーズ質砂岩を使用している。13は磨石で、上下面は平坦となっているが、顕著な摩滅は見られなかった。14は自然面を利用した砥石で、他の面は剝離が行われている。研磨面には中央に稜を有している。アルコーズ質砂岩を利用している。15は粘板岩を利用した磨製石斧である。基部を欠いているが、ほぼ原形に近い形をとどめている。また刃部は蛤刃で、使用痕を残している。研磨は全面に施され、側面は一部すり切っている。16は石庖丁片で、研磨面をわずかに残し、他は剝離されている。粘板岩を利用している。17は石皿で、周囲を欠いている。側面においては火を受けたため自然面の剝離が見られ、ススの付着が認められる。使用面は一面を残し、わずかに凹んでいる。石材は角閃石安山岩を使用している。

18～39は鉄器および鉄片である。18は断



第 73 図　A－2号住居跡出土鉄器実測図

面が四角形を呈し、わずかに繊維を巻きつけているのを確めることができる。茎になるが器種については不明である。19は鏃の完形品である。平根部分は幅 1.9cmを測る。20も18と同様断面が四角形を呈している。21も器種不明の鉄器である。わずかに片側に刃部らしい加工が見られる。22は鏃らしいが、小さく、さらに反っていることから三角鉄片とも思われる。23、24も器種不明の鉄片である。25は幅 1.3cm、厚さ 0.4cmを測る鉄片で、刃部の形成は認められない。26～28は器種不明の鉄器端部である。共に刃部の形成は見られない。特に28は断面が曲線を描いている。29～31は三角形鉄片である。三角形を呈し、同一規格で作られているようである。29は長さ 2.6cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cmを測り、わずかに反りが見られる。30は長さ 3.4cm、幅 1.4cm、厚さ0.21cmを測る。わずかに木質の付着が見られる。31は長さ 3.6cm、幅 1,4cm、厚さ0.35cmを測り、一部に木質の付着が見られる。32は刀子の茎である。表面には繊維を巻きつけており、わずかに見ることができる。35は手鎌の端部で折り返しの部分をわずかに残している。

このA－2住居跡からは総数26点の鉄片が出土し、鉄錆の付着した砥石の存在などからも、鉄器の製造が行われたのではないかとも考えられる。

3　A－3号住居跡

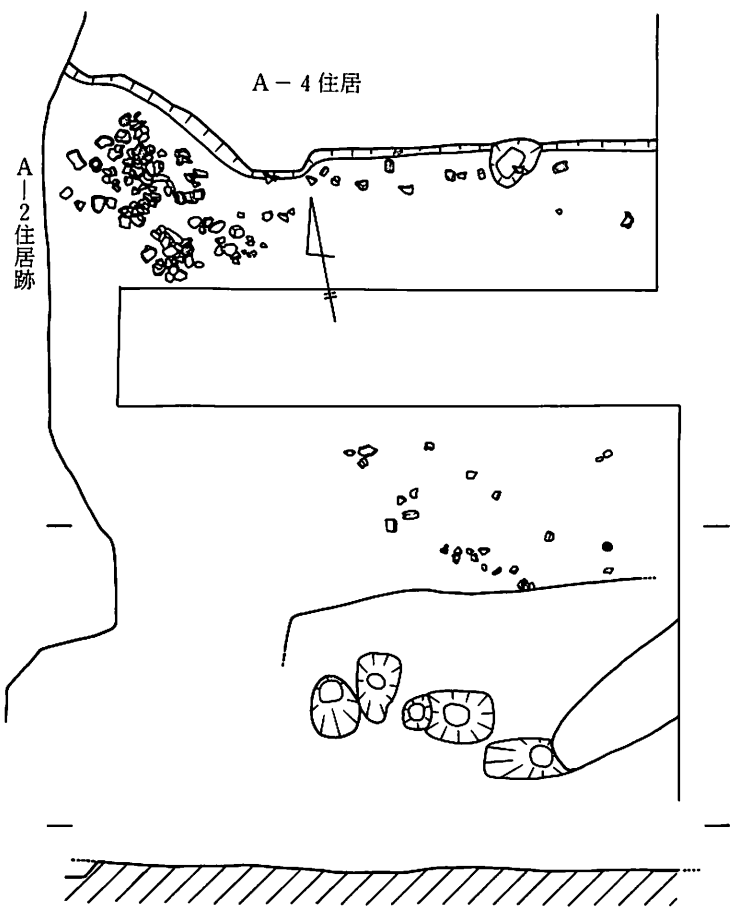
（第74図）

A、B地区にわたって存在するこの住居は、A－2号住居跡から西側を切られ、A－4号住居跡を切っている。規模は 3.5m×5m程度のものになるものと思われる。住居跡の中心に調査区設定時の土手が残されていたため、炉跡については確認するに至っていない。

遺物（第75図）

遺物は北側壁面沿いに集中して出土し、多くは破片の状態であった。

1、2は口を大きく開く壺で、口縁部のみの破片である。1は器壁が厚く、口唇部が最も厚く、また刻目を施している。器面は荒い



第 74 図　A－3号住居跡実測図

ハケ目を全面に施し、砂粒を多く含む胎土で、焼成は良くない。2は1に比べ器壁は薄く仕上げられ、口唇部近くはヨコナデを施し、それ以下ではハケ目調整を見ることができる。きめ細かな胎土で、焼きも良い。3～5は複合口縁の壺で、口縁部片である。3は口縁部が短く、器壁が厚い。また、口縁部屈折部にわずかなふくらみを見ることができる。4は口縁部が長く、屈折部には三角突帯をめぐらしている。また口唇部も内傾して平坦に切られている。5は口縁部が鋭く折れ、シャープな稜線を描いている。外面にはハケ目を残している。6は広口壺の破片である。口縁部は短く「く」字状に開き、最大径を胴部中位に有している。器面は全面ナデ調整であるが、胎土は砂粒を含み、焼成は悪い、そのため器面が剝離しかけている。7は壺で、頸部から肩部にかけての破片である。頸部には



第75図 A－3号住居跡出土遺物実測図

6本の沈線をめぐらし、その下から沈線による連弧文を描いている。免田式土器に見られる重弧文とも類似している。8も壺で、口縁部が短く「く」字形に開いている。9～13は底部で、10、11は平底で、他は脚台となっている。9は脚部の直径に比べ脚は短く作られている。また内面には砂粒を多く含んでいる。外面はハケ目で脚部内面はナデ調整である。10、11は平底でハケ目調整を施している。10は胎土に砂粒を多く含み、焼成も悪い。11は胎土も良く、焼成も良く、堅く焼き締まっている。12、13は脚台である。脚内面はハケ目調整で、砂粒の付着は認められない。14は高坏の脚台である。坏部を欠き、柱状部上部も欠いている。裾部中位に5個の孔を配している。なお、この孔は外面よりヘラ状器具により粘土を切り取ったもので、中には脚内部まで達していないものがある。柱状部内面はヘラズリにより調整され、裾部においてはナデ調整を施している。外面はヘラ調整を施し、その後ナデている。15は小型の壺で頸部から胴部にかけての破片である。7と同様に頸部に6本の沈線をめぐらし、最大径を胴部中位に有している。16は胴部が算盤玉状をした壺で、無頸になるものと思われる。最大径を胴部中位に有し、突帯をめぐらしている。17は鉢で、口縁部は直口し、きめ細かなハケ目調整を施している。また胴部下位においてはヘラケズリを見ることができる。18はジョッキ形土器の把手片と底部破片である。焼成、色調が異なるため別個体になる可能性が強い。

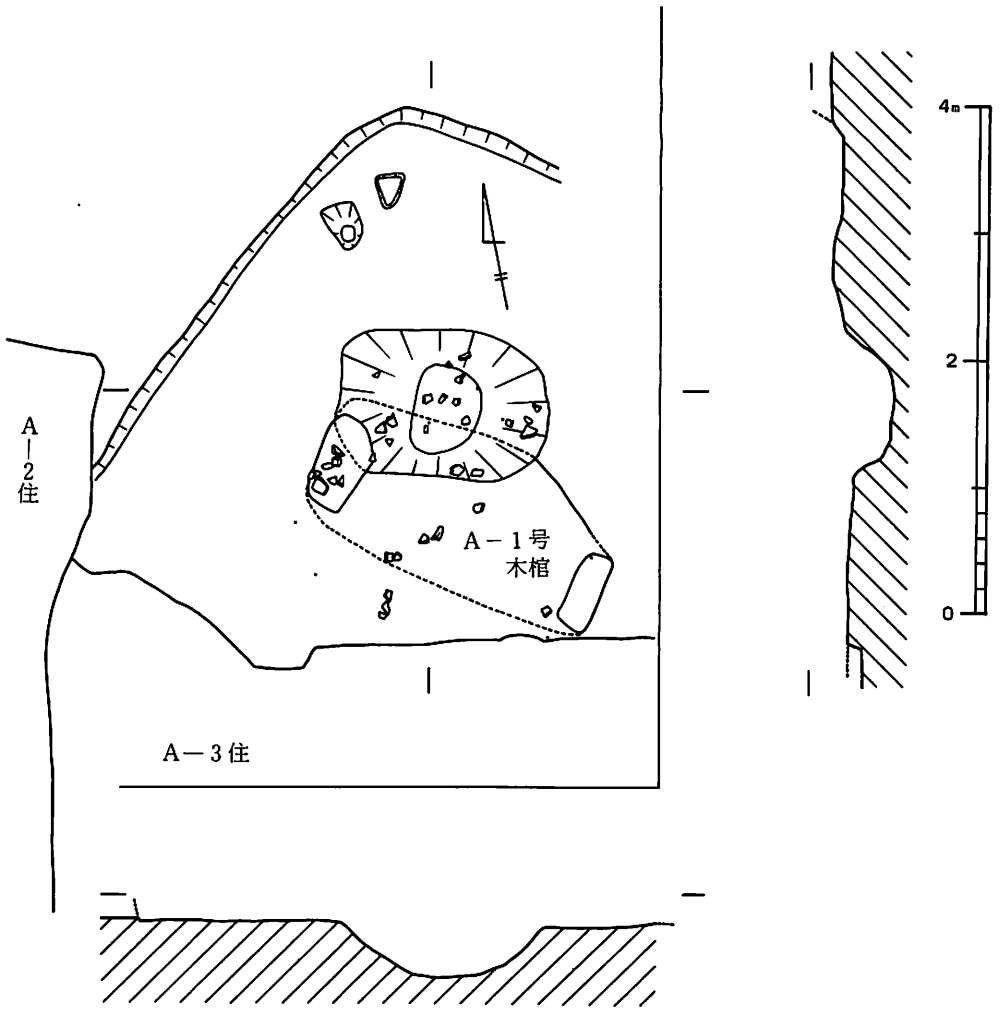
4　A－4号住居跡（第76図）

A－2、3号住居跡から切られたこの住居跡は、西側壁面と北側壁面の一部を残すのみである。中心部には長径 1.6m、短径 1.2m、深さ 0.4mを測るピットを配し、それを切るように木棺墓1基（A－1号木棺）が存在する。残された壁面はかなりしっかりとしていて、C地区へ延びるものと思われたが、C地区内では確認されなかった。

遺物（図版24－2～4、第77～79図）

遺物は、ピット内（3、4、6、8、10、12）と床面（1、2、5、7、9、11）から出土している。また、鉄器（13～20）は住居跡全体から出土している。

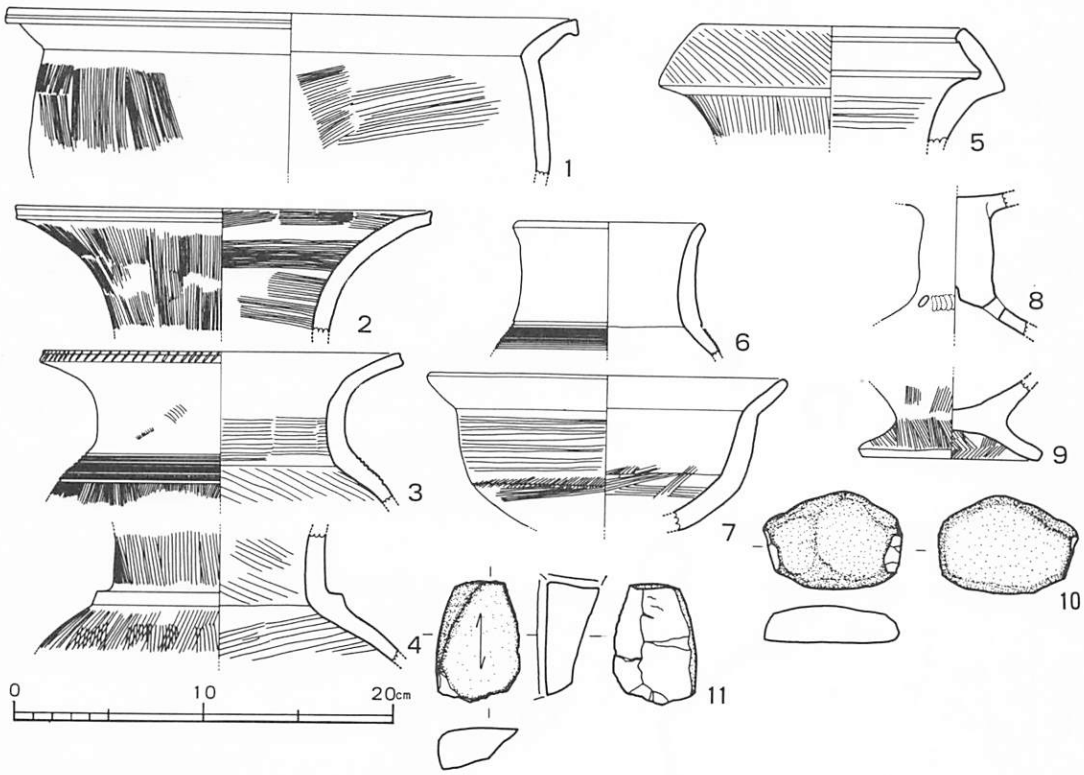
1は甕で口縁部から胴部にかけての破片である。胴部の張りは少なく長胴になる。口縁部は「く」字形に開き、頸部内面にシャープな稜を有する。口唇部においては、下部でつまみ上げ状にふくらんでいる。器面はきめ細かなハケ目調整を施している。2～6は壺である。2～4は口を大きく開く、2はきめ細かなハケ目調整を施している。3は口唇部に刻目を配し、頸部には9本の沈線文をめぐらし4においては頸部に三角突帯をめぐらしている。5は複合口縁の破片で、口縁部の屈折部分はシャープな稜を有している。6は口縁部が直行し、頸部に11本の沈線をめぐらしている。7は鉢で底部を欠いている。器壁が厚く、器面は全面ハケ目を施している。8は高坏で、坏部と裾部を欠いている。柱状部は中空にならず、わずかな孔が中心部に見られる程度である。裾部への移行部分に孔を3個配している。9は脚台で手捏風のものである。そのため裾部が不整形で歪んでいる。10は角閃石安山岩の礫を利用した石錘である。両端にノッチを入れただけのもので重さは 102.7ｇを測る。11はアルコーズ質砂岩製の砥石である。すでに周辺を欠き、わずかな面を残しているにすぎない。現在2面の加工面を見ることができる。12は無頸壺もしくは鉢になるものと思われる。胴部に装飾



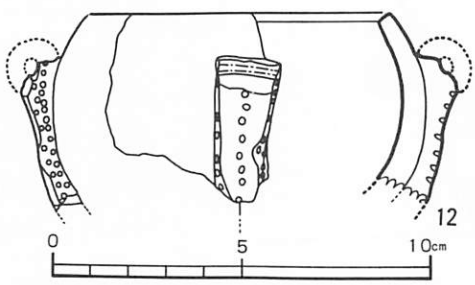
第76図　A－4号住居跡実測図

貼付文を有している。貼付文は、上部と下部を欠いているが、現存長 3.8cm、最大幅 1.7cmを測る。また上部には貼付文を横切るような円孔が穿たれていて、貼付の正面と側面にもそれぞれ一列ないし、2列の刺突文を配している。刺突文は直径1㎜以下で、深さ2㎜に満たないもので1列に9～13個配されている。現在、この土器の類例を知らない。

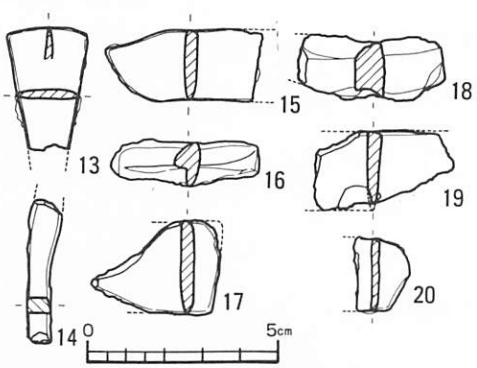
13～20は鉄器である。13は鏃で、平根部分は 2.1cmを測る。14も鏃で、茎になる。断面は四角形を呈している。15は刀子の切っ先である。わずかに刃部を認められる。16は器種不明の鉄片で、加工の痕を見ることができる。17、18も器種不明の鉄片である。17は刃部らしい部分を見ることができるが、断定できない。18は厚みのある鉄片で、2～3枚の鉄板を合せているように見える。19は刀子片とも思われるが、不明である。わずかに刃部を形成している。20は器種不明の鉄片である。なお、この他にも鉄片が5～6点見られるが、小片のため実測し得なかった。



第 77 図　A － 4 号住居跡出土遺物実測図



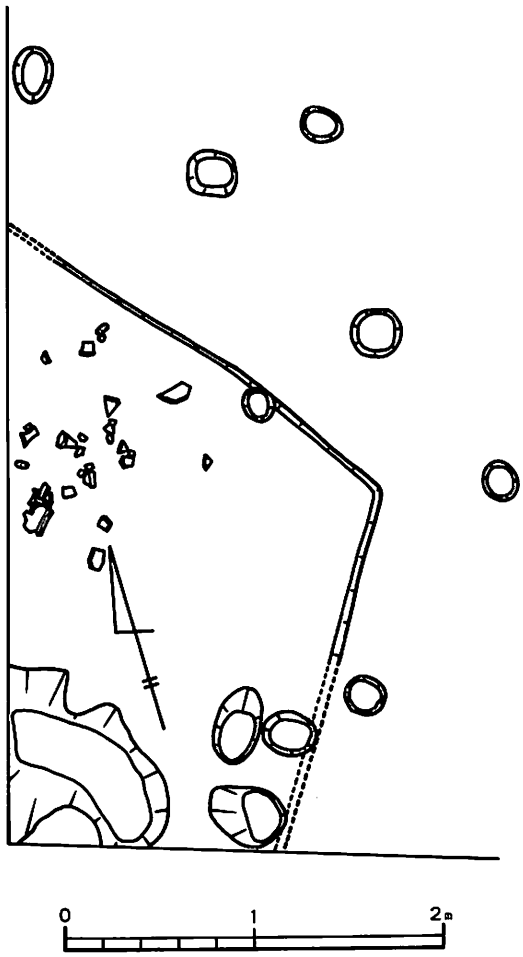
第 78 図　A－4号住居跡出土遺物実測図



第 79 図　A－4号住居跡出土鉄器実測図

5　B－1号住居跡

（図版16—1、第80図）



第 80 図　B－1号住居跡実測図

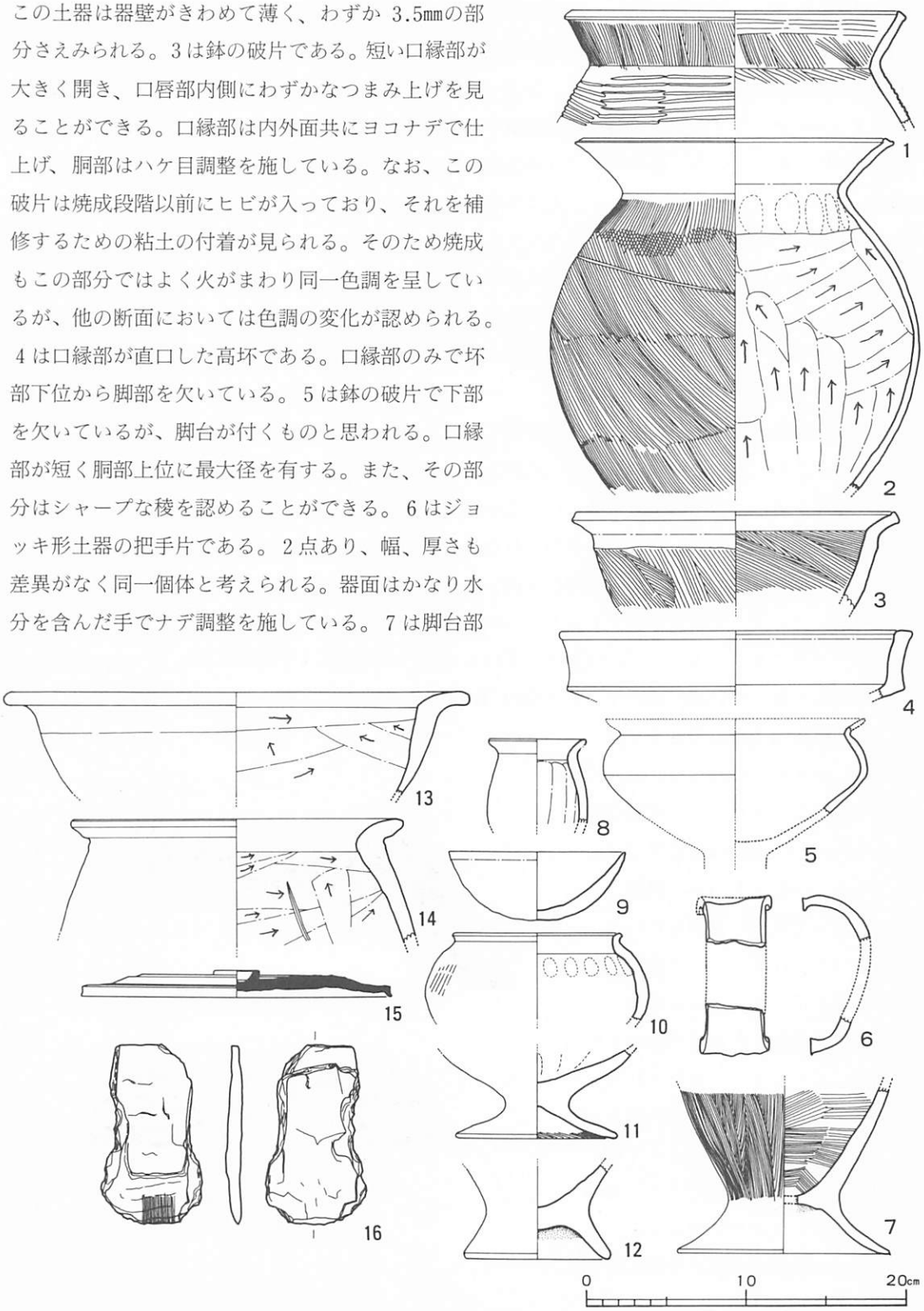
B地区西南隅に位置するこの住居跡は、わずかに壁面のコーナーを出しているのみで、他は調査区域外へと続いている。また、住居跡の外側には、壁面に沿ってピット4個が並んでいた。

遺物（図版24－5・6、25－1、第81、82図）

遺物は床面に近い状態で出土しているが、3～4点については混入の可能性が強い。（11、13～16）

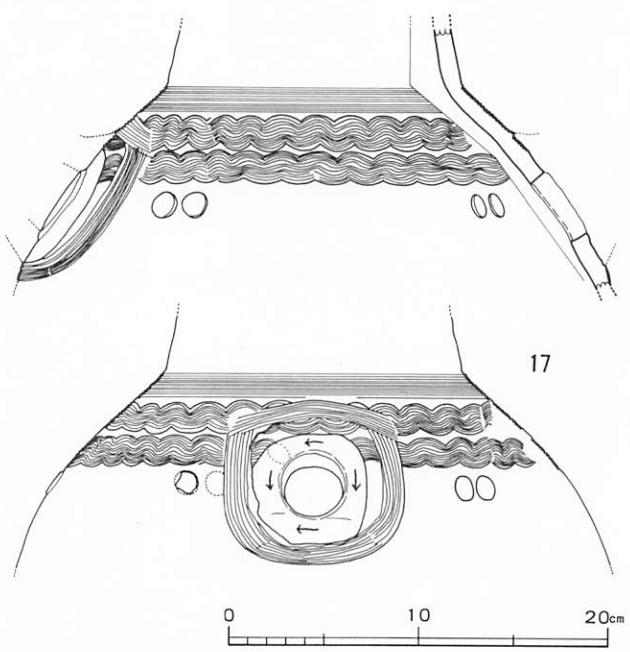
1、2は甕で、1は口縁部を「く」字形に開き、わずかに内湾気味に口唇部へと続く。口唇部内面においては、つまみ上げを見ることができ、平坦に切られている。器面調整は外面では、口縁部から胴部はタタキ目の後ハケ目調整を施し、特に口縁部においてはタタキ目をかき消している。内面は全面ハケ目調整を施している。この甕は胴長の丸底になるものと思われる。外面にススの付着を見ることができる。2は底部を欠いているが倒卵形の胴部を有し、最大径は胴部中位に位置している。口縁部は「く」字形に開き、わずかに外反気味に口唇部へ続いていく。口唇部は平坦に調整され、内側にはつまみ上げを見ることができる。器面は外面においては、口縁部はヨコナデ、胴部はハケ目調整を施している。また肩部には1条の沈線をめぐらしている。内面は口縁部ではヨコナデ、頸部には指圧痕を残し、胴部は全面へラケズリを施している。

この土器は器壁がきわめて薄く、わずか 3.5㎜の部分さえみられる。3は鉢の破片である。短い口縁部が大きく開き、口唇部内側にわずかなつまみ上げを見ることができる。口縁部は内外面共にヨコナデで仕上げ、胴部はハケ目調整を施している。なお、この破片は焼成段階以前にヒビが入っており、それを補修するための粘土の付着が見られる。そのため焼成もこの部分ではよく火がまわり同一色調を呈しているが、他の断面においては色調の変化が認められる。4は口縁部が直口した高坏である。口縁部のみで坏部下位から脚部を欠いている。5は鉢の破片で下部を欠いているが、脚台が付くものと思われる。口縁部が短く胴部上位に最大径を有する。また、その部分はシャープな稜を認めることができる。6はジョッキ形土器の把手片である。2点あり、幅、厚さも差異がなく同一個体と考えられる。器面はかなり水分を含んだ手でナデ調整を施している。7は脚台部



第 81 図　B － 1 号住居跡出土遺物実測図

で上部は甕になる。器面は全面ハケ目調整を施している。また脚部はナデ調整を施している。8は手捏土器で、口縁部から胴部下位にかけての破片である。口縁部はゆるやかに外反し、胴部の張りは少なく、丸底になるものと思われる。器面は全面ナデによる調整を施している。9は口径11cm、高さ 4.3cmを測る鉢である。器面はナデ調整で、口縁部は明確に施している。10は短頸壺で最大径を胴部中位に有している。肩部内面には指圧痕を残し、器面は一部にハケ目を残している。11と12は脚台で、11は台付鉢になる。この土器は土師器で、脚台が短く鉢部が大きく開いたものである。器面は全面ナデ調整であるが、脚裾部内面にハケ目を施している。12は脚台付甕になり、上部を欠いている。脚部は短かく、内面には砂粒の付着が見られる。13、14は土師器で13は鉢となり、14は甕となる。共に器壁が厚く、内面はヘラケズリを施している。13は外面にススの付着が著しく、ススが層位をなして付着している。15は須恵器の蓋である。中心部につまみを有し、つまみは高台状を呈している。また、つまみ周辺は凹んでおり、全体として歪んだ形をしている。なお土器断面にはつまみ装着時の接合面が内面に向って伸びており、このつまみが貼付でなく、ねじこみ方式であると判断された。さらに器面の歪みもこの時生じたものと思われる。16は結晶片岩製の打製石斧である。撥形を呈し、刃部の摩滅が著しい。この摩滅は片側のみ顕著で他面はわずかに認められる程度である。このことからも鍬として利用されたものと思われる。17は壺である。この土器は明瞭な櫛描文を頸部と肩部に施し、2個の円孔を残している。櫛描文は12本単位で頸部には直線をめぐらし、肩部には2段に波状文を施している。この波状文は左回り方向に施文し、上下同位置に結接点を見ることができる。また、この波状文の下位に2個の円形浮文を5箇所に配している。肩部には2個の円孔を残している。なお、この2個の円孔は対角線上からわずかに外れた位置にあり、長径 3.7cm、短径 3.3cmの大きさで穿っている。円孔の周囲はヘラケズリで器面を調整し、さらにその外周には粘土を貼付け、表面は櫛描文で施文している。内面にも円孔の周囲 2.5cmにわたって粘土貼付が見られる。これらのことから、この2個の円孔には把手が挿入され、その周辺には接着強度を高めるために粘土を貼付け補強しているものと判断された。なお、この方式による把手の着装例は、下山神遺跡出土のジョッキ形土器の把手に見ることができる。[註1] 把手の形式については他に例がなく、不明であるが角形把手状になるものと思われる。当初この円孔については円窓付壺形土器の類似品とも考えら



第 82 図　B－1号住居跡出土遺物実側図

れたが、粘土の貼付や、2個配していることから把手が装着されたと考える方が妥当であろうと判断したのである。

方保田東原遺跡から出土した土器群の中でも最も多く施文されており、周辺の遺跡でも類例を見出すことはできなかった。あえて求めるとすれば、近畿地方第Ⅲ期に見られる櫛描文土器を源流[註2]とし、瀬戸内海沿岸や東九州的要素を含んだものと思われる。いずれにしても他に類例がなく、逸品と言えよう。器面はナデ調整の後に櫛描文を施しており、内面は全面ナデ調整である。砂粒を含む胎土で、焼成は良好である。

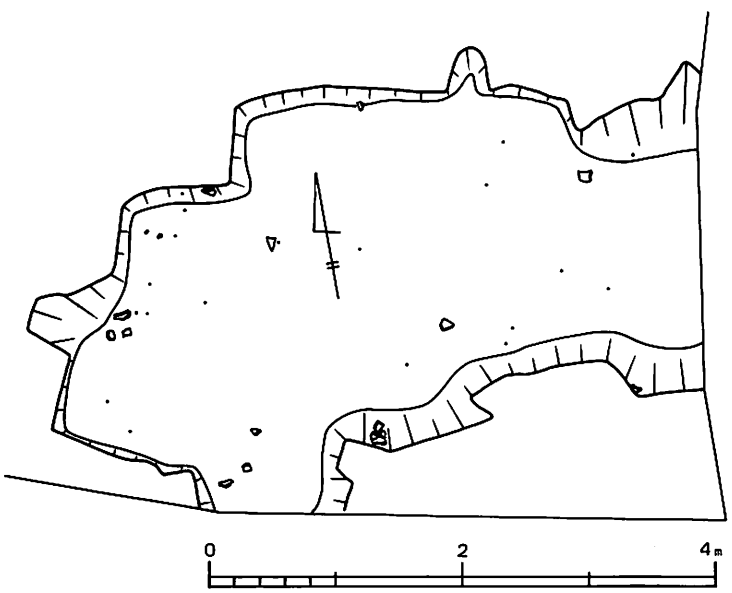
6　B－2号住居跡（図版16—2、第83図）

この住居はB地区東南隅に位置している。そのため住居跡の規模については不明で、南側と東側壁面が調査区域外へと伸びている。なおこの住居跡はA－2号住居跡で見られたように、プランは不整形を呈し、住居跡内から鉄器および鉄片が集中して出土している。A－2号住居跡との共通性を見出せるような遺構である。

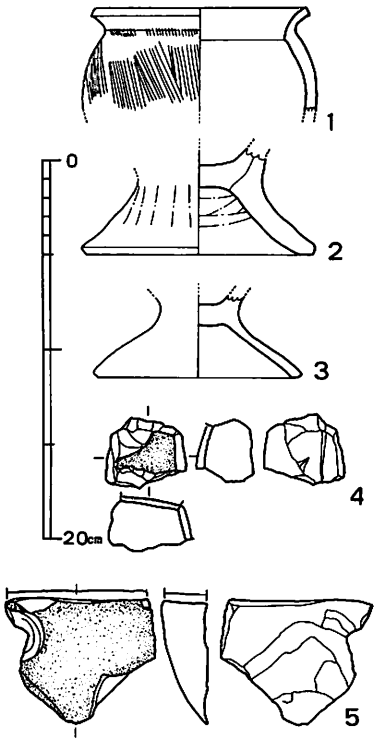
遺物（第84、85図）

出土した遺物の大半は鉄器および鉄片であった。住居跡の全面に散布した状態で出土している。また、A－2住居跡で見られた三角鉄片が出土していることも注目しなければならない。

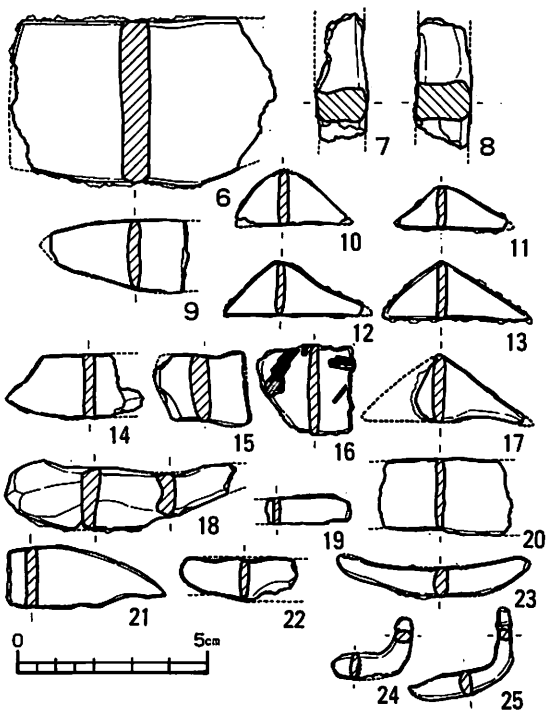
1は小型の甕である。ミニチュア土器とは言えないが、サイズは小さい。短い口縁部を「く」字形に開き、胴部にわずかな張りを見ることができる。器面は外面でハケ目調整を、内面はナデ調整を施している。2、3は脚台である。2は器壁が厚く、全面ナデ調整である。表面には指紋が残されており、器面に水分を含ませた指で調整したものである。また上部甕本体を欠いているが、剝離面に粘土接合面を観察することができる。3は2に比べ器壁が薄く仕上げられている。また、脚部と甕胴部との接合部のくびれは、脚裾部の径に比べると非常に小さく、ほっそりとした感じを与える。裾部は内湾気味に広がり、全面ナデ調整を施している。4、5はアルコーズ質砂岩の砥石である。共に破片であり、一部に研磨の面を残している。4は火を受けており、ススの付着を見ることができる。



第 83 図　B－2号住居跡実測図



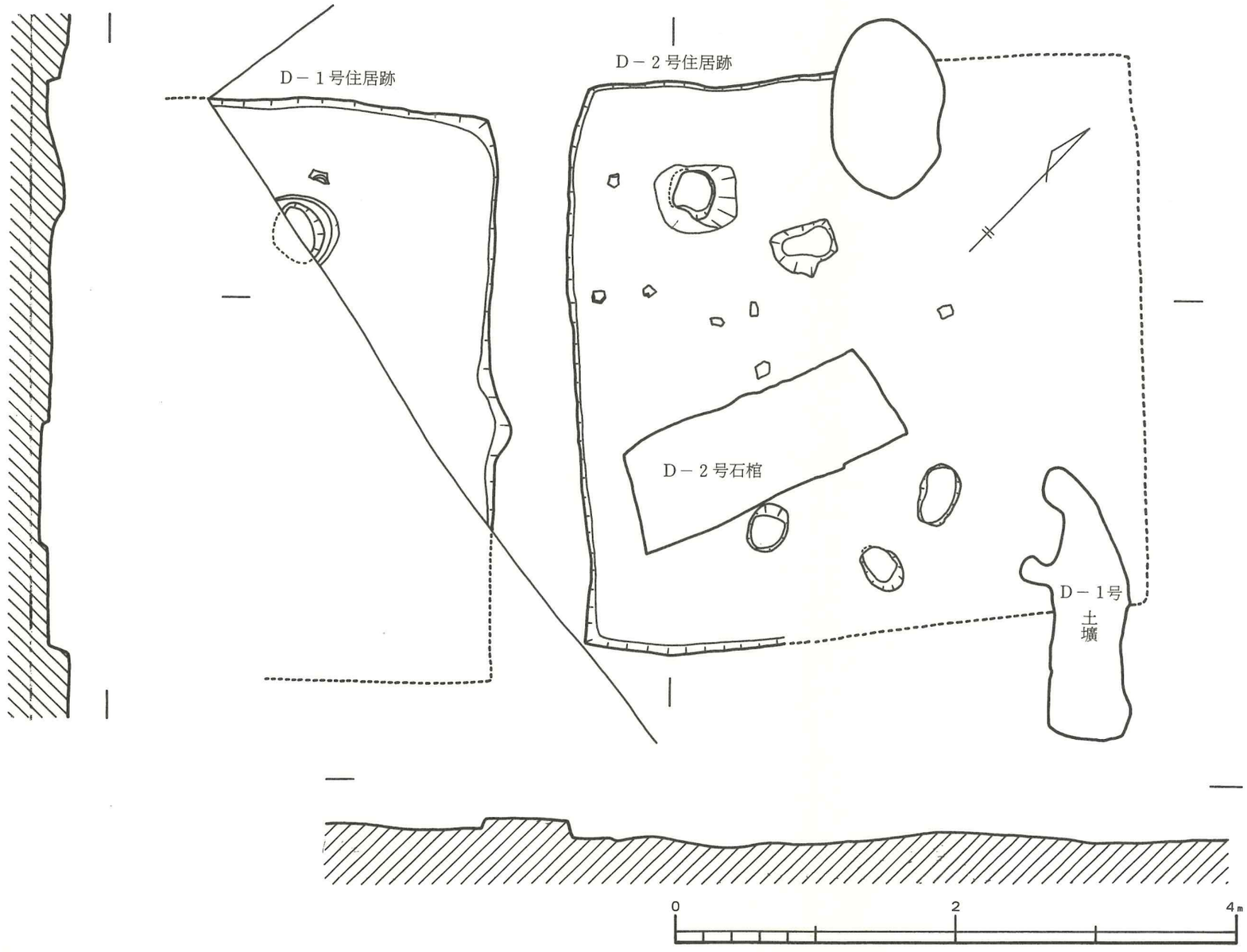
第 84 図　B－2号住居跡出土遺物実測図



第 85 図　B－2号住居跡出土鉄器実測図

5は自然面を多く残し、研磨面はわずかに残している。

6～25は鉄製品である。6は現存長 6.7cm、幅 4.4cm、厚さ 0.8cm、重さ79.1ｇを測り、両端を欠いているが、周囲には刃部の形成は認められず、製品としては考えにくく、素材としての鉄鋌の可能性を残していると言えよう。なお、鉄鋌とするには多くの問題を含んでおり、別項において整理してみたいと思う。7、8は断面が四角形となり加工の痕を認めるが、製品としての器種は不明である。9は刀子片である。先端と基部を欠くが刃部を認めることができる。10～13は三角鉄片である。10は長さ2.85cm、幅 1.4cm、厚さ0.25cmを測り、わずかに反りが見られる。11は長さ 2.8cm、幅1.05cm、厚さ0.25cmを測り、中心部から曲げるように反りが見られる。12は長さ 3.6cm、幅 1.3cm、厚さ0.19cmで一部に木質の付着が見られ、反りがわずかに確認できる。13は長さ 3.9cm、幅1.45cm、厚さ0.22cmを測り、一角に木質の付着が見られた。14は器種不明の鉄器である。周辺は刃部状の加工は見られず、切断されている。また、厚さも0.29cmに保って加工している。しかし、この形状では鉄器としての使用は考えにくく、素材となるものとも考えられる。15も器種不明の鉄片である。16は側面を曲線で描くように加工し、表面には木質の付着が見られる。器種については不明である。17は三角鉄片である。端部を欠いているが、現長 2.9cm、幅 1.7cm、厚さ 0.3cmを測る。18は2～3枚の鉄材が結合しており、現状での器種については不明である。19は0.65cmの幅で端部を欠き、現況で 2.2cmの長さを測り、基部が湾曲している。器種不明である。20は現長3.45cm、幅



第86図 D－1・2号住居跡実測図

1.8cm、厚さ 0.2cmを測り、下部には刃部を有していることから手鎌の破片であろう。21は周囲に刃部の形成が見られず、器種不明の鉄片である。22は両端を欠いているが明らかに刃部をもち、小形の刀子であろう。23は反りの強い器種不明の鉄器である。長さ5.2cm、幅0.7cm、厚さ0.35cmの大きさで刃部は見られない。24、25は同一器種の鉄器である。「L」字状に折れた先端はわずかに刃部状になっており、基部は断面が厚くなっている。器種については不明だが、小型の鉄器であることは明らかなようだ。

7　D－1号住居跡（図版17—1、第86図）

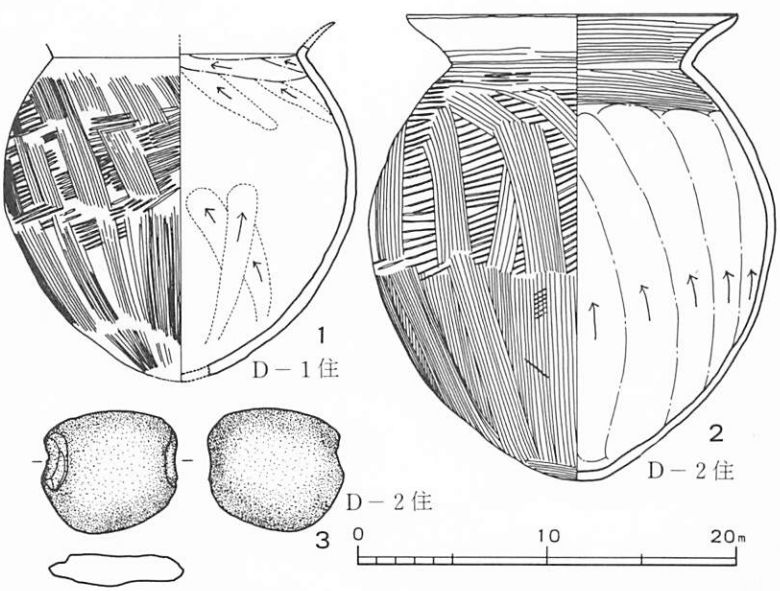
D地区西南隅に在るこの住居跡は、壁面とコーナーの一部を見せ、調査区外へと伸びている。そのため規模については不明である。現状では壁面の長さが約3mを測ることができる。壁面と床面の状態は良い。なおピット1個が床面で検出できた。

遺物（図版25－5、第87図－1）

遺物としては1だけであった。口縁部を欠いた甕である。胴部中位に最大径を有し丸底になり、わずかに倒卵形を呈している。胴部は全面にタタキ目を施し、その後肩部においてはヨコナデを行ない、さらに全面にハケ目を施しタタキ目をかき消している。タタキ目は右上りに施されている。内面は全面ナデ調整で部分的にヘラケズリとナデ調整が見られる。外面にはススの付着を見ることができる。胎土は砂粒を含まず、焼きも堅く良い状態である。なお器壁は 0.5cmと薄く仕上げられている。

8　D－2号住居跡（図版17—2、第86図）

D－1号住居跡と隣接して残された住居跡である。住居跡の半分は壁面が検出されたが、他の壁面は検出出来なかった。また住居跡内には石棺墓と土壙墓が築かれ、さらに西側壁面には大形のピットも掘られ、遺構の状態としてはあまり良くないようである。さて、石棺や土壙墓との関係については一部石材を抜かれているが、住居跡



第87図　D－1・2号住居跡出土遺物実測図

がこれらの遺構に先行するものと判断された。なお、この住居は1辺約4mの規模になるものと思われる。

遺物（図版26－1・2、29－6、第87図－2、3、第113図－7）

住居跡内から散在した状態で出土している。2は口縁部を「く」字形に開き、外湾気味に口唇部へと続き、口唇部ではわずかにつまみ上げている。胴部は中位に最大径を有し、倒卵形を呈している。1に比べると底部がいくぶん尖り気味である。器壁は薄く作られ、外面は胴部上位で右上りのタタキ目を下位では左上りのタタキ目を施し、それらをかき消すように全面にハケ目を施している。内面は口縁部と肩部でハケ目を施しているが、他は全面にヘラケズリを行っている。胎土、焼成も非常に良く仕上げられている。3は角閃安山岩の扁平な礫を利用した石錘である。両端にノッチを加え、76.5gを測る。紡錘車（第113図－7）は直径 5.4cm、厚さ2cmで中心部に直径 0.5cmの孔を有している。

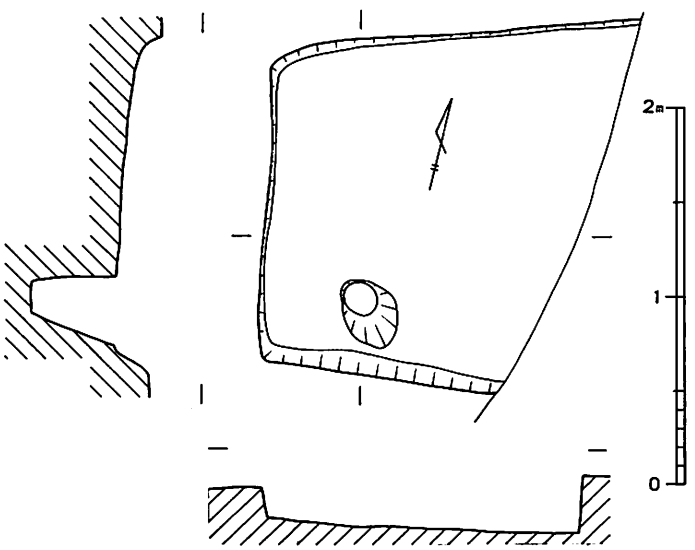
9　D－3号住居跡（第88図）

D地区内東端に位置するこの住居跡は、幅 1.5m、長さ2mにわたって残っており、まだ東側へ伸びている。壁面はしっかりしており、プランとしては長方形を呈している。ただ、規模が小さいため、住居跡とするには多少疑問の残るところである。南側壁面のコーナー近くにピット1個を配している。

遺物（図版26－3～5、第89図）

遺構内から出土した遺物は時期的に二時期に別れ、住居跡の時期についても決定しかねるところである。

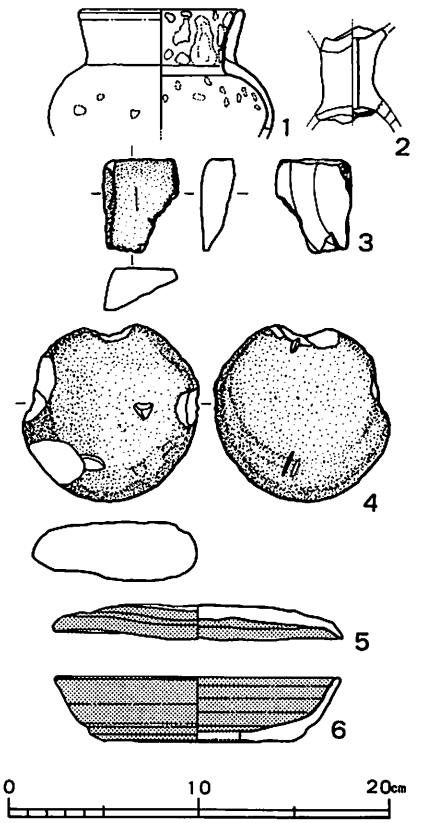
1は小型壺の破片で底部を欠いている。口縁部は直口し、最大径は胴部中位に位置している。口縁部は胴部に貼付しており、接合面を見ることができる。また、器面は内外面共に小さな剝離が見られる。そのため、胎土に含んだ砂粒が見られる。なお、器面は外面では小さなヘラによる研磨仕上げを行い、内面はナデ調整を施している。2は手捏土器である。中心部に直径0.5cmの孔を穿っており、さら



第 88 図　D－3号住居跡実測図

に裾部にも円孔を穿っている。器台か高坏かについては決定しかねているところである。柱状部には砂粒を含んでおり、胎土、焼成ともに良くない。

3と4は石器で、3はアルコーズ質砂岩製の砥石である。研磨面をわずかに残していて、他面は剝離されている。4は角閃石安山岩製の石錘である。周囲にノッチを加えただけの簡単なもので、重さ 262.7gを測る。5と6は土師器でセット関係にあるものと思われる。なお共に全面円塗りを施している。5は直径15.2cm、高さ 1.8cmを測る蓋である。つまみは無く、器形が少し歪んでいる。6は直径15cm、高さ 3.4cmを測る埦である。共に土師器で胎土はきめ細かな土を使い、焼成も良い。



第 89 図
D－3号住居跡出土遺物実側図

10　A－1号木棺墓（第75図）

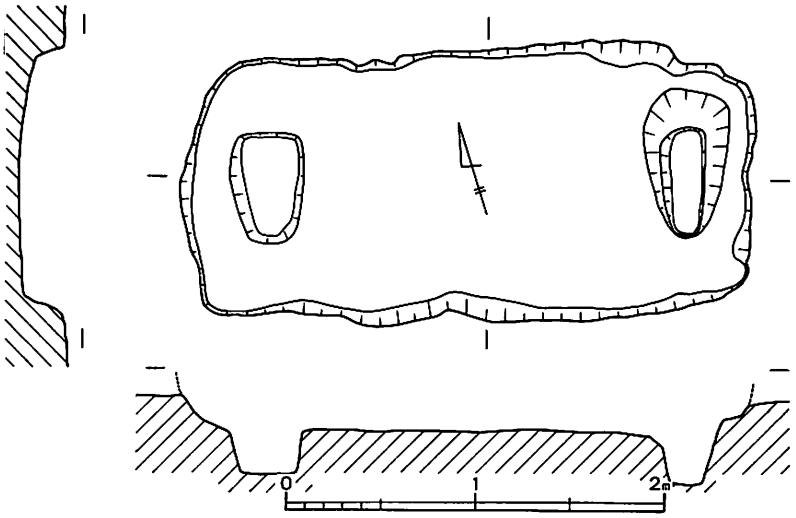
A－2号住居跡に掘り込まれたこの木棺墓は、端部の掘り込みを残し、わずかに壁面を残している程度である。両端部に長さ40～50cm、幅17～28cmの掘り込みが見られる。現長 1.7mを測り、N－74°－Wに主軸をとる。保存状態は悪い。

11　C－1号木棺墓（図版19—1、20—1、第90図）

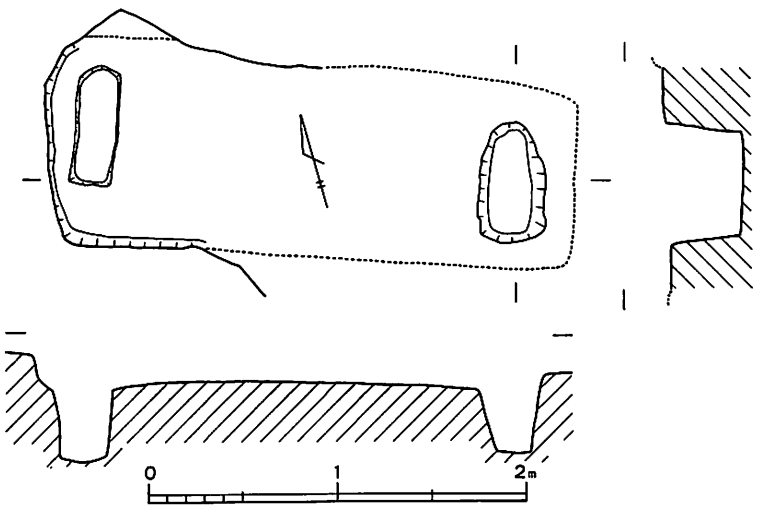
長さ3m、幅1.45mのプランで主軸はN－74°－Wを測る。両端は長さが58cm、幅20～30cmの掘り込みがあり、木棺本体は、端部は55cm前後の幅をもち、長さ 2.5m程度の木材を組み合せたものと思われる。なお、この木棺墓はC－2号木棺墓を切っている。

12　C－2号木棺墓（図版20—1、第91図）

この木棺墓はC－1号に一部を切られており、土壙ラインも不明瞭であった。木棺墓の土壙プランは長さ 2.8m、幅 1.1m程度になると思われ、長軸はN－70°－Wを測る。端部の掘り込みは長さ60cm、幅20～30cmの大きさで、木棺本体は長さ 2.4m、幅 0.6mになる。



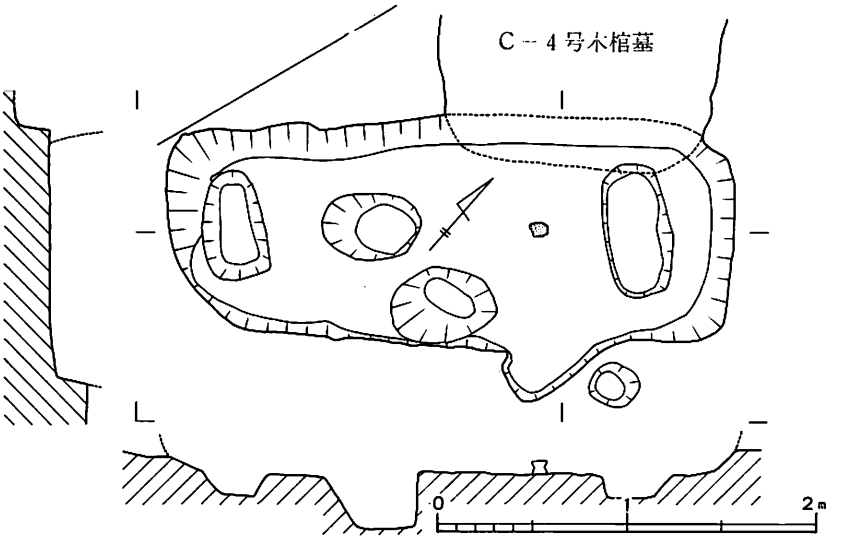
第 90 図　C－1号木棺墓実測図



第 91 図　C－2号木棺墓実測図

13　C－3号木棺墓 （図版19—2、第92図）

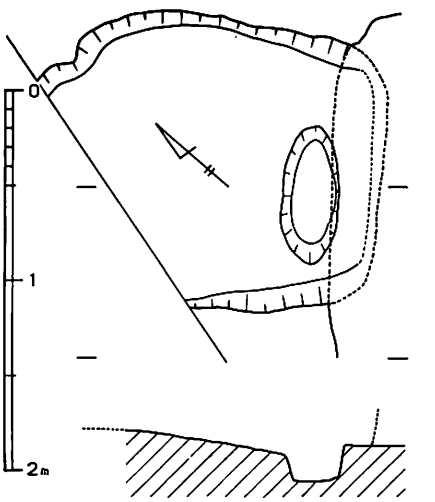
長さ3m、幅 1.2mの長方形プランを呈し、両端に長さ70～60cm、幅30cmの掘り込みを配している。また長軸はN－50°－Eを測り、C－4号木棺墓によって側壁を切られている。床面には2個のピットが掘られているが、時代は新しくなるものと思われた。木棺本体は長さ 2.3m、幅 0.6m程度になるものと思われる。



第 92 図　C－3号木棺墓実測図

14　C－4号木棺墓（第93図）

この木棺墓は、一方でC－3号木棺墓を切り、他方は調査区域外へ伸びているため、全体の規模については不明である。端部には74cm×30cmの掘り込みが見られる。長軸はN－70°－Wを測る。



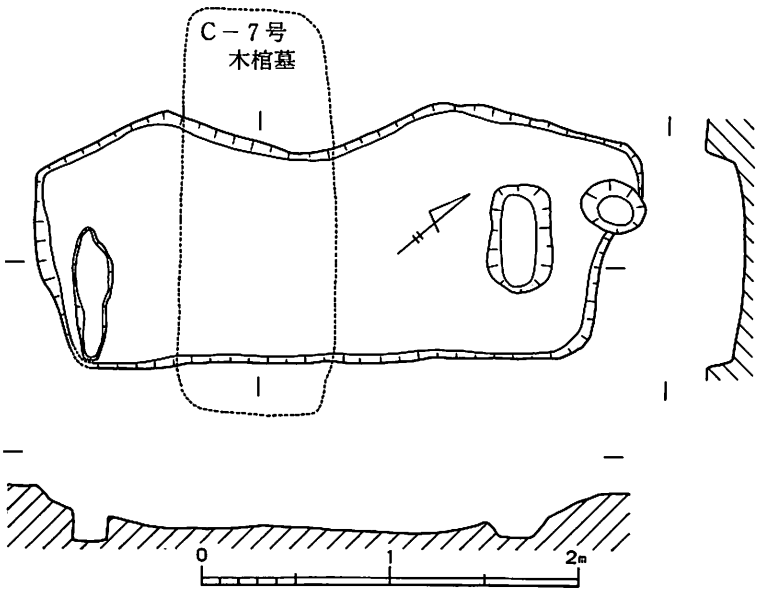
第 93 図　C－4号木棺墓実測図

15　C－5号木棺墓（第94図）

C－7号木棺墓を切ったこの木棺墓は、土壙プランが不整形で、長さ3～ 3.2m、幅 1.1～ 1.6mを測り、長軸はN－42°－Eをとっている。端部には70～60cm、幅20～30cmの掘り込みが見られ、木棺本体は長さ 2.3m、幅 0.6m程度になるものと思われる。

16　C－6号木棺墓

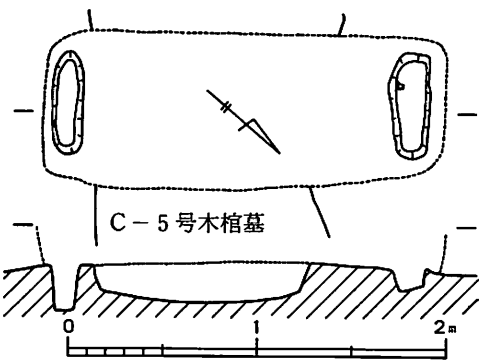
C－7号木棺の西側に位置し、木棺墓の大部分を調査区域外へ伸ばすこの木棺墓は、わずかに端部壁面と掘り込みを残している。



第 94 図　C－5号木棺墓実測図

17　C－7号木棺墓（第95図）

C－5号木棺墓に切られたこの木棺墓は、端部の掘り込みを残すのみで土壙プランの壁面は残っていなかった。端部の掘り込みは長さ56cm、幅16～20cmを測り、長軸はN－40°－Wを測る。なお，端部掘り込みから、木棺本体は長さ 2 m、幅 0.5mになるものと思われる。



第 95 図　C－7号木棺墓実測図

18　D－1号木棺墓（図版20—2、第96図）

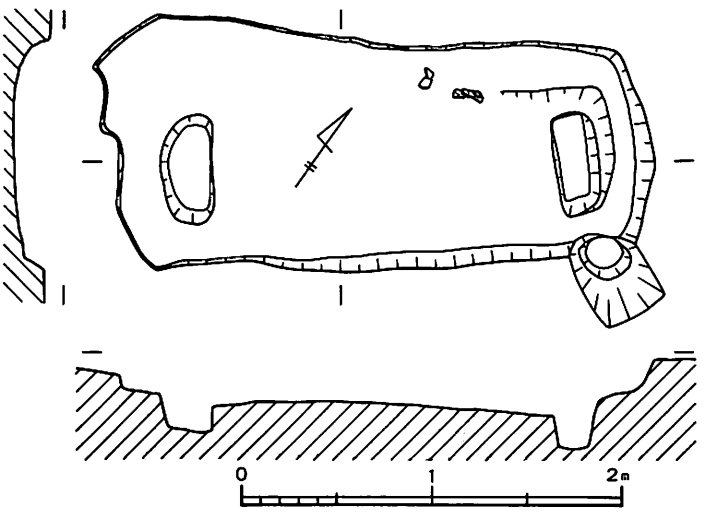
長さ2.84m、幅1.26mの不整形な長方形プランを有するこの木棺墓は、長軸をN－56°－Eに向けている。端部には長さ60～55cm、幅20cmの掘り込みが見られ、一方にはその周辺を一段掘り下げている。このことから木棺本体の規模は、長さ 2.2m、幅 0.6mになるものと思われる。

19　D－1号石棺墓（図版18—1、第97図）

この石棺はD－2号住居跡に隣接していて、すでに蓋石と端石を欠いていた。長さ 1.85m、幅 0.4mを測る堀り込み内に、南側の端石が一枚残っていた。北側の端石は抜き取られ、掘り込みだけが残っていた。なお、側石については、その痕跡を認められず石蓋土壙墓と石棺墓の中間形態とも

言えるものであった。主軸はN－14°－Wを測り、主体部は北側がわずかに広くなっているところから、北に頭を向けたものと判断された。床面は土壙墓と同じく何ら施していなかった。

蓋石や端石の一部が除去されていたのは、現在は工場敷地として造成したため、地表まで約90cmを測るが、以前は段下がりの畑地となっており、旧地表は石棺からわずか25cmのところであった。そのため、畑地耕作時に除去された可能性が強い。端石は安山岩板石を使用していた。

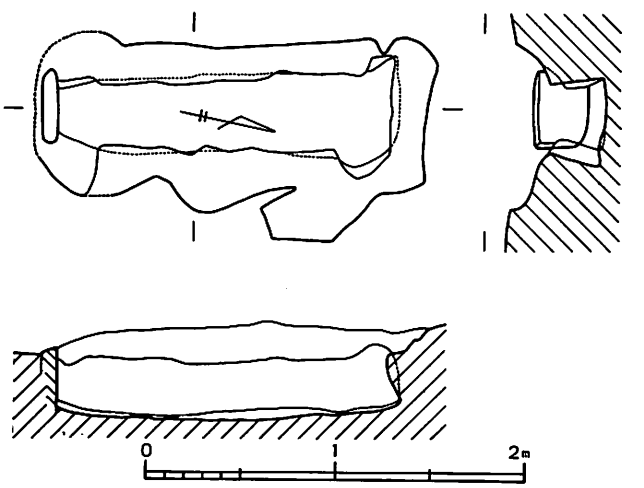


第 96 図　D－1号木棺墓実測図

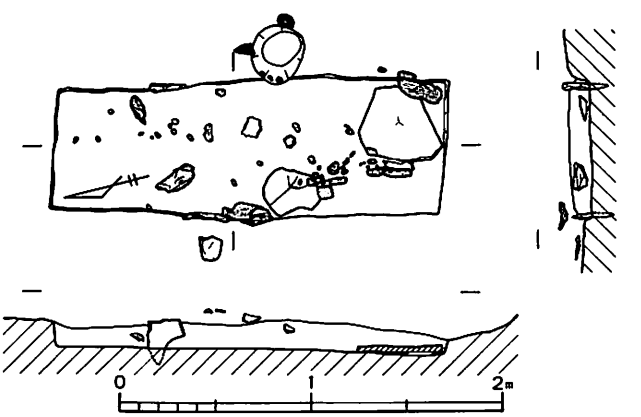
20　D－2号石棺墓

（図版18－2、第98図）

D－2号住居跡の中央部に築かれたこの石棺は、長さ2.07m、幅0.65m～0.75mの長方形を呈し、主軸をN－16°－Eにとる。組合せ式箱式石棺である。安山岩の板石を側石と床面に利用していて、蓋石や端石はすでに失なわれていた。床面は安山岩の他に白粘土や砂礫を敷いていた。この石棺も先のD－1号棺と同じで耕作時に破壊されたものと判断された。住居跡との関係は、住居が先行し、その後石棺が築かれたものと判断された。



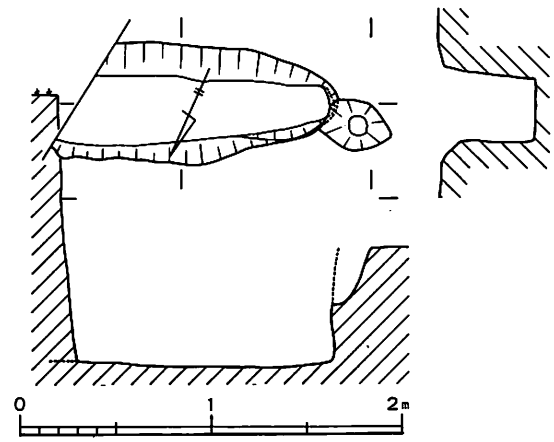
第 97 図　D－1号石棺墓実測図



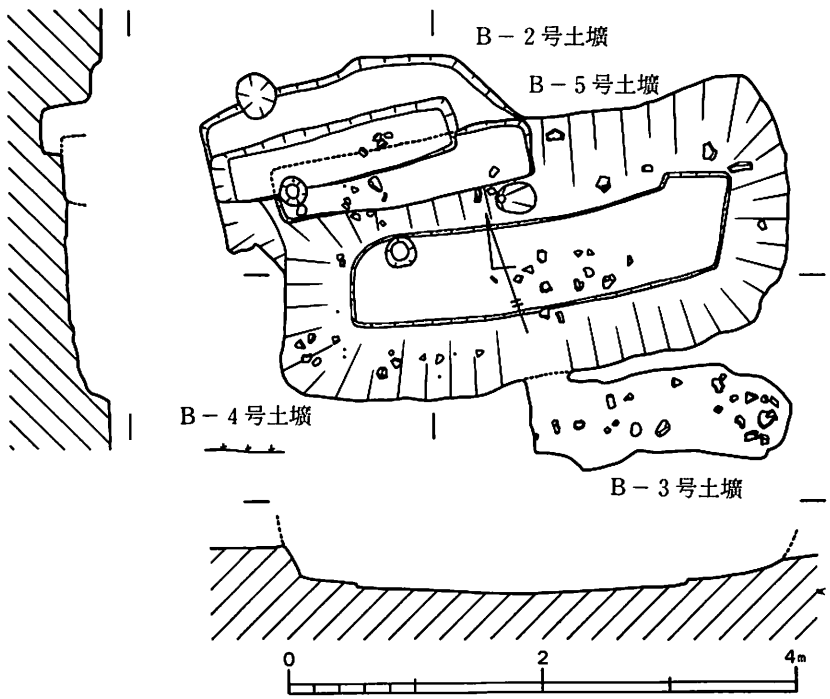
第 98 図　D－2号石棺実測図

21　B－1号土壙墓（図版21－2、第99図）

B地区東側に位置するこの土壙墓は、東端部を調査区域外へ伸ばしているため、規模については不明である。現長 1.5m、上部幅0.63m、下部幅0.34m、深さ0.64mを測り、主軸はN－68°－Eにとっている。この土壙は上部では開き気味に断面が広がっているのが、下部においてはほぼ垂直に壁面を形成している。床面には何ら敷きつめておらず、副葬品も見出すことはできなかった。



第 99 図　B－1号土壙墓実測図



第 100 図　B－2・3・4・5号土壙墓実測図

22　B－2号土壙墓（図版21－1、第100図）

この土壙墓はB－5号土壙墓を切り、B－4号土壙墓と隣接している。土壙本体は長さ1.97m、幅0.47m、深さ 0.4mの長方形のプランを呈していて、主軸をN－88°－Wにとり、ほぼ東西に向け

ている。

23　B－3号土壙墓（図版21－1、第100図）

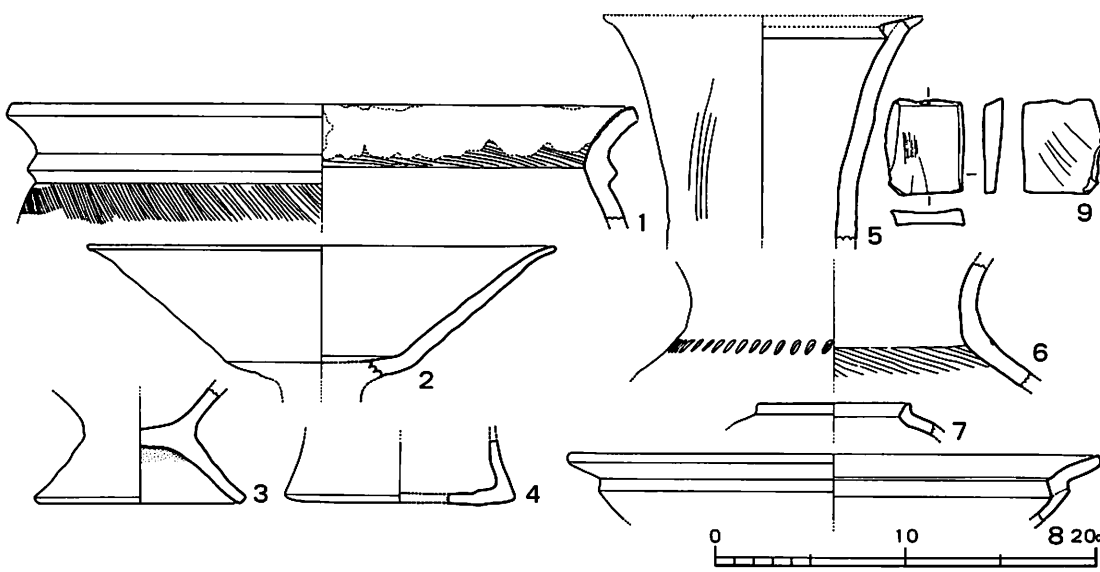
不整形なプランをもち、掘り込みも不明瞭であったが、明らかに土層の変化が見られ、土壙墓として取り扱った。B－4号土壙墓の南側に位置してわずかに接しており、長さ2.07m、幅0.63mを測り、主軸はN－76°－Wを測る。

遺物（図版26－7・8、第101図－1～4）

この土壙墓内埋土中に多くの遺物を含んでおり、土壙墓の副葬品と考えるには疑問の残る出土状況であった。

1は甕の口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部は「く」字形に開き、直下の頸部に三角形の貼付突帯を1条めぐらしており、内面にはゆるやかな稜を見ることができる。器面は口縁部外面から頸部にかけてはヨコナデを施し、胴部にはハケ目調整を行っている。内面は、口縁部はハケ目調整で、頸部以下はナデ調整を施している。なお、口縁部内面においては器面の剝離が著しく、わずかにハケ目を認める程度であった。胎土は砂粒を含み、あまり良い土ではないが、焼成は良く、堅く焼き締っている。わずかではあるが頸部内面に赤色顔料の付着を見ることができる。

2は高坏で、脚部を欠いている。この高坏は口縁部が非常に大きく開き、坏部のほとんどが口縁部で、胴部はわずかに見られる程度である。口径24.7cm、高さ約7cmの坏部になる。器面は内外面共に細かなヘラによる研磨を施している。胎土は砂粒を含まず良い土を使っており、焼きも良い。3は脚台で胴部以上を欠いている。脚台内部は砂粒の付着が見られるが、他はナデ調整を施している。焼きは良く堅く締っている。4はジョッキ形土器の破片である。底部から胴部にかけての破片で、



第101図　B－3・4号土壙墓出土遺物実測図

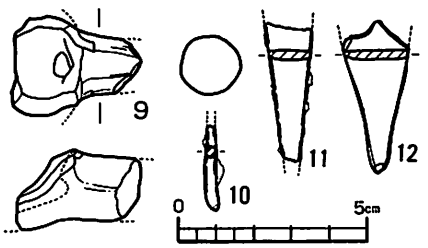
把手の有無については不明である。器面は胴部はナデ調整で、底部外面はきめ細かなハケ目を施している。砂粒を含む胎土で、焼成も良く、堅く焼き締っている。

24　B－4号土壙墓（図版21—1、第100図）

B地区内に重複する土壙墓の中で最大規模を有するのがB－4号土壙墓である。土壙墓は長さ4m、幅2m、深さ0.3mの掘り込みの中心部に、長さ3m、幅0.7m、深さ4cmの長方形を呈したプランで、主軸をN－80°－Wにとって位置している。なお、この土壙墓は東側に張り出し部を見ることができる。また土壙墓内にはピット2個が見られるが、時間的には差異が見られるものと判断された。

遺物（第101図－5～8、102図）

この土壙墓においても埋土中に遺物を含んでおり、土壙墓の時期と判断するには疑問が残るところである。



第102図　B－4号土壙墓出土遺物実測図

5は鋤先形の口縁部を呈しており、長頸壺になるものと思われる。口唇部は先端を欠いているが、断面から三角貼付を行って鋤先状を形成していることが観察される。器面は外面はハケ目調整後ナデ消している。胎土は砂粒を含まず、堅く焼き締めている。6も壺で頸部の破片である。頸部には刺突文をめぐらし、器面は外面はナデ調整を施している。内面は胴部ではハケ目を施し、頸部はナデ調整を行っている。焼成は良く、胎土も砂粒が少ない。7は短頸壺でミニチュアとも言える小さな土器である。口縁部は短く直口し、肩部以下は欠いているが大きく胴部が広がっている。きめ細かな粒土で、焼き締っている。8は高坏である。坏部口縁部から胴部にかけての破片で、脚部と坏部胴部の大半を欠いている。口縁部は直口する短い頸部に続き、大きく開いている。断面には粘土接合面を見ることができる。頸部には内外共にシャープな稜線をめぐらしている。

9は土製品で、土製柄杓の破片である。柄の先端と、体部の多くを欠いているため、全体の大きさは不明である。きめ細かな粘土を堅く焼き締めている。

10～12は鉄器片である。10は針状をした鉄器で、先端を欠いているため器種については不明である。11は扁平な鉄片で、両端を欠いている。また側面を観察すると、かなり歪んでいる。器種不明の鉄器である。12は鉄鏃である。先端を欠くが扁平な断面で、基部は厚味を増している。

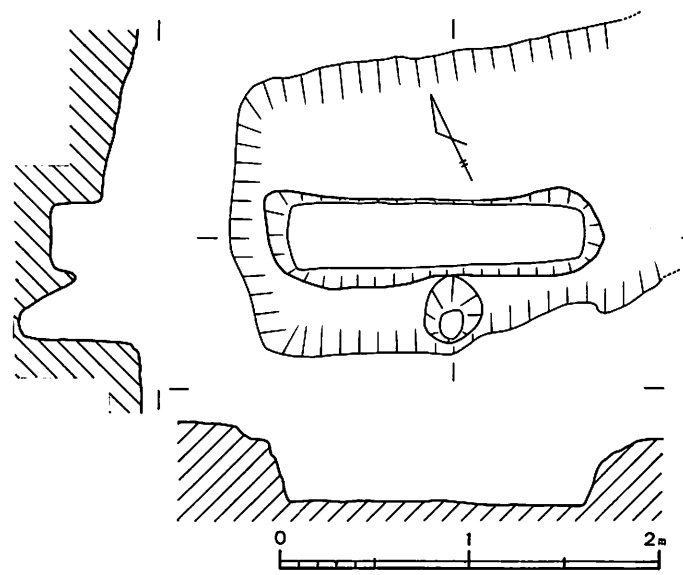
25　B—5号土壙墓（図版21—1、第100図）

B—4号土壙墓を切り、B—2号土壙墓に切られたこの土壙墓は長さ2.05m、幅0.5m、深さ0.23m²を測り、主軸はN—83°—Wを測る。プランは長方形を呈し、切り合っているため土壙墓は浅く、わずかに東側端部で本来の深さを残している。

26　C－1号土壙墓

（図版22—1、第103図）

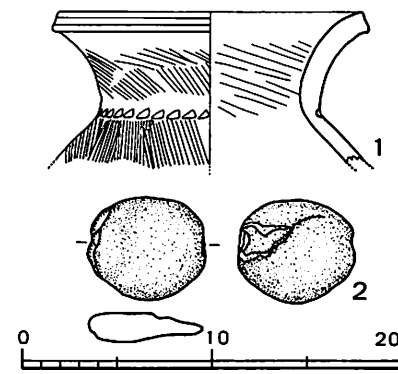
長さ1.79m、幅 0.4m、深さ0.26mを測り、主軸をN－65°－Wにとる。この土壙墓は、長さ約 2.2m、 幅1.5mの長方形を呈した浅い土壙の中に築かれている。外周の土壙の中心よりやや南に位置しているが、土壙墓に伴なうものと思われた。



第103図　C－1号土壙墓実測図

遺物（図版26－9、第 104図）

1は壺で、口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は大きく開き、口唇部は平坦に切られヨコナデによる条痕を数条残し、下端部はわずかにつまみ上げたようなふくらみが見られる。頸部には刺突文をめぐらしている。器面は外面ではハケ目調整を全面に施しており、内面では口縁部にハケ目を施しており、頸部以下にはナデ調整を行っている。砂粒を含んだ土であるが、堅く焼き締めている。2は角閃石安山岩の礫を利用した石錘である。両端にノッチを加えており、重さは62.7ｇを測る。



第104図　C－1号土壙墓出土遺物実測図

27　D－1号土壙墓

D－2号住居跡の東側壁面を切る位置に在る土壙墓で、不整形な長方形のプランを呈している。床面も不明瞭であるが、わずかに長方形を呈していたため土壙墓として取り扱った。

遺物（図版26－11、第101図－9）

遺物としては砥石が出土している。きめ細かな砥石で、仕上砥である。研磨は上下二面を行い、周囲はあまり使用されていない。上面は中央部が凹み、下面は部分的に凹みが見られる。

28　D地区土器溜め（第105図）

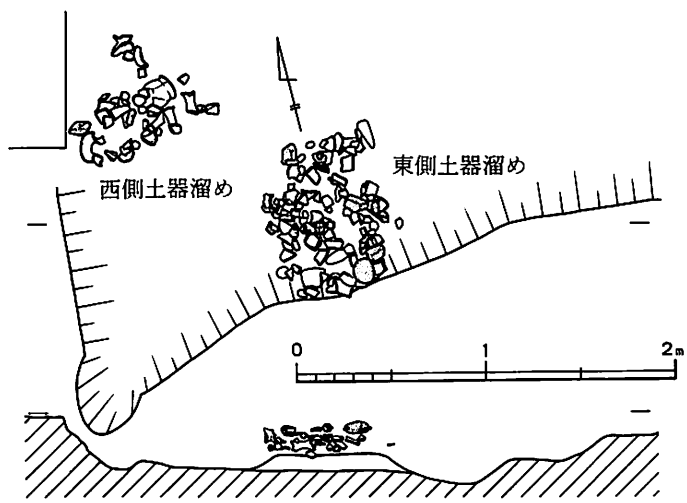
D地区東北隅に位置するこの土器溜めは、調査区域外に伸びるため、一部拡張して全体を露出した。その結果、東側と西側とに分かれた小規模な土器溜めであることが判明した。東側土器溜めは、

西側のそれより遺物の量も多く、礫も多く見られた。西側土器溜めは、遺物の量も少なく、規模も小さくなっている。なお東側土器溜めは、堅く締った土層の上に乗った状態であった。また、東西土器溜めを含めるように、方形のプランを有した掘り込みが見られ、住居跡を利用して土器を廃棄したものと思われた。

遺物（図版27、28－1、第106、107図）

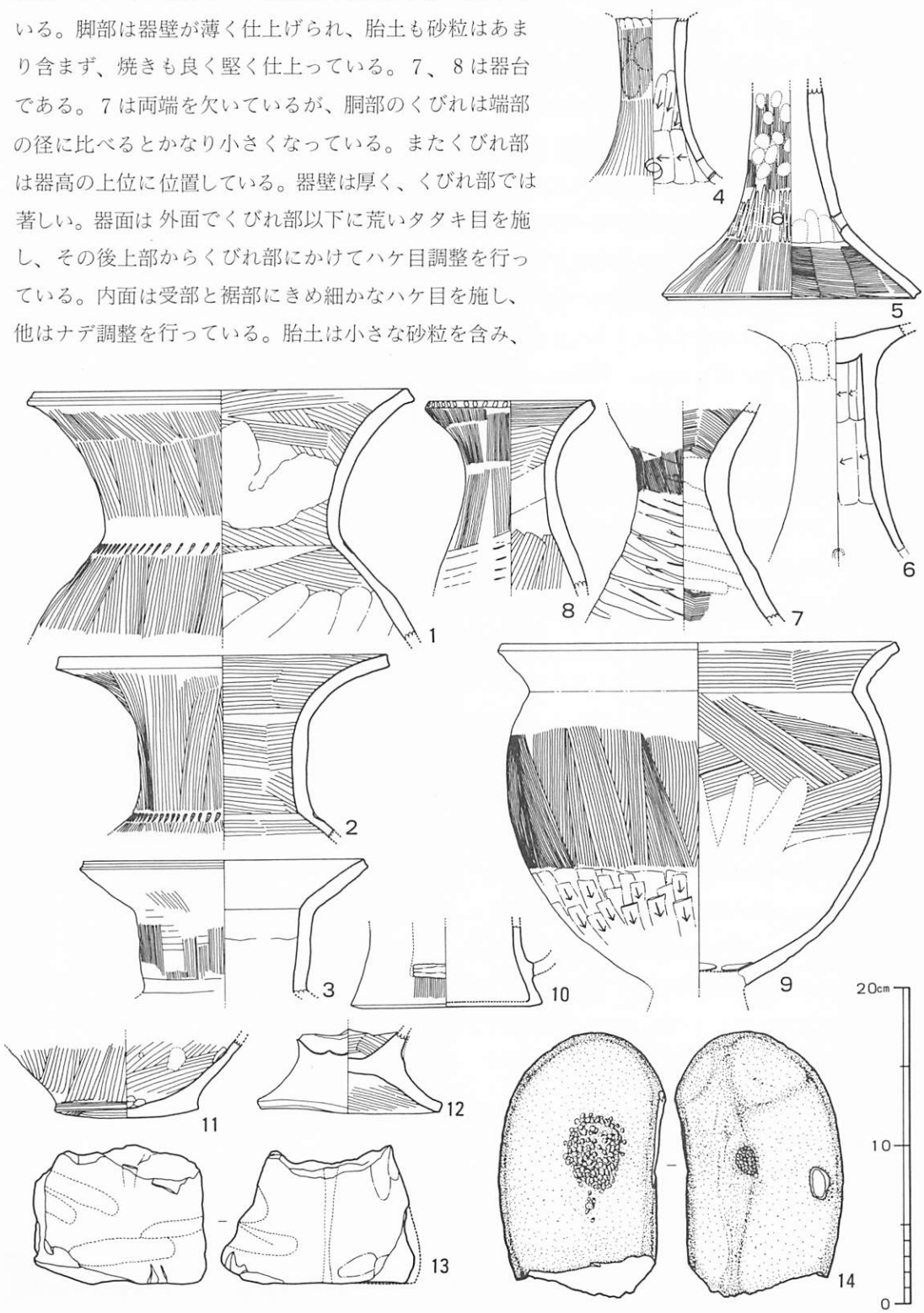
(1)東側土器溜め出土遺物（1～14）

1～3は口縁部が大きく開く壺で、1、2においては頸部に刺突文をめぐらしている。1は口径23.3cmを測り、頸部から口縁部にかけてはラッパ状に開き、口唇部は浅い凹線をめぐらしている。胴部は大半を欠いているが、最大径を胴部中位に有するものと思われる。器面は全面荒いハケ目調整を施し、肩部内面においてはナデ調整を施している。口縁から頸部にかけて、内面においては器面の剝離が著しい。胎土はあまり砂粒を含まず、焼きも良いようである。2も1と同様の壺である。頸部にめぐらせた刺突文は、刻目を端部に有した工具で行っていることが観察された。また器面は全面ハケ目を施しているが、二種類のハケ目が使用されていることがうかがえる。3は1、2とは多少異なる壺である。口縁部は大きく開くが、頸部からは直口した口縁部が続き、その後「く」字形に大きく開いている。そのため内面には稜線が1条めぐっている。器面は外面ではタタキ目を施し、その後ハケ目調整を施し、さらに口唇部近くではヨコナデを行っている。内面は全面ナデ調整を行っている。胎土、焼成共に良く仕上がっている。4～6は高坏で、いずれも坏部を欠いている。4は坏部と脚裾部を欠いており、裾部中位に4個の円孔を配している。器面は外面においては、柱状部で指頭による調整を行った後ヘラ研磨調整を行っている。裾部ではハケ目の後、ヘラ研磨を行っている。内面は柱状部ではヘラ状工具によるナデ調整を行っており、裾部はヘラケズリを行っている。砂粒は少なく、堅く焼き締めている。5は坏部を欠き、脚部は柱状部が裾部に向って次第に広がり、裾部は内湾気味に大きく開いている。裾部中位には3個の円孔を配している。器面は外面ではハケ目調整後、ヘラ研磨調整を行い、内面は柱状部ではナデ調整、裾部はハケ目調整を施している。また裾端部はヘラ描きによる浅い凹線がめぐっている。6は坏部上位と脚裾部を欠いている。この高坏は柱状部が長く、裾部中位に4個の円孔を配している。坏部と脚部との接合部には粘土の栓をさし込んでおり、半球状に脚内部で見ることができる。また器面は外面ではナデ調整を行い、接合部では指頭圧痕を見ることができる。内



第105図　東西土器溜め実測図

面はヘラケズリを行ない、裾部近くはナデ調整を施している。脚部は器壁が薄く仕上げられ、胎土も砂粒はあまり含まず、焼きも良く堅く仕上っている。7、8は器台である。7は両端を欠いているが、胴部のくびれは端部の径に比べるとかなり小さくなっている。またくびれ部は器高の上位に位置している。器壁は厚く、くびれ部では著しい。器面は外面でくびれ部以下に荒いタタキ目を施し、その後上部からくびれ部にかけてハケ目調整を行っている。内面は受部と裾部にきめ細かなハケ目を施し、他はナデ調整を行っている。胎土は小さな砂粒を含み、



第106図　東側土器溜め出土遺物実測図

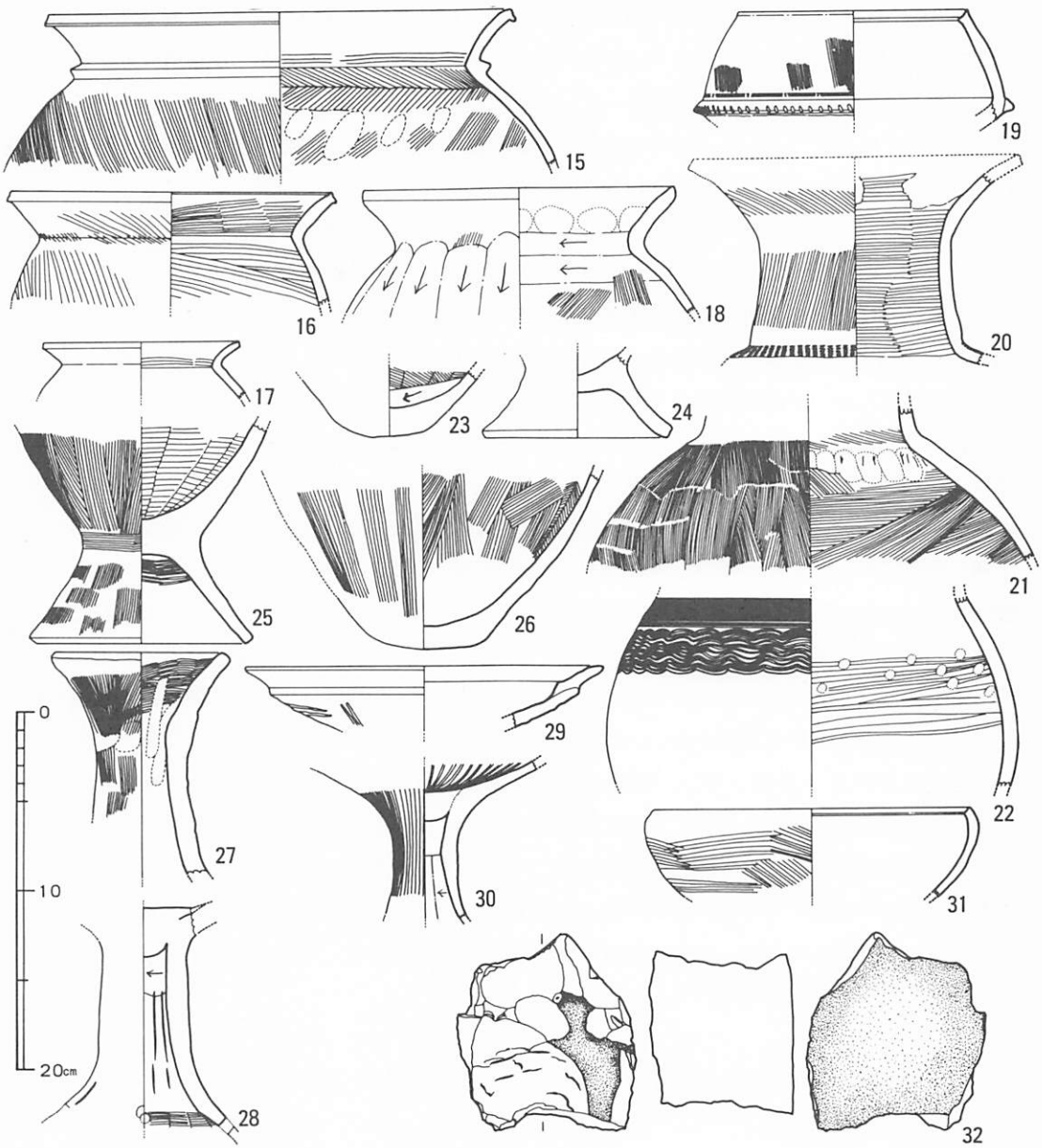
堅く焼き締っている。8は裾部を欠く器台で、口唇部には先端に数条の刻みを入れた工具によって刻目が施されている。この器台もくびれ部を上部に有し、かなりしぼりこんでいる。器面は外面では全面にタタキ目を施し、その後ハケ目でかき消している。内面は受部では外面と同じきめ細かなハケ目であるが、裾部では荒いハケ目を施している。内面の調整は受部から、くびれ部、裾部と進んでいることが観察できる。砂粒を多く含む胎土だが良く焼かれている。9は鉢である。口縁部は「く」字形に外反気味に開き、中位においては肉厚になっている。頸部は内面に1条のシャープな稜をめぐらしているが、外面はゆるやかにカーブしている。胴部の張りは少なく、最大径は上部に位置し、底部へと向っている。底部を欠いているが、粘土接合面で剝離しており、底部は脚台になるものと思われた。なおこの剝離は、焼成前すでに亀裂が生じており、内外面共に粘土の補強を行っている。そのため接合面はよく火がまわり、同じ色を呈している。器面は外面では、口縁部から頸部にかけてはヨコナデを施し、肩部から胴部中位はハケ目、その下にはヘラケズリを施している。内面は口縁部ではハケ目の後ヨコナデを行い、胴部はナデ調整後ハケ目を施し、さらに部分的にナデ消している。胎土は砂粒をあまり含まず焼きも良い。10はジョッキ形土器で、胴部下位から底部にかけての破片である。胴部には把手が装着されていたが、接合部から欠けている。器面はナデ調整で、わずかに把手接合部にハケ目を見ることができる。胎土、焼成とも良く、美しく仕上げている。11、12は底部である。11は平底でわずかに中央部がふくらんでいる。また胴部へは少し立ち上がり気味に開いている。器面は内外面共に荒いハケ目を施している。砂粒は含まず、堅く焼き締っている。12は脚台で上部を欠いている。胴部内は荒いハケ目を施し、脚台内面は荒いハケ目の後ナデている。13は未焼成の土製品である。上部を欠いているため器形は不明であるが、中心部には直径1cmの円孔を底部に向って穿っている。また外面は指圧痕を残しつつナデ調整をしている。現況では沓形を呈しており、恐らく土製支脚になるものと判断される。いずれにしても未だ火を加えられておらず、器面は欠いた部分も含め同じ色調を呈している。また器面が剝離した部分はザラザラと粘土が落ちてくるのである。未焼成の土製品が存在することにより、方保田東原遺跡における土器生産の一面をうかがうことができよう。

14は火山岩の礫である。平坦部中央には叩きによる器面の剝離が見られ、稜線の一部においても剝離が見られる。明らかに使用されたものである。

図版27－6は、粘土塊である。周辺は欠いているが、器面には植物性繊維の圧痕とヘラ状工具の端部による圧痕を残している。砂粒を含む土で、焼成はあまり良くない。形状、用途については不明であるが、土製支脚の可能性が強い。

(2)西側土器溜め（15～32）

15～18は甕である。15は胴部以下を欠く甕で口縁部は鋭く「く」字形に開き、外反気味に口唇部へと向う。口唇部は下端をつまみ上げている。頸部には三角形の貼付突帯を1条めぐらし、内面においてはシャープな稜をめぐらしている。胴部は最大径を中位に有し、大きく張り出している。器は口縁部外面がナデ調整で、それ以外はハケ目調整を行っている。また肩部内面には指頭圧痕を残している。器壁は薄く仕上げられ、砂粒の少ない胎土で、堅く焼かれている。16は口縁部を外反気



第107図　西側土器溜め出土遺物実測図

味に「く」字形に開き、口唇部は平坦になり、両端はつまみ上げている。頸部内面には稜をめぐらし、胴部の張りは弱い。器面は全面ハケ目調整を施している。胎土は砂粒を含み、焼成もあまりよくない。17は小型の甕で、口縁部近くの破片である。口縁部は外反気味に開き、胴部の張りは大きくなっている。口縁部内面にハケ目を残し、他はナデ調整である。砂粒を含まない胎土で、焼成はあまり良くない。18は手捏風の土器で指頭圧痕による凹凸がひどく、さらに胴部外面も荒くヘラケズリを行っている。19は複合口縁の壺である。複合口縁部下端には三角形貼付突帯をめぐらし、さらに刻目を施している。口唇部はわずかに凹み、両端がつまみ上げたようにふくれている。器面はナ

デ調整が主で、わずかに外面でハケ目を残している。砂粒を含まない胎土で、良く焼かれている。

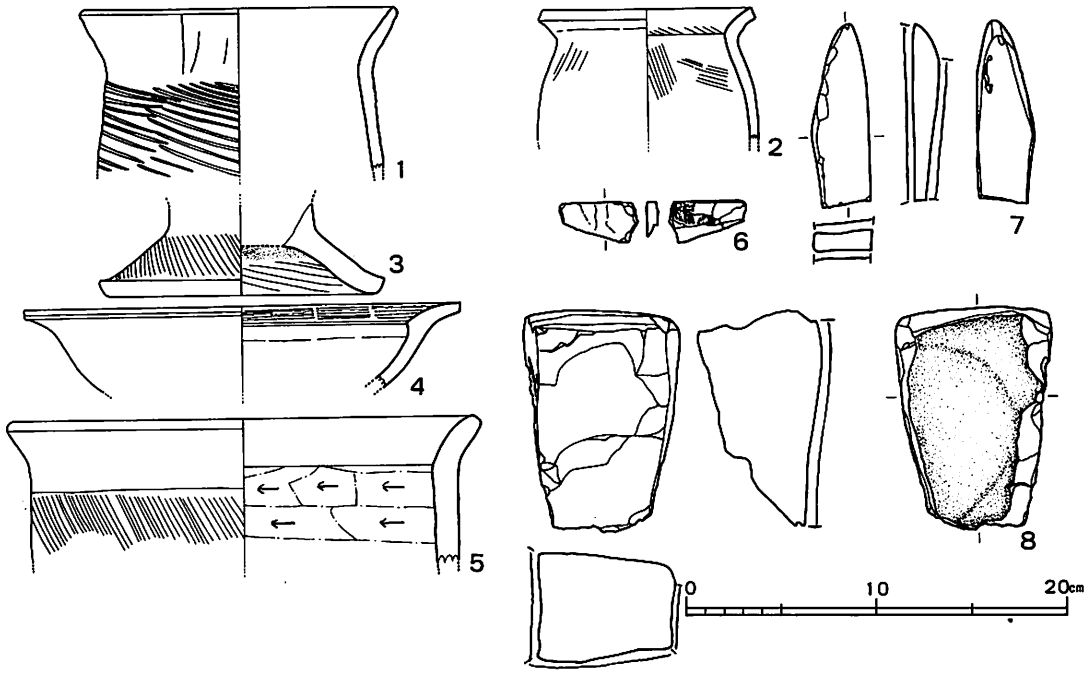
20～22は口を大きく開く壺である。20は口唇部と胴部を欠いている。頸部には櫛描簾状文をめぐらしており、器面は全面にハケ目を残している。また口縁内面には器面剝離が見られた。砂粒を含む胎土で堅く焼き締っている。21は口縁部と胴部下位を欠いている。最大径は胴部中位に在ると思われる。器面は外面では胴部にきめ細かなハケ目を施し、頸部から口縁部にかけてはヨコナデ調整を行っている。内面は頸部に指頭圧痕を残し、他はハケ目調整を施している。砂粒は含まず、堅く焼き締っている。22は胴部だけである。頸部から肩部にかけては櫛描の直線文と波状文をめぐらしている。内面は荒いハケ目で、指頭圧痕を残している。胎土、焼成ともに極めて良い。23～26は底部である。23は尖り気味な丸底である。器壁が厚く、内面においてはハケ目とヘラケズリを施しているが、外面にはナデ調整を行っている。砂粒を含み、焼きはあまり良くない。24は脚台で全面ナデ調整を施している。25も脚台であるが、24に比べると裾部が長くなっている。器面は全面ハケ目調整を行っている。26はやや丸味を帯びた平底で、器形に比べると小さな底部である。器面はハケ目調整を施し、胎土には砂粒を含み、焼きはあまり良くない。27は器台である。裾部を欠くが全体に細い器台である。くびれ部は上位に位置し、器壁は厚くなっている。器面はハケ目を施し、部分的にナデている。砂粒を含んでいるが、焼成は良い。

28～30は高坏である。28は坏部上位と裾部を欠いているが、裾部中位に4個の円孔を配している。坏部との接合は、脚内部へ粘土栓を詰めており、その後坏部を調整している。脚部は柱状部が高く内面はヘラケズリとナデ調整を行い、外面はナデ調整である。裾部内面においてはハケ目を残している。なお柱状部の器壁は厚い。砂粒を含む胎土で、焼き締っている。29は口縁部から坏部にかけての破片である。断面においては口縁部形整段階を知り得る粘土接合状態が観察できる。30は坏部上部と脚裾部を欠いている。柱状部は細く、内面はヘラケズリを施している。なお接合部は、脚内部に粘土の栓を詰めており、28と同様の方法である。坏内面にはヘラ研磨による条痕が見られる。31は鉢で、口縁部がわずかに内向している。外面はハケ目調整で、ススの付着が著しい。32は火山岩の石皿である。器面の剝離が著しい。

29　遺構に伴なわない遺物　（図版22—2、28—5～7、29、第108～115図）

(1)A地区内出土遺物（図版29－1、第108、109図）

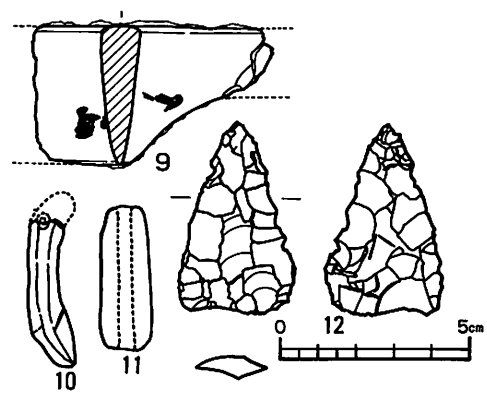
1は甕で、口縁部のみの破片である。この甕は口縁部を「く」字に開き、内湾気味に口唇部へ向っている。頸部はゆるやかに折れ、胴部の張りは極めて少なく胴長になる。底部は欠いているが丸底になると思われる。器面は外面では、口縁部はナデ調整、胴部は右上りの荒いタタキ目を施している。内面は全面ナデ調整である。胎土は砂粒をあまり含まず、焼成は良い。2は小型の甕である。短い口縁部は外反気味に開き、口唇部はわずかに凹んでいる。胴部の張りは小さく、器面は外面ではハケ目調整後ナデ消しており、内面にはハケ目を残している。胎土は砂粒を含まず、堅く焼き締っている。3は脚台で上部を欠いている。この脚台は器壁が厚く、器面は荒いハケ目調整を行っている。脚内面には砂粒の付着を見ることができる。5は土師器で甕もしくは甑になる。口縁部はわ



第108図 遺構に伴わない遺物実測図（A地区）

ずかに開き、器面は外面は全面ハケ目で、口縁部はヨコナデで消している。内面は口縁部がヨコナデ、胴部はヘラケズリを施している。胎土はあまり砂粒を含まず、焼きはあまり良くない。

6は粘板岩製の石庖丁片である。自然面を一面残しているが、他面には研磨面を残している。7は砥石である。細長い研磨面は中央部がわずかに凹んでいる。側面は自然面を利用し、研磨痕を認めることができる。8も砥石である。基部に自然面を残し、側面と1面が研磨を受け、他面は剝離している。アルコーズ質砂岩である。

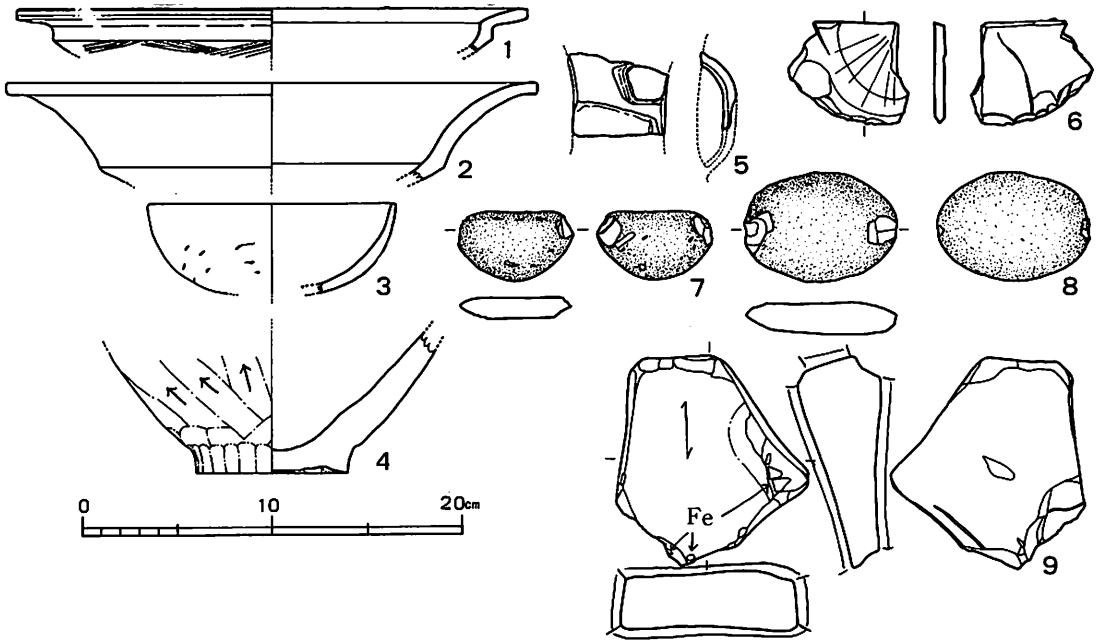


第109図 遺構に伴わない遺物実測図
（A地区）

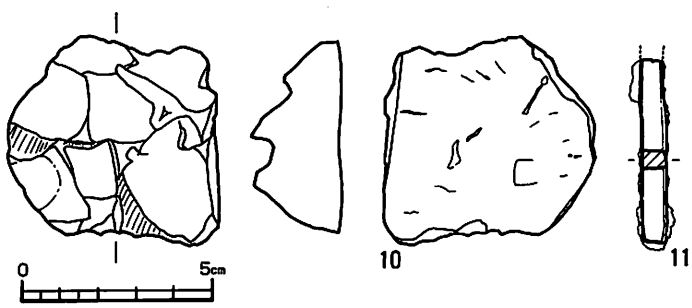
9は直刀の破片である。両端を欠いているが、身幅 3.7cm、棟幅 1.1cmを測ることができる。10は土製勾玉である。頭部を欠き、わずかに穿孔部を残している。勾玉としては粗末な作りである。11は長さ 3.8cm、直径 1.3cmの土錘である。中心には直径 4.5mmの円孔を穿っている。12は結晶片岩製の石鏃である。長さ5cm、幅2cmの三角形を呈している。

(2)C地区内出土遺物（図版29－1～3・5・7・8、第110　111図）

1、2は高坏で、口縁部片である。1は口縁部が短かく、大きく開いている。坏部外面にはハケ目を施しているが、他面はナデ調整である。砂粒を含む胎土で、焼きはあまり良くない。2は口縁



第110図　遺構に伴わない遺物実測図（C地区）



第111図　遺構に伴わない遺物実測図（C地区）

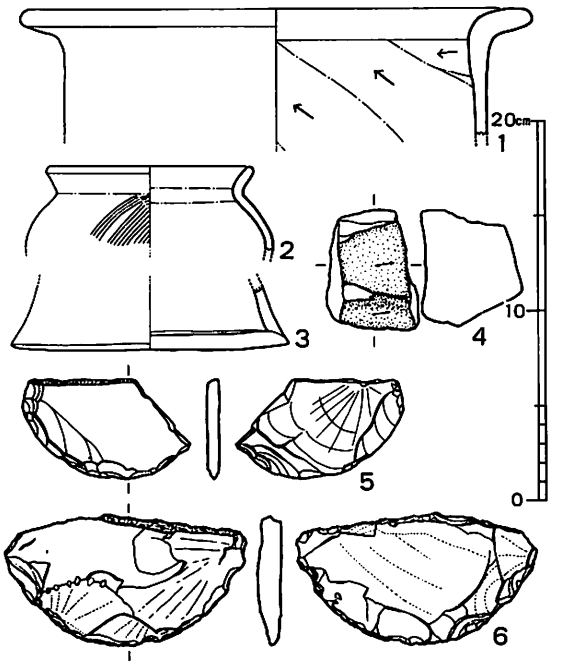
部が長く、外反しつつ大きく開いている。器面は全面ナデ調整で、砂粒が少ない胎土で、焼成は良い。3は鉢である。底部を欠くが、丸底になる。器面は外面では、シワが見られるが、細かいハケ目を一部に施した後、全面をナデ調整している。砂粒が多く、焼成は良い。4は器壁が厚い平底の底部である。外面は胴部ではヘラケズリ、底部では指頭による調整を施しており、内面においては器面の剝離が著しく、調整方法の観察はできない。胎土に砂粒を含み、焼成も悪い。5はジョッキ形土器の把手である。両端を欠いているが、幅5cmを測る。砂粒を含まない胎土で、焼きも良く堅く締っている。6は粘板岩製の石庖丁で、未製品の破片である。主要剝離面を残し、背を直線に、刃部は湾曲して作りつつある。刃部は荒打ちの状態で、打撃痕を残している。この石庖丁は整形した段階において破損したものであり、研磨の段階には至っていない。7と8は礫の両端にノッチを加えた石錘である。7は結晶片岩製で38gを測り、8は角閃石安山岩製で122.5gを測る。9は全面を研磨された砥石で、アルコーズ質砂岩製である。この砥石には鉄錆の付着が見られ、A－2号住居跡出土砥石（第71図－12）と同じく、鉄器を砥いでいたものと判断される。10は用途不明の土製品である。一面は平坦に作られ、他面には粘土を幾重にもつまみ

上げている。あたかも土製鏡のような作りであるが、一端を欠いているためその形状が少し異なり、楕円形に近い形になるものと思われる。11は鉄鏃の茎である。先端を欠いており、断面は四角形を呈している。

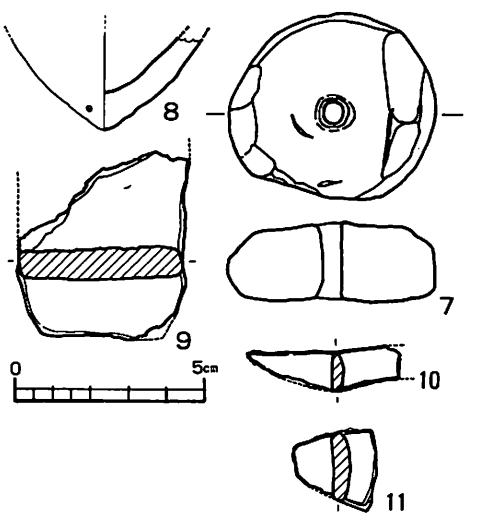
(3)D地区内出土遺物（図版29－4・9・10、第112～115図）

1は土師器である。口縁部が肉厚で「L」字形に開いている。胴部の張りが少なく、内面はヘラケズリである。外面は全面ナデ調整である。砂粒を含んだ胎土で、焼成はあまり良くない。2は小型の広口壺である。短い口縁部がゆるやかに開き、胴部は中位に最大径をもち、大きく張っている。器面は外面でハケ目を施し、内面はナデ調整である。3はジョッキ形土器の底部片である。底部の器壁が厚く、断面には粘土接合面を観察することができる。4はアルコーズ質砂岩製の砥石である。周囲を大きく欠いているため、研磨された面はわずかに2面を残すのみである。また剝離面の一部には黒く変色した部分も見られ、火を加えられたものと思われた。5と6は粘板岩製の石庖丁の未製品である。5は背に自然面を残し、主要剝離面も見られる。刃部は半月形に整形された段階で、打撃痕を残している。一方の端部を欠いており、この時点で加工は止っている。この後、荒砥、穿孔、仕上砥といった段階になっていくのである。6も背部に自然面を残し、半円形に形を整えた段階の石庖丁である。刃部には打撃痕を残し、穿孔、砥ぎの段階には至っていない。8はミニチュア土器で尖底になっている。底部近くには刺突文が施されている。

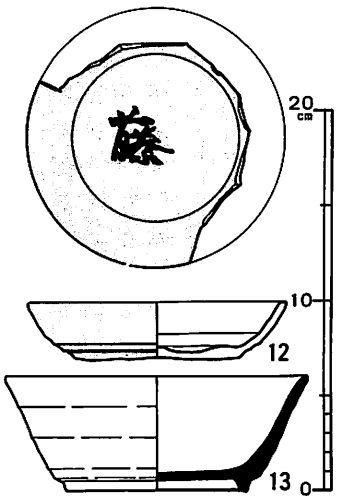
9～11は鉄器である。9は先端を欠いているが、基部は四角に形を整えている。幅 4.35cm、厚さ0.8cmを測り、重さは40.9gを計る。この鉄器は、



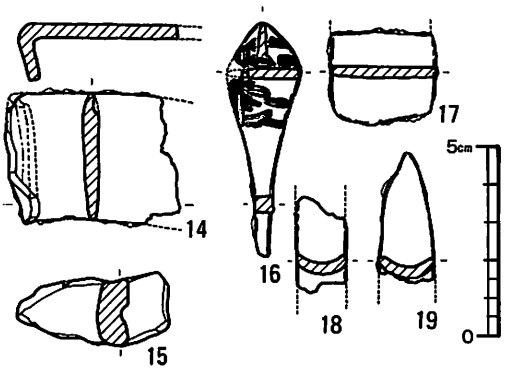
第112図　遺構に伴わない遺物実測図（D地区）



第113図　遺構に伴わない遺物実測図（D地区）



第114図　墨書土器、共伴土器実測図



第115図　遺構に伴わない鉄器実測図

鉄鋌になると思われる。10は小型の刀子片で、茎を欠いていて刀身は曲っている。11は器種不明の鉄片である。

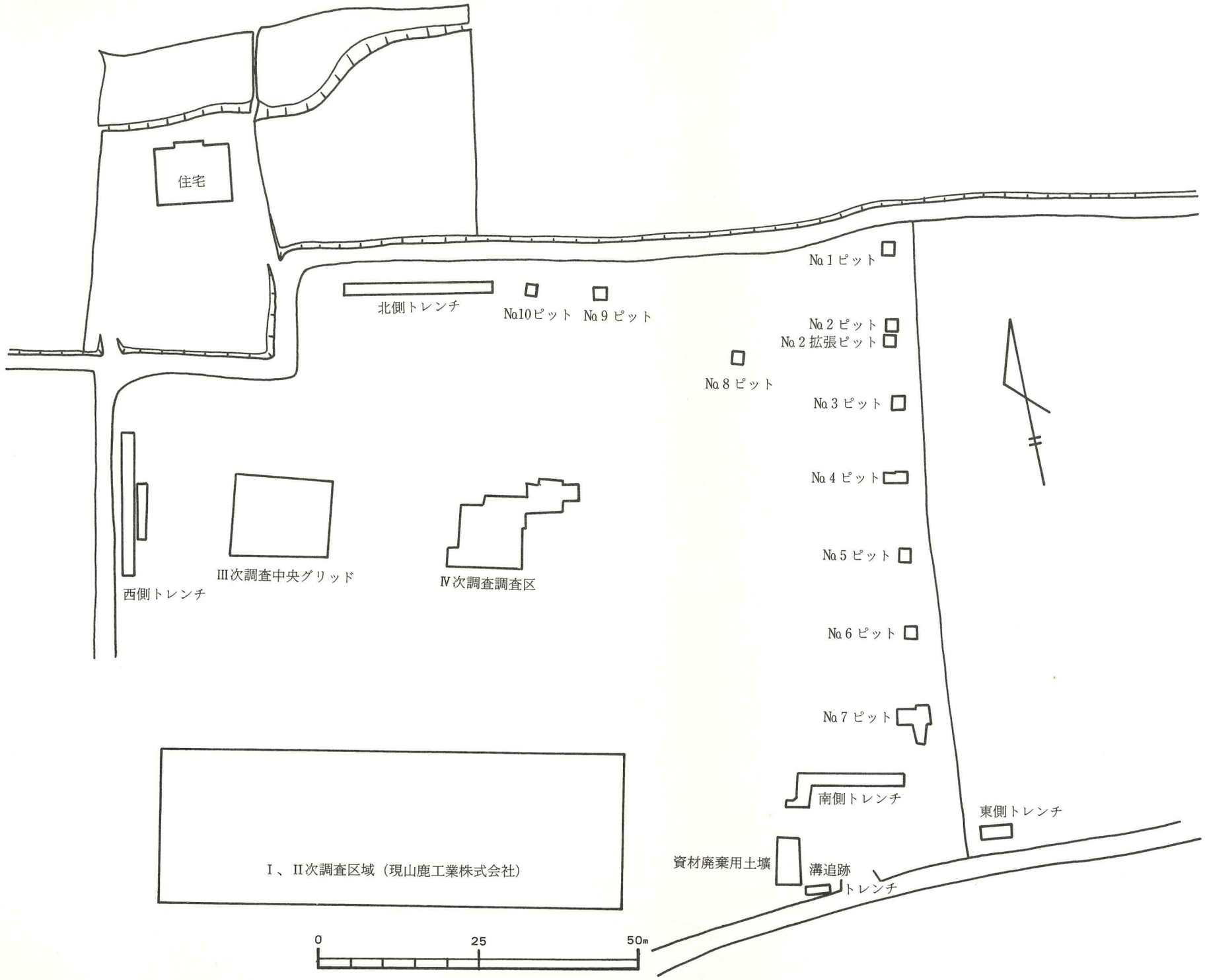
12と13は共伴資料である。12は土師器で、口径13.7cm、高さ 2.9cm、底面径 8.7cmを測る。外面は全面に丹を塗っており、底面には鮮明な墨書で「藤」と書かれている。器面は、ロクロを使用しているためナデ調整が主で、内面にはヘラ研磨による螺旋状の暗文を、底部から口縁部に左回転に描いている。外面はナデ調整で、底部においては丹を塗った後にヘラ切りにより調整していて、その後墨書が施されていることが観察される。なお「藤」についてはどのような意味をもつかは不明であるが、今日、地名として遺跡の東側約 1.2kmに「藤井」として残っており、何らかの関連性が考えられる。胎土はきめ細かな粘土を使用し、焼きも堅く締っている。13は須恵器である。口縁部がわずかに外反気味に開き、底部には高台を貼付ている。この須恵器は灰白色を呈している。

14〜19は鉄器である。14は鎌である。端部を折り曲げていて、先端部を欠いている。15は器種不明の鉄器である。16は鉄鏃で長さ 6.2cm、幅 1.4cm、厚さ0.26cm、重さ 6.1ｇを測り、木質の付着が見られる。茎は断面が四角を呈している。17は先端を欠くが、長方形を呈している。器種は不明である。18と19は鉇で、わずかに身幅に差異が見られ別個体である。　　(中村)

註

註1．緒方　勉「熊本県下山神遺跡出土ジョッキ形土器」『熊本史学』34号　1968

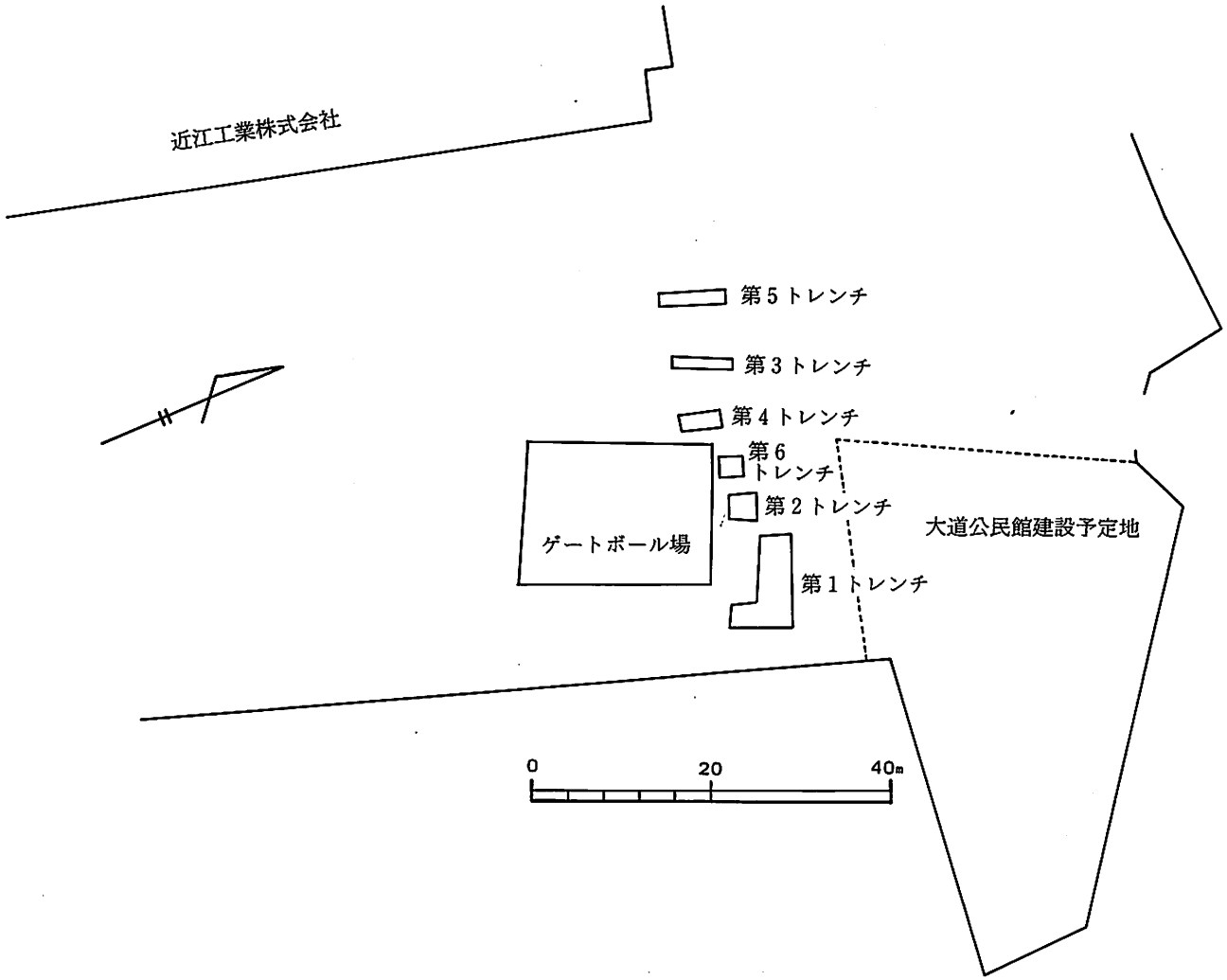
註2．佐原　真「近畿地方」『弥生式土器集成、本編』　1964



第116図 Ⅲ、Ⅳ次調査トレンチ配置図



第117図　Ⅲ次調査遺跡北端部トレンチ配置図



第118図　III 次 調 査 近 江 工 業 内 ト レ ン チ 配 置 図

第5章　第III次調査

調査は遺跡の規模の解明を目的としているため、宅地開発予定区域を含め、その周辺まで調査対象とし、その範囲を確認することに努めた。また遺構については存在を明らかにするに止め、基本的には掘り下げることを行なわなかった。

調査区域（第116図）は、開発予定地東端に2m×2mのピットを北側から南側に1～7ピットを設定し、部分的に拡張ピットを設定した。同じく北端部には8～10ピットを設定し、さらに幅1.5m、長さ18.4mにわたり東西に向けてトレンチを設定し、北側トレンチと呼ぶことにした。また、開発予定地西端部には南北に向けて幅 1.6m、長さ20mのトレンチを設定し、西側トレンチとした。工場の東側に位置し、開発予定地南端には南側トレンチを設定し、幅 2.2m、長さ21mで掘り始めたが、トレンチ西端部を南側に拡張したため変形した「Z」字状を呈するに至った。この南側トレンチの南に不動産業者によって、資材廃棄用の土壙が掘られ、その壁面に溝状遺構が確認された。そのため、南東寄りに溝追跡のためにトレンチを設定した。西側トレンチの東側に11m×12mのグリッドを設定し、中央グリッドとした。開発予定地以外には、南側トレンチの東隣りに5m×2mを入れ、東側トレンチとした。また、遺跡の北限を確認するため開発予定地の北隣りの民家（昭和55年度、鹿本高校調査区域）の北側に、斜面を利用した段々畑があり、三段にわたってI－1、2、3トレンチ、II－1トレンチ、III－1、2トレンチと設定した。（第 117図）

西限については西側トレンチから西へ 100mの畑に長さ5m、幅2mのトレンチを入れた。この地は山鹿市農協大道支所の東隣りのため、農協東側トレンチとした。南限は台地南端に在る近江工業株式会社敷地内にトレンチを入れ、近江工業内トレンチとし、計5本を入れた。

なお、このトレンチは掘り始めた順で番号を付けていったため順不同である。

調査区の遺構と遺物

1　中央グリッド（図版32—1、第119図）

11×12mの広さに掘り下げたこのグリッドは、相互建設の好意によってブルドーザーによる表土剝ぎ作業を行なっていただいた。そのため、かなりの省力化が進み、遺構の検出に全力を注ぐことができた。しかし残念ながら、技術的に未熟なため多少掘り過ぎた部分があった。これは調査員の監督不行届のため生じたものであると感じる次第である。

遺構は竪穴住居跡5軒と焼土4箇所、それに多くのピットが確認された。そのなかでも、1号住居跡は住居跡内より多くの遺物が出土した。また2号住居跡はその規模が大きく、不整形で、また3号住居跡にまで達する掘り込みが伸びているため、重複しているものと思われる。3号住居跡は一辺が約4mになる竪穴住居跡であることが確認された。さらにこの住居跡は、5号住居跡から南

側壁面を切られ、西側壁面は調査区域外に伸びている。4号住居跡は調査区域の南東隅にコーナーを出しており、5号住居跡も南西隅に壁面を見せている。

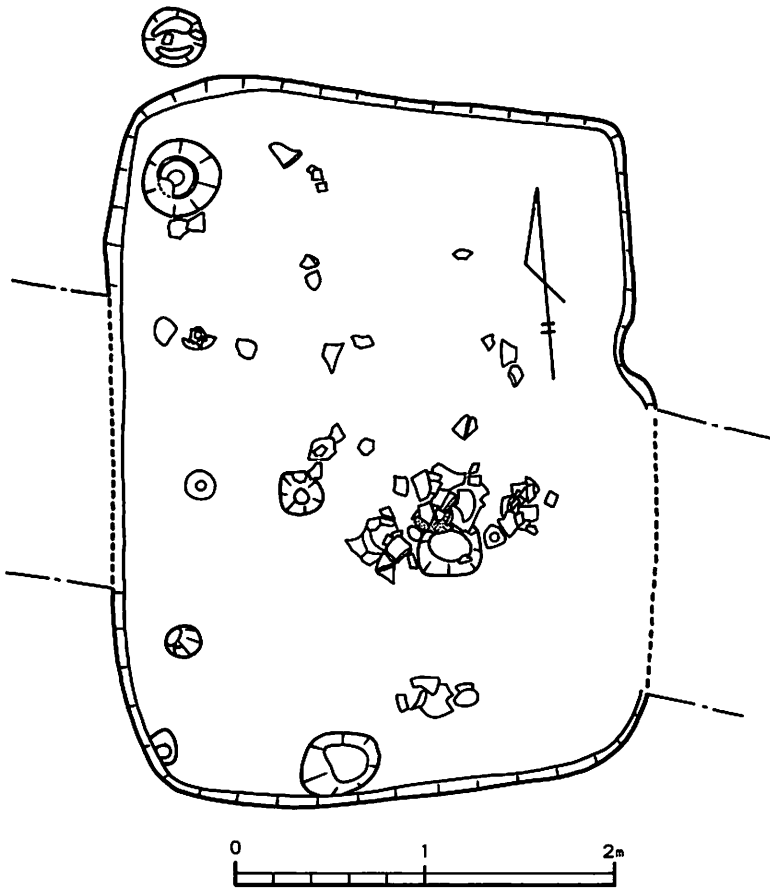


第119図 中央グリッド遺構配置図

(1) 1号住居跡（図版32—2、第120図）

グリッド内北端に位置するこの住居跡は、ブルドーザーによる表土剝ぎ作業の際一部を壊している。そのため、この住居跡のみ床面までの検出を実施したのである。その結果、長さ3.85m、幅2.8mの隅丸方形のプランで長軸をN－5°－Eに向け、ほぼ南北になっている。壁面は明瞭で、床

面も堅く締った状態であった。また住居跡内にはピットが壁面に沿って掘られており、特に北西コーナーに掘られたピットには、胴部から下を欠いた甕（第121図－1）が口縁部を下にして置かれていた。このようにピット内に土器を置いた例は、大分県内において数例報告され、その意味については祭祀的色彩が強いとされている。[註1]

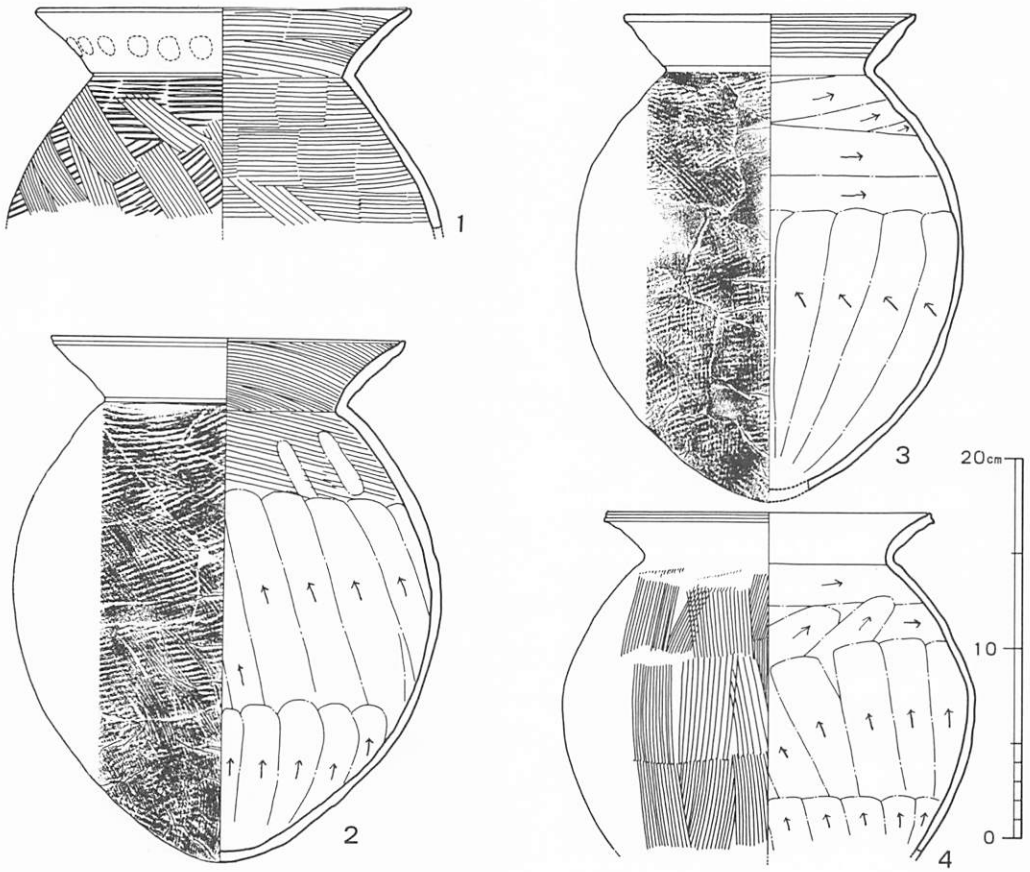


第120図　中央グリッド1号住居跡実測図

遺物は住居跡床面に散布する形で出土しているが、中央部のやや南寄りの所には台石（第123図－16）をとりまくように甕が数個体分割れた状態で出土している。住居跡の南側では2号住居跡から伸びた掘り込みが見られ、住居跡と掘り込みの間は地山層で、床面のように堅く締っていた。このことから2号住居跡から伸びた掘り込みに関連した遺構の床面と考えられた。

遺物（図版53、54－1～5、第121～123図－7～16）

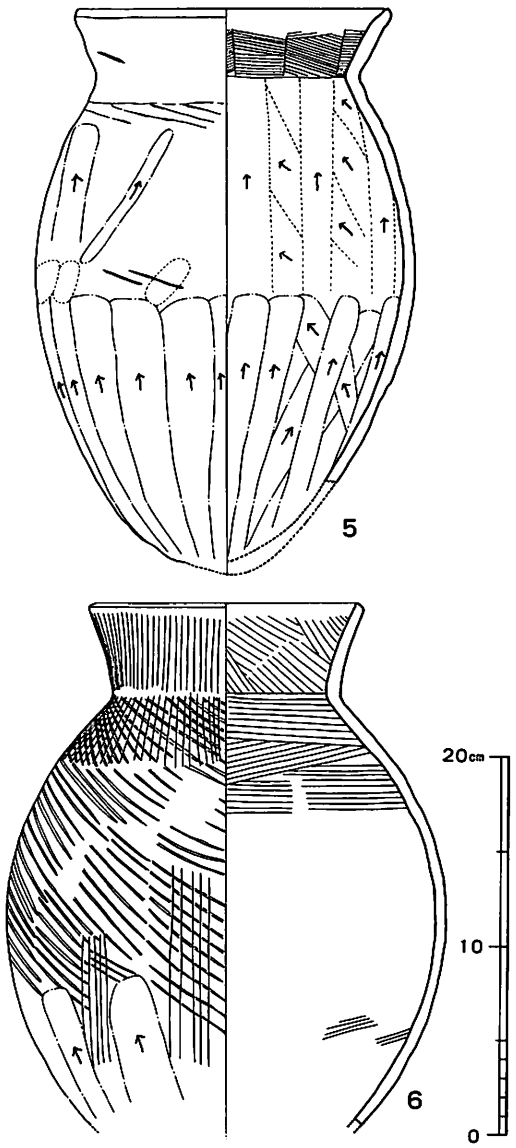
1はピット内から出土した甕で、口径19.5cmを測るが胴部中位から下を欠いているため器高は不明である。口縁部はわずかに外反しつつ「く」字形に開いており、口唇部を内側につまみ上げ、細い沈線をめぐらしている。頸部の内面にはシャープな稜をめぐらし、外面には浅い凹線がめぐっている。胴部は最大径を中位に有し、器壁が極めて薄く、4㎜を測る。器面の外面は、タタキ目を施した後ハケ目でかき消している。特にタタキ目は頸部直下では水平方向、その下は右上りのタタキ目を施している。口縁部外面においては全面ナデ調整で、指頭圧痕を残している。内面は全面ハケ目調整を行なっている。胎土は砂粒をあまり含まない良質のもので、焼きは堅く締って極めて良好である。2も甕で、器形は1と類似している。口径18.5cm、高さ27.5cmを測り、最大径は22.7cmを胴部中位に有し、胴部は倒卵形を呈している。口縁部は外反気味に「く」字形に開き、口唇部は内側をつまみ上げており、端部には細い沈線をめぐらしている。頸部の外面には浅い凹線がめぐり、



第121図　中央グリッド1号住居跡出土遺物実測図

内面にはシャープな稜を有している。胴部は中位に最大径を有し、底部は尖底気味の丸底で倒卵形を呈している。器面の外面には、口縁部にヨコナデ調整を施しているが、胴部ではタタキ目の後ハケ目を施している。タタキ目は頸部直下では水平方向、胴部中位では右上り方向、底部近くは左上りの方向に走っている。また外面には全面ススの付着が見られる。内面は口縁部から肩部にかけてはハケ目を施し、下部にはヘラケズリを行なっている。この点が1とは異なった所であった。器壁は薄く4㎜程度である。胎土は砂粒を含まず堅く焼き締っている。3も同じく甕である。口径15cm、高さ約24.5cm、最大径20.4cmを胴部中位に有し、倒卵形を呈している。口縁部は外反気味に「く」字形に開き、口唇部は内側でわずかにつまみ上げている。頸部は外面で浅い凹線をめぐらし、内面はゆるやかな稜をめぐらしている。器面の外面には、口縁部はヨコナデ、胴部はタタキ目とハケ目を施している。タタキ目は、頸部では水平方向にわずかに施され、その後全体に右上りタタキ目を施している。そして全体にハケ目でタタキ目をかき消すように施文している。胴部にはススの付着が著しい。内面は口縁部ではハケ目調整を、胴部にはヘラケズリを行なっている。底部から胴部中位にかけては、黒く燻げついている。器壁が薄く、胎土も砂粒をあまり含んでいない。全体に堅く焼き上っている。

4も甕である。しかし、この土器はこれまでの資料とは多少異なっている。口縁部は外反気味に「く」字形に開き、口唇部は浅い沈線がめぐり、平坦に近い形を呈している。口径17cmで、最大径21.7cmは胴部中位よりやや上部に位置し、その張りが大きい。器面は、外面は口縁部から肩部にかけてはヨコナデで、胴部は全面ハケ目を施している。ススの付着が著しい。内面は口縁部でヨコナデ、胴部はヘラケズリであった。器壁は薄く、砂粒が少ない胎土で、焼成は良い。5は口縁部が直口気味に開く甕である。この土器は手捏風に器壁が不整形で、口径16.3cm、高さ約30cm、最大径は長い胴の中位に位置し、20.2cmを測る。口縁部はゆるやかな「く」字形に開き、口唇部へは直線的に向っている。口唇部は山形になり、わずかに外反している。胴部は張りが少なく長い胴を有している。器壁は他の甕に比べると厚手で、砂粒を含んだ胎土で、焼きもあまり良くない。器面は、外面では口縁部にナデ調整、肩部にわずかだがタタキの痕跡を残し、胴部下位には浅いヘラケズリを施している。内面は口縁部から胴部中位にかけてはハケ目とナデ調整を行ない、下部はヘラケズリを行なっている。6は壺である。口縁部が直口し、径13.8cmを測る。胴部は最大径23.2cmを中位に有し、底部は欠いているが丸底になるものと思われる。器壁は比較的薄く仕上げられている。器面は外面では口縁部にはハケ目を施し、胴部は全面にわたって荒く左上りのタタキ目を施し、その後ハケ目を施している。内面は口縁部から胴部にわたってハケ目を施している。砂粒をあまり含まず、焼成も良い。7は口径15.7cmを測る複合口縁の壺である。頸部以下を欠いているため胴部の形は不明である。器面は、全面ナデ調整で、胎土は砂粒を含み、焼成も悪く器面の剝離が進んでいる。8は口縁部と底部を欠く壺で、最大径14.7cmを胴部中位に有する。器面は、外面では全面ヘラ研磨調整を施しており、内面においてもヘラ研磨およびヘラ状工具によるナデ調整を行なっている。胎土はきめ細かな土を使い、堅く焼き締めている。9は鉢で、口径18.2cm、高さ 7.3cmを測る。口唇部はつまみ上げ、ナデ調整を施しており山形をなしている。器面は、外面では口縁部直下から胴部中



第122図　中央グリッド1号住居跡出土遺物実測図

位にかけてはタタキ目を施し、指頭圧痕を残している。底部近くにおいてはヘラケズリが行なわれている。内面は口縁部直下はハケ目調整で、底部近くにおいてはヘラケズリを施している。胎土には小さな砂粒を含み、堅く焼き締って焼成は良い。10は口径 9.5cmを測る鉢である。口縁部は直口し、最大径は胴上位に位置し、底部はわずかに尖り気味になる。器面は外面ではハケ目を施し、内面はナデ調整である。小さな砂粒を含んで、焼成はあまり良くない。11も鉢である。口径12cm、高さ 7.5cmを測る。口縁部は直線的にわずかに開き、胴部は上位で最も張り、底部は尖り気味になっている。器面は、外面では口縁部でヨコナデ、頸部から下においては小さなハケ目を施している。内面は全面ナデ調整である。砂粒を含んだ胎土であるが、堅く焼き締めている。なお、この土器は全面に器面の剝離が見られる。12は高坏で坏部を欠いている。柱状部は太く短く、裾部はやや内湾気味に開いている。裾部に円孔が4個穿たれているが、その配列は均等ではない。器面は外面では柱状部にヘラ調整を施し、その後全面をナデている。また、柱状部には上下二段に斜行した浅い刺突文をめぐらしている。内面は柱状部ではヘラケズリ、裾部ではナデ調整を施している。砂粒を含まない胎土であるが、焼成はあまり良くない。13は台付鉢で、台部を欠いている。胎土は砂粒を含まず、焼成はあまり良くない。14は底部である。器種は甕になるものと思われる。特にこの底部は胴部の張りに比べ小さな底部で、平底になる。底部は中心部にわずかな凹みが見られる。器面は、外面は全面タタキ目を施し、底部を中心に右上がりで、左回転のタタキ目である。内面はハケ目を全面に施し、胎土、焼成ともに良い土器である。なお、この資料は畿内から出土する庄内式土器の特徴を多く備えている。

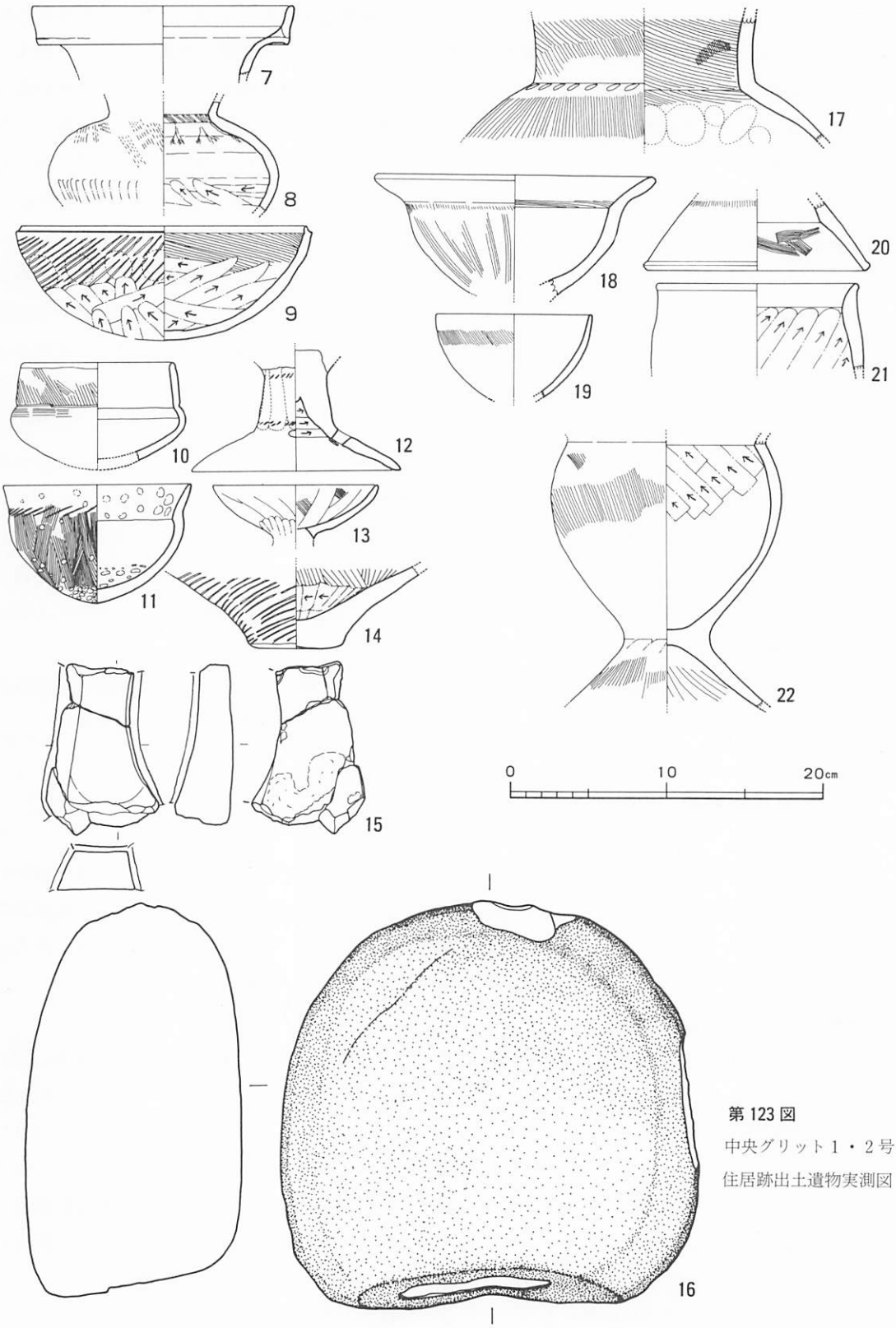
15は流紋岩（陶石）製の砥石である。3面を使用し、その摩滅は著しい。16は住居跡床面に置かれていた台石で上下面に打撃の痕を見ることができる。また、周囲は器壁の剝離が見られる。

(2) 2号住居跡（第119図）

中央グリッドの北東隅に位置するこの住居跡は、その形が不整であった。プランからは住居跡が重複していると思われたが、土層による遺構の切り合い関係は確認できなかった。さらに遺構の掘り下げは実施しなかったため、床面における重複関係も確認することはできなかった。また焼土が4箇所で確認されたが、これらも住居跡の重複を明確にするに足る材料とはなり得なかった。

遺物（第 123図－17～21）

17は口縁部と胴部を欠いた壺で、頸部には刻目をめぐらしている。器面は、外面では全面に細かなハケ目を施し、頸部にはナデ調整を行なっている。内面は口縁部から頸部にかけてはハケ目を施し、肩部には指頭圧痕を残している。胎土には砂粒を含んでいるが、堅く焼き締っている。18は口径17.5cmを測る鉢である。口縁部は「く」字に開き、胴部の張りは少なく底部に向っている。底部は脚台が付くものと思われる。器面は、外面では頸部と胴部に一部ハケ目を施し、内面は口縁部にハケ目を施している。内面底部近くにおいては器面の剝離が著しい。砂粒を含んだ胎土で、焼成は良い。19は鉢である。この土器は大きく3片に割れている破片であるが、1片は明らかに1号住居跡から出土しており、2号住居跡から出土した破片と接合したのである。器面は、外面ではハケ目



第 123 図

中央グリット 1 ・ 2 号
住居跡出土遺物実測図

調整の後ナデ調整を行ない、内面はナデ調整後ヘラによる暗文を施している。胎土はきめ細かな粘土を使い、焼成もきわめて良く、堅く焼かれている。20は脚台である。裾部は直線的に開いている。器面は全面ナデ調整を行ない、胎土はきめ細かな砂粒を含み、焼成は堅く焼き締っている。21は土師器で器壁が厚い。器面は、外面ではナデ調整を施しているが、器壁の剝離が著しい。内面はヘラケズリで調整を行なっている。砂粒を含んだ胎土で、焼成もあまりよくない。

(3) 3号住居跡 (第119図)

1号住居跡の南側に位置したこの住居跡は一辺4mの隅丸方形のプランを呈する。西側壁面は調査区の外へ、南側壁面は5号住居跡に切られている。一部床面が確認されたが、非常に堅く締っていた。

(4) 4号住居跡 (第119図)

中央グリッドの南東隅に位置したこの住居跡は、その大半を調査区域外に伸ばし、わずかに北側のコーナーを現わしている。現況では壁面は 2.5mを測る。

遺物 (図版54－6、第 123図－22)

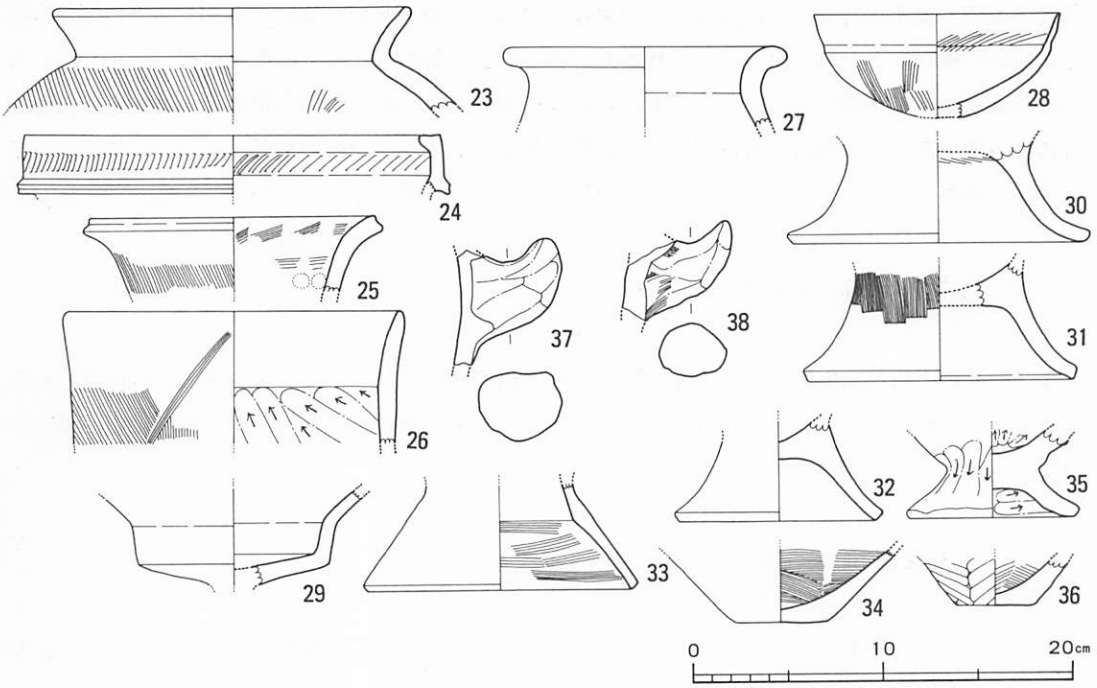
1点のみ検出されている。22は甕で脚台付である。口縁部を欠き、胴部も半分を欠いている。胴部の張りは上位に位置し、脚台は大きく開いている。器面は、外面においてはハケ目調整を施し、内面ではヘラ状工具の端部でナデている。胎土は砂粒を含まず、堅く焼き締っている。

(5) 5号住居跡 (第119図)

調査区西端に位置し、その大半を調査区域外へ伸ばしている。プランは不整形で、壁面のコーナーが2個見られるところから、住居跡の重複の可能性が強い。土層の識別は困難であったため、住居跡の切り合いについては確認することはできなかった。

(6) 遺構に伴なわない遺物 (第124、125図)

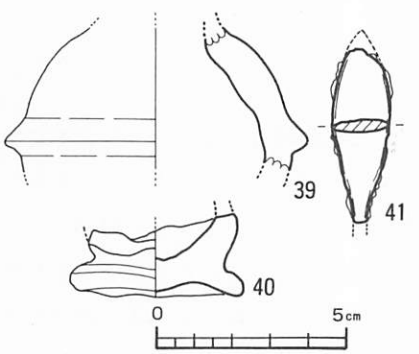
23は口縁部を「く」字形に開き、胴部が大きく張る壺である。器壁が厚く、器面は、口縁部においては、内外共にナデ調整を施し、胴部も共にハケ目を施している。胎土には砂粒を含んでおり、比較的堅く焼き締っている。24は複合口縁の壺である。口縁部のみの破片であるが、口縁部下端には貼付突帯を一条めぐらし、その上面は浅く凹んでいる。口唇部は平坦で、内側に大きくふくれている。器面はハケ目とナデ調整を施している。胎土は砂粒を含まず堅く焼き締っている。25は口縁部片である。26は土師器である。直口した口縁部で、外面にはハケ目を施し、内面にはヘラケズリを行なっている。27も土師器である。口縁部が短かく肉厚で大きく外反している。28は口径13cmを



第124図　遺構に伴なわない遺物実測図

測る鉢である。底部を欠いているが、丸底になる。口縁部と胴部の接合部には浅い凹線がめぐり、内面にも沈線をめぐらしている。器面は、外面底部近くで荒いハケ目を施し、他面はナデ調整である。砂粒を含む胎土で、焼成もあまり良いとは言えない。29は高坏である。口縁部と脚部を欠いている。坏部は直線的に作られているため、稜線をめぐらしている。器壁は厚く、胎土はきめの細かい土で、焼成も堅く焼き締っている。器面は、全面ヘラ研磨を行なっており、この土器に類した例が玉名郡山下遺跡[註4]と鹿本郡津袋大塚遺跡[註5]から出土している。

30は脚台で器壁が厚く、全面ナデ調整である。31も脚台である。この土器も器壁が厚く、外面にはハケ目を施している。32も脚台である。器壁はあまり厚くなく、全面ナデ調整を施している。33は裾部が直線的に開く脚部で、内面は内湾気味で、ハケ目を施している。外面はナデ調整である。34は平底である。内面にはハケ目を施し、外面はナデ調整である。砂粒を含んで焼成も良くない。35は脚台であるが、手捏土器である。そのため裾端部が不整形で、脚部くびれ部も指頭圧痕を残して、見るからに雑な作りである。小さな砂粒を含むが、焼成は良い。36は平底である。内面はハケ目を施しているが、外面はヘラ状工具を押し当てた状態の圧痕が施されている。37、38は共に土師器の把手で、器面はヘラケズリにより調整している。39と40は手捏土



第125図　中央グリッド内出土手捏土器鉄器実測図

器である。39は壺で口縁部と底部を欠いている。胴部は中位に最大径を有し、三角突帯をめぐらしている。器壁が厚く、あまり良い仕上がりではない。40は脚台で甕になる。脚裾部は不整形で、胴部も器壁が不均等である。

41は鉄鏃である。先端と基部を欠いているが、保存状況としては良い。（中村）

註

註1　牧尾義則氏によると、大分県内で8例が確認されている。これらは弥生時代終末から古墳時代前期にかけての住居跡で、北と西方向の柱穴に集中して出土し、祭祀的意義が大きいと判断されている。

註2　松本健郎「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』60巻3号　1974

註3　高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集　1979

2　北側トレンチ（第126図）

北側トレンチは、ほぼ東西に長さ18.5m、幅 1.5mの大きさに掘っている。遺構としては、黒色土を埋土にした大型ピット（黒色ピットと呼ぶ）とその周囲には地山層が表われ、それを切るように遺構が掘られている。これらは重複しておりプランは確認できなかったが、恐らく住居跡となるものと思われた。これを西側から1号住居跡とし、3号住居跡まで存在すると考える。

(1)　1号住居跡

東側壁面をわずかに残し、北側はトレンチの北へ伸び、南側は2号住居跡と重複している。西側も確認することができなかった。

(2)　2号住居跡

黒色ピットと北側壁面を接しており、現長2mの壁面を確認することができた。南側はトレンチの外に伸びており、西側は確認することができなかった。

(3)　3号住居跡

黒色ピットと西側壁面で接している。東側壁面は確認するに至らなかった。

以上の3軒の住居跡に関しては、床面までの掘り下げを実施しないという基本方針であったため中途半端な確認しかできなかった。

(4) 黒色ピット

トレンチ西側に位置したこのピットは、直径２mの不整形な円形で、深さ25cm程度になる。住居跡とも重複し、その先後関係については住居跡が先行するものと判断された。ピットの性格は、出土した遺物の多くがまとまった状態で出ており、貯蔵穴ではないかと思われる。

遺物（図版55－１・２・４～６、第 127、 129図－25）

このピットからは土器が比較的に大きな破片として出土している。遺物は石庖丁を除いて、その全てが床面から出土している。（中村）

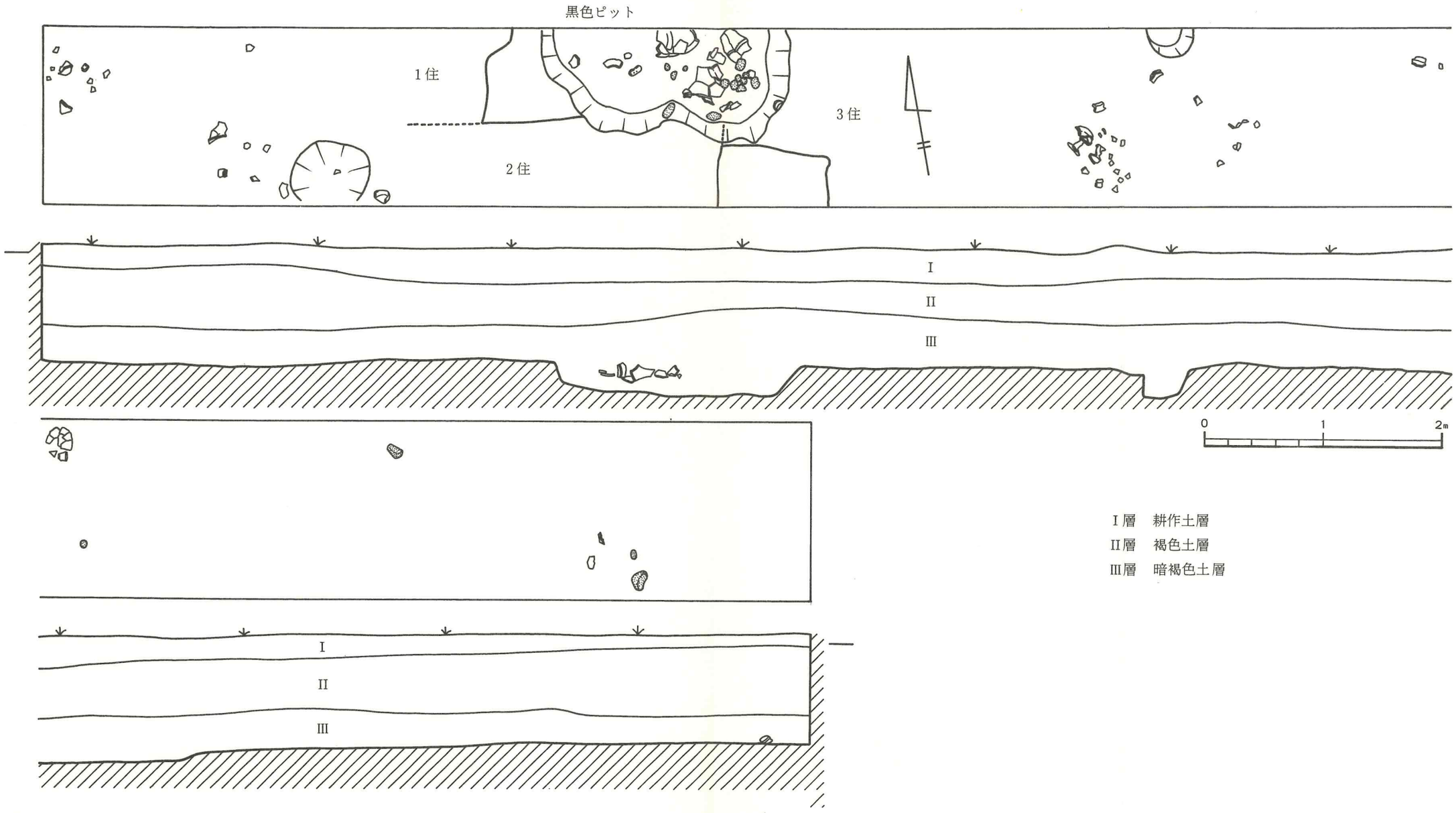
１は大型の鉢で底部を欠く。口径32.2cm、胴部最大径は33.4cmを測る。頸部に貼付突帯を有しており、数箇所でそれが剝がれている。口縁部は鋭く外反して開き、端部でやや肥厚し、丸味のある角をもっておさまる。２は甕の破片である。復元口径22.7cm、胴部最大径24.1cm。口縁部はやや肥厚し、端部は丸まる。外面はハケ目をナデ消し、内面もナデである。また、外面にはススが付着する。３は鉢で口径21.4cm、高さ18.2cmを測る。内外面ともナデ仕上げで、内面胴部中下位に幅５cm前後の、煮沸の結果と思われる変色帯が周回する。４、５は壺である。口縁部の形状は両者近似するが、４は頸部に突帯を持たない。５は頸部と胴部中位に計３条の突帯を有し、胴部のものには刻目文が入る。口径20.4cm、胴部最大径29.8cmを測る。胴部下半は内外面とも目の細かいハケ目を施す。外面に少しススが付着し、内面に胴部中から下位にかけて斑状の燋げつきが見られる。この壺は煮炊きに使用され、しかも寝かせた状態で火にかけられたものであるらしい。６、７は高坏で、６は小片である。６は口縁部が先端に向って薄くなるが、７は逆に先端で肥厚している。口径は６が28cm弱、幅４cm内外、厚さ 0.8cm、円孔径0.35cm、円孔間2.75cmを測る。大変鋭い刃部を持ち、その中程が大きく抉れているが、これは使い込みによる研ぎ減りの結果であろう。25は完形のミニチュア土製品で、鉢を模したものと思われる。口径 3.6cm、高さ 2.5cm弱を測る。

（坂本）

(5) その他の遺物 （図版55—３、56—１～３・５・６、第128、129図）

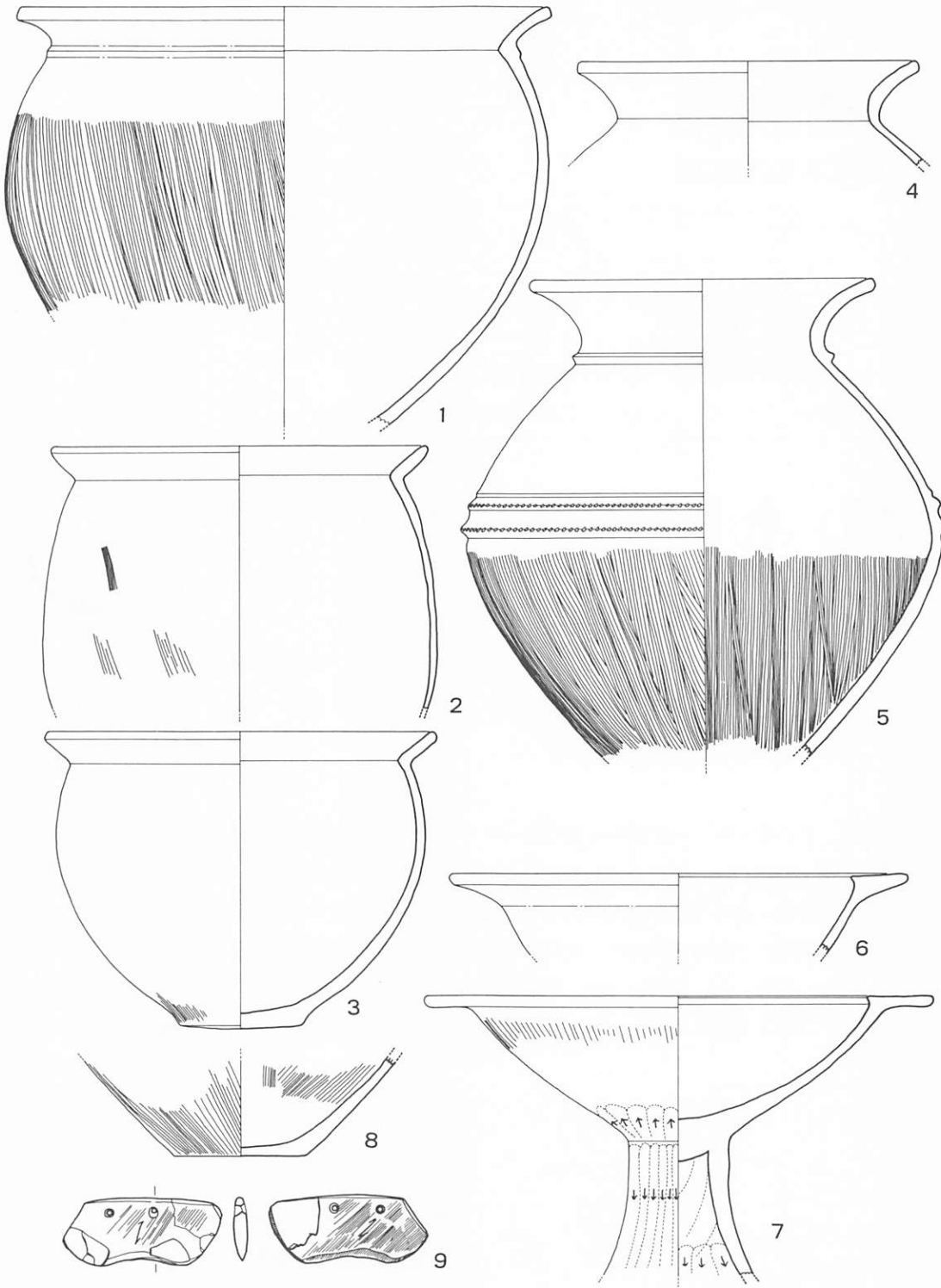
黒色ピット内から出土した遺物の他は、遺構に伴なう遺物はなく、トレンチ内で散在した状態で出土している。ただ、21、22については高坏２点がまとまって出土しているが、３号住居跡と直接関係あるかは確認できなかった。（中村）

10は壺の口縁部から肩部にかけての破片で復元口径20.4cmを測る。頸・肩部に３条の突帯を有し、胴部は大きく膨む。内面の頸部以下全面にススが付着している。11は甕の破片で肩部に櫛描波状文を施す。外面口縁部と胴部中位にススが付着する。12は高坏の口縁部片で、復元口径28.8cm。13はジョッキ形土器の把手である。現存長８cm、幅 3.8cm、厚さ 1.2cm。外面はハケ目をナデ消している。14は器台の脚部片で、受け部を欠損する。内面にハケ目が少し残る。15は甕の脚部である。16、17、18は鉢である。16は口径 9.8cm、器高 6.1cm。内外面ともにススの付着がみられる。17は口径 8.8cm、器高５cm。手捏で整形したあと、粗いヘラ磨きを施している。18は完形で口径11.4cm、器

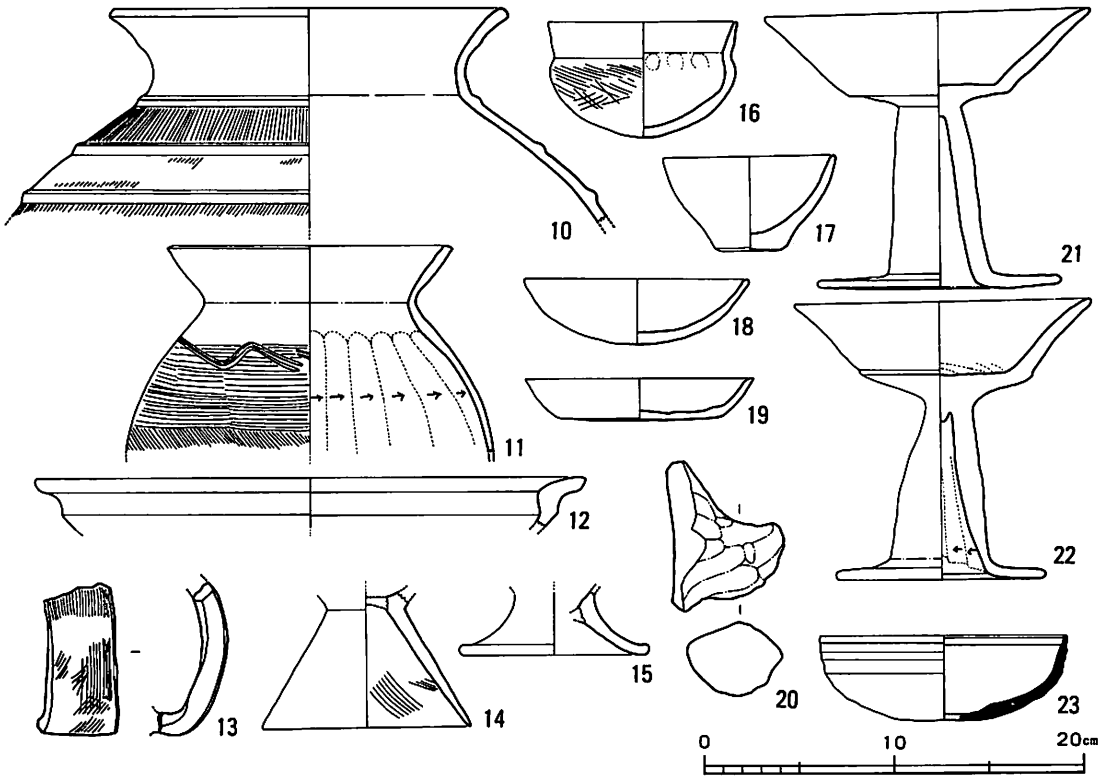


I層　耕作土層
II層　褐色土層
III層　暗褐色土層

第126図　北 測 ト レ ン チ 実 測 図



第127図　北側トレンチ黒色ピット内出土遺物実測図

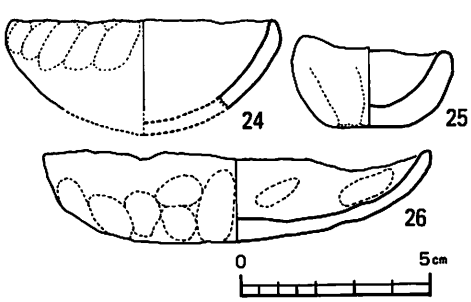


第128図 北側トレンチ出土遺物実測図

高 3.5cm弱。内外面ともにヘラ磨きを施しているが、特に内面の調整は入念に行なっている。

19は坏で復元口径12cm、器高 2.2cmを測る。内面に燻げつき斑が点在し、外面にはススと変色が見られる。20は甑の把手で整形、焼成ともに良くない。21、22は良く似た形状を呈する高坏で、22は完形、21も坏部と裾部の一部を欠くがほぼ完形である。21は口径17.2cm、器高14.6cm、裾端部径12.9cm。22は口径15.7cm、器高14.7cm、裾端部径11cmを測る。両者ともナデ仕上げであるが、22の坏部内面にヘラ磨きを施している。また、両者坏部内面に、21は籾殻の付着痕、22は籾の圧痕が各々1箇所残っている。同一地点より出土したことを考えれば、2個セットで使用された可能性が強い。23は須恵器の坏で半欠品である。口径13cm、器高 4.5cmを測る。

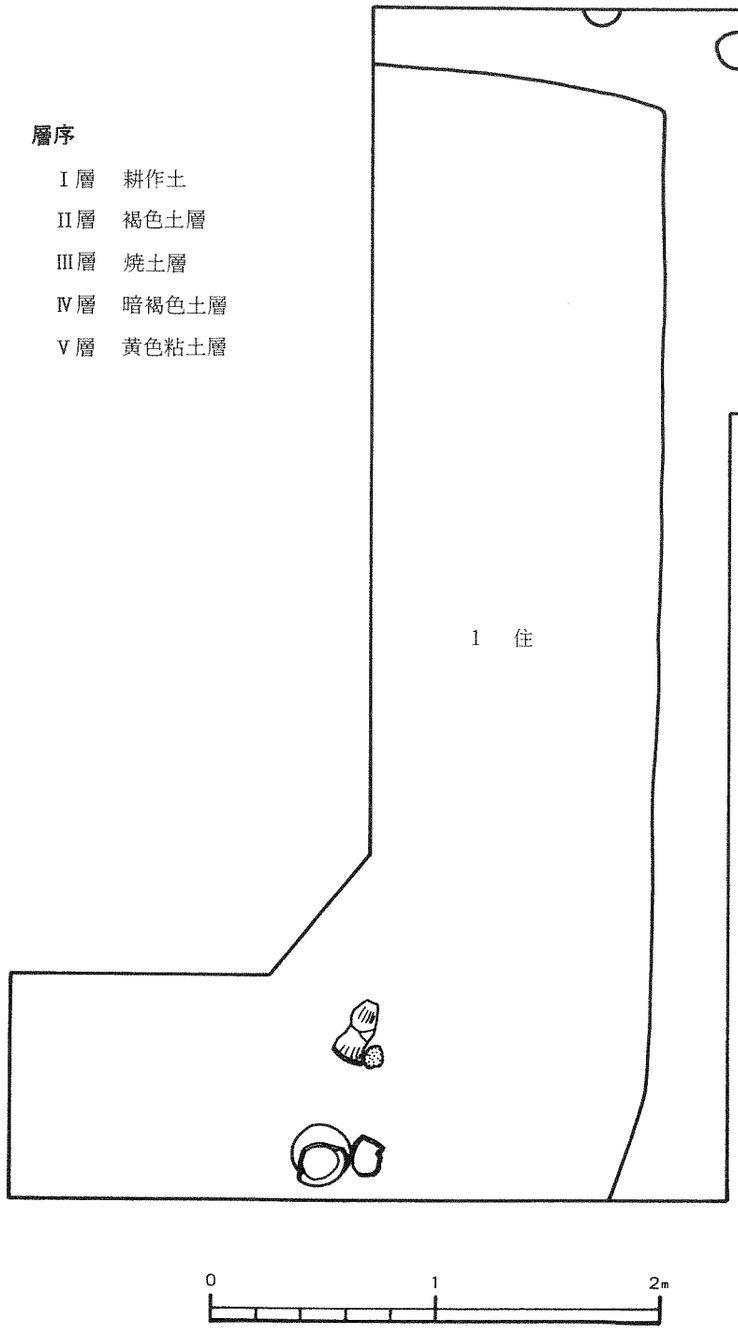
24、26は手捏のミニチュア土製品である。26の外面は指頭によって調整を行なっているが、凹凸がはげしい。内面はナデて、そのあと粗くヘラ磨きを施している。（坂本）

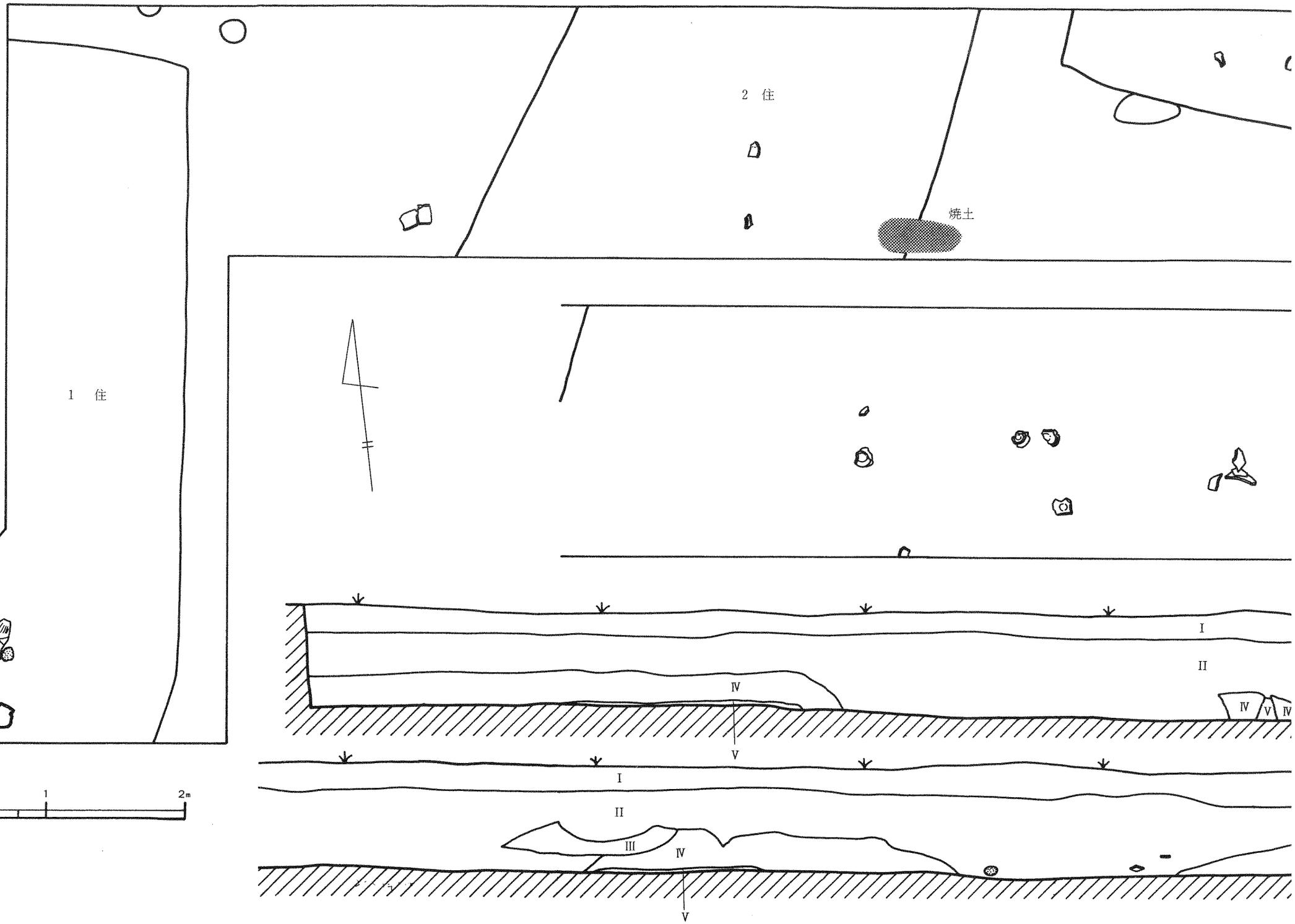


第129図 北側トレンチ出土手捏土器実測図

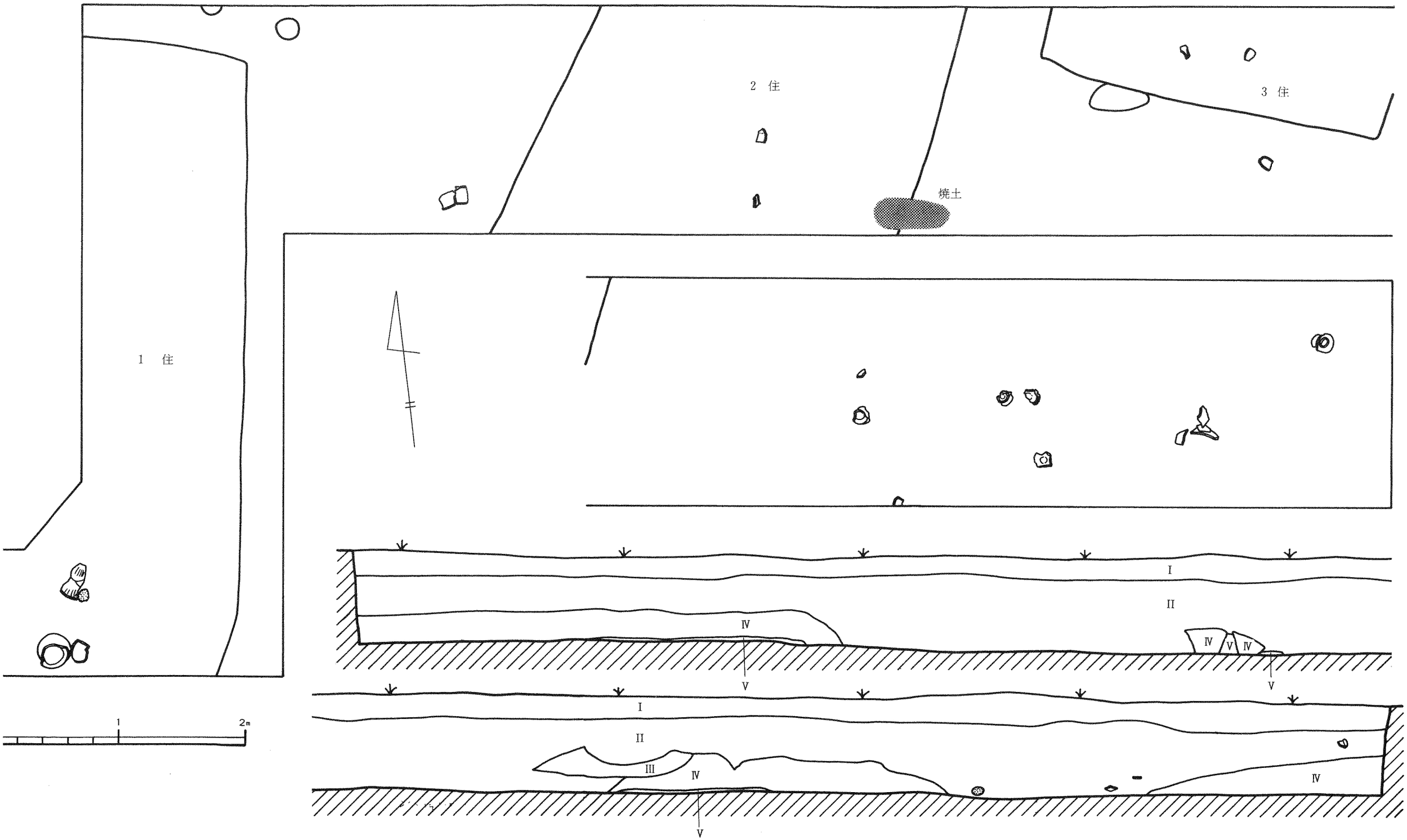
層序

Ⅰ層　耕作土
Ⅱ層　褐色土層
Ⅲ層　焼土層
Ⅳ層　暗褐色土層
Ⅴ層　黄色粘土層





第130図　南側トレンチ実測図



第130図 南側トレンチ実測図

3　南側トレンチ（図版33、第130図）

当初、このトレンチは長さ18m、幅 1.8mの規模であったが、西端部において住居跡（1号住居跡）が検出されたため、南側へ 3.5m、幅 1.6mの大きさに拡張し、さらに西側に再度拡張した。

このトレンチでは住居跡3軒を確認することができた。

(1)　1号住居跡（図版33—3、第130図）

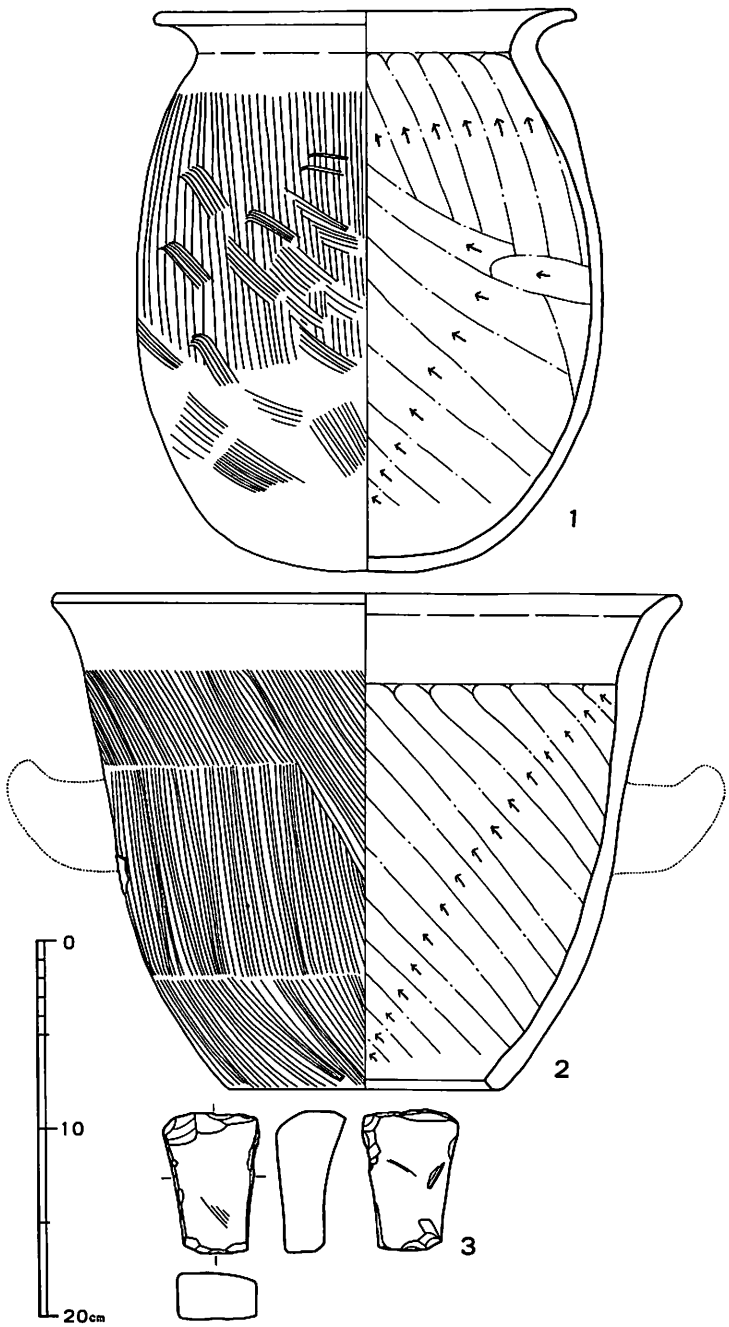
トレンチ西端に位置するこの住居跡は、一辺約 4.8mの方形プランをもつ竪穴住居跡で、壁面は明確に見られ、一直線である。住居跡の大半はトレンチの外に伸びているが、南側壁面近くでは、土師器の甕と、甑が出土している。

なお、遺構の掘り下げは実施しなかったため床面については不明である。

遺物（図版33－2、57－1・2、第 131図）

甕は、口縁部を上に、やや傾いて置かれた状態で出土し、さらに北側へ30cmのところに甑の破片が出土した。（中村）

1は完形の甕で、口径22.2cm、器高29.6cm、胴部最大径24.5cmを測る。外面はハケ目のあと薄くナデて、内面はヘラケズリである。外面には全面にススが付着し、内面は胴部下位以下に焦げつきの痕跡が見られ、使い込まれた印象



第131図　南側トレンチ1号住居跡出土遺物実測図

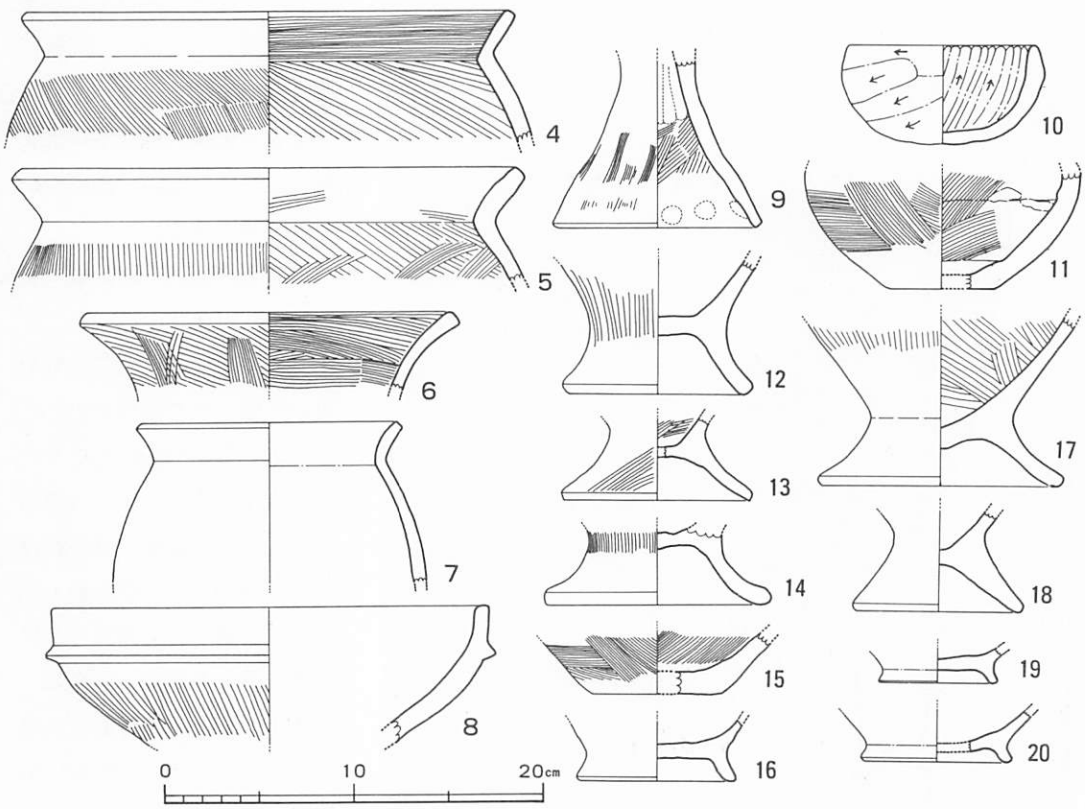
を受ける。２は復元口径約32cm、器高26.1cm。外面はハケ目、内面はヘラケズリを施す。スス等の付着は見られない。３は砥石で、石材はアルコーズ質砂岩である。よく使い込んでいる。（坂本）

(2)　２号住居跡（第130図）

１号住居跡の東側へ約２ｍ離れて位置する２号住居跡は、東西壁面の一部をのぞかせ、南、北壁面はトレンチの外に伸ばしている。壁面は現長２ｍを測り、少なくとも３ｍ以上の長さはあると考えられる。なお、東側壁面にそって焼土が見られる。床面は未発掘のため確認されていない。

(3)　３号住居跡（第130図）

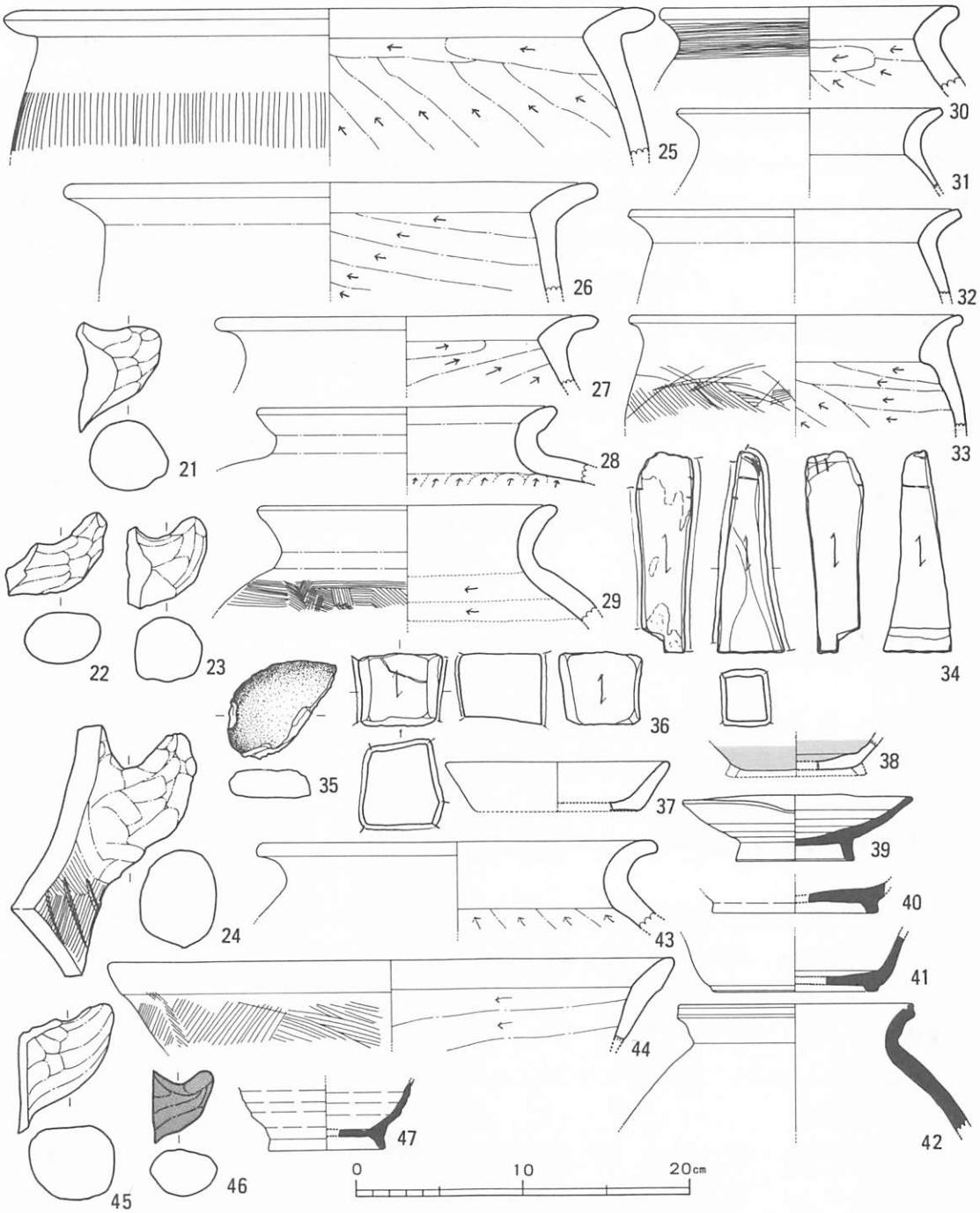
２号住居跡の東側に接して位置するこの住居跡は、南側壁面と東西壁面の一部をのぞかせ、住居跡の大半をトレンチの北側へ伸ばしている。壁面は一辺 3.5mを測り、方形プランになるものと判断される。この住居跡も未発掘のため、床面の状態については確認できなかった。



第132図　南側トレンチ出土遺物実測図

(4) その他の遺物 (図版56—4、7～9、第132～134図)

南側トレンチ全域に散在する状態で出土しており、特に土師器を多く見ることができる。これらは遺構と伴なっておらず、一括して取り扱った。(中村)

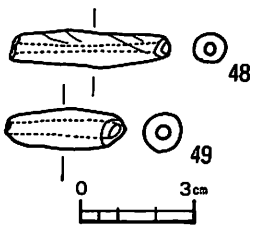


第133図 南側トレンチ出土遺物実測図

4、5、7は甕の口縁部片で、復元口径はそれぞれ25.3cm、25.9cm、13.4cm。4と7の外面全体にススが付着している。9は高坏の脚部片である。内外面ともハケ目を施し、そのあとナデている。焼成は良好である。8、10は鉢の破片で、8には断面三角形の突帯が1条廻る。10は外面がヘラケズリのあとヘラ研磨、内面がナデのあとヘラ研磨を施す。11～20は、底部及び脚部である。12と17がいわゆる砂付土器である。20は、丹を塗った痕跡が窺える。

21～24、45、46は甑の把手である。24は体部の器壁も厚く、全体を推定すれば2より大型の甑になるであろう。46のみ丹塗りである。25～27、30～33は甕で、すべて破片である。内面調整は32以外ヘラケズリである。25は大型で復元口径39cmを測る。31は、外面にススが付着し、また、破損後にも火を受けている。32は他の甕とは時期が異なる。内外面ともナデであるが、内面にハケ目の痕跡が窺える。28、29、43は壺の破片である。3点とも内面はヘラケズリで、外面は29のみハケ目調整である。34、36はアルコーズ質砂岩の砥石で、石材は34の方がきめ細かい。磨面は両者とも4面である。35は半欠の石錘であるが、鋭い器具で引っ掻いたような条線が数本残る。37は内外面ともヘラ磨きを行ない丁寧に仕上げている。38は底部外面以外の部分に丹を塗っている。39～42、47は須恵器で、39のみ完形である。39は口径13.8cm、器高4cmを測る。片口となっている。44は甑の口縁部片である。ススの付着等は見られない。

48、49は土錘で、48が長さ 4.3cm、径 0.9cm、円孔径 0.3cm弱、49は長さ 3.1cm、径 1.1cm弱、円孔径 0.3cm強を測る。（坂本）



第134図 南側トレンチ出土土錘実測図

4 西側トレンチ（図版34—1、第135図）

長さ20m、幅 1.6mの西側トレンチは、開発予定区域の西端に、ほぼ南北に向けて設置している。トレンチ内には、2軒の竪穴住居跡を確認することができた。

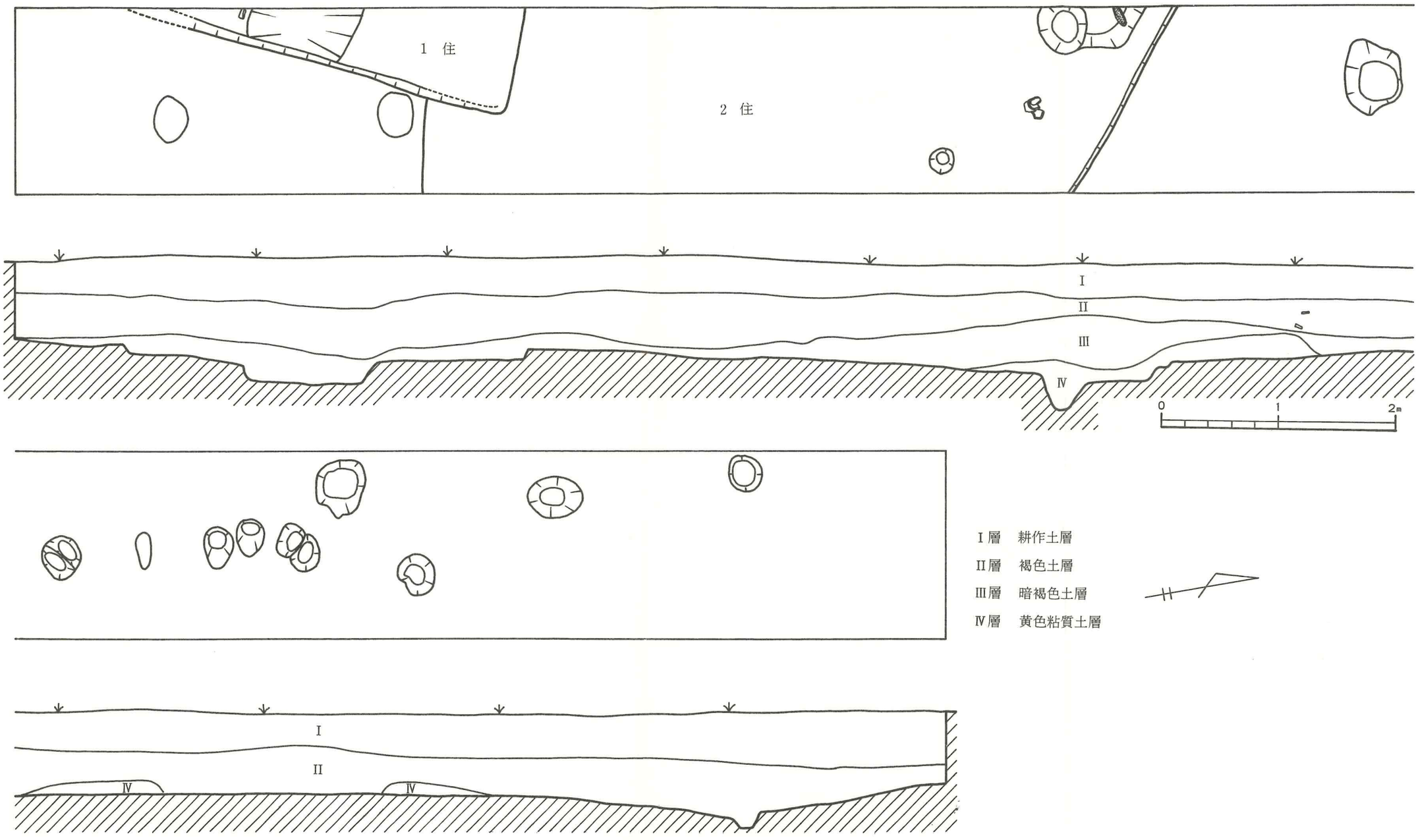
(1) 1号住居跡（図版34—2、3）

トレンチ南端に位置し、東側壁面と北側壁面の一部をのぞかせ、その大半はトレンチ西側へ伸ばしている。現況では、壁面の長さ約 3.5cmを測ることができる。住居跡の東側壁面に沿ってピットが存在し、その横から砥石が1点出土している。

遺物（第 136図－2）

1号住居跡は、調査した部分がきわめて狭く、わずかに1点の砥石が床面から出土したに過ぎなかった。（中村）

2は陶石製の砥石の破片である。風化が著しく脆い。現存で4面の磨面を有している。（坂本）



I層　耕作土層
II層　褐色土層
III層　暗褐色土層
IV層　黄色粘質土層

第135図　西 側 ト レ ン チ 実 測 図

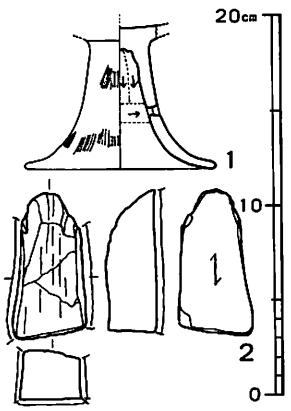
(2) 2号住居跡

この住居跡は、南側壁面の一部を1号住居跡に切られており、トレンチ内には南、北壁面の一部を検出したのみである。東西壁面はトレンチの外に伸びているため、住居跡の規模については不明だが、現況では一辺約6mの非常に大型の住居跡になるようである。

遺物（第 136図－1）

遺物はわずか1点が、北側壁面に沿って出土したのみである。床面から出土している。（中村）

1は高坏の脚部片である。現在高 7.5cm弱、裾端部径約10cmを測る。径 0.5cm強の円孔を穿っているが、個数は不明である。焼成良好である。（坂本）

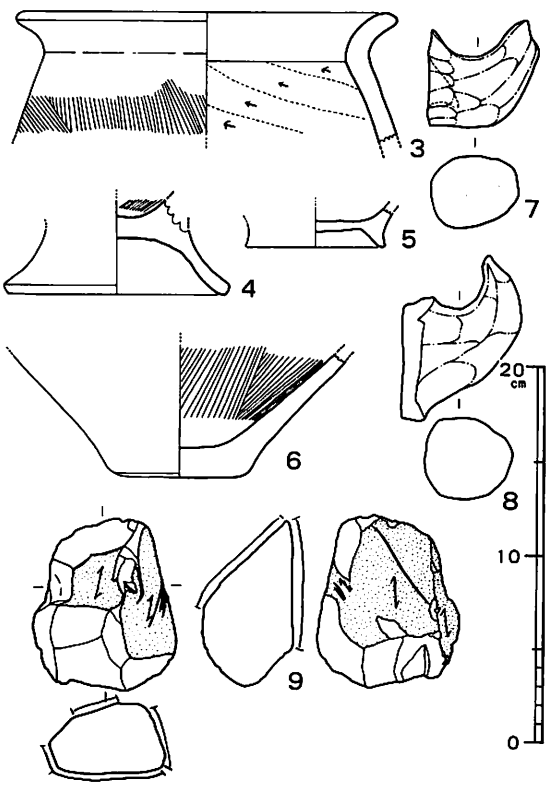


第136図 西側トレンチ住居跡出土遺物実測図

(3) その他の遺物（第137図）

ここに取り扱った遺物は、遺構に伴なわないもので、トレンチ内に散在した状態で出土したものである。（中村）

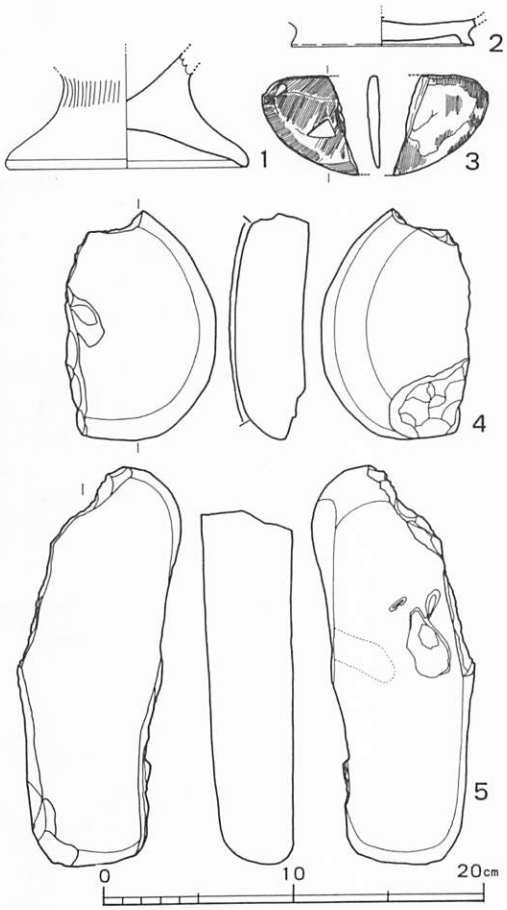
3、4は甕の口縁部、及び底部の破片である。3は復元口径18.8cm、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリを施す。4は脚部内面上部に砂が付着する。5は脚部のみで、体部の形状は不明である。6は壺の底部で、外面はナデ、内面にハケ目を施している。7、8は甑の把手である。7は体部との接合面より剝離している。8は、把手の下側から体部にかけてススが付着する。9はアルコーズ質砂岩製の砥石である。4面の磨面を持ち、数箇所に擦痕が残る。（坂本）



第137図 西側トレンチ出土遺物実測図

5 資材廃棄用土壙

第1、II次調査対象地区の東側で、南側トレンチに南接したこの土壙は、不動産業者の手によって長さ7m、幅 3.3m、深さ 2.8mの大きさに掘られたもので、歪んだ長方形を呈し、資材廃棄を



第138図　資材廃棄用土壙内溝出土遺物実測図

目的としていた。その際、壁面に溝状遺構が現われているのが見られ、この遺跡において、初めて溝状遺構が確認された。

(1)　溝状遺構（図版35、36－1、第138図）

溝状遺構は、土壙内壁面において観察した結果、土壙を斜めに走っており、その方向はN－30°－Wを示している。そのため、壁面に見られる溝の断面が、真の規模でないことは容易に判断された。

溝の規模は上部幅3m以上、下部幅 1.6m、深さ1mの大きさで、長さ8mまでは確認することができた。

層位は大きく5層に別れ、等Ⅲ層上面から溝を掘り込んでおり、溝内では1～10層までの堆積層を確認することができた。

遺物（第 139図）

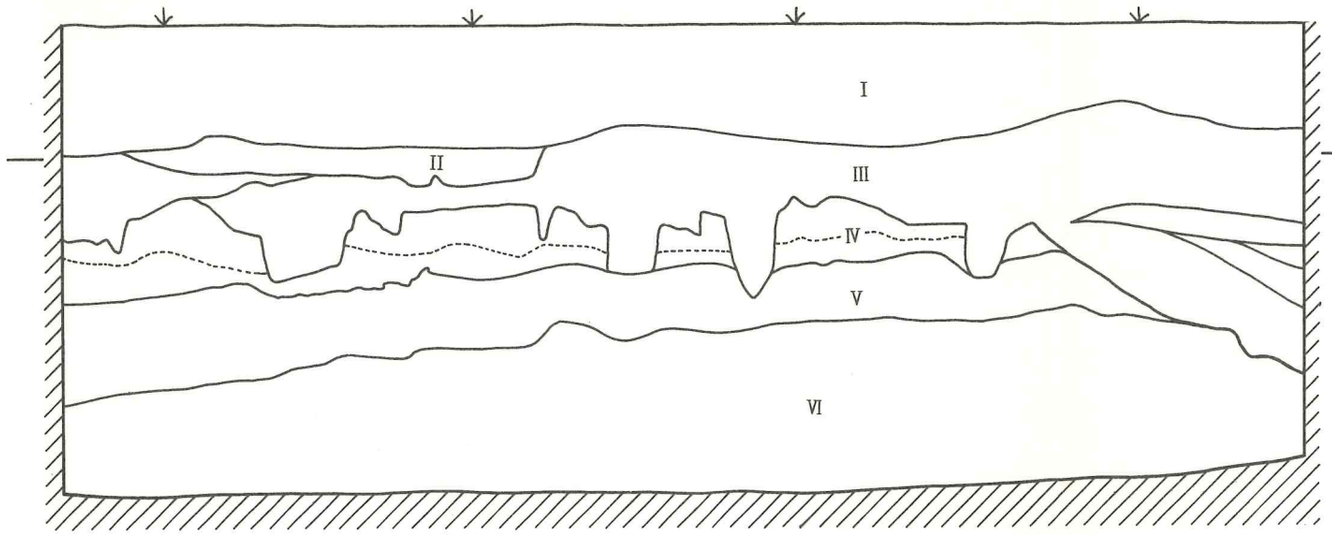
これらは、いずれも溝内埋土中より出土したもので、1はⅠ層内より出土していて、4、5はⅢ層内より出土したものである。他にも土器が見られたが、小破片のため実測に耐え得る資料が無かった。（中村）

1は甕の底部である。脚はさほど高くなく横に広がる。スス等の付着は見られない。2は須恵器である。3は石庖丁の未製品の破片で、石材は粘板岩である。刃部の研磨も途中で終っている。4、5は河原石転用の磨石であるが、あまり使用されていない。（坂本）

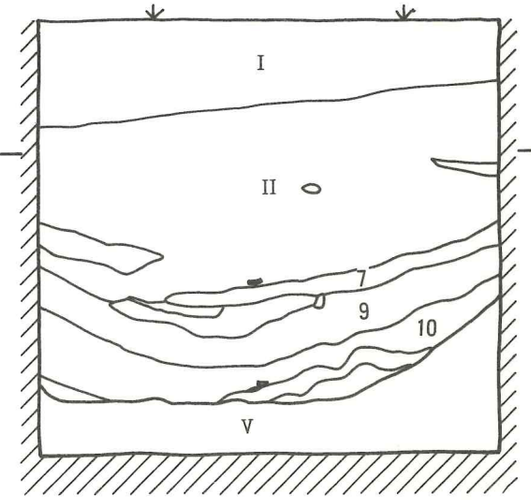
6　溝追跡トレンチ

このトレンチは資材廃棄用土壙内に溝状遺構が検出されたため、その延長上の開発予定地区内の南端に、道路に沿った形でトレンチを設定した。トレンチは長さ4m、幅1mの規模で掘り下げ、溝状遺構が存在することが確認され、総延長は11m以上まで存在することが判明した。

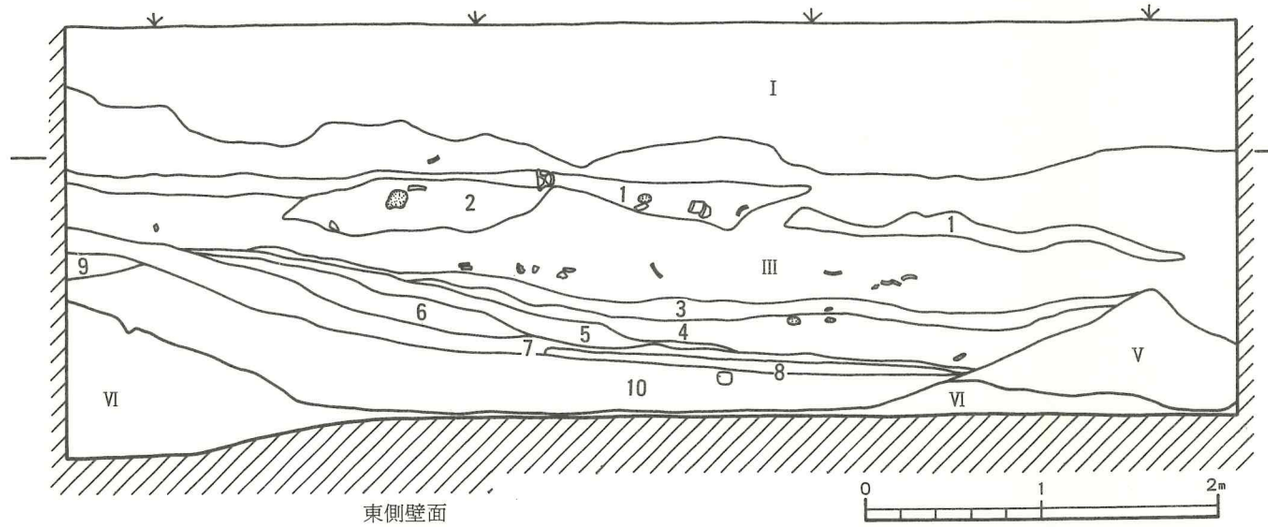
なお、このトレンチにおいては、溝状遺構の上面までの発掘を実施したため、実測図の作成は行なわなかった。



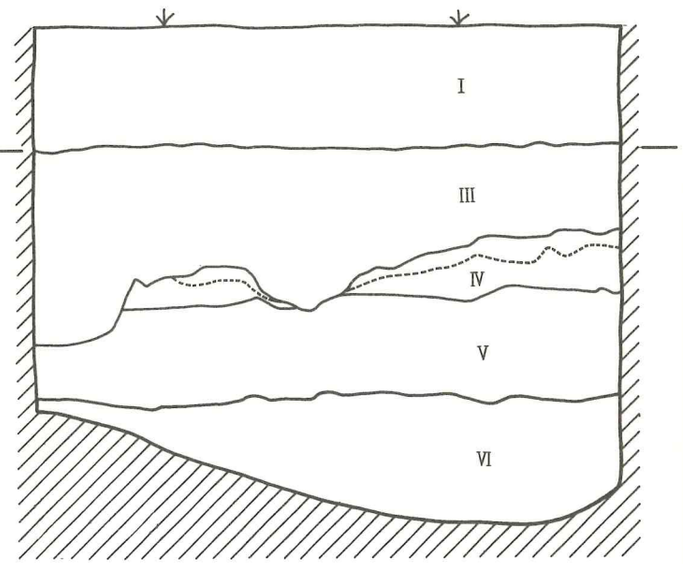
西側壁面



北側壁面



東側壁面



南側壁面

第139図 資材廃棄用土壙内溝実測図

層序

Ⅰ層　褐色土層
Ⅱ層　暗灰色土層（須恵器を出す）
Ⅲ層　暗褐色土層
Ⅳ層　黄色粘質土層
Ⅴ層　明黄色粘質土層
Ⅵ層　明黄色混土礫層

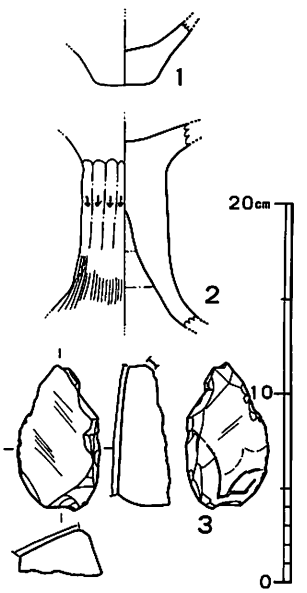
1層　黄色粘土塊を含む
2層　褐色土層
3層　明褐色土層
4層　黒色土層（黄色粘土塊混入）
5層　淡黄色土層
6層　黒色土層（黄色粘土塊混入）

7層　黄色粘土流入土
8層　黄色粘質土塊混入
9層　黄色粘質土層
10層　暗褐色土層（黄色粘土層を含む）

遺物（第 140図）

溝状遺構の上層まで掘り下げたこのトレンチでは、遺物の出土は、きわめて少なかった。遺物は一括して取り上げたため出土層位の確認はできていない。（中村）

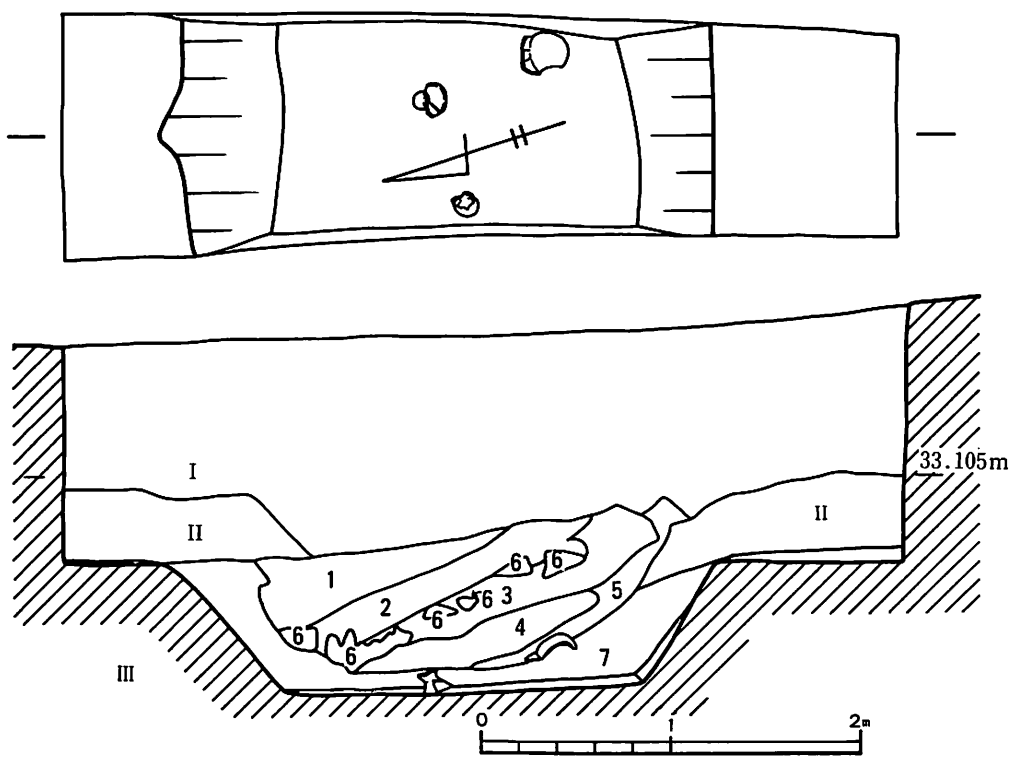
1 は器種不明で、壺の底部かとも思われるが、蓋の可能性もある。2 は高坏の柱状部である。外面はハケ目のあと縦位のヘラ調整を行なっている。3 は陶石製の砥石片であるが、現在の形状になった後も使用した痕跡が窺える。（坂本）



第 140 図　溝追跡トレンチ出土遺物実測図

7　農協東側トレンチ

遺跡西端部確認のため、農協大道支所東側に 1.5m×5 mのトレンチを設定し、調査を進めた結果、資材廃棄用土壙において確認された溝状遺構と同規模と思われる溝状遺構が確認された。



第 141 図　農協東側トレンチ実測図

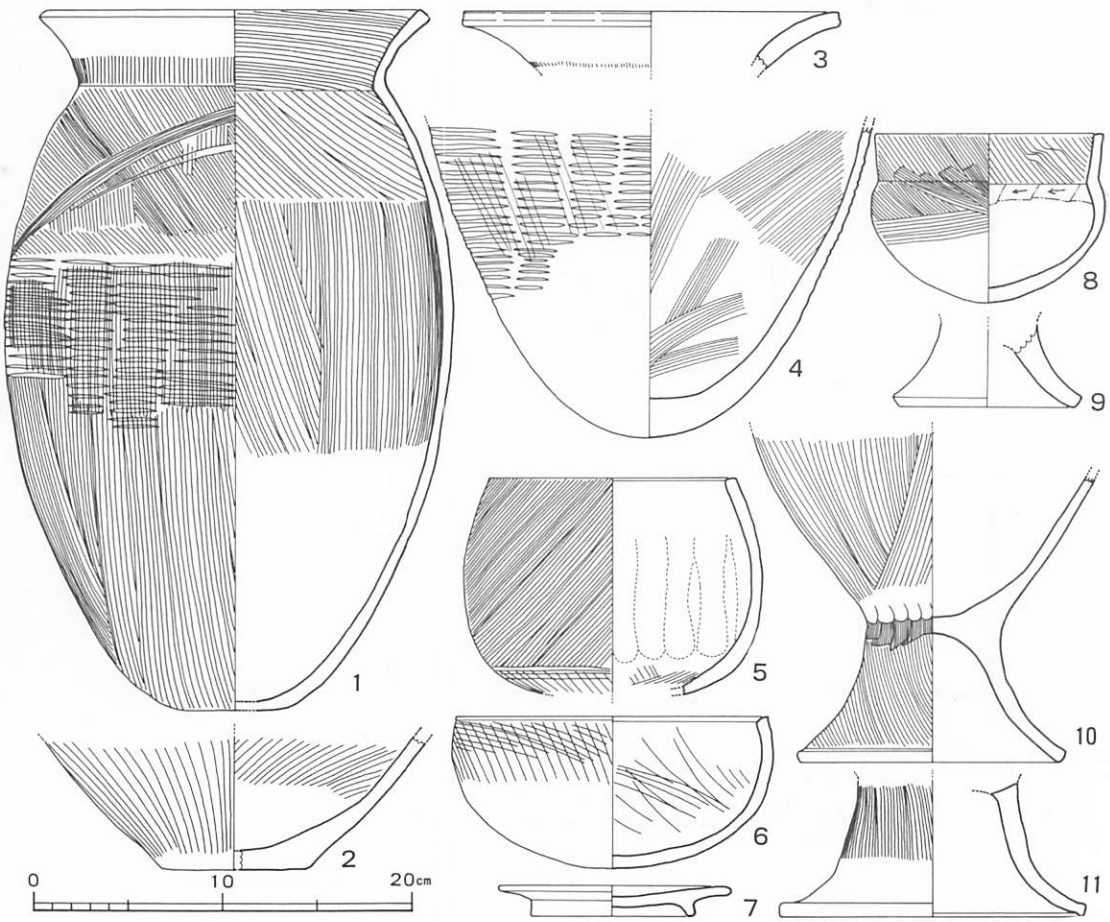
(1) 溝状遺構 （図版36—2、37、第141図）

溝は現地表下 1.2mで確認され、東西に延びている。その規模は上部幅 2.9m、下部内 1.9m、深さ0.87mを測り、断面逆台形状を呈している。この溝の延長上、東 205mの地点には前述の資材廃棄用土壙で確認された溝があり、断定は出来ないが、規模等から考えて同一の溝である可能性は十分あると思われる。

層位は大きく３層に別れ、溝は第Ⅲ層上面より掘り込んでいる。また、溝内での埋土は自然流入による堆積と考えられ、基本的には一つの土色であるが、その中に混入するオレンヂ色の量によって１～７まで、細分化する事が出来た。(倉原)

層序

Ⅰ層　明褐色土層
Ⅱ層　暗褐色土層
Ⅲ層　明黄色粘質土層
1層　褐色土層（黄色土少量混入）
2層　褐色土層（黄色土多量混入）
3層　褐色土層（黄色土少量混入）
4層　褐色土層（黄色土微量混入）
5層　褐色土層（黄色土多量混入）
6層　黄色土層
7層　暗褐色土層



第142図　農協東側トレンチ出土遺物実測図

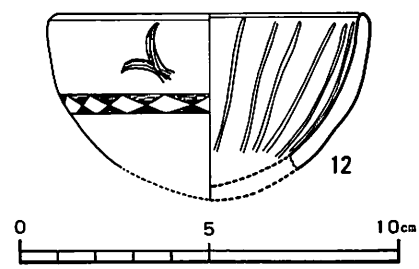
遺物（図版57－4～6、58－1～4、第 142、143図）

溝底に密着した状態で出土したのは、10の甕脚部だけで、他の資料は溝埋土中の4、5層下部に集中している。この他、多量の土器が出土しているが、小片のため図化し得なかった。（倉原）

10は溝底より出土した甕である。裾端部径13.6cm、脚は比較的高く 6.8cmを測る。外面はハケ目、内面は器壁の荒れが著しいがナデ仕上げであろう。外面にススの付着はないが、内面には焦げつきの痕が見られる。7、10を除き他の遺物は、溝底より約20cm上位からの出土である。1は、図では平底気味に見えるが、実際は丸底である。口径19.6cm、器高37cm、胴部最大径23.7cmを測る。外面は上半部がタタキ目のあとハケ目、下半は縦位のハケ目である。内面は上半部がハケ目、下半はナデ仕上げである。外面肩部から胴部中位にかけてと、底部にススが付着し、胴部下位はススがふっ切れている。内面は逆に、胴部下位に焦げつきが帯状にめぐる。

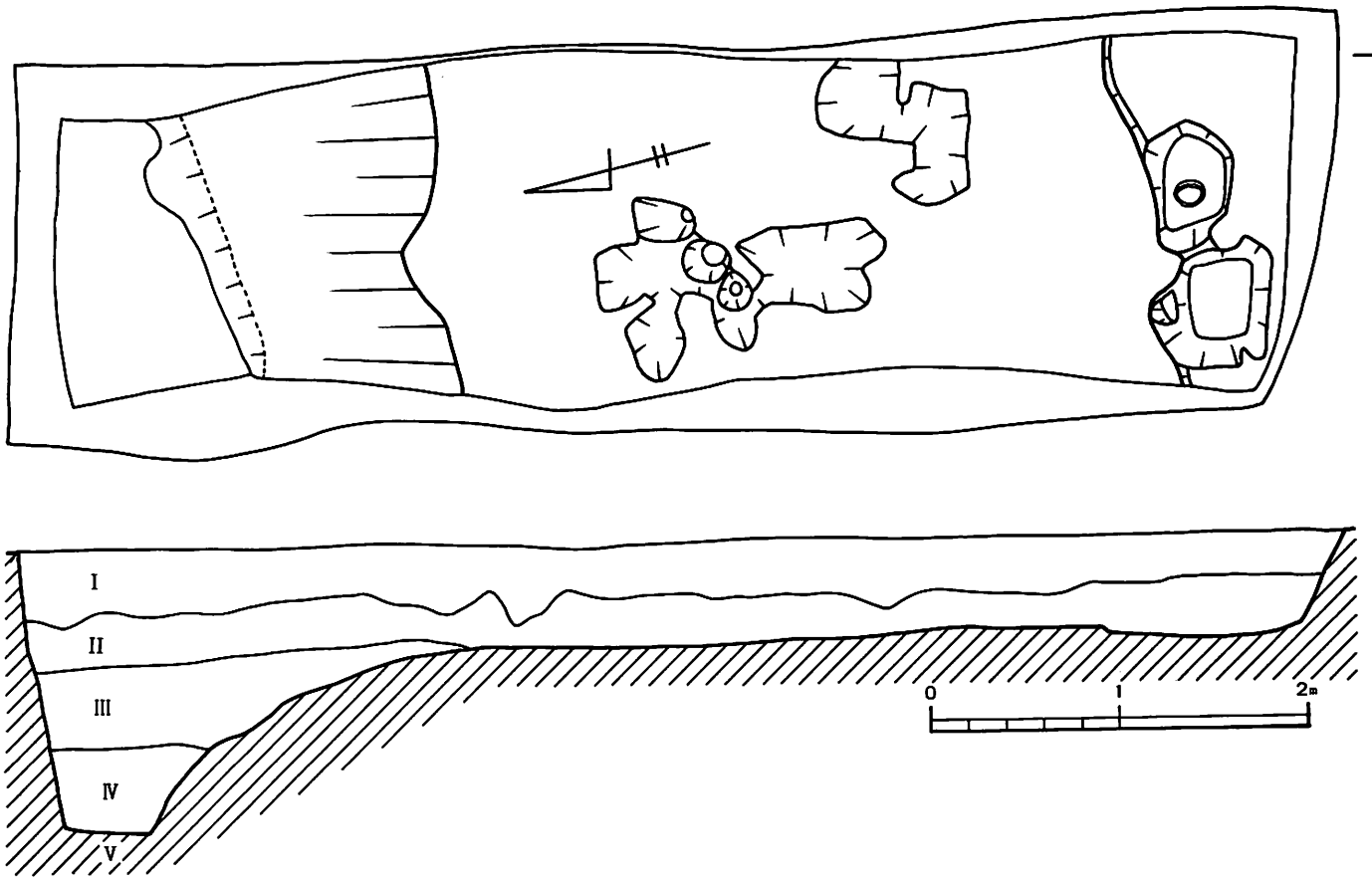
2は、壺の底部片である。平底で、体部内外面にハケ目を施す。3は壺の口縁部片で、復元口径19.7cm。端部は丸味があり、中央が凹む。4は、丸底の甕である。底部はかなりの肉厚で 2.1cmを測る。外面はタタキ目のあとハケ目を施し、底部はヘラケズリのあとナデている。内面はハケ目を施す。外面にススが斑状に付着し、光沢があるが、内面は汚れていない。

5、6、8は鉢である。5は口径11.8cm。外面は斜位のハケ目を施しているが、底部近くで施文の方向が変化し、境い目に稜ができている。内面はナデているが、縦位の指圧痕が残る。胎土に細かい砂粒を多く含む。6は完形で16.4cm、器高 8.1cmを測る。平面形は正円ではなく、楕円形を呈する。外面は、ハケ目のあとナデており、底部付近はヘラケズリを行なっている。内面はナデたあと、先端の細いヘラ状工具によって調整している。8は口径11.1cm、器高 8.9cm。外面は2種類のハケ目原体により調整を行ない、内面は口縁部がハケ目、体部がヘラケズリのあと、入念にヘラ磨きを施している。内面には、斑状の焦げつき痕が残る。9は内外面ともにヨコナデだが、内面にハケ目の痕跡が窺える。11は、体部との接合部からきれいに剝離し、脚部のみ完形で残ったものである。7は溝の埋没後、歴史時代に掘り込まれたピット内から出土した。口径12.6cm、器高 1.6cm、色調は乳灰色を呈し、須恵器に似る。



第143図　農協東側トレンチ出土土器実測図

12は小型の鉢の破片で、復元口径は8cm強を測る。外面は入念にヘラ磨きを施し、そのあと、鋭利な工具で施文している。文様は口縁部直下に簡略化した蕨手文を描き、さらにその下には胴部をめぐるように、連続三角文と菱形文を描いている。蕨手文は輪郭を描き、中を描きつぶすように施文し、また同様に、連続三角文も中を描きつぶすように施文している。内面はヨコナデのあとヘラ描き暗文を施す。（坂本）



第144図　I — 1 トレンチ実測図

8　Ⅰ－1トレンチ　(図版38—1・2、第144図)

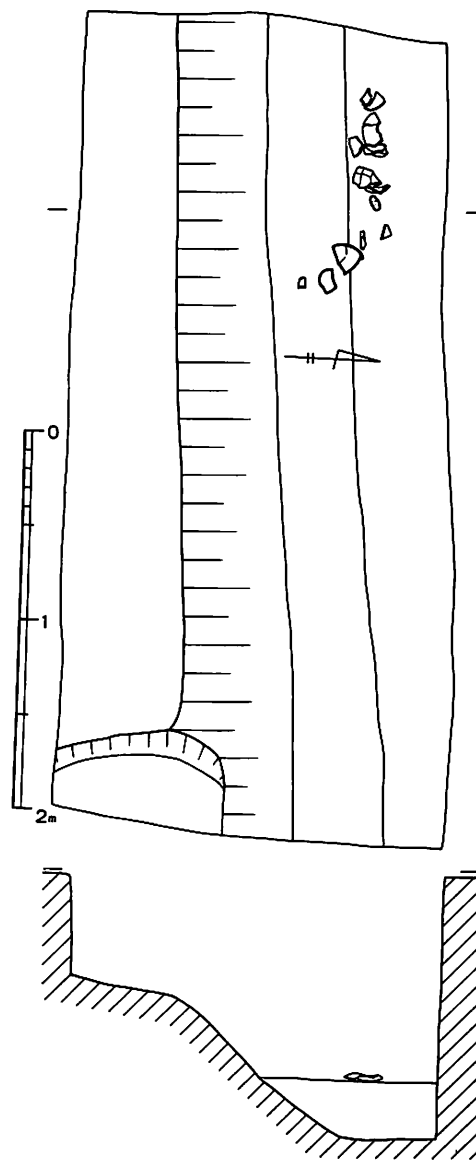
遺跡北限を確認するために、台地北端の斜面を調査することとなり、鹿本高校が宅地建築に伴なって調査を実施した地点に接した畑地を調査した。畑地は三段から成る段々畑で、方保田川沿いに形成された湿地へと続いている。段々畑の上段にⅠ－1、2、3トレンチを、中段にⅡ－1トレンチ、下段にⅢ－1、2トレンチを設定した。(第 117図)

Ⅰ－1トレンチは、当初南北に向けて7m×2mの規模で発掘を行なった。その結果、トレンチ南側では、住居跡の一部を確認し、壁面に沿ったピット内から甑が出土した。また、壁面から北へ約4mの地点で、台地端部が検出された。これは、現在の畑地端部から5m手前の所である。その後、トレンチを西へ6m×2mの大きさで拡張し、幅 1.1m、長さ 3.5m、深さ 0.2mの浅い溝が台地端部へ向って走っているのが確認された。さらに、溝の基部には、一辺 2.7mの方形プランをもった遺構が存在する。恐らく住居跡になるものと思われる。

遺物(図版58－6、第 148図－6)

トレンチ南端に、わずかにのぞかせた住居跡の壁面に沿って、ピットが存在しているが、そのピット内から出土した唯一の遺物が6の甑である。(中村)

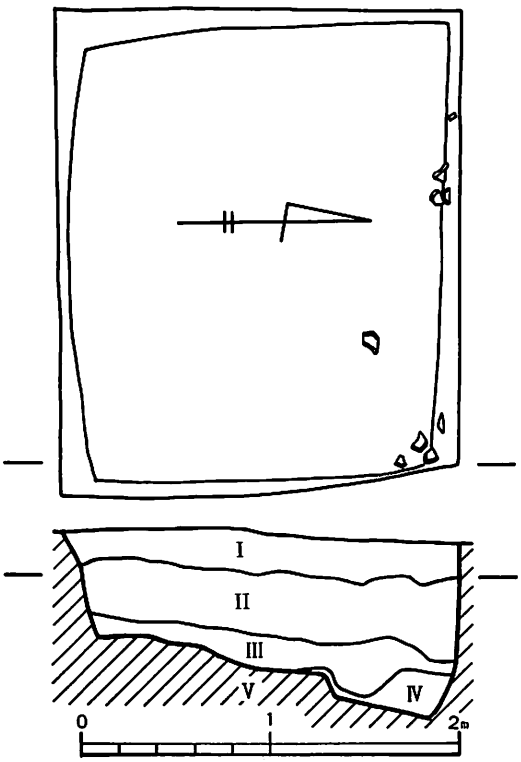
Ⅰ－1トレンチから出土したのは6のみである。鉢形土器の底部に焼成前に円孔を穿った甑で、口縁部を欠損する。外面に若干ハケ目が残る。(坂本)



第145図　Ⅰ－2トレンチ実測図

9　Ⅰ－2トレンチ(図版38—3、第145図)

台地北端がⅠ－1トレンチで確認されたため、西側に延びていく状態をつかむため、約3m離れて、東西方向に走る長さ 4.4m、幅2mのトレンチを設定した。その結果、台地北端部は東西に伸びていくことが明らかとなった。また、台地北端部から下に延びる斜面は1.15m、深さ70cmで水平になり、さらに下段の畑へ降りるものと思われた。



第146図　III－1トレンチ実測図

cmで、ほぼ中位に位置する。外面胴部はタタキ目を施し、そのあと頸部と胴部下位にハケ目を付す。内面は口縁部と胴部上位にハケ目を施し、その他の部分はナデて仕上げている。2は、胴部が丸味を持って張り出した甕で、外面にタタキ目の痕跡が残る。内面は目幅の広いハケ目調整を施す。外面にススが付着するが、内面は汚れていない。4は甕の口縁部片で「く」の字に外反した口縁部は、やや外湾して立ち上がり、端部で逆にやや内湾しておわる。肩部外面にタタキ目が見える。また、口縁部外面全面にススが付いている。7は器種不明の石器である。結晶片岩製で、打製石斧か石庖丁の未製品であろう。

（坂本）

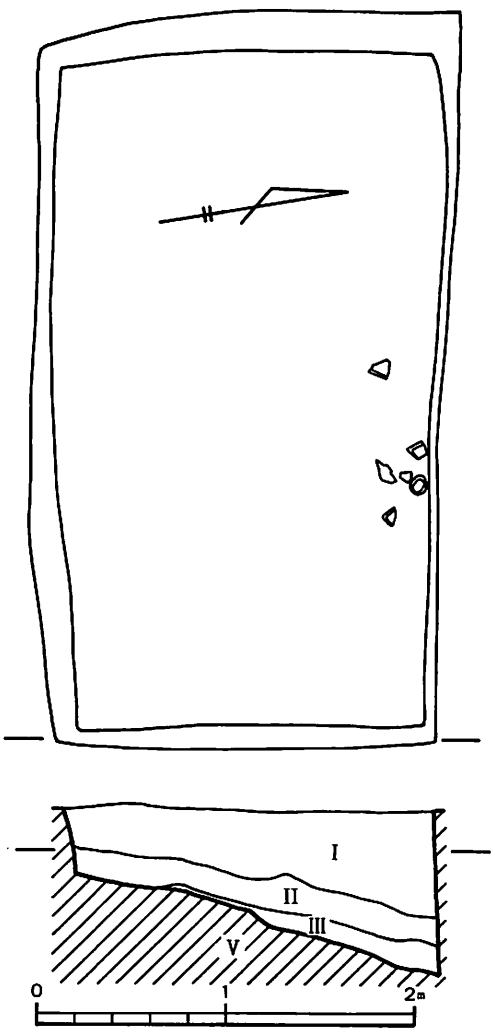
また、この斜面にはI－1トレンチで見られた浅い溝状遺構が流れ込んでいることが確認された。斜面部分で遺物の出土が見られた。

遺物（図版58－5、第148図1、2、4、7）

遺物は台地北端部の斜面中位から出土している。溝状遺構で見られるような遺物の出土状況で、比較的大きな破片で残っていた。

（中村）

I－2トレンチ出土は、1、2、4、7である。1は口縁端部を欠く。胴部最大径は21



第147図　III－2トレンチ実測図

10　Ⅰ－3トレンチ

Ⅰ－2トレンチの西側に隣接する形で、長さ7m、幅2mのトレンチを設定した。ここでも、台地北端を確認することを目的とした。その結果、現在の地形とほぼ平行した形で、端部が伸びていることが判明した。Ⅰ－1トレンチからの総延長は17mに達している。

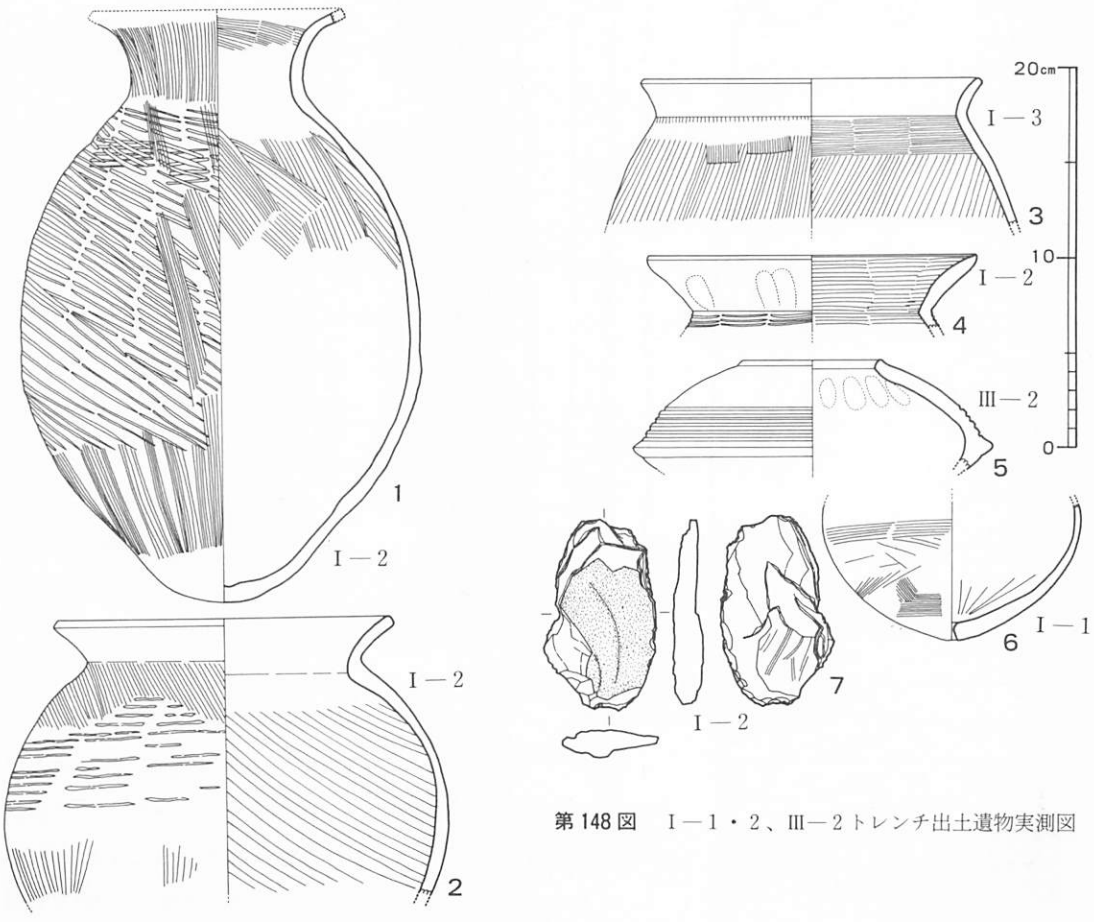
遺物（第 148図－3）

この遺物は遺構には伴なわず、流れ込んだ可能性が強い。（中村）

3はⅠ－3トレンチから出土した。外面の調整は、ハケ目のあとナデであるが、その前段階として、タタキ目を施し、それをナデ潰した痕跡が窺える。また、外面にススの付着を見る。（坂本）

11　Ⅱ－1トレンチ

このトレンチは、Ⅰ－1、2、3トレンチを設定した畑の一段下の畑地に設置したもので、長さ

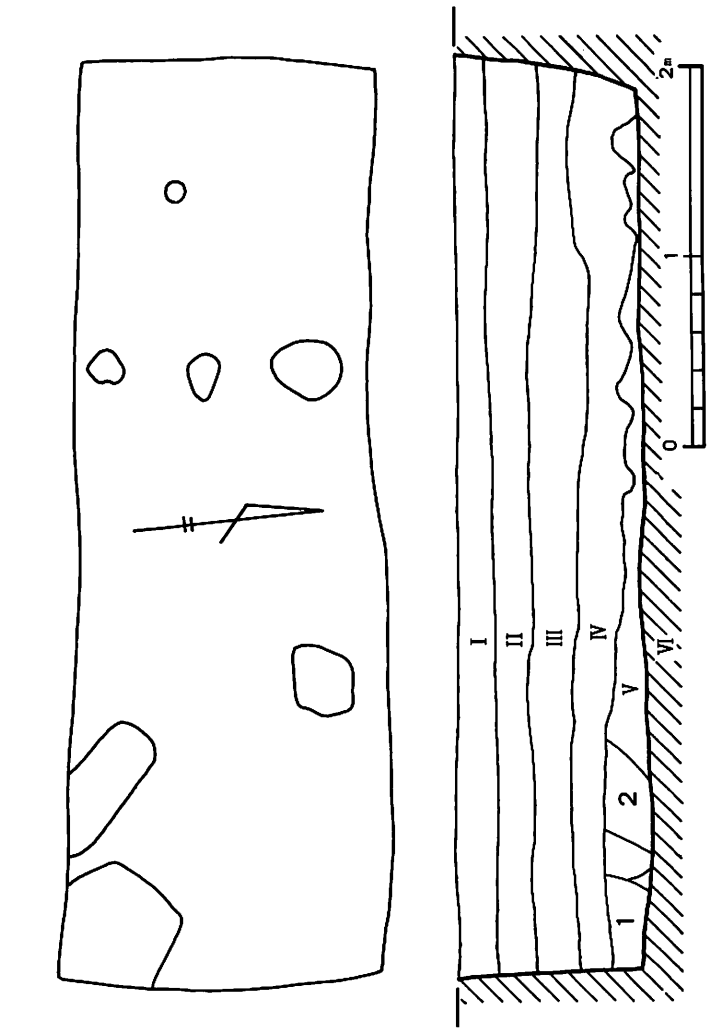


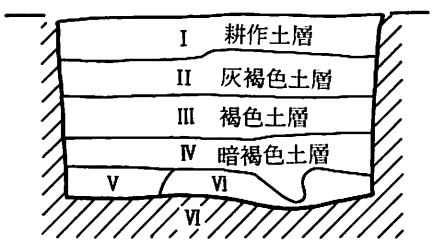
第148図　Ⅰ－1・2、Ⅲ－2トレンチ出土遺物実測図

5.5m、幅２mの規模である。ここでは、Ⅰ－１、２、３トレンチで見られた台地北端部から伸びてきた斜面が走っており、Ⅲ－１、２トレンチの方へ進んでいる。

12　Ⅲ－１トレンチ　（第146図）

Ⅰ－１、Ⅱ－１トレンチの直下に位置し、最下段の畑地に設置したこのトレンチは、2.5m×２mの大きさで掘り下げた。断面図の如く、地山層がわずかに傾斜していることが判る。ここに至ると遺物の出土は細片で、ローリングを受けたものが多く、遺構に伴なうものは見出すことができなかった。





第149図
東側トレンチ実測図

V 暗褐色土層（黄色粘土混入）
VI 黄色粘質土

13　Ⅲ－２トレンチ
（第147図）

Ⅲ－１トレンチの西側へ５m離れ、長さ約４m、幅約2.2mの大きさで設置している。ここでも、斜面が確認され、遺構の存在は無かった。しかし、遺物がわずかに流れ込んだ状態で出土している。

遺物（第 148図－５）

トレンチ北側で検出したもので、斜面に乗った状態で出土している。(中村)

５はⅢ－２トレンチから出土した無頸壺の破片である。復元口径 6.6cm、胴部最大径19cmを測る。全体的形状は、算盤玉状を呈するものと思われる。胴部中位に５条の沈線

と断面三角形の突帯１条をもつ。器面調整はヨコナデ、及び指頭によるものである。（坂本）

14　東側トレンチ　（図版39—１、第149図）

ここは、開発予定地の東側に接した地点で、現在宅地となっている所である。南側トレンチの東側に位置し、馬見塚へ行く道路に沿って長さ約５m、幅 1.7mの規模のトレンチである。遺構としては大小のピットが７個見られたが、とりたてた遺構の検出は見られなかった。また、遺物もこれまで調査した区域では最も少なく、殆んど見ることができなかった。

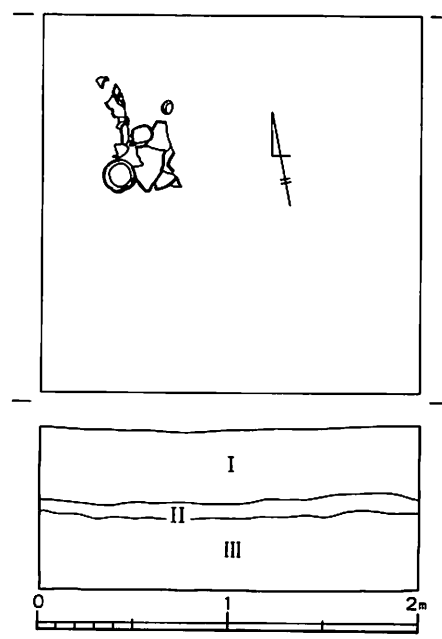
15　No.1 ピット　（図版39—２・３、第150図）

開発予定地区内東端部に、２m×２mのピットを７個南北方向に配した。その最も北に位置するのが、このNo.１ピットである。このピットでは、90cmの深さから一括して遺物が出土した。しかしこれに伴なう遺構は、このピット内に限っては検出できなかった。

遺物　（図版59—１～３、第151図）

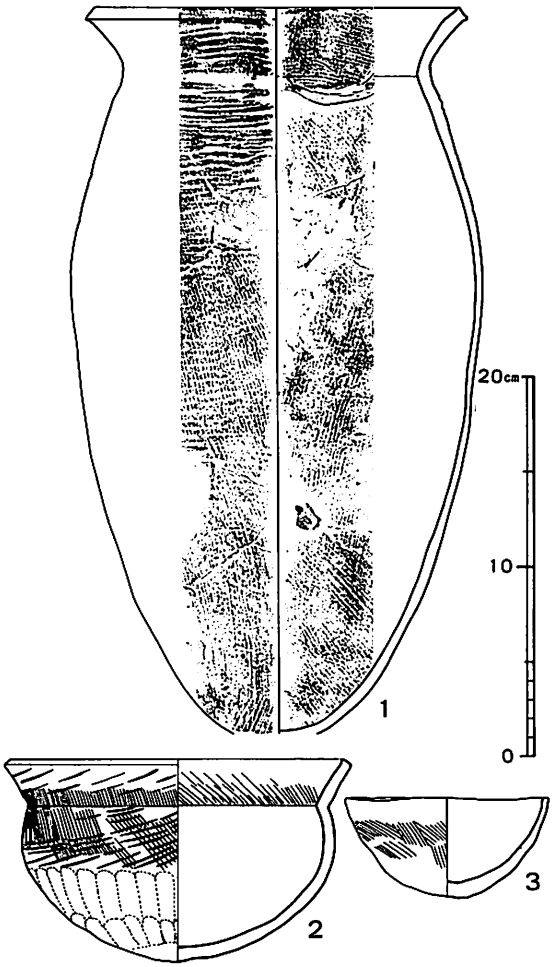
第Ⅲ層からの出土で、まとまった状態で検出できた。鉢については完全な姿をとどめ、甕等は半欠の状態であった。（中村）

１は、長胴で丸底の甕である。復元口径19.2cm、器高38.6cm、胴部最大径は胴部のやや上位、口唇端部下14cmの位置に有する。口縁部は頸部から、ゆるく湾曲して開き、先端は鋭角的に角ばり、外側は突出気味となる。胴部はほとんど膨らまずに下方へ流れて、丸底となっておさまる。外面は口縁部から胴部中位にかけてタタキ目を施し、そのあと底部及び胴部下半をハケ目調整し、その延長という形でハケ目を上半部まで施している。内面は口縁部から、胴部下位までハケ目調整である。外面胴部中下位にススが付着し、内面には底部から肩部にかけて縦長の焦げつきが見られるが、本土器が破片であるため、焦げつきの全体的な付着状況はわからない。２は完形の鉢で口径17.6cm器高10.7cm。外面にタタキ目とハケ目を施し、さらに胴部下半はヘラケズリを行なっている。内面口縁部はハケ目のあとヨコナデ、



第 150 図　No.1 ピット実測図

層序　Ⅰ層　耕作土層
Ⅱ層　暗褐色土層
Ⅲ層　褐色土層



第151図　No.1ピット出土遺物実測図

胴部はナデ仕上げである。胎土に砂粒を多く含む。3も完形の鉢で口径10.2cm、器高 5.3cmの小型のものである。外面にススが帯状に周回し、光沢がある。（坂本）

16　No.2ピット　（図版40、第152図）

No.1ピットの南に10m離れて設置したのがNo.2ピットである。

このピットでは、地表下40cmから80cmまでの間で、大量の土器が集中して出土した。特に、この土器群の他に、礫が多く出土していて、割れた状態の土器が多く出土したため、土器捨て場としての土器溜めであると判断した。また、この土器溜めは、南側に延びていることが明らかになった。土器を取り上げた段階で、堅く締った床面が検出された。恐らく住居跡を利用した土器溜めであると判断された。しかし、住居跡の壁面は、ここの中では検出できず、ピットの外に存在するものと思われる。

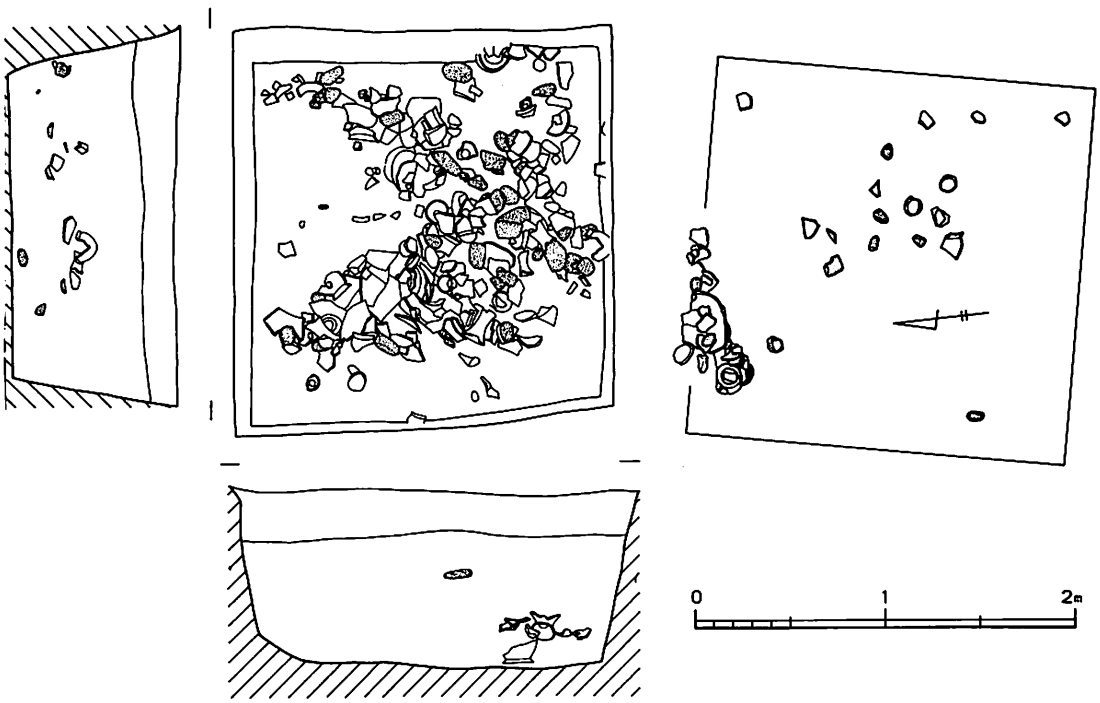
遺物（図版59－4～7、60、61、第153～160図－1）

ピット内でも、北側より南側が多く出土する傾向にあった。また、出土した土器の堆積も、南側が厚くなっていた。（中村）

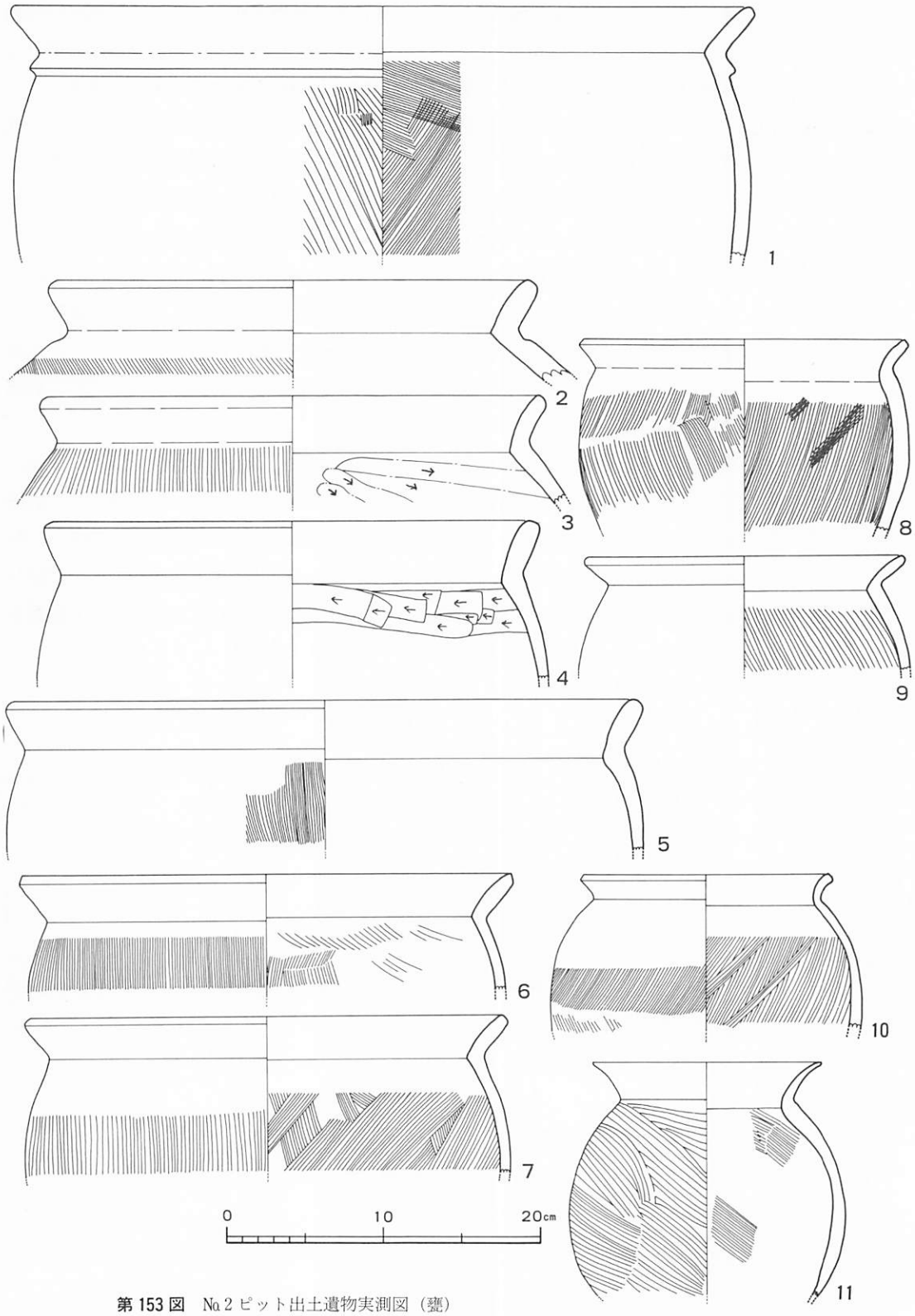
1～34は甕形土器である。1は、復元口径47cmを測る。口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸くなる。頸部の締りは弱く、貼付突帯一条を有する。胴部は僅かな曲線を描きながら下行し、その最大径は、やや上位に位置し、口径とほぼ同径を示す。器面は、口縁部より頸部にかけてヨコナデ調整され、胴部は斜め方向の粗いハケ目で仕上げられている。2は復元口径30cmを測る。口縁部は短かく外反し、端部はやや角張る。頸部の締りは弱く、指頭による撫での際にできた稜を認める事ができる。胴部は欠損するが、頸部から肩部方向へは直線的に大きくふくらむ。器面調整は、口縁部内外面共と胴部内面にヨコナデ、胴部外面は斜め方向の細かいハケ目調整であるが、頸部付近は撫で消されている。3は復元口径31cmを測る。口縁部は僅かに外湾気味に開き、端部は丸くなる。頸部の締りは弱く、胴部へは直線的に開きながら移行する。器面調整は、口縁部内外面をヨコナデ

で仕上げ、胴部外面は縦方向のハケ目、内面はヘラケズリにより調整されている。4は復元口径30cmを測る。口縁部の開きは弱く、口頸部はやや肥厚し、端部は丸味を帯びる。また、頸部の締りは弱い。器面調整は全面ヨコナデによるが、内面頸部付近にはヘラ調整を観察する事が出来る。

5は、復元口径39cmを測る。口縁部の開きは弱く、端部は丸くなる。器面調整は、胴部外面に縦方向のハケ目が施されている他は、ヨコナデにより仕上げられている。6は復元口径31cmを測る。口縁部は直線的に開き、口頸部は僅かに肥厚ぎみで、端部はナデ調整のため上部が鋭く尖り、下部は僅かに稜を残す程度にナデ消している。頸部の締りは弱く、内部には明瞭な稜を作り上げている。器面調整は、口縁部をヨコナデで仕上げ、胴部は縦方向のナデを主とするが、内面頸部付近は斜め方向のハケ目で、ナデ消されている。また、外面全面にススの付着を観察出来る。7は、復元口径30cmを測る。口縁部は外湾ぎみに開き端部は丸くなる。頸部の締りは弱く、内面にはナデにより僅かに摘み出したような稜を有し、また、胴部の膨みは小さい。器面調整は口縁部にヨコナデ、胴部は細かいハケ目により仕上げている。8は復元口径20.4cmを測る。口縁部は短かく開きは弱い。また、端部は角張り口唇部はナデ調整により、中央が僅かに凹む。胴部は、やや肥厚し、最大径は、やや上位にあると想定され、口径とほぼ同位を示す。器面は口縁部内外をヨコナデで仕上げ、胴部はヘラ調整の後、粗いハケ目を施している。9は復元口径20cmを測る。口縁部は大きく開き、口頸部はややや肥厚ぎみで、端部はナデ調整により上部は尖り、下部は僅かに稜を残す程度にナデ消している。胴部は口縁部に比べ器厚が厚く、僅かに湾曲しながら下行する。器面はナデにより調整さ



第152図 No.2ピット・No.2拡張ピット実測図



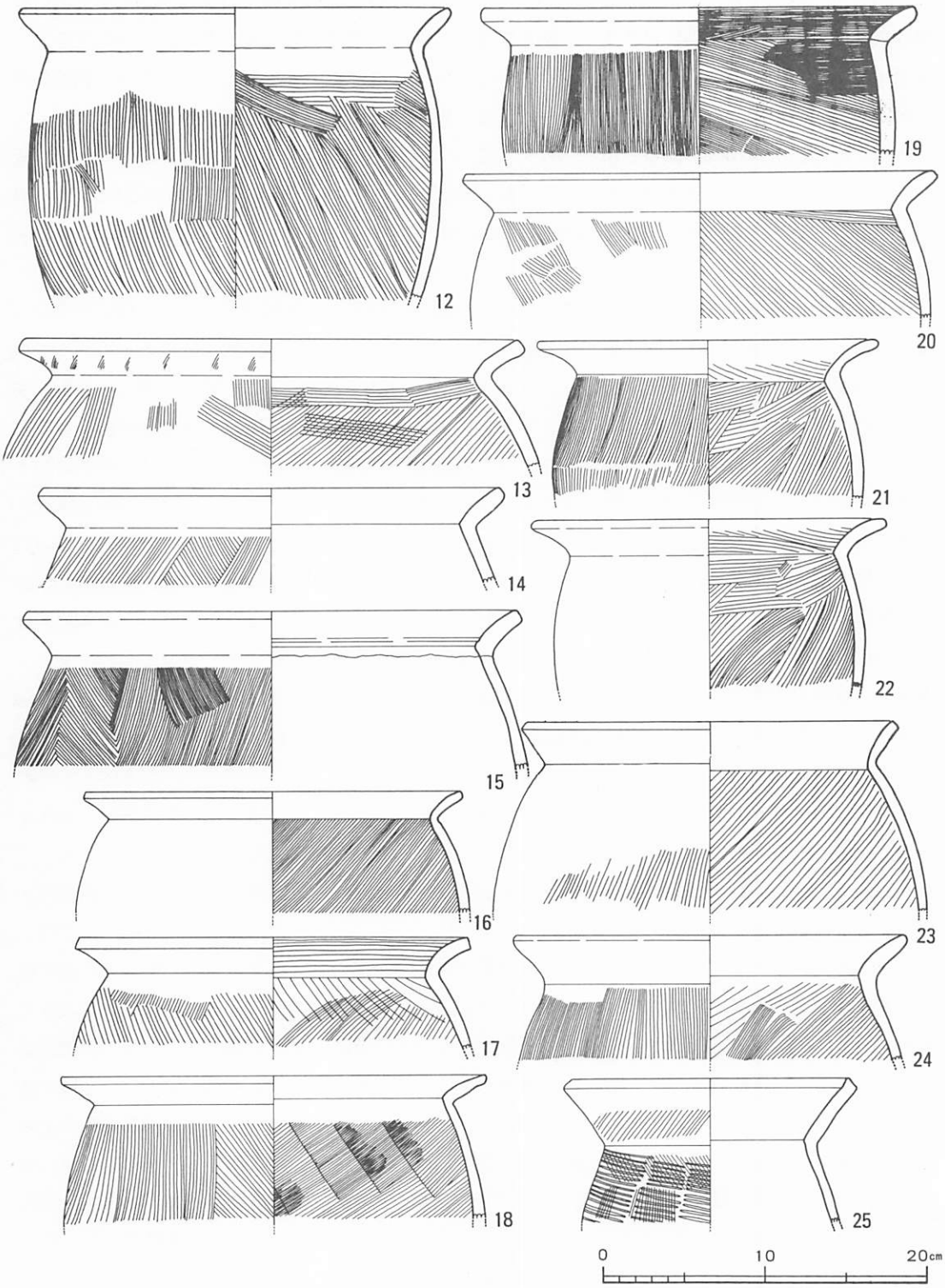
第153図　№2ピット出土遺物実測図（甕）

れているが、胴部内面には斜め方向の粗いハケ目を施している。10は復元口径15.6cmを測る。口縁部は短かく外湾ぎみで、端部は角張る。胴部の膨みは弱く、中位においては直線的に下向ぎみで、端部は角張る。胴部の膨みは弱く、中位においては直線的に下向するようである。器面は胴部外面に細いハケ目、内面には比較的粗いハケ目を施し、頸部付近においてはナデ消されている。

11は、復元口径14.6cmを測る。口縁部は外湾ぎみに開き、端部に向ってしだいに細くなっている。胴部は球形状を呈し、下部を欠損する。器面は口縁部内外をヨコナデ調整し、胴部外面はタタキ目の後、ハケでかき消すように調整し、内外は斜め方向のハケ目を施す。また、頸部に虫喰い状の剝離がみられる。

12は、復元口径26.4cmを測る。口縁部は口頸部が僅かに肥厚し、頸部は丸くなる。胴部の膨みは弱く、最大径を口径にもつ。器面調整は、胴部内外面にハケ目を施し、頸部付近はナデ消されている。13は復元口径30.2cmを測る。口縁部は大きく開き、端部は肥厚気味で角張る。胴部は大きく膨み、内外面をハケ目により調整している。また、口頸部外面には、等間隔にハケによる施文がみられ、頸部にはヨコナデ状にハケで調整している。14は復元口径28cmを測る。口縁部は直線的に開き端部は丸くなる。頸部は内面に明瞭な稜を作り出し、胴部は、頸部付近においては直線的に膨む。器面はヨコナデ調整を主としているが、胴部外面にはハケ目がみられる。このハケ目は右下りのハケ目を施した後、左下りのハケ目を等間隔に施していると思われる。15は復元口径30cmを測る。口縁部は全体に肥厚ぎみで、端部は丸くなる。頸部内面はヨコナデにより稜を作り出し、その頂点は再度ナデ調整により平坦面を呈している。また、稜直下では、粘土の接合面が明瞭に観察出来る。器面は口縁部をヨコナデ調整、胴部はハケ目を施し、内面に指圧痕がみられる。16は復元口径23cmを測る。口縁部は大きく開き、口頸部は肥厚気味で、端部は角張る。胴部の膨みは弱く、最大径は口径より僅かに大きくなる程度と思われる。器面調整は、主としてヨコナデだが、胴部内面には斜め方向の非常に密なハケ目を施している。17は復元口径24cmを測る。口縁部は、外湾気味に大きく開き、端部は角張る。器面調整は口縁部内面にヨコナデ状のハケ目を施し、胴部内外面には太くて粗いハケ目を施している。18は復元口径26.2cmを測る。口縁部は大きく開き、口頸部が肥厚気味で端部はナデ調整により上部は尖り、下部は丸味を帯びている。胴部の膨みは弱く、直線的に下行し、その最大径は、口径とほぼ同一と思われる。器面調整は口縁部にヨコナデを施し、胴部は外面に粗いハケ目、内面は細かく密なハケ目が施されている。19は復元口径26.6cmを測る。口縁部は大きく開き、端部は丸くなる。胴部の膨みは、ほとんど無く、ほぼ垂直気味に下行する。また、頸部外面には粘土の接合面が観察出来る。器面は口縁部外面にヨコナデ、胴部は縦方向の細かいハケ目を施し、内面は全面を木目細かなハケ目により調整している。また、外面全面にススの付着が観察出来る。20は復元口径14.3cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、口頸部がやや肥厚し、口唇部に浅い凹みがみられる。胴部は垂直気味に下行し、最大径は口縁部にある。器面は口縁部をヨコナデ、胴部外面は粗いハケ目を施し、部分的にナデ消され、内面も斜め方向のハケ目により調整されている。

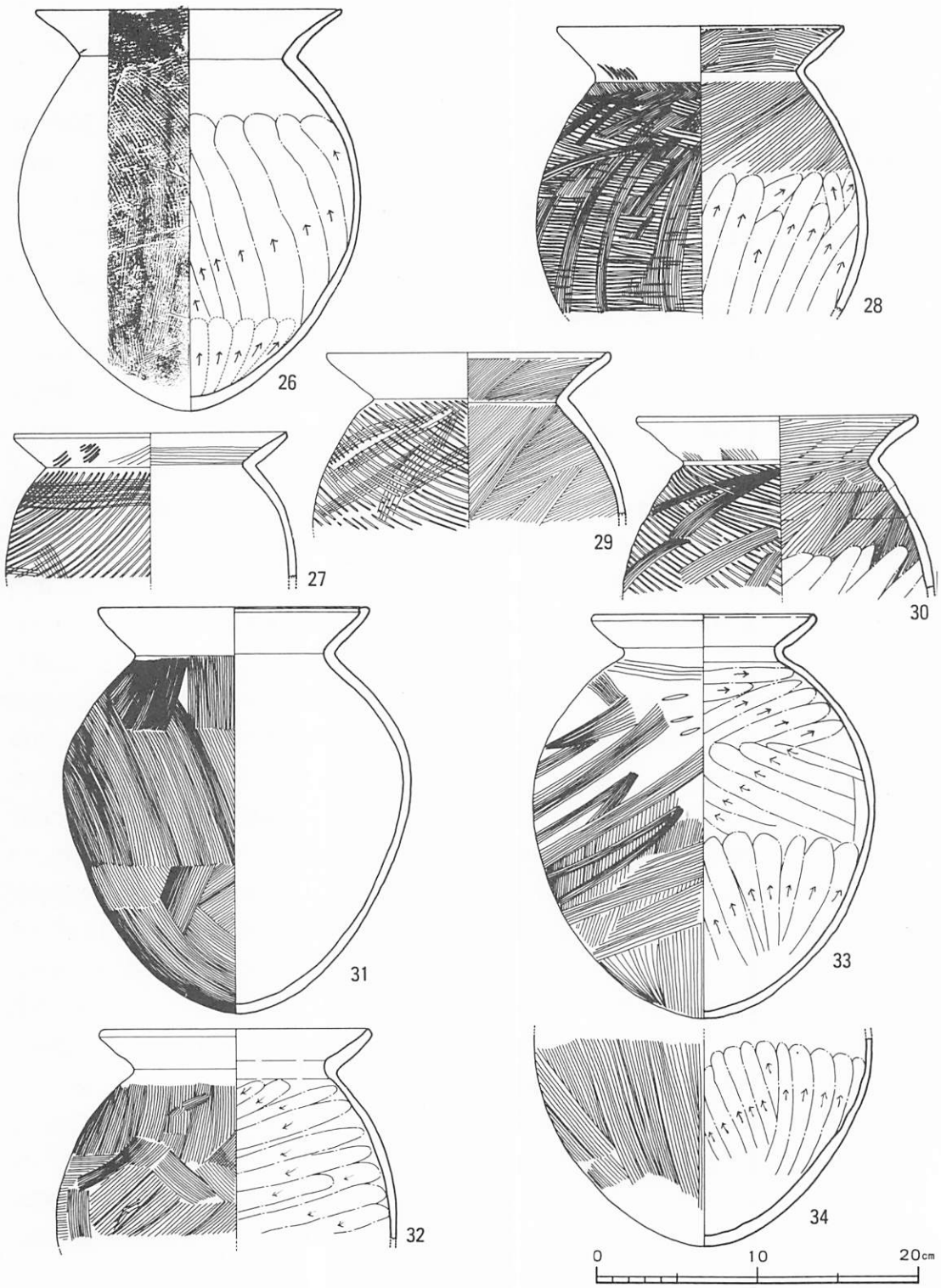
21は復元口径20.6cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、端部は丸くなる。胴部の膨みは弱く、最大径は口縁部にある。器面調整は口縁部をヨコナデ、胴部は細かいハケ目を施している。22は21と同形状を呈し、最大径は口縁部にある。器面調整はヨコナデを主とするが、胴部内目にハケ目を施



第154図　№2ピット出土遺物実測図（甕）

している。23は復元口径22.6cmを測る。口縁部は直線的に開き、口頸部が僅かに肥厚し、端部は角張り、口唇部が僅かに凹む。胴部の最大径は、中位に位置すると思われる。器面調整は胴部内外面に比較的粗いハケ目を施しているが、外面はナデ消され、僅かに残る程度である。また、ススの付着が観察できる。24は復元口径24cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、端部は丸くなる。胴部の膨みは弱く、その最大径は口縁部と大差はないものと思われる。器面調整は口縁部をヨコナデ、胴部には粗いハケ目を施している。また、外部全面にススの付着がみられる。25は復元口径16.8cmを測る。口縁部は直線的に立ち上り、その開きは弱い。端部はナデにより、上部が尖り気味になる。胴部は頸部付近においては直線的に膨む。器面調整はヨコナデを主としているが、口頸部に細かいハケ目を施し、また、胴部はタタキ目の上に斜め方向の細かいハケ目を施している。

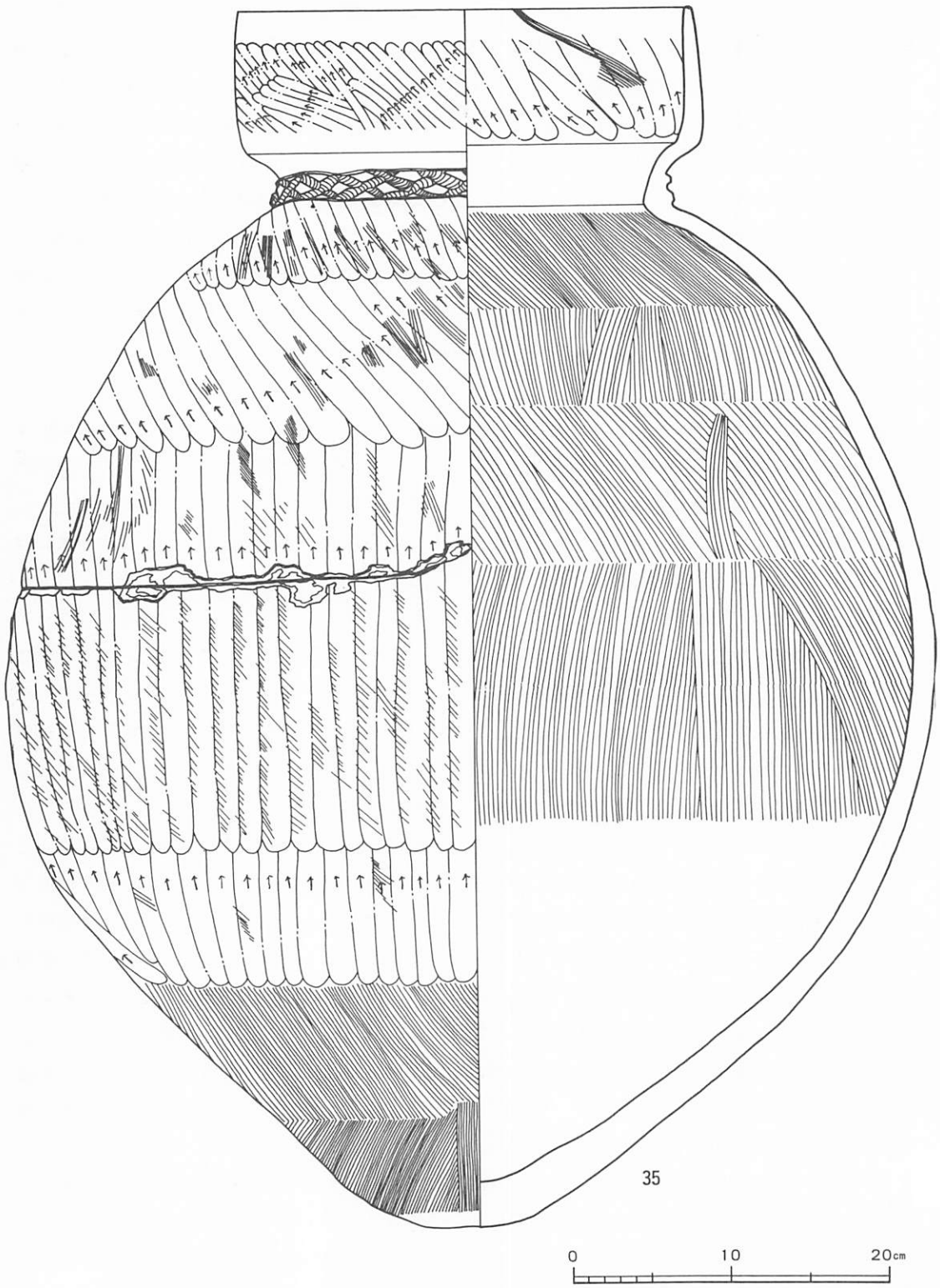
26は口径19cm、器高24.9cmを測る。口縁部は大きく開き、端部はナデ調整により、尖り気味になる。胴部は倒卵形状を呈し、最大径は中位に位置する。また、底部は尖り気味である。器面調整は口縁部をヨコナデ、胴部外面は頸部より中位までタタキ目を施した後、全面を粗いハケ目で調整し、また、内面は底部より上方向へのヘラケズリを施している。27は復元口径16.8cmを測る。口縁部は直線的に開き、端部はナデ調整により、上部が鋭く尖り、下部は僅かに稜を残す程度である。胴部は球形を呈し、最大径は中位に位置するものと思われる。また、頸部と肩部には粘土の接合面が観察される。器外面は口頸部と胴部にタタキ目を施し、その上から肩部に横方向の粗いハケ目、胴部中位には部分的に細かいハケ目を施し、また一部にススの付着がみられる。内面は口頸部にヨコナデ状のハケ目を施している。28は口径17.6cmを測る。口縁部は口頸部がやや肥厚し、端部は上部を僅かにつまみ上げている。胴部は下半を欠損するが、倒卵形状を呈するものと思われる。器外面調整は口縁部にヨコナデ、口頸部には一部にハケ目を施す。胴部にはタタキ目を施した後、斜め方向の粗いハケ目で掻き消すように調整している。内面は口縁部にヨコナデ状のハケ目、胴部上位にも同様のハケ目を施し、中位以下は下から上方向へのヘラケズリにより調整している。29は復元口径17.6cmを測る。口縁部は直線的に開き、口頸部が僅かに肥厚する端部は、上部を摘み上げられ、内面に僅かな凹みを有し、下部は僅かに稜を残す程度である。胴部は下半を欠損するが、倒卵形状を呈するものと思われる。器外面は、口縁部をヨコナデ、胴部は左下りの数条のハケ目の上にタタキ目を施しており、また、内面は全面細かいハケ目により調整している。30は、口径17.2cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、口頸部が僅かに肥厚し、端部は上方につまみ上げられ、内面に僅かな凹を有する。胴部は下半を欠損するが、倒卵形状を呈すると思われる。また、内面上位には2箇所に粘土の接合面を観察することが出来る。器外面調整は、口縁部にヨコナデを施し、頸部に細かいハケ目を部分的に施している。胴部はタタキ目の上に、左下りの数条のハケ目を施している。また口唇部と胴部中位にススが付着している。内面は口縁部にヨコナデ状のハケ目を施し、胴部上位に細かいハケ目、中位はヘラケズリにより仕上げている。31は口径16.6cm、器高25.2cmを測る。口縁部は外反し、端部は上部を内側につまみ出し、稜を作り上げ、僅かに外傾する平坦面を有する。胴部は肩部になだらかな膨みをもち、最大径は中位より、やや上にあって底部へとすぼまる。また、口縁部より胴部中位にかけてススが付着している。口縁部外面はヨコナデ、胴部は全面ハケ目を施した後、頸部から肩部にかけてヨコナデにより仕上げている。32は口径16.4cmを測り、胴部下半を欠



第155図 No.2 ピット出土遺物実測図（甕）

損する資料である。口縁部は全体に肥厚し、端部は上部を内側につまみ出して稜を作り出している。頸部はナデ調整により、内部の稜は消され、平坦面を有している。胴部はなだらかな膨みをもち最大径は中位にあると思われる。器面は口縁部をヨコナデ、胴部外面は全面にハケ目を施し、内面はヘラケズリにより仕上げている。33は口径13.6cm、器高25cmを測る。口縁部は、やや内湾気味に外反し、端部は上部を内側に摘み出し、僅かな稜を作り出している。頸部はナデ調整のため外面口頸部に稜を有し、内面は平坦面を作り出している。胴部は肩部になだらかな膨みをもつ倒卵形状を呈し、最大径は中位より、やや上にある。また、全面にススが付着している。器面調整は口縁部にヨコナデ、胴部には縦方向のハケ目の上に、左下りの数条のハケ目を施し、一部のタタキ目状の痕跡を残している。内面は口縁部をヨコナデ、胴部はヘラケズリにより仕上げている。34は底部のみの資料で、丸底を呈する。器肉は非常に薄く、器面調整は外面をハケ目、内面をヘラケズリにより仕上げられている。

35～40・43は壺形土器である。35は口径28.8cm、器高77cmを測る大型の壺である。口縁部は頸部の上部が大きく外反したその上に、円筒状の口縁部をのせて形成した複合口縁をなすもので、口頸部の屈接は弱く、端部は丸味のある平坦面を有している。頸部は断面「コ」の字状の突帯を巡らし先端が櫛状になった工具により「x」状の刻目を配している。胴部は長球形を呈し、その最大径は中位にあり、下位が尖り気味にすぼまり、丸底へと続く。器外面調整は口縁端部と口頸部にヨコナデを施し、口縁部中位は下から上方向へのヘラケズリにより調整している。胴部は全面にハケ目を施した後、頸部より下位にかけて下から上方向へのヘラケズリにより仕上げている。内面口縁部は全面にヨコナデを施した後、端部を除く面にヘラケズリを行い、さらに、一部にハケ目調整を行なっている。胴部は頸部より中位まで粗いハケ目により仕上げられている。また、この資料には補修痕を観る事が出来る（図版61－2－a・b・c）。口縁部には相対して2箇所に、また、胴部は頸部から中位にかけて5～6箇所に粘土の目張による補修を行なっているが、それがヒビのために行なわれたのか、破損したために行なわれたのかは不明である。乾燥段階でヒビが入り、補修をした後に焼成を行なったと考えた方が自然であるが、この資料の場合、補修された内の一破片に完全な色の相異が生じている事に問題がある。それは、壺全体は肌色を呈しているのだが、この破片だけは補修痕も合せて黒色を呈しているのである。この事については、①一度焼成した後、この箇所だけ新たに作成した。②焼成中に破損した。③廃棄した後に火を受けた。の3通りについて考える事が出来ると思われる。ただ、①については、粘土の収縮率等から考えて不可能である。また、②③についても同じ条件下にあったであろう一個の土器の一部だけに、なぜ色の相異が生じたのか疑問である。36は復元口径20.4cmを測る、口縁部のみの破片である。円筒状の口頸部から、大きく外反する端部へ続くもので、端部上部を上へ摘み上げ、口唇部に凹を有している。器面はヨコナデにより調整され、色調は灰色を呈している。37は復元口径19.6cmを測る。口縁部は円筒状で上部が僅かに外反する。器面は内外共にヨコナデ調整を行なっている。38は口径15cmを測る。口縁部は直線的に外反し、端部はナデ調整により上部が尖り気味で、下部は僅かに稜を残す程度である。肩部は僅かなカーブを描きながら大きく外反する。器面は口縁部全面にヨコナデを施した後、全面に粗いハケ目、また、口頸部に細かいが粗いハケ目を施している。頸部から肩部にかけてはタタキ目を施



第156図　№2ピット出土遺物実測図（壺）

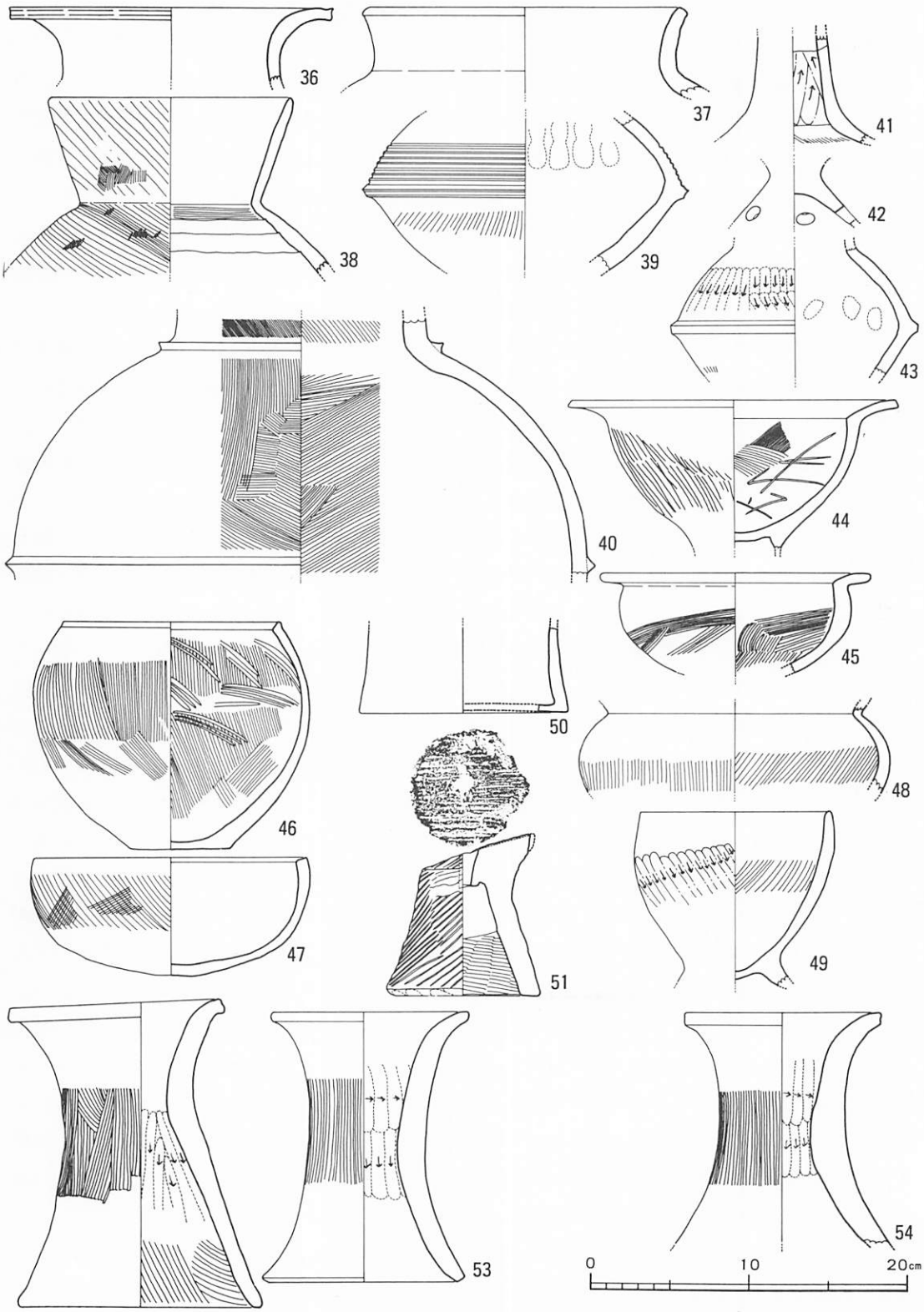
した後、右下りのハケ目で仕上げている。また、内面には粘土の接合面が観察できる。39は算盤玉状の胴部中位に突帯を巡らし、その上方に8条の沈線が施されている。最大径は突帯部にあり20.6cmを測る。器面調整はヨコナデで、突帯下部にはハケ目が施され、肩部内面には指圧痕もみられる。40は頸部より胴部中位にかけての資料で、胴部形状は球形を呈するものと思われる。頸部と胴部中位に突帯を巡らしている。器面調整は内外面共にハケ目により仕上げられている。43は39と同様に胴部が算盤玉状を呈するもので、中位に突帯を巡らしている。器面調整は全面ヨコナデを施した後突帯上位にヘラケズリ調整、下位に僅かにハケ目が施されている。また、内面には指圧痕がみられる。41、42は高坏形土器である。41は柱状部の破片である。器面は外面にナデ調整を施し、内面柱状部をヘラケズリ、裾部を細かいハケ目で仕上げている。42も脚部の破片で、坏部と裾部を欠く。

坏部と付け根より、裾端部へ直線的に開き、5箇所に円孔を穿つ、器面は内外面共にナデ調整である。44～49は鉢形土器である。44は口径20.4cmを測る。口縁部は大きく外反し、端部は角張る。

頸部内面には明瞭な稜を作り上げ、胴部は僅かに膨みながら、脚部へ移行し、脚部は欠損する。器面調整は、口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面には粗いハケ目を施している。また、胴部内面は頸部直下にヨコナデを施した後、全面を細かいハケ目で仕上げている。

45は復元口径17.2cmを測る。口縁部は強く外反し、口頸部がやや肥厚気味で、端部はやや角張る。胴部は中位で大きく内湾しながら、底部へ移行し脚部を欠く。器面は口縁部外面をヨコナデ、胴部中位以下を粗いハケ目で仕上げている。内面は口縁部にヨコナデ状のハケ目、頸部直下に細かいハケ目、以上を粗いハケ目で仕上げている。46は口径13.6cm、器高14.4cmを測る。球形に近い胴部の内傾した上端が口縁部となっており、端部を外方向へ摘みあげている。底部は平底である。器外面は細かいハケ目調整を施しているが、細かい剝離が著しいため明瞭ではない。内面は粗いハケ目で仕上げ、その上から部分的にヘラ調整を行なっている。また、底部に僅かだがハケ目がみられる。

47は口径17.2cm、器高 7.5cmを測る。肥厚気味の口縁部で、口唇部がやや内傾する。器面調整は全面ヨコナデの後、口縁部直下に粗いハケ目を施している。また、乾燥段階で入ったと思われるヒビが全体にみられる。48は頸部から胴部中位にかけての破片で、復元最大径19.6cmを測る。器面は全面ヨコナデ調整の後、胴部中位内外面に粗いハケ目を施している。また、内面には細かい剝離が随所にみられる。49は口径12cmを測る。口縁部は直口気味で端部は丸くなる。脚部は底部直下で欠損するが、直行気味に開くと思われる。器面は口縁部と底部にヨコナデを施しているが、胴部中位はヘラケズリにより仕上げている。50はジョッキ形土器である。胴部下半から底部にかけての破片で、復元底部径13.2cmを測る。把手を有し、体部形状は鼓形を呈するものと思われる。器面はナデ調整を主体としているが、把手接合面の周囲に粗いハケ目、また、内面には指圧痕がみられる。この他にもう一点出土している。胴部下半から底部にかけての資料だが、小片で計測不能なため記載していない。51～61は器台である。51は沓形器台で、頂部径 6.7cm、最大径10.2cm、裾部径 9.7cmである。頂部は円形で傾斜し、片方に突出している。また、中央に円孔を穿っている。さらに、中央から突出部にかけては、粘土を貼り合せて形を整えている。体部外面には、しぼり痕が顕著にみられ、全面をタタキ目により仕上げている。内面は上部をナデ調整し、中位より裾部にかけては、粗いハケ目を施している。52は口径13.2cm、器高14.5cm、裾部径15.6cmを測る。口縁部は一部欠損



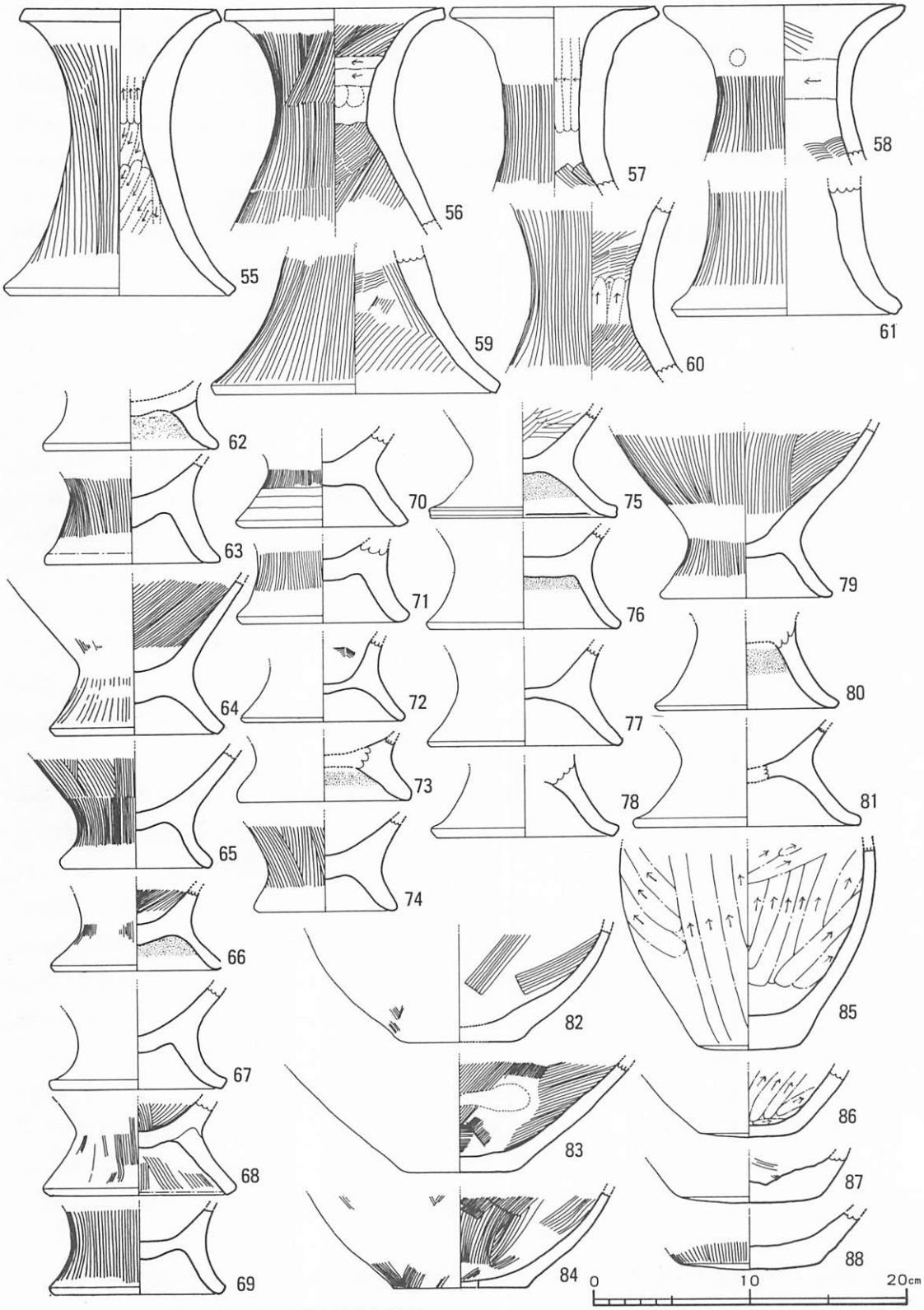
第157図　№2ピット出土遺物実測図

しているが外反し、端部下位は、下方に突出している。くびれ部はやや上位にあり、裾部に向っては外湾気味に開き、裾端部は丸味をもって終わる。器外面はヨコナデを施した後、胴部中位に粗いハケ目を施している。内面は中位にヘラケズリを行ない、裾部は粗いハケ目で仕上げている。53は口縁部と裾部の一部を欠損するが、口径12.5cm、器高17.3cm、裾部径12.8cmを測る。口縁部、裾部共に外湾気味に開き、口縁端部は丸くなり、裾端部は角張る。器面調整は、外面をヨコナデした後胴部中位に不明瞭なハケ目を施している。内面は胴部中位にヘラケズリを施し、両端部をヨコナデで調整している。54は裾部を欠損する資料で、口径12.5cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、端部は角張り、また、くびれ部は中位に位置すると思われる。器面調整は両端部内外面にヨコナデを施し、外面胴部中位に縦方向のハケ目、内面はヘラケズリで仕上げている。

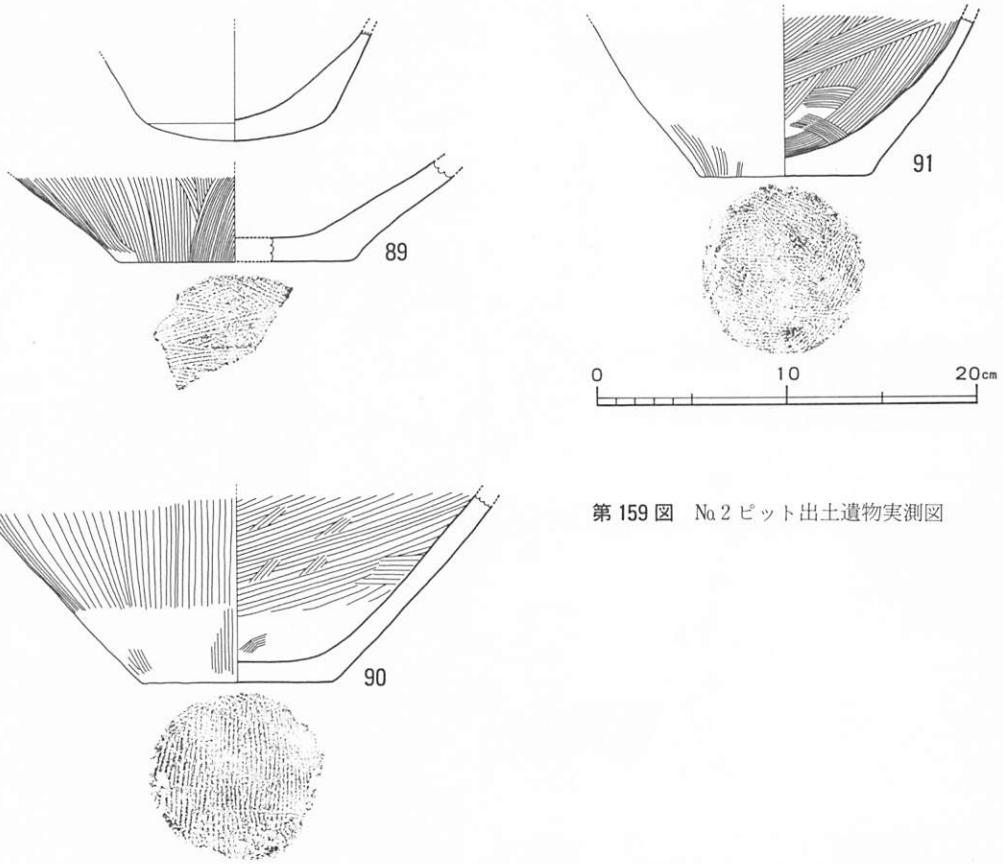
55は、口縁部と裾部の一部を欠損するが、口径12.4cm、器高18.4cm、裾端部径14.8cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、端部は角張り上部を僅かにつまみあげている。くびれ部は、やや上位に位置し、裾部に向っては、やや外湾気味に開き、裾端部は角張って終る。器面調整は両端部にヨコナデ、胴部には粗いハケ目を施し、内面中位はヘラケズリで仕上げている。56は口縁部の一部と裾部を欠損する資料で、口径13.9cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、端部は角張る。また、口唇部にはナデ調整による凹がみられる。くびれ部は上位にあり、裾部に向っては直線的に開くものと思われる。器面調整は口縁部にヨコナデ、胴部にはハケ目を施し、内面くびれ部はヘラケズリにより仕上げられている。57は口縁部の一部と裾部を欠損する資料で、口径12.9cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、全体に肥厚気味だが、口縁端部はナデ調整のため薄くなり、内面に凹を作り上げている。器面調整は口縁部にヨコナデを施し、胴部外面にハケ目、内面をヘラケズリで仕上げている。58は口縁部からくびれ部にかけての破片で、復元口径15.6cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、端部は丸くなる。器面調整は口縁部をヨコナデ、胴部外面にハケ目を施し、内面はヘラケズリとハケ目で仕上げている。また、くびれ部の上位に乾燥段階で付いたと思われる、指頭圧痕がみられる。59は裾部の破片で、復元裾部径18cmを測る。裾部は、やや外湾気味に開き、裾部は角張る。器面調整は内外面共に粗いハケ目を施し、端部はヨコナデで仕上げている。60は口縁部、裾部共に欠損する資料で、内外面に粗いハケ目を施し、内面くびれ部はヘラケズリにより仕上げている。61は、胴部中位から裾部にかけての資料で、裾端部径14cmを測る。裾部は外湾気味に開くが弱く、端部は角張る。器面調整はヨコナデを主体とし、胴部外面を粗いハケ目により仕上げている。62～91は底部である。

62～81は脚台で、体部付け根より裾部に向けて直線的に開くものと、外湾気味に開くものに大別する事が出来る。器面はヨコナデとハケ目により、調整されているものが大半を占めるが、ヨコナデだけにより調整されたものもみられる。また、一部には内面に砂粒の付着がみられる。82～91は平底の底部で、直線的に立ち上るものと、湾曲して立ち上るものに大別される。器面調整は内外面共にハケ目で仕上げているものが多くみられるが、85は内外面共に下から上方向へのヘラケズリ調整、また、86の内面にも同様の調整がみられる。89～91は内外面にハケ目を施し、さらに、底面にも粗いハケ目を施している。(倉原)

第 160図 1 は、笠形土製品で、沓形器台と共に出土したものである。その形状は、頭部は陣笠状を呈し、その径は 4.1cmを測り、笠部直下の頸部は浅い沈線でナデ調整を施し、径 2.5cmを測る。



第 158 図　№2 ピット出土遺物実測図



第159図　№2ピット出土遺物実測図

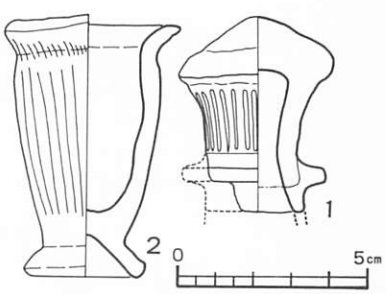
さらに、下部には高さ5㎜の突帯をめぐらしている。この突帯下部では、端部を欠いているが、粘土接合面で剝離している。現長 5.2cmを測る。内面は中空となり現長3.75cmの深さを測る。内面において、粘土接合面を観察される。器面は全面よく研磨され、胎土にも小さな砂粒を含んで、堅く焼き締っている。(中村)

17　№2拡張ピット　(図版41－1、第152図)

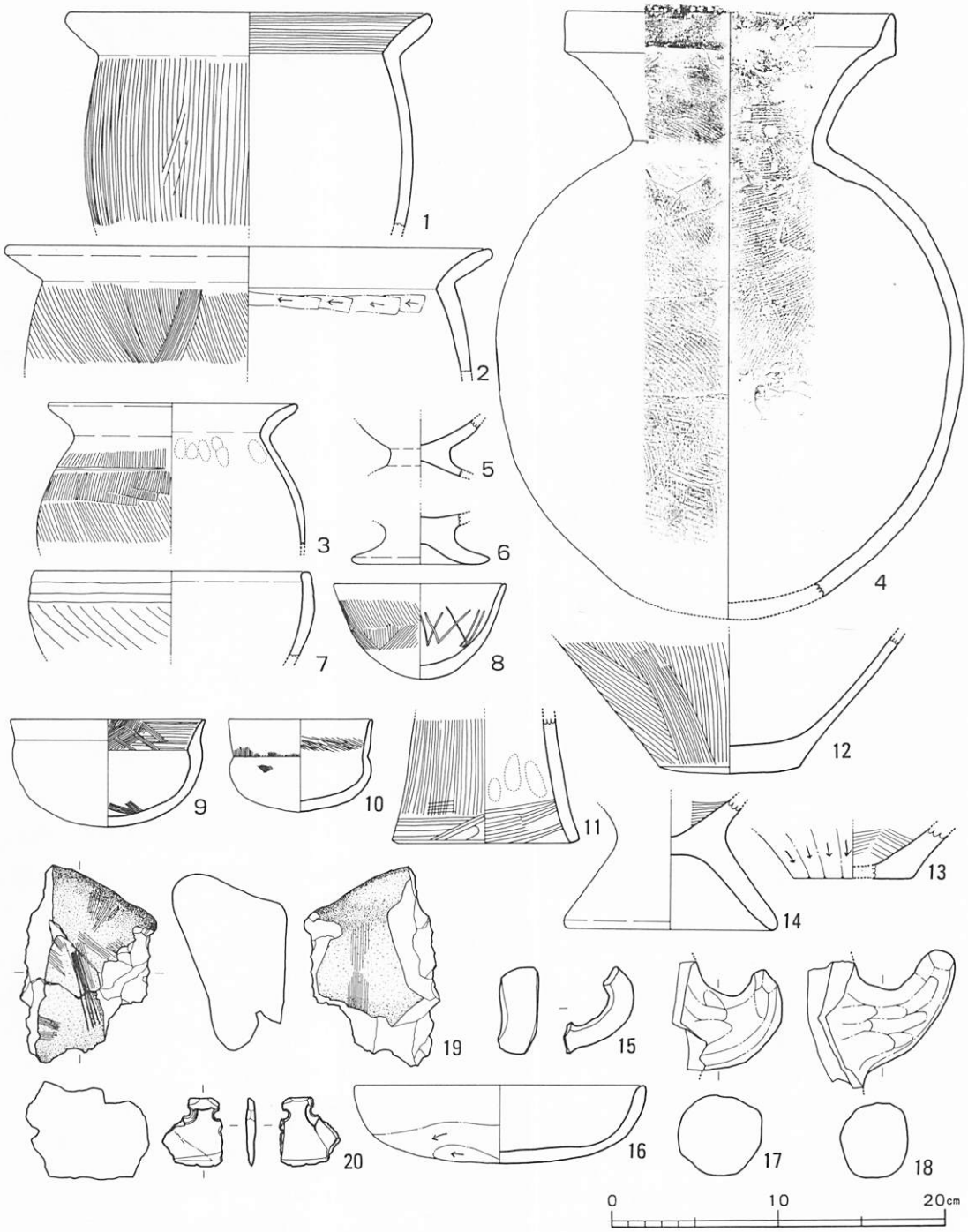
№2ピット内の土器溜めが、南側に延びるところから、ピットに接した形で、このピットを設置した。その結果、北側壁面に土器溜め南端が検出され、土器溜めの規模が2m×2m程度の規模になるものと判断された。

遺物　(図版62－1～5、第 160図－2、161図)

北側壁面に、破損した状態の土器が堆積した状態で出土し、ピット内では、わずかに土器が散在した状態で出土している。(中村)



第160図　№2ピット・№2拡張ピット出土遺物実測図



第161図　No.2 拡張ピット出土遺物実測図

1～3は甕形土器である。1は口縁部から胴部中位にかけての破片で、復元口径21.8cmを測る。口縁部は直線的に外反し、端部は丸くなる。頸部のしまりは弱く、胴部の膨みも弱い。また、最大径は口縁端部に位置する。器面調整は口縁部外面と胴部内面にヨコナデを施し、胴部外面には縦方向の粗いハケ目、また、口縁部内面はヨコナデ状のハケ目を施している。2は復元口径28.8cmを測る。口縁部は大きく外反し、口頸部が肥厚気味で端部は、やや角張る。胴部の膨みは弱く、最大径は口縁端部、若しくは胴部中位に位置するものと思われる。器面調整は口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面は縦方向の粗いハケ目、また、内面頸部直下はヘラケズリにより仕上げられている。3は口縁部から胴部中位にかけての破片で、復元口径15cmを測る。口縁部は外湾気味に開き、端部は丸くなる。頸部の締りはやや強く、また、胴部の最大径は中位に位置する。器面調整は口縁部内外面にヨコナデを施し、胴部外面をハケ目、内面頸部直下には指圧痕がみられる。4は壺形土器である。底部を欠損する資料で、口径19.4cm、復元器高36.3cmを測る。口縁部は大きく外反した口頸部の上に断面三角形の上段部を乗せている。頸部の締りは強く、胴部は球形を呈している。また、最大径は胴部中位に位置し、底部は丸底になると思われる。器面調整は口縁部上段内外面にヨコナデを施し、口頸部より胴部内外面は粗いハケ目により仕上げている。また、器壁内面は剝離が著しい。

5、6は高坏形土器である。5は坏部底より裾部にかけての資料で、柱状部が非常に短かい。器面調整は全面ヨコナデで仕上げている。6は坏部を欠損する資料で、裾部径 8.2cmを測る。脚部は全体に肥厚気味で、柱状部は非常に短かく、裾部へかけては外湾気味に開き、裾端部は尖り気味になる。器面調整は全面ヨコナデで仕上げている。7～10は鉢形土器である。7は口縁部から胴部中位にかけての破片で、復元口径16.4cmを測る。器面は口縁部外面にタタキ目を施し、胴部に粗いハケ目、内面は全面ナデにより仕上げている。8は半球形を呈しており、口径10.2cm、器高 5.8cmを測る。器面調整は口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面に粗いハケ目を施し、内面にはヘラ状工具による暗文状の文様を配している。9、10は便宜上鉢としたが、小型丸底壺と呼ばれるものである。

9は口径11.6cm、器高 6.4cmを測る。口縁部は短かく僅かに外反し、胴部の膨みは弱く、丸底を呈する。器面調整はヨコナデを主としているが、口縁部と胴部内面の一部には細かいハケ目がみられる。10は口径 8.6cm、器高 5.5cmを測る。口縁部は直立気味で、底部は尖り気味の丸底である。器面調整はヨコナデを施した後、頸部と内面口頸部に細かいハケ目を施している。11は器台である。裾部の破片で、裾端部の復元径11.2cmを測る。器壁は直線的に立ち上り、他の器台とは違った様相を呈する。器面調整は非常に粗いハケ目で仕上げられ、内面には指圧痕がみられる。12～14は底部である。12、13は平底で直線的に立ち上る。12の器面調整は外面をハケ目、内面をナデにより仕上げ、13の外面はヘラケズリで、内面には粗いハケ目を施している。14は脚台で、裾部へ向けては直線的に開き、裾端部は丸くなる。器面調整は外面と内面裾部をヨコナデで仕上げ、また、内面には砂粒の付着がみられる。15はジョッキ形土器の把手で、断面がカマボコ型を呈する。器面はナデ調整で仕上げている。16～18は土師器で他の資料とは明らかに時期差が認められるため別に記載した。

16は鉢形土器である。復元口径17.4cm、器高 4.8cmを測る。器面調整は口縁部外面と内面全面にヨコナデを施し、外面はヘラケズリにより仕上げている。17、18は土師器の把手で、ヘラ調整により仕上げられている。19は礫を利用したもので、2面に彫の深い条痕がみられる。石材は使用後に

破損しており、また、随所にヒビが入っている。20は石庖丁の破片で、幅 4.2cm、厚さ 0.5cm、孔間約 1.8cmを測る。研磨は仕上げ段階であり、完成には至っていないようである。また、石材は結晶片岩を使用している。

第 160図－2はミニチュア土器である。脚台を有する甕形土器で、口縁部の一部を欠損するが、口径 4.6cm、器高 7 cm、裾端部径 3.2cmを測る。口縁部は短かく直線的に開き、端部は外方向へ摘み出している。頸部の締りは弱く、胴部の膨みも弱い。脚台は直線的に開き、裾端部は角張る。器面調整は頸部と脚部に非常に粗いハケ目を施し、器内面と脚部はナデにより仕上げられている。

（倉原）

18 No.３ピット （図版41－２、３、第162図）

このピットはNo.２ピットの南へ、10mの所に位置している。ピットは深さ約90cmまで掘り下げられ、遺物と共に住居跡２軒の一部が検出された。

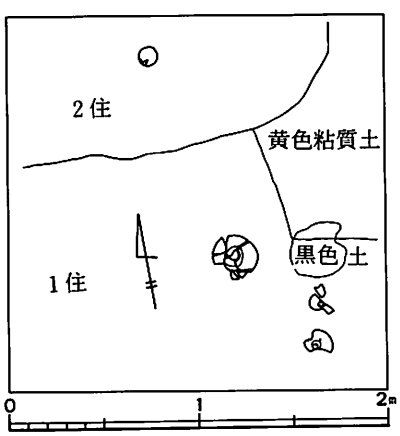
(1) １号住居跡

２号住居跡に切られたこの住居跡は、東側壁面に黄色粘土層を「L」字状に切り、床面は非常に堅く締っていた。

遺物 （図版62－６～８、第163図－３、４、７）

これらは住居跡の床面上から出土しており、この住居跡の時期を決定し得るものである。（中村）

３は高坏の坏部である。口径21.6cmの割には深く、底部まで 6.7cmを測る。内外面ともにハケ目のあとナデて、さらにヘラで軽く磨いている。４は台付鉢で、体部内面はヨコナデのあと放射状にヘラ描暗文を施す。７は坏部を欠く高坏である。径 1.2cmの円孔を４個穿っている。（坂本）



第 162図 No.３ピット実測図

(2) ２号住居跡

１号住居跡を切ったこの住居跡は、南側壁面をピットの北に表わし、その大半がピットの外に伸びている。この住居跡は床面までの掘り下げを行なわなかったため、壁面の深さについては不明である。埋土は黒色土層でやわらかい。

遺物 （図版62－９、第163図－８）

住居跡内埋土中より出土しているが、住居跡と同伴と考えられる土器である。（中村）

８は完形の鉢で口径 9.4cm、器高５cmを測る。ほぼ半球形を呈し、外面にタタキ目が窺える。内外面とも一部

黒褐色を除いて真黒である。

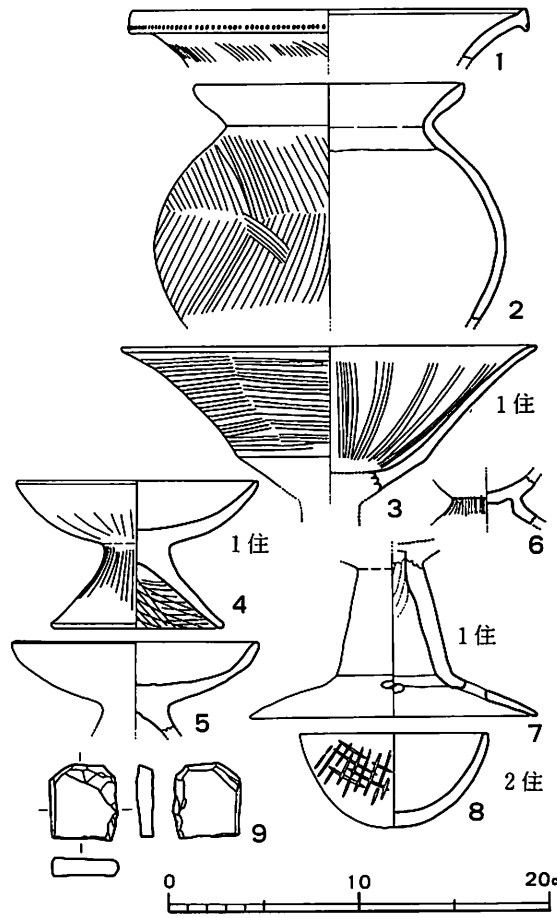
(3) その他の遺物 (第163図—1・2・5・6・9、第164図—10)

ピット内から出土したものであるが、発掘中一括してとり上げたため層位の確認ができていない。

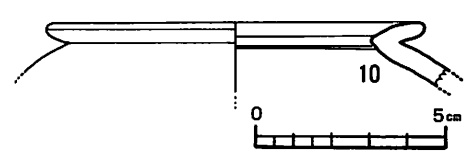
1は複合口縁の壺片で、口唇部に刺突連点文を有する。2は復元口径14cmの甕の破片で、口縁部は鋭く外反し、端部は肥厚して丸くおさまる。胴部は膨らんで、最大18.4cmを測る。外面はハケ目のあとうすくナデて、内面は肩部以下、横位のヘラケズリである。外面にススの付着が見られる。

5、6は台付鉢で、体部内面はヨコナデのあと放射状にヘラ描暗文を施す。5は体部外面をヘラ磨きしている。内面の荒れが著しい。9はきめ細かな砂岩製の砥石片で磨面は4面ある。よく使い込まれたという印象を受ける。

10は広口の短頸壺の口縁部片であろう。強く外反した口縁部は先端が丸くなり、ススが付着している。 (坂本)



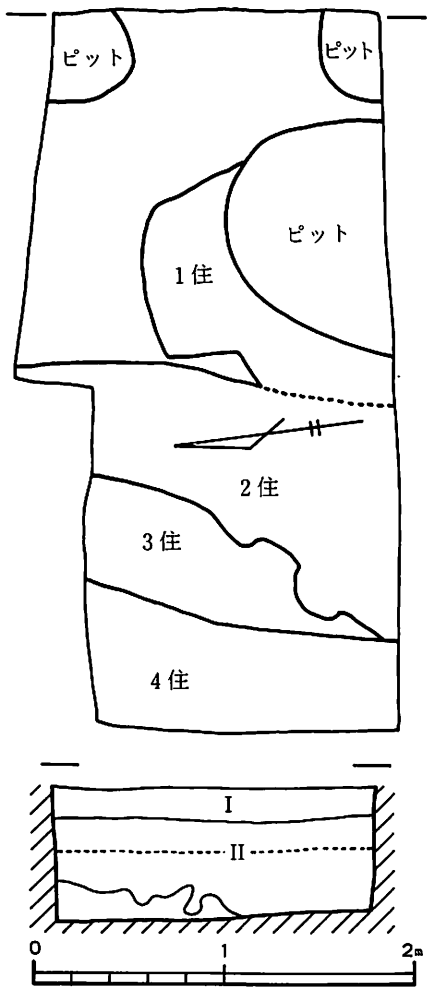
第163図 No.3ピット出土遺物実測図



第164図 No.3ピット出土遺物実測図

19 No.4ピット (図版42—1、第165図)

このピットは西側に拡張したため、長さ 3.8m、幅2mの規模になっている。ここでは遺構の重複が著しく、遺構の性格と切り合い関係を明確にするため、ピット西端の遺構の一部を床面まで掘り下げた。その結果、床面は非常に堅く締り、壁面もしっかりしていたため、この遺構を住居跡と判断した。また、この住居跡がNo.4ピット内における遺構切り合い関係において、最も新しいものと判断された。そのため、遺構の古い順に番号を付し、それらが住居跡であると判断し、1号住居跡から4号住居跡とした。



第165図　No.4 ピット実測図

(1)　1号住居跡

この住居跡は2号住居跡と接し、大型ピットによって切られている。なお、住居跡の規模は不明である。

(2)　2号住居跡

1号住居跡と接し、3号住居跡から切られたこの住居跡は、暗褐色土層の埋土を有していて、石庖丁7を出土している。壁面は長さ2mまで確認されている。

(3)　3号住居跡

2号住居跡を切り、4号住居跡から切られたこの住居跡は、ほぼ床面に近い部分が検出されており、床面は非常に堅く締っていた。

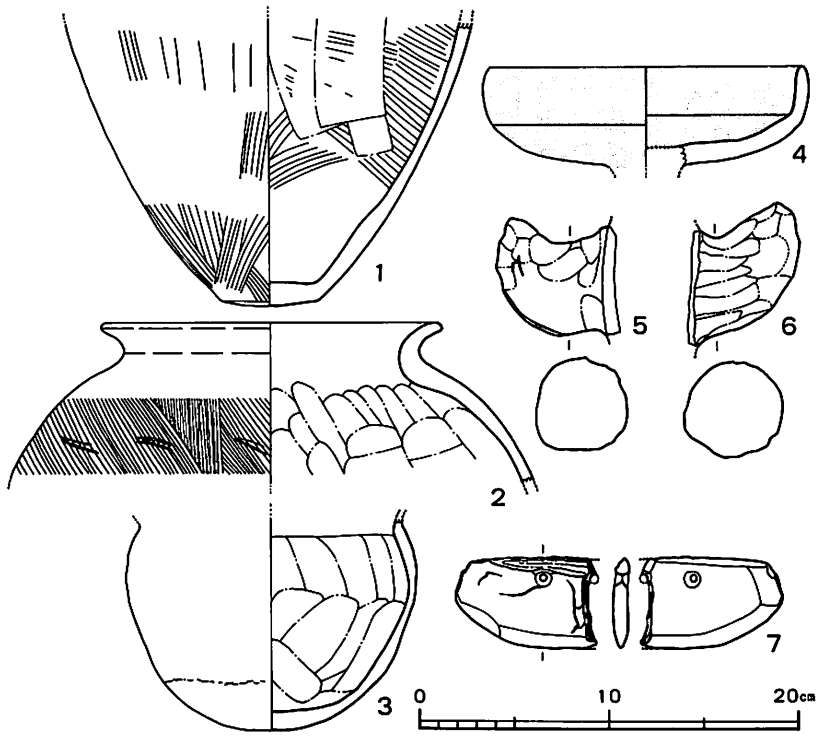
(4)　4号住居跡

直線的に走る壁面の長さ 1.7mまで確認され、保存状態はきわめて良く、床面も非常に堅く締っていた。

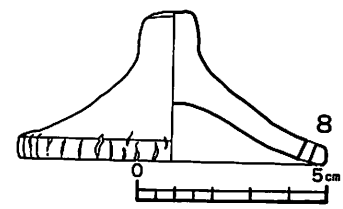
(中村)

遺物（図版62－10、第 166、167図）

1は平底壺の下半部片であろう。底部径 4.8cm。内外面ともにハケ目を施し、そのあとナデている。2も壺で復元口径17.1cmを測る。胴部の張り出しは著しく、くびれた頸部から外反した口縁部が湾曲しながら立ち上る。外面はハケ目を施し、内面はヘラケズリを行なっている。3は非常に器壁が荒れており、外面胴部の調整方法はわからない。内面はヘラケズリである。4は丹塗りの高坏片である。内外面とも丹を塗ったあとヘラ磨きを行なっている。5、6は甑の把手で両者とも大変粗雑な造りである。5の下面にススが付着しており、光沢がある。7は結晶片岩製の石庖丁で、半欠である。現存長 7.4cm、幅5cm弱、円孔径 0.4cm、円孔は両側から穿っているが、若干ずれている。8は蓋で、直径 8.2cm、高さ4cm弱を測る。裾端部近くに、径0.25cmの円孔2個を穿っているが、これは紐を通して身部と連結させるためのものであろう。丁寧な整形、調整である。（坂本）



第166図　No.4 ピット出土遺物実測図



第167図　No.4 ピット出土遺物実測図

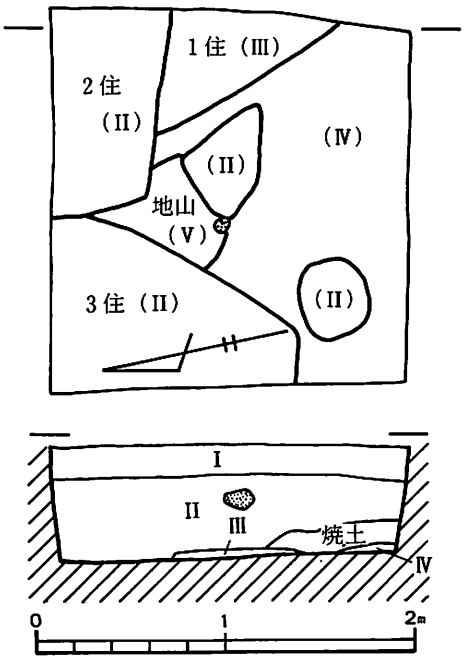
20 No.5 ピット　(図版42—2、第168図)

No.4 ピットの南に位置するこのピットには遺構の重複が見られた。住居跡が3軒とピット2個が検出された。住居跡はコーナー部分が検出され、切り合いの古い順から番号を付した。

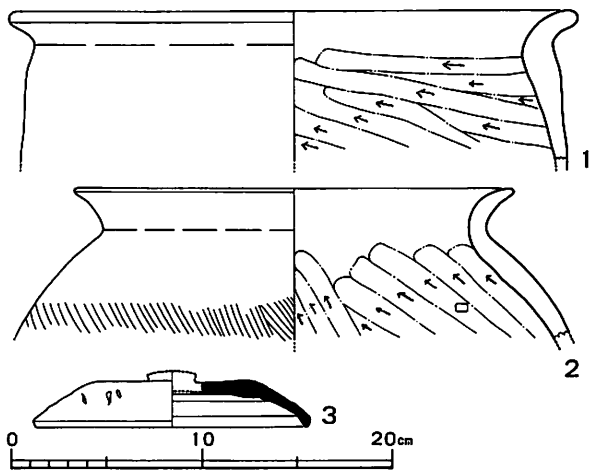
(1) 1号住居跡

この中で最も古い住居跡で、埋土には黄色粘土塊が、暗褐色土層の中に混入した土層である。壁面は僅かに長さ 1.2mが検出されているが、直線的に伸びるところから、住居跡であると判断した。

(2) 2号住居跡



第168図　No.5ピット実測図



第169図　No.5ピット出土遺物実測図

層序

Ⅰ層　耕作土層

Ⅱ層　暗褐色土層

Ⅲ層　暗褐色土層（黄色粘土塊混入）

Ⅳ層　黄色粘質土層

Ⅴ層　砂礫層

1号住居跡を切り、3号住居跡と接するこの住居跡は、コーナー部分をのぞかせている。現長1mの壁面で、埋土は暗褐色土が入っている。

(3)　3号住居跡

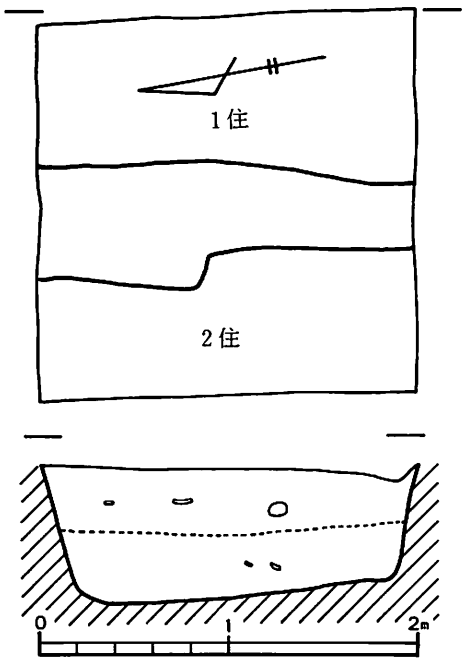
2号住居跡と接した3号住居跡も、コーナー部分をのぞかせている。埋土は暗褐色土が入っている。床面の状態は未発掘のため不明である。(中村)

遺物（図版63－1、第169図）

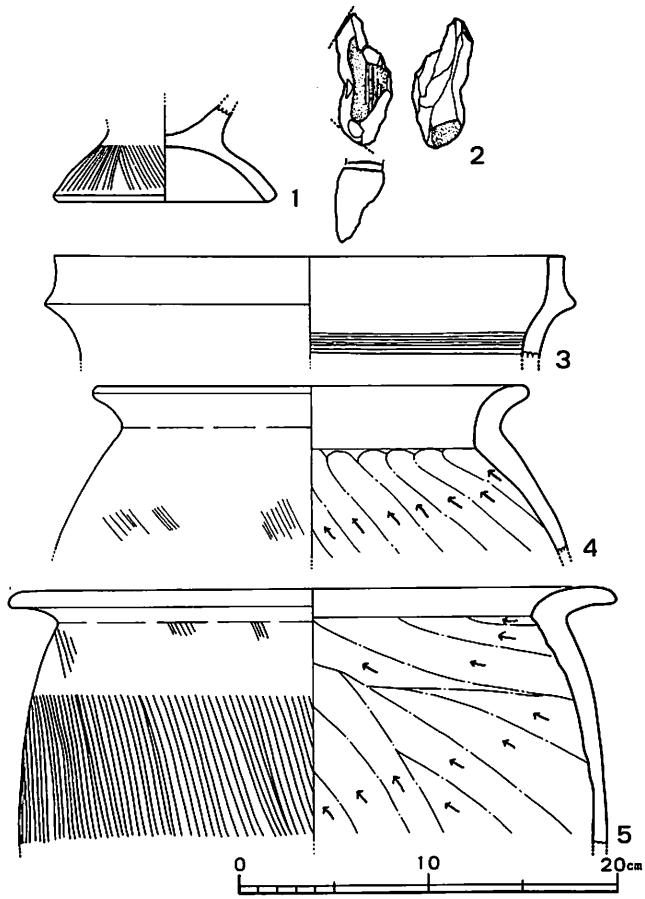
1は甕の口縁部片で、復元口径29cm前後を測る。器壁は肩部から頸部にかけて肥厚し、口縁部は外反して丸まる。外面ナデ、内面はヘラケズリである。2は壺の破片である。外面肩部以下にハケ目が残り、内面はヘラケズリの仕上げである。3は須恵器の蓋で、摘みが付いたものと思われる。全体に整形が雑である。（坂本）

21　No.6ピット　（図版43—1、第170図）

このピットは地表下約70cmで、中央部に南北に伸びる黄色粘土層が露出し、その両側には遺構が存在することが明らかとなった。両側の遺構埋土は共に暗褐色土であった。恐らく、住居跡の壁面になるものと判断された。



第170図　No.6ピット実測図



第171図　No.6ピット出土遺物実測図

遺物（図版63－2、第 171図）

ピット内一括してとり上げており、遺構との共伴関係は不明である。　（中村）

1は、内湾して広がる脚部が特徴的である。内外面ともにハケ目のあと、ヨコナデ仕上げである。内外面にススの付着を見る。2は流紋岩（陶石）の砥石片である。磨面3面が確認され、一面には、数条の擦痕が存在する。3は複合口縁壺で、復元口径23.2cmを測る。内面は横位のハケ目をナデ消している。4、5は、甕の口縁部片で、5は口縁部が「L」字状に外反する。4、5とも内面はヘラケズリ仕上げ。5は胎土に粗い砂粒を多く含む。　（坂本）

22　No.7ピット（図版43—2、第172図）

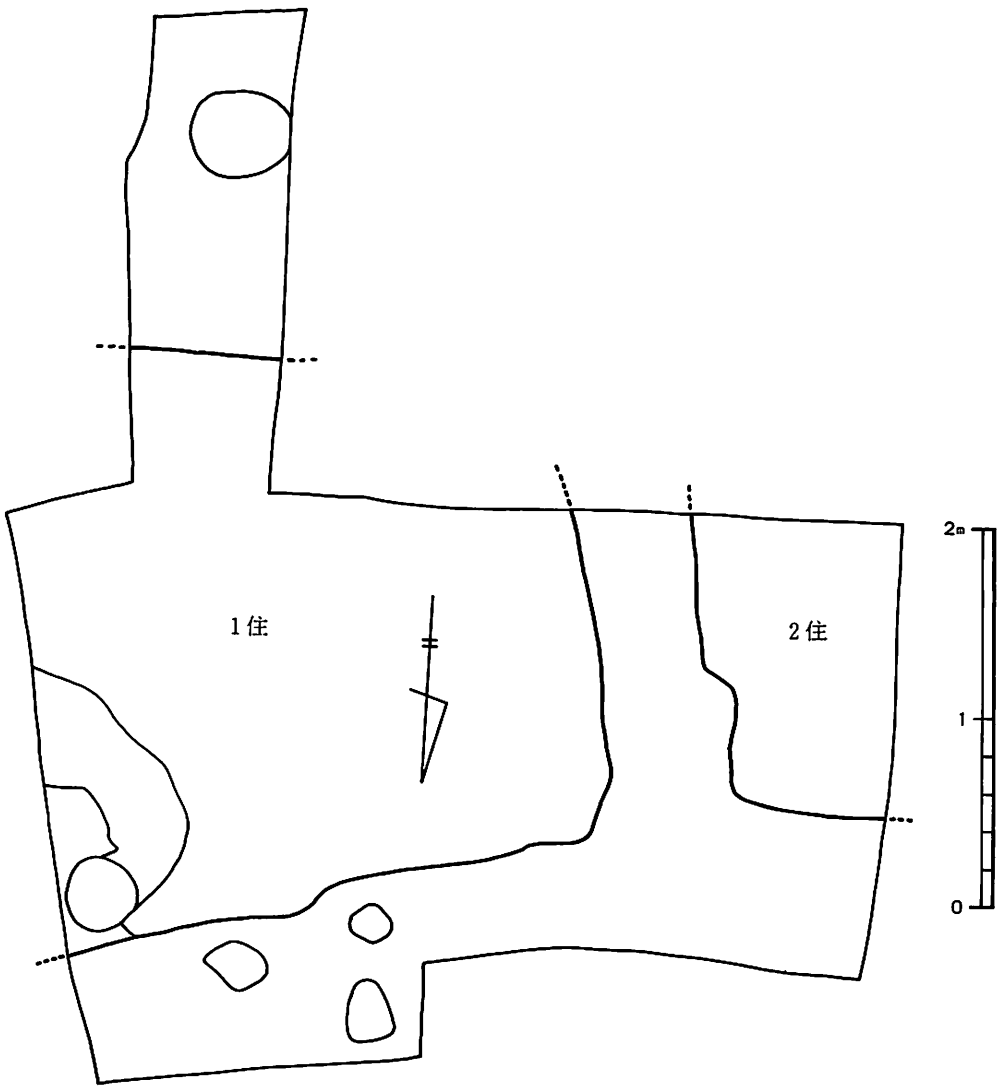
このピットは西側と南側に拡張したため、不整形なピットとなっている。しかし、このピット内には住居跡2軒が検出された。

(1) 1号住居跡

この住居跡は南北3m、東西約4m隅丸方形プランをもち、北側壁面には白粘土で、くどを築いていることが確認された。遺構は上面で確認したため、床面の状態については未確認である。

(2) 2号住居跡

ピット西端にコーナー部分をのぞかせたこの住居跡は、1号住居跡の西側に隣接している。隅丸方形のプランで壁面は明確に残っているが、規模については未調査のため不明である。　(中村)

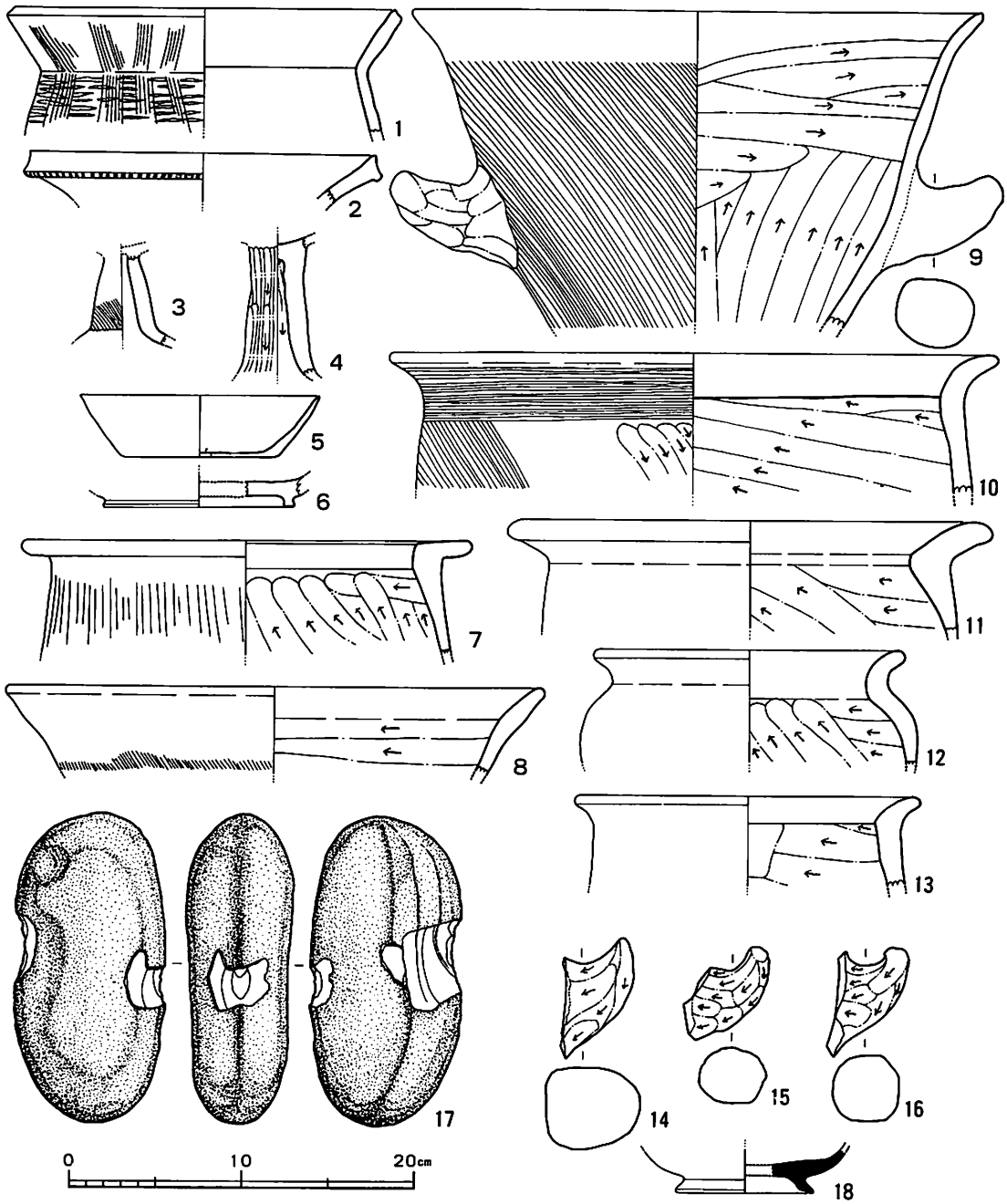


第172図 No 7 ピット実測図

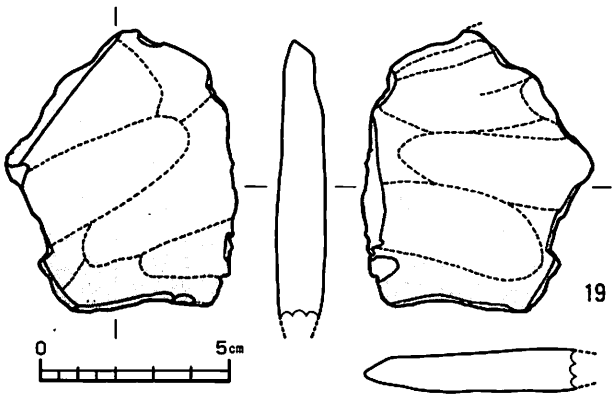
遺物（図版63－３、第173、174図）

１は甕の口縁部片で、外面にタタキ目のあとハケ目を施す。また、外面全体にススが付着する。

２は複合口縁壺の破片で、復元口径20cm弱。口縁部に刻目文をもつ。３、４は高坏の柱状部片である。３は外面にハケ目を施し、内面は横位のヘラケズリを施す。５、６は鉢の破片である。５は復元口径 8.8cm、高さ 3.6cm。外面ヨコナデ調整のあと粗くヘラ磨きし、内面は横位のハケ目をナ



第173図 No.7 ピット出土遺物実測図



第174図　No.7ピット出土土製品実測図

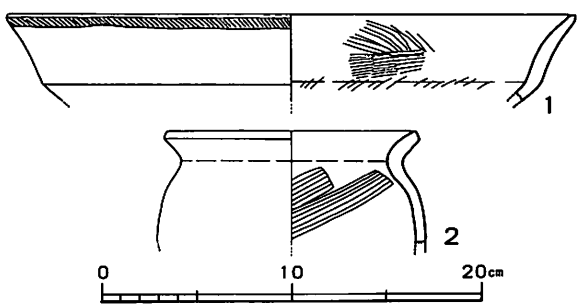
デて消し、さらに底部においては放射状の、壁面では右下りの斜位のヘラ描暗文を施している。7～16は甕、甑の破片である。14～16以外全て、内面はヘラケズリ仕上げである。ススの付着するものは壺とも呼称し得る12のみであった。18は須恵器の台付鉢の底部片である。17は河原石を転用した石錘である。長さ18.1cm、幅 8.8cm、厚さ5.8cmを測る。打ちかきは長軸方向にではなく、側面にある。19は器種不明の土製品である。扁平な粘土板を手捏で作り丹を塗ったもので、破片のため全体的な形状はつかめない。19に類似するものに、鹿本高校調査区域内第2トレンチ、1号住居跡出土の粘土板（図版88－1、第 249図5）がある。破片のため、全体の形状はわからないが、こちらは丹塗りではない。

（坂本）

23　No.8ピット

このピットは、これまでのピットと異なり、開発予定区の内側に寄せており、No.2ピットの西側へ22m離れた地点に設置した。ピット内においては、遺構の存在は見られず、遺物も一括して取り上げたものである。

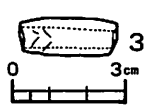
（中村）



第175図　No.8ピット出土遺物実測図

遺物（第175、176図）

1は高坏の口縁部片である。体部が一度折れて、口縁部が外湾しながら立ち上がる。外面にススが付着する。2は広口壺の破片で、外面ナデ、内面はハケ目のあと薄くナデている。3は長さ 2.6cm、最大径1cm、円孔径 0.5cmを測る土錘である。



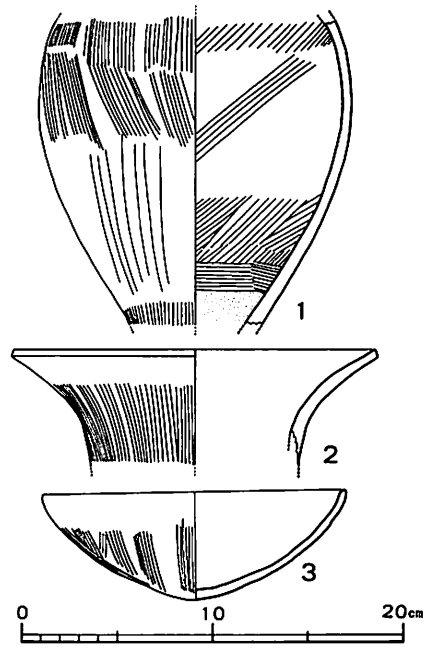
第176図　No.8ピット出土土錘実測図

24 No.9ピット

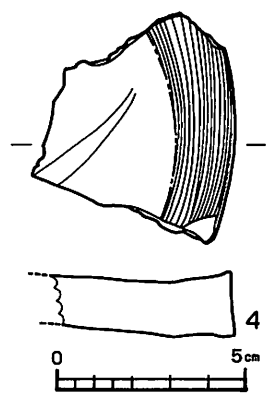
このピットとNo10ピットは、開発予定地区北端に設定したもので、北側トレンチとNo.1ピットの間に設置したものである。遺構については検出することができなかった。また、遺物も小さな破片が多く、わずか4点が実測に耐えるものであった。

遺物（図版63－4・5、第177、178図）

1は甕の胴部から底部にかけての破片である。外面は、胴部中位にハケ目が明瞭に残るが下位の方はヨコナデにより消えている。内面もハケ目のあとナデている。外面にはススの付着が顕著で、内面には、底部に水平にではなく、胴部下位に斜めに焦げつきが見られる。これは、甕を垂直に立てて煮炊きを行なったのではなく、甕を斜めに寝かせて使用した結果であろうと思われる。2は、単純口縁壺の破片で、復元口径18.8cm、外面に縦位のハケ目を丁寧に施す。3は半欠の鉢で口径19.8cm、高さ5.7cmを測る。外面にススの付着が著しいが、内面の汚れはない。4は器種不明の土製品の破片である。厚みは縁部で1.5cm強を測る。全体的形状は不明であるが、試みに直径を出してみると、20.8cmとなる。　　（坂本）



第177図　No.9ピット出土遺物実測図



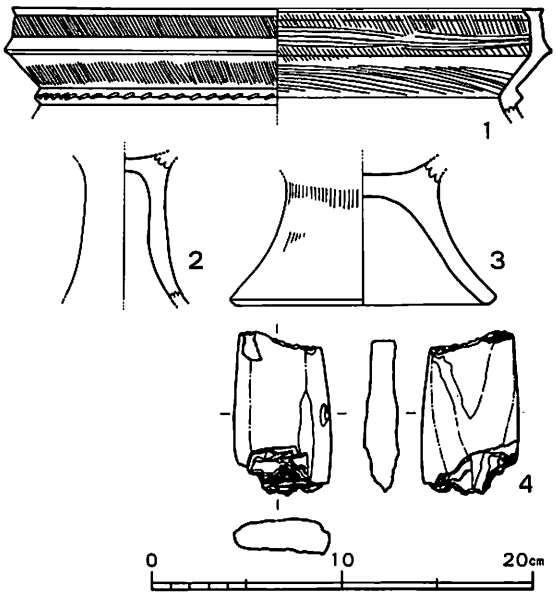
第178図　No.9ピット出土土製品実測図

25 No.10ピット

No.9ピットと北側トレンチの中間に位置したこのピットは、地表下90cmまで掘り下げたが、遺構の存在は確認できなかった。遺物は遺構に伴なわず、一括として取り上げた。

遺物（第179図）

1は甕の口縁部片であろう。頸部以下を欠く。ハケ目原体による刻目文を有する突帯が、頸部に付き、口縁部はそこから一度外反し、中程で突帯を持ち、内傾する。先端部は強くナデられて平坦



第179図　No10ピット出土遺物実測図

面となり、内外に角が突出している。平坦面には、ハケ目原体によると思われる刻目文が施されている。2は高坏の柱状部片である。3は甕の脚部で、ススの付着等は見られない。4は結晶片岩製の磨製石斧で、刃部と基部を欠く。

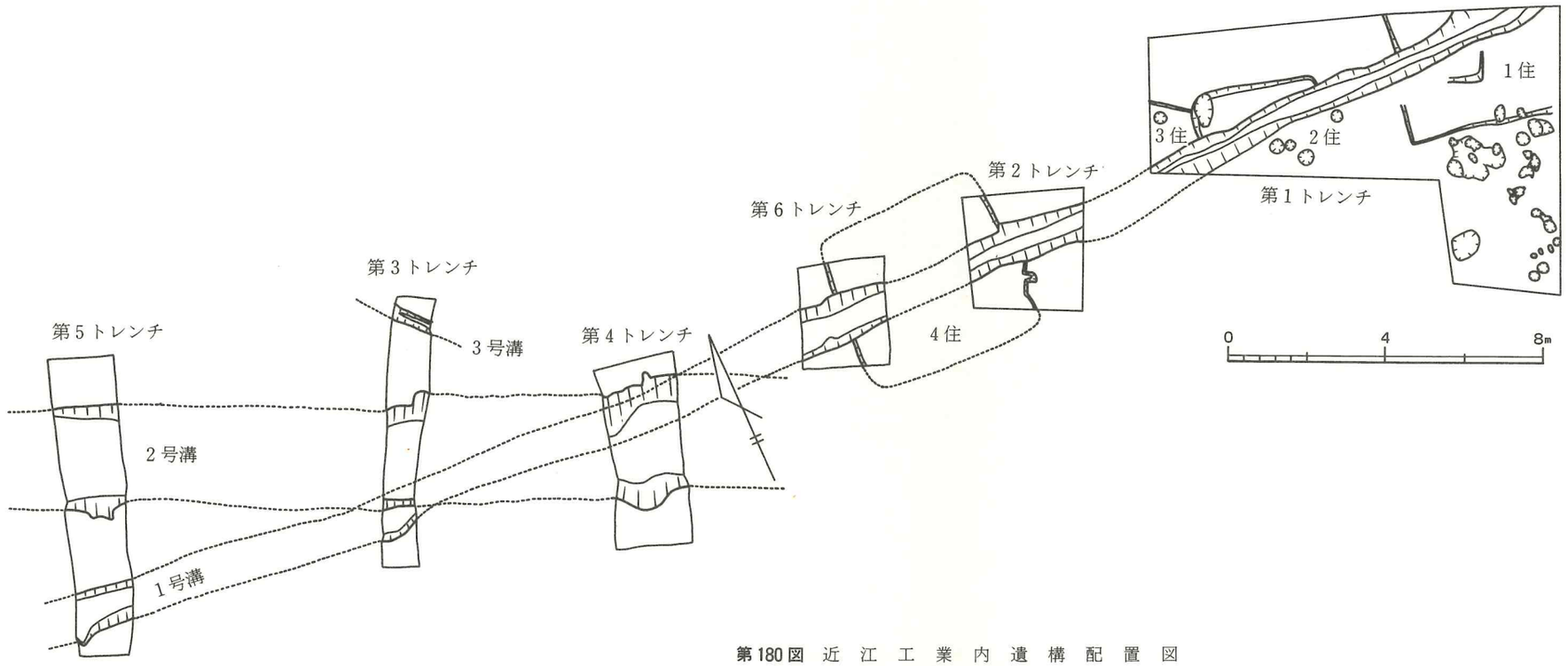
近江工業内トレンチ

遺跡南端を確認するため、Ⅰ次、Ⅱ次調査を実施した山鹿工業株式会社の南側に位置した近江工業株式会社敷地内を調査することとした。

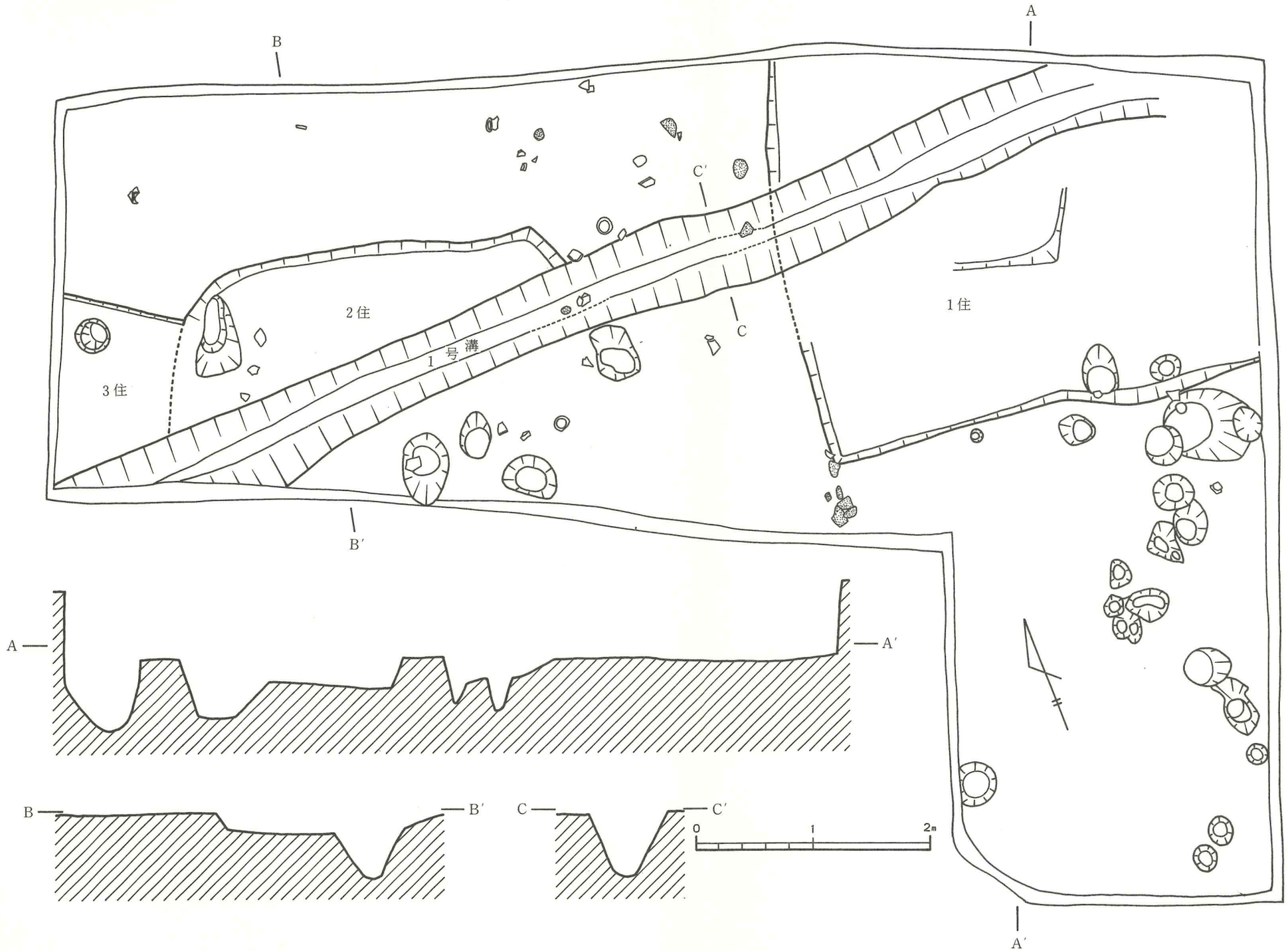
この地は遺跡が立地している台地南端にあたり、菊池川の流れで年々浸食されている所である。

調査は会社の好意的な協力を得て進めることができた。さらに、この地には、大道校区公民館の建設が予定されているところから、その区域を除いた所に「L」字形の第1トレンチを設定した。調査段階においてこのトレンチ内にV字溝が、東西に延びることを確認し得たので、第2～6トレンチまでを設定した。

トレンチ番号は、掘り始めの順序で決定しており、順不同である。第1トレンチを東端に2・6・4・3・5トレンチと設定し、この中において、竪穴住居跡4軒、溝状遺構3本が確認された。そのうち2本の溝状遺構は第4トレンチで交叉し、それぞれ直線的に延びていることが判明した。



第180図 近 江 工 業 内 遺 構 配 置 図



第181図 近江工業内第1トレンチ実測図

26 第1トレンチ （図版44、第181図）

10m×7mの範囲内で「L」字形に設定したこのトレンチは、大道校区公民館建設予定地の南側に位置し、近江工業内においても東端に位置している。（第118図）

トレンチ内において、竪穴住居3軒とV字溝（1号溝）が検出された。

(1) 1号住居跡

V字溝の上に乗ったこの住居跡は、トレンチ内東北隅に位置し、南側と西側の壁面が検出された。北側と東側については、トレンチの外へ延びている。現況では 3.5m× 3.7mの壁面を測り、4m×4m程度の規模になるものと思われる。遺物の出土は、見ることができなかった。

(2) 2号住居跡

北側壁面のみを残すこの住居跡は、V字溝の上に築かれ、さらに3号住居跡を切っている。床面は、V字溝の南側に延びているが、壁面は確認できなかった。恐らくトレンチ南側に延びるものと思われる。北側壁面では、一辺 3.3mを測る。（中村）

遺物（第 182図 — 2～4・12・16～20・29・30）

本住居の遺物は、ほとんどが床面に密着した状態で出土した。

2・3・4は甕の口縁部片及び胴部片である。2は、内外面共、ハケ目調整だが、外面に若干タタキ目の痕跡を残している。外面にススの付着が顕著で、内面の変色は口縁部にまで達している。3は口縁部が、やや肥厚し、端部は角ばっている。外面にススの付着は見られないが、内面は2と同様に口縁部に至るまで、変色している。頸部内面及び、口唇部が摩耗している。4の外面は、やや右下りのタタキ目をナデ消し、下部は粗いハケ目を施す。内面は外面とは異なるハケ目調整で、変色が顕著である。

12は、鋤先口縁の壺の破片で、口唇部をやや摘み上げている。

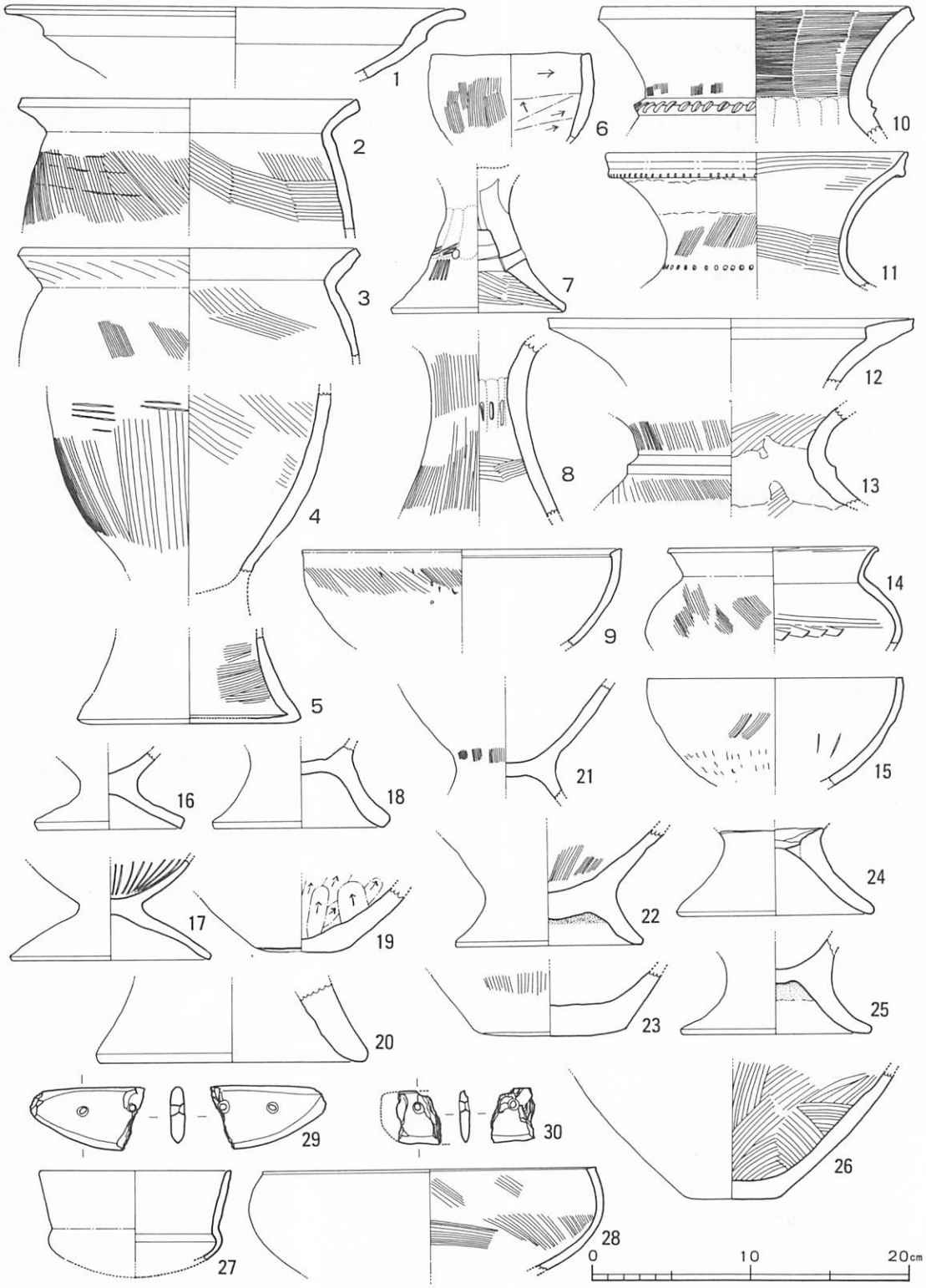
16・17・18・19は、脚台及び、底部片で極めて焼成のよいものである。17は、体部内面にヘラ描き暗文を施す。19は、内面へラケズリである。

20は、器台の破片であろう。肉厚で、最大 2.2cmを測る。

29・30は石庖丁で共に粘板岩である。（坂本）

(3) 3号住居跡

2号住居跡に切られたこの住居跡は、北側壁面の一部を残しているのみである。規模については不明である。なお、1号溝埋没後にこの住居跡は築かれていた。（中村）



第182図 近江工業内第1トレンチ出土遺物実測図

遺物（第 182図 －5）

遺物は、おおよそ床面に密着、あるいは直上の状態で出土したが、実測に耐えうるものは第 181図5の1点のみであった。タタキ目を有する在地系甕の破片を共伴する。5は、ジョッキ形土器で鋭く内傾しながら立ち上がる胴部を有する。外面はナデ、内面は横位のハケ目調整である。（坂本）

(4) 1号溝

トレンチ内を東西に延びる溝で、トレンチ内では長さ10m、上部間約70cm、下部間約20cm、深さ約50cmを測り、断面はいわゆる「V」字状を呈している。溝の上部は、竪穴住居跡の下に入り込み住居跡より古いものと判断された。また溝内埋土は、層序の確認が出来ず、短期間で埋もれたものであると思われた。（中村）

遺物（第 182図 －1）

溝内からは、第 182図1の他、土器の小破片が、少量出土したのみであった。1は高坏の口縁部片で、復元口径29.2cmを測る。口縁部は、外湾して広がり、接合部で内外面とも段を有している。器面調整は、内外面ともに、横ナデである。

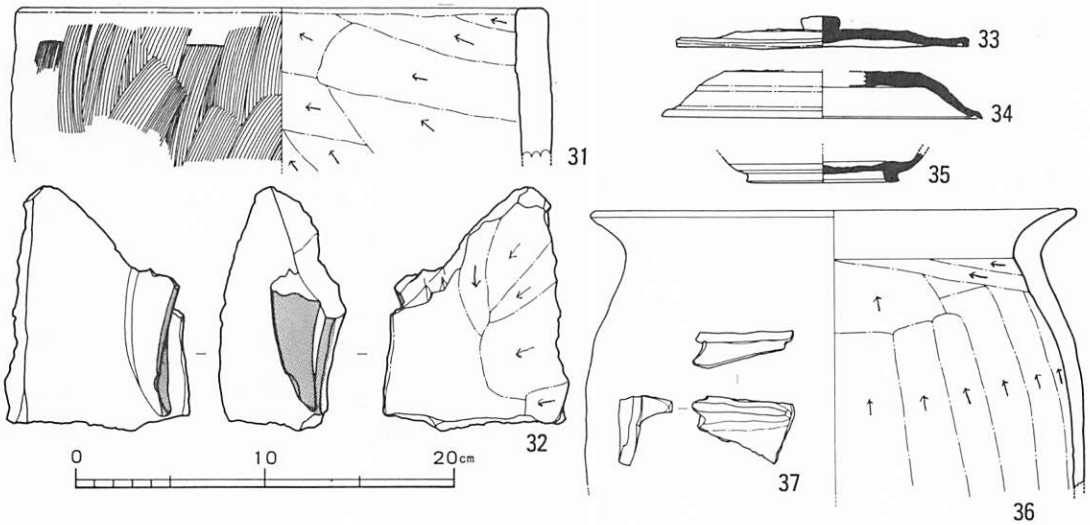
(5) その他の遺物（図版63－6～8、第182図－6～11、13～15、21、22、24～28、183、184図）

6は鉢の破片で、第1トレンチ南側拡張部から出土した。外面は、局所的にハケ目を施し、内面はナデて仕上げる。7は高坏の脚部片で、柱状部はかなり肉厚である。外面と内面裾部はハケ目をナデ消しており、柱状部内面は、横位のヘラケズリである。円孔は推定3個で、径は 0.6cmを測る。8は器台で、1号溝の北、1号住居跡と2号住居跡の中間の位置から出土した。内面にヘラ状工具による縦長の刺突痕が3個所見える。9は、1号住居跡、南西コーナーの外側で出土した鉢の破片である。口唇部はきれいに面どりされ内側は、突出している。胎土精良で、焼成も極めて良い。

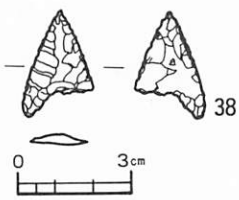
10・11・13は壺の口縁部及び頸部片である。10は、頸部に刻目を施した貼付突帯を有している。11は、複合口縁の壺で、口縁部断面は三角形を呈し、口唇部は丸まる。口縁部外面に刻目を、また頸基部に刺突文を有している。13は、頸部に断面三角形の突帯をもち、内外面ともハケ目調整である。内壁の剝落が著しい。14は、広口壺の破片で、外湾して立ち上った口縁部は、摘まれて外側へ突出している。外面胴部及び内面肩部にハケ目が見られるが、その施文具は異なる。15は、9とほぼ同地点から出土した鉢である。口唇部は丸味のある角を有し、外面は局所的に斜位のハケ目を施し内面は、ナデ調整を行なう。

21・22・24・25は、甕の底部及び脚である。22の脚部内面にススが付着し光沢がある。

23・26は壺の底部で共に平底である。26は、割れ口に沿った状態で、粘土を薄く重ねているが、これは、土器を乾燥する段階で底部に入ったヒビを補修したものと思われ、結果的には、その部分から割れたのであろう。27は、鉢の破片で、内外面ともナデ調整である。28は、口径20cm弱、復元器高は約9cmを測る。口縁部は内湾して立ち上り、端部は平坦となり、外側は摘まれて突出する。内外面ともに、ハケ目をナデ消しているが、内面にハケ目が多く残っている。



第183図　近江工業内第1トレンチ出土遺物実測図



第184図　近江工業内第1トレンチ出土石鏃実測図

31～37に掲げた遺物は、第1トレンチ内で検出された住居跡やV字溝等の遺構とは、かなり時期の隔たりがあると思われる。

31・32は器種不明の土師器で、トレンチの東端より出土した。31は復元口径25cm程度で、口唇端部での厚さは、1.7cmを測る。外面はハケ目、内面はヘラケズリである。32は、カマドの焚口を思わせるが、ススの付着は図面のアミの部分のみで、外面はもとより、内面にもススの付着は見られない。33・34・35・37は須恵器である。37は器種不明で、三角形状の貼付け突起を有する。38は、結晶片岩製の石鏃で、基部の抉りが鋭く先端が鋭角になっている。

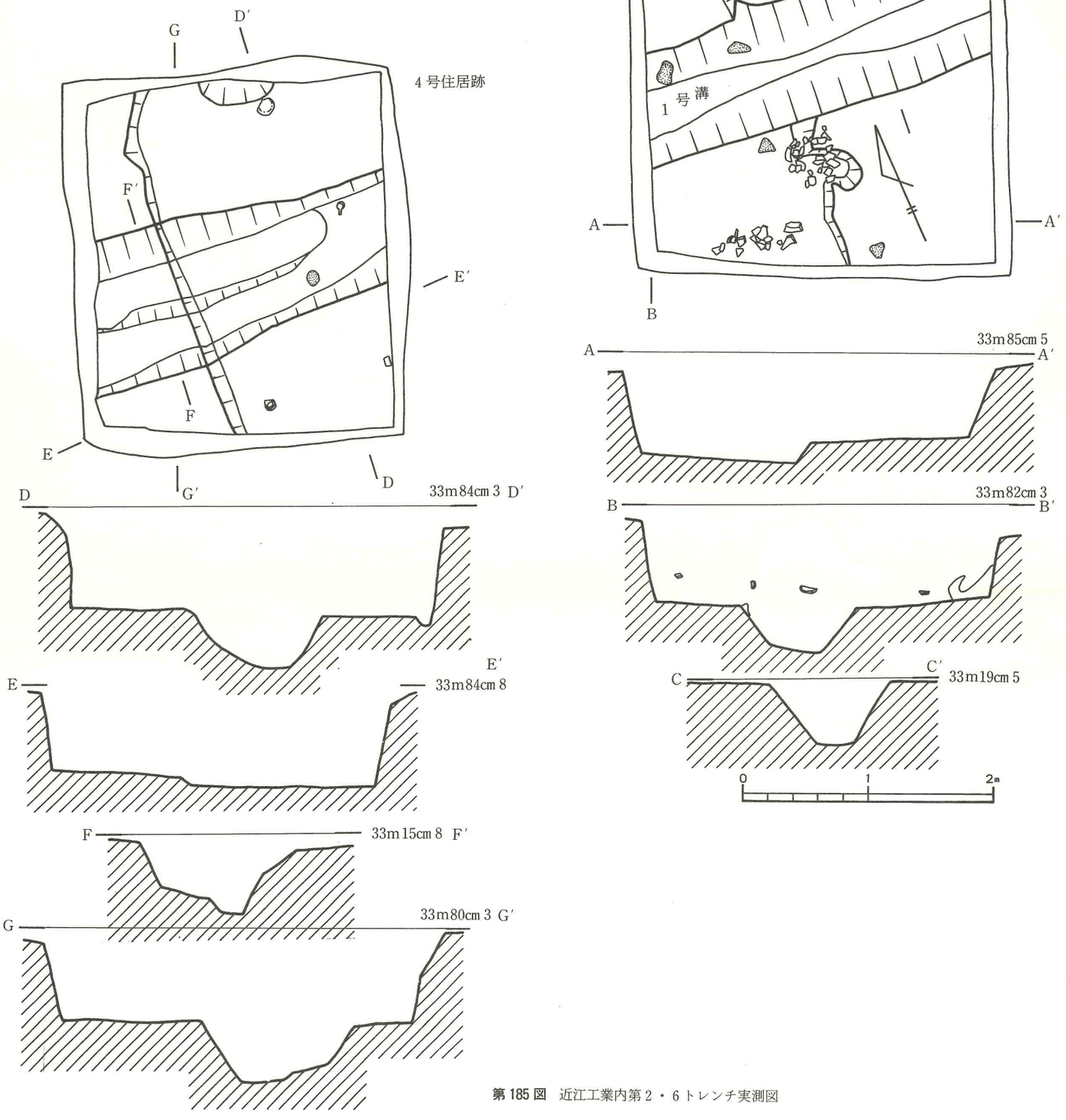
（坂本）

27　第2・6トレンチ　（図版45・46、第185図）

これらのトレンチは、第1トレンチの西側に設定したもので、同一住居跡（4号住居跡）の東西壁面が検出し、さらに1号溝が延びてくることも判明したため、一括して取り扱うこととした。

(1)　4号住居跡

この住居跡は第2トレンチ、および第6トレンチで東西壁面の検出が行なわれたもので、壁面は明確に検出でき、床面もしっかりしたものだった。特に、1号溝の上面まで床は堅くしまり、遺物の出土も見られるところから、この住居跡は1号溝埋没後、構築したものと判断された。住居跡は残された壁面から5m×4m程度の規模になるものと推定される。（中村）



第185図　近江工業内第2・6トレンチ実測図

遺物（図版63－9・11・12、第186図―1・2、188図―1・2、189図―12）

ほとんどの遺物は、床面密着の状態で出土した。

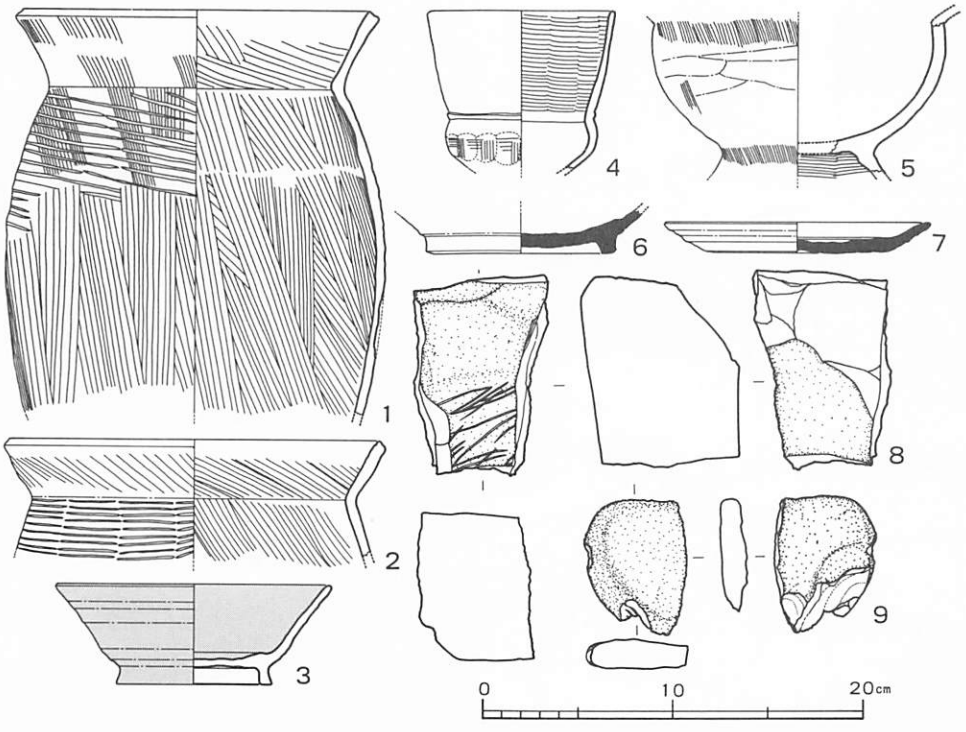
第186図－1は，第2トレンチ側の住居東南隅において床面から、10cm～15cm程度の位置で出土した。胴部下半を欠損する甕で口径19cmを測る。口縁部は、やや外湾して立ち上がり、端部近くで若干肥厚し、尖端部は丸味のある角を有している。肩部外面は、ハケ目のあとナデて、さらにタタキ目を施す。胴部は内外面ともハケ目調整だが、その施文具は異なる。

2は、甕の口縁部片で、住居の東壁に接して出土した。肩部に横位のタタキ目を施し、それ以外の部分は、ハケ目のあとナデている。

第188図―1は、床面から出土した鉢で、口径16cm弱、器高 8.4cmを測る。口縁端部は内傾した平坦面をもち、外側の角は摘まれて、やや突出する。外面は、ハケ目のあとナデられ、内面もハケ目をほとんどナデ消している。ススが内外面ともに局所的に付着する。

2は、陶石製の砥石で、片側を欠損する。磨面は4面で、どの面も非常によく使い込まれている。ひとつの面に数条の擦痕が見られる。

第189図―12は、本住居の床面に密着した状態で出土したほぼ完形の土製柄杓（ひしゃく）である。現存長は 9.5cm強、口径は4.1cmを測る。第Ⅳ次調査で出土した土製柄杓（第217図―1）より、ひと回り大型だが、柄はこちらの方が細い。また第 217図のものは柄を底部に付けているが、本住居出土のものは、口縁部に近い部分に付けており、その角度も異なる。（坂本）



第186図　近江工業内第2トレンチ出土遺物実測図

(2) 1号溝

これらのトレンチ内においては、8mの長さで存在することが判明し、第1トレンチからの延長は、21mに達している。

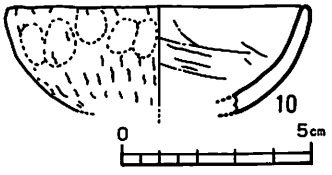
溝の形状は、第6トレンチ西端においては、逆台形状になり、上部幅 1.2m、下部幅80cm、深さ48cmの規模となっている。第1トレンチでの状況に比べると規模が大きくなりつつあると言えよう。

埋土は第1トレンチと同様、層序の確認ができず、ここでも短期間もしくは人為的に埋められたものと思われる。（中村）

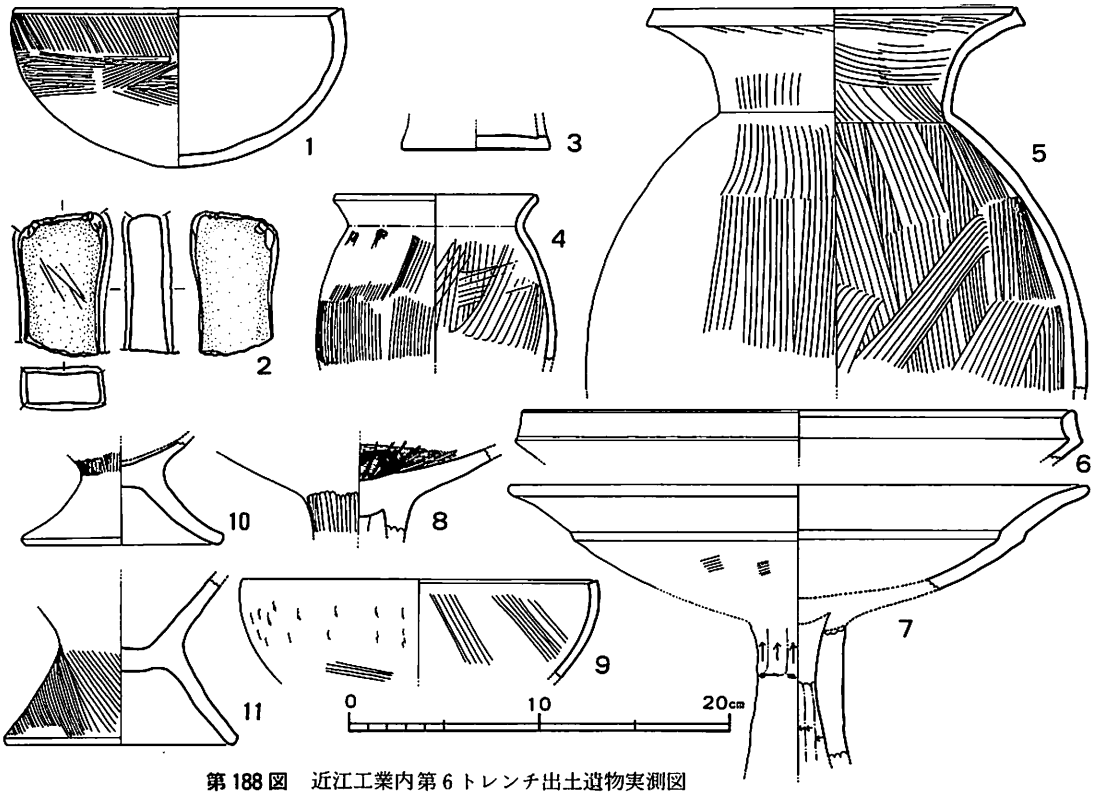
遺物（第 188図－6・7・9）

第2トレンチ、第6トレンチにおいても1号溝からは、ほとんど遺物は出土せず、実測できるものは、下記の第6トレチ内より出土した3点のみであった。

6は、高坏の坏部片であろう。口縁部は、くの字に内傾して内側が膨らみ、ナデによって面取りされている。器面調整はヨコナデである。7も高坏で柱状部と坏上半部片であるが、同一個体と思われる。口縁部は体部から折れて外湾しながら、さらに広がり、



第187図 近江工業内第2トレンチ出土手捏土器実測図



第188図 近江工業内第6トレンチ出土遺物実測図

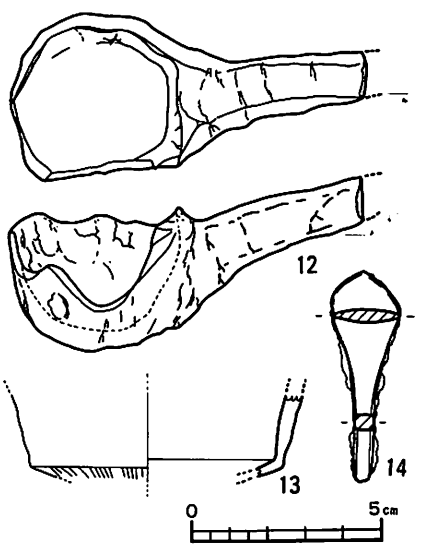
端部は丸くおさまる。柱状部は坏部との接合部で剝離しており、最小径は 4.5cm強を測る。坏部は内外面ともナデで、外面体部にハケ目が局所的に残る。柱状部は、外面が粗いヘラ磨きで、内面は横位のヘラケズリである。9は、鉢の口縁部片で、復元口径17.9cm。口縁端部は丸味のある角をもち、平坦となる。内外面ともハケ目をナデ消している。

(3) その他の遺物・第2トレンチ (図版63—10、第186図—3～9、第187図—10)

第185図3は、丹塗りの土師器で、口径14.3cm、器高5.35cm。底部内面に粘土紐の渦巻状態が明瞭に見てとれる。4は小型丸底壺の破片で、頸部に1条の突帯を有する。外面はハケ目をナデ消し、内面は、口縁部に横位のハケ目を施している。5は脚台付鉢で、内面はヘラで丁寧に磨き上げている。6・7は須恵器の破片である。8は石皿であろう。現存の破片から、全体を推定すれば、中央部が皿状に凹む形となろう。使用面の摩耗が顕著で、多数の条痕が残る。裏面は自然面で未使用である。9は、石錘で片方の凹部を欠く。片面にススが付着している。10は手捏の小型の鉢で、復元口径 7.7cm。手捏のものにしては、作りがしっかりしており、口縁部も凹凸が少なく整っている。

(4) その他の遺物・第6トレンチ (第188図—3・4・5・8・10・11、第189図—13・14)

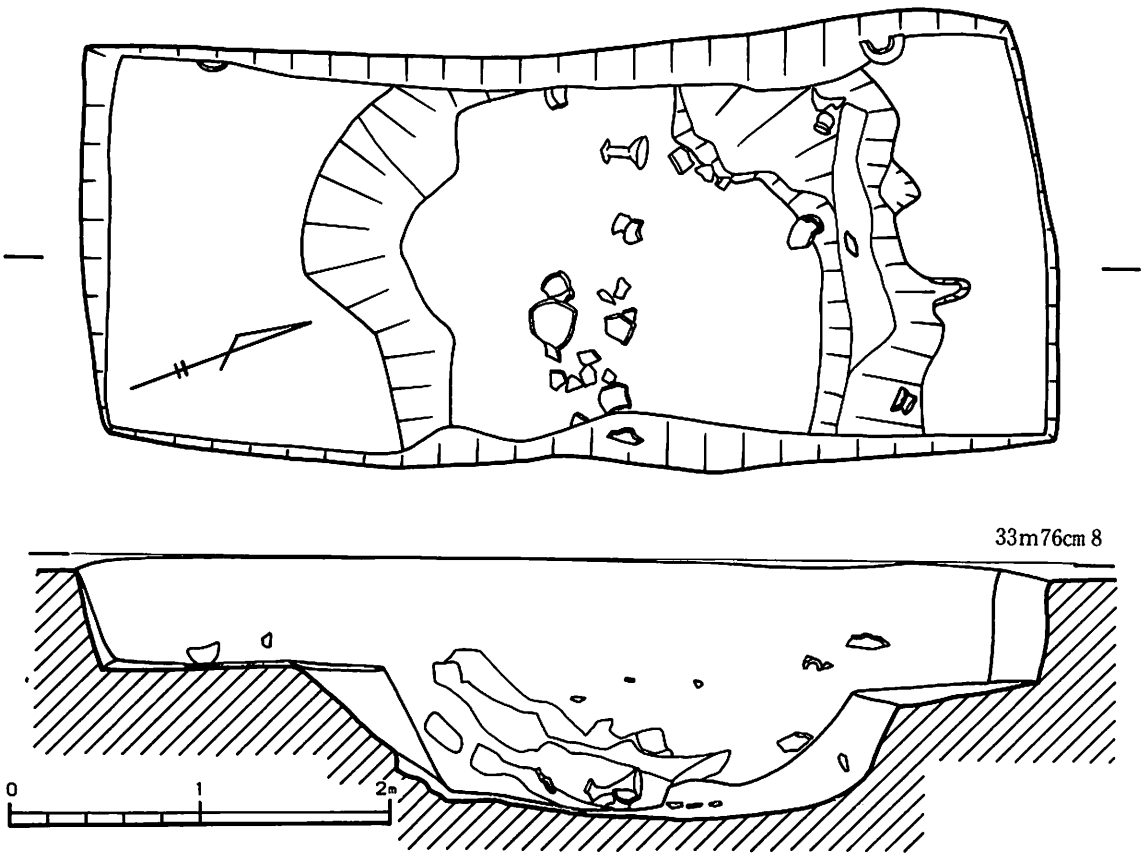
第 187図3は、ジョッキ形土器の底部片で、復元径 7.8cm程である。中央部が若干反り上っており内面はナデ、外面は丁寧なヘラ磨きを施す。4は小型の甕の破片で、復元口径10.6cm。口唇部外側は丸く、内側は、やや鋭い角をもつ。外面は細かいハケ目を肩部でナデ消し、内面は粗いハケ目を施し、肩部はやはりナデている。5は壺で、復元口径19cm強、頸部径12.2cmを測る。ラッパ状に開いた口縁部は上半で肥厚し、端部は、内側は摘み上げられ、断面三角形をなす。外側も鋭い角をもっている。全体にハケ目を施しているが、口縁部は内外面ともナデており、外面はほとんどハケ目は残らない。8は高坏で、口縁部と脚部を欠損する。外面はナデのあと、柱状部はヘラ磨きを施す。坏内面は、丁寧なハケ目調整をし、そのあと放射状にヘラ描暗文を施す。10・11は甕の脚部で両者とも体部を欠損する。13は、器種不明の土器片で屈折する部分での径は 6.7cm強を測る。屈折部以下にハケ目を施している。14は完形の鉄鏃で長さ 5.5cm、幅1.75cm、厚さ0.31cm、重さ 5.6gを測る。(坂本)



第189図 近江工業内第6トレンチ出土遺物実測図

28 第4トレンチ (図版49、第190図)

このトレンチは第6トレンチの西側 3.2mのところに、1号溝追跡のため5m×2mの規模で掘ったものである。ここにおいては、溝の規模が大きくなり上部幅約3m、下部幅約 1.8m、深さ75cmを測り、逆台形状をなす溝であり、これまでの1号溝と規模、形状の点で異なった別の溝であると判断され2号溝とした。



第190図 近江工業内第4トレンチ実測図

(1) 2号溝

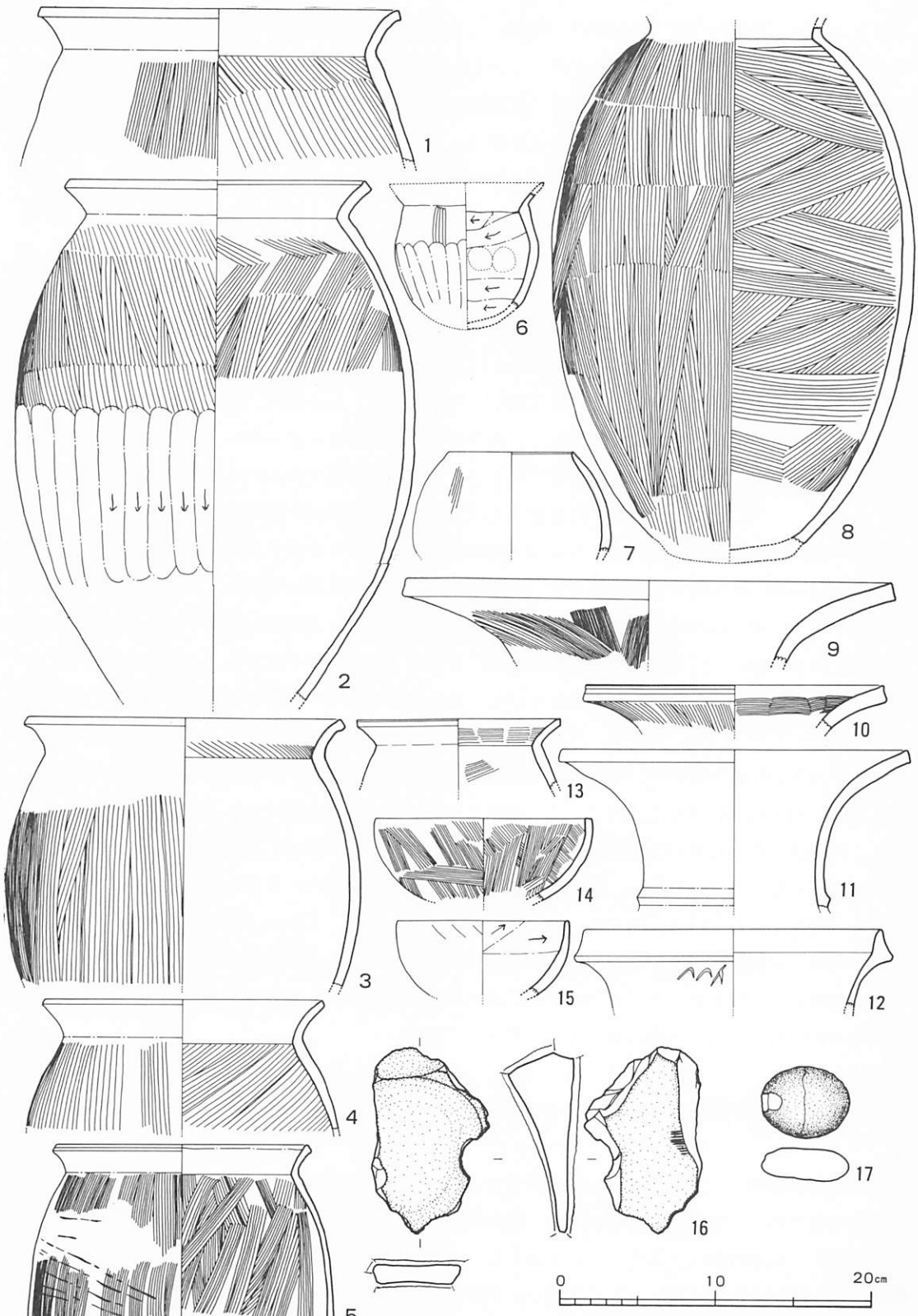
1号溝は、このトレンチにおいては見られず、2号溝と交叉しているものと思われる。2号溝底部においては、土器の出土が著しく、その点も1号溝とは異なった点である。

溝内層序は、火山灰土が主であり、識別に困難をきわめたが、現況では土層の堆積は自然の流れ込みによるもので、人為的に埋めたものとは判断されなかった。（中村）

遺物・2号溝（図版64－2・6、第191図―1、192図―18、193図）

遺物は、おおよそ溝の底に密着して出土したものと、溝内中位の埋土中から出土したものとに分けられる。

1・45・46・48～53は、溝底よりの出土である。1は甕の口縁部から肩部にかけての破片で、復元口径23cm強を測る。外反した口縁部は、端部に近くなって、さらに外湾して広がる。口縁端部は、外側が突出気味となる。内外面とも、口縁部はヨコナデ、頸部以下はハケ目調整である。口縁端部内側に部分的にススが付着している。45は、広口壺の胴部片で、復元最大径は中位に位置し、14.1cmを測る。外面はナデ、内面は左下りのハケ目を施す。46は体部を欠く脚台の破片で、裾端部の復

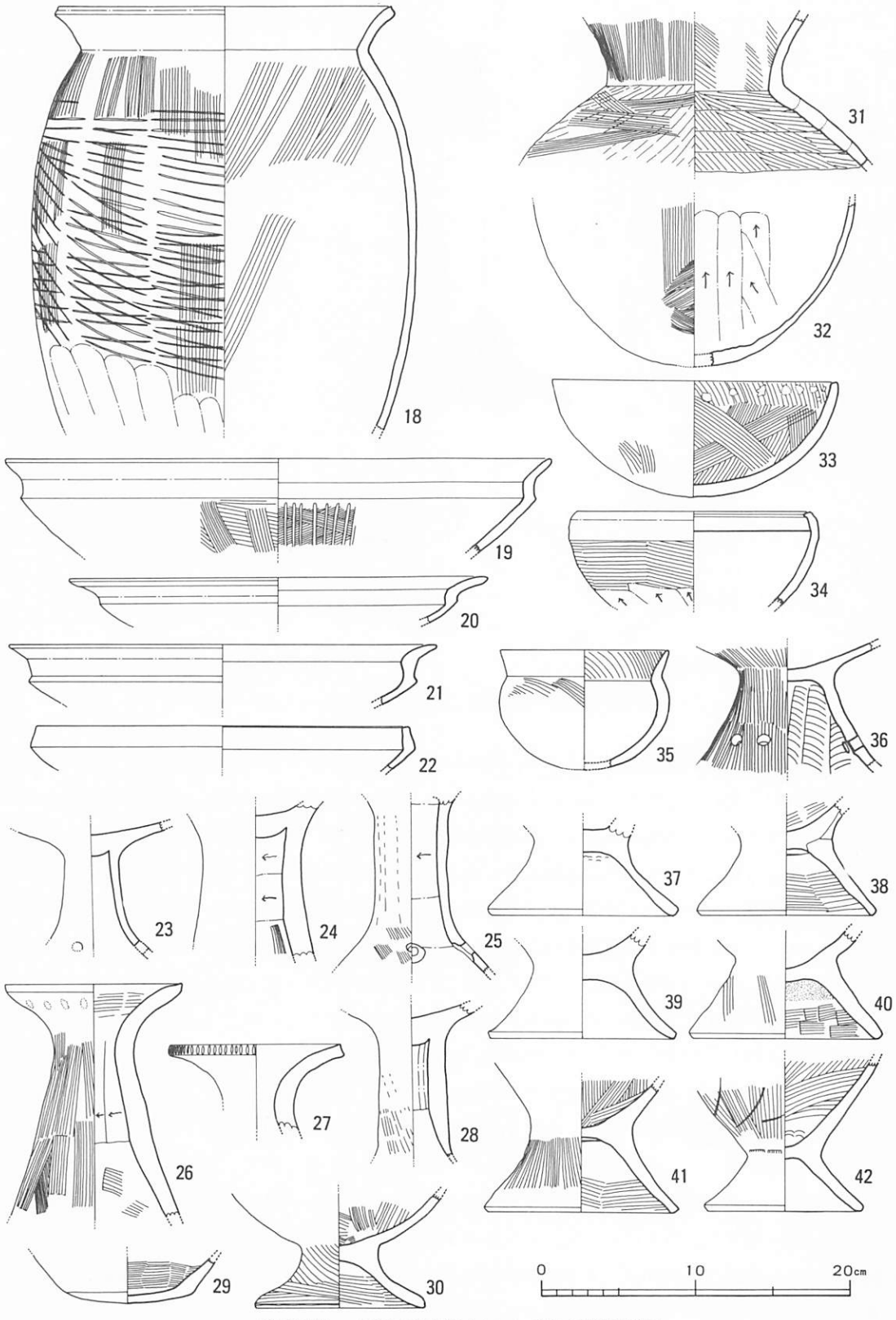


第191図　近江工業内第4トレンチ出土遺物実測図

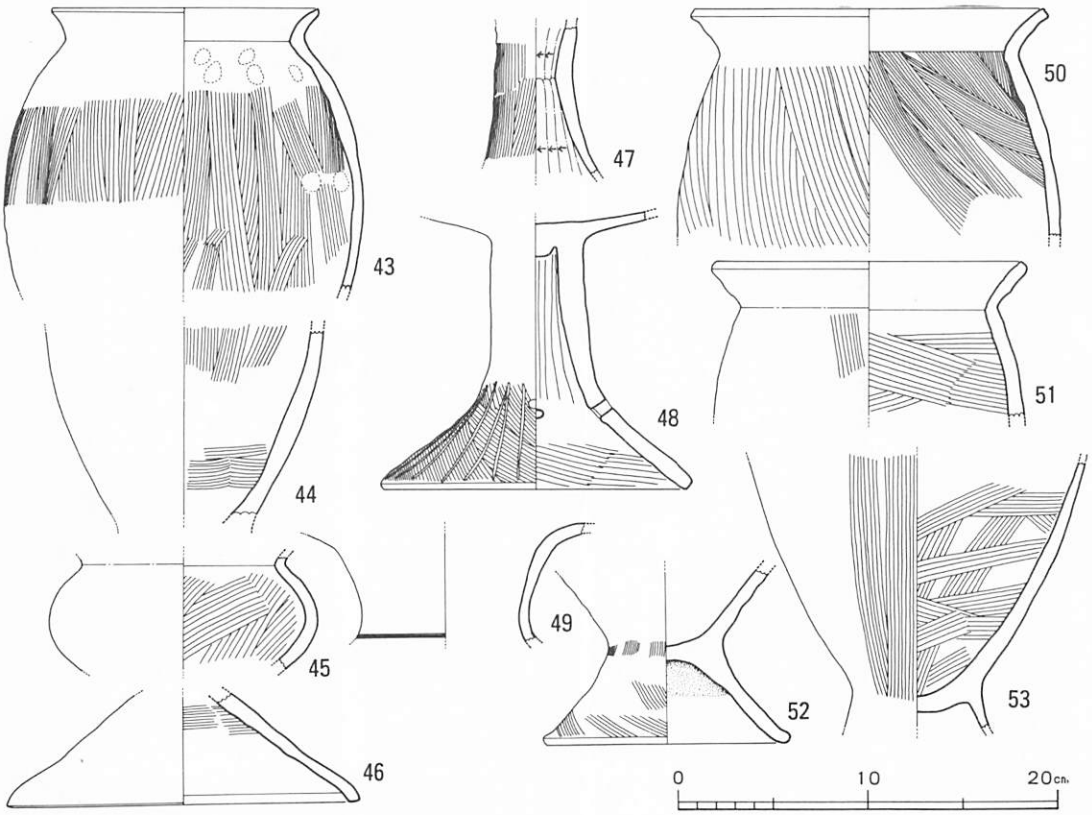
元径は18.5cm。直線的に開いた裾部は、端部近くで内湾し、端部は丸味のある角をもって平坦面となる。外面ナデ、内面はハケ目をナデ消している。48は高坏の脚部で裾端部径は16.4cm。坏底部までの高さは14cm弱を測る。柱状部と裾部とは明瞭に区分はできない。裾部上位に長径0.75cm、短径0.6cmの横長の円孔を4個穿っている。坏外面は、ハケ目のあとナデており、内面はハケ目のあとヘラ磨きを施す。柱状部の内外面はナデで、裾部外面は右下りハケ目のあと、細かい条線を有するヘラ状工具によって暗文を施し、内面は、ハケ目のあとをうすくナデて仕上げている。49は、壺の口縁部片で、体部と口唇部を欠く。頸部の接合部に2条か、それ以上の沈線をもつ。内外面ともにナデ調整である。50は甕の上半部片である。口唇部の角は外側が丸味をもち、内側は鋭い。胴部は内外面ともハケ目調整であるが、施文具は異なる。外面口縁部から、肩部にかけて局所的にススの付着が見られる。51も甕で、復元口径16cm強。口縁部は、やや肥厚し、先端部外側は丸く、内側は角ばる。胴部外面はハケ目をヨコナデして消し、内面は横位、あるいは、やや右下りのハケ目を施す。52は、台付甕の脚部で、裾端部は丸く、脚部内面に砂の付着が見られる。体部及び脚部の内外面ともハケ目をナデ消している。53も甕であるが、上半部と脚部を欠く。外面は縦位のハケ目を薄くナデており、内面は左下りのハケ目を引き上げている。脚部内面に砂の付着が見られる。
18・43・44・47は溝内の中位、底から40cm～50cm程度の位置より出土した。18は、胴部下半を欠く甕で口径21.6cm、胴部最大径は25cm弱で、口唇部から13.5cmの位置に有する。口縁部は、外湾して立ち上がり、口唇部は外側が丸味を帯び、内側は鋭い角をもつ。直線的な胴部中位の形状に比べて肩部は、大きく膨んでいる。外面の胴部中位は、やや右下りのタタキ目のあと、さらに右下りのタタキ目を施し、その後ハケ目とナデ調整を行なっている。下部はハケ目を下から上へ引き上げたあと、ナデて仕上げている。内面は、左下りのハケ目をほとんどナデ消している。外面は、口唇部に至るまでススの付着が顕著で、部分的には焦げつきの痕も見られるが、内面の器壁の汚れは全く見られない。43・44も甕である。43は「く」の字に外反した口縁部が短くおさまり、先端部は外側が丸く、内側は、やや丸味のある角をもつ。胴部は丸く膨み、最大径は口唇部下10.2cmに位置し、ほぼ胴部中位と思われる。外面は、頸部から胴部中位にかけて縦位のハケ目を施し、肩部はヨコナデにより、それを消している。内面は、おおよそ縦位のハケ目で、指頭による調整が数箇所見られる。外面にススの付着が顕著であるが、内面の汚れは見られない。44は、胴部下位の破片である。外面ナデ、内面はハケ目のあとナデて仕上げる。47は高坏の柱状部で、体部とは接合部から剝離している。外面縦位のハケ目、内面は横位のヘラケズリである。

(2) その他の溝内出土遺物 (図版64—1・3・7、第191～194図)

以下に記す遺物は、2号溝埋土の排除作業中に出土し、その位置のはっきりしないものである。2～5は甕である。2は復元口径19cm弱、胴部最大径は中位に有し、25.5cm強を測る。口縁部は、やや外湾し、端部内側は摘み上げられ突出する。底部は、欠損するが、脚が付いたと思われる。外面肩部から胴部中位にかけてハケ目を施し、下半はヘラケズリのあとナデている。内面も肩部に、外面とは異なる施文具によってハケ目を施し、胴部下位にもハケ目をナデ消した痕跡がうかがえる。



第 192 図　近江工業内第 4 トレンチ出土遺物実測図



第193図　近江工業内第4トレンチ2号溝底出土遺物実測図

外面には口唇部から胴部下位に至るまで、疎らにススが付着し、内面下位に煮沸による幅11cm前後で、器壁を回る帯状の変色及び焦げ付きが見られる。3は、口縁部が外湾し、端部外側は膨らみ、丸味を帯びて突出し、内側は角ばる。外面胴部は縦位のハケ目、内面は口縁部、胴部にハケ目を施し、そのあと丁寧にナデてハケ目を消している。外面胴部中位以下にススの付着と変色が見られるが、内面の汚れはない。4も外湾する口縁部をもち、端部は内側が角ばり外側が丸くなる。胴部は内外面ともハケ目のあとナデ調整を行なっている。ススは、外面胴部に顕著で、口縁部にも若干付着する。5は、口縁部が端部近くで、やや肥厚し、端部は内外とも丸く膨らみ、平坦面の中央が、部分的に凹む。外面は、やや右下りのタタキ目施したあと、それをナデてつぶし、その後さらに、極く目の細かいハケ目をつけている。内面は、外面とは異なる施文具によってハケ目を施す。外面は、胴部から口唇部にかけて全面にススが付着し、肩部以下が変色している。内面はほとんど汚れていないが、一部変色が見られる。6は小型の広口壺の破片で、器面調整はヘラと指頭で行なっている。7は鉢の破片で、内外面ともハケ目をナデ消している。8は壺で、頸部径11cm弱、頸部までの復元高は34cm強を測る。長胴であまり張らず、底部は欠けているが、平底であろう。内外面ともハケ目調整を施すが、外面はその後、上半部を主にナデており、底部内面は指頭によって調整している。また、胴部上半外面にタタキ目の痕跡がわずかに窺える。器壁の外面に一部剝落した部分があるが、これは状況から見て焼成時にはじけたものであろう。

9・10・11は単純口縁、12は複合口縁の壺で、11以外は破片である。9は復元口径31cm弱の大型の壺で、かなり肉厚である。10は、やや凹む口唇部にも、横位のハケ目をめぐらしている。11は頸部外面に断面三角形の貼付突帯をもつ。ラッパ状に開いた口縁部は、やや肥厚し、端部は角ばって平坦面を有するが、部分的には強くナデられて、やや凹む。外面はハケ目をヨコナデで消し、内面はヨコナデであるが、頸部にハケ目の痕跡が見られる。12は、複合口縁壺の口縁部片で、復元口径19cm弱である。口縁部のすぐ下に、櫛描波状文を施している。13は、小型の甕の破片で、復元口径13cm強を測る。外面頸部以上と口唇部内面付近にススが付着する。

14・15は鉢である。14は口縁端部が角ばるが、15は丸くおさまっている。器面調整は14がハケ目、15がナデである。16は、陶石製の砥石で、よく使い込まれている。主な磨面は4面あり、破損後も破損面を使用している。17は河原石を転用した石錘であろうと思われるが、打ちかきは長軸の片方にしか見られない。

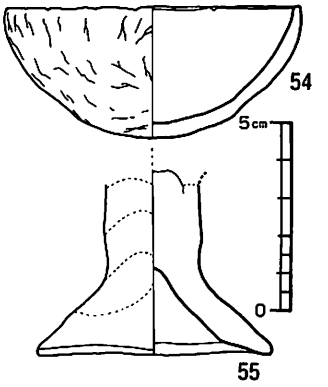
19～22は、高坏の坏部片で、23～25、28は脚部である。19・20・21は口縁部が体部から折れて立ち上がり、再度折れて開き、口縁端部は丸まる。22は、体部から立ち上がった口縁部が、端部で丸味のある角をもち平坦となる。23は、柱状部内外面ともナデ仕上げで、3個の円孔を穿っている。

24はかなり肉厚の柱状部で、器面の荒れが著しいが、坏底部はヘラ磨きを行った痕跡が窺える。

25は裾部外面のハケ目をナデ消して、径0.85cmの円孔を4個穿っている。28の坏底部はヘラ磨きで柱状部外面はハケ目をナデ消しており、内面はヘラケズリである。26・27は器台である。26は口径11.5cm、胴部最小径 5.2cmを測る。外面は、縦位のハケ目を薄くナデて、内面は中位がヘラケズリ口縁部と裾部はハケ目のあとナデている。27は、口径11cm弱で、口縁端部に刻目文を廻らしている。外面は指圧によって調整を行ない、内面はヨコナデである。内面口縁部付近に一部ススの付着が見られる。29は壺の底部であろう。底部径 8.5cmの丸味を帯びた平底で、座りはよくない。30は台付鉢の底部裾端部径は11cm弱、胎土に大量の砂粒を含んでいる。

37～42は、甕の脚台である。38は、体部との接合関係がよく見てとれる。40は、いわゆる砂付土器である。41は、体部外面と脚部内面にススが付着している。42は体部外面に鋭いヘラ状工具によって引っかいたような、左下りの沈線が回っている。また、脚部内面には鋭い錐状のもので、刺突した孔が7個見られる。

54は鉢のミニチュア土製品で、手捏である。復元口径 7.4cm、高さ 3.5cmを測り、内外面ともナデているが、内面の調整に比べて外面は粗い。55も手捏で、高坏の模造品であろう。裾端部径は 6.2cmで、内面には端部から 1.3cmの位置に稜を有する。



第194図　近江工業内第4トレンチ出土手捏土器実測図

(3)　その他の遺物　(図版64—4・5、第192図—31～36)

31は、胴部と口縁部を欠く壺で、頸部径は11.5cm。口縁部はラッパ状に外湾して開くものと思われる。胴部とは、粘土紐の接合部からきれいに剝離しており、肩部内面には、明瞭に輪積みの痕が窺える。外面頸部以下は左下りのタタキ目をナデてつ

ぶし、さらにハケ目を施しており、内面は右下りのハケ目である。32は甕の底部片であろうと思われる。外面にススが付着している。33は、2号溝の上面ではなく、トレンチ南西隅から出土した。口径17.6cm、器高 7.5cm強の完形の鉢で、口縁部内面の器壁の荒れが著しい。34も鉢で、口縁部が内傾する。35は、約2分の1を欠損し、口径10.5cm強、器高 7.7cmを測る。内外面ともハケ目をナデ消して調整し、ヘラ磨きを行っているが、これは、成形後、粘土が乾いてしまう直前に施したものと思われる。36は台付鉢の脚部であろう。体部と裾端部を欠損する。脚部に径0.85cmの円孔を2個1対で6個穿孔している。(坂本)

29 第3トレンチ (図版47・48、第195図)

第4トレンチの西側に位置するこのトレンチにおいては、3本の溝状遺構が検出された。トレンチ中央には2号溝が横たわり、その南側に1号溝と2号溝が交叉している部分が検出された。

さらにトレンチ北端においては、3号溝の一端が検出されたのである。また、3号溝と2号溝の間においては、堅く締った床面が存在し、2号溝上面においてもその広がりを見ることができた。断面図からも住居跡が存在したものと思われるが、プランの検出までは至らず、遺構の確認は出来なかった。

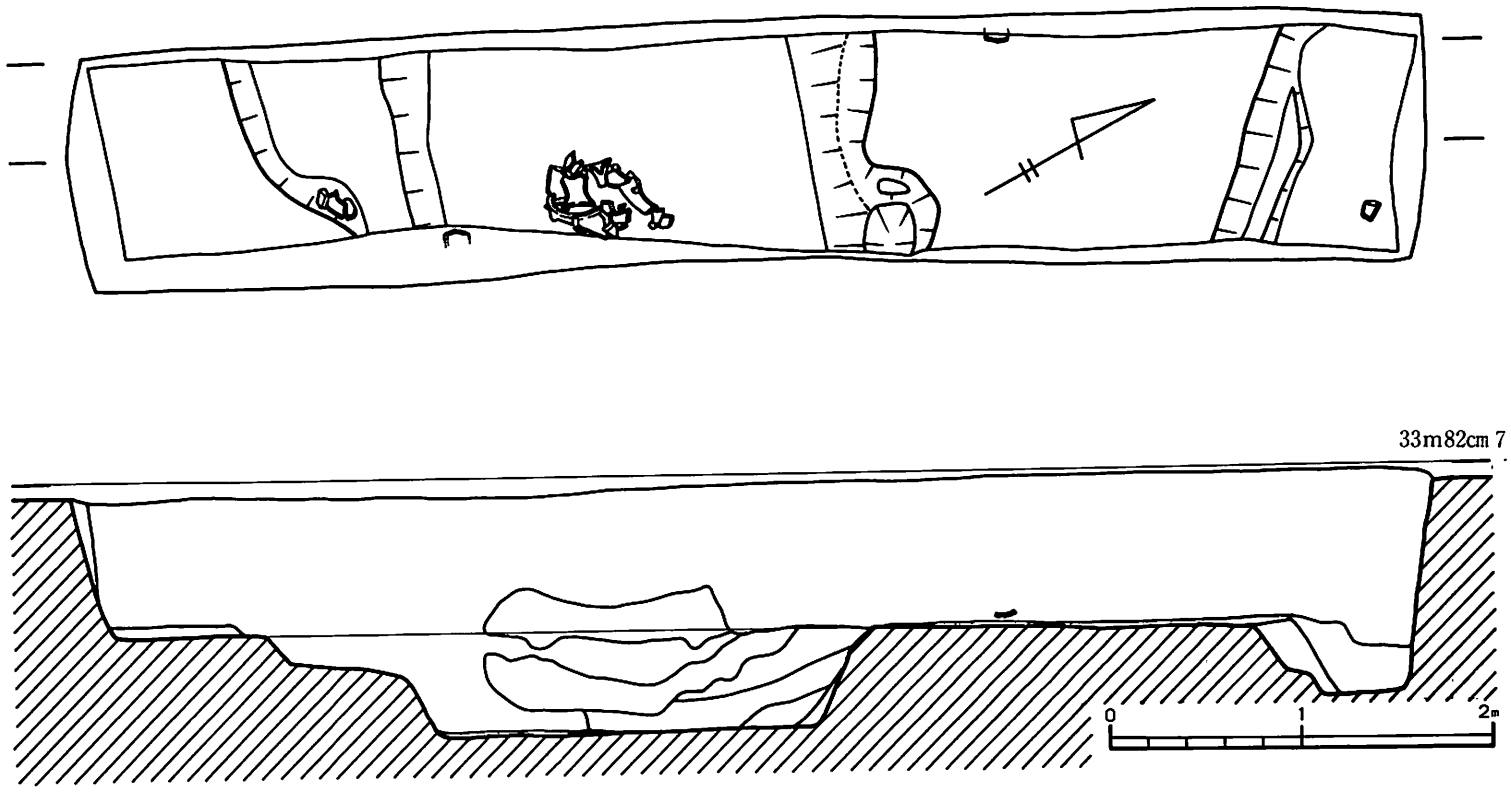
(1) 1・2号溝

1号溝はこのトレンチにおいては、これまで見られたものに比べると浅く、その形状もV字溝から、逆台形を呈してくる。第1トレンチからの延長は33mを測る。2号溝は上部幅約 2.5m、下部幅2m、深さ約50cmの逆台形状を呈している。溝底部と中位からまとまった土器の出土を見ることができた。第4トレンチからの延長は 7.5mを測る。層序は、第4トレンチで見られるような互層を形成しており、自然堆積によるものと判断された。3号溝は南側壁面のみで、その規模や、方向等については不明だが、恐らく逆台形状を呈しているものと思われる。

遺物・2号溝 (図版65－1～4、第196図 — 1～9・11、197図 — 14・15)

第3トレンチにおける2号溝の遺物は、底に密着した状態のもの、または溝内の上位から出土したものがほとんどであった。土製勾玉は、中間位置からの出土である。(中村)

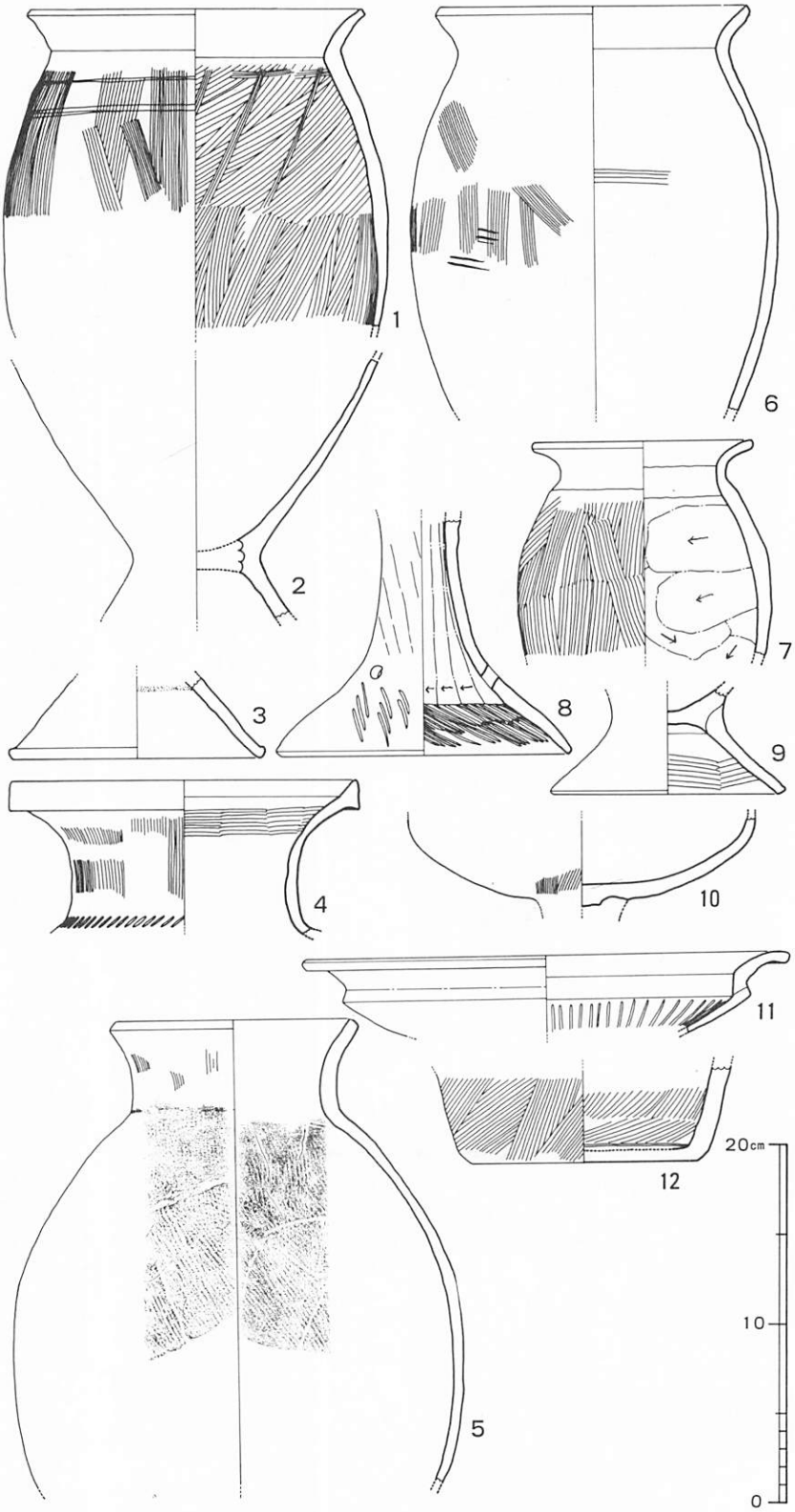
溝底から出土した遺物は、5・6・7・9である。5は単純口縁の壺で、胴下部を欠損している。口径13cm、頸部径11.5cm強を測る。口縁部は頸部から、ほぼ垂直に立ち上り、中間位置から外湾して、端部では逆に、やや内湾気味となる。端部は、丸味のある角を有して、平坦となる。胴部は、長楕円形状に膨み、最大径は、ほぼ中位にあると思われ、24.8cmを測る。胴部は内外面とも、ハケ目を施しているが、内面肩部にハケ目を施す以前の指頭痕が見られる。口縁部外面は、ハケ目をナデ消し、内面はヨコナデである。6は、復元口径17cm弱の甕の破片である。頸部のくびれはそれほど鋭くない。口縁端部外側は、張り出さないで丸味を帯び、内側は鋭角的になっている。胴部外面はハケ目のあとナデているが、中位にタタキ目が、若干残っており、タタキ目、ナデ、ハケ目、ナ



第195図　近江工業内第3トレンチ実測図

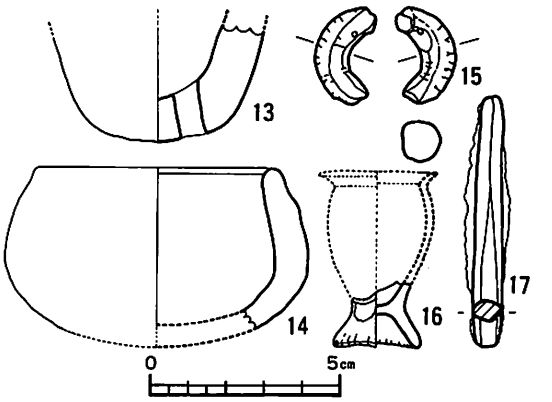
デの順序で器面調整を行っている。内面は、ハケ目を入念にナデ消している。外面は口唇部に至るまで、ススの付着と変色が見られ、内面は下部に焦げつきと変色が見られ、また器面の荒れが、顕著である。7は、小型の甕の破片で、外面ハケ目、内面ヘラケズリである。肩部外面には強しヨコナデされてできた稜を有する。整形が雑で、器壁の厚さはかなり、不揃いである。9は甕の脚部で、胎土に砂粒を多く含む。体部との接合部の関係がよくわかる。

1・2・3・8は溝内上位のほぼ同地点からの出土である。1・2はそれぞれ甕の上半部と下半部で、1は口



第196図　近江工業内第3トレンチ出土遺物実測図

径18.4cmを測る。胴部外面の調整はタタキ目、ナデ、ハケ目、ナデの順序で行なっている。内面はハケ目調整である。外面にススの付着が顕著で光沢があるが、内面はほとんど汚れも変色も見られない。2は、内面の底部に近い所に変色が見られる。3は、砂付の脚台片で、裾端部は丸く膨らむ。内外面ともにハケ目をナデ消している。8は高坏の脚部で、裾端部径16.3cm、体部との接合部までの高さ、13.2cmを測る。外面は、ヘラケズリのあと、ヘラ磨きとナデで仕上げている。内面柱状部は、横位のヘラケズリ、裾部はタタキ目である。径0.9cmの円孔を穿っているが、これは竹管状のものを外面から押し込んで穿ったものではなく、鋭いヘラ状工具を器壁に突き刺して、ぐるりと回転させたものである。外面に一部ススの付着を見る。15の土製匂玉は溝底より26.4cmの位置から出土した。全長 2.6cm、断面直径1.05cm、円孔径1.05mmを測る。

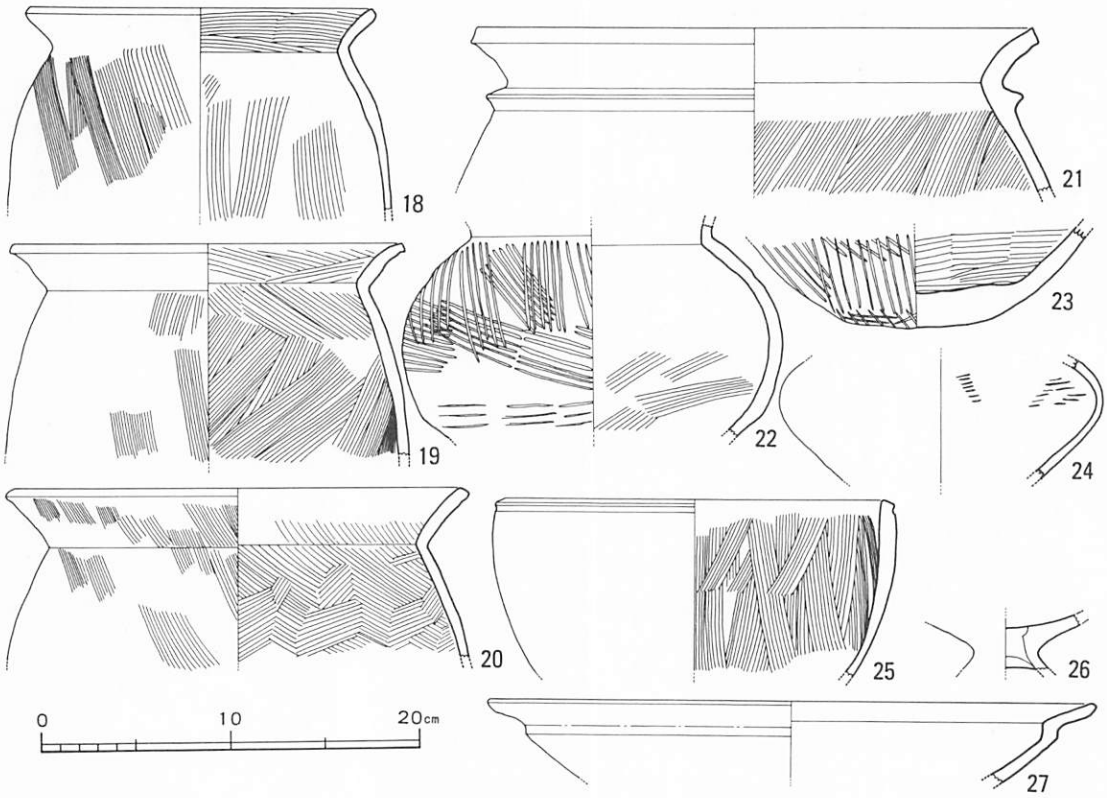


第197図　近江工業内第3トレンチ出土遺物実測図

2号溝の排土中に出土したものは、4・11・14で、出土地点は、はっきりしない。4は復合口縁壺の破片で、復元口径19cm弱。口縁部断面形は、三角形状を呈し、端部の平坦面は若干内傾して周回する。頸部に刻目文をもつ。11は、高坏の坏部片である。口縁部は体部から、ほぼ垂直に立ち上がり、更に外へ折れて開き、端部は丸くおさまる。体部内面に放射状のヘラ描き暗文を施しており大変、丁寧な整形である。口縁部内面の稜線付近は少しだが、摩耗している。14は、鉢のミニチュア土製品であろう。全面ナデ仕上げであり、胎土に細かい砂粒を含む。

(2)　その他の遺物　(第196～198図)

第3トレンチにおいて、2号溝と3号溝の間に住居跡の床面と思われる面の広がりを見ることができたが、第196図―13、198図の18～27は、この床面（住居跡）に伴なうものであると思われる。13は、甑のミニチュア土製品であろう。底部に径 0.7cmの円孔を穿っている。18・19・20は口縁部から胴部にかけての甕の破片である。18は、外面は全面にススが付着し、内面は肩部から胴部にかけての部分的変色が見られる。外面肩部に器壁の剝離した部分が見られるが、これは土器焼成時にはじけとんだものと思われる。19は、器面の荒れが著しいが、胴部外面はタタキ目をナデてつぶした痕跡が窺え、そのあと、ハケ目をほどこし、さらにナデている。20は、復元口径23.6cmを測るやや大きめの甕で、内外面ともハケ目を施している。19・20ともにススの付着や変色は見られない。21も甕で、頸部に断面三角形の貼付突帯をもつ。外面口縁部と突帯にススが付着している。22は、縁部と底部を欠損する壺で、頸部径12.7cm。外面に縦、斜、横のタタキ目を施し、内面は、ハケ目とナデ調整している。23は、大型の壺の底部である。外面にタタキ目、内面にハケ目と指頭による調整を施す。24は壺の胴部片で最大径は17cm（復元）を測る。外面は極めて入念にヘラ磨きを施し



第198図　近江工業内第３トレンチ出土遺物実測図

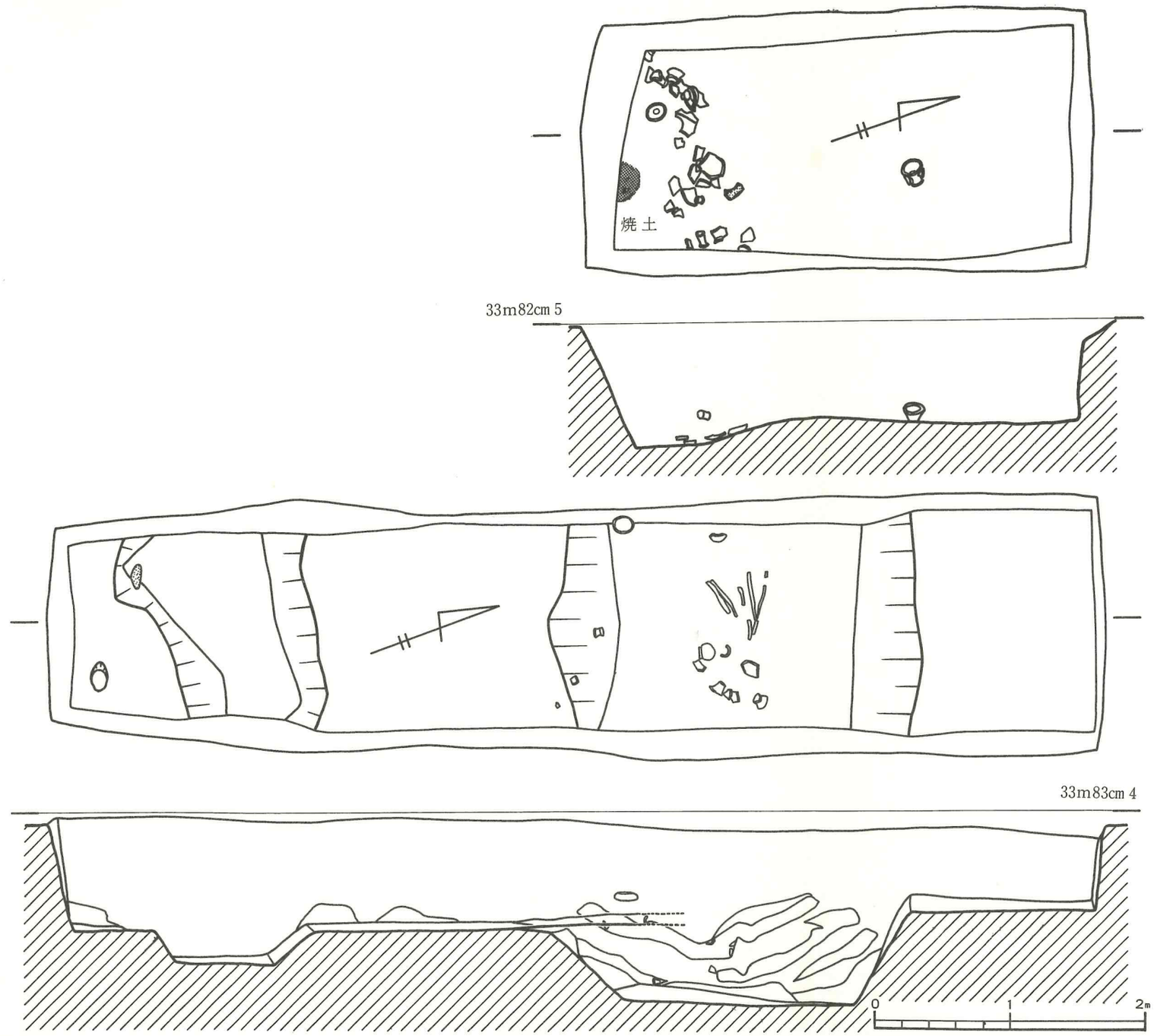
ており、光沢がある。胎土は精良で、焼成も大変良い。25は鉢の破片で、口縁部にナデて凹めたような沈線をもつ。外面はヘラケズリのあとナデており、口縁部には若干ハケ目が残る。内面は、ハケ目を施している。26は台付鉢の体部と脚台の接合部であろう。27は高坏の口縁部片で、復元口径31.6cm、口縁端部は、やや肥厚し丸まる。内外面ともヨコナデで、丁寧な仕上りである。

この他、第３トレンチの遺構に伴なわない遺物には、第 195図10・12、第 197図16、17がある。10は、高坏の坏部片であろう。脚部とは接合部から剝れている。内外面ともナデ仕上げである。12は器種不明の底部片である。平底で、復元径12.5cm強を測る。内外面ともハケ目調整である。16は、甕を模したミニチュア土製品の破片で、脚裾部径 2.2cm弱、脚部高0.85cm。極めて小さいものである。17は器種不明の鉄器で、現存長 6.5cm、重さ14.2ｇ。鉄鏃の茎部かとも思われるが不確かである。

30　第５トレンチ　（図版50～52、第199図）

(1)　１・２号溝

近江工業内のトレンチでは、最も西に寄ったトレンチである。ここにおいては、１号溝と２号溝



第 199 図　近江工業内第 5 トレンチ実測図

の検出を行なうことができた。さらに、第3トレンチで見られたように、1号溝と2号溝の間と2号溝上面において床面が存在することが確認された。ここにおいても堅く締った床面で、2号溝上面にまで広がっているが、壁面を検出することができず、遺構プランの確認は出来なかった。

1号溝は、ここにおいて上部幅 1.2m、下部幅 0.7m、深さ24cmで、逆台形状を呈している。第1トレンチからの延長は41mに達し、ほぼ東西方向に一直線に走ることが判明した。

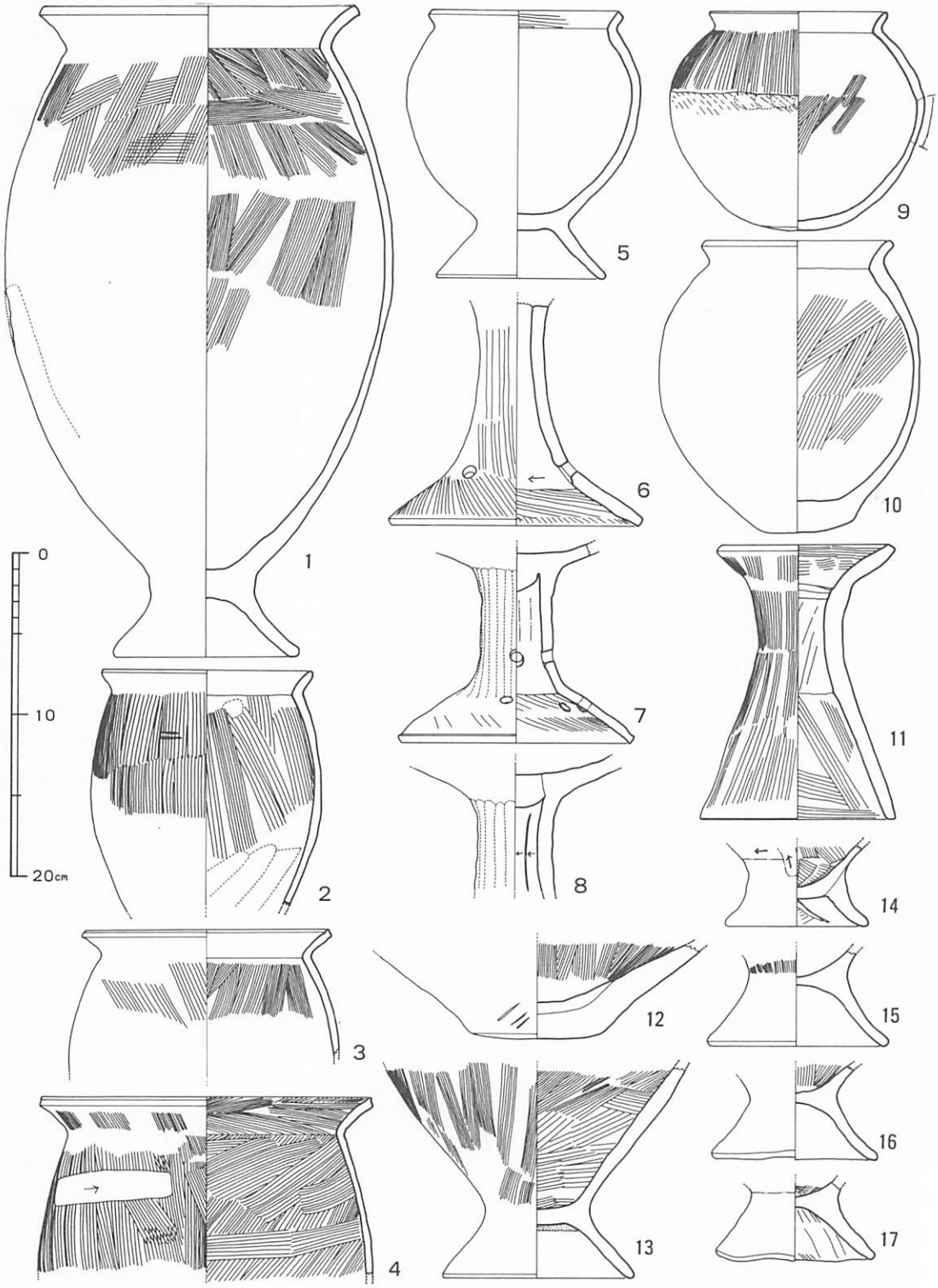
2号溝は、上部幅 2.2m、下部幅 1.7m、深さ70cmの逆台形状を呈し、第4トレンチからの延長は16mに達している。

溝底において、炭化物が集中出土し、炭化木と共に炭化米が稲穂の状態で出土した。また、土器も多く出土している。溝内堆積土は、自然堆積層でオレンヂ色の粘土層と黒色火山灰土層の互層となっている。

遺物・2号溝（図版65－5～8、66－1～5・7・8、67－2～10、第 200～204図）

第5トレンチにおける2号溝の出土遺物は、溝内上位からの出土が大半で、その他、溝底にへばりついた状態で出土したものも、完形の台付甕をはじめとして多くあった。(中村)

溝底出土のものは、第 200図1～17と第 203図64である。1は完形の台付甕で口径18cm、器高40.1cm、胴部最大径は口唇部下16cm前後の位置にあり、約25cmを測る。内外面とも、胴部上半はハケ目を施し、下半はナデている。外面は全面にススの付着が顕著で、内面も煮沸によって真黒に変色している。2は小型の甕で、復元口径12.8cm、胴部最大径14.2cmを測る。口縁部は「く」の字に外反して、短く立ち上がる。胴部の張り出しは少ない。外面上半部はタタキ目をナデ潰したあとハケ目を施し、さらにナデている。内面はハケ目調整である。外面全体及び口縁部内面にススが付着し、良く使い込まれた印象を受ける。内面は下半に少し変色が見られる。3もよく使い込まれており、強い火熱を受けたらしく、外面は赤味を帯びた色調を呈し、ススも付着する。内面には、肩部に焦げつきの斑が見られる。4は、極めて焼成のよい甕である。内外面とも入念にハケ目を施し、肩部外面に一部ハケ目をナデ消した痕が見られる。外面胴部と口縁部にススが付き、内面も部分的に変色している。5は、ほぼ完形である。口径11.5cm弱、器高16.6cm。胴部最大径は、やや上位にあり、14.5cmを測る。口縁部の立ち上がりは短く、端部は丸味のある角を有する。外面にススの付着が著しく、内面は胴部下位から、頸部にかけて部分的な変色が見られる。6は、坏部とは接合部から剝離している。現在高13.6cm、裾部径15.7cm、柱状部は内面ヘラケズリのあと若干ナデており、他の部分はハケ目のあとうすくナデている。裾部上位に、径 0.8cmの円孔を3個穿っている。7は、柱状部下位に4個、裾部に2個一対で6個、合計10個（推定）の円孔を穿っている。8も高坏の破片である。坏部内面の荒れが著しい。9は、ほぼ完形の短頸壺で、口径10.8cm、高さ13.6cm。外面胴部下半はハケ目をヘラケズリしており、その境目に稜ができている。胴部中位に、径 2.5cmの孔があいているが、単なる破損ではなく、故意に穿った可能性もある。2次的な火熱を受けた痕跡を若干残す。10も5及び9と同様の口縁部の特徴を示す甕である。口径11.3cm、器高18cm強、胴部最大径は16.2cmで、ほぼ中位に有する。口縁部は、やや湾曲して短く立ち上がり、端部は丸味のある角をもつ。器壁の厚さには、かなりむらがあり、肩部が厚く胴部中位は薄い。そして、平底となる底部は、最大2cmの厚みをもつ。外面胴部下半は、強い火を受けたらしく赤味を帯び、ススも部分

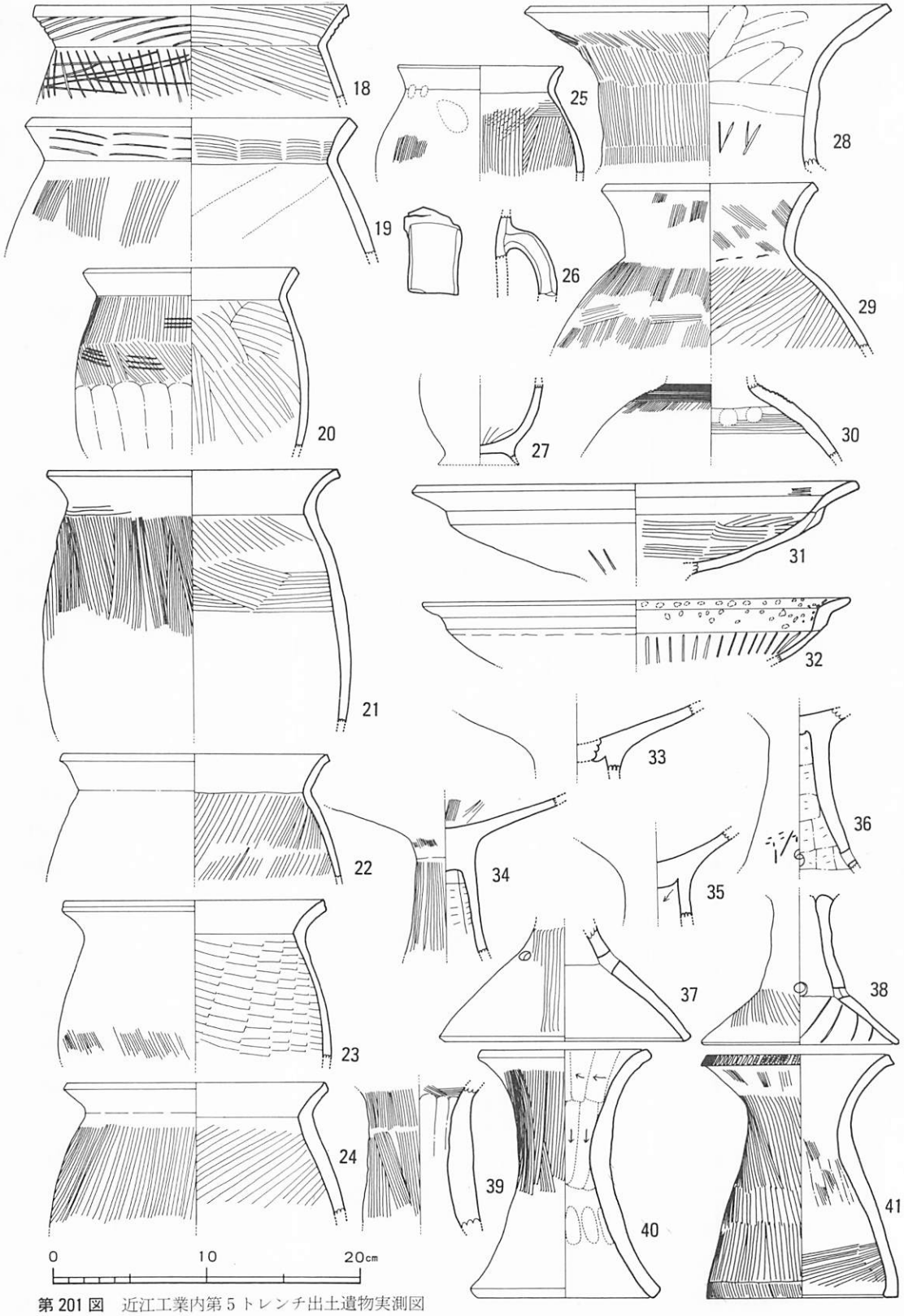


第 200 図　近江工業第 5 トレンチ出土遺物実測図

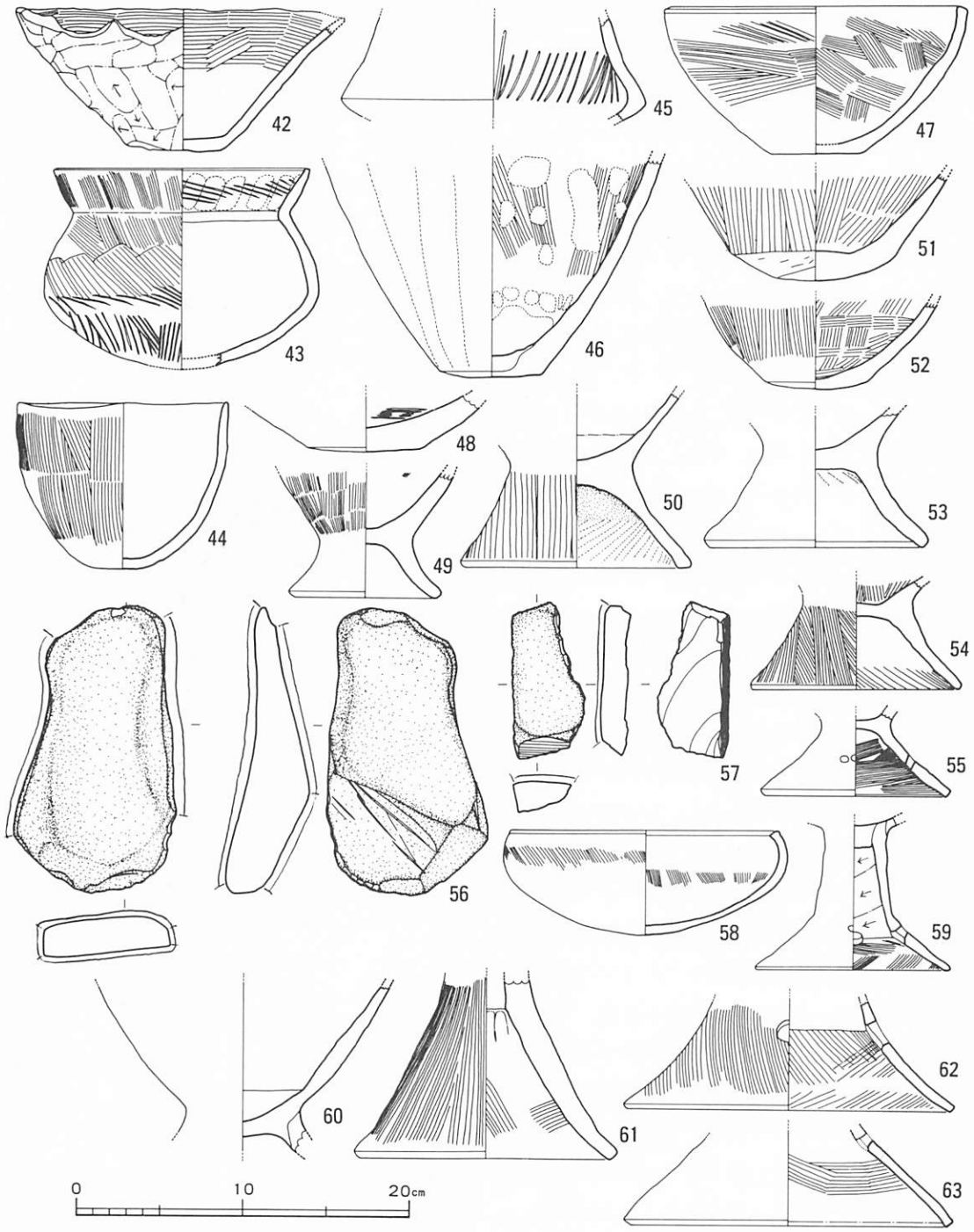
的に付着する。内面には、煮沸時の焦げつきが水平にではなく、斜めに帯状にまわっており、甕を斜めにして火にかけたものと思われる。5も底部にではなく、側面に変色が見られたが、これも脚が付いているにもかかわらず土器を斜めに倒して煮沸の用に供したことを窺わせる。11は、口径10.1cm、器高16.9cmを測る。ほぼ完形の器台である。外面は縦位のハケ目、内面は、受け部が横位、裾部が右下り斜位のハケ目を施し、そのあと薄くナデている。12は壺の底部であろう。底部径 8.1cm、内面に粘土を貼付けて、整形した痕が窺える。
13～17は甕の底部及び脚部である。13は、いわゆる砂付土器で、外面にススが付いている。15は、体部内面に変色が見られる。

第203図—64は手捏の鉢で、口径8.2cm、器高 5.5cmを測る。口縁部に添ってススの付着と変色が見られ、実用に供されたことがわかる。第202図—59は溝底から、約30cm程の中位から出土した。裾部径11.6cm、坏底部までの高さ 8.7cmを測る。裾部上位に径 0.6cmの円孔を4個穿っている。

2号溝内上位から出土した遺物は、第202図—18～40、第203図—42～57、第204図—66～69。
18は口縁部外面にタタキ目が明瞭に残るが、頸部以下はナデて目を潰し、ハケ目を付けている。外面にススの付着を見るが、内面は汚れていない。19も外面にススの付着が著しい。20は、やや小型の甕で、復元口径13.2cm強。タタキ目を潰してハケ目を施している。焼成は極めて良好である。21も外面は、タタキ目→ナデ→ハケ目→ヨコナデの順序で器面調整を行なっている。内面は、ハケ目を施しているが、目の粗いものと、目の細かいものの2種類の工具を使用している。外面にススの付着が顕著であるが、内面の汚れはない。22は、内面肩部に一部焦げつきが見られる。23は内面に目の粗いハケ目を横に小刻みに施している。工具の幅は、かなり広くて、8cm前後あると思われる。外面ススの付着が顕著である。24は口径16.7cm、口縁端部は摘み上げ気味にやや、突出する。内外面ともハケ目調整を行なっているが、外面はそのあと、さらにナデている。外面半面のみ、ススの付着を見る。25は小型の甕の口縁部片である。外面はハケ目をほとんどナデ消しており、頸部肩部は指頭による調整痕が残っている。26は、ジョッキ型土器の把手片で、幅 3.2cm強、厚さ 1.2cm弱を測る。27は小型の台付鉢である。底部に短い脚が付くが端部は欠損している。28は、単純口縁壺の破片で、復元口径23.2cmを測る。口縁部は、ほぼ垂直に立ち上がり、中ほどから大きくラッパ状に開いて口唇部に至る。器壁の厚さは不揃いである。外面は縦位ハケ目、内面はナデて仕上げている。29は復元口径13.4cmの壺である。内外面ともにハケ目のあとナデているが、ハケ目の施文具は内と外では異なる。丁寧な整形である。30は肩部外面に10条の沈線を有する壺で、口縁部と胴部下半を欠く。内面には、頸部をしぼった時にできたと思われる縦じわが残っている。31～38は高坏である。31・32は坏部片で、両者とも体部から2度折れて、口縁部に至る形状を呈す。32は、内面にヘラ描き暗文を施している。34は坏部内面に光沢のある焦げつきが見られる。36は柱状部下位に径0.75cmの円孔4個を、37は裾部のみであるが、径 0.9cmの円孔3個、38は0.75cm×0.55cmの円孔4個をそれぞれ穿っている。39・40は器台で、40は外面上半部にハケ目を施し、受け部内面はハケ目をヨコナデによって消している。胴部の最小径は、ほぼ中位に位置し6cm弱を測る。42は片口で、口径19.3cm、器高 8.5cm強。整形が極めて雑で、口縁部は不揃いで、器壁にもかなり凹凸がある。外面はヘラケズリ、内面はハケ目を施す。外面にススが付着し、底部内面には焦げつきの痕跡を残



第 201 図　近江工業内第 5 トレンチ出土遺物実測図



第 202 図　近江工業内第 5 トレンチ出土遺物実測図

す。43は、復元口径14.8cm、器高12.1cm。外面は 2 種類のハケ目を施し、薄くナデており、内面は口縁部にハケ目が若干残っている。外面にススが付着し、内面は底部中心に変色が見られる。44はほぼ

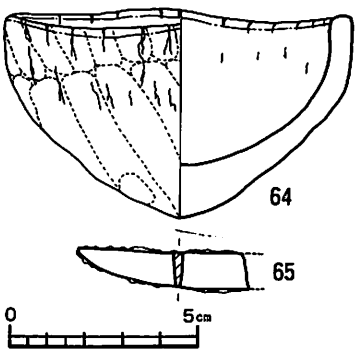
完形で口径12.2cm、器高10cm。底部は径３cm内外の平たい部分をもつが安定は悪い。外面はハケ目で、内面が丁寧なナデ仕上げである。45は器種不明の破片で、最大径は18.3cmを測る。内外面ともヘラ磨きを行なっている。外面の稜の部分より下は、火熱によって変色している。

46は、壺の下半部片である。径６cm弱の平底であり、内側から粘土を詮状に押し込んでいる。外面は、ヘラケズリのあとナデ、内面はハケ目を施す。内壁の剝落が著しい。47は鉢である。復元口径17.1cm、器高 8.8cmを測る。平底で、内外面ともハケ目をナデ消している。48～55は底部及び脚部である。48・52は平底であるが、51は、かなり中心部がふくらんで丸味を帯び、平底と丸底の中間的形態を呈す。48・51には内面に変色と焦げつきの痕跡が見られる。50は裾部径13.8cmのかなり大型の脚台で、内面に砂粒が付着する。55は、径0.5cmの円孔を２個一対で穿っている。

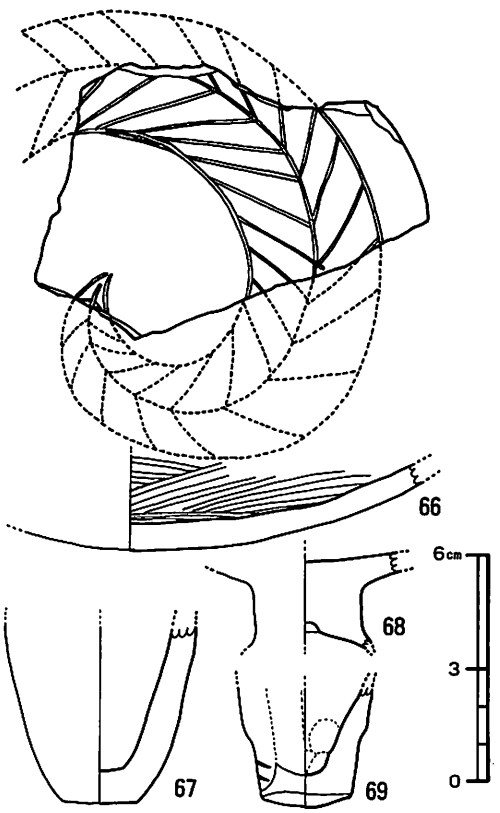
56・57は砥石である。56が陶石製。57がアルコーズ質砂岩製である。56は主要磨面２面と側面２面の計４面の磨面を持ち、非常に良く使い込まれている。特に上下の２面は光沢がある。また、数条の擦条痕が見られる。57は破片で、側面も若干磨られた痕がある。

66は、器面に羽状文を施した土器である。文様は、３本の沈線が右回りで、中心部に向かうラセン状を呈し、中心部で接している。その３本の沈線の中に、沈線による羽状文を施している。沈線はヘラ状器具によるものと判断され、器種は不明であるが、底部近くになるものと思われる。胎土に砂粒を多く含み、外面はナデ調整、内面はハケ目を施し、焼き締まった土器である。

67・68・69はミニチュア土製品である。67は、現存高 4.8cm、底部径 1.9cm。68は、高坏の模造品であろう。脚端部は欠損するが、ほとんど開かないものと思われる。坏部内面はヘラ磨きを施している。69は底部径 2.4cm、内面に指圧痕が残る。

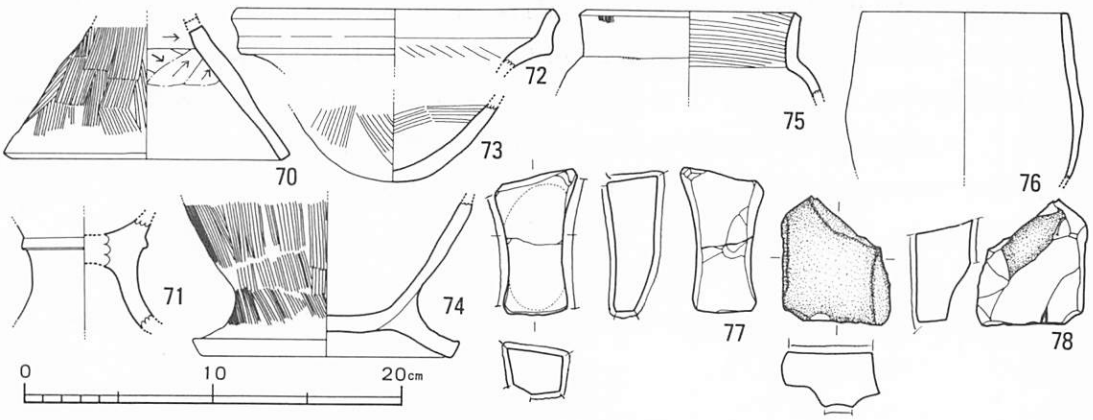


第203図　近江工業内第５トレンチ出土遺物実測図



第204図　近江工業内第５トレンチ出土遺物実測図

(2)　その他の遺物　(図版66－6・9、67－1、第201図―41、202図―17～22、203図―65、205、206図)



第 205 図　近江工業内第５トレンチ出土遺物実測図

第５トレンチにおいても住居跡の床面と思われる遺構が確認されたが、第202図―41、第201図―62、63は、その床面に伴う遺物である。

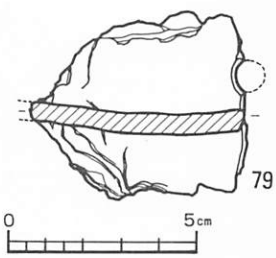
41は、大変均整のとれた形をした器台である。口縁部径11.7cm、裾部径12.3cm、器高16cmを測る。胴部の最小径 6.7cmで、口縁端部から 4.5cmに位置する。内外面ともハケ目を施しているが、内面では、ほとんどナデ消している。整形の段階で胴部をしぼり込んだ時の皺が内面に残るが、ハケ目がこのシワに取り込まれたようになっている。また、くびれ部の外面にはハケ目がきれいに施され、力をいれてしぼり込んだような痕跡をとどめない。つまり、内面くびれ部にハケ目を施したのちにしぼり込み、その後内面はナデ、外面はハケ目によって調整を行なったものと思われる。

62・63は高坏の脚部片である。62はラッパ状に開くが、63は先端部近くで、やや内湾する。62の円孔は大きく、径 1.5cm強を測る。

以上の他、遺構に伴なわないで出土した遺物がいくつかある。

58は完形の鉢で、口径14.9cm、器高 6.3cm。胎土精良で、整形も丁寧に行なっており、焼成も良好である。２号溝上23cmの位置より、水平に座った状態で出土した。

外面口縁部付近にススが付着し光沢がある。内面にも変色が見られる。60は甕の底部で、脚は接合部から破損している。脚部内面に砂粒の付着を見る。61は、器台の破片である。ラッパ状に開く裾部をもち、その端部径は15.8cmを測る。外面上半部にススが付着する。65は、刀子で茎部を欠く。現存長 4.4cm、幅0.85cm、重さ 2.5ｇである。70は高坏の裾部片で、円孔を有していた痕が窺える。71は、甕の底部であろう。断面三角形の突帯を有する。72は、復合口縁壺の口縁部片で、復元口径16.6cm。73は、長胴丸底甕の底部であろう。良く使い込まれており、外面は全面にススが付着し、内面も底部の中心部を焦げつきと変色帯が取り巻いている。74は台付鉢で、脚端部径は14.2cm、底部までの高さ 1.4cmと極めて扁



第 206 図　近江工業内第５トレンチ出土鉄器実測図

平で短い脚である。体部外面と脚部内面にススの付着と変色が見られる。75は復元口径11cm強、口縁部内面に一部ススが付いている。76は復元口径10.2cmの薄手の鉢で、器面調整はナデてある。
77・78は砥石である。77は陶石製で、不整六面体の全ての面が使用されている。78はアルコーズ質砂岩製で、主要な使用面は、光を受ければきらきら反射する程に光沢がある。
79は、器種不明の鉄製品の破片で、円孔の痕跡らしき部分を有する。

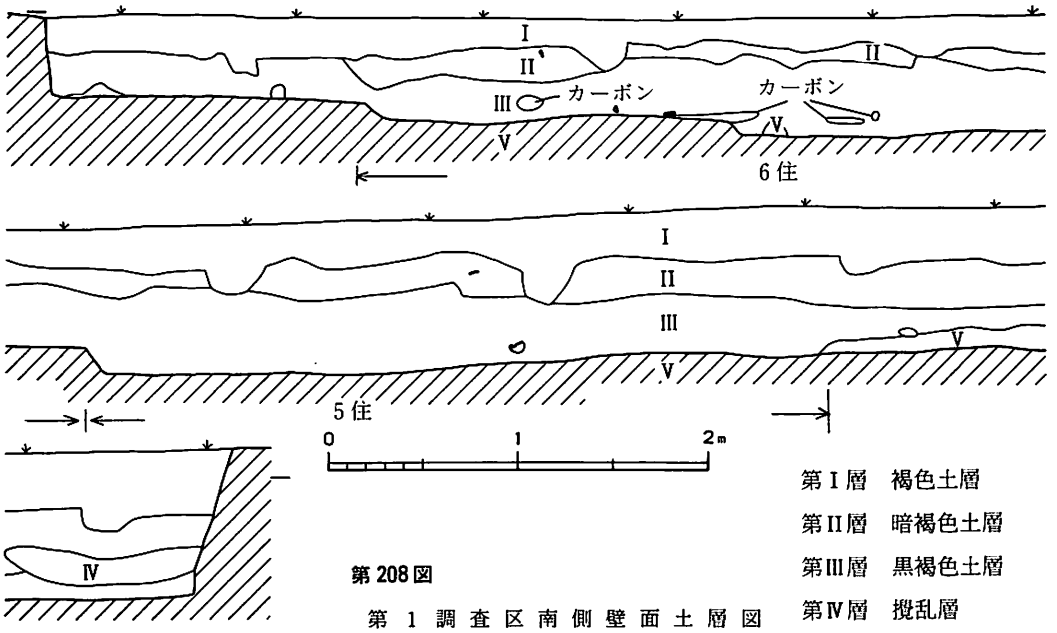
第6章　第Ⅳ次調査

第Ⅳ次調査の目的が、遺跡中心部における遺構の集中度調査であるために、調査区の設定は第Ⅲ次調査の成果を踏まえた上で、第Ⅰ・第Ⅱ次調査区の北側約40mの地点に10m×10mの調査区を設定し、さらに、北東部と南西部両端は遺構及び、遺物の出土状態から一部拡張した。遺構の検出にあたっては、層位の識別が不明確なために非常に困難を極めたが、8基の竪穴住居跡を確認した。

また、調査区北東部では7m×5mに及ぶ土器溜めと、住居跡1基を確認したが、この住居跡は土器溜め中の断面での検出であるため、規模等については一切不明である（図版69）。なお、住居跡番号は掘り始めた順で付した。（倉原）



第207図　Ⅳ次調査区遺構配置図



第208図

第１調査区南側壁面土層図

第Ⅰ層　褐色土層
第Ⅱ層　暗褐色土層
第Ⅲ層　黒褐色土層
第Ⅳ層　撹乱層
第Ⅴ層　黄褐色粘質土層

層　序

調査区の層序は、火山灰土層のため色調の変化が漸次的で、層位を判別するのに困難をきわめた。しかし、大きく４層に分れ、ブロック状の層位を認めることができる。

第Ⅰ層は畑地耕作層で、土器の細片を多く含んでいる。

第Ⅱ層は第Ⅰ層よりわずかに黒色を帯びる層である。土師器、須恵器を主として包含し古墳時代以降に属する。

第Ⅲ層は第Ⅱ層よりさらに黒色を帯びる層位である。弥生時代後期から古墳時代前期にわたった遺物を包含する。

第Ⅳ層はブロック状に堆積した層である。

第Ⅴ層は地山層で住居跡の多くは、床面がこの層に掘り込まれている。

遺構と遺物

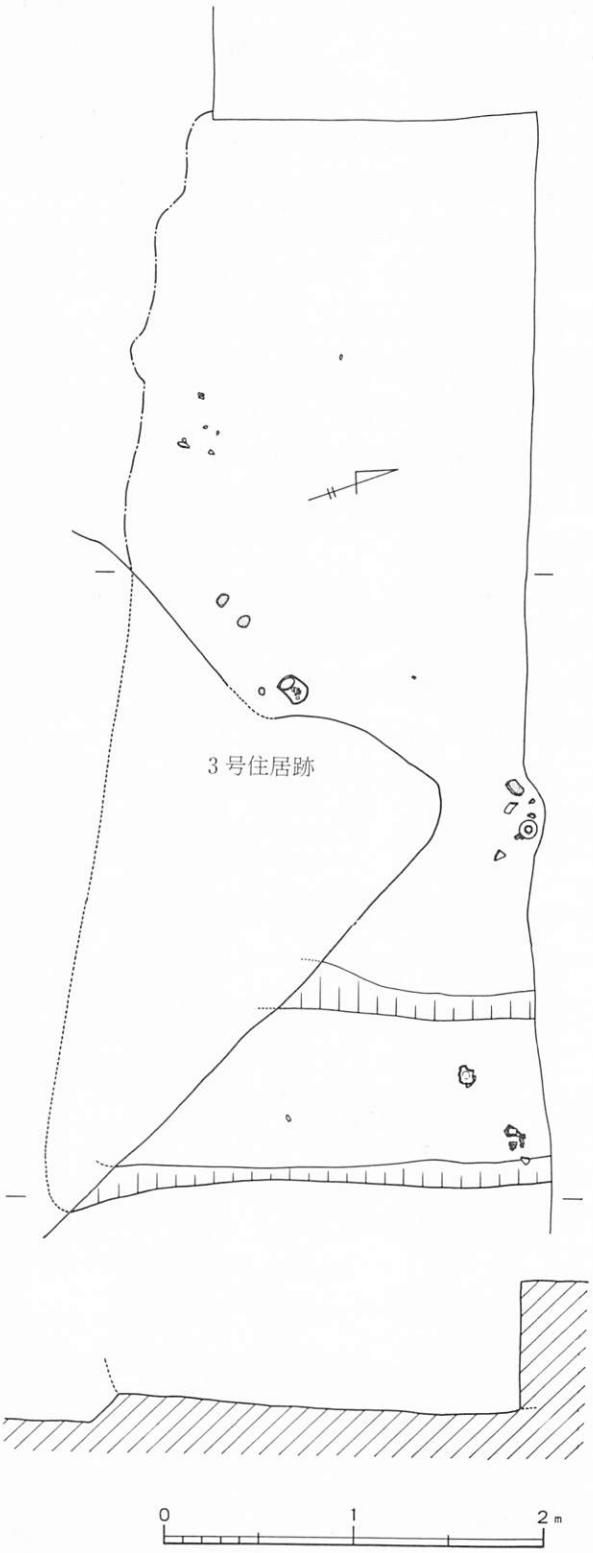
1　1号住居跡（図版70－1、第209図）

調査区東北端に位置し、長軸をN－68°－Wにとる。住居跡の北側および西側は、調査区外へはずれる。南側の壁は残らず、床面の残存範囲から見て、２号住居跡を切っていることがわかる。また、逆に３号住居跡には、切られる関係にある。東端にベッド状遺構が残存している。

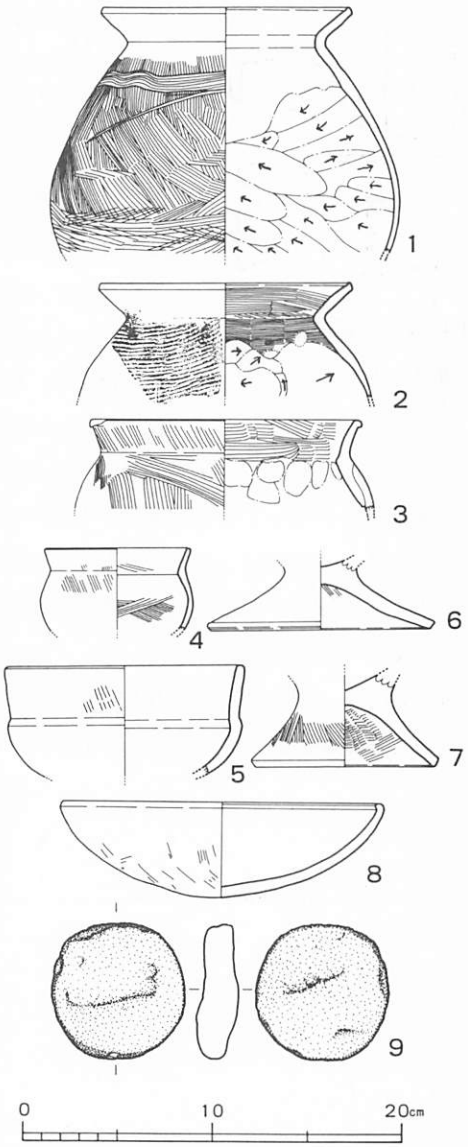
遺物（図版76－3、77－1、79－8、第210・211図）

遺物は、床面密着のものはなく、床面より15cm～20cm前後の位置で出土している。

１は、胴部下半を欠失する甕で、口径12.9cmを測り、最大径は18.4cmで、胴部中位に有している。外反した口縁部は、先端で若干摘み上げられている。肩部の形状は直線的で、いわゆるなで肩である。外面は、ハケ目調整で、肩部にゆるやかな波状文を施し、また、鋭いヘラ状器具による沈線を

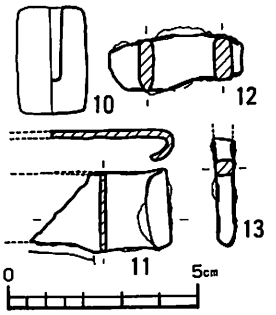


第209図　1号住居跡実測図



第210図　1号住居跡出土遺物実測図

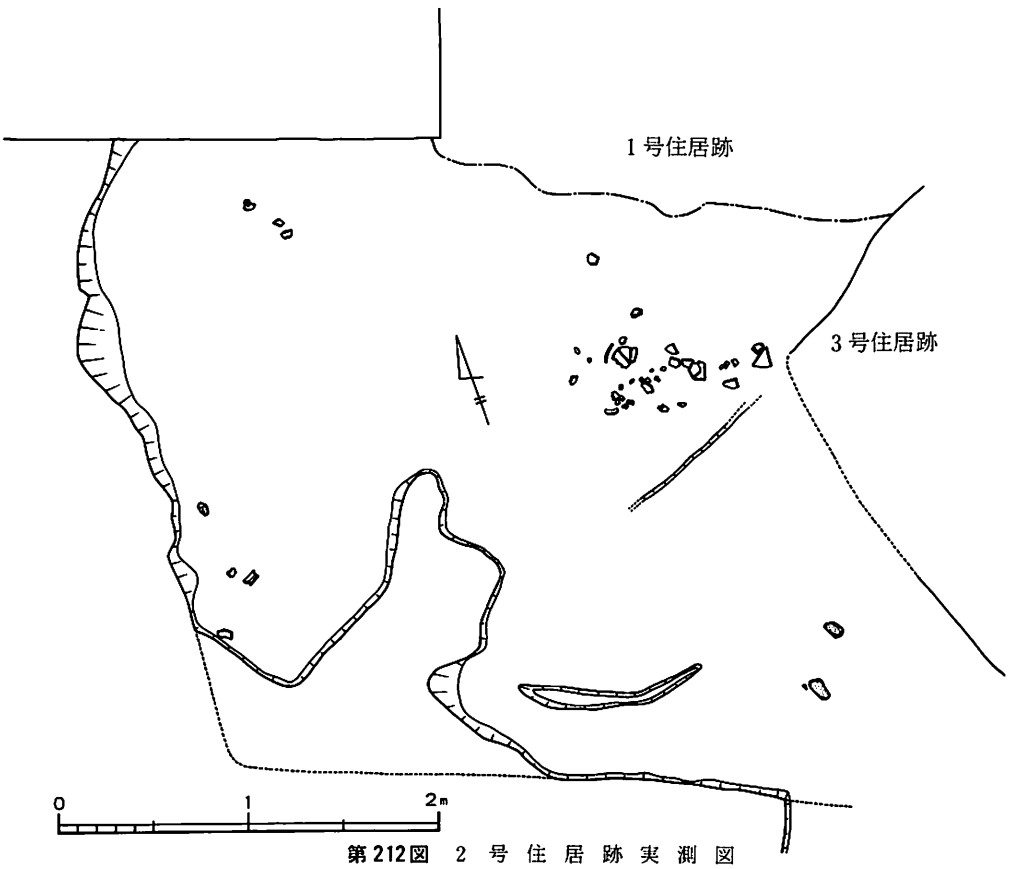
有する。内面は、口縁、頸部がヨコナデで、胴部がヘラケズリ仕上げである。外面に、ススの付着が著しい。2は、甕の口縁部から肩部にかけての破片で、復元口径13cmを測る。口縁部は、鋭く外反し口縁部先端を摘み上げている。外面はタタキ目で、内面は口縁部をハケ目のあとナデて、肩部は、横のハケ目、胴部は方向の不規則なヘラケズリである。3は、鉢の破片で、復元口径



第211図　1号住居跡出土遺物実測図

13.9cm。全体的に仕上げが雑で、口縁部が外側にめくれたり、内面で粘土ひもの接合部が段をなしていたりする。器面調整は、外面が粗いハケ目。内面は、口縁部が横方向のハケ目で、肩部は、指頭による調整を施している。4は、小型の鉢の破片で、復元口径 7.7cm程である。口縁部は、ゆるく外反して立ち上がり、口縁端部は丸くナデられ、わずかに平坦な面をもつ。内外面ともにハケ目のあと、ナデ調整である。5も鉢で、復元口径12.7cm。内外面ともにヨコナデで、外面口縁部にハケ目の痕跡を残す。6は脚台で、裾部径は12cmを測る。ヨコナデ仕上げである。7は甕の脚部で、裾部の径は10cm弱。内外面ともにハケ目とナデの仕上げを施す。8は鉢で、復元口径17cm。口唇部は、内側に向って摘まれ、突出している。外面は、ハケ目のあとヘラ磨きとナデ調整を施す。内面もヘラとナデによる仕上げで、丁寧な作りとなっている。9は、石錘かと思われる。直径7cm強のほぼ正円形を呈し、石材は、安山岩である。凹部は、それ程判然とせず、一部ススが付着する。

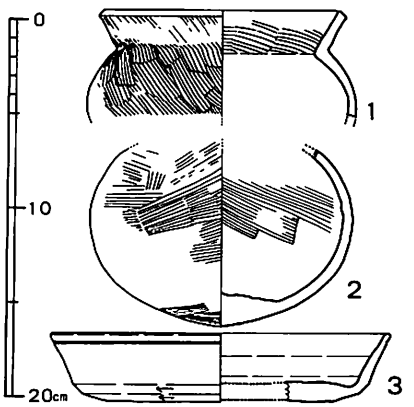
10は、円筒形の用途不明の土製品である。直径 1.9cm、高さ2.8cmを測り、一方の端から、径0.6cm、深さ 1.9cmの孔を穿っている。11は手鎌で、片側を欠く。現存長 3.6cm、幅2cm、厚さ0.19cm、重さ 4.7g、刃部に研ぎ減りが顕著に見られる。12は、器種不明の鉄器で重さ 5.4g。13も、不明鉄器であるが、鉄鏃の茎部の可能性が強い。重さ 1.6g。



第212図　2号住居跡実測図

2　2号住居跡（図版70－1、第212図）

調査区西北端に位置し、長軸はN－65°－W。西側壁は、北へのびて調査区を出る。北側を1号住居跡に、東側を3号住居跡に各々切られている。南西隅にベッド状遺構がいびつな形で残存する。プランとしては不明瞭であるが、床面の状態は良好で、堅くしまっていた。



第213図　2号住居跡出土遺物実測図

遺物（第213図）

住居跡の中央部より、集中的に出土した。出土位置は床面密着か、床面より15cm程度である。

1は、鉢の破片で、復元口径13cm程である。口縁端部外側が摘まれて、やや突出している。外面は斜位のハケ目を施し、内面はハケ目とナデによる調整である。2は、口縁部を欠く壺で、底部がやや尖り気味の扁球形を呈す。胴部の復元最大径は14cm弱。外面はハケ目のあとナデ、内面は、全体にナデで、中位に規則的な斜位のハケ目を施す。底部が、内側へ肥厚し、指頭による調整を行なっている。外面下半には、2次焼成によるススの付着が顕著である。3は、土師器の坏の破片で、復元口径18cm弱である。焼成が非常に良好で、須恵器に似た質感がある。口縁部に一条の沈線を有し底部は横位のヘラケズリである。

3　3号住居跡（図版70、第214図）

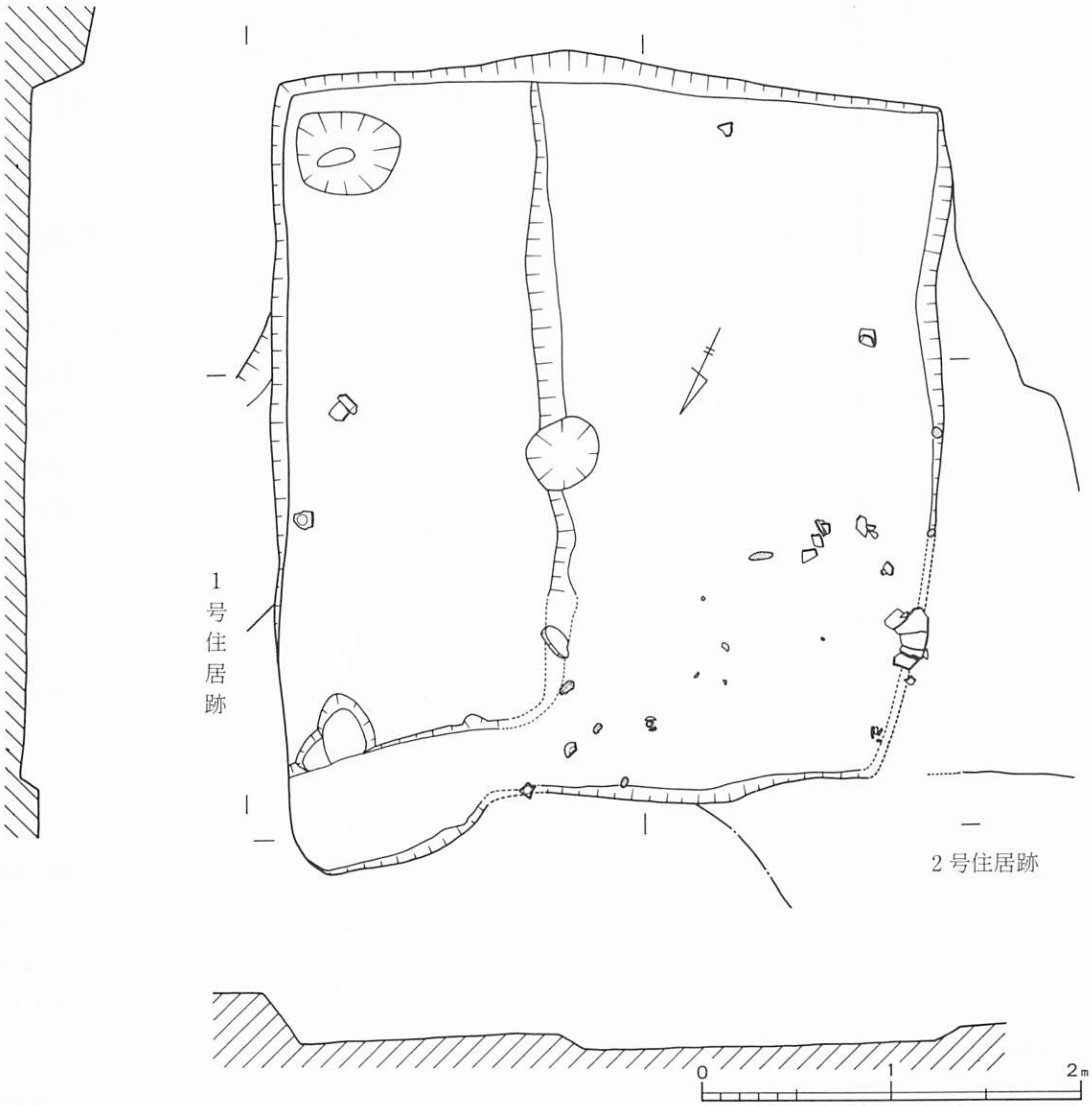
調査区の東北、1号住居跡の南側に位置し、長軸をN－23°－Wにとる。平面プランは、長辺3.89m短辺3.52mの長方形を呈す。東壁に接して、幅1.46m、長さ3.43m、床面からの高さ8cmのベッド状遺構を有している。1号住居跡及び2号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が三つのうちでは、最も新しい。床面の状態は、非常に堅くしまっており、一部には朱、もしくは丹の集塊が見られた。

遺物（図版77－2・3・5～7、79－4・11、第215～217図）

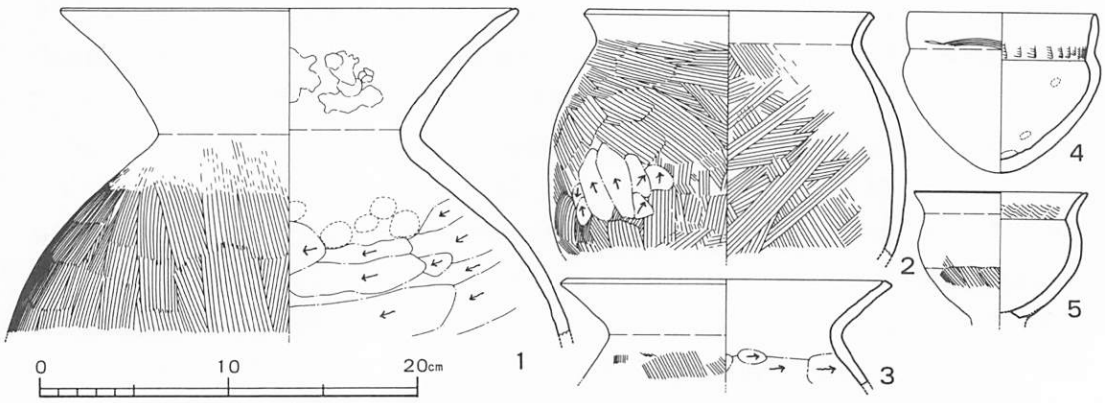
床面に密着して出土した遺物は少なく、床面より12cm～15cm前後、あるいは、それ以上の位置からの出土がほとんどである。

1は、壺で下半を欠失する。復元口径は24cm、頸部径は14cm弱。口縁部は、外湾して立ち上がり、口唇部は丸くおさまっている。外面胴部にハケ目、内面は横位のヘラケズリである。器壁内面の剝落が著しい。2は、復元口径15.3cmの甕である。雲母を多く含む胎土で、焼成は良く堅くしまっている。口縁部の立ち上がりは短い。胴部のハケ目は横位、斜位、縦位と三つに区分できる。また、一部にヘラケズリが見られる。内面は口縁部をナデ、胴部はハケ目を斜め方向に交差状に施す。

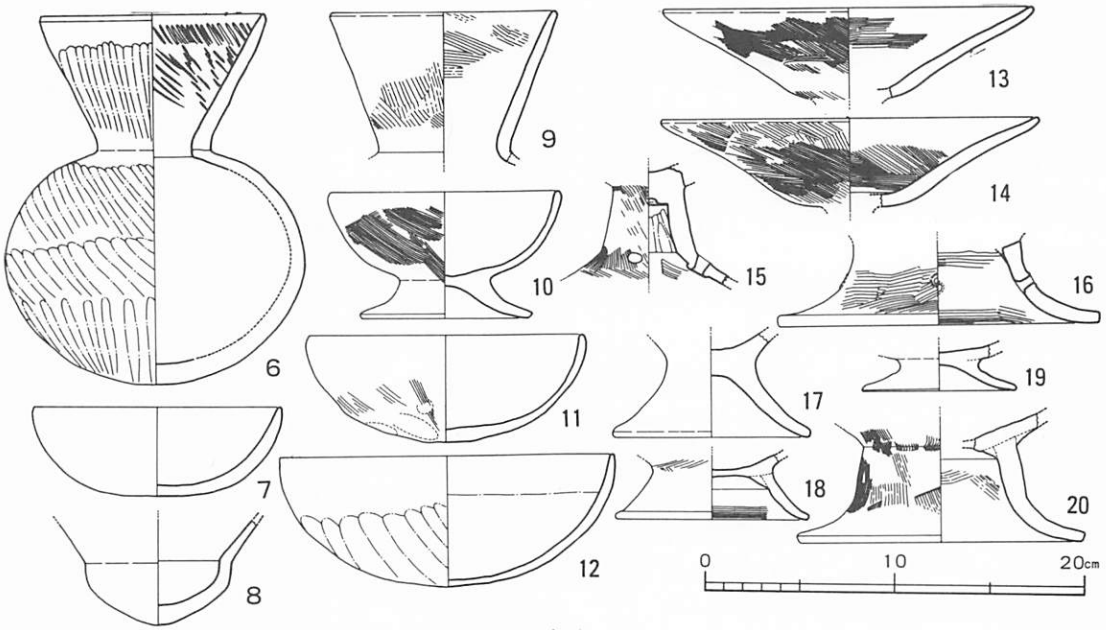
3は、甕の口縁部片で、復元口径17.4cm、口縁端部は丸味のある角を有す。外面肩部にハケ目が見え、内面は横位のヘラケズリで仕上げている。4は、小型の鉢で、復元口径 9.8cm。底部は尖り気味の丸底で内外ともにナデ調整であるが、内面頸部に小刻みなハケ目を施している。5は、台付鉢の破片で、復元口径 9.2cm。外面は、ナデと若干のハケ目を施し、内面口縁部にハネ上げたようなハケ目があり、胴部は縦位のヘラ磨きである。また、脚台を取付けた痕跡がうかがえる。



第214図　3 号 住 居 跡 実 測 図



第215図　3 号 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

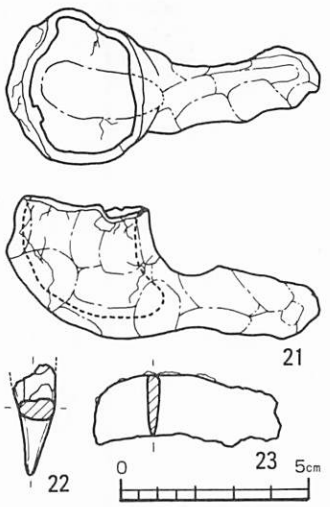


第216図　3号住居跡出土遺物実測図

6は、完形の壺である。口径11.8cm、器高19.5cm、胴部最大径15.9cmを測る。胴部は扁球形を呈す。外面は全面ヘラ磨き、内面は口縁部がハケ目のあとヘラ磨きで、胴部はナデである。

7は、鉢の完形品である。口径13.2cm、器高 4.7cm、内外面ともにヘラとナデの調整を行っている。8は、小型の鉢で、口縁部を欠く。外面は横位の、内面は縦位のヘラ磨きである。9は、壺で、胴部を欠損する。復元口径12cm弱。焼成は極めて良好で、内外面ともハケ目のあと、ヨコナデ仕上げである。10は、台付の鉢で口径12.4cm、器高 6.7cm。口縁部は、やや肥厚し、先端は丸くなる。内外ともにナデ調整であるが、粗雑で、外面はかなり凹凸がある。11は鉢で、口径14.5cm、高さ 5.6cm、全体にナデ調整で、外面底部に指頭痕が残り、ススが付着して光沢がある。12も完形の鉢で、口径17.7cm、高さ 6.9cmを測る。内外面ともに口縁部はヨコナデ、下部はヘラケズリで仕上げているが、やや雑で器形がいびつである。13は、床面から出土した高坏の破片で、復元口径19.6cm。外面は、ハケ目のあと、ナデとヘラ磨き、内面は横方向のハケ目のあとナデて、基部付近でヘラ磨きしさらに、暗文状のヘラ調整を行っている。14も、13と同じく高坏の破片で、口径も13とほぼ同じで、約20cmを測る。外面は、斜方向に引き上げたハケ目のあとをうすくナデて、内面は、下半がハケ目、上半はヘラとナデの調整である。13より明るく、赤味を帯びた色調を呈す。15は、高坏の脚部で、現存高 6.3cm、裾部に径 0.8cmの円孔3個を穿孔している。坏部は、接合部から剝離しており、坏底はヘラ磨きである。外面、柱状部上端と裾部にハケ目を施し、内面の柱状部は、ヘラケズリ、裾部はハケ目のあとナデられている。堅く焼き締まっている。16は、脚台の破片で、体部とは接合部で剝離する。裾部に径 0.4cmの円孔を穿っている。内外面とも、ハケ目のあとナデて仕上げている。17は、甕形土器の脚部である。内外ともにナデ仕上げ。18も、脚台で外面及び底部内面は丹念にヘラ磨きを施し、脚の内面は、横のハケ目のあとナデている。19は、扁平な脚台で床面より出土した。底部内面に放射状にヘラ描き暗文を施している。20も、脚台の破片で裾部径15cm弱を測

る。外面は、おおむね縦位のハケ目で、部分的にヨコナデをしている。内面は、ヨコナデ。21は、完形の土製柄杓（ひしゃく）である。長さ 8.3cm、高さ 3.8cm強、口径は長径 4.1cm、短径 3.2cm手捏で作られ、一部にハケ目を施している。22、23は、器種不明の鉄器で、重さは、22が 2.9ｇ、23が 8.4ｇである。



第 217 図　3 号住居跡出土遺物実測図

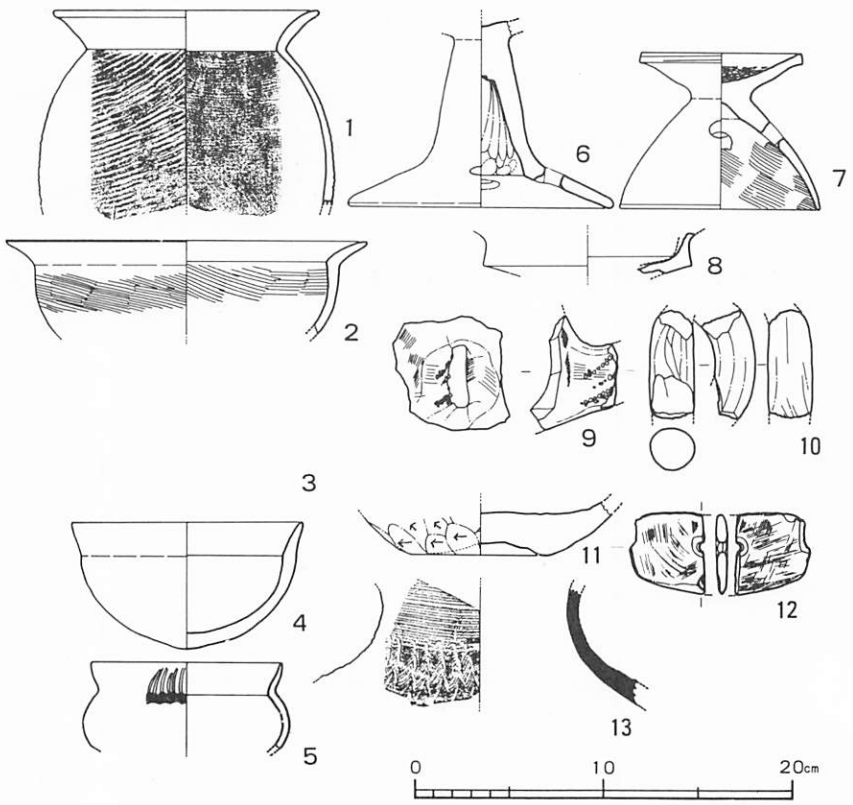
4　4号住居跡（図版71－1、第219図）

調査区南側のほぼ中央に位置する。東西に長い不整長方形を呈し、長軸をＮ－83°－Ｗにとる。長辺、短辺は各々 4.8m、3.88mを測る。北壁及び東壁に接して、幅１ｍ前後の溝がめぐっている。焼土は、住居の西半部に帯状に散布し、床面に密着している。６号、７号、８号住居跡と重複関係にあり、本住居跡がこの中では、最も新しいものである。

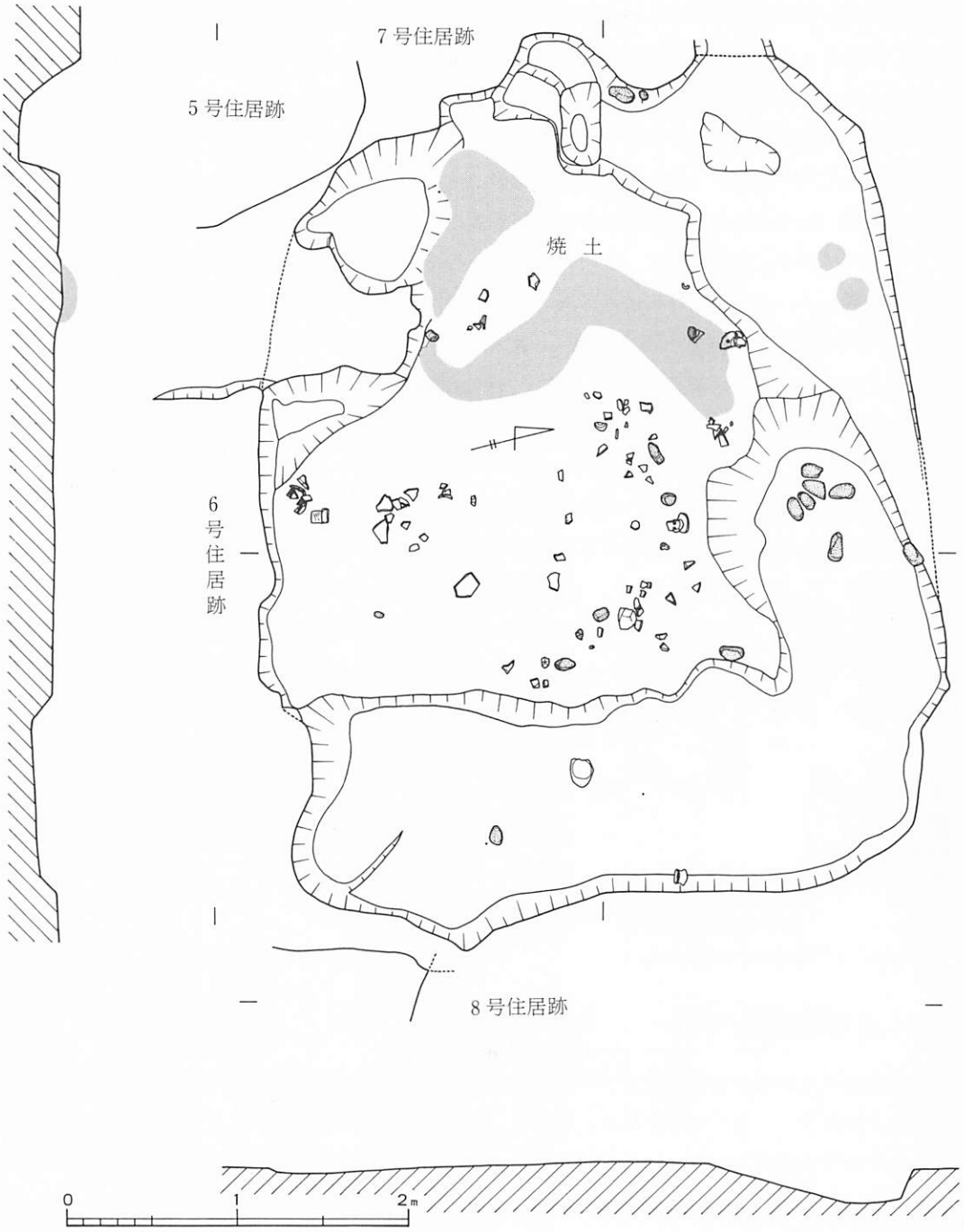
遺物（図版76－３、78－１～５、79－15、第 218・220図）

ほとんどが、床面密着か、あるいは床面より５cm～10cmの位置で出土した。鉄鏃２点も床面よりの出土である。

1は、胴部下半を欠く甕で、床面より出土した口径14cmを測る。口縁部は、外湾して広がり口唇部は、丸味をもっておさまる。胴部は球形を呈し、外面は斜位のタタキ目、内面は横位のハケ目で、下部をヘラでケズリ上げている。２も、床面出土の破片で、復元口径19cm強。内外面ともハケ目のあとナデ



第 218 図　4 号住居跡出土遺物実測図



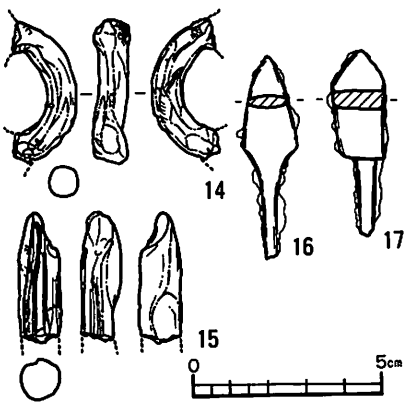
第219図 4号住居跡実測図

仕上げである。3は、完形の鉢で、口径16cm、器高 7.5cm強を測り、ほぼ半球形を呈す。内外面ともハケ目を施し、口縁部のみナデている。内面はそのあと、ヘラ描き暗文を施す。また、内面口縁部に赤色顔料を塗布した痕跡がうかがえる。外面はススの付着が全面に及んでいる。

4は、ほぼ完形の鉢で、口径12.3cm、器高 6.8cm。内面は、丁寧にヘラ磨きを施している。

5も鉢の破片で、復元口径10cm。口縁部は、口唇部近くで少し内湾している。外面口縁部にヘラ描き暗文、肩部にクシ描き波状文を施す。6は、床面より出土した高坏で坏部を欠く。裾部径14cm、柱状部最小径は 2.9cmを測る。裾部に、径 1.1cmの円孔を4個穿孔している。外面は、柱状部が横位のヘラ磨き、裾部はヨコナデである。内面は、柱状部が指頭による調整で、裾部は横にナデている。坏底部は、ヘラ磨き。7は、床面から6cm程上位で出土した器台である。口径 8.3cm、裾部径10.6cm、器高8.2cmを測る。受部内面及び、脚部外面はヘラ磨き、脚部内面はハケ目のあと、うすくナデて仕上げている。脚部上位に、径 1.1cmの円孔を推定4個穿孔している。受部内面中央部分の器壁剝落が著しい。8は、高坏の破片であろう。内外面とも、丁寧なヘラ磨きを行なっている。

9は、不明土製品で何かの把手を思わせる。刺突文が、三条斜方向に連なる。若干ハケ目が残るがほとんど、指頭によるナデ調整である。10も、不明土製品で床面より4cmのところで出土した。現存長 5.7cm、断面径は 2.2cm。両端を欠損するが湾曲しており、把手の一種と思われる。11は、器面調整の粗い底部であるが、モミの圧痕かと思われる個所がある。床面出土である。12は、石庖丁で約3分の2を欠く。高さ 4.3cm、厚さ 0.6cm、重さ14.5gである。13は、須恵器の壺の破片で、頸部にクシ目状の条線を施し、肩部に2段に渡る波状文をクシ描きしている。色調は、赤味を帯び土師器に似る。14は、手捏の不明土製品であるが、明らかに把手と思われる。現存長 3.8cm、断面径 0.8cm弱を測る。床面より出土した。15も手捏土製品で、断面径1cm強。数本の条線を有す。床面より出土した。16と17は、鉄鏃である。16は放物線を描いた身部が内湾して茎部に続き、その境目は、はっきりしない。身部断面は、扁平な両丸形を呈す。17は、身部が三角形状の刀先から、直線的にのびて、関をつくり、茎部は片側にずれている。身部の厚さは、0.5cmを測る。



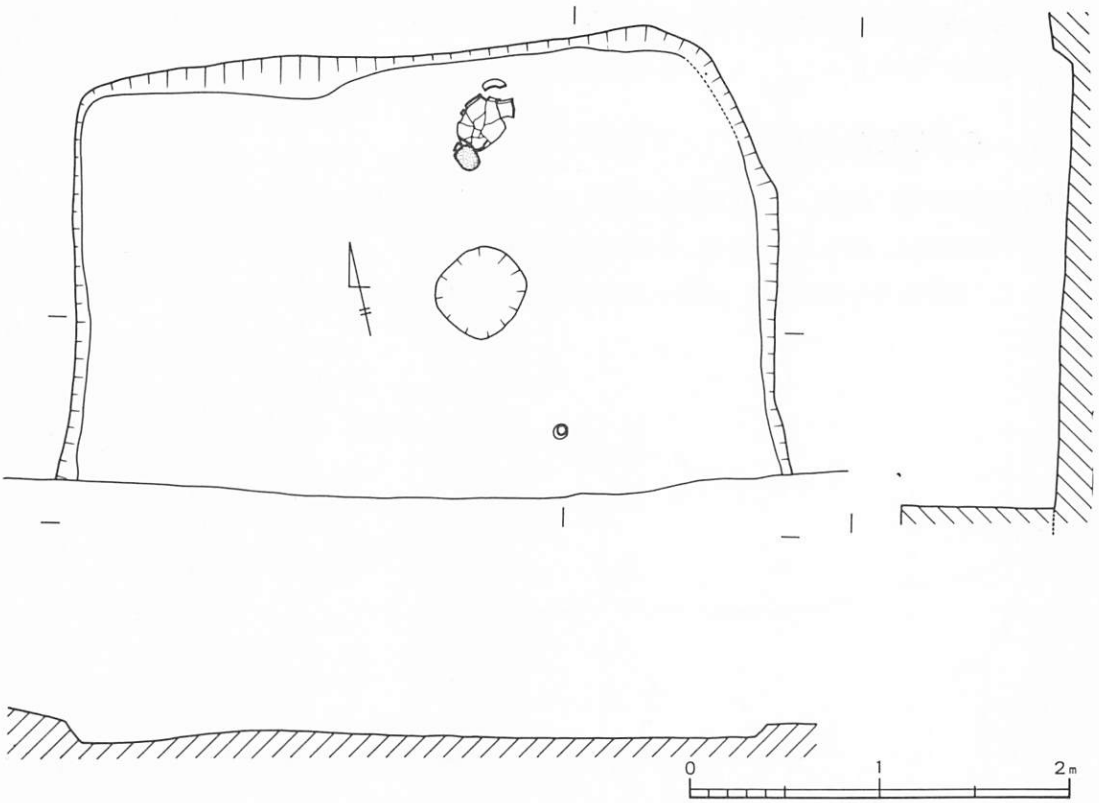
第220図 4号住居跡出土遺物実測図

5 5号住居跡（図版71—2、第221図）

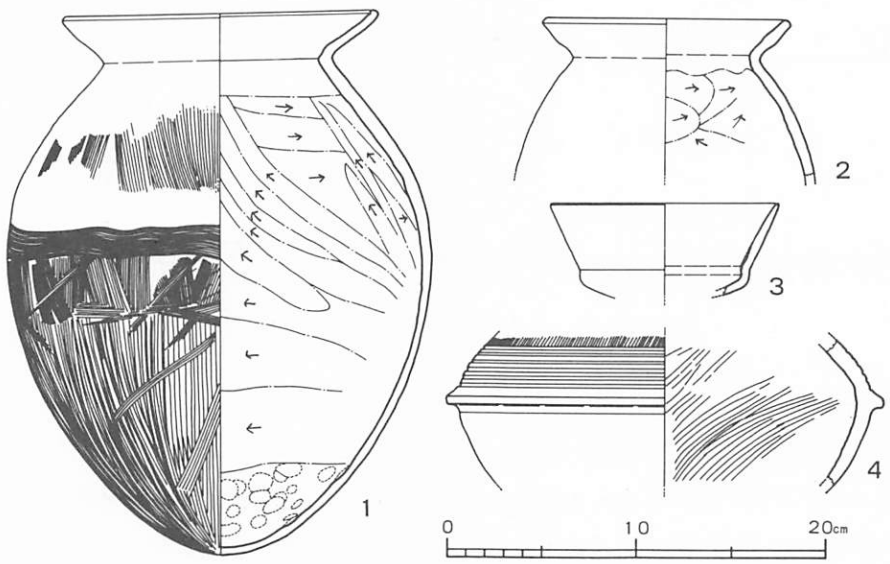
調査区南西端に位置する住居跡で、南側は調査区外へ広がる。長軸をN－10°－Eにとり、南北に長い隅丸方形プランになると思われる。床面は、北西隅に向けて若干傾斜し、検出範囲の中央部東寄りにレンズ状の炉をもつ。ベッド状遺構はない。東側で、6号住居跡と北側で7号住居跡と切り合い関係にあり、本住居跡の方が新しい。

遺物（図版78－6、第 222図）

床面に密着する遺物はなく、完形の甕（第 221図—1）は、床面より約15cmの位置から出土した。1は、完形の甕で、口径16.5cm、器高28.7cm、胴部最大径22.6cmを測る。「く」の字に外反した口縁部は、内湾して口唇部に連なり、内側を摘み上げられている。胴部は、きれいな倒卵形を呈している。外面は、ハケ目とナデ仕上げ、内面は斜位のヘラケズリ、底部は指頭による調整を行なっている。外面下半に、ススの付着が著しい。2は、甕の破片で、復元口径12.5cm。口唇部は、丸味の



第221図　5号住居跡実測図



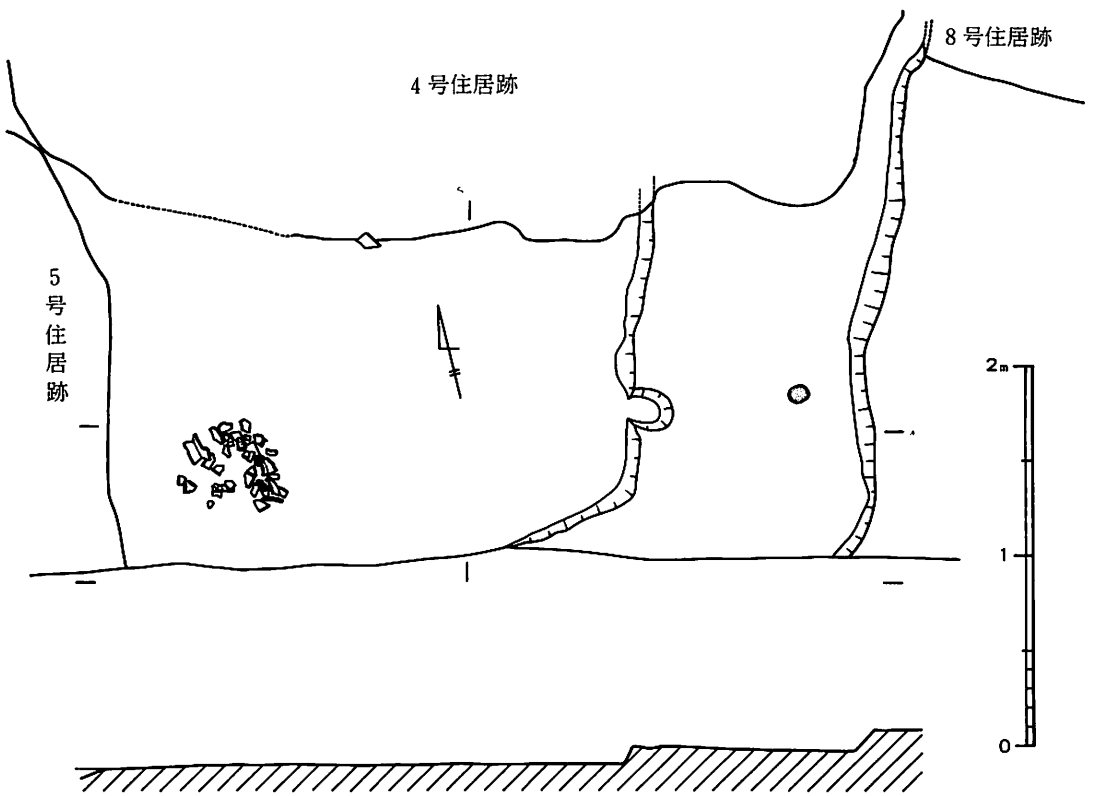
第222図　5号住居跡出土遺物実測図

ある角をもつ。外面はヨコナデ、内面は口縁部がナデ、胴部はヘラケズリである。3は、鉢の破片で復元口径11.8cm。内外面ともナデ調整。器壁の剝落がはなはだしい。4は、壺胴部の破片で、復

元最大径23cm強を測る。肩部に6条の沈線、胴部に一条のはりつけの突帯を有す。内面は、目の粗いハケ目仕上げである。

6　6号住居跡（図版72—1、第223図）

調査区の東南端に位置し、南側は調査区外へもう少しのびると思われる。東壁に接して、存在するベッド状遺構は、幅 1.1m内外で、床面よりの高さ9cmを測り、南側でL字状に曲折するものと思われる。北側を4号住居跡に、西側を5号住居跡に各々切られており、全体のプランは、確認できない。

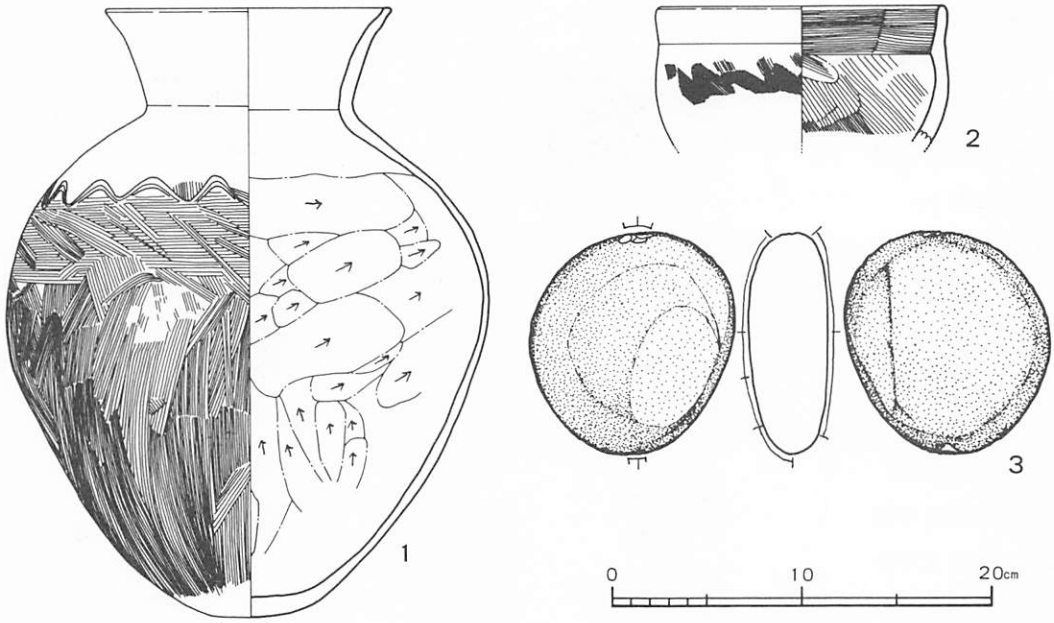


第223図　6 号 住 居 跡 実 測 図

遺物（図版78－7、第 224図）

遺物は、検出範囲の南西端より床面に密着して集中的に出土した。

1は、完形の壺形土器で口径14.3cm、器高32.1cm、胴部最大径25.5cm。口縁部は外湾し、口唇部は丸味のある角を有し、平坦面は、ほぼ水平である。外面は、口縁部から肩部にかけて横ナデ調整し、クシ描きの波状文を有す。胴部は、ハケ目を施す。内面は口縁部から、肩にかけてナデ、胴部はヘラケズリ仕上げである。2は、鉢形土器の破片で、復元口径14.3cm。頸部は、ほとんどくびれず、口縁部が立ち上がる。胴部も脹らまずに下に流れる。外面肩部に目の細かいハケ目を施し、内面口縁部は横位のハケ目、胴部は、斜方向へ引き上げたハケ目である。3は、ベッド状遺構上より出土

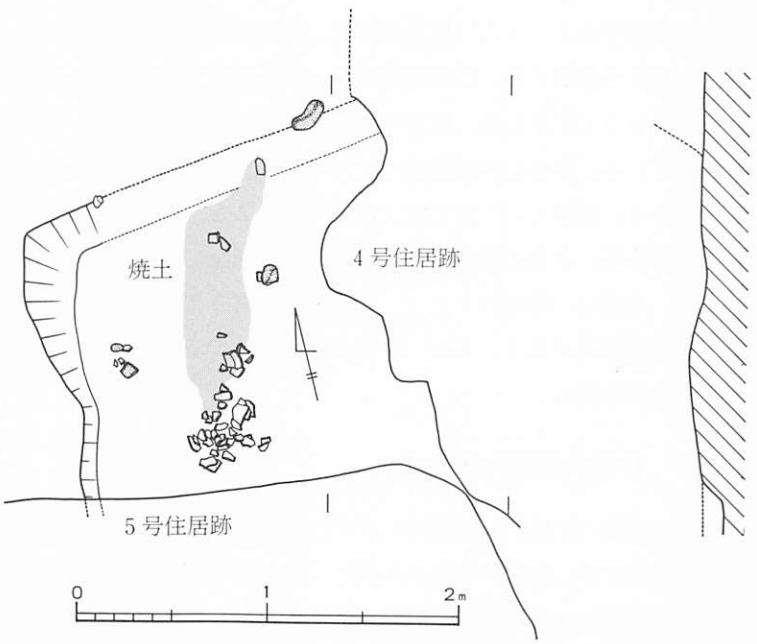


第224図　6号住居跡出土遺物実測図

した磨石である。長さ11.6cm、幅10.7cm、厚さ 4.2cm。両面ともに磨面であり、また、対称位置の2ヵ所を凹ませているので、石錘としての使用も考えられる。

7　7号住居跡（第225図）

東側を4号住居跡、南側を5号住居跡に切られた住居跡で、床面と西壁の一部しか残らない。長軸方位は、不明である。焼土が南北に縦長に広がっている。

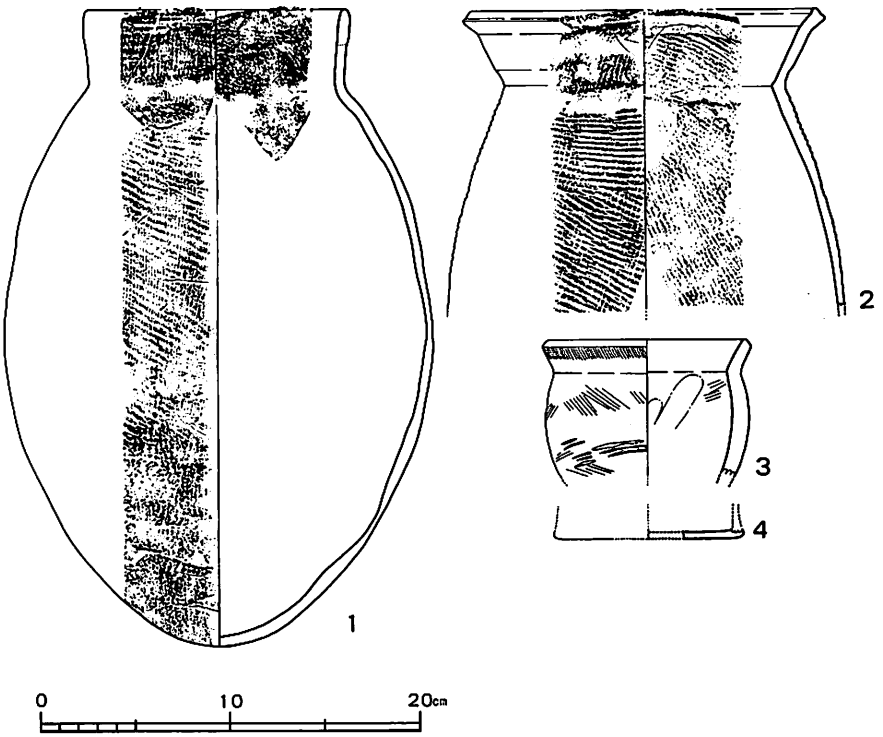


第225図　7号住居跡実測図

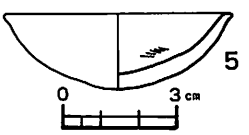
遺物（図版77－4、第 226・227図）

床面密着の遺物はなく、床面より10cm～15cmの位置から出土した。

1は、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる壺である。復元口径13.5cm、器高33.7cm、胴部最大径22.6cmを測る。外面は、胴部中位より上がタタキのあとハケ目を施し、下半は、縦位のハケ目である。内面は、口縁から肩部にかけて、及び胴部中位がナデで、胴部上位と下位がハケ目調整である。2は、甕の破片で、復元口径18cm。口縁部は、「く」の字に立ち上がり、先端部近くで更に外反する。口唇部内側は、摘み上げられており、外側も若干突出気味である。胴部は、長胴形になると思われる。外面口縁部はハケ目のあと横ナデ、頸部以下は、タタキ目のあとハケ目を施している。内面口唇部は強くナデており、下位のハケ目とは、明瞭に分かれる。胴部もハケ目で仕上げている。また、割れたあと火を付けた痕跡がある。3は、鉢の破片で復元口径10.4cm。外面は、ハケ目のあとナテ、内面は口縁部がナデで、胴部がヘラ磨きである。4はジョッキ形土器の底部片である。5は、手捏の鉢の破片である。口径は6cm程、高さ2cm弱を測る。



第 226 図　7号住居跡出土遺物実測図



第 227 図　7号住居跡出土遺物実測図

8　8号住居跡（第228図）

調査区東端に位置し、壁面はわずかに南壁の一部を残すのみで、東側は調査区外へ伸びる。床面の残りは良好で、南壁から北へ広がり、北と西で、3号住居跡、4号住居跡に各々切られている。

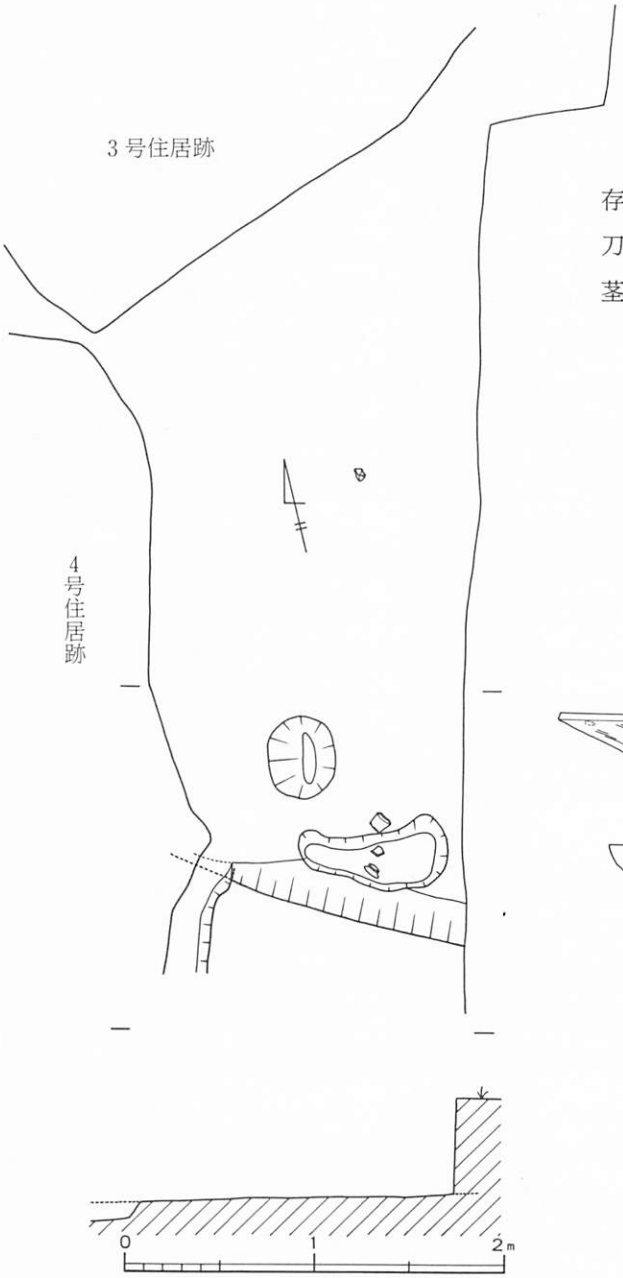
また、南壁は6号住居跡の東壁と交差するかたちとなるが、両住居跡の先後関係は不詳である。

遺物（図版76－3、78－8・9、第 229・230図）

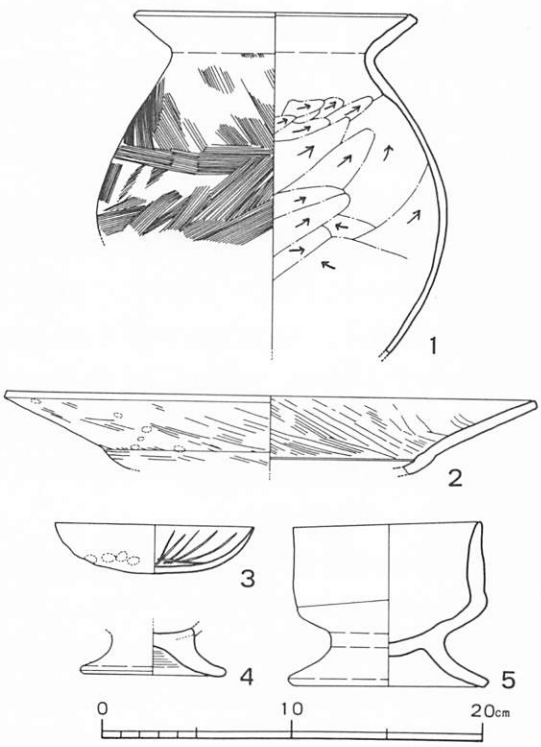
遺物の量は、極く少なく、床面よりの出土は高坏の破片と脚台（第229図2・4）の2点のみであ

る。鉄鏃は、床面から13cmの位置で出土した。

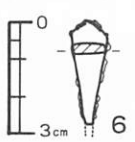
1は、底部を欠失する甕で口径14.3cmを測る。口唇部は、内側を摘み上げている。胴部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリで仕上げている。2は、高坏の坏部の破片で、床面から出土した。復元口径28cm弱程である。内外面ともハケ目を施したのちナデて仕上げている。外面には、指圧痕が残る。3は、ほぼ完形の鉢で径14cm、高さ 2.6cmを測る。内外面ともナデ仕上げであるが、内面にヘラ描きの暗文を施す。4は、脚台のみ残るもので、裾部径 7.7cm。内外面とも横ナデ仕上げである。床面出土である。5は、台付の鉢で口径 9.7cm、器高 8.6cmを測り、内外面とも横ナデ調整である。器壁の剝落が著しい。6は、茎部端を欠く鉄鏃で現存長 2.7cm、重さ 1.4g、身部が三角形状の刀先から、茎部にかけて次第に細くなり、身茎の境ははっきりしない。



第228図　8号住居跡実測図



第229図　8号住居跡出土遺物実測図



第230図　8号住居跡出土鉄鏃実測図

9　遺構に伴なわない遺物（図版76—3、79、第231～232図）

1は、甕の破片で、復元口径18.5cm。胴部外面は縦位のハケ目、内面はハケ目のあとナデている。2は、大形の壺の口縁部片で、復元口径22.7cm。頸部に刻目のある貼付突帯を有す。口縁部内外面ともにハケ目で、口唇部に刻目を付す。3も壺の口縁部片で、復元口径19.7cm。口唇部に刻目と一条の沈線を有す。外面ハケ目、内面はナデのあと縦位のクシ描波状文を施す。4は、壺の破片で頸部復元径13cm弱。頸部に貼付けの突帯を有す、外面ハケ目調整、内面は、ハケ目のあとナデている。5は、鉢の破片である。復元口径16cm弱を測る。外面胴部中位にハケ目を施し、内面はナデており、指圧痕が残る。6も鉢で、復元口径11.6cm。口唇部内側を摘み上げている。胴部は、外面ハケ目、内面ヘラケズリである。7は、壺の破片で口唇部は内傾して、わずかに立ち上がり、丸味のある角をもつ。内外面ともヨコナデ調整を施しており、部分的にハケ目が認められる。8は鉢で、底部は、やや尖り気味で肥厚している。内外面ともに粗いハケ目を施し、そのあと口縁部をヨコナデしている。9も鉢で、外面ナデ仕上げで、胴中位に右下りハケ目が残り、内面はヘラによる研磨を施している。10は高坏の坏部で、復元口径32cmを測る。坏底部から、柱状部にかけての外面はヘラケズリ、上半はナデている。内面は、口縁部ヨコナデ、中位以下はハケ目の上をナデて、さらに底部中心より放射状に暗文状のヘラ磨きを施している。11も、高坏の破片である。内外面とも、ヨコナデ仕上げである。12は、高坏の脚部の破片で、下部が内湾し、ふくらんだ状態で下に広がっている。中位に推定4個の円孔を穿っている。外面はハケ目のあとナデて、内面は円孔より上位が横位のヘラケズリ、下位は右下りのハケ目を施している。

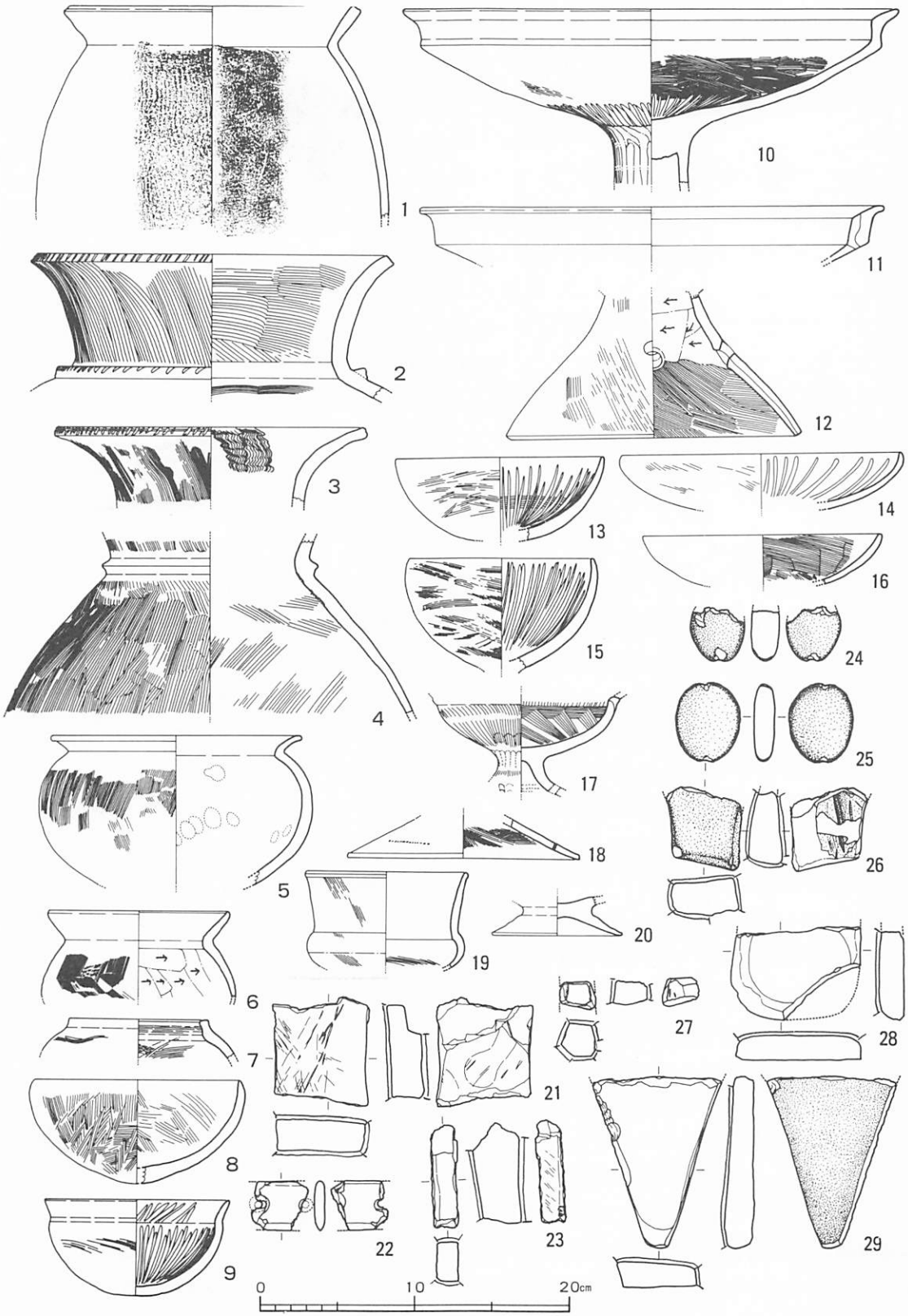
13、14、16は鉢である。13は半球形を呈し、内外面ともにハケ目のあとヘラ磨きしており、特に外面は光沢がある。内面は、放射状にヘラ描暗文を施す。14は、外面はハケ目のあとをナデており、内面はナデのあと、ヘラによって暗文を施している。16は、口縁部近くで、やや肥厚する。外面はナデとヘラによる調整、内面は右下りのハケ目を施したのち、ヘラで研磨している。

15、17は台付鉢である。15は外面は、ハケ目をナデ消し、内面はヨコナデのあと縦位のヘラ研磨である。17の口縁部は、接合部より剝離しており、脚部に3個の円孔を穿っている。内外面ともハケ目のあとヘラ研磨を施す。

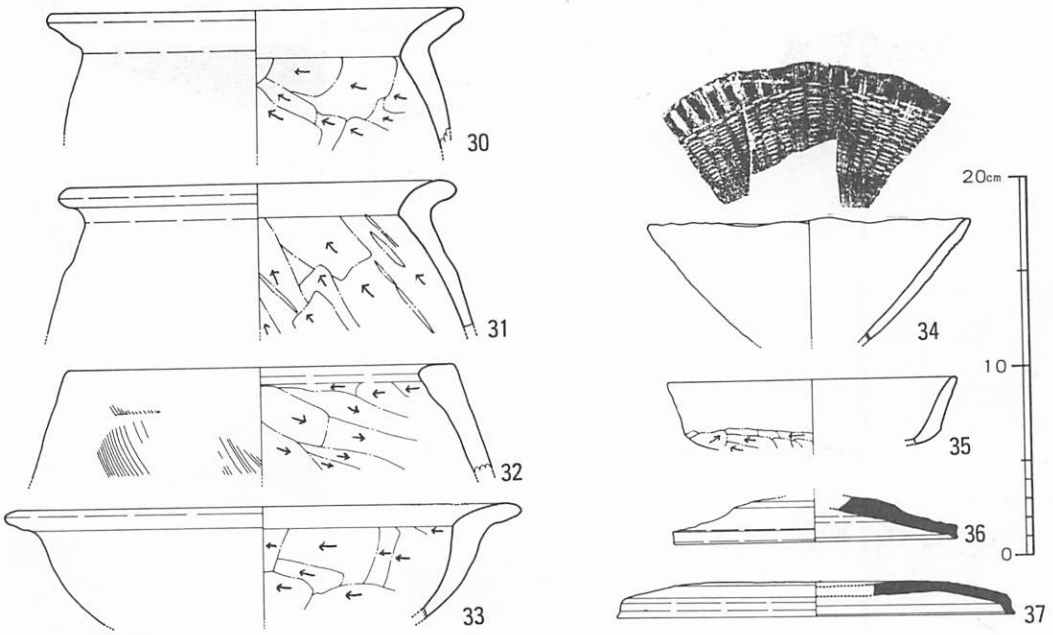
18は、脚台の破片である。径0.1cm程度の円孔を横一列に穿孔している。現存円孔数は15個である。外面ナデ、内面はハケ目を端部でナデ消している。19は鉢で、内外面ともナデ仕上げであるが、一部ハケ目が残る。20は脚台で、体部を欠損する。内外面ともにヨコナデで、体部底はヘラ研磨を施す。21は、砥石片で、磨面は三面あり、主磨面に擦痕が顕著に残る。22は、石庖丁の破片で、両端を欠く。幅 3.2cm、厚さ 0.65cm、孔間 2.5cm強を測る。23は、砥石の破片で表裏二面の磨面を有する。厚さ 2.7cm弱である。

24、25は石錘で、共に河原石を転用したものである。24は、片側を欠く、幅 3.6cm、厚さ 1.8cm強。25は、長さ 5.1cm、幅 4.2cm、厚さ 1.4cmを測る。火熱による変色が部分的に見られる。

26、27、28、29は、砥石である。26は、片側を欠き、五面の磨面を有する。27は、断面は不正六角形を呈し、磨面は六面である。28は、磨面は一面であり、片面は未使用である。29は、磨面は三面あるが、うちひとつは、あまり使われていない。



第231図　遺構に伴なわない遺物実測図

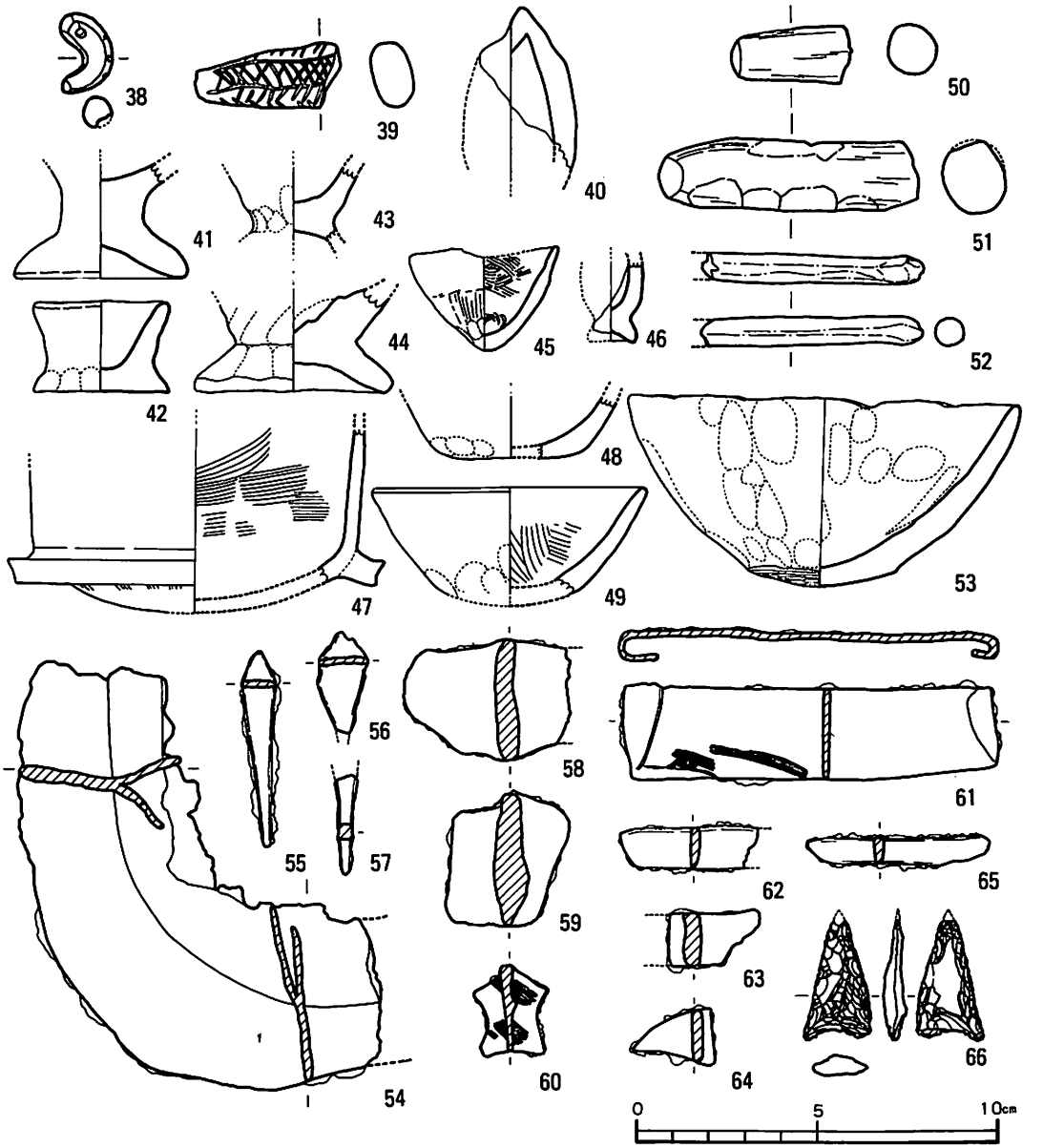


第232図 遺構に伴なわない遺物実測図

30は甕で、口縁部はかなり肉厚で先端は丸く、頸部内側に明瞭な稜を有する。外面は、ナデ調整、内面胴部は左上にヘラでケズリ上げている。31も甕で、大きく外反した肉厚の口縁部をもつ。外面ナデ、内面ヘラケズリで仕上げる。32は、器種不明の破片であるが、カマドの受け部かと思われる。外面は右下りハケ目をナデ消しており、内面は、右下方向へ、ヘラケズリする。33は鉢で、外面横ナデ、内面ヘラケズリ。34も鉢の破片で、復元口径17cm程である。竹籠の内側に粘土を押しつけて作られており、外面にその網目が明瞭に残っている。底部近くでは、ヘラケズリにより、器面調整を行っているので、網目は消えている。内面は、ヘラケズリのあとナデて、一部ヘラ磨きを施している。35は、坏片で、底部ヘラケズリである。36、37は、須恵器の蓋である。

38は、土製勾玉である。長さ2.2cm、断面径 0.8cm、円孔の径は、 0.2cmを測る。38は、器種不明。の土製品で、基部を欠失する。現存長は4cm強で、鈍いヘラ状工具により施文している。40も、器種不明。手捏で仕上げるが、第Ⅰ次調査、22号住居出土の異形土器（図版9－1、第53図）に手法的には類似する。41は、高坏を模した手捏のミニチュア土器で、坏部を欠く。現存高は 3.2cm、裾部径 4.8cmを測る。胎土に1㎜内外の砂粒を多量に含む。

42は、鉢あるいはジョッキ形土器を模したものであろうと思われる。器高 2.5cm、底部径 3.8cm。43は、底部から脚部にかけての破片で、くびれ部径は、 22 cmである。44も手捏のミニチュア土器で、体部を欠く。破砕後に火熱を受けている。45は、底部の尖った鉢で、口径 4.1cm、高さ 2.9cm。若干のハケ目が残り、底部内面にうずまき状の爪痕がある。46は、甕のミニチュア土器で、方保田東原遺跡において、甕、壺、鉢等を模したものの中では、最少の製品である。47は、器種不明である。胴は、やや広がり気味に直立し、底部は浅く凸レンズ状を呈す。底部近くに、しっかりした作りの貼付突帯をもっている。内外面ともハケ目のあとナデて仕上げている。胎土も極めて精良なも



第233図　遺構に伴なわない遺物実測図

のを使用しており、焼成も良好である。48は、鉢のミニチュア土器底部片であろう。

49も鉢のミニチュア土器で、内面にハケ目を施している。50、51、52は、器種不明の男根状を呈する土製品である。断面径が各々 1.3cm、 1.8cm、 0.8cmを測る。53は、手捏の鉢で底部は平底気味である。54は、片側を欠損する鋤先で重さ99.1ｇ。55は、柳葉形の鉄鏃で、長さ 5.4cm。

56は茎部を欠損し、身部は三角形状の刀先より茎部にかけて細くなる。57は、茎部のみで、断面形は、ほぼ正方形である。58、59、60は、器種不明の鉄器で、60は、不正五角形の星形状を呈す。

61は、完形の手鎌で、長さ10.3cm、幅 2.4cm、厚さ0.19cm、重さ27.9ｇを計る。

62～65は、不明鉄器で、62と65は、刀子かと思われる。66は、結晶片岩製の石鏃で、主要剝離面を残している。抉りは、浅い。（坂本）

10　土器溜め（図版69—2、72—2、73—1、75、第234図）

はじめに、この土器溜めは遺物の取扱い、また、整理の便宜上から1m×1mの方眼を組み、西から東へA～Gのアルファベット列、北から南へ1～6の数字列を用いて呼称することにした。

土器溜めは、第1調査区北東端に隣接し、その規模は東西7m、南北5mを測り、平面的には方形を呈するかなり広範囲のものである。

遺物は、第2層（褐色土）より、甕、壺、鉢、高坏、器台等を主に多量に出土した。これらの遺物等から、その形成時期は、三段階におよぶ事が推察される。この事を出土量が最も多い甕形土器で観てみると第一ブロックとして、A、B－2～6の区域を上げることができる。ここから出土する甕は、口縁部は「く」字状を呈し、胴部はかなりふくらみぎみで、その最大径は比較的上部に位置し、その内外面はハケ目調整を施している。また、脚台を有する。いわゆる鹿本町津袋大塚遺跡[註1]に見られる。津袋Ⅰ期に類似するグループである。

第二ブロックは、C、D－1～6の区域である。ここでは、口縁部は「く」字状を呈するが、胴部は、かなり直下ぎみで、最大径も中位に位置する。器壁内外面は前者と同様にハケ目調整を施し、脚台を有する。また、器幅に対して器高が高い。いわゆる、津袋Ⅱ期に類似するグループである。

第三ブロックは、E～G－2～6の区域であるが、主となるのは、E、F－3、4区である。ここより出土する甕は、「く」字状の口縁部に球形に近い胴部を持ち底部は丸底である。器の外面は口縁部から頸部にかけてヨコナデにより調整され、胴部から底部にかけては、ハケ目調整を施している。胴部内面は底部より上方向にヘラ削りによる調整が施されている。

この第三ブロックは、出土した他器種を見てみるとジョッキ形土器は、全く検出されていない事からも、第一、第二ブロックとは、かなりの時期差を認める事が出来る。また、第一、第二ブロックについての形成時期については、出土した甕の形態から見てみても二時期に分ける事が出来ると思われるが、土器溜めという制約された遺構であるだけに、時間的な位置付けを行なうのは困難である。

この土器溜めの下部層は、調査の性格上、十分な調査は行っていないが、中心部断面より住居跡1軒と、遺構数箇所を確認した。しかし、住居跡（第9号住居）の規模、時期等についての詳細な点は不明である。また、東端部より、小形仿製鏡一面が、鏡面を上にし、斜めにたてかけた状態で出土した。

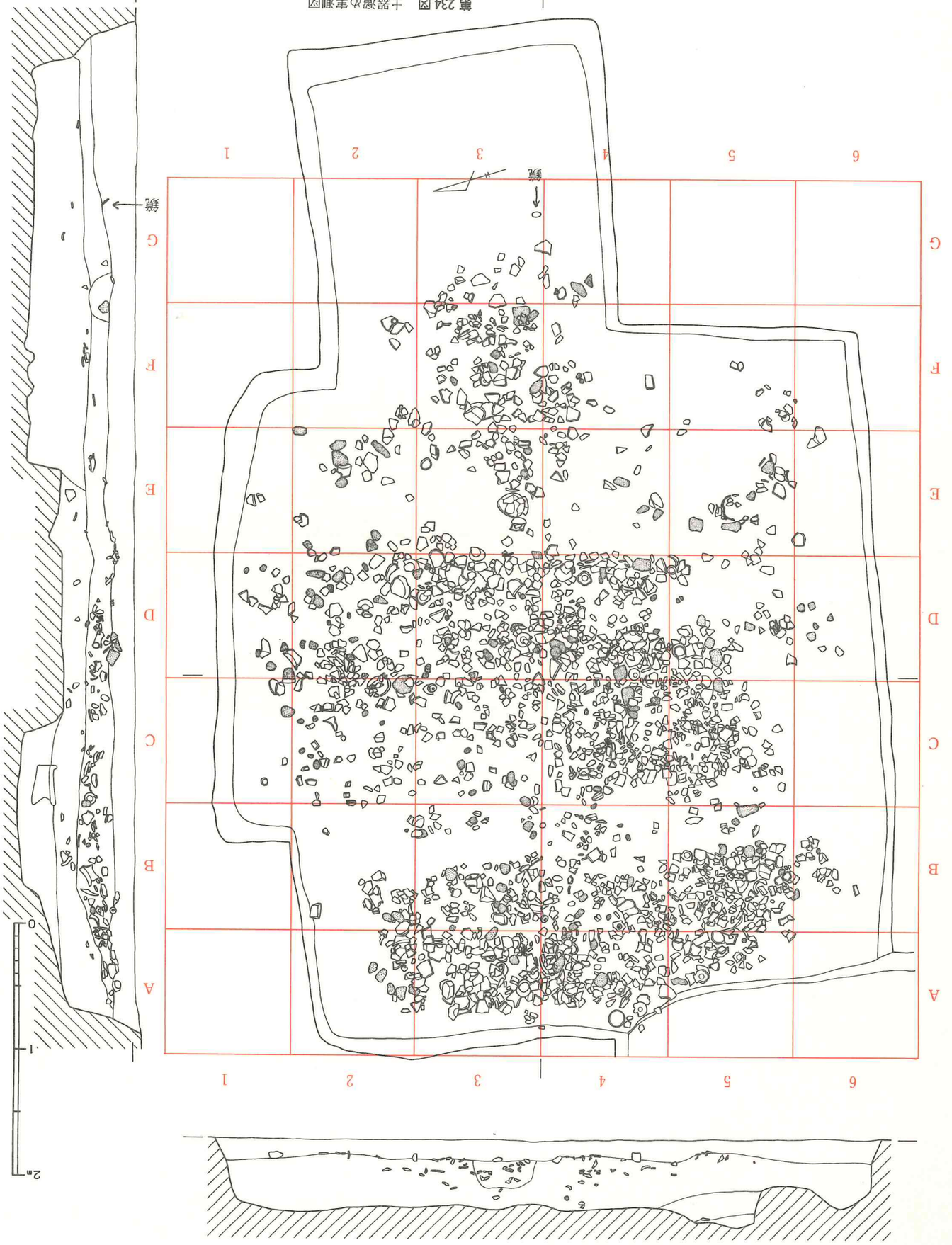
遺物

小形仿製内行花文鏡（巻頭図版、図版73—2、93—1、第235図）

仿製鏡は、土器溜めの最東端、現地表下約23cmより、鏡面を上にし、斜めになった状態で出土した。また、鏡面は西を向いており、このことは1次調査の巴形銅器の出土状態に酷似している。

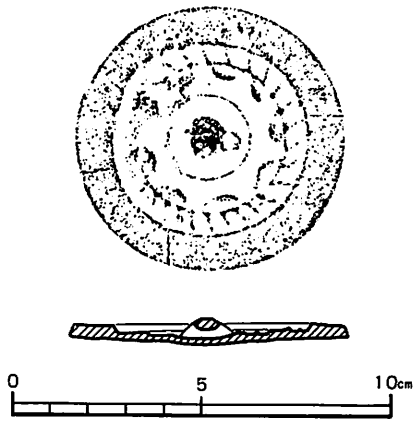
鏡は、面径 7.5cm、周縁の一部にわずかな歪みがみられる。鏡面の反りは約 0.2cmで中央部がわ

第 234 図　土器溜め実測図



ずかに孕み出し、全面に細い凹凸がみられる。また、現在でも多少の光沢がみられる。鏡背面は、高さ 0.3cm、幅1cmの平縁に続いて、極めて粗く幅の広い斜行櫛歯文帯、その内側に不整形をした九弧の内行花文帯をめぐらせている。鈕は円形で、回りに一圏を配している。文様帯は部分的に、鋳くずれが認められ、特に櫛歯文帯が著しいが、保存状態は極めてよい。

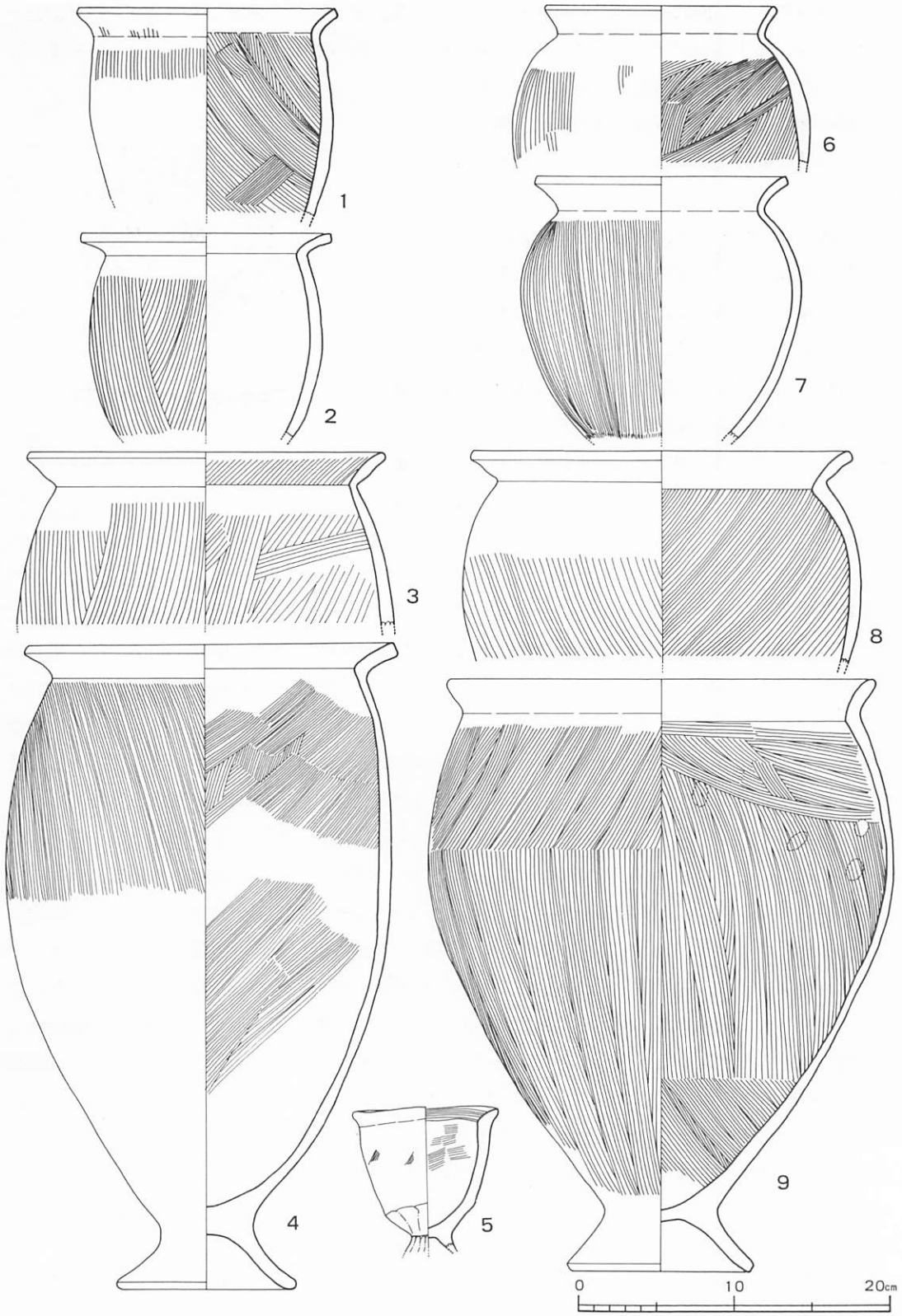
この鏡の類似品として、長崎県上県郡峰町タカマツノダン出土鏡IIIと福岡県福岡市南区大字曙弥郷字原（弥永原）出土鏡があげられる。高倉洋彰氏の論考[註2]に、この2鏡が取り上げられているが、それによると、タカマツノダンIII鏡は、箱式石棺の副葬品で面径 7.0cm、弥永原鏡は弥生時代後期中頃の住居跡床面からの出土、面径 7.1cmで、この2面は同笵鏡であるとされている。この2鏡については、現物に接していないので、確定的な事は言えないが、当遺跡出土の仿製鏡と同笵鏡である可能性は十分あると思われる。



第235図　小形仿製内行花文鏡実測図

土器（図版80～87、第236～243・245～247図－205）

1～27は甕形土器で、1は、口径16.4cmを測る。口縁部は弱く外反し、端部をわずかにつまみ上げている。頸部より胴部にかけては直線的に移行し、底部を欠損する。器面は口縁部内外面にヨコナデ、頸部から胴部にかけてはハケ目調整を行なっている。また、胴部については、指圧による調整痕も見られる。2は、口径16cmを測り、口縁部は外反し、端部をわずかにつまみ上げている。頸部から胴部にかけてはゆるやかに湾曲し、口径とほぼ同径になる。器面は、頸部から胴部にかけてハケ目を施す。3は、復元口径22.6cmを測る。口縁部は外反し、頸部の器肉は薄く、口頸部より口縁端部にかけてやや肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ調整を行ない、頸部より胴部にかけては、ハケ目調整を施している。4は口径23.2cm、器高41.5cmを測る。口縁部は大きく外反し、全体的に角張る。頸部より底部にかけては、ゆるやかに湾曲しながら移行し、脚台へ続く。脚台裾部はいくぶん外反ぎみである。胴部の最大径は中位にあり、内外面ともハケ目がみられる。また、外面は全体にススが付着している。口縁部と脚部の内外面はヨコナデである。5は口径 9.3cm、残存器高9.5cmを測りグラス状を呈する。器肉は肥厚ぎみで、口縁部はわずかに外反する。胴部下半より、脚部付け根にかけては直線的に内行し、小さめの脚台は裾部を欠損する。器内面は部分的に粗いハケ目がある。6は、復元口径14.4cmを測る。口縁部は直立ぎみに外反し、頸部から胴部にかけては大きくふくらみ下半部を欠損する。口縁部から肩部にかけては内外面共にヨコナデを行い、胴部についてはハケ目がみられる。また、器肉は肩部より胴部中位にかけて肥厚する。7は口径16cmを測る。口縁部はわずかに湾曲しながら外反する。頸部から胴部にかけて大きくふくらみ下半部を欠損する。胴部の最大径はやや上位にある。口縁部は内外面共にヨコナデがみられ、肩部より胴部にかけての外面はハケ目がみられる。

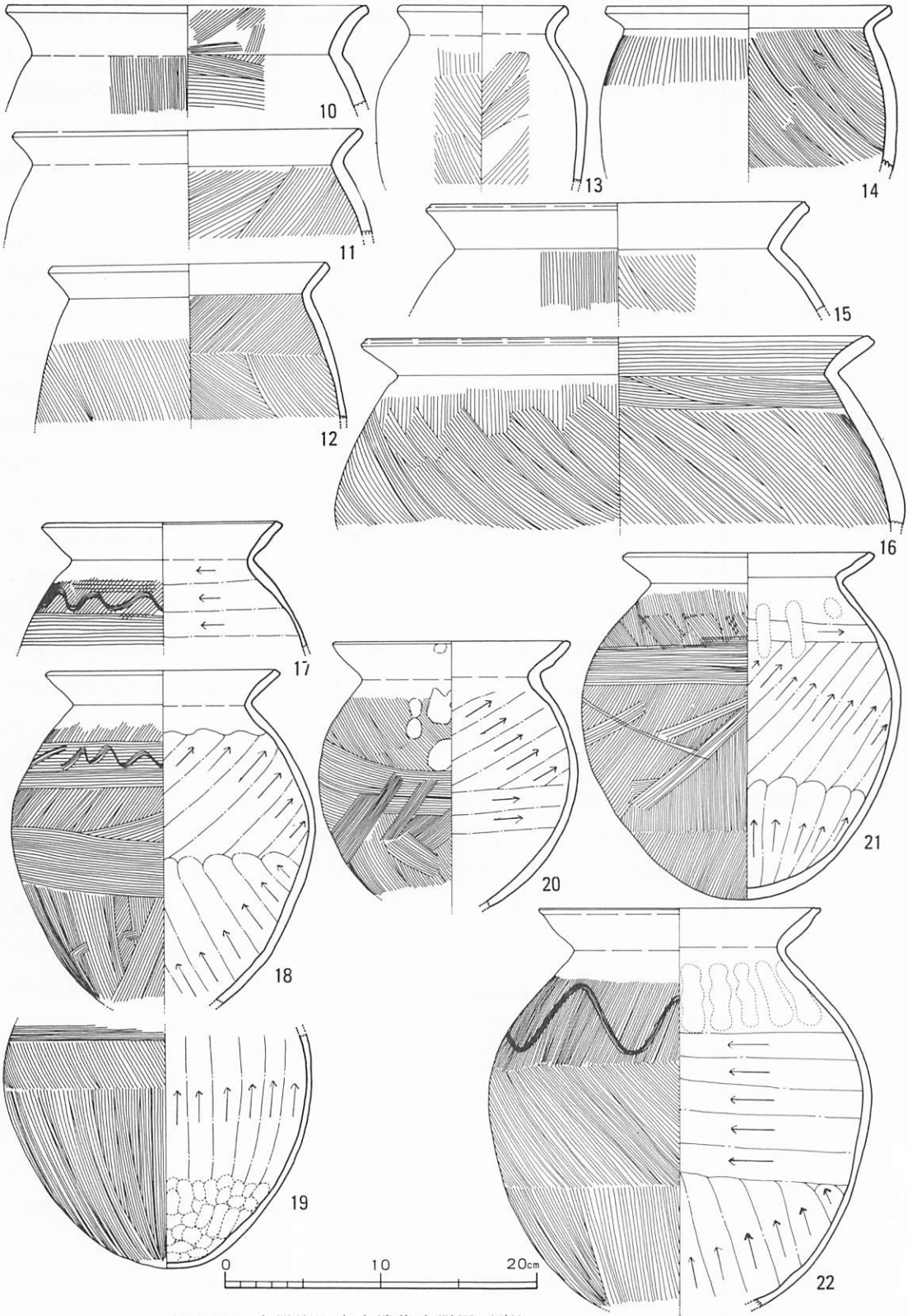


第 236 図　土器溜め出土遺物実測図（甕）

8は復元口径23.8cmを測る。口縁部は外反し、口頸部は肥厚する。頸部より胴部にかけてゆるやかに湾曲し、中位以下は欠損する。外面は頸部より胴部にかけてハケ目がみられ、内面の頸部以下は密にハケ目調整されている。口縁部は、内外共にヨコナデである。9は口径27cm、器高38cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸みがある。器高に対して幅が広く、器肉も薄い。頸部のしまりは弱く、胴部の最大径はやや上位にあり、脚台を有する。脚台付け根のしまりは弱く、裾部は角張る。口縁部内外面はヨコナデがみられ胴部内外面は密にハケ目を施してある。

10は、復元口径23cmを測る。口縁部は外湾し、肩部にわずかな段を有し胴部に移行する。口縁外部はヨコナデ、内部はハケ目、体部は内外面共にハケ目調整である。11は、復元口径22cmを測る。口縁部は外反し、頸部より胴部へはゆるやかに湾曲する。体部内面にハケ目がみられる。12は復元口径17.4cmを測る。口縁部は外反し、体部は内外面共にハケ目がみられる。13は復元口径10.6cmを測る。口縁部は外反し、頸部より肩部にかけてゆるやかにふくらみ、胴部においては直下ぎみに移行する。口縁部内外面共にヨコナデ、体部にはハケ目がみられる。14は復元口径18cmを測る。口縁部は外反し、端部はわずかにつまみ上げている。体部内外面にハケ目がみられる。15は復元口径24cmを測る。口縁部は外反し、端部をつまみ上げている。口縁部はヨコナデ、体部にはハケ目がみられる。16は復元口径32.4cmを測り、器面は内外共にハケ目調整である。17は口径14.4cmを測る。口縁部は外反し、口頸部より口縁部にかけては肥厚ぎみである。器肉は胴部中位においてかなり薄くなる。器面調整は、外面口縁部はヨコナデ、体部は縦、横方向のハケ目がみられ、肩部には波状文を施す。内部口縁部はヨコナデ、体部は横方向のヘラケズリである。18は口径14.2cmを測る。口縁部は外反し、端部は角張る。体部は球形を呈し、底部を欠損する。また、胴部の最大径はやや上位にある。外部口縁部はヨコナデ、体部は横と斜め方向のハケ目がみられ、肩部に波状文を施す。内部口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向のヘラケズリである。19は胴部中位より上を欠損する。器肉は薄く、底部は丸底である。外部調整は、縦、横方向のハケ目、内部は縦方向のヘラケズリで底部付近においては、指頭による調整がみられる。20は口径14.6cmを測る。口縁部は内湾ぎみに外反し、口頸部はやや肥厚する。体部は球形を呈し、胴部中位において虫喰い状の剝離が著しく、最大径は中位に位置し、底部は欠損する。外部口縁部はヨコナデ、体部は横、斜方向のハケ目、内部口縁部はヨコナデ、体部は横、斜め方向のヘラケズリで底部付近にわずかに指頭による調整痕が認められる。21は口径15.2cm、器高22.3cmを測る。口縁部は外反し、端部をつまみ上げ、そのため内側に凹みがみられる。体部は球形を呈し、底部は丸底である。胴部の最大径は中位にある。外面口縁部はヨコナデ、体部は、横、縦、斜め方向にハケ目がみられ、内面口縁部はヨコナデ、体部は、胴部に斜め方向のヘラケズリとわずかな指頭による調整がみられ、また、底部付近は縦方向のヘラケズリと指頭による調整がみられる。22は口径18cm、口縁部は肥厚し、端部は外方向につまみ上げている。体部は球形をなし、底部は欠損する。また、胴部の最大径は、やや上位にある。外面口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向のハケ目、肩部に波状文を有する。内面口縁部はヨコナデ、体部は、胴部中位においては横方向のヘラケズリ、下半部においては斜め方向のヘラケズリがみられる。

23は、口径14.2cmを測る。口縁部は外反し、体部は球形を呈する。また、胴部の最大径はやや上位に位置する。外面口縁部から肩部まではヨコナデ、頸部より胴部においてはハケ目がみられる

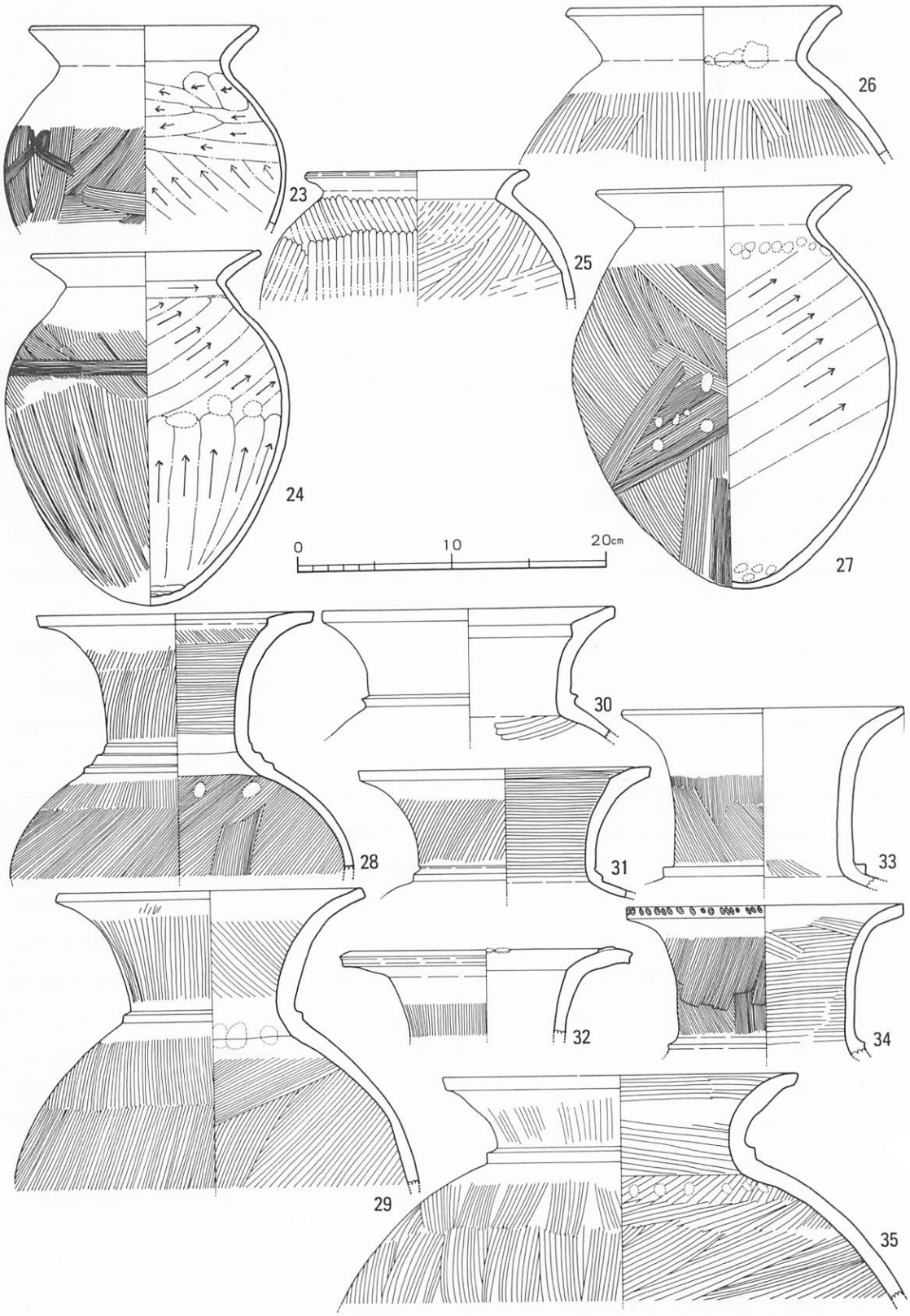


第237図　土器溜め出土遺物実測図（甕）

が、肩部におけるハケ目はヨコナデによって消されている。内面口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ調整である。24は口径14.6cm、器高23cmを測る。口縁部は外反し、口頸部において肥厚し、口縁端部にいくにしたがってわずかに薄くなる。体部は倒卵形状を呈し、底部は丸底となる。また、胴部最大径はやや上位にある。外面口縁部はヨコナデ、体部は全面に横と斜め方向のハケ目がみられる。内面口縁部はヨコナデ、体部は斜めと縦方向のヘラケズリである。25は復元口径14cmを測る。口縁部は湾曲ぎみに外反し、頸部より胴部においては大きくふくらむ。外面口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のヘラケズリがみられ、内面口縁部はヨコナデ、体部はハケ目である。26は復元口径17.4cmを測る。口縁部は湾曲ぎみに外反し、端部は角張る、頸部より胴部へは直線的に移行する。外面口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ目がみられる。内面も外面と同様の調整である。27は口径16.6cm、器高26.1cmを測る、口縁部は外反し、口頸部においてわずかに肥厚し、端部は外方向にわずかにつまみ出している。体部は頸部より肩部へは直線的に移行し、いわゆる撫で肩を示す。底部は丸底で、胴部の最大径は中位に位置する。また、虫喰い状の剝離が著しい。外面口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向のハケ目がみられ、内部口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向のヨコナデ、また、頸部と底部に指頭による調整がみられる。

28～54は壺形土器である。28は、口径18cmを測る。口縁部は大きく外反し、平坦面を有しておりいわゆる鋤先形を呈する。頸部には3本の突帯を有し、胴部は大きく張り出す。外面口縁部は口頸部では、縦方向のハケ目が見られ、頸部突帯はヨコナデ、体部は斜め方向のハケ目である。内面も口縁部、体部においてハケ目調整がみられる。29は口径19.6cmを測り、胴部下半を欠損する。口縁部は大きく外反し、端部は角張る。頸部には一本の突帯を有し、肩部は撫で肩ぎみである。外面は口縁部、体部共にハケ目がみられ、内面は口頸部、胴部に粗いハケ目が見られ、胴部には虫喰い状の剝離が著しい。30は復元口径18.8cmを測る。口縁部は外反し、内側に粘土を貼付、鋤先形を呈する。頸部には一条の貼付突帯を有する。外面はヨコナデ、内面はヘラ調整である。31は復元口径19cmを測る。口縁部は外反し、粘土を貼付て一応鋤先形を作った後、器面調整の段階で段を削り一条の稜にした感がある。頸部は一条の突帯を有する。外面はハケ目調整の上にヨコナデを施している。内部は全面に粗いハケ目がみられる。また、虫喰い状の剝離が著しい。32は、復元口径19cmを測る。大きく外反し、外面の口唇部に向う地点で部分的に肥厚する。内面には稜を作り2個一組の円形浮文を有するが、小片のため何箇所配するか不明である。33は復元口径18cmを測る。口縁部は外反し、器肉は端部方向に向かってやや薄くなる。頸部には貼付の突帯一条を巡らしている。外面はハケ目の上からヨコナデ調整、内面は頸部に若干ハケ目を残しているが、全体にヨコナデが見られる。34は口径18cmを測る。口縁部は外反し、端部付近でやや肥厚し、口唇部には不規則な刻目を有する。頸部は一条の貼付突帯を巡らす。外面口頸部は下から上方向へのハケ目、内面は粗いハケ目調整である。35は口径23cmを測り、胴部下半を欠損する。口縁部は外反し、口頸部は肥厚する。頸部には一条の貼付突帯を巡らし、胴部は大きく膨む。外面口縁部はハケ目の上からヨコナデ調整、胴部も粗いハケ目を施し、頸部においてはヨコナデが見られる。内面口縁部は全面ヨコナデ、胴部は粗いハケ目を施し、頸部において指圧痕がみられる。

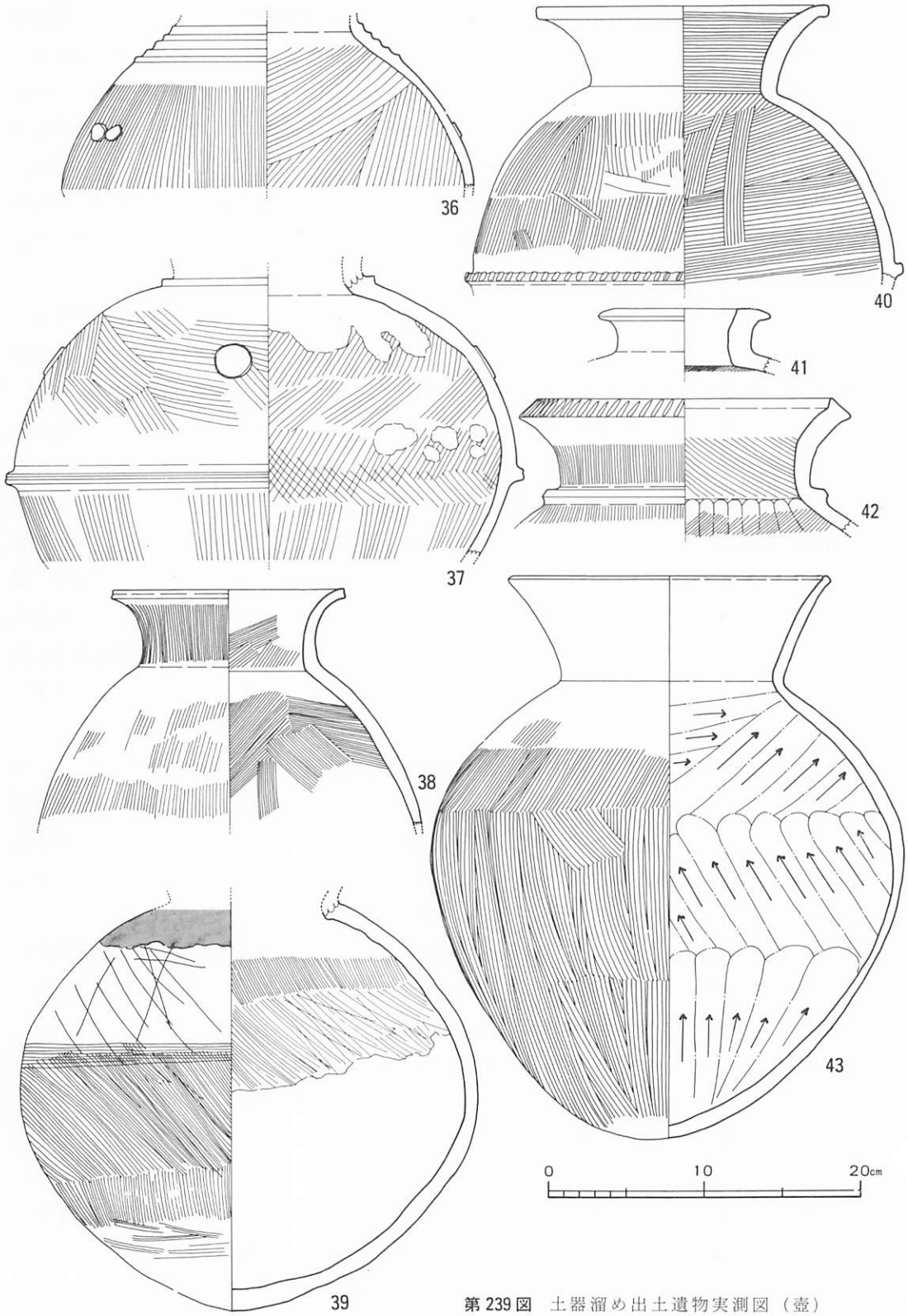
36は頸部から胴部中位にかけて残存する小片である。頸部には5条の貼付突帯を巡らし、肩部には、



第238図　土器溜め出土遺物実測図（甕・壺）

2個一組の円形浮文を有するが、何箇所に付くかは不明である。外面肩部は、縦方向のハケ目を施し、頸部突帯はヨコナデである。内面は比較的粗いハケ目がみられ、部分的に虫喰い状の剝離がある。37は口縁部と胴部下半を欠損する資料である。頸部から肩部にかけて大きく張り出し、肩部より内湾ぎみに下行する。胴部の最大径は中位にあり33cmを測る。頸部と胴部に一条の貼付突帯を巡らし、胴部突帯の上面に沈線を有する。肩部には4個の円形浮文を配しているが、正しく十字には配されていない。外面頸部はヨコナデ、体部は太いハケ目、内面は全面に太いハケ目を施すが頸部と胴部の一部に虫喰い状の剝離がある。38は復元口径14.6cmを測る。口縁部は外反し、口唇部に浅い沈線を有す。頸部より撫で肩ぎみに下行し、胴部下半を欠損する。外面口縁部は縦方向のハケ目を施し口唇部付近ではヨコナデが見られる。体部は、全面ハケ目を施した上からヨコナデ調整を行う。内面は口唇部、胴部に斜め方向のハケ目が見られる。39は口縁部を欠損する資料で、体部はほぼ球形に近い様相を呈する。胴部の最大径は中位にあり29.3cmを測る。底部はやや尖りぎみで、器肉は厚い。外面肩部はヘラ調整の後、赤色顔料を塗布している。また、胴部中位から下部には横と斜め方向のハケ目がみられる。内面は斜め方向のハケ目がみられ、胴部中位から底部にかけては虫喰い状の剝離が著しい。40は口径18.8cmを測る。口縁部は外反し、口頸部において大きく肥厚ぎみである。肩部は大きくふくらみ、胴部中位に刻目を有する一条の貼付突帯を巡らす。外面口縁部はヨコナデ、胴部には縦方向のハケ目がみられる。内面口縁部は横方向のハケ目、胴部は縦、横方向のハケ目を施している。41は、復元口径11cmを測る。口縁部は短かく、やや外湾ぎみに直立する。平坦面を有し、口唇部は外方に尖りぎみに出る。調整は全体的にヨコナデだが、内面頸部に斜め方向のハケ目がみられる。42は復元口径18.8cmを測る。口縁部は外反し、端部は上下に突き出し、口唇部には刻目がみられる。頸部には一条の貼付突帯を巡らす。外面口縁部はハケ目の上からヨコナデを施し肩部には縦方向のハケ目がみられる。内面は斜め方向のハケ目で、口縁端部においてはヨコナデ調整。また、頸部には指圧痕がみられる。43は、口径19.8cm。器高36cmを測る。口縁部は外反し、端部はわずかにつまみ上げられている。肩部は大きくふくらみ、内湾ぎみに丸底を呈する底部へ移行する。胴部の最大径は、やや上位にある。外面口縁部はヨコナデ、体部は、全面に縦方向のハケ目を施す。内面口縁部はヨコナデ、体部は下から上方向へのヘラケズリ調整である。

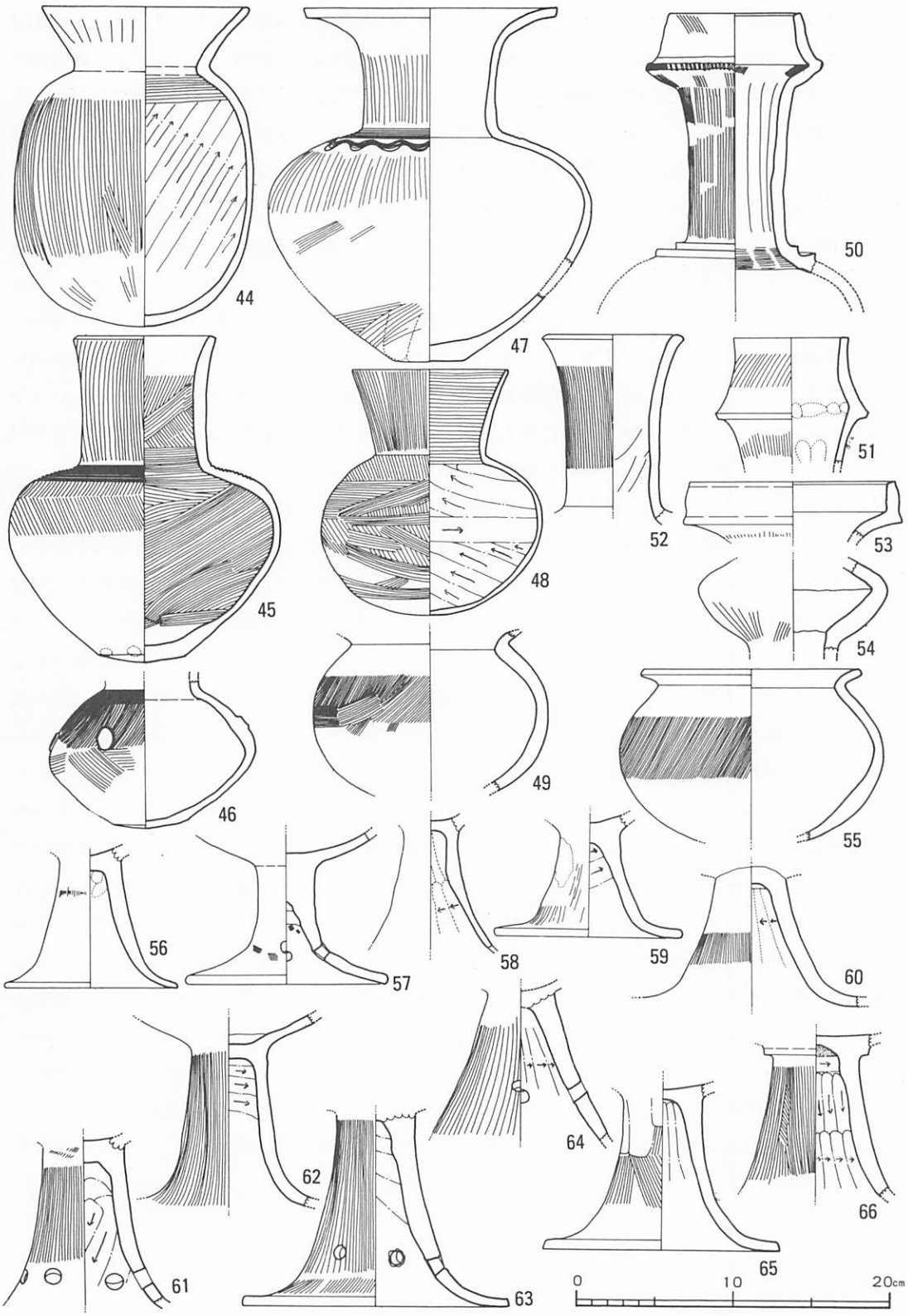
44は口径13.2cm、器高20.3cmを測る。口縁部は直線的に外反し、肩部はふくらみ、胴部は直線的に下行し、底部は丸底を呈する。器壁外面は、全面ヘラケズリ調整をした後、口頸部と胴部に細かいが粗いハケ目を施す。内面口縁部は縦方向のヘラ調整、体部は下から上方向へのヘラケズリを行い頸部はその上から横方向のハケ目がある。45は口径9cm、器高20.6cmを測る。口縁部は、ほぼ直立する円筒状の口頸部をもち、口唇部付近でわずかに外反し、端部は角張る。肩部は大きく張り出し、11条の沈線を巡らす。胴部は直線的に内行し底部へ続く。底部は丸底の底部を指頭により平底ぎみに作り上げている。外面口縁部は縦方向のハケ目で口唇部はヨコナデ、肩部から胴部中位にかけても、斜め方向のハケ目がみられ、胴部下半はナデによる調整である。内面は、口頸部より胴部下半まで、粗いハケ目がみられる。46は、口縁部を欠損する資料で、体部は算盤玉形状を呈し、底部は平底ぎみである。肩部には8条の沈線を有し、胴部には斜め方向のハケ目を施している。さらに、その上に6個の円形浮文を配する。47は、復元口径16cm、復元器高は約22.6cmを測る。口縁部



第239図　土器溜め出土遺物実測図（壺）

は直立する円筒状の口頸部をもち、口唇部付近で大きく外反する。肩部は大きく張り出し、底部は平底である。頸部に5条の沈線と波状文を配する。外面口頸部は縦立向のハケ目、体部も縦方向のハケ目がみられるが、虫喰い状の剝離が著しいため、顕著ではない。内面も同様に剝離が著しいために、調整痕は不明である。48は口径10cm、器高15.6cmを測る。口縁部は直線的に外反し、口唇部は尖りぎみである。体部は、ほぼ球形を呈し、底部は丸底である。外面口縁部は縦方向のハケ目、体部は横と斜め方向のハケ目である。内面口縁部は横方向のハケ目で、体部にはヘラケズリがみられる。49は扁球形状の体部を呈し、口縁部、底部を欠損する。胴部中位にハケ目がみられる。50は、口径 8.4cmを測り、体部は欠損する。直立する円筒状の口頸部をもち、上方は大きく外反し、その上に短い円筒形で下部が外反したものをのせて、複合口縁を形成している。この結合部外面は、いわゆる突帯状になり、端部に刻目を有する。頸部には、二条の貼付突帯を巡らす。外面口頸部には、縦方向のハケ目がみられる。内面調整はヨコナデが主体だが、口頸部はヘラ調整のあとにヨコナデがみられる。51も50と同様に複合口縁を形成する資料である。結合部はナデと指頭により調整している。また、外面には浅いハケ目を施している。50、51の体部については、両者共に欠損しているので不明であるが、類似品として、山口県防府市右田・一丁田遺跡[註3]出土の壺形土器をあげることができる。52は口径9cmを測り、体部を欠損する。口縁部は、直立する円筒状の口頸部をもち、上部でわずかに外反する。外面は縦方向のハケ目、内面はヨコナデとヘラによる調整である。53は口径13cmを測る。内外面共にヨコナデ調整である。54は、袋状口縁を呈する小片であり、わずかにハケ目をみるが、主としてヨコナデである。55は口径14cmを測る。口縁部は「く」字状に短く外反し、体部は扁球形状を呈す。底部は欠損するが、丸底になることが想定される。胴部中位に斜め方向のハケ目がみられる。

56～70・78は高坏形土器である。56は、坏部を欠損する。外面は縦方向のハケ目を施した後、ヨコナデを行っている。内面は全面ヨコナデで柱状部上位において指頭による調整痕が残る。57は直立する柱状部に大きく広がる裾部を有し、柱状部と裾部の境に4個の穿孔を穿っている。外面はヨコナデで裾部にわずかにハケ目を残す。内面柱状部はヘラケズリの後、浅く細かいハケ目がみられる。58は柱状部が肥厚し、直線的に外反しながら裾部へ移行する。外面はヨコナデ、内面はヘラ調整の後、ヨコナデを行なっている。59は、外面柱状部に縦方向のハケ目がみられ、上部においては虫喰い状の剝離が著しく、裾部にはヨコナデがみられる。内面は斜め方向のヘラケズリで、裾部はヨコナデである。60は、坏部が脚部との接合面で剝離した資料で、外面は縦方向のハケ目の上からヨコナデ調整を行なっている。内面はヘラ調整の上にヨコナデを施す。61は、柱状部に縦方向のハケ目がみられ、裾部との境には、6個の円孔を穿っている。また、内面にはヘラ調整がみられる。62は、下部がわずかに外反する柱状部に、縦方向のハケ目がみられる。内面はヘラとヨコナデにより整然と調整されている。63は、下部がわずかに外反する柱状部から大きく広がる裾部に移行し、裾端部はほぼ水平になる。柱状部には5個の円孔を穿ち、縦方向のハケ目裾部には斜め方向のハケ目で、端部にはヨコナデが見られる。64は、柱状部下部が八の字状に開き4個の円孔を穿っている。外面には、縦方向の細かく不明瞭なハケ目がみられ、内面はヘラ調整で、裾部にはヨコナデを施す。65は、柱状部から、なだらかな曲線で裾部に移行し、裾端部はほぼ水平になり沈線を一条巡らす。

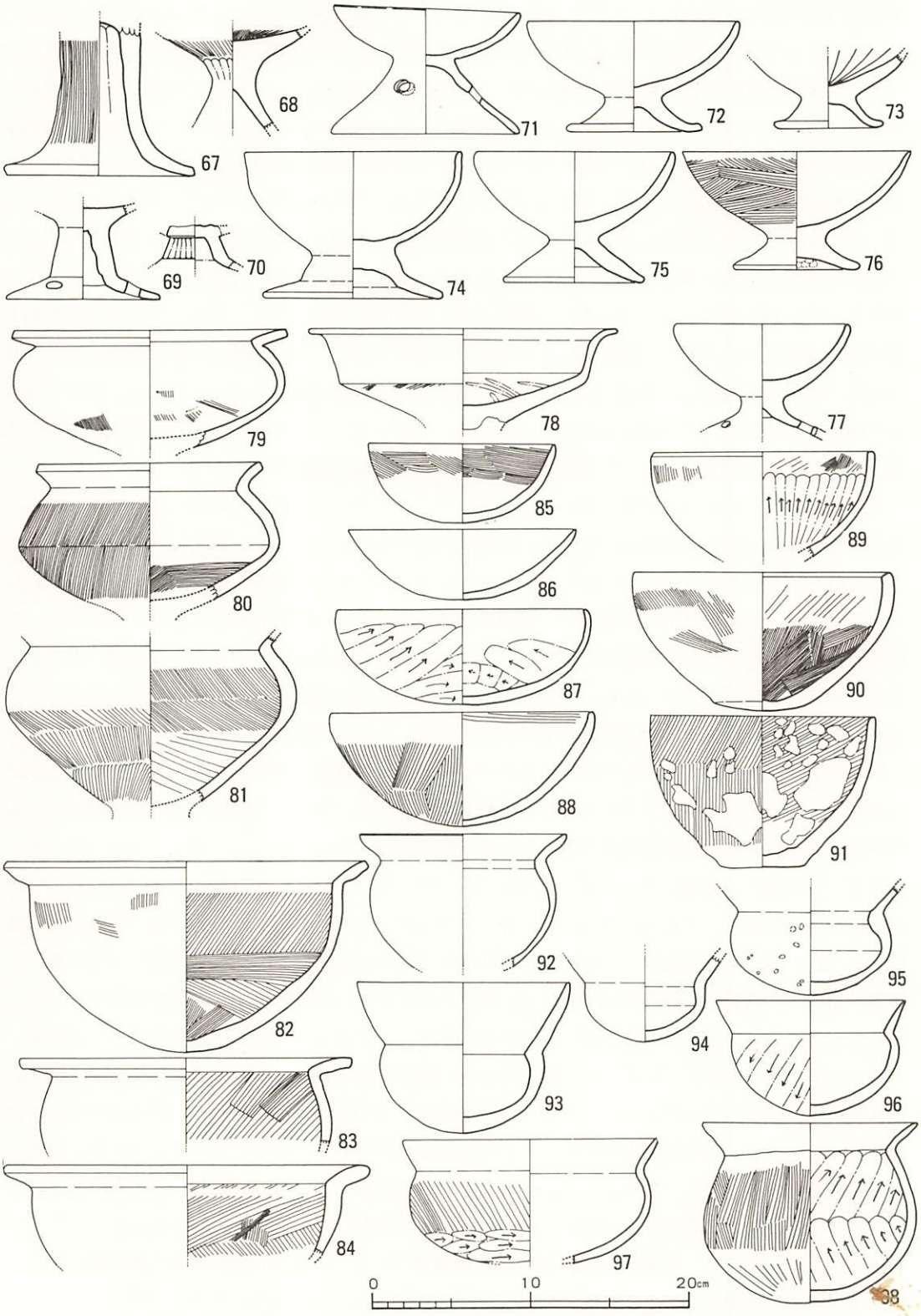


第240図　土器溜め出土遺物実測図

外面柱状部は縦と斜め方向のハケ目を施し、上部はヘラケズリ調製を行っている。内面上部は絞り上げの際出来た皺が顕著にみられ、裾部はヨコナデ調整を施している。66は、裾部に向けて直線的に外反する柱状部の上部、坏部との接合点に一条の貼付突帯を巡らしている。外面は斜め方向のハケ目の上から縦方向のハケ目を施し、内面には粗いヘラ調整がみられる。67は、円筒状の柱状部から裾部にかけて大きく広がり、裾端部は、ナデによりつまみ上げ状にわずかに下方に突出し角張っている。柱状部は縦方向のハケ目、裾部はヨコナデである。内部柱状部は、ヘラにより粗く調整されている。68は、坏部と脚部の接合部にねじりの跡がわずかに残り、その上を細かいヘラで調整している。坏部の内外面には、細かいハケ目がみられる。69は坏部を欠損する資料で、円筒状を呈する柱状部から直線的に大きく広がる裾部に移行する。柱状部と裾部の境は、内外共に一条の稜を有し、裾部には3個の円孔を穿つ。器面は、内外共にヨコナデである。70は坏部と脚裾部を欠損する。柱状部は、八の字状を呈し、外面ヘラケズリである。坏部との接合面は凹凸がみられる。78は、脚部を欠損する。坏部は口径19.3cmを測る。中位において直立ぎみに立ち上り、口唇部付近において大きく外湾する。外面には、ヨコナデを施し、わずかにハケ目の痕跡をみる。

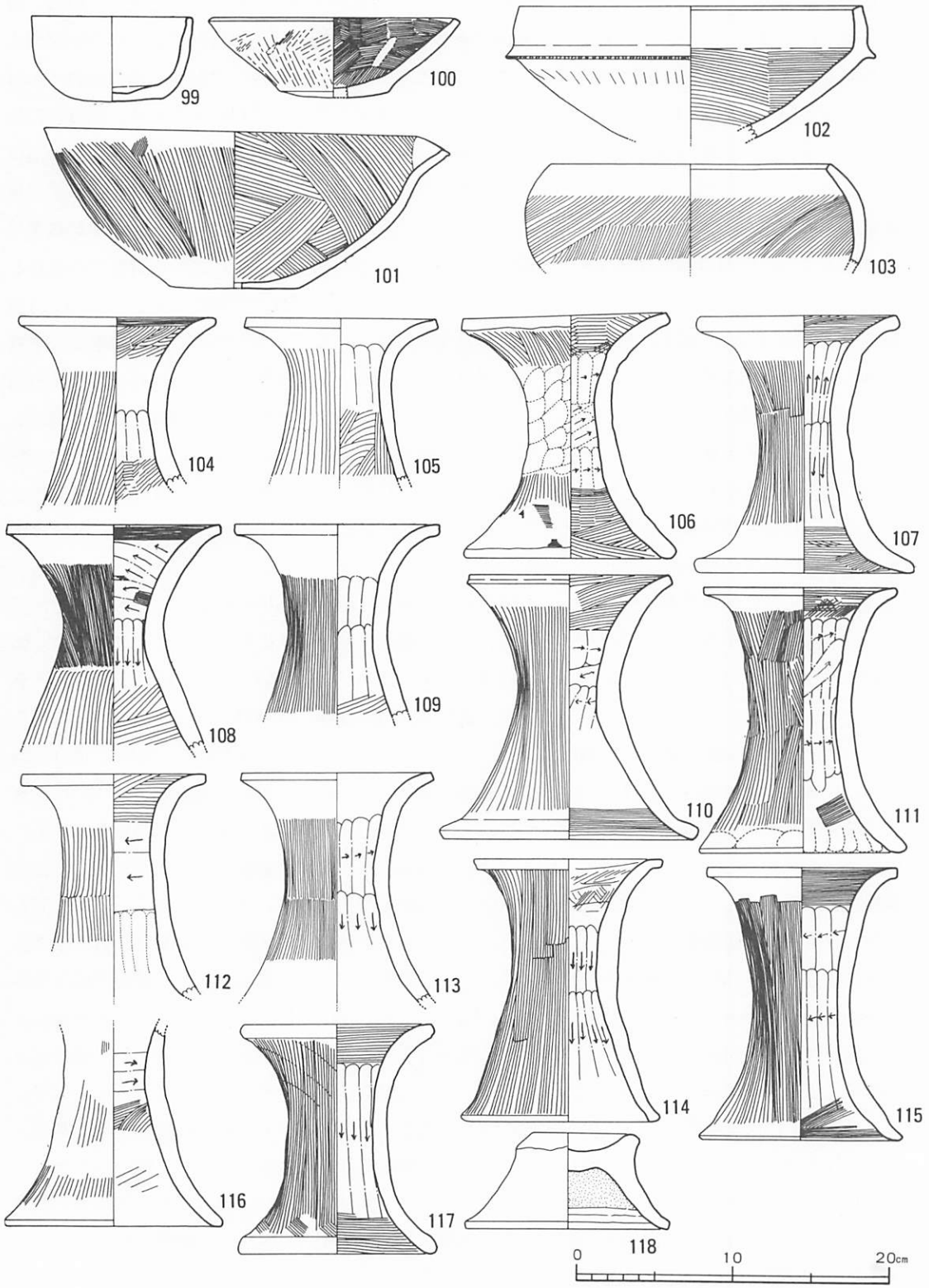
71～77・79～ 103は鉢形土器である。その内、71～77・79～81は台付の鉢である。71は口径11.8cm、器高 7.9cm、裾端部径11.8cmを測る。坏部は湾曲しながら立ち上り、脚部は「八」の字状に大きく広がり、 3個の円孔を穿つ。器面は、内外面共にわずかだが剝離がみられ、ヘラ調整を施している。72は、口径13.4cm、器高 7 cm、裾端部径 8.6cmを測る。坏部は湾曲しながら立ち上り、口縁端部は尖りぎみになる。脚部は低く大きく外反し、裾端部はほぼ水平になる。器面は、内外面共にヘラとヨコナデ調整がみられる。73も72と同様であるが、坏内部にヘラによる暗文がみられる。74は口径13.6cm、器高 9.3cm、裾端部径11.3cmを測る。坏部は内湾しながら立ち上り、口唇部付近においては直立する。脚部は、柱状部中位において肥厚し、裾部との境に稜をもち、裾部は直線的に広がる。器面は内外共にヘラとヨコナデ調整を施している。75は、口径12.4cm、器高 8.3cm、裾端部径 8.6cmを測る。坏部と脚部の境のしまりは強く、脚は直線的に大きく開く、器面内外はヘラ調整で、坏部内面には暗文がみられる。76は、72、73と同形態を呈し、口径14.4cm、器高7.5cm、裾端部径 7.8cmを測る。外面坏部はハケ目、脚部はヨコナデである。内面坏部底には、虫喰い状の剝離がみられ、脚部には指圧痕がみられる。77は復元口径10.6cmを測る。脚部に3個の円孔を穿つ。器面は全面ヘラ調整で、坏内部に虫喰い状の剝離がみられる。79は、復元口径17cmを測る。大きく外反する口縁部に扁球状の体部を呈し、脚部は欠損する。外面は、ハケ目の上からヨコナデ調整、内面は虫喰い状の剝離が著しく不明瞭であるが外面と同様である。80は、復元口径14cmを測る。外反する短い口縁部に算盤玉形に近い形状の体部を呈するが、体部中位内外には稜を有する。外面口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ目、内面は体部中位の稜にそって指圧痕がみられ、底部付近には粗いハケ目を施している。81は、口縁部と脚部を欠損する。体部外面は、中位以下に斜めと縦方向の粗いハケ目、内面中位は斜め方向のハケ目で、底部付近は粗いハケ目となる。

82は復元口径22.6cm、器高12.1cmを測る。口縁部は外反し、口頸部は肥厚する。端部は角張り、口唇部には浅い沈線を有する。体部は頸部より胴部中位にかけて直線的に下行し、底部にかけての器肉は、やや肥厚しながら底部へ移行する。底部は、やや平底ぎみである。外面口縁部はヨコナデ、



第241図 土器溜め出土遺物実測図

体部はハケ目の上からヨコナデを施す。内面体部は、全面斜めと横方向のハケ目を施す。83は、復元口径11cmを測る。口縁部は外反し、口頸部は肥厚する。また、端部は下方にわずかに膨む。頸部よりわずかに膨らみながら胴部へ移行する。外面口縁部はヨコナデ、胴部には細かく縦方向のハケ目がわずかに残る。内面口縁部はヨコナデ、体部には粗い斜め方向のハケ目がみられる。84は、口径23 .2 cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸くなる。体部は頸部より内湾ぎみに斜行する。外面口縁部はヨコナデで体部は非常に粗いハケ目の上からヘラケズリを施す。内面口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向の比較的粗いハケ目がみられる。85は、口径11.6cm、器高5cmを測る。半球形状を呈し丸底となる。外面口縁部はヨコナデ、胴部には細かいハケ目、底部付近にはヘラ調整がみられる。内面は口縁端部より胴部までは、右下りの細かいハケ目、底部付近はヘラ調整である。86は、口径14.2cm、器高 4.4cmを測る。丸底を呈し、ほぼ直線的に外反しながら立ち上る。器面調整は、摩滅が著しいため不明である。87は口径15.5cm、器高6cmを測る。丸底を呈し、口縁部はわずかに内湾する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はヘラケズリである。88は口径16.4cm、器高 7.2cmを測る。尖りぎみの丸底を呈し、口縁部は直立ぎみである。外面口縁部はヨコナデ、体部は全面に縦方向のハケ目がみられ、内面口縁部は横方向のハケ目、体部はヘラ調整を施し、縦方向の暗文がみられる。89は復元口径14cmを測る。底部を欠損し、口縁部は直立する。外面はわずかにハケ目を残し、内面口縁部は斜め方向のハケ目、胴部は縦方向のヘラケズリである。90は口径16.2cm、器高 8.7cmを測る。底部は平底で、幾分丸味を帯びる。口縁部は内湾ぎみで端部は丸くなる。外面は、ハケ目を施した上からヨコナデを行っている。内面口縁部は斜め方向のハケ目の上にヨコナデ、体部は全面斜め方向のヨコナデである。91は口径14.1cm、器高 9.5cmを測る。底部は平底で体部は急激に立ち上り、口縁部は直立ぎみになる。器面調整は、内外面共に斜め方向のハケ目を施している。また、虫喰い状の剝離が著しい。92は、復元口径 6.5cmを測る。口縁部は外反し、端部は幾分内湾ぎみになる。体部の孕み出しは弱い。外面口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向の細かいハケ目を施す。内面体部は、ヘラ調整である。93は口径13.4cm、器高 9.5cmを測る。球形の胴部に丸底を呈し、口縁部は内湾ぎみに大きく立ち上る。最大径は口縁部にあり、頸部は器高のほぼ中位にある。器面調整は、内外面共にヨコナデであるが、虫喰い状の剝離が著しいために不明瞭である。94は、93と同形状を呈する。器面調整は、内外面共にヨコナデである。95は、扁球形状の胴部で丸底を呈す。口縁部は直線的に外反し、端部を欠くが、最大径は口縁端部にあると想定される。器面調整は内外面共にヨコナデであり、外面は剝離が著しい。96は、口径11.8cm、器高 7.4cmを測る。半球形に近い胴部に尖りぎみの丸底を呈する。口縁部は直線的に外反し、端部は尖りぎみに細くなる最大径は口縁端部にあり、頸部は器高の上位に位置する。外面口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向のヘラケズリである。内面口縁部はヨコナデ、体部にはヘラ調整がみられる。97は復元口径15.8cmを測る。外面口縁部はヨコナデで、胴部は斜め方向のハケ目、胴部下半から底部にかけては粗いヘラケズリを施している。内面は口縁部から胴部中位にかけてヨコナデを行い、底部付近においてはヘラ調整を施している。98は、口径13.8cm、器高11.5cmを測る。底部は丸底を呈し、口縁部は外反する。口縁端部径と胴部中位は、ほぼ同径を示す。外面口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のハケ目を施し内面口縁部はヨコナデで、体部にはヘラケズリが見られる。また、外面は全面にススの付着がみられ、



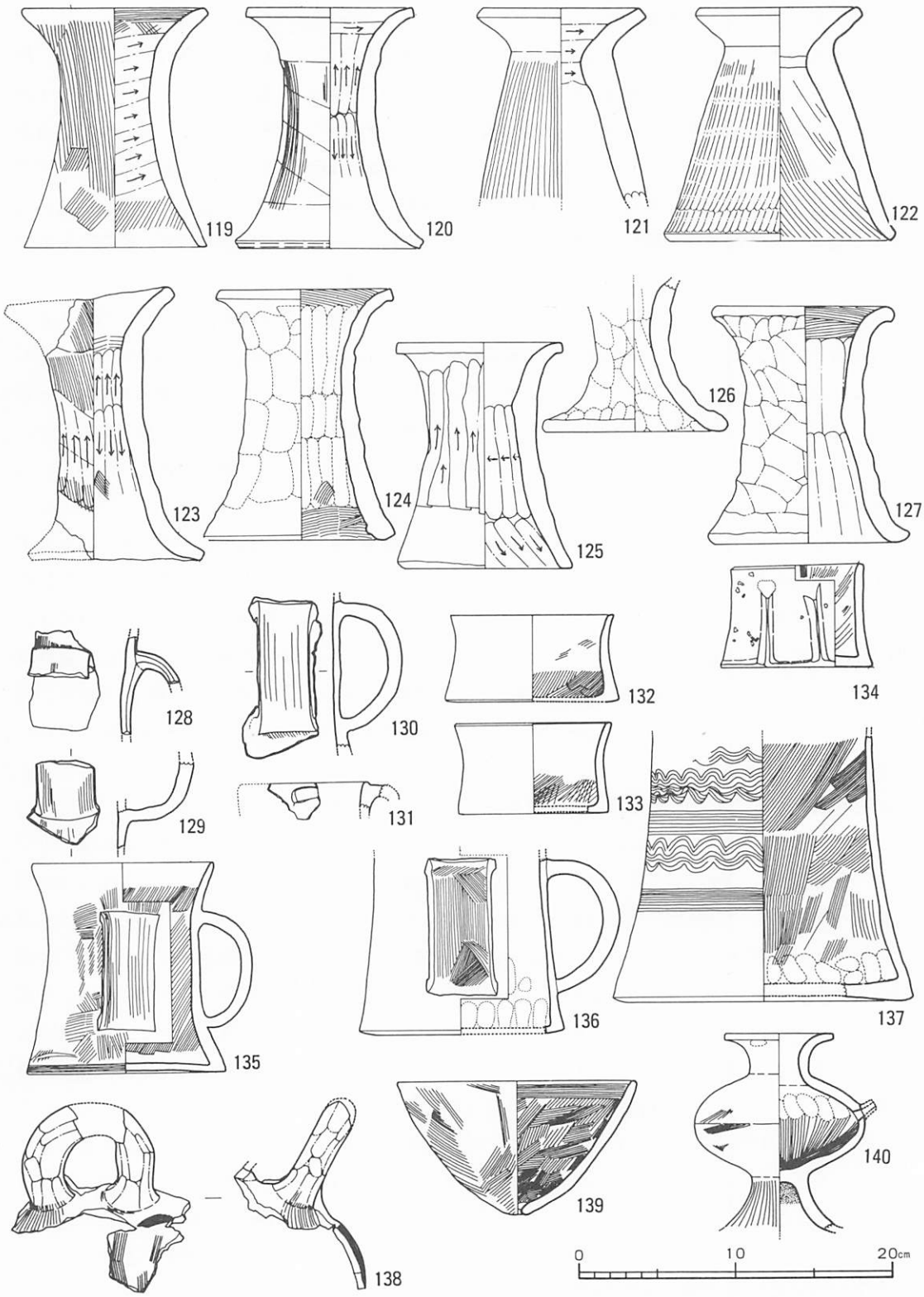
第242図 土器溜め出土遺物実測図

内面底部には燻げ付きが観察出来る。

99は口径10.2cm、器高5.4cmを測る。底部は平底で、ほぼ垂直に立ち上る。外面はヨコナデで、底部付近はヘラ調整である。内面は、ハケ目の上からヨコナデを施し、底部付近には、ヘラ調整がみられる。 100は復元口径16cm、器高 5.2cmを測る。底部はわずかに丸味を帯びた平底を呈し、直線的に大きく外反しながら立ち上り、口縁端部は角張る。外面口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリである。このヘラケズリは底部を削り出すためと、底部付近を薄くするためと思われる。内面には、全面に緻密に施されたハケ目がみられる。 101は復元口径24.4cm、器高10cmを測る。底部は平底で内湾ぎみに立上り、口縁端部は角張る。また、口縁部には一箇所に注ぎ口を設けている。外面口縁部はヨコナデ、胴部には縦方向に目の粗いハケ目がみられ、内面は全面斜め方向のハケ目である。

102は復元口径22cmを測る。最大径は、口縁部直下の突帯部にあり、突帯端には細かい刻目を有している。口縁部は内湾ぎみに立ち上り、突帯下部は直線的に内行する。外面は、突帯下部にハケ目を施し、その上から全面にヨコナデを施している。内面口縁部はヨコナデ、体部は横方向の粗いハケ目である。 103は復元口径18cmを測る。内外面とも口縁部はヨコナデ、胴部は斜め方向の粗いハケ目である。

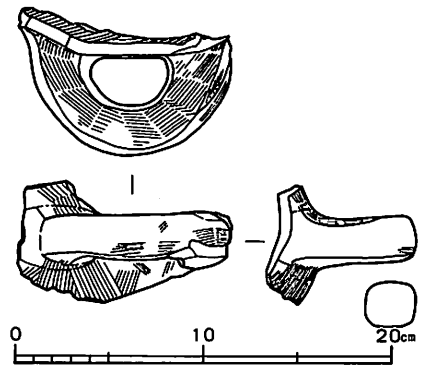
104～127は器台である。104は口径 12.6cmを測る。口縁部下に、くびれ部を持ち、外反ぎみに下行する。外面口縁部はヨコナデ、以下は太いハケ目が全面にみられる。内面口縁部は太いハケ目の上からヨコナデ、胴部中位においては縦方向のヘラケズリで、以下は粗いハケ目である。 105は口径12cmを測る。口縁端部は角張り、くびれ部は上位にある。外面は縦方向のハケ目で、口縁部はヨコナデされている。内面にも粗いハケ目が施され、口縁端部付近はヨコナデされている。 106は、口径13.9cm、器高15.5cm、裾端部径13.4cmを測る。くびれ部は中位にあり、口縁部と裾部は大きく外反し、それぞれの端部は角張る。外面中位には指圧痕が著しく、口縁部と裾部には粗いハケ目がみられる。内面中位はヘラケズリで、口縁部と裾部は外面と同様のハケ目である。 107は口径13cm、器高16.4cm、裾端部径14cmを測る。くびれ部は器高の中位にあり、口縁部と裾部は、それぞれの端部付近で大きく外反する。外面は縦方向の細かいハケ目で、口縁部と裾部はヨコナデであり、内面中位は縦方向のヘラケズリ、口縁部、裾部は細かい横方向のハケ目である。 108は口径13.6cmを測る。器高に対し、くびれ部はやや上位にあり、裾部へは直線的に大きく外反すると想定される。外面口縁部はヨコナデ、くびれ部はヘラケズリの上から細かいハケ目を施し、下位は粗いハケ目である。内面は全体にヘラケズリを行なっているが、口縁部にはその上から細かいハケ目を施している。 109は口径13cmを測る。器高に対し、くびれ部はやや上位にある。外面には、縦方向のハケ目がみられ口縁部はヨコナデである。内面は、ヘラケズリの上からヨコナデを行なっており、下位には粗いハケ目がみられる。110は復元口径12.6cm、器高16.9cm、裾端部径16.6cmを測る。くびれ部は中位にあり、口縁部と裾部に向って大きく開き、裾端部は肥厚する。外面は縦方向のハケ目で、口縁部と裾部はヨコナデされている。内面中位はヘラケズリで、両端部付近にはハケ目が施されている。111は、口径12.2cm、器高16.9cm、裾端部径13.2cmを測る。中位のくびれは弱く、円筒形を呈し、上下は端部付近で大きく外反する。中位は縦方向のハケ目、両端部はヨコナデである。内面中位はヘラケズリを行ない、両端部はハケ目である。また、裾部には指圧痕がみられる。 112は口径11.6cmを測る。外



第243図　土器溜め出土遺物実測図

面中位に粗いハケ目、口縁部はヨコナデを行なっている。内面は口縁部に粗いハケ目、中位にはヘラケズリがみられる。 113は口径12cmを測る。外面中位に縦方向のハケ目、内面はヘラケズリである。 114は口径12cm、器高16.9cm、裾端部径13.6cmを測る。外面は全面ハケ目、内面口縁部に粗いハケ目、中位はヘラケズリである。 115は復元口径12cm、器高17.5cm、裾端部径13cmを測る。外面は縦方向のハケ目で両端部はヨコナデを行なっている。内部中位はヘラケズリ、両端は粗いハケ目の上からヨコナデを施している。 116は、裾端部径14cmを測る。外面はハケ目の上からヨコナデ、内面裾部もハケ目の上からヨコナデを施している。 117は、口径12cm、器高14.9cm、裾端部径12.6cmを測る。外面は全面ハケ目を施した後、口縁部下にはヘラケズリを行なっている。内面両端部は横方向の粗いハケ目、中位はヘラケズリである。 118は甕の脚台部接合面を磨り、器台として再利用したものである。119は口径11.8cm、器高15.3cm、裾端部径11.6cmを測る。外面は粗いハケ目、両端部はヨコナデ、内面中位はヘラケズリで両端部にハケ目がみられる。 120は口径10.5cm、器高15.4cm、裾端部径12cmを測る。中位は内外面共にヘラケズリで、外面はその上からハケ目を施している。 121と 122は、同形態を示す。口縁部は直線的に外反し、くびれ部は口縁部直下にあり、裾部へは、直接的に開く。くびれ部の器肉はかなり厚くなり、両端部に向って薄くなっている。外面調整は、121は縦方向のハケ目、 122はヘラケズリである。内面は両者共にヘラケズリだが、 122は裾部付近に粗いハケ目をもつ。 123は復元口径10.6cm、器高16.6cm、裾端部径10.7cmを測る。外面はヘラケズリの上からハケ目を施し、内面もヘラケズリで、両端部はヨコナデである。 124は口径10.2cm、器高16cm、裾端部径12.1cmを測る。外面は全体にわたり、指圧痕を明瞭に残している。内面両端部には、横方向の粗いハケ目がみられ、中位は指圧痕によるものである。 125は復元口径10.3cm、器高14.4cmを測る。内外面共にヘラケズリがみられるが、特に外面中位のヘラケズリは顕著にみられ、この調整具の幅は約 1.7cmである。 126は口縁部か裾部になるのかが、断定しにくい資料である。他の器台口縁部には必ずハケ目かヨコナデ調整が施されているが、これには両者共見られないために、一応、裾部として扱った。手捏風のもので、内外面共に指圧痕が顕著にみられる。 127は口径10.9cm、器高15.3cm、裾端部径11.3cmを測る。外面は全面に指圧痕がみられ、内面口縁部は粗いハケ目、中位はヘラケズリである。

128〜 137は、ジョッキ形土器である。 128〜 131は、把手部のみの小片である。128・129は幅広で、断面はカマボコ形を呈する。器面にはハケ目がみられる。 130は幅広で中凹の断面を呈する。131は、復元口径 8 cmを測る。 132〜 134は同形態を呈する。口径約10cm、器高約 6 cmで、口径と底部径がほぼ同径で把手を有しない。外面は全面にヨコナデがみられ、内面にはハケ目を施し口縁部付近はハケ目の上にヨコナデを施している。 134は、外面の一部に長方形状の突帯を設けている。135は口径11.6cm、器高13.5cm、底部径12.8cmを測る。体部は鼓状を呈し、把手は幅広で、その断面は中凹を呈する。外面は全面ナデ調整で、把手の周囲にのみハケ目を施す。内面は斜め方向のハケ目を施している。 136は幅広で、断面中凹を呈する把手を有する。体部はナデ調整で、把手にはハケ目がみられる。内面底部付近には指圧痕がみられる。 137は、復元底部径19cmを測る。出土中最も大型のものであるが、小片のため把手の有無については不明である。外面胴部中位には、沈線と波状文を交互に施し、内面は全面にハケ目調整を行い、底部付近は指圧痕がみられる。 138は、



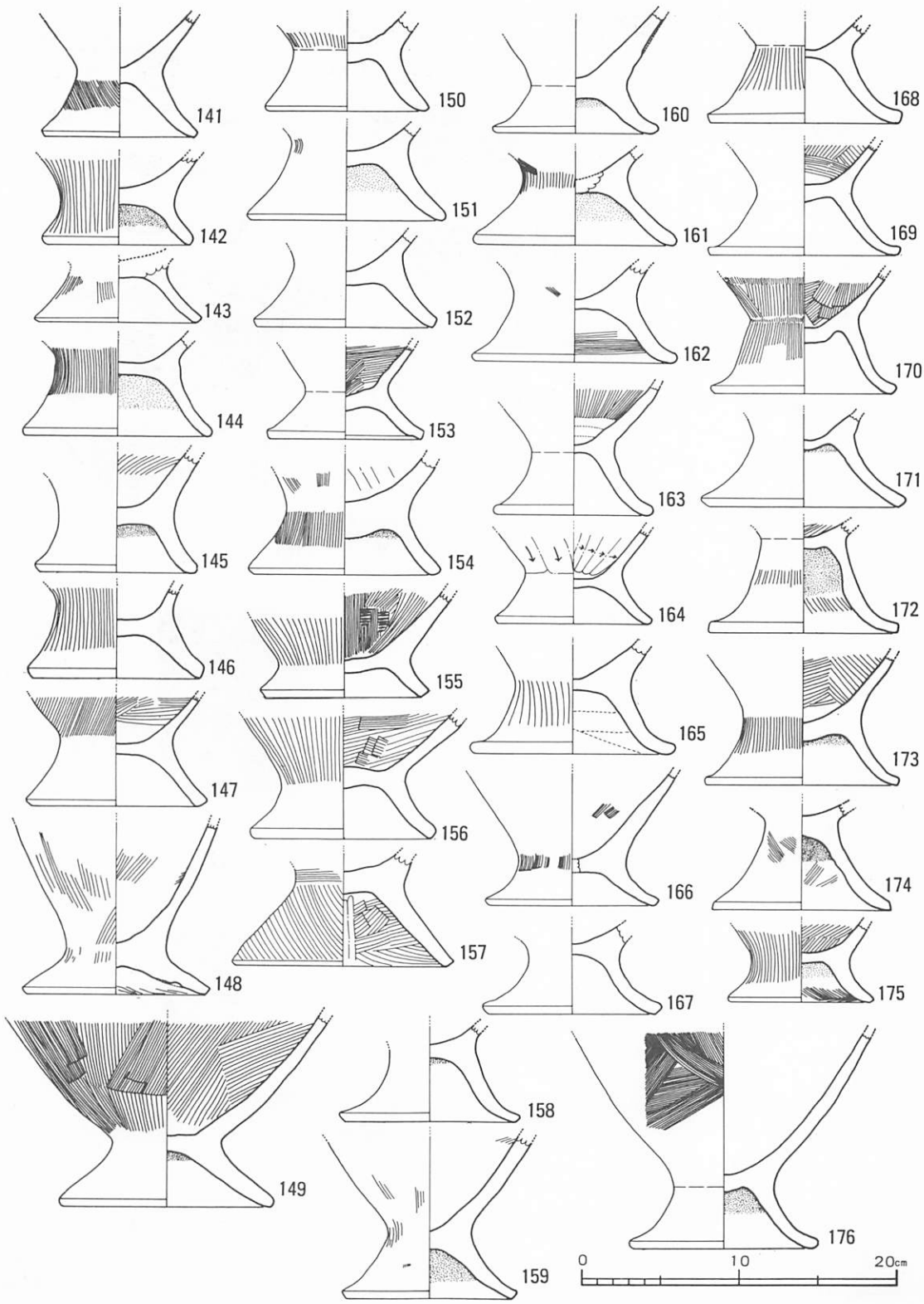
第244図　桜町東原出土把手実測図

畿内[註4]や山陽[註5]地方に見られる水差形土器の把手の形状に酷似する資料である。把手は半環状を呈し、全面にヘラケズリがみられ、断面は楕円形である。体部の残存は僅かであるが、口縁部は「く」字状に外反し、頸部は把手直上に位置する。胴部は球形を呈し、内外面にハケ目を施す。体部形態は、広口壺状を呈すると想定され、いわゆる畿内、山陽地方でみられる水差形土器とは違った形態を示すものと想定される。第244図は、138の関連資料として取り上げたもので、昭和30年頃、熊本県立山鹿高等学校（現県立鹿本高校の前身）考古学部員の手によって、山鹿市桜町東原より採集されたものである。[註6]この採集地点における遺跡の存在等については一切不明であるが、西側 500mには山鹿市桜町環濠遺跡[註7]の所在が確認されている。桜町遺跡は昭和41年、県道来民―山鹿線街路事業に伴い、隈昭志、杉村彰一氏と山鹿高校考古学部員によって調査が行なわれた。

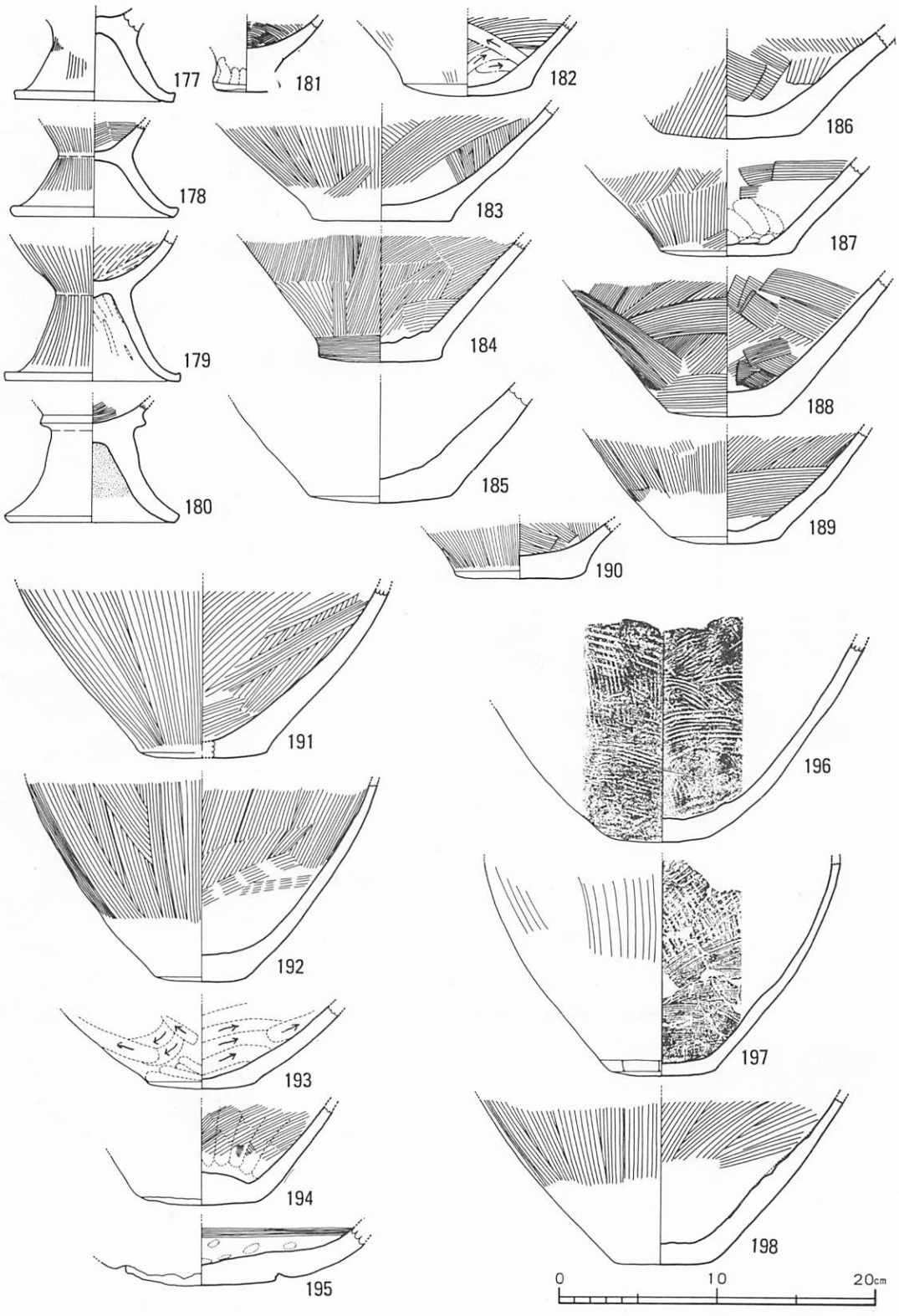
その結果、野辺田期以前の環濠と奈良期の土器捨穴等が検出されており、この遺跡の存在は、把手の採集地点における遺構等の性格を知る一助となる可能性があると考える。把手は棒状の粘土を曲げて、体部に接着したもので、半環状を呈している。全面ヘラケズリの後、ハケ目による調整で仕上げられ、また内面には粘土を曲げた時の皺がみられる。体部は把手付近だけの残存であるが、内外面共に粗いハケ目を施している。器形は不明であるが、残存個所から鉢形を呈すると想定される。 139は甑形土器である。口径15.3cm、器高 8.6cmを測る。器形は漏斗状を呈し、底部中央に一個の円孔を穿っている。円孔は内部より穿ち、外部より調整を行なっている。器外面は、全面に粗いハケ目がみられ、内面には細かいハケ目を施している。 140は注口土器である。復元口径 7 cm、推定器高約13cmを測る。口縁部は、口頸部においては垂直に立ち上り、口唇部直下で大きく外反する。胴部は算盤玉状を呈し、中位直上に張り付けの注口部を設けている。脚台は胴部との付け根より湾曲しながら外反し、内部に砂の付着がみられる。外面口縁部はヨコナデ、胴部下半は細かいハケ目の上からヨコナデを行ない、脚部も同様にハケ目の上からヨコナデを施している。内面胴部は、中位に指圧痕がみられ、下半においては縦方向のハケ目である。また、外壁には虫喰い状の剝離がみられる。この類似品としては、大分県日田市吹上遺跡[註8]の 2 号住居より出土した注口土器があげられる。

141～180は甕の脚台部である。この脚台部は、体部の付け根より裾部に向って直行するものと湾曲するものがあるが、付け根部の締りは、一概にはいえないが直行するものが弱く、湾曲するものが強いようである。 180は、体部との付け根に一条の貼付突帯を巡らしている。器面調整は、ハケ目によるものが大半をしめるが、 164には、内外面共にヘラケズリを施し、 155の底部内面はタタキ目の上からハケ目を施している。また、脚台内部には砂の付着がみられるものがある。

181～198は壺の底部であり、平底と丸底がある。 181は、平底であるが、僅かに高さをもつ。外面には指圧痕、内面は細かいハケ目を施している。 195は丸底であるが、周囲を円形に切り込み平



第 245 図　土器溜め出土遺物実測図（脚）



第246図 土器溜め出土遺物実測図

底状に作り出している。器面調整は、ハケ目によるものが主であるが、 196、 197にはタタキ目がみられ、また、 193は内外面共にヘラケズリである。

199～205は、ミニチュア土器である。 199は口径 2.9cm、器高 3.2cm、底部径 3 cmを測る。器形は盃状を呈し、内外面共に指圧による調整を行なっている。 200は手捏で、茶壺状を呈し、底部は平底である。頸部には小さな粘土粒を押し付けた円形浮文を有するが、何箇所に配してあったかは不明である。 201は、復元口径 6 cmを測る。口縁部は短かく、僅かに外反し、胴部は僅かに湾曲しながら下行する。外面胴部はヘラケズリの上に細かいハケ目を施している。 202は横付きの把手で、半環状を呈し、断面は方形である。全面にナデ調整を行なっている。 203は、傘形の蓋で、口径10.4cm、器高3.9cmを測る。外面は目の粗いハケ目を施し、口径部直上に 2 個の円孔を穿っている。

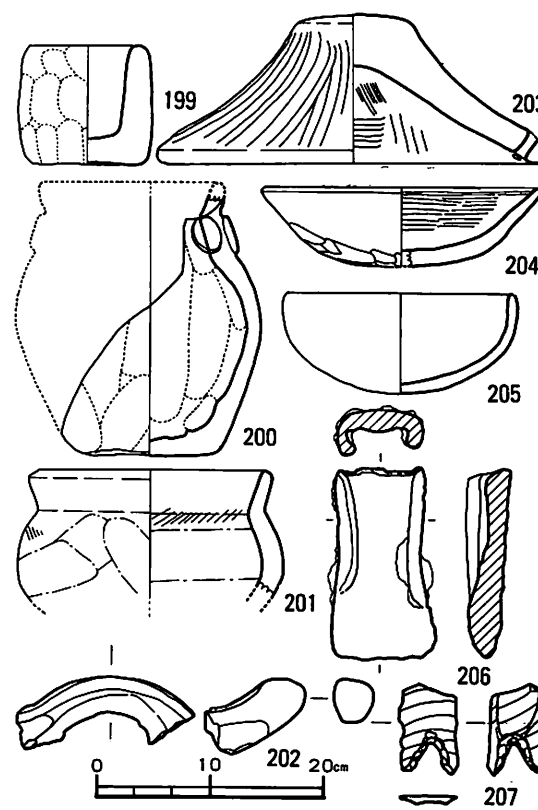
204は、復元口径 7.4cm、器高21cmを測る。底部は平底ぎみで直線的に外反しながら立ち上る。外面口縁部はヨコナデ、底部付近にはヘラケズリがみられる。内面は粗いハケ目である。 205は復元口径 6 cm、器高 2.6cmを測る。手捏であるが、器肉は薄く、焼成も良好である。

鉄器（図版76－ 3 、第 247図－ 206）

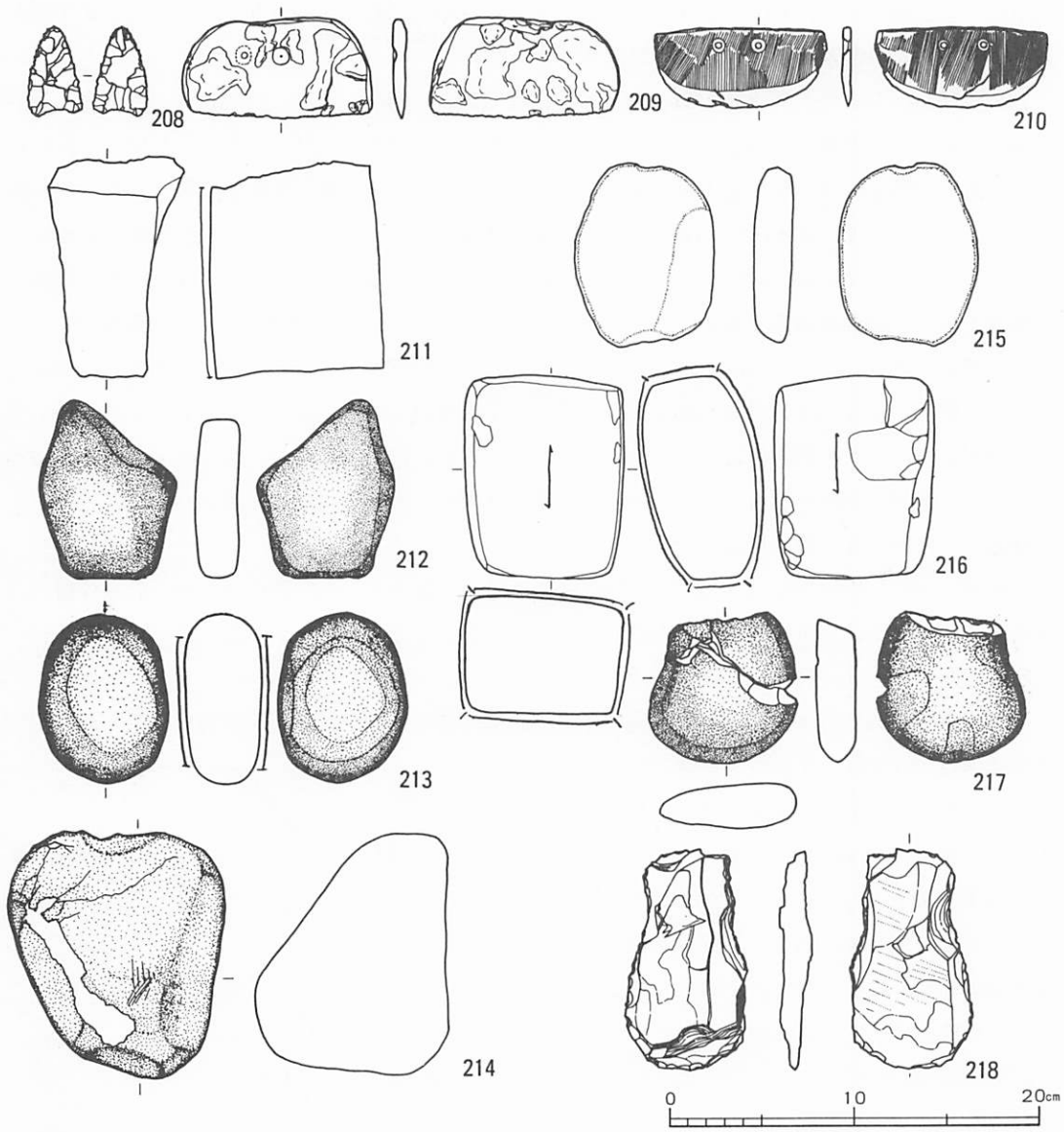
土器溜めの出土遺物で唯一のもので、小型の鉄斧である。長さ 5.1cm、刃幅 2.7cm、袋部外幅 2.3 cmを測る。刃部厚は 0.8cmと厚く、袋部もしっかりしているところからノミ状工具と思われる。

石器（図版87－ 6 ～11、第 247図 － 207、 248図）

207は黒曜石製の石鏃で先端部を欠損する剝片鏃で主要剝離面を残す。調整剝離は基部のみで、抉りは深い。 208は、サヌカイト製の石鏃で、二等辺三角形状を呈し、基部の抉りは浅い。二次加工は押圧剝離で調整するが雑であり、両面に一次剝離面を残している。 209は半月形を呈した石庖丁の未成品である。刃部は直線的で、背部は湾曲している。穿孔は 2 個所にあるが、いずれも貫通には至っていない。また、左孔の上部に未完成の孔があるが、これは当初予定された個所で、その後変更されたものと思われる。この製品は刃部と側辺、背部にかなりの研磨が施されているが、面に関しては穿孔がみられる方に多少の研磨がなされているものの、もう一面に対しては全くなされていない。長さ10.4cm、幅 5.5cm、厚さ 0.7cm、孔間 2 cmを測る。石材は粘板岩である。 210も 209同様に半月形を呈するが、刃部を湾曲側に設け、側辺部はその後、刃潰しにより作り出し、背部は直線的である。穿孔は 2 個所で両面より穿っている。研磨は荒仕上げの段階で、両面には擦痕が残り、刃部も



第 247 図　土器溜め出土遺物実測図



第248図 土器溜め出土石器実測図

整形途中である。石材は粘板岩で長さ 9.4cm、幅 4.4cm、厚さ 0.5cm、孔間 2.2cm、孔径 0.4cmを測る。 211は角閃石安山岩製の石皿で、立方体に成形し、摩滅面は一面である。 212は石錘か磨石かの使用目的が明確ではないが、扁平で全面を研磨し、特に側面についてはかなり磨り滅っている。石材は、角閃石安山岩で、当遺跡ではこの岩石が石錘として多量に使用されている事から、石錘として使用され、側面の磨滅は紐による摩擦のためと考える事もできる。213は楕円の磨石で、全面が磨滅しており、特に両平坦面はよく磨っている。また、側面には敲打によると思われる凹みが顕著にみられる。 214は、三角形状をした自然石だが、数箇所に条痕が認められる。 215は、角閃石安山岩製の石錘である。扁平で全面を研磨している。 216は磨石で、全面が磨れており、長期間使用

した事がうかがえる。 217は、石錘である。石材は角閃石安山岩で、側面には紐摩れの痕跡が顕著である。 218は結晶片岩製で、撥形を呈する打製石斧である。刃部は曲刃で、頭部幅の約 1.5倍あり、胴部は厚く、両側面に抉りを入れている。刃部片面には研磨か摩滅かが不明な痕跡が残る。

（倉原）

註

註 1	髙木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』 6 集	1979
註 2	髙倉洋彰「弥生時代小形仿製鏡について」『考古学雑誌』58－ 3	1972
註 3	山口県教育委員会「右田・一丁田遺跡」『山口県埋蔵文化財調査報告』第19集	1973
註 4	佐原　真「畿内地方」『弥生式土器集成』	1964
註 5	鎌木義昌「山陽地方 II」『弥生式土器集成』	1964
註 6	原口長之「郷土資料目録一考古学関係篇一」第 1 集『熊本県立山鹿高等学校図書館』	1960
註 7	隈昭志・杉村彰一「熊本県山鹿市桜町環濠遺跡調査報告」『熊本史学』34号	1968
註 8	日田市教育委員会「吹上遺跡」『大分県日田市小迫所在弥生遺跡調査概報』	1980

第7章　鹿本高校調査

山鹿工業株式会社が不動産業者へ、敷地の多くを手放したが、その土地の北側に一段落ちた畑地がある。（第3図）この中の一枚の畑地（大字方保田字東原32—1）に宅地建設の計画がもち上ったのが、昭和55年6月初旬のことであった。

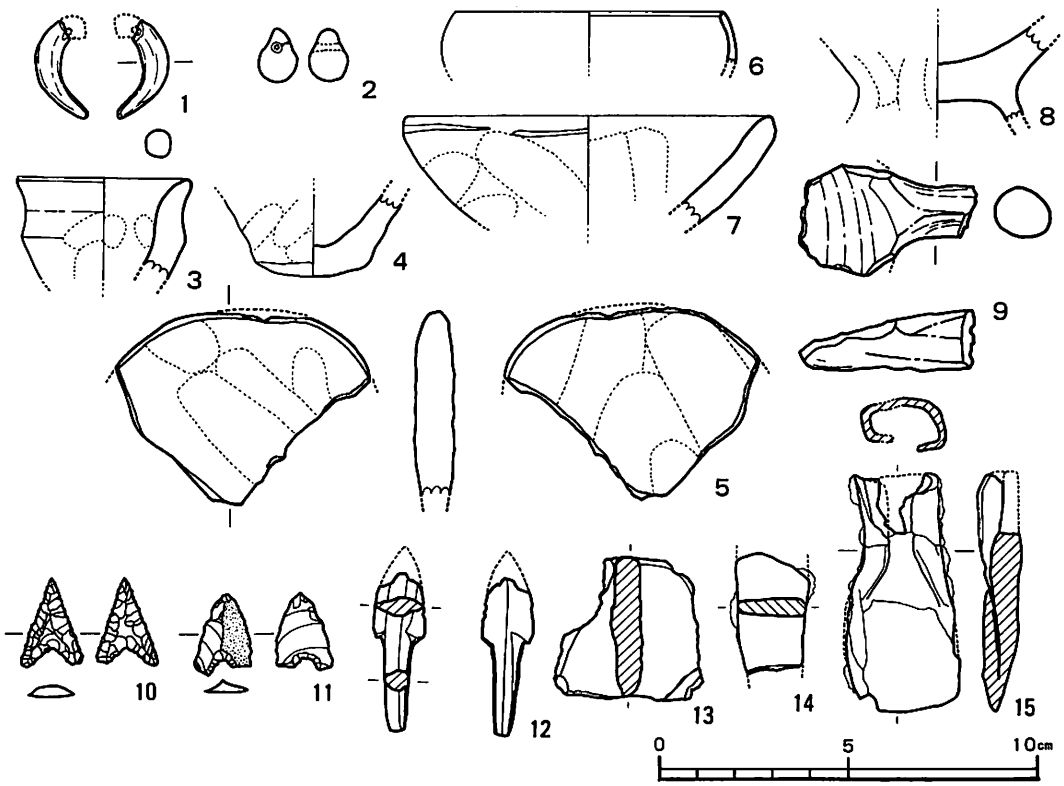
土地所有者、木村則親氏と協議を重ねた結果、発掘調査は上妻信寛氏の指導のもとに、鹿本高校考古学部員の手によって実施するということで、その期間は10月から11月までの週末を利用して行なうこととなった。なお、この報告は上妻信寛氏と鹿本高校考古学部の御好意により掲載させていただいた。

遺構

畑地の南側と西側をカバーしたように「L」字形のトレンチが設定された。トレンチは南側を一辺17m、西側は19mで、幅は3mを測る。南側のトレンチでは、住居跡壁面が確認された。

遺物（図版88、93－3、第249～251図）

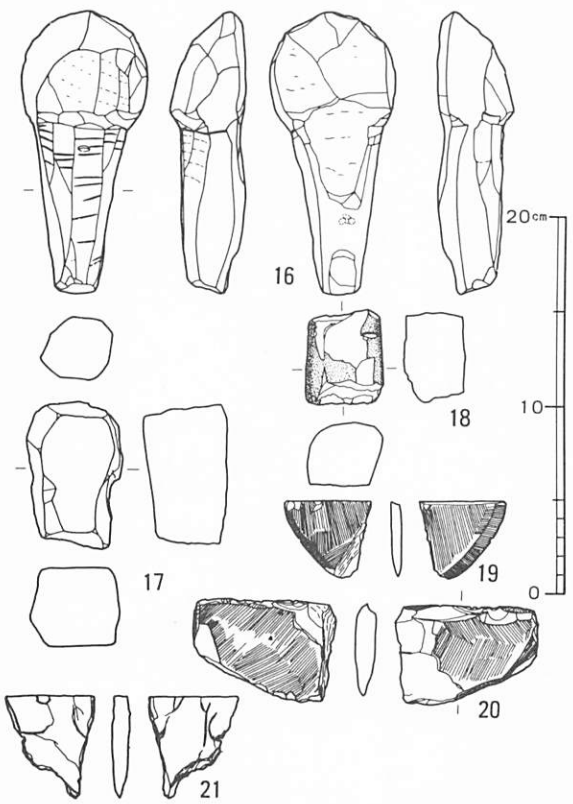
遺物の多くは南側トレンチから出土しており、西側のトレンチからは、僅かに16、17、20、22の



第249図　鹿本高校調査区域内出土遺物実測図

4点であった。そのうち1～5は住居跡より出土している。

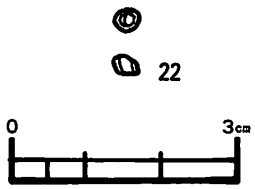
1は土製勾玉である。頭部は円孔から上を欠いていて、細長い感じのする勾玉である。2は土製歩揺である。重さ1.2gで球形を呈し、上部には直径1㎜の円孔を穿っている。この歩揺と勾玉は住居跡内より共伴して出土している。土製歩揺に関しては資料が少なく、類例を知らない。3は手捏土器で、口縁部が外反し、肩部に稜をめぐらしている。器壁は厚く、器面ナデ調整で仕上げは美しい。胎土は砂粒を含まず、焼成もしっかりしている。4も手捏土器で、底部のみの破片である。器面はナデ調整で指頭圧痕を残している。器面はナデ調整で小さな砂粒を含み、焼成はあまり良くない。5は土製品で、用途不明の土版である。ほぼ円形に近い形になり、器面はナデ調整を施し、指圧痕も残している。周縁には、部分的にかすかな浅い沈線を施している。この資料は全体の$\frac{1}{4}$程度の残存状況である。これに類する資料として第Ⅲ次調査№7ピット（第174図）から出土している。共に粘土を手のひらの中で伸ばしたようにしており、メンコ状をなしている。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成も良い。以上が住居跡内より出土した遺物で、祭祀的色彩の強い住居跡である。6も手捏土器である。この土器は器壁がきわめて薄く仕上げてある。7も手捏土器で、器壁が厚く指圧痕を残している。口縁部直下には、浅い沈線をめぐらしている。8は脚台で、裾部を欠いている。くびれ部は指頭によるナデ調整が施されているが、あたかも手捏土器のような雑な仕上げである。器種としても小型の甕の脚台になると思われる。胎土には、小さな砂粒を含み、焼成もきわめて良い。9は土製柄杓で、両端を欠いている。柄は円形の断面を呈し、本体は浅く作られている。胎土は砂粒が少なく、焼き締っている。10は、黒曜石製の石鏃で、両面加工で、わずかに脚部先端を欠いただけの美しい仕上げである。重さは0.7gと非常に軽い。11は自然面を残した剝片鏃で、裏面には主要剝離面を見せた黒曜石製石鏃である。形は不整形で、重さ0.6gを測る。10と共に、縄文時代に属する鏃である。これらはトレンチ内一括として取り上げたものである。12は銅鏃である。先端部を欠いているが、比較的保存状態は良い。器面には青銅のなめらかさが残っている。茎は菱形を呈し、長さ2.6cmを測る。先端部には、僅かに鏑を残している。13～15は鉄器である。13、14は器種不明の鉄器で、15は袋部は先端部を折返した鉄斧である。長さ 6.2cm、刃部幅 2.7 cmを測る。



第250図 鹿本高校調査区域内出土石器実測図

16～21は石器である。16はアルコーズ質砂岩製の石製品で、スプーンを模したものか、男根を模したものか判断しかねるところである。器面は全面加工を施し研磨している。長さ14.8cm、最大幅6.6cmを測り、端部の棒状部分は面どりをしている。現在では男根の可能性が強いと思われる。17はアルコーズ質砂岩製の砥石である。２面に研磨面を残し、他面は欠いている。この砥石は、全体に磨滅を受けているようだ。18もアルコーズ質砂岩製の砥石である。両端部を欠いているが、１面においては、その剝離面を研磨している。研磨は３面を丸味を帯びて施している。19～21は石庖丁でいずれも未製品の段階で欠損している。19は、半月形を呈し、背部を直線にし刃部が弧を描いている。背部は荒く加工したのみで、砥石の痕跡があまり見られない。それに比べると、刃部と側面は共に荒砥を当てており、わずかに仕上げ砥を当てるだけを残した段階といえよう。石材は粘板岩である。20も粘板岩製で、背部および刃部には打撃痕を残している。側面も一部に剝離面を残しており、形を整えている段階といえる。穿孔も、この段階では施していない。21は粘板岩で、荒打ち加工の段階の石材で、背部は自然面を利用している。この段階で破損したため、加工を施さなかったものと思われる。22はガラス製小玉で、青色を呈している。小玉自体は歪んだ形になっているが、中心部には直径1.2㎜の孔を穿っている。このガラス製小玉は、西側のトレンチから出土したもので、同伴する遺物は確認されていない。図版88－５は粘土塊である。長さ4.1cm、幅2.7cmの大きさで、器面は粘土を握り締めた様にシワが多く見られ、中には指紋も残っている。投弾にしてもあまりに粗末な出来具合である。

（中村）



第251図　ガラス小玉実測図

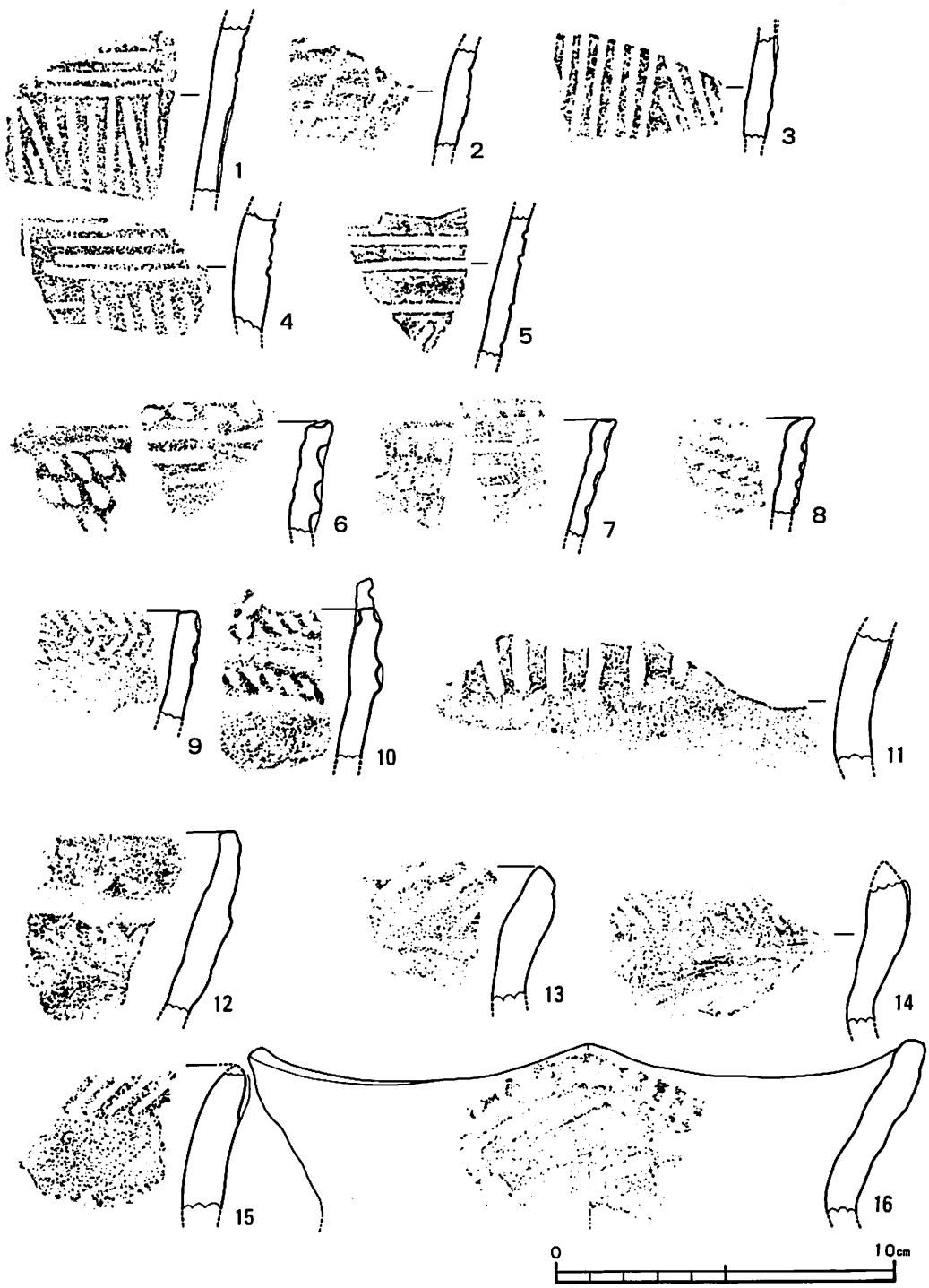
第８章　方保田東原遺跡出土の縄文式土器

今回の一連の調査は、Ⅰ・Ⅱ次調査を除き、遺跡の範囲確認、また、中心部の遺構集中度調査という部分的な発掘に終始したが、総数95点の縄文式土器が出土した。

土器は、Ⅰ次調査からⅣ次調査に至るまで、散在的に出土しており、その範囲はⅠ・Ⅱ次調査区とⅣ次調査区を中心に全域に及んでいるが、中でもⅡ次調査区、Ⅳ次調査の土器溜め、鹿高調査区においてはある程度集中して出土し、また、遺跡西側における農協東側トレンチ、遺跡北端部においては全く出土していない事が確認出来た。また、出土状態は弥生時代の遺構内、もしくはそれよりも上の段階で検出しており、縄文式土器に伴う遺構は、方保田東原遺跡が存在した段階で、完全に破壊されたものと思われる。ただ、攪乱されているものの、そう遠方に移動している可能性は少なく、出土地点の広がりは、ある程度、遺跡の範囲を知る上での一助になるものと思われる。

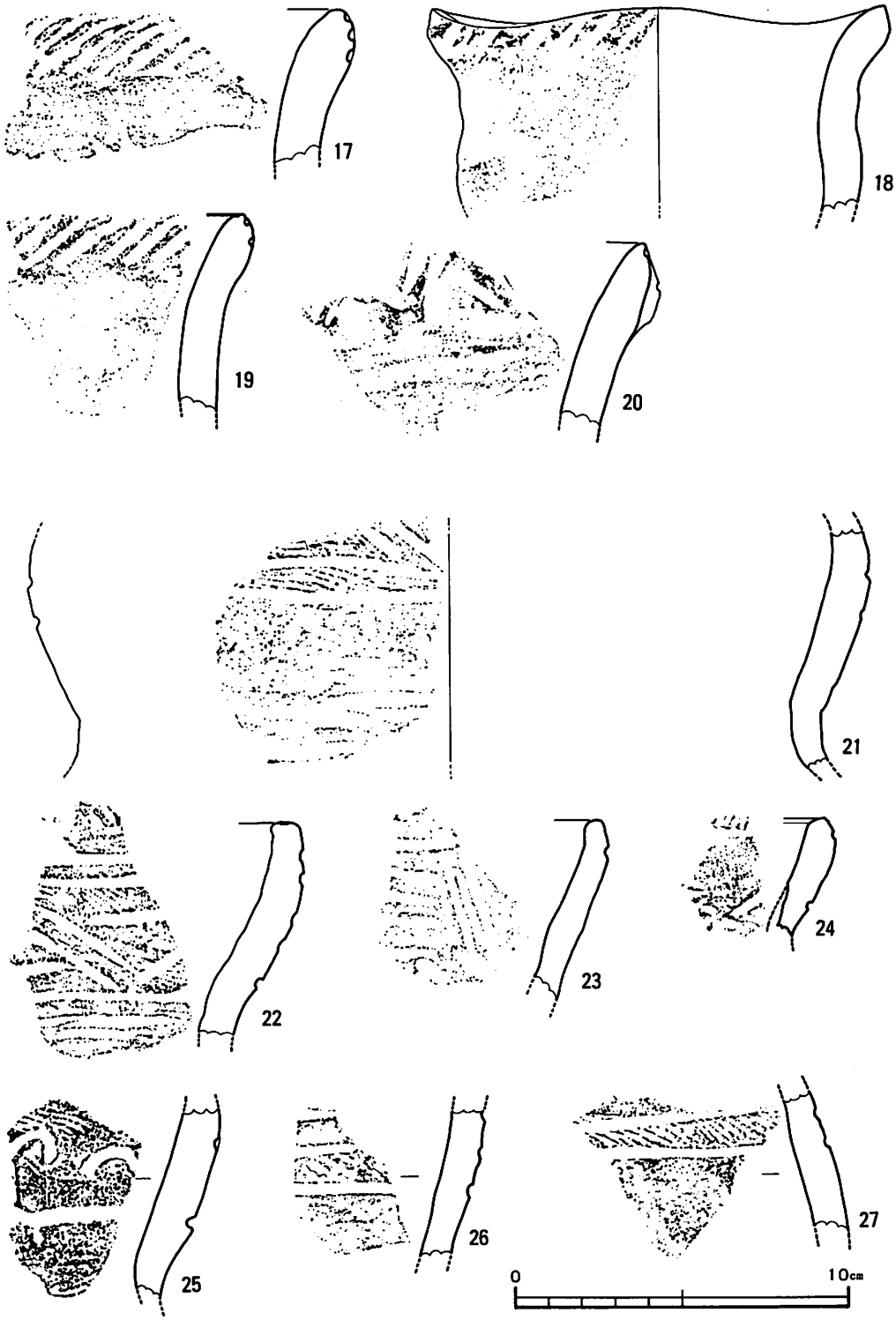
遺物（図版89・90、第252図～255図）

出土した土器は全て破片であり、便宜上有文と無文に分類し、有文についてのみ図化した。ただ両者が同一個体という可能性は大きい。また、文様等から観察して、縄文後期の西平系の土器が多くみられ、中には縄文晩期の研磨土器も含まれている。器形は全て深鉢形土器である。１は胴部片で、表面には横方向と縦方向の沈線を配し、胎土に少量の雲母片を含んでいる。２は口縁部直下と思われる胴部片で、器壁は口縁部に向って肥厚気味になる。器表面は数条の横方向の沈線を配した後、斜行する沈線を施している。このため横位の沈線には多少の歪が生じている。また、胎土は長石と雲母の微粒を多く含み、堅く焼き締っている。３は胴部片で、器表面には数条の斜行沈線文を施し、胎土に滑石と雲母の微粒を多量に含んでいる。４は胴部片である。器壁は全体に肥厚気味で、器表面は２段にわたって横方向と縦方向の沈線を交互に配しており、また内面にはヘラ調整の痕跡が残っている。また、胎土には長石粒を含み、堅く焼きしまっている。５は胴部片で、胎土に石英粒を含み、堅く焼きしまっている。器表面は、数条の横方向の沈線を施し、その下部には僅かだが斜行する沈線を配しているのが観察出来る。６は口縁部片で、僅かに外反する。胎土には、長石と雲母の微粒を含み、堅く焼き締っている。器表面は数条の刺突文を配し、また、口唇部にも一条の刺突文を施している。内面は口縁端部直下より、 数条の凹線文を配している。 ７は口縁部片で、口縁端部は僅かに内湾気味になる。胎土には長石と雲母の微粒を僅かに含み、堅く焼きしまっている。器表面には不規則な数条の刺突文を配し、また、口唇部にも一条の刺突文を配している。内面は口縁端部直下より凹線文を配している。８は口縁端部が外方向に摘み出し、口唇部は内斜している。器表面は４条の粗い刺突文を配し、その直下に僅かだが沈線が観察出来る。内面には３条の凹線文を施している。９は口縁部片で、口縁端部は角張る。胎土には長石と雲母の微粒を僅かに含み堅く焼きしまっている。表面口縁端部直下には、短直線の刺突文を綾杉状に巡らせている。10は口縁部片で、若干内湾気味に立ち上る。口唇部には、小片のために形状不明だが、隆起部を設け、また、口縁部下には一条の隆帯を巡らせている。文様は刺突文で構成され、口縁端部下と隆帯上に各



第252図　縄　文　土　器　実　測　図

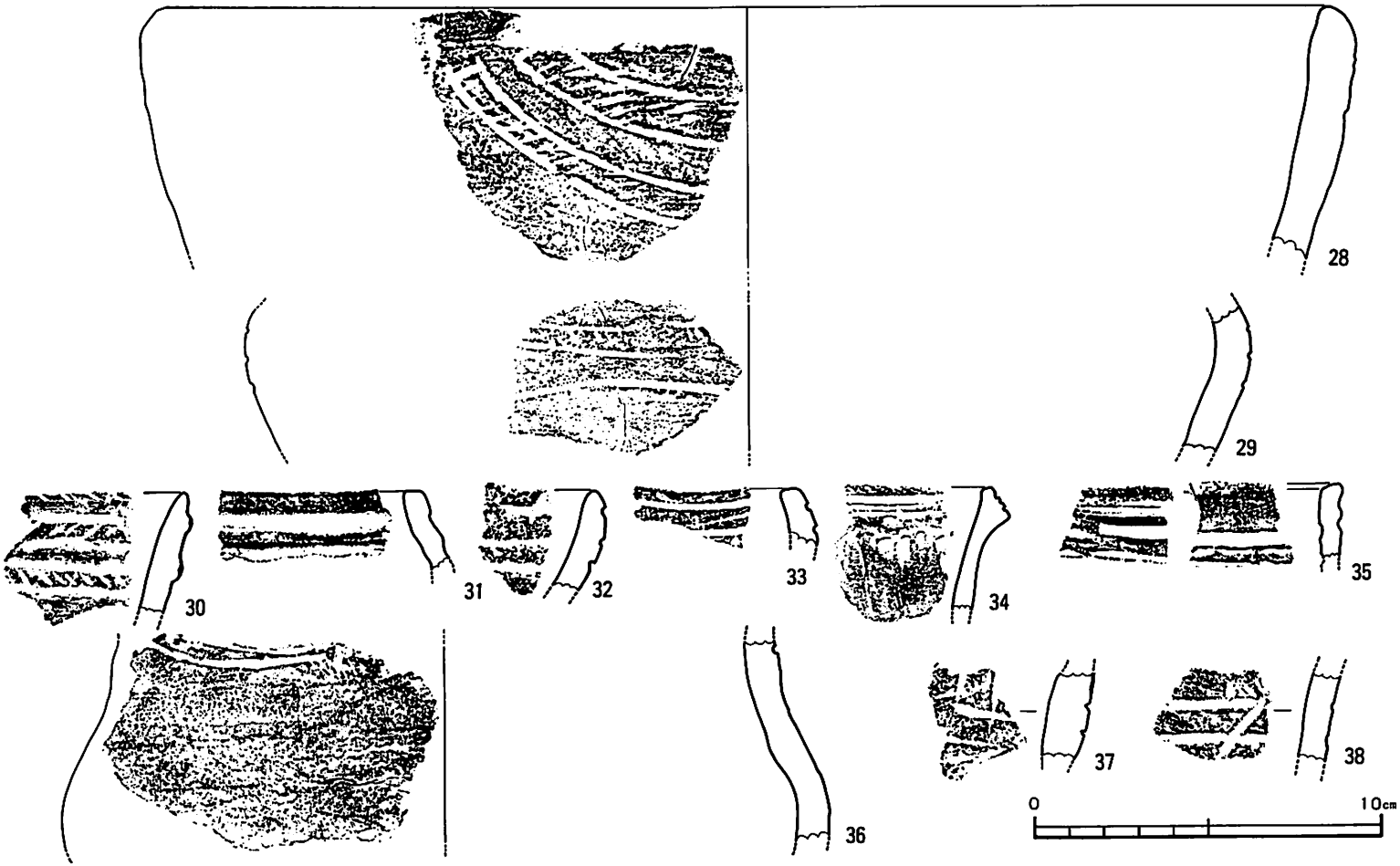
一条を配し、隆起部には縦方向に一条を施している。また、内面隆起部には口唇部延長線上に刺突文を配している。11は頸部片である。胎土には石英と雲母の微粒を含む。器表面には、口縁部へ向って数条の凹線文を施している。12は口縁部片で、若干内湾気味に立ち上る。器壁は口縁端部へ向って薄くなり、胎土には長石粒を含む。器面の調整は雑で、口縁部下に凹線文を施している。また、器表面にはススが付着している。13は口縁部片で、僅かに外反する。口縁端部は内側が尖り気味になり、また、器肉は全体に肥厚気味になる。胎土には長石粒を含み、堅く焼き締っている。器面は口唇部に斜刻目を配し、内面にはヘラ調整を施している。14は口縁部片で、端部を欠く。口縁部は僅かに外反し、端部付近では直立気味になる。胎土には、長石と雲母の微粒を多量に含み、焼成は普通である。また、口縁端部下には斜刻目を施している。15は僅かに外反する口縁部片で、端部を欠損している。器肉は全体に肥厚気味で、胎土には長石と雲母の微粒を含んでいる。また、口縁端部下には彫の深い斜刻目を施している。16は波状口縁部片である。口縁部は外反し、端部はやや角張る。胎土には長石の微粒を多く含み、堅く焼きしまっている。また、口縁端部付近には斜刻目を施している。17は外湾する口縁部片である。器肉は全体に肥厚気味で、端部内側は尖り気味になっている。胎土には雲母を多く含み、堅く焼きしまり、研磨風の仕上げを行なっている。また、短直線状で彫の深い斜沈線文を施している。18は、復元口径13.4cmを測る口縁部片で、外湾し、僅かに波状をなしている。端部は尖り気味になり、胎土には長石粒を多く含み堅く焼き締っている。器面端部下には、斜刻目を施し、内面には条痕がみられる。また、表面にはススの付着がみられる。19は僅かに外湾する口縁部片で、胎土には長石と雲母の微粒を含み、堅く焼きしまっている。また、器外面には短直線の斜沈線文を施している。20は僅かに外反した口縁部片である。黒色を呈し、胎土には長石と雲母の微粒を多く含み、堅く焼きしまっている。また、口唇部下にはW字形の沈線文を巡らせている。21、22は同様の文様形態を持つ資料である。21は頸部片で、口縁部に向って肥厚気味になる。胎土には長石と雲母の微粒を含み、堅く焼きしまっている。文様は沈線文と磨消縄文で構成され、22と照らし合せて観察すると、口縁端部まで配されていると思われる。また、頸部には内外面共に条痕がみられる。22は口縁部片で、内湾気味に立ち上り端部は角張る。胎土には長石と雲母の微粒を僅かに含み、焼成は良好である。文様構成は沈線文を主体とし、沈線文間には磨消縄文を施している。23は口縁部片で、直線的に外反し端部付近では直立気味になる。全体的に器肉は薄く、胎土には長石と雲母の微粒を含み、焼成はあまりよくない。器表面は沈線文を施し、その間には交互に磨消縄文を施し、また、口唇部にも磨消縄文がみられる。24は波状口縁になると思われる口縁部片で、若干内湾気味に開く。器肉は口頸部で、やや肥厚気味となり、胎土には長石の微粒を含んでいる。器表面には沈線文を配し、口縁端部と上部沈線文間には、磨消縄文を施している。25は胴部片だが、破片が偏平なため器種等については不明である。胎土には長石粒を僅かに含み、堅く焼き締っている。器表面には横方向の太い沈線文と短い弧状の沈線文を配し、その上部には磨消縄文を施している。26は胴部片で、胎土に雲母粒を僅かに含み、堅く焼き締っている。器表面には数条の沈線文を配し、その間に磨消縄文を施している。27は胴部片で、文様構成は26と同様である。また、内面には粗い条痕がみられる。28は復元口径33.6cmを測る口縁部片で、内湾気味に僅かに開く。内面口縁端部は尖り気味で、口唇部は外斜する。胎土には長石と雲母の微粒を含み焼成は



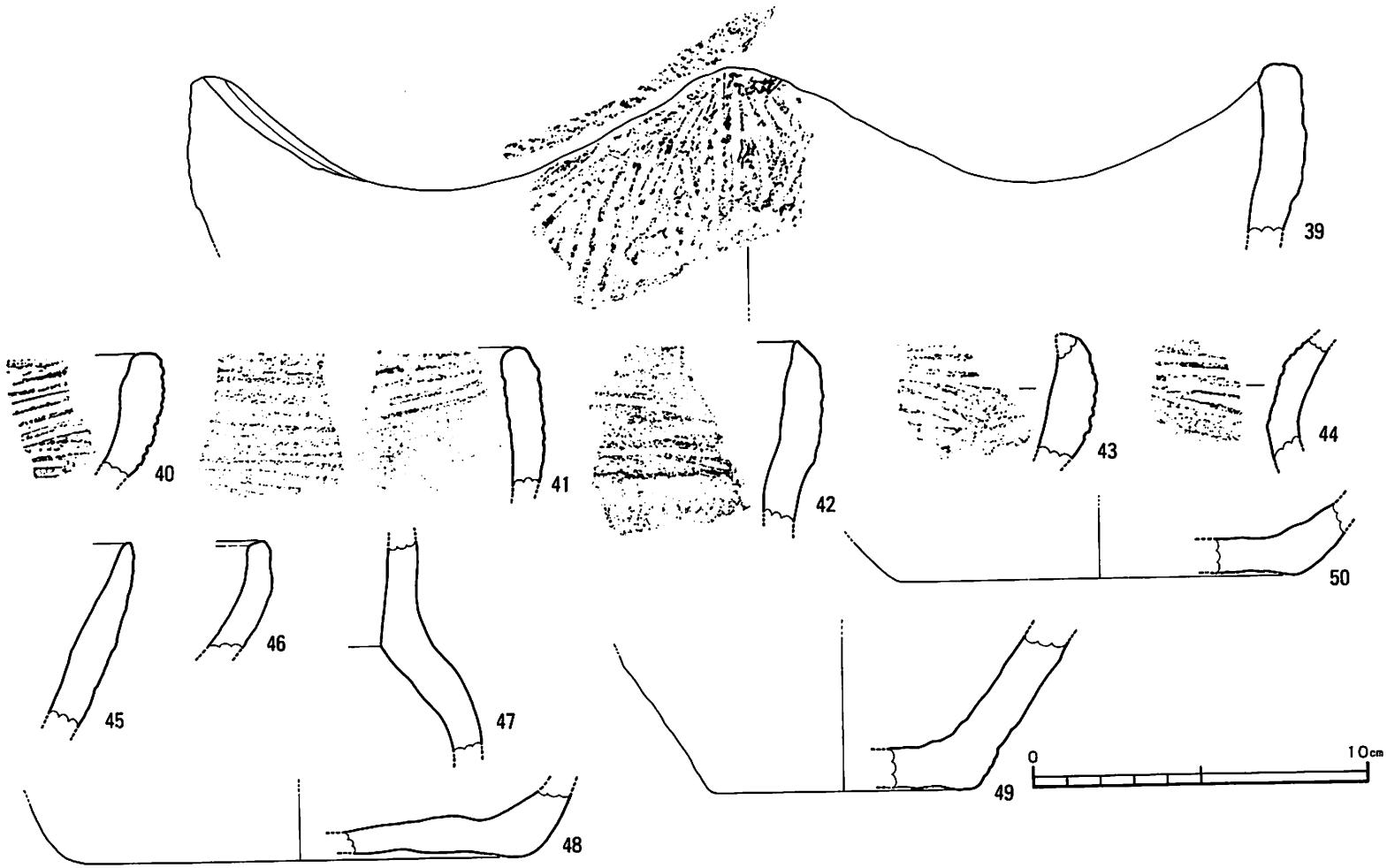
第253図 縄 文 土 器 実 測 図

良好である。器表面には大きな弧状の沈線文を配しているが、この沈線は長短の直線を組み合せて構成しており、また、間には刻目状に施された磨消縄文がみられる。29は胴部片で、最大幅約29cmを測る。胎土には石英と雲母の微粒を多量に含み、焼成は良好である。器表面には湾曲する数条の沈線を配し、その間には磨消縄文を施している。30は口縁部片で、直線的に外反する。器肉は薄く、口縁端部は、やや尖り気味になる。胎土には長石と雲母の微粒を含み、焼成は良好である。器表面には刻目を有する隆帯2条を配し、また、口唇部にも刻目を施している。31は精成土器の口縁部片で、胎土には長石と雲母の微粒を僅かに含み、焼成は良好である。器表面には2条の凹線文を施している。32は口縁部片で、内湾気味に開き、端部は尖り気味になる。胎土には長石粒を多量に含み、焼成はあまりよくない。器表面には数条の横方向の沈線文を配している。33は精成土器の口縁部片である。器表面には横方向の数条の沈線を配している。34は精成土器の口縁部片で、口唇部に2条の磨消縄文を配し、その中央に3条の沈線文を施している。胎土には長石粒を含み、焼成は良好である。35は精成土器の口縁部片で、器内外面に数条の沈線を配している。胎土には長石の微粒を僅かに含み、焼成は良好である。36は頸部片で、表面に沈線文を配し、内面には条痕がみられる。胎土には長石粒を多量に含み、焼成は良好である。37は胴部片で、器表面にはヘラ状工具の先端で施したと思われる沈線文を配し、内面はヘラ調整で仕上げている。胎土には長石と雲母の微粒を含み、焼成は良好である。38は胴部片で、横位と斜位の沈線文を施している。胎土には長石粒を多く含み、焼成はあまりよくない。39は波状口縁を成す深鉢形土器の口縁部片で、復元口径33cmを測る。口縁部は内湾気味に立ち上り、端部は細く尖り気味になるが、隆起部は逆に肥厚気味で、端部は角張る。器表面と口唇部には貝殻条痕を配し、また、胎土には長石と雲母の粒を多量に含み、焼成も良好である。40は口縁部片で、内湾気味に外反し、端部直下が肥厚気味となり、端部は角張る。器表面には、横位の条痕文を配し、また、胎土には長石粒を多量に含み、焼成は良好である。

41は口縁部片で、ほぼ垂直に立ち上り端部は、やや丸くなる。器面には内外面共に条痕文がみられ、胎土には長石粒を含み、焼成は良い。42は直線的に外反し、口唇部は外傾する。器表面には、貝殻条痕文を配し、胎土には石英粒を多量に含み、焼成はあまりよくない。43は口縁部片で、端部を欠損する。器肉は肥厚し、内湾気味に外反する。器表面には貝殻条痕文を配し、また、胎土には長石と雲母の微粒を多量に含み、焼成は良い。44は頸部片で、外面にヘラ調整、内面には条痕文を施している。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良い。45、46は共に口縁部片で無文である。45は直線的に外反し、端部は尖り気味になる。46は内湾気味に開き、口唇部は内傾し、ヘラ調整により仕上げられている。47は精成土器の頸部片で、ヘラ調整により仕上げられている。胎土には長石粒を多量に含み、焼成は良好である。48、49、50は底部片で、平底だが、いずれもやや上げ底気味になる。焼成は良好である。（倉原）



第254図　縄　文　土　器　実　測　図



第255図　縄　文　土　器　実　測　図

表2　方保田東原遺跡出土の縄文式土器一覧表

（有文）

番号	部　位	調査年次	出　土　地	文　様
1	胴　部	Ⅳ	土器溜めD区一括	沈線文
2	胴　部（口縁部直下）	Ⅲ	中央グリッド第1住居	沈線文
3	胴　部	Ⅲ	中央グリッド一括	沈線文
4	胴　部	Ⅳ	土器溜めC－3区	沈線文
5	胴　部	Ⅲ	№2拡張ピット	沈線文
6	口縁部	Ⅰ	6～7住居	刺突文
7	口縁部	Ⅳ	土器溜めA区一括	刺突文
8	口縁部	Ⅳ	土器溜めA区一括	刺突文
9	口縁部	Ⅳ	土器溜めB－4区	刺突文
10	口縁部（リボン付）	Ⅳ	第1住居	刺突文
11	胴　部	Ⅲ	近江工業内№4トレンチ溝底	凹線文
12	口縁部	Ⅳ	第一調査区一括3層上面	凹線文
13	口縁部	Ⅰ	第5住居	斜刻目
14	口縁部	Ⅱ	A－2住	斜刻目
15	口縁部	Ⅲ	№1ピット	斜刻目
16	口縁部	Ⅱ	B地区A－2住居	斜刻目
17	口縁部	鹿	第2トレンチ第2層	斜沈線文
18	口縁部	Ⅲ	近江工業内№1トレンチ	斜刻目
19	口縁部	鹿	第2トレンチ第2層	斜沈線文
20	口縁部	鹿		W字沈線文
21	胴　部	Ⅰ	第20号住居P－5	スリ消疑似縄文 沈線文
22	口縁部	Ⅱ	C地区一括	スリ消し縄文 沈線文
23	口縁部	Ⅰ	ナナシ	スリ消し縄文 沈線文
24	口縁部	Ⅳ	第一調査区土器溜め一括	スリ消し縄文 沈線文
25	胴　部	Ⅰ	第4号住居P－1	スリ消し縄文 沈　線
26	胴　部	Ⅳ	土器溜め東端部	スリ消し縄文 沈　線
27	胴　部	Ⅳ	第一調査区北側拡張一括	スリ消し縄文 沈線文
28	口縁部	Ⅳ	土器溜めB－5区	スリ消し縄文 沈線文
29	胴　部	鹿	第2トレンチ第2層	スリ消し縄文 沈線文
30	口縁部	Ⅲ	№6ピット	刻目凸帯2本

31	口縁部	I	第20住居	凹 線 文
32	口縁部	Ⅳ	第一調査区一括	沈 線 文
33	口縁部	Ⅲ	中央グリッド第1住居	沈 線 文
34	口縁部	Ⅲ	近江工業内№4トレンチ	沈 線 文
35	口縁部	Ⅲ	中央グリッド一括	沈 線 文
36	頸 部	Ⅲ	№7ピット	沈 線 文
37	胴 部	鹿	第2トレンチ第2層	沈 線 文
38	胴 部	鹿	第2トレンチ第1住居	沈 線 文
39	口縁部	II	B－1住居	貝殻条痕
40	口縁部	II	A区一括№2ピット内	条 痕
41	口縁部	Ⅲ	№7ピット	条 痕
42	口縁部	II	B－2住居	貝殻条痕
43	口縁部	Ⅲ	南側トレンチ	貝殻条痕
44	頸 部	II	A－2住居床面	外面 ヘラ調整 内面 条 痕
45	口縁部	Ⅳ	第5住居一括	
46	口縁部	Ⅳ	土器溜めB－4区	ヘラ調整
47	頸 部	Ⅲ	南側トレンチ拡張部	ヘラ調整
48	底 部	I	一括	
49	底 部	II	A－2住居床面一括	
50	底 部	II	A－2住居床面一括	

(無文)

51	胴 部	Ⅵ	第1調査区一括	スリ消し縄文 沈 線 文
52	胴 部	I	第8住居	ヘラ調整
53	胴 部	II	A－2住居	ヘラ調整
54	胴 部	II	A－2住居床面一括	ヘラ調整
55	胴 部	II	A－3住居	ヘラ調整
56	胴 部	II	A－3住居	
57	胴 部	II	A－4住居床面	ヘラ調整
58	胴 部	II	A地区一括	ヘラ調整
59	頸 部	II	A地区一括	ヘラ調整
60	胴 部	II	B－1住居	沈線文？ ヘラ調整
61	底 部	II	B－1住居	ヘラ調整
62	頸 部	II	B－1住居	内面 ヘラ調整
63	胴 部	II	B－1住居	

64	胴　部	II	B地区第4土壙№1ピット	ヘラ調整
65	胴　部	II	B地区第4土壙№1ピット	
66	胴　部	II	C地区一括	
67	胴　部	II	C地区一括	
68	胴　部	II	C地区一括	
69	胴　部（底部付近）	II	C地区一括	ヘラ調整
70	胴　部	II	C地区一括	
71	頸　部	III	北側トレンチ	ヘラ調整
72	頸　部	III	南側トレンチ	ヘラ調整
73	胴　部	III	南側トレンチ	ヘラ調整
74	胴　部	III	№7ピット	ヘラ調整
75	胴　部	III	№7ピット	ヘラ調整
76	底　部	III	№7ピット	
77	頸　部	III	№7ピット	ヘラ調整
78	胴　部	III	№7ピット	ヘラ調整
79	胴　部	III	№8ピット	ヘラ調整
80	胴　部	III	№8ピット	ヘラ研磨？
81	胴　部	III	近江工業内№1トレンチ	
82	胴　部	IV	第一調査区4号住居	
83	胴　部	IV	第一調査区一括	
84	口頸部？	IV	第一調査区一括	表面　ヘラ調整 内面　条　痕
85	胴　部	IV	第一調査区一括	
86	底　部	IV	第一調査区一括	
87	胴　部	IV	北側拡張部土器溜め一括	
88	頸　部	IV	土器溜めA区一括	
89	頸　部	IV	土器溜めD区一括	ヘラ調整
90	底　部	IV	土器溜D区一括	
91	胴　部	鹿	第2トレンチ1号住居	表面・内面　沈線の上からヘラ調整
92	底　部	鹿	第2トレンチ第2層	
93	底　部	鹿	第2トレンチ第2層	
94	胴　部	鹿	第2トレンチ第2層	
95	胴　部	鹿	第2トレンチ	ヘラ調整

第9章　考　　察

第1節　方保田東原遺跡出土の土器の編年(案)

はじめに

中九州における弥生時代終末から古式土師器にかけての土器の編年は、今日詳細なる検討がなされている段階といえよう。これまで、弥生時代終末期の土器については、昭和26年、野部田式土器として設定されて以来[註1]、乙益重隆[註2]、佐藤伸二[註3]、松本健郎[註4]、高野啓一[註5]、勢田廣行[註6]、高木正文[註7]各氏の論考がある。これらは地理的にも異なり、多少地域性も認められるところから、中九州地方における編年作業は今後の課題として残されていると言える。特に中九州としてとらえる場合には河川流域別にとらえる必要があり、その意味からも方保田東原遺跡出土の土器の編年を行なうものである。編年作業に際して、ここで取り扱った遺物は全て遺構に伴ったもので、特に先後関係の明らかなものを中心に編年を行なった。調査の結果この遺跡においては次のような切り合い関係が見られる。(表－3参照)

表3　方保田東原遺跡遺構重複関係一覧

(古←新)

第Ⅰ次調査	第Ⅱ次調査	第Ⅲ次調査	第Ⅳ次調査
4住←5住	A－4住←A－3住←A－2住	西側トレンチ　2住←1住	2住←1住←3住
22住←2住		近江工業内トレンチ　3住←2住	8住←4住
25住←10住		1号溝←4住	6住←5住
21住←20住		2号溝	7住
9住←8住		№3ピット　1住←2住	
24住←13住		№4ピット　1住←2住←3住←4住	
12住←14住		№5ピット　1住←2住	
15住　6住←17住		中央グリッド　3住←5住	
3住……16住			

また、遺構に時間的位置付けを行なった場合大きくⅠ～Ⅴ期に分けることができた。さらに甕の型式によってそれらを細分化して11時期の設定が可能であり、次のような結果を得ることができた。(表－4参照)なお、補足的に同一器形を出土する遺構の土器を使用している。

編年について

先にも述べたように、この遺跡における弥生終末期から古式土師器にかけての土器の編年は大きくⅠ～Ⅴ期に分れ、さらに、Ⅱ期～Ⅲ期を各a、bの2期に分けることができ、Ⅴ期においてはa～d期に細分することができた。以下各時期における特徴を述べてみることにする。(付図1参照)

表4　方保田東原遺跡遺構編年表

時　期		第Ⅰ次調査	第Ⅱ次調査	第　Ⅲ　次　調　査	第Ⅳ次調査
Ⅰ				北側トレンチ黒色ピット	土器溜め
Ⅱ	a	22住、15住	A－4住	中央グリッド4住	〃
	b	2住、6住、12住	西側土器溜め A－1住、A－3住	近江工業内2号溝底 農協東側トレンチ溝底	〃
Ⅲ	a	1住、14住	東側土器溜め A－2住、B－2住	近江工業内2号溝内 〃　1号溝内	
	b	7住、20住 23住	B－1住	〃　2号溝上 〃　2住、4住	
Ⅳ	a	9住		№1ピット 中央グリッド1住、農協東側トレンチ溝中	6住、7住
	b	3住、5住、17住	D－1住、D－2住	中央グリッド1住、№2ピット土器溜め	
Ⅴ	a	8住、10住		近江工業内4トレ2号溝上	土器溜め 1住、5住、8住
	b	13住、18住		№3ピット	土器溜め 3住、4住
	c			№2ピット土器溜め	土器溜め
	d			〃	〃

Ⅰ期

第Ⅲ次調査北側トレンチ、黒色ピット内出土土器を中心とした時期で、弥生時代後期後半に比定できる。鋤先形口縁を有した壺（1）、高坏（3）を主体としている。壺においては頸部および胴部に数条の貼付突帯をめぐらし、刻目を配しているもの（2）も見られる。高坏は大型で口縁部は水平を呈している。鉢は口縁部が短かく外反し、頸部には貼付突帯を配しているもの（5）もある。胴部の張りは少なく、やや上位に位置している。底部は平底になる（4）。甕、器台、ジョッキ形土器の出土は見ることができなかったが、今後補足してゆかなければなるまい。

Ⅱ期

在地系の甕にはハケ目を施し脚台を付けたもので、地方色の強い甕を有する時期である。この時期は高木正文氏の言う津袋Ⅰ、Ⅱ期に相当し[註8]、ここでは、a、b期として取り扱った。

Ⅱ－a期　第Ⅱ次調査、A－4号住居跡第Ⅲ次調査中央グリッド4号住居跡が相当し、一部第Ⅳ次調査土器溜めの遺物を補足している。この時期の甕は在地系のものを主体にしており、口縁部が「く」字状に外反し、最大径を胴部上位に有している。底部は脚台となっていて、器面調整は内外面共にハケ目を施している。口径および胴部最大径が大きく、ずんぐりとした感じを与える（6）。壺は数種見られるが、いずれも頸部に三角貼付突帯（10、11、12）や、沈線（8、9）をめぐらしている。前者はⅠ期からの流れを継承しており、その後沈線への変化を見せているものと思われる。胴部の張りは上位に位置し丸底に近い平底になる。器面調整は全面ハケ目を施している、鉢は口縁部を「く」字状に開き、胴部が深く、尖り気味の丸底になるもの（14、15）と脚が付くもの（16）と見られる。器面調整はハケ目を施している。高坏、ジョッキ形土器、器台についてはセット関係としてとらえることができなかった。

Ⅱ－b期　第Ⅲ次調査近江工業内2号溝底部出土の土器を主体としており、この他に第Ⅰ次調査2号住居跡、第Ⅱ次調査A－1、3号住居跡、西側土器溜め、第Ⅳ次調査土器溜めの遺物が比定で

きる。

甕は在地系で、口縁部が「く」字状に外反し、胴部の張りは小さく、中位に位置し、長胴である。底部は脚台となっている（17)。また、小型の甕もあり、口縁部が短かく「く」字状に外反し、胴部の張りが大きく中位に位置している。そのため丸味のある感じを与える。底部は脚台（18）と平底（19）とがある。壺、II－a期に比べても器種が多く確認されている。特にこの時期においては、頸部に櫛描による直線文（25、27）や波状文（26)、さらには簾状文（28）を施している。胴部には円形浮文を配するもの（25、27）も見られる。短頸壺においては、先の小型甕（20）とセットで出土しており、口縁部等の特徴からも、これがどのような流れをもつものであるかは不明である。ジョッキ形土器は中広把手を有していて（33、34)、口径と底部径がほぼ同じで、器高と比べると、スマートな感じに見える。高坏は完形品がなく、坏部と脚部の関係が不明確であった。坏部は口縁部が短かく直線的に開き、胴部も浅く仕上げている(35)。脚部は柱状部が高く、裾部は内湾気味に広がっている。（36、37)。円孔は3～4個配している。器面調整はハケ目を施している。なお、坏部脚部接合に際して粘土を詰めている。器台、口径と底径の差異が認められ、胴部のくびれは上位に有し、くびれ部の径は小さい（38・39)。鉢・広口壺気味のもの（40）とマリ状のもの（41～44）とがある。特に41～43は口縁部が直口し、口唇部はやや内行気味で平坦に切られている。底部は尖り気味の丸底である（43)。

III期

この時期は、在地系の甕にタタキ目を施し、なおかつ底部は脚台を有したもので、丸底に移行する直前の段階で、外来系の甕の出現を見ない時期である。弥生式土器から古式土師器への移行期と考えられる。これもａ、ｂの2小期に分けることができる。

III－a期　第III次調査近江工業内第2号溝中より出土した土器が主体で、その他に第I次調査1、14号住居跡、第II次調査A－2号住居跡、東側土器溜め、第III次調査近江工業内第1号溝中出土遺物が比定できる。

甕は在地系で、口縁部を「く」字状に反り気味に開き、中位がわずかに厚くなるものも見られる（45)。胴部の張りは中位に位置するが、張りの強いもの（45）とゆるやかなもの（46）がある。底部は欠いているが脚台を有すと思われる。器面調整はタタキ目の後ハケ目を施しており、内面においてはハケ目調整である。また、口縁部が短かく、胴部が強く張るもの（47）も見られ、これは（18、19）の流れを継承するものであろう。壺、口縁部には地方色が強くなっており（48、49)、頸部においては刺突文を配している（50、51)。ジョッキ形土器においてはわずかに器壁が薄くなっている（52)。高坏はやはり坏部と脚部に分れており、坏部については口縁部が外反気味に大きく開き、胴部が浅いもの（53、54）と、口縁部が内向気味に直口し、胴部の深いもの（55）に分れる。脚部は柱状部が長く、裾部は内湾しつつ広がっており、ハケ目調整を施している（56)。

器台はくびれ部を胴部上位に有し、底部に向って大きく広がる（57、58)。鉢は口縁部が「く」字状に開き、胴部は球状をなし、底部に脚台がつくもの（59）と、口縁部が直口したもの（60、61）がある。

Ⅲ－b期　第Ⅲ次調査近江工業内２、４号住居跡出土の遺物と、１、２号溝上面より出土したものを主体としている。この他に、第Ⅰ次調査20号住居跡、第Ⅱ次調査Ｂ－１号住居跡が見られる。

甕は在地系で、口縁部がわずかに内湾しつつ直線的に「く」字状に開き、胴部の張りが小さく胴長となる。底部は欠いているが、脚台が付くものと思われる。器面にはタタキ目とハケ目を施し、内面はハケ目で調整している。この土器は、熊本県大津町西弥護免遺跡出土の甕に比定できよう。[註9] 壺においても、外面の調整にタタキ目を施しているもの（65、66）が見られるようになり、頸部においても文様を施してないものも見られる（68)。しかし、(67）については外部（瀬戸内、東九州方面）からの影響を多く受けており、櫛描文を施している。ジョッキ形土器は、胴部のくびれと底部径の差が大きくなっている。高坏は口縁部が短かく、胴部がやや深い坏部（70、71）と、柱状部が短かく、裾部も直線的に開く脚部（72）が見られ、さらに小さな脚を有したもの（73～75）も新たに出現した。器台は、口縁部と底部の径がほぼ同じとなり、くびれ部も径が大きくなって、上位に有している。なお、口唇部には刻目を配している（76)。鉢は、口縁部を「く」字状に開き、胴部がほぼ直線的に底部に向うもの（77）と、胴部中位に最大径を有し、丸底になるもの（78)、さらに、脚台の付くもの（79）がある。また、口縁部が直口するものは、胴部が深いもの（80）と、口唇部が内向しているもの（81）がある。

Ⅳ期

この時期においては外来（畿内）系の甕が現れ、在地系の甕においても長胴、丸底となり、タタキ目を主に施している。方保田東原遺跡において、この時期から大量の外来系の甕がもたらされている。庄内期に比定できる。なお、この期も２期に分けることができた。

Ⅳ－a期　第Ⅲ次調査中央グリッド１号住居跡、№１ピット、第Ⅳ次調査７号住居跡が主体となって、第Ⅰ次調査９号住居跡、第Ⅲ次調査№２ピット土器溜め、農協東側トレンチ溝中遺物が比定できる。

甕は在地系（82）と外来系（83、84）がある。在地系は口縁部が外反気味に「く」字状に開く。胴部の張りは小さく、中位に最大径を配している。さらに長胴で底部は丸底となっている。器面調整は、外面には水平方向のタタキ目とハケ目を施し、内面においては全面ハケ目を見ることができる。外来系は小形になり、口縁部は外反気味に「く」字状に鋭く開き、口唇部をわずかにつまみ上げている。頸部はシャープな稜線をめぐらし、外面においては凹線を見ることができる。器面調整は、頸部直下では水平方向、肩部では右上りのタタキ目を施し、その後ハケ目を施している。内面は全面ハケ目である。底部は尖り気味の丸底と、小さな平底（84）が在る。壺、ここでは２種類が確認されていて、口縁部が直口するもの（85）と、開くもの（86）に分けられる。(85）は（82）と同様で、セット関係でとらえられるものである。(86）は胴部の張りが強く、上位に位置していて、細かなハケ目と、内面はヘラケズリを行なっている。器台、ここでは沓形器台を見ることができる。(87)。県内では２例目で、[註10] 北九州的要素の強い土器である。鉢は口縁部を直線的に「く」字状に開き、胴部の張りが上位に有しているもの（88、89）と、口縁部が大きく開き直口しているもの（91、92）が見られる。後者については、Ⅱ、Ⅲ期に比べるとやや深めの鉢になる傾向がある。

Ⅳ－b期　第Ⅲ次調査中央グリッド1号住居跡を主体とし、第Ⅰ次調査3、5、17号住居跡も比定できる。甕は在地系（93）と、外来系（94）とがある。在地系はⅣ－a期のものに比べ器壁が厚く、粗雑に作られている。器面調整もタタキ目やヘラケズリが施されている。外来系は、Ⅳ－a期（93）とあまり変りなく、わずかに内面においてヘラケズリが現われてくる。また、胴部は倒卵形を呈し、最大径を胴部中位に有している。底部は尖り気味の丸底である。壺では、口縁部が直口気味にわずかに開くもの（96）と、複合口縁のもの（97、98）が見られる。器面調整はタタキ目(96)、ハケ目（97）があり、櫛描波状文も見られる（97)。ジョッキ形土器は、器高に比べ口径が大きくなっている。高坏は資料が少なく、わずかに2点であった。柱状部が短く、裾部が大きく開いたもの（100）で、坏部は椀状をなしたものもある（101)。鉢は、これまでのものに加え坩状をなすものも見られる（103)。

Ⅴ期

在地系の甕が姿を消し、外来系（布留期）の土器が主体となる時期で、甕の特徴からa～dの4期に分けた。

Ⅴ－a期　第Ⅰ次調査10号住居跡を主体とし、5、8号住居跡も比定できる。

甕は、口縁部がわずかに内湾気味に「く」字状に開き、口唇部は内側へつまみ上げている。頸部は丸味を帯び（10）Ⅳ期に見られたようなシャープな稜線は見られない。胴部は、中位よりやや上部に最大径を有し、その張りは強い。底部はあまり尖らず、丸底である。器面調整は外面では全面ハケ目を施し、肩部には横方向のハケ目を施している。内面はヘラケズリで、器壁はきわめて薄く仕上げている。壺は、算盤玉状を呈したもの（109）見られる。高坏は大型（110～113）と、小型（114、115）に分れ、大型では口縁部が長くなるもの（110、111）と、短く直口するもの（112）が見られる。小型のものは坏部が大きく、脚部が小さくなっている。器台は皿型の受部を持ち、受部と脚部が貫通する小型の器台で裾部が大きく開くもの（116）と、内湾気味に開くもの（117）がある。これらは畿内的要素を多く含む器台である[註11]。鉢は、大型のもの（119）と、坩状（118）と、口を大きく開いた椀状のもの（120、121）が見られる。

Ⅴ－b期　この時期には、第Ⅰ次調査13、18号住居跡、第Ⅲ次調査近江工業内第4トレンチ2号溝上面、№3ピット、第Ⅳ次調査3、4号住居跡、土器溜めの遺物が比定できる。

甕、口縁部は内湾しつつ「く」字状に開き、口唇部は水平か、内側をつまみ上げている。頸部は比較的ゆるやかで、胴部は張りが強く最大径を中位、もしくはやや上位に有している。肩部にはハケ目による波状文を施す。器面調整は外面では全面ハケ目、内面は全面ヘラケズリを施している。底部は丸底になる（122)。壺、ここでは超大型の壺がある（123)。口縁部は複合口縁で、頸部には突帯をめぐらし、さらに刻目を施している。この土器は、福岡県柏田遺跡[註12]や、二本木遺跡[註13]でも出土しており、瀬戸内、東九州的要素をもつ土器である。高坏は口縁部が長大になり、胴部をわずかに残している（127、128)。脚部は柱状部に比べ、裾部は水平に近い形を呈している（129)。器台は受部と脚部が貫通せず、受部が浅くなっている(131)。鉢は口縁部が短かく「く」字状に開き、胴部が大きくなっている（132～134)。

Ⅴ－c期　この時期には遺構としては確認されず、第Ⅲ次調査№2ピット内における土器溜めと、第Ⅳ次調査土器溜めの遺物を主体とした。

甕、口縁部は内湾しつつ「く」字状に開き、口唇部は大きくふくらんでいる。胴部の張りは中位よりやや上部に位置し、倒卵形を呈している。器面調整は外面ではハケ目、内面ではヘラケズリやナデ（137）が見られる。壺、口縁部が大きく開き、口唇部においてはわずかにつまみ上げている（138）。胴部は球形で、最大径を中位からやや上部に有している。器面調整は外面ではハケ目、内面においてはヘラケズリである。

Ⅴ－d期　この時期もc期と同様遺構は確認されていない。

甕はc期に比べても口縁部の内湾が著しく、口唇部のふくらみも強い。胴部は球形をなし、最大径は中位に有している。器面調整は外面をハケ目、内面をヘラケズリで施している。壺、c期の壺と同様で、長胴のもの（141）と球形を呈すもの（140）がある。

時間的位置付け

弥生時代終末期においては地方色が強く表れ、中九州の中においても菊池川流域や、白川流域、さらには球磨川流域においては、土器の様相が大きく異なっている。ましてや、九州全体の中での時間的な比較は、現時点では困難であろうと考える。今後残された問題としては流域別の編年を作成し、それをもとに他地域との比較を行なうべきであろう。

この編年において弥生式土器と古式土師器の接点をどこに求めるかについて考えなければならないが、この方保田東原遺跡においては、Ⅲ期、在地系甕が主で、脚を有しているものを最も新しい弥生式土器とし、Ⅳ期、丸底に変化し、なおかつ外来系の甕が出現した時を最古式の土師器として考えた。

今後の課題　最後に、ここに取扱った土器は、出土した土器の総数から見てもごくわずかの量に過ぎない。今後の課題として、ここに記載し得なかった遺物の時間的位置付けを考えてゆかなければなるまい。　（中村）

註

註1　田辺哲夫『野部田遺跡発掘調査中間報告』　1953

註2　乙益重隆「中九州地方」『弥生式土器集成本編』　1968

註3　佐藤伸二「中九州に於ける弥生終末期土器の諸問題」『熊本史学』第35、36合併号　1970

註4　松本健郎「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』第60巻第3号　1974

註5　高野啓一「古閑遺跡出土の弥生終末期の土器について」『熊本史学』第45号　1975

註6　勢田廣行「山鹿市方保田白石遺跡出土古式土師器について」『古文化談叢』第6集　1979

〃　「竜北・高塚遺跡の古式土師器について―熊本県内出土複合口縁壺について―」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』　1980

註7　高木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集　1979

註8　註7に同じ

註9　『西弥護免遺跡調査概報』西弥護免遺跡調査団　1980

註10　隈　昭志「原始・古代」『植木町史』によれば、熊本県菊池郡泗水町古閑原遺跡より1点採集されている。

註11　『纓向』橿原考古学研究所編　1976

註12　『柏田遺跡の調査』下巻、山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第4集　1977

註13　『大野原の遺跡』大野町教育委員会　1980

第２節　熊本県下における弥生時代青銅製品出土分布について

弥生時代における青銅製品のもつ意義については、権力の象徴や祭器としての性格をもつものとして知られている。

熊本県下における弥生時代青銅製品の出土は、36遺跡（うち所蔵５箇所を含む）53点が出土している。その内訳と分布については表－５と第256図に見られるように、県北部に集中して出土し、河川に沿った分布を示している。

河川流域別に出土状況を見てみると、菊池川流域に18遺跡28点、白川流域に11遺跡15点、筑後川水系流域に３遺跡（全て所蔵地）６点、緑川流域に３遺跡３点、球磨川流域に１遺跡１点が出土している。このように見てみると、菊池川流域における青銅製品の出土が最も集中しており、県下全体（53点）の出土の約52.8％を占めている。他の流域では、白川流域が28.3％、筑後川水系流域が11.3％、緑川流域が5.7％、球磨川流域1.9％という比率になっている。

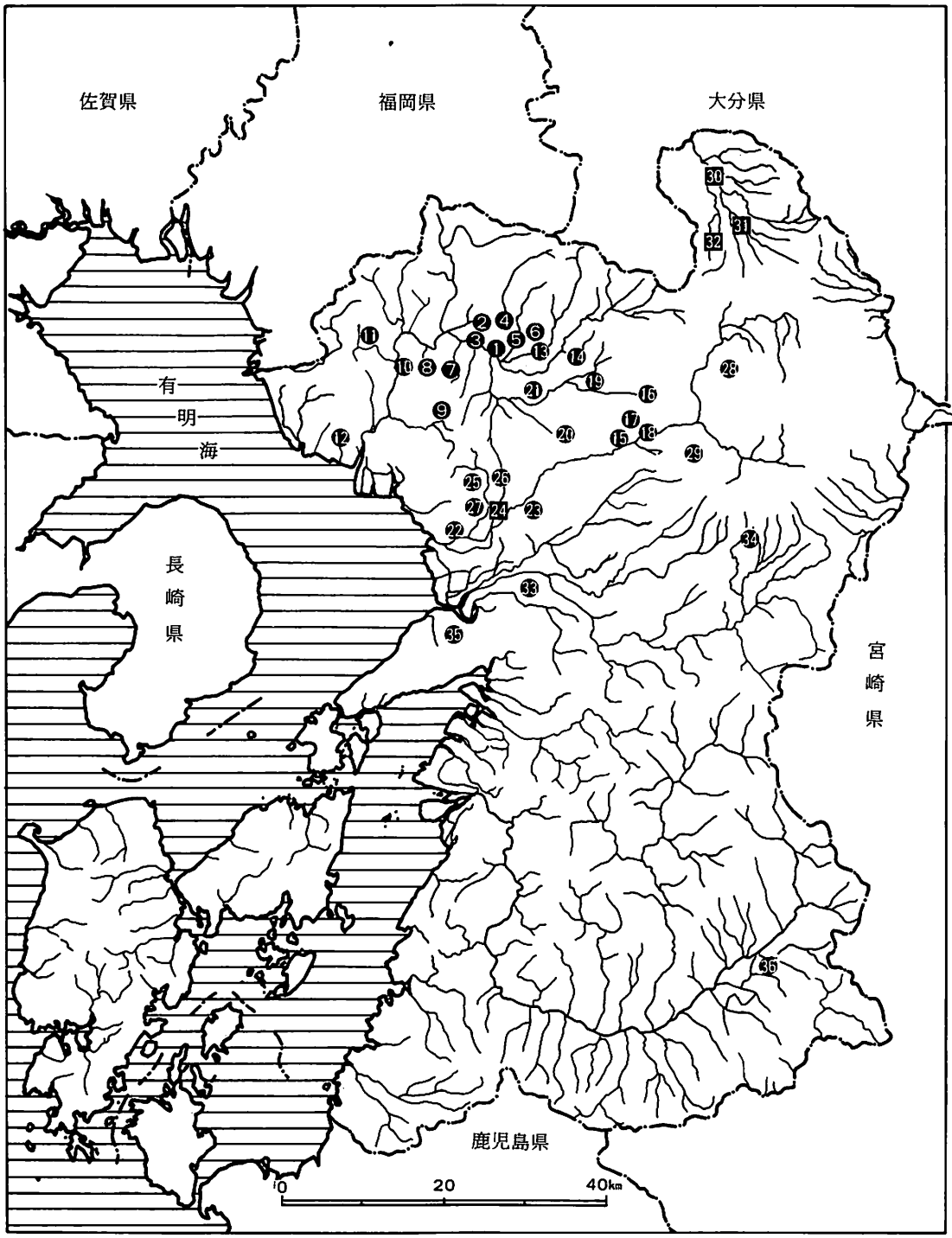
このことからも、菊池川流域が弥生時代において、いかに重要な地域であったかということを容易に推察することができよう。

さて、青銅製品の器種別出土数は、銅鉾が最も多く17点（うち所蔵４点）、次に銅戈・銅鏡がそれぞれ14点（うち銅戈は所蔵６点）、さらに銅剣・銅鏃・巴形銅器が各２点、貨泉１点、その他不明１点となっている。

さらに、菊池川流域における青銅製品出土状況をさらに詳しく見てみることにしよう。

下流域では玉名郡市所在の諏訪原遺跡（10）の鏡、下坂下遺跡（11）（図版94－５）・年の神遺跡（12）の銅矛の３点が出土し、上流域においては、菊池郡市所在の玉祥寺遺跡（13）の銅矛、長田外園遺跡（14）の貨泉（第257図－１）、真木遺跡（16）の銅戈２点（第257図－２・３）、川辺遺跡（19）の銅矛、木瀬遺跡（20）と古閑原遺跡（21）の鏡の計７点が出土している。最も多く出土している中流域では、山鹿市・鹿本郡所在の遺跡で、方保田東原遺跡（１）の巴形銅器・鏡・銅鏃２点の計４点（巻頭図版）、方保田遺跡（２）の鏡２点（図版94－１）、大道小学校校庭遺跡（３）の鏡（図版94－２）、中尾・下原遺跡（４）の銅戈（図版94－６）、鹿本商工高校校庭（５）（図版94－４）と庄遺跡（６）（図版94－３）の銅鉾、天神免遺跡（７）では銅剣と不明品、下米野遺跡（８）では銅矛２点、聲遺跡（９）では銅矛４点が出土し、計18点が出土している。

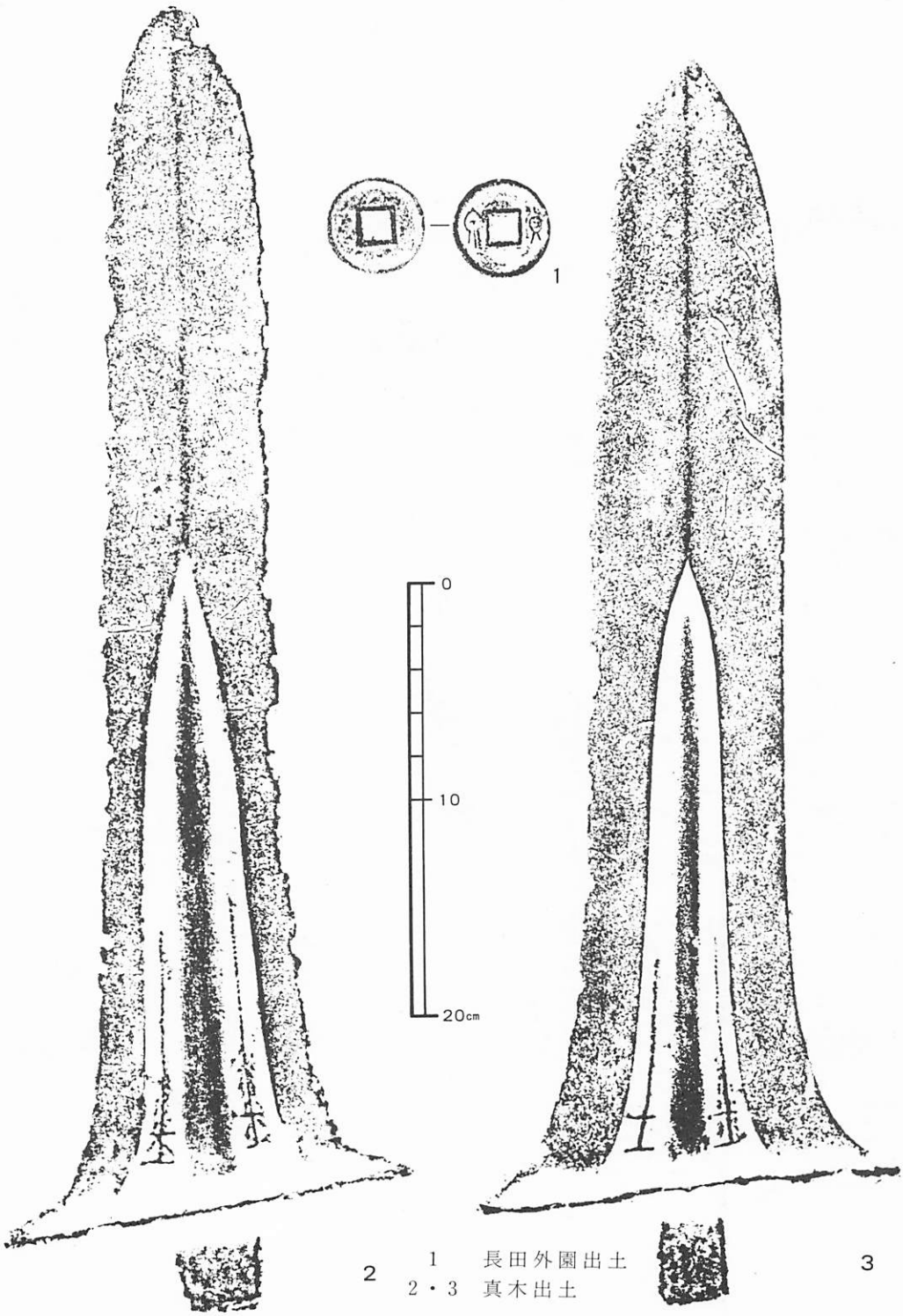
このように見てみると、いかに中流域に集中しているかが判る。県下全体の出土数に対する比率は、下流域で5.6％、中流域が34％、上流域が13.2％となる。中流域のみの比率でも、他流域には見られない集中度である。このことは菊池川流域における中流域の重要性をうかがい知ることができよう。さらに、中流域の中に於ては方保田東原遺跡とそれをとり囲むように存在する周辺の遺跡において青銅製品が最も密集して出土している。特にその中心とも言える方保田東原遺跡においては、県下で最初に出土した巴形銅器１点（巻頭図版、図版91・92、第61図）、小形仿製内行花文鏡（巻頭図版、図版93－１、第235図）、銅鏃２点（巻頭図版、図版93－２・３、第25図－13、249図－12）が出土している。遺跡の西側に存在する大道小学校校庭遺跡からは舶載方格規矩文鏡（図版94－２）



○は出土地

□は所蔵地

第256図　熊本県下弥生時代青銅器出土遺跡分布図



第257図　菊池郡内出土青銅器拓本

第257図の拓影は、菊池市川上勇蔵氏所蔵の銅戈拓影（故坂本経堯氏採拓）と貨泉の拓影を使用させていただいた。ここに御礼申し上げます。

表5　熊本県下弥生時代青銅製品出土一覧

	遺跡名	出土地 郡市	町村	大字字	品名	数	型式名	出土状況	保管者 所蔵者	文献	備考
1	方保田東原遺跡	山鹿市		大字方保田字東原	巴形銅器	1			山鹿市立博物館	①	
					銅鏃	2		住居趾内	山鹿市立博物館 鹿本高校	①	
					鏡	1	小形仿製内行花文	土器溜め端部	山鹿市立博物館		
2	方保田遺跡	山鹿市		大字方保田字六田	鏡	2	小形仿製内行花文	石棺内	鹿本高校 不明	②㉕	
3	大道小学校校庭遺跡	山鹿市		大字方保田字本村	鏡	1	舶載方格規矩文		山鹿市立博物館	㉗	
4	中尾・下原遺跡	山鹿市		大字蒲生字下原	銅戈	1		甕棺内	鹿本高校	③④	
5	鹿本商工高校校庭御宇田遺跡	鹿本郡	鹿本町	大字御宇田	銅矛	1	中広		鹿本商工高校	⑤⑥	
6	庄遺跡	鹿本郡	鹿本町	大字庄字太郎丸	銅矛	1	中広		鹿本高校	⑤⑥⑦	
7	天神免遺跡	鹿本郡	鹿央町	大字広字天神免	銅剣	1			熊本県教育委員会	⑧	
					不明	1		土壙墓内	熊本県教育委員会		
8	下米野	鹿本郡	鹿央町		銅矛	2			不明	⑨⑩	
9	轟遺跡	鹿本郡	植木町	大字轟字今古閑	銅矛	4	中細		京都国立博物館	⑥	
10	諏訪原遺跡	玉名郡	菊水町	大字江田字諏訪原	鏡	1	八乳文鏡		熊本県教育委員会	⑪⑫	
11	下坂下遺跡	玉名郡	南関町	大字坂下	銅矛	1			山鹿市立博物館	㉘	
12	年の神遺跡	玉名郡	岱明町	大字野口字年の神	銅矛	1			岱明町公民館	⑬	
13	玉祥寺	菊池市		大字玉祥寺	銅矛	1			東京国立博物館	⑥⑦	
14	長田外園	菊池市		大字長田字下長田	貨泉	1			川上勇輝		
15	陣内	菊池郡	大津町	大字陣内下町出分	銅矛	1			窪田日吉神社	⑥⑦⑭	天保12年発見
16	真木	菊池郡	大津町	真木西津留	銅戈	2			京都国立博物館	⑮	
17	西弥護免遺跡	菊池郡	大津町	大字大津字西弥護免	鏡	1	小形仿製内行花文		阿蘇実験考古学研究所	⑯⑰	
18	大山内	菊池郡	大津町	大字引水字大山内	銅戈	2			大津町引水 坂本幸四郎	⑥⑦⑭ ⑱⑲	
19	川辺遺跡	菊池郡	旭志村	大字川辺字上西原	矛	1			坂本善徳	⑥	昭和39年発見
20	木瀬遺跡	菊池郡	合志町	大字上庄字木瀬	鏡	1	S字文鏡	住居趾	熊本大学	㉕	
21	古閑原遺跡	菊池郡	泗水町	大字吉富字古閑原	鏡	1	内行花文		猿渡国春	⑳	
22	戸坂遺跡	熊本市	戸坂町	西原	鏡	1	舶載内行花文		西山俊一	㉑	
23	石原亀甲遺跡	熊本市	石原町	亀甲	鏡	2	内行花文		熊本県教育委員会	㉒	
24	藤崎宮所蔵	熊本市	井川渕町		銅戈	1			藤崎宮		
					銅矛	1			藤崎宮		
25	八鉾神社境内遺跡	飽託郡	北部町	大字和泉字川東	銅戈	1		箱式石棺内	八鉾神社	㉓㉔	
26	鶴羽田遺跡	飽託郡	北部町	大字鶴羽田	銅戈	1				㉔	
27	徳王遺跡	飽託郡	北部町	大字徳王	鏡	1	小形仿製内行花文		上野辰男	㉔	
28	乙姫鏡山遺跡	阿蘇郡	阿蘇町	大字乙姫字鏡山	銅戈	1		豊肥線敷設工事中	早稲田大学	⑥	
29	鳥子三宮神社所蔵	阿蘇郡	西原村	大字上鳥子	銅矛	2			鳥子三宮神社所蔵		
30	下城神社所蔵	阿蘇郡	小国町	大字下城	銅戈	4		伝世	下城神社	⑥	
31	両神社所蔵	阿蘇郡	小国町	大字宮原	銅矛	1			両神社		
32	天満宮神社所蔵	阿蘇郡	南小国町	大字市原	銅戈	1		伝世	天満宮神社	⑥	
33	新御堂遺跡	下益城郡	城南町	大字宮地字新御堂	巴形銅器	1		表採	城南町教育委員会		1981年発見
34	枯木原遺跡	下益城郡	矢部町	下名連石枯木原	鏡	1	方格規矩鏡	表採			
35	轟貝塚	宇土市	宮庄町	須崎	鏡	1		表採		㉙	
36	ヤリカケ松遺跡	球磨郡	多良木町	大字大久保字ヤリカケ松	銅剣	1			熊本博物館		

が、さらに方保田遺跡では小形仿製内行花文鏡（図版94—1）と鏡片1点が出土している。

遺跡の東側では鹿本商工高校校庭から銅鉾（図版94—4）が出土している。

このように見てくると、方保田東原遺跡および周辺の遺跡が、弥生時代後期において、いかに重要な地域であったか容易に推察することができる。特に川筋を中心に当時の人々が生活を営んでいたことを考慮すれば、菊池川の流れが果した役割の大きさと、菊池川中流域における方保田東原遺跡とその周辺の遺跡のもつ意義の大きさを認識しなければなるまい。（中村）

「熊本県下弥生時代青銅製品出土一覧」関係文献註

註① 中村幸史郎「熊本県山鹿市方保田東原遺跡出土の巴形銅器」『熊本史学』45号 1975

註② 隈昭志・杉村彰一「方保田調査概報」『チブサン』13号 1968

註③ 隈昭志「熊襲と隼人の文化」『地方文化の日本史Ⅰ光は西から』 1978

註④ 高倉洋彰「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2 1976

註⑤ 川村真一「熊本県鹿本郡来民町御宇田発掘の銅鉾」『考古学雑誌』25—1 1935

註⑥ 坂本経堯「熊本県内の銅鉾・銅戈—小林久雄先生の霊前に捧げる—」 1967

註⑦ 「熊本県下に於ける銅剣・銅鉾の調査」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』2

註⑧ 高木正文「天神免遺跡の細形銅剣」『九州考古学』54 1979

註⑨ 長山源雄「肥後国玉名郡発見の銅鉾」『考古学』1—1 1931

註⑩ 七田忠昭「文様ある銅鉾について」『九州考古学』52 1976

註⑪ 緒方勉『諏訪原遺跡発掘調査概報』九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査団 1971

註⑫ 緒方勉「諏訪原遺跡出土遺物」『熊本史学』37 1970

註⑬ 田添夏喜「年の神弥生遺跡」『熊本史学』39 1971

註⑭ 高橋健自「銅鉾・銅剣考」(4)『考古学雑誌』7—2（P147） 1907

註⑮ 乙益重隆『肥後の上代文化』

註⑯ 阿蘇実験考古学研究所「西弥護免遺跡」プリント

註⑰ 瀬丸敬二「西弥護免遺跡発掘調査概報」『どっぱあ』3—11 1981

註⑱ 後藤守一「クリス形銅戈」『古代文化』第14巻6号 1943

註⑲ 高橋健自「銅鉾・銅剣考」(3)『考古学雑誌』7—1（P95） 1907

註⑳ 隈昭志「原始・古代」『植木町史』植木町教育委員会 1981

註㉑ 乙益重隆「戸崎町北原出土の内行花文鏡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』 1968

註㉒ 高木正文・光沢徳行「熊本県石原亀甲遺跡の小形仿製鏡」『九州考古学』54 1979

註㉓ 乙益重隆「広形銅戈を副葬した箱式石棺の一例」『上代文化』35 1965

註㉔ 富田紘一「原始・古代」『北部町史』北部町教育委員会 1979

註㉕ 隈昭志氏教示

註㉖ 島津義昭氏教示

註㉗ 小原由昭「大道小塞棺調査」『チブサン』16号 1969

註㉘ 原口長之「南関町の銅鉾」『石人』127号

註㉙ 高木恭二氏教示

第3節　巴形銅器の用途に関する一考察

はじめに

第Ⅰ次調査で出土した巴形銅器は、7本の脚の先端が全て欠損し、その状態は単に折れた時に生じる切り口でなく、ねじれた状態になっていた。さらに、脚部外縁においては、小さな凹凸が多く見られるところから、巴形銅器の用途に関し生じたものと推察し、他の資料も含め検討するものである。

巴形銅器の用途に関しては、古墳時代の遺物として、三重県石山古墳で盾に6個と1個、靱に3個着装された状態で出土[註1]し、さらに大阪府和泉黄金塚古墳では盾に3個着装されていた[註2]。このことから古墳時代における巴形銅器の用途は、盾や靱などの飾り金具として使用されていたと断定し、弥生時代の巴形銅器についても同様の用途であろうと推察されている[註3]。現在、巴形銅器は弥生時代と古墳時代を含めて、28遺跡（出土地不詳も含む）100個が確認されている。（表－6参照）このうち弥生時代に属する巴形銅器は9遺跡23個が在り、古墳時代に属する巴形銅器が19遺跡77個である。

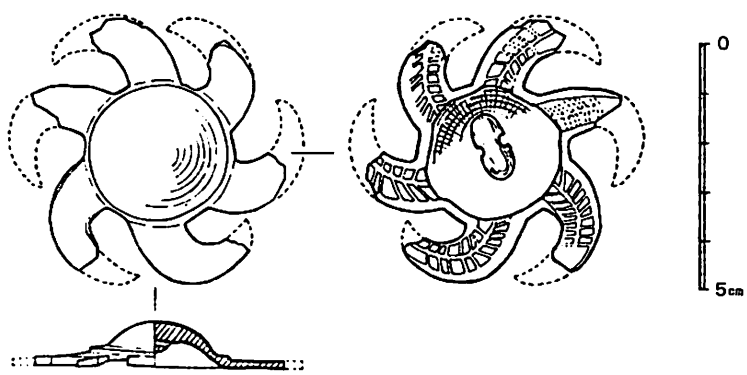
弥生時代の巴形銅器と古墳時代の巴形銅器においては、明らかにその形態が異なることが指摘されている[註4]。具体的には、弥生時代の巴形銅器の座は截頭円錐形、半球形とあり、脚も5～9本を有している。それに比べ、古墳時代にはその殆どが円錐形の座で、脚は4本と5本であった。さらに結束部の形態についても大きく異なっている。弥生時代の巴形銅器の結束部は鈕状を呈し、鏡面に見られる形態であるのに比べ、古墳時代の巴形銅器は棒状を呈している。このことは、弥生時代における巴形銅器の種類が多く存在し、古墳時代になって形態が画一化したものと推察される。

さらに、弥生時代とされる巴形銅器について観察してみると、盾や靱に装着した場合に多くの問題点を含んでおり、個々についての問題点を整理してみることとする。

脚について

脚の数は5本から8本まであり、5本が1点、6本が7点、7本が11点、8本が4点存在している。これらのうち、全ての脚が完全な姿をとどめているものは、桜馬場の2点[註5]、西山の1点[註6]、新御堂1点[註7]の計4点で、残り19点は先端部を欠いたり、脚部を欠いたりしている。

佐保遺跡の巴形銅器は、2点出土しているが、表採のため出土状況について不明である。巴形銅器については次の



第258図　佐保遺跡出土の巴形銅器実測図

（永留久恵「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」『九州考古学』32より）

ような永留久恵氏の報告がある。[註8]（第258図）

「巴形銅器は二個あり、同范品と思われる。半球形の座に左捩りの脚6個をつけ、座の内面に綴じつけるための紐孔の附設がみられる。各脚部の裏側は隆帯で縁どり、中に羽状文の陽鋳があるが、鋳出は鋭くない。使用に伴う磨滅であろうか。半球座の高さ1cm、径2.9cm、脚まで含めた幅は6cmくらいになるのであろう。脚の先端はいずれも欠損している。」

このように、脚の先端は全て欠き、その状態も方保田東原遺跡で見られたように、切断面が捩じ切ったように観察される。また、脚裏面の羽状文の磨滅も観察されている。

井原鑓溝出土の巴形銅器は現存しないが、青柳種信の「柳国古器略考」によれば、巴形銅器が半欠の状態で記録されている。截頭円錐形の座内面には鈕を有し、脚内面には羽状文を施していたことが判る。

森弘遺跡からは8個出土しており、杉原荘介氏によれば[註9]、座の大小、高さの差異によってA・B二群に分けることができるが、同范鋳型によるものと推察されている。8個のうちに完全な姿をとどめているものはなく、脚の先端もしくは、脚そのものを欠いているものばかりである。（第259図）A群とされる3点では、1については3本の脚先端を欠き、その切り口は直線にならず凹凸がある。また、3本の脚外縁は部分的に欠けている。2は全ての脚先端部を欠き、そのいずれも切り口が不整形であり、脚外縁部においての剝離が多く見られる。3は1本の脚が姿をとどめているが、これも外縁部の剝離が著しい。また、他の脚は先端部を欠くものや、基部から欠けているものもある。やはり切り口は不整形である。B群5点については、4は2本の脚の先端を欠き、6本の脚外縁部に剝離が見られる。5は3本の脚が姿をとどめ、4本の脚の先端および中位から欠いている。切り口はやはり不整形である。また、2本の脚の外縁部には剝離が見られる。6は5本の脚の先端を欠き、脚外縁の剝離も多く見られる。7については、1本の脚を完全に残しているが、4本は先端部を欠き2本はまったく見ることができない。特にこの2本の部分は座にくい込むような割れが見られ、明らかに割られたものと判断される。8も1本の脚を完全な姿で残しているが、他の6本は脚基部から欠いている。残った脚も外縁部に剝離を見ることができる。以上8点の截頭円錐形の座内面には鈕を有していた。

西山出土の巴形銅器（9）は、ほぼ完全な姿をとどめ、7本の脚が左向きになっている。脚裏面を観察すれば、脚外縁に剝離を認めることができる。截頭円錐形の座内面には鈕を有している。

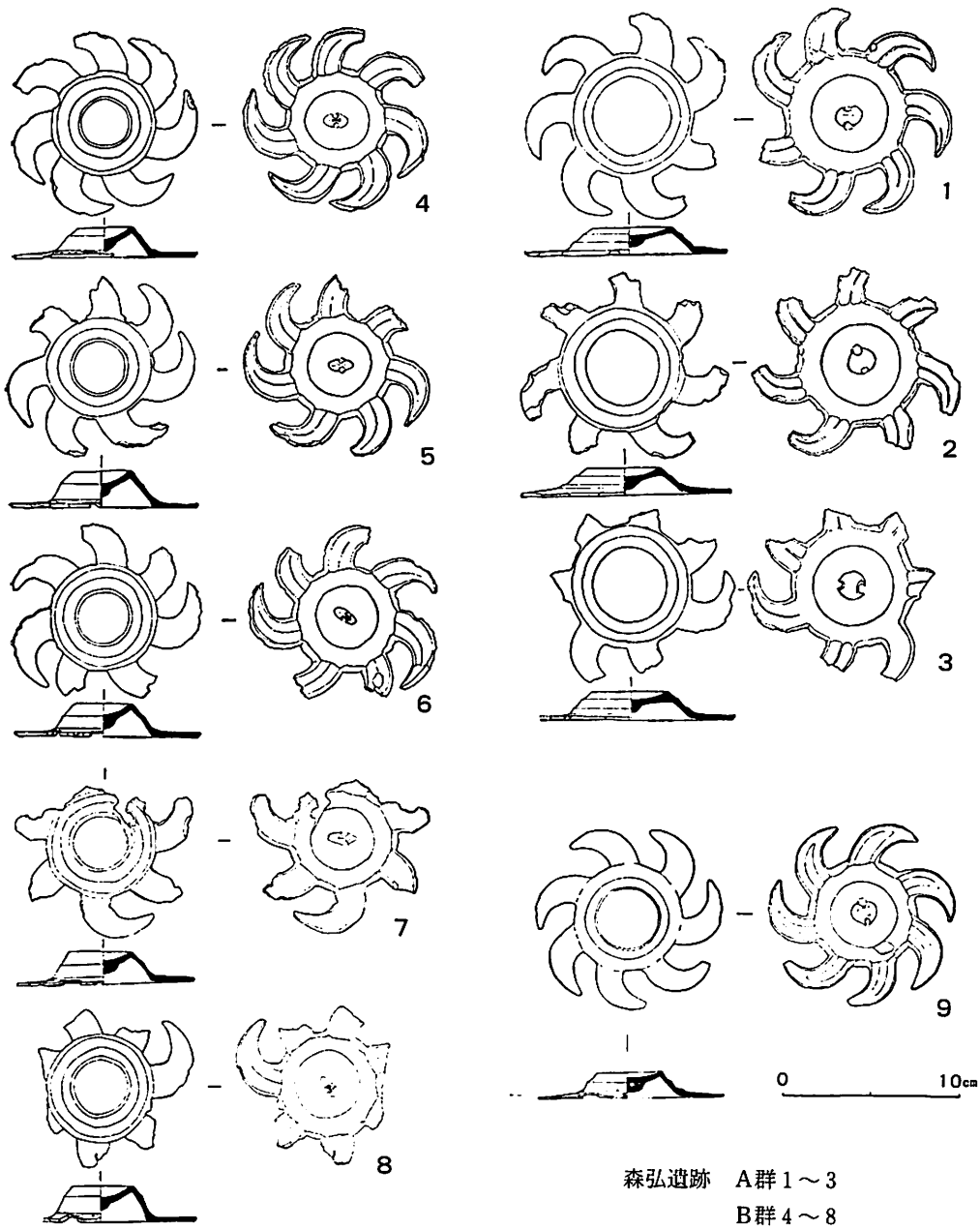
新御堂出土の巴形銅器は、昭和56年3月に発見されたもので、熊本県下益城郡城南町大字宮地字新御堂から出土している。今回観察する機会を得たので、気付いた点だけを記しておく。右向き8本の脚を有し、台座は截頭円錐形を呈している。脚は完全な姿をとどめているが、4本の脚の外縁に小さな凹凸が認められた。座内面には鈕が見られるが、孔はわずかに小さな孔が貫通しており、座外面にも孔が穿たれていた。

武石と、東宮裾から出土した巴形銅器も脚部を2～3本欠いている。

このように、弥生時代の巴形銅器を観察してみると、共通点が多いのに気付く。

①脚の多くが欠損し、その切り口が捩じ切ったように不整形を呈している。

②完全に残された脚も含め、脚外縁部に使用による剝離や、凹凸が見られる。



森弘遺跡　A群 1～3
　　B群 4～8
西山遺跡　9

第 259 図　森弘遺跡・西山遺跡出土巴形銅器実測図

（杉原荘介『日本青銅器の研究』より）

③座内面の結束部には、鈕を付設し、鏡面と同様になっている。

しかし、この鈕の多くは孔が小さく、紐を通すのに不都合になっている。

これに比べ、古墳時代の巴形銅器は先に述べたように

①台座は円錐形を呈している。

②脚は4本を主に、5本も見られる。

③脚に比べ座が小さくなる。

④結束部は棒状を呈している。

といった、特徴を有している。

弥生時代の巴形銅器を飾り金具として利用した場合、

①単に装着しただけでは、あれだけ多くの脚が欠損し得ない。

②脚外縁部に凹凸や剝離が生じ得ない。

③盾や靱に装着した場合、古墳時代の巴形銅器に見られる棒状結束部であれば、紐を通すのに十分な空間があるが、弥生時代の場合、鈕が付けられ、孔の大きさも小さく、果して紐が通ったかは、疑問である。

④出土状況もまちまちで、単独で出土する例が多い。

といったことから、飾り金具としての利用には無理があるのではなかろうか。むろん、古墳時代の巴形銅器は、その出土例からも実証されているが、この場合、先に述べた特徴を示していることからも、弥生時代の巴形銅器の使用方法から、飾り金具として制度化し、利用されるようになったものと考える。ただ、古墳時代の巴形銅器の使用が判明したのが、黄金塚古墳と石山古墳の2例であるため、弱い面もある。例えば、巴形銅器の使用方法が、盾や靱の飾り金具として定着しているのであれば、当然、埴輪にも見られるべきであるが、今日までには発見されていないという点である。

さて、弥生時代の巴形銅器の使用方法についてであるが、先に述べたような共通点が見られるところから、巴形銅器の脚が破損したのは、使用段階によるものと推察される。

特に、脚部欠損断面が不整形であるのは、巴形銅器の地金が、柔軟性を有している段階に捩じ切られ、明らかに人為的である。また、脚外縁のみに凹凸や剝離が見られ、内縁にはこれらの傷が見られないということは、明らかに外側から座中心に向った力が加えられ生じたものと判断される。

さらに、図版91－3で見られるように、方保田東原遺跡出土巴形銅器の脚は、一方では反り、一方では内湾していて、新御堂遺跡出土の巴形銅器でも同様に観察された。これは明らかに外からの力によって生じたものである。これらのことを考えると、単に盾や靱に装着したとは考えられず、祭器として使用し、その段階でこれらの破損が生じたものと判断される。ただ、具体的にどのように使用したかについては、現段階では推察の域を脱し得ないため、今後の調査に待たなければならない。

（中村）

表6 巴形銅器出土地名表

弥生時代

	遺跡名	所在地	台座	脚	個数	文献
1	佐保	長崎県下県郡豊玉村佐保115	半球	左 6	2	永留久恵「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」『九州考古学』32、1967
2	桜馬場	佐賀県唐津市桜馬場4丁目	半球(鉤) 半球	左 6 左 6	2 1	吉村茂三郎・松尾禎作「唐津桜馬場遺跡」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第8集、1949 梅原末治「肥前唐津市発見の甕棺遺物」『考古学雑誌』36巻1号、1946
3	東宮裾	佐賀県杵島郡北方町大崎柳町東宮裾		右 5 直 6	1 2	杉原荘介『日本青銅器の研究』1972
4	井原鎧溝	福岡県糸島郡前原町井原鎧溝	截頭円錐	右8～9	3	青柳種信「柳園古器略考」
5	方保田東原	熊本県山鹿市大字方保田字東原	截頭円錐	左 7	1	中村幸史郎「熊本県山鹿市方保田東原遺跡出土の巴形銅器」『熊本史学』45号
6	新御堂	熊本県下益城郡城南町大字宮地字新御堂	截頭円錐	右 8	1	島津義昭氏教示
7	西山	広島県広島市戸坂町西山	截頭円錐	左 7	1	藤田等「巴形銅器を出土した西山貝塚調査概報」『日本考古学協会昭和40年度大会研究発表要旨』1965
8	森弘	香川県大川郡寒川町石田東森弘甲1504－1	截頭円錐	左 7	8	杉原荘介「日本青銅器文化の研究」1972
9	武石上平	長野県小県郡武石村下武石上平	截頭円錐	右 7	1	小山真夫「信濃国武石村出土の巴形銅器」『考古学雑誌』第17巻4号、1927

古墳時代

10	丸隈山古墳	(旧)筑前国糸島郡周船寺村大字周船寺字丸隈山 福岡県福岡市西区周船寺丸隈山	円錐形	4	2	福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告1冊
11	白鳥(森ノ下)古墳	(旧)周防国熊毛郡佐賀村大字佐賀字森ノ下 山口県熊毛郡平尾町大字佐賀字森ノ下	円錐形	左 4	5	
12	赤妻古墳	(旧)周防国吉敷郡下宇野令村大字朝倉赤妻 山口県山口市赤妻町	円板状	左 4	2	弘津史文「周防国赤妻古墳並茶臼山古墳」『考古学雑誌』第18巻4・5号、1928
13	千足古墳	(旧)備中国都窪郡加茂村大字新庄字千足 岡山県吉備郡高松町新庄下	円錐形	左 4	12	和田千吉「備中都窪郡新庄下古墳」『考古学雑誌』第9巻11号、1919
14	和泉黄金塚古墳	大阪府和泉市上代町	円錐形 円錐形	左 4 右 4	2 1	末永雅雄・島田暁・森浩一「和泉黄金塚古墳」1954
15	城山(津堂)古墳	(旧)河内国南河内郡小山村大字津堂 大阪府藤井寺市大字津堂字城山	円錐形	右 4	10	森本六爾「日本考古学研究」 梅原末治「河内小山村城山古墳の石棺及遺物に就て」『歴史地理』19巻6号 梅原末治「河内小山城山古墳調査報告」『人類学雑誌』35巻8号
16	佐味田宝塚古墳	(旧)大和国北葛城郡河合村大字佐味田字宝塚 奈良県北葛城郡河合町大字佐味田宝塚	円錐形	右	2	梅原末治「佐味田及新山古墳研究」
17	東大寺山古墳	奈良県天理市櫟本町東大寺山北高塚	円錐形	左 4 右 4	5 2	
18	大塚越古墳	(旧)近江国 滋賀県	円錐形	左 4	3	「京都大学考古図録新輯」 末永雅雄「泉北地方の古文化」『龍谷史壇』31・32号
19	石山古墳	三重県上野市大字才良	円錐形	右 4	9	小林行雄「三重県石山古墳調査略報」日本考古学協会第8回総会研究発表要旨 1951

20	白山社古墳	(旧) 美濃国可児郡広見村大字伊香字陵山 岐阜県可児郡可児町大字伊香	円錐形		2	柴田常恵「美濃国可児郡広見村伊香陵山白山社古墳」『人類学雑誌』18巻 202号
21	鷹之巣大塚古墳	(旧) 美濃国加茂郡加茂村大字鷹之巣 岐阜県美濃加茂市加茂野町鷹之巣	円錐形	左 4	5	林魁一「共同備忘録」『人類学雑誌』13巻 150号
22	松林山古墳	(旧) 遠江国磐田郡岩田村 静岡県磐田市大字新貝	円錐形	左 5	3	後藤守一・高橋勇・内藤政光「松林山古墳発掘調査報告書」
23	銚子塚古墳	(旧) 遠江県磐田郡岩田村大字寺谷銚子塚 静岡県磐田市大字寺谷 (上原)	円錐形	右 4	1	西郷藤八「遠江国寺谷銚子塚古墳調査報告書」『考古学雑誌』15巻10号
24	不明	(旧) 信濃国北佐久郡北大井村 長野県北佐久郡北大井村	円錐形	5	3	
25	真土大塚山古墳	(旧) 相模国 神奈川県平塚市大字真土	円錐形	右 4	5	石野瑛「砂丘を利用したる古墳例」『考古学雑誌』26巻 4 号 木村蒼章「相模・真土大塚山古墳の再検討」『考古学雑誌』60巻 1 号
26	伝上野国所在一古墳	(旧) 上野 (所伝) 群馬県	円錐形	4	2	森本六爾「巴形銅器考」『三宅博士古稀祝賀記念論文集』
27	不明		円錐形 山笠状	5 5	1 1	森本六爾「巴形銅器に就て」『考古学』1巻 1 号 京都山中商会所蔵
28	不明		円錐形	左 4	1	守屋孝蔵氏所蔵

石製品

29	長光寺山古墳	(旧) 長門国 山口県厚狭郡山陽町西下津	円錐形	右 6	1	
30	東大塚古墳	(旧) 河内国 大阪府	円板形	左 11	1	梅原末治「河内国松岳山船氏墳墓の調査報告」『歴史地理』28巻 6 号
31	熊野神社古墳	(旧) 武蔵国北足立郡小田谷村 埼玉県桶川市川田谷 熊野神社内	円板形	右 5	2 4	後藤守一「巴形石製品」『古代文化』12巻 6 号資料

この表は、森本六爾『日本考古学研究』、鈴木恒男『巴形銅器出土遺跡地名表』をもとに作成したもので、地名は現在の地名と共に旧地名も記載した。

註

註 1　小林行雄「三重県石山古墳調査略報」日本考古学協会第 8 回総会研究発表要旨　1951

註 2　末永雅雄・島田暁・森浩一『和泉黄金塚古墳』　1954

註 3　杉原荘介『日本青銅器の研究』　1972

註 4　森本六爾「巴形銅器考」『日本考古学研究』　1944

註 5　吉村茂三郎・松尾禎作「唐津桜馬場遺跡」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第 8 集　1949

註 6　註 3 に同じ

註 7　熊本県下益城郡城南町教育委員会から実見する機会をいただき、観察することができた。

註 8　永留久恵「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」『九州考古学』32　1967

註 9　註 3 に同じ

第４節　ヘラ記号をもった弥生式土器の存在について

近年、全国各地で弥生時代終末期から、古墳時代にかけての遺跡の、大規模な調査が実施され、古墳時代への移行の過程を明らかにするため、各方向からの検討が盛んに行なわれている。

その中で、土器に関しては、形式論を主とした、弥生式土器から古式土師器への編年作業が先行し、土器生産にかかわる問題については、あまり論じられていないのが現状である。

ここに紹介する資料は、方保田東原遺跡から出土した、底部に所謂「ヘラ記号」をもった土器である。これは須恵器に見られるヘラ記号と類似しており、その目的等が土器生産に関する問題点を提起するものとして、ここに報告するものである。

①第Ⅱ次調査（1974.7.9）　Ａ－２号住居より出土（図版95－１、第260図－１）

半欠損の底部のみで、底部の直径は5.5cmで明確な稜をもち、底面はわずかにふくらんだ平底である。内面は二種類のハケによって方射状に調整がなされている。外面はナデ調整である。胎土はきめこまやかな土で小さな砂粒を含み、黒灰色を呈している。焼成もよくしまっている。この記号は、撚糸もしくは螺旋状の刻目をもった原体の圧痕で底面に、幅１㎜、長さ約５cmで十字形を呈している。

②第Ⅲ次調査（1981.6）　近江工業内№３トレンチ出土（図版95－２、第260図－２）

半欠損の底部で、底部の直径は約４cmで、胴部に向って大きく開く平底である。内面の調整は、荒いハケによるもので色調は黒灰色を呈している。胎土は、砂粒を含み焼成も良い方である。この記号も、撚糸もしくは螺旋状の刻目をもった原体による圧痕で底面に幅２㎜、長さ約４cmの十字形を呈している。

③第Ⅲ次調査（1981.6）　近江工業内№３トレンチ出土（図版95－３、第260図－３）

底部の直径約９cmで、底面がわずかにふくらみ、胴部に向って大きく開く平底である。内面はナデ調整で褐色を呈している。外面は縦方向の調整がなされている。胎土は砂粒を含み、焼成は良くしまっている。記号は、幅２㎜のヘラ描き記号で「×」形を呈している。

④　第Ⅲ次調査（1981.6）　近江工業内№４トレンチ出土（図版95－４、第260図－４）

底部の直径９cmで、底面がわずかにふくらみ胴部に向って大きく開いた底部である。内外面共にナデ調整で、褐色を呈している。胎土は砂粒を含み、焼成はあまり良くなく、内外の色調が異なっている。記号は幅1.1㎜のヘラ描き記号で、「＋」形を呈している。

以上、４例については、その文様から①②と③④の二種類に大別できる。

①②については、撚糸もしくは螺旋状原体の圧痕による施文で、明確に文様が刻まれていることから考慮して、底部を整形後、施文されたものである。特に底部ということから器形完成後、施文されなければ、製作途中での施文であれば、作業中に文様がつぶれる可能性があり、このことからも器形完成後、半乾燥の状態（いくぶん軟らかい）で、施文されたことが考えられる。

ただし、土器製作過程において土器と作業台（回転台）の間に、下敷きとして原体を十字にし、土器を切り離す際に利用されたとも考えられるが、この場合、原体が交差していたのではなく、二

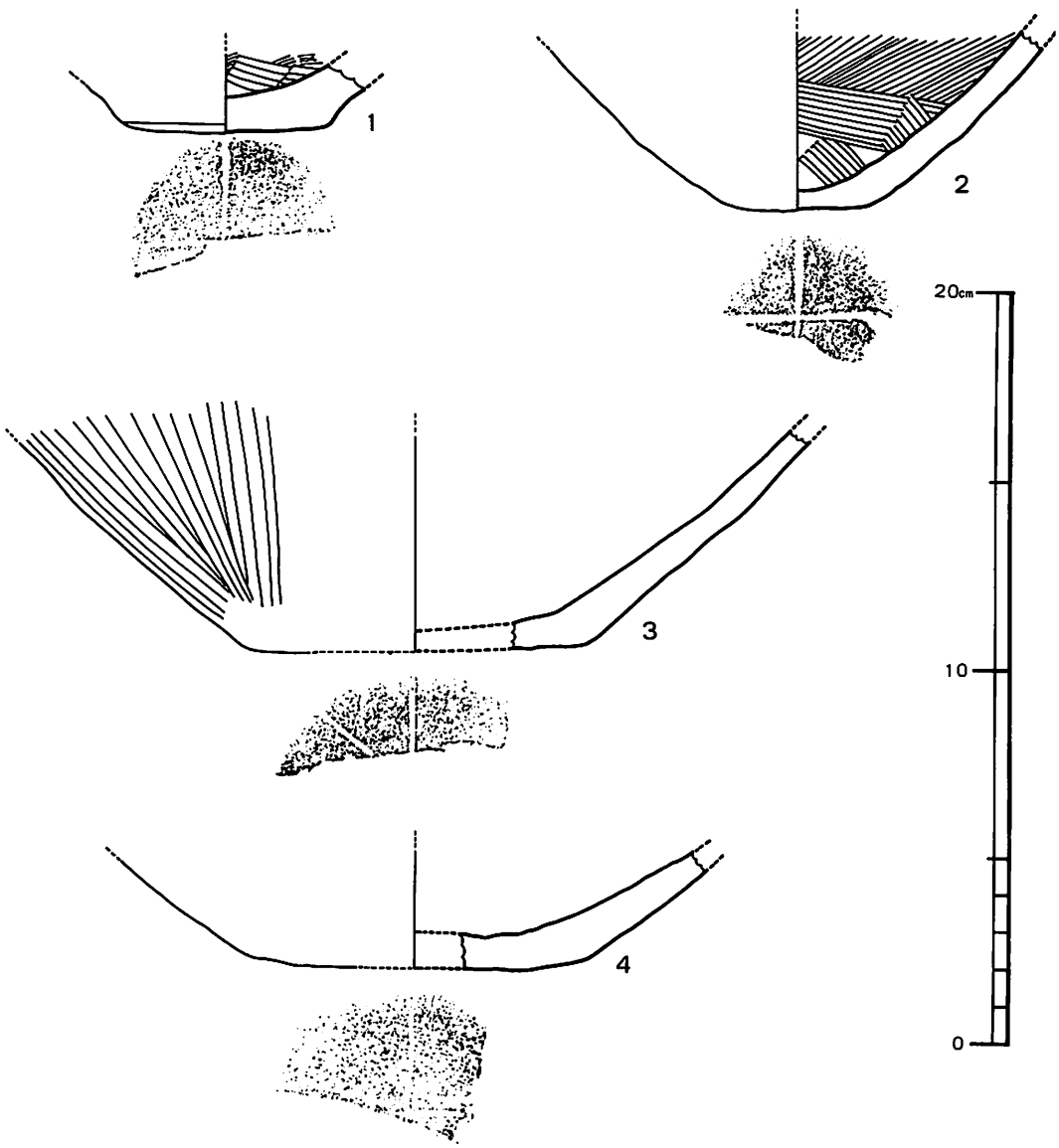
度にわたって十文字に施文されたものと判断された。

③④については、明らかにヘラ描き文様である。これも器面調整後、ヘラによる擦過痕で、生乾きの状態で施されたものである。線はあくまで浅く、傷つけた様な状態である。

以上のことから、これら二種類の文様（記号）はいずれも同一過程においで生じたものとして判断され、同一目的をもったものと推察される。

この目的については、資料がわずかに4点しかなく判断しかねるが、須恵器に見られるヘラ記号と同じ製作過程において施文されている点から、何からの共通性を見ることができよう。

ただ、須恵器におけるヘラ記号の目的については、未だ解明されておらず今後の研究を待たなければならない。（中村）



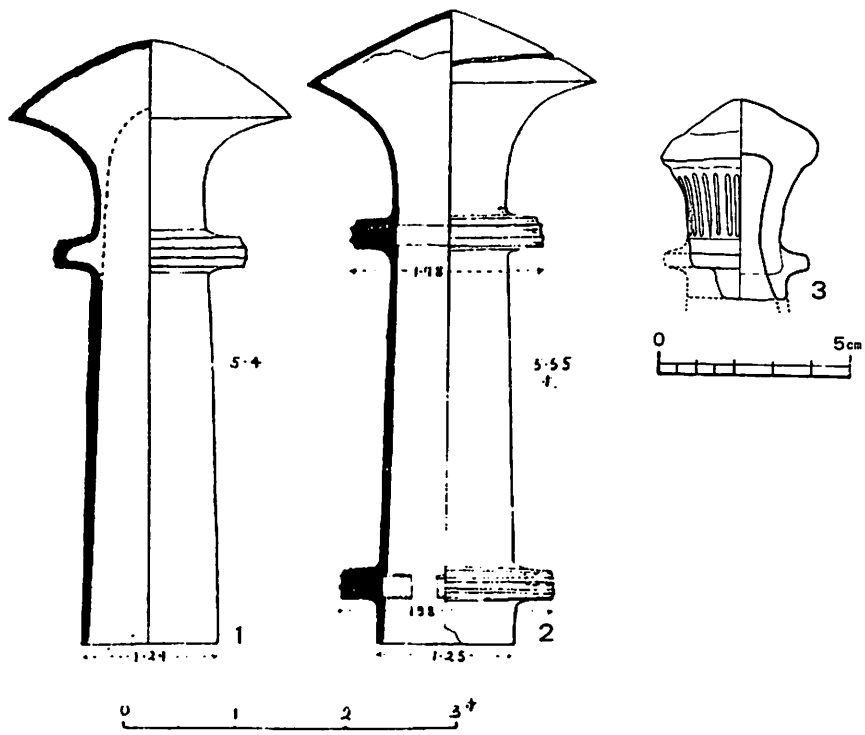
第260図　ヘラ記号をもった弥生式土器実測図

第5節　特殊な遺物

1　笠形土製品　（図版60－8、第260図）

この笠形土製品は、第Ⅲ次調査№2ピット内土器溜めより出土したもので、類似資料として熊本県上益城郡御船町所在下山神遺跡出土のジョッキ形土器が見られる。[註1] このジョッキ形土器は把手に陣笠状の柱頭があり、その形状がこの笠形土製品に類似している。しかし、下山神遺跡出土の把手は内部が詰っており、[註2] 笠形土製品とは異なっている。もし仮に、この笠形土製品を把手の頭とすれば、内部が中空になっている場合、強度の点で弱くなり、下山神遺跡のように詰っている方が、強度が出るものと判断される。そのため把手にはなり得ないと考えるものである。その意味から言えば、現在、国内における類似品は見当らず、あえて類似品を探すとすれば、朝鮮半島に求めることができる。朝鮮半島においては銅製笠形金具、もしくは笠形銅器として、青銅製品を見ることができる。この笠形銅器は、車輿具の一部分と推定されている。[註3]

平安南道大同郡龍岳面上里出土の銅製笠形金具[註4]は長さ16.5cmを測り、笠形の頭部の下に一段の節帯をめぐらし、長い柱状部をはさんで、もう一段の節帯をめぐらしている。内部は中空となっている。共伴資料として銅剣、剣把頭飾、剣把頭、帯鉤残欠、銅製車衡頭、乙字形管金具を伴っている。



第261図　黄海道黒橋面出土笠形金具・№2ピット出土笠形土製品実測図
（『朝鮮考古資料集成』17より）

さらに、黄海道黄州郡黒橋出土[註5]の笠形金具は3点あり、2点は笠形を呈した頭部の直下に一条の節帯をめぐらし、長い柱状部へと続き、現高16.8cmと16.3cmを測り、内面は中空となっている。これは一対になるものと思われる。1点は頭部下に一段の節帯をめぐらし、さらに柱状部の下位に、一条の節帯をめぐらしている。高さ16.8cmを測る。(第261図－1・2)共伴資料として銅剣、銅鉾、剣把頭飾、五鉄銭、乙字形金具、銅製蓋弓橐爪銅匙を伴っている。

この笠形金具に類したものとして国内では、長崎県対馬から集中して出土している。長崎県下県郡豊玉村大字佐保字蛋原唐崎、唐崎遺跡[註6]から出土している有孔笠頭形銅器と、長崎県上県郡峰町大字木坂字青海隙70番、木坂石棺群5号棺出土[註7]の笠頭形銅器が見られ、この他にも長崎県上県郡峰町大字三根サカドウ遺跡からも出土している。しかし、この笠頭形銅器は朝鮮半島で見られるものと比べれば、かなり簡略化され、柱状部が非常に長くなっている。その点、ここに紹介した笠形土製品は、朝鮮半島での笠形銅器とその形状が、酷似している。また、黒橋出土の中に銅匙が見られるが、これは国内で出土する土製柄杓と酷似している。このように朝鮮半島と国内の遺物が類似していることに関し、緒方勉氏がジョッキ形土器の陣笠状把手の源流として、大陸及び朝鮮半島へ求められている[註8]。笠形土製品もこの意味からも、その源流を朝鮮半島に求めるもので、そこには青銅製品そのものの入手、もしくは材料である銅の入手が困難であったのを解消するために、青銅製品を模造し、土製品化していったものであろう。

なお、朝鮮半島で出土する笠形金具の時間的位置付けについては、青銅器文化第Ⅲ期から第Ⅳ期とされている[註9]。国内においては弥生時代前期から中期に相当し、伝播の時間的経過を考慮すれば、朝鮮半島の笠形金具が対馬における笠頭形銅器となり、かつ方保田東原遺跡における笠形土製品となっていったものと判断できるのではなかろうか。

なお、この笠形土製品の用途については現状では判断しかねている。　(中村)

註

註1	緒方　勉「熊本県下山神遺跡出土ジョッキ形土器」『熊本史学』34号	1968
註2	緒方　勉氏教示	
註3	「笠形銅器」 図解『考古学辞典』創元新社	1959
註4	『韓国先史時代青銅器－特別展－』国立中央博物館	1973
註5	「朝鮮考古資料集成17」『古蹟調査報告』出版科学総合研究所	
註6	『古代九州の遺宝…鏡・玉・剣』佐賀県立博物館	1979
註7	坂田　邦洋『対馬の考古学』	1976
註8	註1に同じ	
註9	樋口　隆康「弥生時代青銅器の源流とその展開」『古代史発掘』5	1974

2　孔穴を有する軽石（図版96）

軽石に円孔を穿った例が見られたので、ここにおいて一括紹介しておく。

1は、第Ⅰ次調査1号住居跡より出土しており、長さ5cm、幅4.5cm、厚さ2.7cmの軽石で、わずかに面をそろえている。下部に直径17.5mm、深さ10mmの孔穴がある。現在、孔穴は半欠の状態であるが、内面は僅かに黒ずんでいる。重さ20gを測る。2も第Ⅰ次調査で出土し、遺構に伴わない遺物である。長さ4.6cm、幅4.1cm、厚さ1.5cmの方形に研磨した軽石で、僅かに中心部から外れた位置に、直径7mm、深さ7mmの孔穴を穿っている。この孔穴は先端部が尖っており、回転させて穿ったものと判断される。重さ14.5gを測る。3は第Ⅱ次調査A－1号住居跡より出土したもので、不整形な軽石の一面に集中して7個の孔穴を穿っている。また、その面には鋭利な刃物による切り傷が8～9本残っている。孔穴は同一工具で穿ったと思われ、直径7mmを測る。特にその中の1個においては明らかに工具が管状であったと判断できるような痕跡が認められる。この痕跡は、孔穴の先端部が丸味を帯び、その中に僅かな盛り上りが見られ、これが直径2.4mmの円形をなしているのである。つまり、外径は最大7mmで、円径2.4mm以上の孔が穿たれ、先端が僅かに丸味を帯びた管状工具によって施されたものと思われた。重さは84gを測る。4は第Ⅲ次調査、中央グリッド内より出土した軽石で、長さ6.7cm、幅3.34cm、厚さ2cmの不整形を呈している。孔穴は表面に4個、裏面に1個穿ち、表面には孔を穿ち始めの段階のものが1個みられる。それらの中で1個の孔穴は軽石を貫通しており、基部で直径7mm、先端部で2.45mm、深さ14mmを測る。他の孔穴の直径は約7.4mmで、先端部は尖り、深さ13.5mmを測る。重さは9gを測る。5は第Ⅳ次調査、土器溜めB－3区内より出土した軽石で、長さ8.5cm、幅6.74cm、厚さ5.26cmの不整形を呈し、上面に1個の孔穴を穿っている。この孔穴は直径9.25mm、深さ8.9mmを測り、孔穴の基部と先端部の径はほぼ同じで、わずかに丸味を呈している。重さ83.2gを測る。

穿孔具について

以上5点を概観すると、孔穴の直径とその形態に差異が認められるようだ。孔穴の先端が尖るものとして、2、4があり、先端が尖らず、基部と同じ径を有しているものとして3、5が見られる。

さらに、1については孔の大きさがあまりに大きく、他のものと区別して考えられる。2、4については、明らかに穿孔具は先端が尖ったものを使用し、共に茎部での径は7mmを測っている。この数字が穿孔具の径とは即断できないが、少なくとも7mm以下の径をもつものと推察される。3、5については、その孔穴の形から、穿孔具は先端が尖らず、基部と同じ径をもつものと判断される。特に3は管状を呈した工具であることが確認されている。5についても、孔穴の先端部がわずかに丸味を呈しているところから、管状工具を使用した可能性は強く、同一形態の工具であるものと思われる。1については径が大きく、先端も丸味を帯びていて、他のものに比べると孔を穿ったというより、使用の段階で生じた孔のようである。

いずれにしても、2種類の穿孔具を使って軽石を穿っており、その目的について考えなければな

らないが、他に類例が無く、判断しかねるところである。現在の状況で考えられることは、この方保田東原遺跡からは、これまでに27点の石庖丁が出土しており、そのうち穿孔のあるものが20点存在する。孔穴は平均７㎜前後で、その状態も軽石に穿たれた孔穴と類似しており、同一工具で行なっているものと判断される。（中村）

第6節　方保田東原遺跡出土の石庖丁について

方保田東原遺跡から出土した石器の総数は表5に示すとおり121点を数える。

その内訳は、砥石が41点で最も多く、次いで石庖丁27点、石錘17点、石斧10点、磨石8点、石鏃7点、石皿6点、孔穴を有する軽石4点、石製品1点となっている。これらの中には、明らかに縄文時代の石器も含まれており、石斧5点、石鏃3点が確認された。

方保田東原遺跡の弥生時代の石器の特徴として、次のことが明らかとなった。

① 食料生産に関わる石庖丁、石錘が多い

② 工具としての砥石が多い

③ 調理道具としての石皿、磨石が多く

④ 狩猟もしくは武器としての石鏃が少ない

これらは、方保田東原遺跡における生活基盤を推察する上で重要な点になるものと思われた。

石器製作に関する資料として、石庖丁の未製品が多く出土し、石庖丁製作過程を知り得る資料を見ることができた。

石庖丁は、外湾刃半月形石庖丁、直線刃半月形石庖丁、方形石庖丁の形態が見られ、現在、外湾刃半月形石庖丁が最も多く19点、次に方形石庖丁7点、直線刃半月形石庖丁1点、不明1点に分類された。なお、石材の産地については付論に譲るものとするが、石庖丁27点のうち石材別に見てみると、粘板岩製石庖丁が最も多く17点、次に結晶片岩製石庖丁7点、輝緑凝灰岩製石庖丁2点、角閃石安山岩製石庖丁1点となっている。これらのうち製品となっているもの、もしくは使用の段階で破損したものは15点、未製品もしくは、製作段階で破損したもの12点が見られた。(第262図)（数字は表7の番号を示す）

未製品については製作段階を次の5段階に分けることができる。

第1段階　形を整える前で、石材を扁平にしただけの段階（5、18）

第2段階　形を石庖丁らしく整えて、未だ研磨が加えられない段階（8、45、49、50）

第3段階　石庖丁の形を呈しているが、刃部は細かな打撃痕を残し、未調整で側面に荒砥が加えられた段階（41、121）

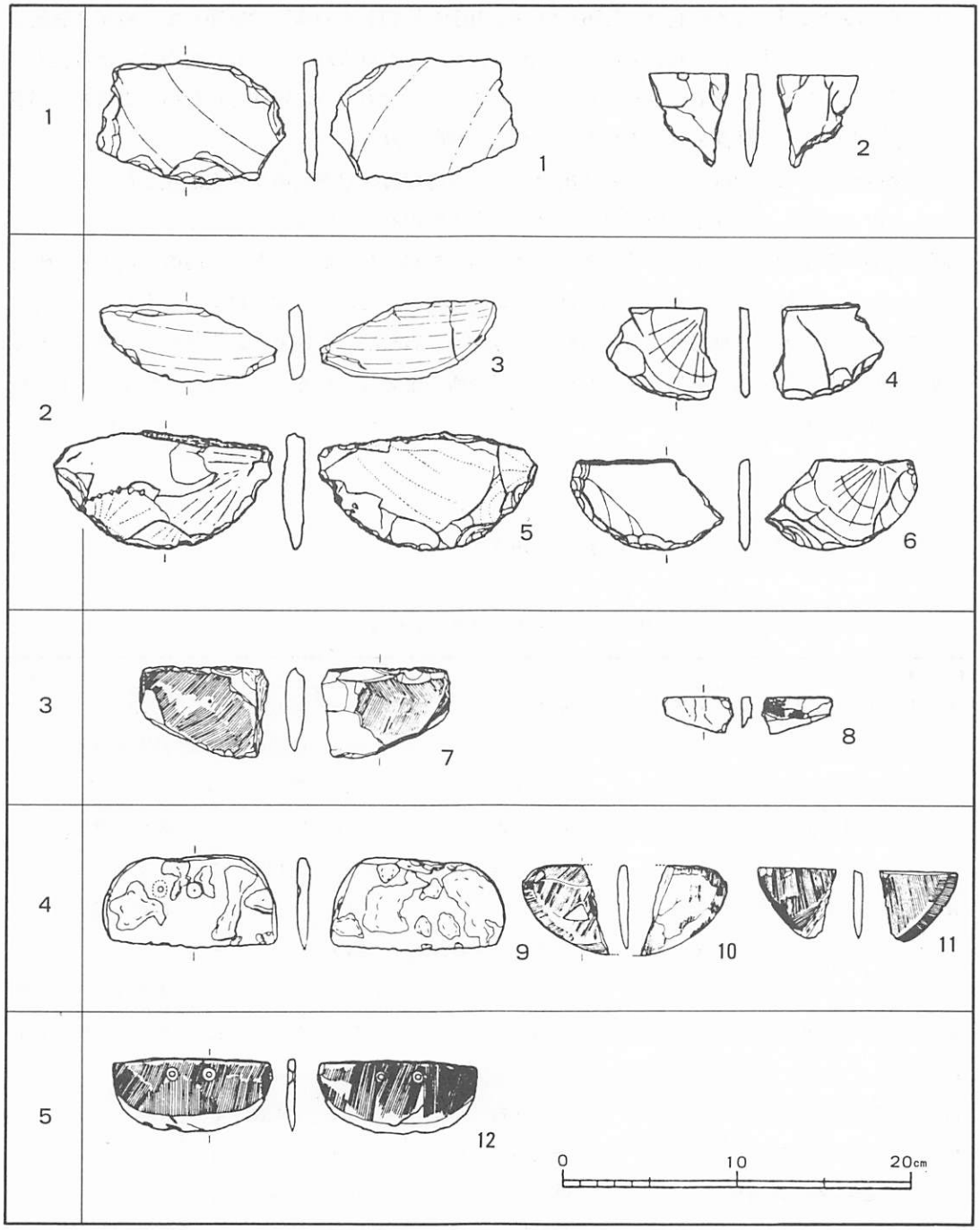
第4段階　全体に荒砥が施され、刃部も形成し形を整えているが、穿孔が終っていない段階（63、103、117）

第5段階　穿孔を終え、ほぼ完成しているが仕上砥石を施しておらず、荒砥仕上の段階（104）

なお、これらの未製品については、出土状況が住居跡であったり、土器溜めであったりしているが、方保田東原遺跡内における石庖丁の加工の実態を明らかにするということから、一括して取り扱ったのである。

また、この他にも、石庖丁製作過程を明らかにするものとして次のことが判明した。

1．過去の調査も含めて、未だ石庖丁の原石、チップといった初期の加工段階を裏付ける資料の出土を見ない。



第262図　石庖丁未製品実測図

2．第4段階に見られる穿孔は（第262図－9、103)）片側からの穿孔で貫通しておらず2個配している。この方法は、他の完成した石庖丁においても見られ、それらは両面における孔の外径、および深さに差異が認められる。このことは、片方からの穿孔を行ない。工具先端が貫通した時点で、他面の穿孔を行なったものと判断された。

3．完成品の中に、福岡県立岩遺跡で出土している輝緑凝灰岩製石庖丁2点が在った[註1]。

これらのことから、方保田東原遺跡における石庖丁製作過程を整理してみることにする。

原石入手および初期の加工は、他の場所で行ない、材料として扁平になった段階で遺跡内にもたらされ、さらに、製品に至るまでの過程は、先の5段階を経ている。加工に必要な砥石については遺跡内に多く見られる。輝緑凝灰岩製石庖丁の存在は、当時の筑豊地方との交易が十分考えられる。

残された問題としては、材料入手経路や、加工場所の確認等が在るが、これらは今後の調査を待たなければなるまい。（中村）

註

註1　下條信行「石器」『立岩遺跡』1977

表7　方保田東原遺跡出土石器一覧

番号	調査次	出土地	器種	石質	重量	図面	備考
1	I	1号住居跡	石庖丁	粘板岩	10.5g	第6図－5	半欠
2	〃	〃	孔穴軽石	軽石	20g	図版96	孔穴を有する
3	〃	2号住居跡	石庖丁	結晶片岩	36g	第8図－14	完形
4	〃	6号住居跡	石斧	細粒砂岩	86.7g	図なし	破片、磨製
5	〃	〃	石庖丁	結晶片岩	96.2g	第19図－5	未製品
6	〃	〃	石斧	〃	32g	〃 －7	打製、縄文
7	〃	〃	砥石	アルコーズ質砂岩	464g	〃 －6	
8	〃	7号住居跡	石庖丁	結晶片岩	59.2g	第21図－8	未製品、一部欠損
9	〃	8号住居跡	〃	粘板岩	37g	第24図－11	完形、半折、接合
10	〃	〃	〃	角閃石安山岩	13.5g	〃 －12	破片
11	〃	11号住居跡	〃	結晶片岩	19g	第33図－5	半欠
12	〃	18号住居跡	石錘	角閃石安山岩	40g	第44図－4	
13	〃	遺構に伴わない遺物	〃	結晶片岩	88g	第64図－9	
14	〃	〃	石庖丁	粘板岩	29.7g	〃 －10	半欠
15	〃	〃	砥石	アルコーズ質砂岩	89g	〃 －11	
16	〃	〃	磨石	〃	332g	〃 －12	棒状、全面研磨
17	〃	〃	石斧	砂岩	511g	〃 －13	磨製
18	〃	〃	孔穴軽石	軽石	14.5g	図版96 第65図－25	孔穴を有する
19	〃	〃	石庖丁	結晶片岩	7g	〃 －26	破片

20	I	遺構に伴わない遺物	石　斧	結晶片岩	28.7g	図なし	打製、破片、縄文
21	II	A－1号住居跡	砥　石	砂　岩	494g	第69図－9	
22	〃	〃	孔穴軽石	軽　石	84g	図版96	
23	〃	A－2号住居跡	砥　石	アルコーズ質砂岩	817g	第71図－12	鉄錆の付着有り
24	〃	〃	磨　石	火山岩	462.2g	〃　－13	
25	〃	〃	砥　石	アルコーズ質砂岩	222g	〃　－14	
26	〃	〃	石　斧	粘板岩	146g	〃　－15	磨製
27	〃	〃	石庖丁	〃	14.7g	〃　－16	破片
28	〃	〃	石　皿	角閃石安山岩	5,000g	第72図－17	
29	〃	A－4号住居跡	石　錘	〃	102.7g	第77図－10	
30	〃	〃	砥　石	アルコーズ質砂岩	83.7g	〃　－11	
31	〃	B－1号住居跡	石　斧	結晶片岩	96.7g	第81図－16	打製石斧、縄文
32	〃	B－2号住居跡	砥　石	アルコーズ質砂岩	46.7g	第84図－4	
33	〃	〃	〃	〃	112.2g	〃　－5	
34	〃	D－2号住居跡	石　錘	角閃石安山岩	76.5g	第87図－3	
35	〃	D－3号住居跡	砥　石	アルコーズ質砂岩	38g	第89図－3	
36	〃	〃	石　錘	角閃石安山岩	262.7g	〃　－4	
37	〃	C－1号土壙墓	〃	〃	62.7g	第104図－2	
38	〃	D　〃	砥　石		28g	第101図－9	
39	〃	東側土器溜め	石皿・敲石併用	火山岩	1,590g	第106図－14	敲打器としても使用 敲打痕を残す
40	〃	西側土器溜め	石　皿	〃	1,275g	第107図－32	
41	〃	遺構に伴わない遺物（A地区）	石庖丁	粘板岩	7.2g	第108図－6	破片、未製品
42	〃	〃	砥　石		69g	〃　－7	
43	〃	〃	〃	アルコーズ質砂岩	684.2g	〃　－8	
44	〃	〃	石　鏃	結晶片岩	9.7g	第109図－12	
45	〃	〃（C地区）	石庖丁	粘板岩	33.7g	第110図－6	未製品、破片
46	〃	〃	石　錘	結晶片岩	38g	〃　－7	
47	〃	〃	〃	角閃石安山岩	122.5g	〃　－8	
48	〃	〃	砥　石	アルコーズ質砂岩	453g	〃　－9	
49	〃	〃（D地区）	石庖丁	粘板岩	47.5g	第112図－5	未製品、破片
50	〃	〃	〃	〃	129g	〃　－6	未製品、完形品
51	〃	〃	砥　石	アルコーズ質砂岩	202.5g	〃　－4	
52	III	中央グリッド1号住居跡	〃	流紋岩（陶石）	213.7g	第123図－15	
53	〃	〃	石皿（台石）		16.5kg	〃　－16	
54	〃	遺構に伴わない遺物（中央グリッド）	石　斧		30.5g	図なし	未製品、破片
55	〃	〃	孔穴軽石	軽　石	9g	図版96	

56	Ⅲ	北側トレンチ 黒色ピット内	石庖丁	粘板岩	43g	第127図－9	完成品
57	〃	南側トレンチ 1号住居跡	砥　石	アルコーズ質砂岩	160.2g	第131図－3	
58	〃	遺構に伴わない遺物(南側トレンチ)	〃	〃	177.7g	第133図－34	
59	〃	〃	〃	〃	182.7g	〃　－36	
60	〃	〃	石　錘	〃	74g	〃　－35	
61	〃	西側トレンチ 1号住居跡	砥　石	流紋岩（陶石）	97.2g	第136図－2	
62	〃	遺構に伴わない遺物(西側トレンチ)	〃	アルコーズ質砂岩	350.2g	第137図－9	
63	〃	資材廃棄用土壙 溝内	石庖丁	粘板岩	18.2g	第139図－3	未製品、半欠
64	〃	〃	磨　石		1,300g	〃　－5	
65	〃	〃	〃		560g	〃　－4	
66	〃	遺構に伴わない遺物(溝追跡トレンチ)	砥　石	流紋岩（陶石）	67.2g	第140図－3	
67	〃	〃 Ⅰ－2トレンチ	石　斧	結晶片岩	95g	第148図－7	未製品 打製、細文
68	〃	〃 No.2拡張ピット	石庖丁	〃	10.2g	第161図－20	破片
69	〃	〃 〃	砥　石		514g	〃　－19	
70	〃	〃 No.3ピット	〃	砂岩	21.7g	第163図－9	
71	〃	〃 No.4ピット	石庖丁	結晶片岩	49g	第166図－7	半欠
72	〃	〃 No.6ピット	砥　石	流紋岩（陶石）	66.5g	第171図－2	
73	〃	〃 No.7ピット	石　錘		1,259g	第173図－17	
74	〃	〃 No.10ピット	石　斧	結晶片岩	126.2g	第179図－4	磨製、半折
75	〃	近江工業内第1トレンチ 2号住居跡	石庖丁	粘板岩	36.2g	第182図－29	半折
76	〃	〃	〃	〃	6.7g	〃　－30	半折
77	〃	遺構に伴わない遺物(近江1トレ)	石　鏃	結晶片岩	1g	第184図－38	
78	〃	〃 〃	砥　石	流紋岩（陶石）	18.5g	図ナシ	破片
79	〃	〃 (近江2トレ)	石　皿	火山岩	980.5g	第186図－8	
80	〃	〃 〃	石　錘	角閃石安山岩	62.5g	〃　－9	
81	〃	近江工業内6トレ 4号住居跡	砥　石	流紋岩（陶石）	113.2g	第188図－2	
82	〃	近江工業内4トレ 溝内	〃	〃	252.7g	第191図－16	
83	〃	〃	石　錘		39g	〃　－17	
84	〃	近江工業内5トレ 溝上	砥　石	流紋岩（陶石）	686g	第202図－56	
85	〃	〃 〃	〃	アルコーズ質砂岩	142g	〃　－57	
86	〃	近江工業内5トレ	〃	〃	75.7g	第205図－78	
87	〃	〃	〃	流紋岩（陶石）	87.2g	〃　－77	
88	Ⅳ	1号住居跡	石　錘	安山岩	134g	第210図－9	
89	〃	4号住居跡	石庖丁	輝緑凝灰岩	14.5g	第218図－12	
90	〃	6号住居跡	磨　石	角閃石安山岩	784.5g	第224図－3	
91	〃	遺構に伴わない遺物(第1調査区内)	砥　石	砂岩	139.5g	第231図－21	

92	Ⅳ	遺構に伴わない遺物（第1調査区内）	石庖丁	輝緑凝灰岩	9.7g	第231図－22	
93	〃	〃	砥　石	アルコーズ質砂岩	53.7g	〃　－23	
94	〃	〃	石　錘	角閃石安山岩	28.7g	〃　－24	半欠
95	〃	〃	〃	〃	34.7g	〃　－25	
96	〃	〃	砥　石	アルコーズ質砂岩	78.5g	〃　－26	
97	〃	〃	〃	流紋岩（陶石）	10.7g	〃　－27	
98	〃	〃	〃	砂岩	115.7g	〃　－28	
99	〃	〃	〃	〃	178.5g	〃　－29	
100	〃	〃	石　鏃	サヌカイト	2.7g	第233図－66	
101	〃	土器溜め	〃	黒曜石	1g	第247図－207	縄文
102	〃	〃	〃	サヌカイト	8.2g	第248図－208	
103	〃	〃	石庖丁	粘板岩	72g	〃　－209	未製品、完形品
104	〃	〃	〃	〃	34g	〃　－210	未製品、完形品
105	〃	〃	石　皿	角閃石安山岩	1,210g	〃　－211	
106	〃	〃	磨　石	〃	275.2g	〃　－212	
107	〃	〃	〃	〃	385.5g	〃　－213	
108	〃	〃	砥　石	〃	2,110g	〃　－214	
109	〃	〃	石　錘	〃	210g	〃　－215	
110	〃	〃	磨　石		1,300g	〃　－216	全面研磨
111	〃	〃	石　錘	角閃石安山岩	200g	〃　－217	
112	〃	〃	石　斧	結晶片岩	152g	〃　－218	打製、縄文
113	〃	〃	砥　石	流紋岩（陶石）	44g	図ナシ	
114	鹿	南側トレンチ（2トレ）	石　鏃	黒曜石	0.7g	第249図－10	縄文
115	〃	〃	〃	〃	0.6g	〃　－11	縄文
116	〃	〃	砥　石	アルコーズ質砂岩	93g	〃　－18	
117	〃	〃	石庖丁	粘板岩	15.2g	〃　－19	未製品、半欠
118	〃	〃	〃	〃	21g	〃　－21	未製品、半欠
119	〃	西側トレンチ	石製品	アルコーズ質砂岩	368g	〃　－16	男根
120	〃	〃	砥　石	〃	231.2g	〃　－17	
121	〃	〃	石庖丁	粘板岩	62.5g	〃　－20	未製品、半欠

砥　石……41
石庖丁……27
石　錘……17
磨　石……8
石　皿……6
石　鏃……7
石　斧……10
石製品……1
軽　石……4
合計　121

第７節　方保田東原遺跡出土の鉄器について

鉄器と石器

方保田東原遺跡におけるⅠ次からⅣ次までの発掘調査、及び鹿本高校による発掘調査で出土した鉄器は、破片も含めると170点を超え、総重量は1537.2ｇを計る。我々が日常仕事で使用する移植ゴテ８本分程の重さである。しかし、この中で器種の断定できるものがわずかに48点で、他は器種不明の鉄片であった。48点の内訳は、鉄鏃19点、刀子12点、手鎌６点、鉄斧（手斧）４点、鉇３点、鎌２点、直刀１点、鋤先１点である。この内、鉄鏃３点、直刀片、鋤先は明らかに時期が新しいと思われるので、他の鉄器とは一応区別する。[註1]

以上のように方保田東原遺跡からは豊富な鉄器類が出土しているが、鉄器が普及するということは、石器の消滅を意味するわけで[註2]、弥生時代も後期になると「陸耕を行なう特殊な段丘地帯や一部地域を除いて、おしなべて石器は消滅して鉄器に変って」[註3]いくことになる。この意味で、少なくともこの時期に該当する鉄器は、石器の減少、消滅という問題との関わりの中で捉えられねばならないであろう。さいわい本遺跡からは、鉄器、石器とも対比しうるだけの資料が出土しているので、鉄器と石器の交替の一場面がのぞけるかも知れない。

まず、木工具について見てみると、鉄器には手斧４点、鉇３点、刀子12点[註4]の３種19点があるのに対し、石器では磨製石斧４点のみであった。荒割り用の磨製石斧を残して木工具は鉄器化していると言えるだろう。

農耕具では収穫具の手鎌６点、鎌２点に対して、石庖丁は27点（未製品12点を含む）も出土しており、収穫具においてはいまだ石器への依存度が高かったことを示している。収穫具以外に農耕具は出土していないが、収穫具のみで農業生産を果せる訳はなく、また、木工具の充実している点を考えれば、耕作等の作業に関しては木器を使っていたであろうことが推察される。

ちなみに、本遺跡からは石庖丁の未製品が12点出土している。このことは、当時本遺跡においてさらに石庖丁を作り続けようとした証拠なのか、逆に、石庖丁の製作をこの時点で中止、放棄したことを意味するのか、判断に迷うところであるが、いずれにしてもこの器種の未製品の存在は興味深い。

石器から鉄器への転換は、方保田東原遺跡において、狩猟具（あるいは武器）たるヤジリにも顕著に現われている。鉄鏃が16点出土しているのに対して、ほぼ同一時期に製作されたと思われる石鏃は、わずかに４点のみであった。ほとんど鉄器化していると言っていいだろう。手鎌、鎌、及び石庖丁という収穫具が多く出土することで、本遺跡の農業生産力が、ある程度の発達した段階に達していたであろうと推理することはできる訳だが、鉄器の中で鉄鏃が最も多い器種である点と[註5]、漁労具たる石錘が砥石（41点），石庖丁に次いで17点も出土している点を考え合わせれば、農業生産の恩恵にあずかりながらもそれのみに生活基盤を置いていたのではなく、狩猟漁労もまた当時において大切な日々の営みであったことが想像される。

弥生時代後期を「鉄製工具＋木製農具＋石製・鉄製収穫具」の段階として位置付ける見方[註6]がある

が、方保田東原遺跡も、まさにこの段階にあると言えるであろう。木製農具の検出はできなかったが、鉄製工具の普及度が木製農具やその他の木器の存在を裏付ける。収穫具においては、いわゆる、金石併用というより、いまだ石庖丁が主流をなしていたようである。石器から鉄器への移り変りという歴史的事象から本遺跡を見ると、弥生後期末の、当時としてはごく平均的な発展段階にある集落像が浮び上ってくるように思われる。「鉄製工具＋木製農具＋石製・鉄製収穫具」の段階という範疇に、本遺跡においては、「鉄製狩猟具」という点を付け加えておきたい。

板状・棒状・不定形・三角形の鉄製品

方保田東原遺跡から出土した鉄器類のうち、器種の断定できるものはわずかに48点であったことは先に述べたとおりだが、不明鉄片の中には断定はできないが、どうにか器種の想像できるものも少なくなかった。しかし、第 263図に抽出した鉄器類は、我々が考えうるどの器種にもあてはめることのできないものであった。形態的にも刃部などの鋭い部位を持った痕跡も見られず、利器として使用されたとは考えにくいのである。それでは、これらの鉄器類はいったい何か、という疑問が湧いてくる訳であるが、我々はこれを鉄の素材（地金）ではないかと疑ってみた。もちろん、これらの鉄器類を鉄素材と断定できるだけの積極的な根拠を持ち合わせている訳ではなく、理化学的な分析も済んでいない現在、あくまでその形態的な特徴や、出土のしかたなどから考えた可能性の問題ということにとどまるのは言うまでもない。

鉄素材の可能性のあるものを24点抽出したが、これらは図で示すように、A板状のもの、B棒状のもの、C不定形のもの、D三角形のもの、というふうに分類できる。

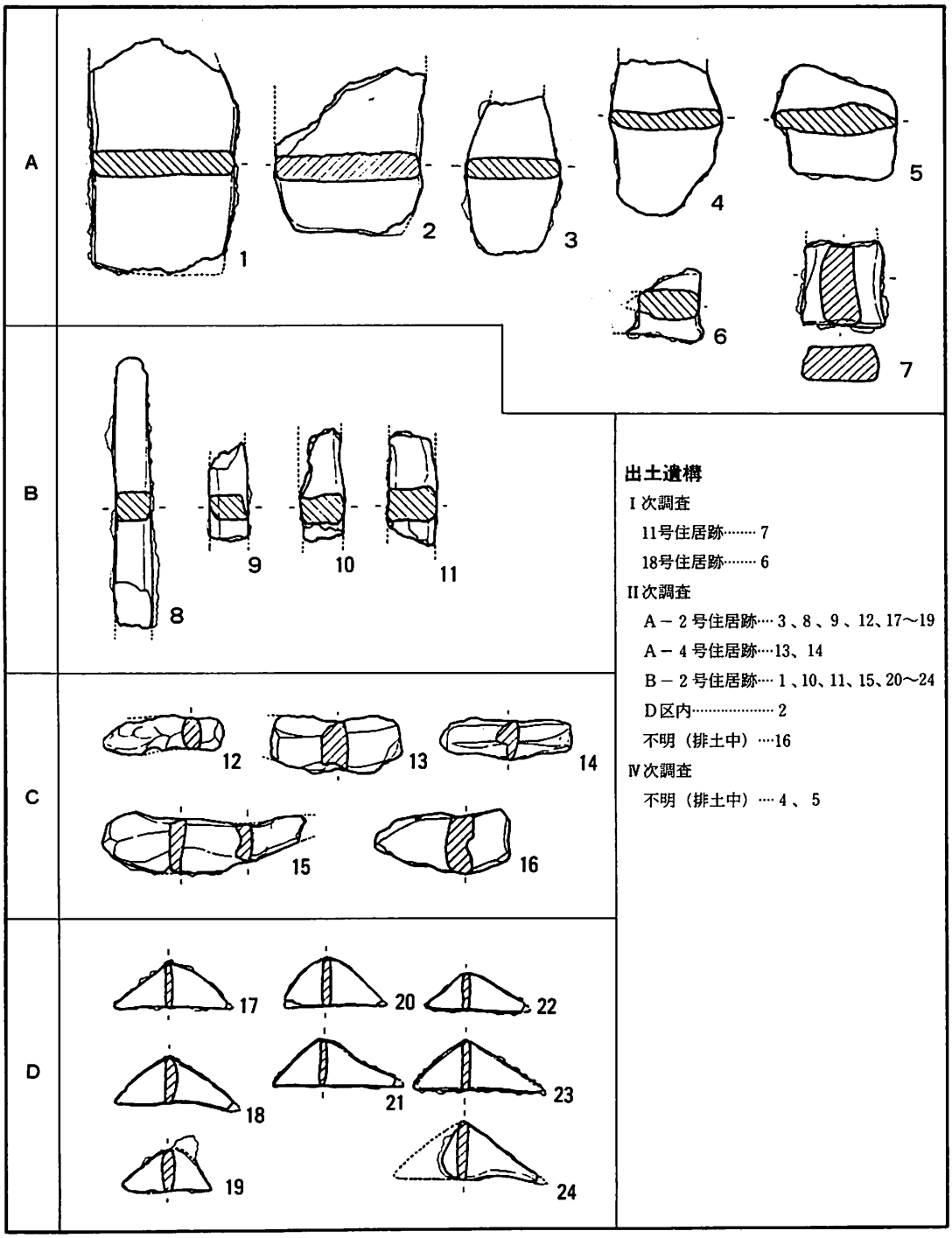
A類においては、1と2がかなり近似した形状を示しており、幅約 4.3cm、厚さ約 0.8cmを測る。両者とも一方の端部を欠いているが、おそらく、原形はもう少し縦が伸びて、短冊形に近くなるものと思われる。図の天地を逆にして見ると、板状鉄斧の基部のようにも思えるが、端部を欠損していて刃部の有無は不明であるし、まして九州における板状鉄斧の検出例が1、2例[註8]しかないことなど考えれば、1、2が板状鉄斧である可能性はうすいであろう。3、4、5も破片であり、全体的な形状は知り得ない。6、7は肉厚で、厚さ1cm前後を測る。

B類は棒状をなすもので、すべて破片である。4点とも断面形は、不正長方形を呈す。このうちでは8が最も長く、一方の端部は残っている。長さ 8.2cmを測り、端部の方が若干薄くなっている。この4点は、ノミである可能性を残しているが、現時点では明らかにできない。

A類、B類を見てきて気にかかるのが、壱岐ハルノツジ・カラカミ両遺跡出土の鉄素材と考えられている鉄器類である。ここでは「鉄棒状をなすもの」と「板金をなすもの」の2種類が報告されている[註9]。「板金をなすもの」の2点しか図面を見ることはできなかったが、カラカミ遺跡出土のものは、A類の1、2に似た形状を呈していると言えるであろう。また、「鉄棒状をなすもの」は、B類に比定できるであろう。

C類も棒状を呈しているが、湾曲していたり、ねじれていたり、断面形が部位によってまちまちだったりして規格性を持たないものである。鉄塊と言ってもいいかも知れない。

D類は本文中で三角鉄片として扱った不明鉄器である。8点出土しているが、長さ 2.7cm～4cm、



第263図　板状、棒状、不定形、三角形の鉄製品

幅 1.1cm～ 1.8cm、厚さ 0.2cm～ 0.4cmの範囲内におさまってしまう。17～19がII次調査におけるA－2号住居跡から、20～24が同じくII次調査のB－2号住居跡から集中的に出土している。このように小さな鉄片が鉄素材としての役割を果せるかどうか、きわめて疑わしいのは事実であるが、図でもわかるようにはっきりした規格性があること、A－2号住居跡、B－2号住居跡という、方保田東原遺跡において最も多く、しかも集中的に鉄器を出土した遺構に伴なうこと、24以外はほとんど完形品であるが、このままでの利器としての使用が考えにくいことなどから、一応鉄素材の可能性があるのではないかと疑ってみた。しかし、この小鉄片を素材と見た場合、これを加工していったいどれ程の鉄器が作れるのか、と考えるとおおいに疑問が残り、むしろ別の視点（たとえば祭祀的な）からのアプローチの方が妥当性を帯びているようにも思われる。

ここでA－2号住居跡、B－2号住居跡について少し触れると、両遺構は、形をなさない鉄片も含めそれぞれ、20点以上の鉄器を出土しており、その集中度から見て鉄器の製作を行なった可能性が考えられる遺構である。[註10]

以上述べたことをまとめてみると、

①それぞれ形態的な相違はあるにせよ、いずれも鉄器としての利用は考えにくく、そのままでは意味をなさないものばかりである。

②24点のうち、A－2号住居跡から7点、B－2号住居跡から9点と集中的に出土している。

③壱岐ハルノツジ・カラカミ両遺跡から出土した鉄素材と考えられる「鉄棒状」（断面方形、または長方形）のもの、「板金」状のものと、A、B類の鉄製品が良く似た形態を示している。

この3点から、これら24点の不明鉄器類を根拠薄弱ながら鉄素材ではないかと考えた。しかし、弥生時代における鉄素材の可能性のある鉄製品の出土例が、わずかに壱岐ハルノツジ・カラカミ両遺跡と、下関市の綾羅木遺跡[註11]の2例しかない現在、対比すべき材料の持ち合せもないので、今回はその可能性のある資料の紹介ということにとどめておきたい。今後の類例が待ちのぞまれる。

（坂本）

註

註1　IV次調査において出土した鋤（鍬）先は、U字形のそれであり、我々が本報告書で主な対象とした弥生終末～古墳初頭の遺物ではあるまい。

松本正信「鉄鋌に関する一試論」『考古学研究』86号　1975

註2　岡崎　敬「日本における初期鉄製品の問題」『考古学雑誌』42巻1号　1957

緒方　勉「諏訪原遺跡出土遺物」『熊本史学』37号　1970

潮見　浩「倭の鉄」『ゼミナール日本古代史』（上）　1979

註3　下条信行「石器の製作と技術」『古代史発掘（4）－稲作の始まり－』　1975

註4　刀子は、いわゆる万能利器で、狩猟や調理等にもおおいに使用されたと考えられるが、ここでは一応木工具として扱った。

註5　菊池郡大津町の西弥護免遺跡からは、小鉄片も含めて578点もの鉄器が出土し、鉄鏃89点、手鎌51点、刀子22点、手斧16点、ノミ状鉄器3点が確認された。ここでも鉄鏃の数が他を圧倒している。（瀬丸敬二・黒田裕司両氏の教示による）

西弥護免遺跡調査団『西弥護免遺跡調査概報』 1980

註6 川越哲志「金属器の製作と技術」『古代史発掘（4）－稲作の始まり』 1975

註7 本文ではA類1、2の板状鉄製品について「鉄鋌の可能性がある」というように「鉄鋌」という言葉を使ったが、通例では古墳時代の鉄素材と考えられるものの中で「短冊形の鉄板で平面形態に一定の規格があり、一般的に両端部の幅がやや広いもの」についてのみ鉄鋌の名称が用いられており、さらには、鉄鋌＝鉄素材説に対する異論も存在するので、ここでは鉄鋌という言葉は使わない。

大沢正己・山本信夫「鉄鋌の新例に関する検討」『考古学雑誌』62巻4号 1977

松本正信、前掲註1

村上英之助「鉄鋌の本質とその編年序説」『考古学研究』94号 1977

註8 古瀬清秀「古墳時代鉄製工具の研究」『考古学雑誌』60巻2号 1974

潮見 浩 前掲註2

註9 岡崎 敬、前掲註2

この論考の中で「鉄棒状をなすもの」は図面が示されていないが、岡崎氏が「この中にはのみになるものがあるかどうか検査したが、明らかにすることができなかった」と述べておられるところから、「鉄棒状をなすもの」は本遺跡でいうB類に近似するものと思われる。

註10 前掲註2の玉名郡菊水町諏訪原遺跡では大鍛冶、及び小鍛冶を行なったと見られる住居跡が確認されている。

緒方 勉「まとめ」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報－福岡熊本線（南関～植木）－』

また前掲註5の大津町西弥護免遺跡の173号住居跡からは、273点（大半が針状の鉄片）が集中して出土し、小鍛冶を行なったものと考えられる。（瀬丸・黒田氏教示）

註11 橋口達也「初期鉄製品をめぐる二、三の問題」『考古学雑誌』60巻1号 1974

大沢正己・山本信夫、前掲註7

第８節　方保田東原遺跡における祭祀行為について

はじめに

ここで祭祀遺物として取扱ったのは、勾玉、ミニチュア土器、土製品を主としているが、粘土塊も一応含めて考えてみた。

当遺跡出土の祭祀遺物は、Ⅰ次調査～Ⅳ次調査、また、鹿本高校調査区も含めて散在的に出土しており、その数は99点に及んでいる。その内訳は勾玉４点、ミニチュア土器65点、土製品19点、粘土塊11点であり、各調査次において遺構に伴なって出土した資料を中心に、住居跡・青銅製品等も含めて考えてみたい。

出土状況

Ⅰ次調査における遺構は調査区全域に及んでおり、竪穴住居跡25軒をはじめ、石蓋土壙墓、溝状遺構等と多種にわたり検出されている。ここで検出された資料は総数19点で、その内遺構に伴なって出土したのは10点を数える。資料を出土した遺構は全て住居跡で、１号住居跡より壺形土器の胴部１点、２号住居跡より鉢形土器の完形品と口縁部片の２点、15号住居跡より壺形土器の底部片２点、22号住居跡より勾玉とオカリナ形土製品各１点、23号住居跡より脚付甕と鉢形土器２点であり、これらの住居跡は全て隣接しており、また、２号住居跡と22号住居跡は重複している。

Ⅱ次調査における遺構は木棺墓、土壙墓が主として検出され、この他に住居跡９軒を確認している。ここで検出された資料は総数６点で、遺構に伴うのはＡ－４号住居跡よりコップ形土器の口縁部１点とＤ－３号住居跡より出土した器台か高坏の柱状部と思われる資料１点のみであり、Ⅰ次調査にみられるような集中的な出土はみられない。

Ⅲ次調査は、面としての調査は行なっていないので遺構に伴なった資料の検出はないが、総数28点の資料が出土している。

Ⅳ次調査における遺構は住居跡と土器溜めで、総数34点の資料を出土している。この内住居跡に伴うのは７点で、１号住居跡より円筒状の土製品１点、３号住居跡より土製柄杓１点，４号住居跡より土製品２点と把手２点、７号住居跡より埦１点を出土している。また、住居跡確認前に出土したため遺構に伴なわない資料として取扱ったものに、１号住居跡上層より出土した土製勾玉がある。

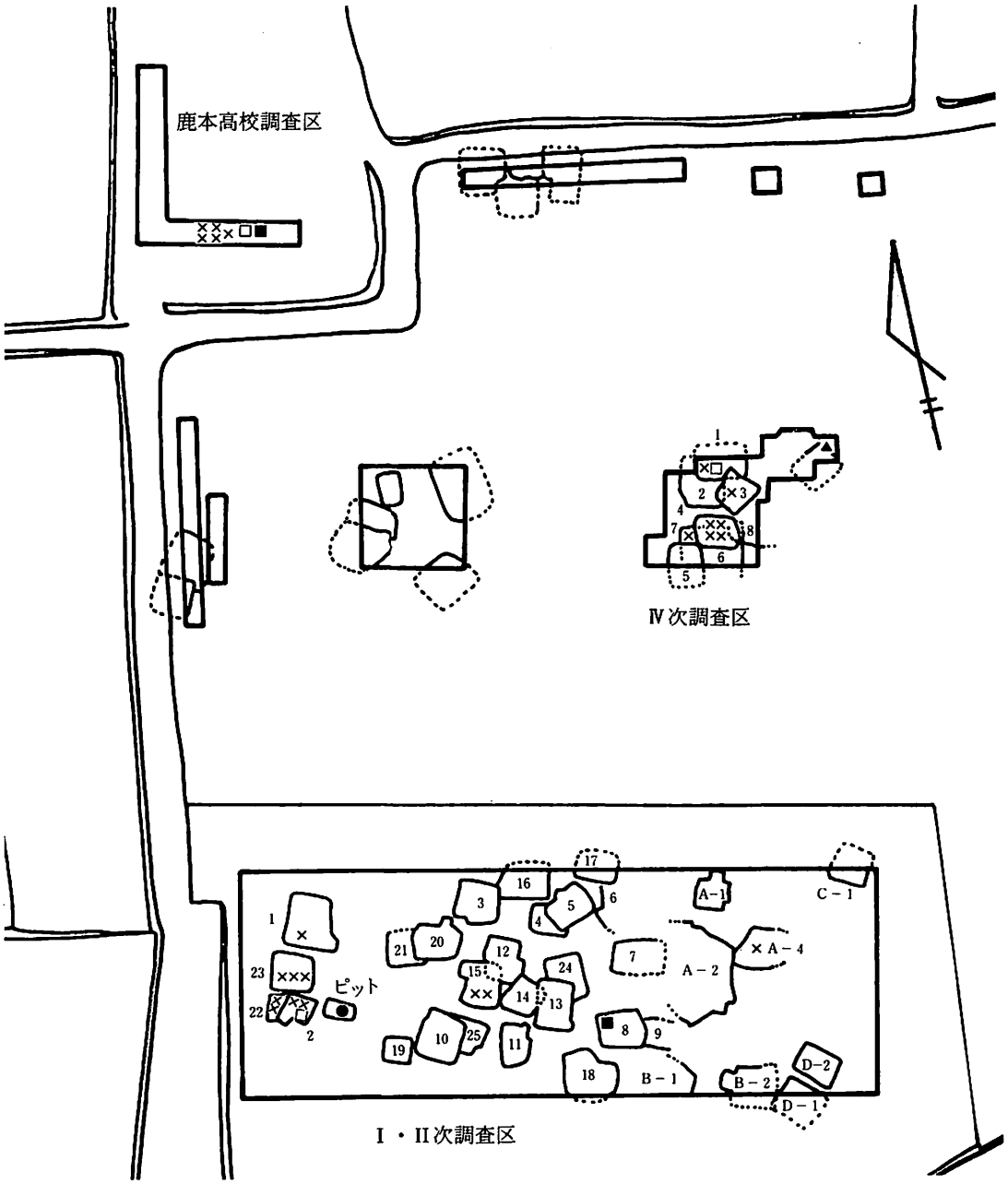
鹿本高校調査区においては１軒の住居跡が確認されており、出土総数12点の内５点が住居跡より出土している。その内訳は勾玉１点、土製歩揺１点、鉢形土器２点、土製品１点となっている。

以上のように、遺構に伴う資料は散在的に出土するのではなく、ある一定地域の住居跡より集中して出土している事が確認出来た。

住居跡について

ここで、資料が集中して出土している地域における住居跡相互の年代幅を観てみたい。

Ⅰ次調査では、１号、２号、22号、23号住居跡である。これらの住居跡は出土遺物等を比較して



●巴形銅器
▲小形仿製内行花文鏡
■銅　鏃
□勾　玉
×ミニチュア土器
数字は各調査時の住居跡番号である

第264図　祭祀遺物出土分布図

1号住居跡は東原Ⅲ－a期、2号住居跡は東原Ⅱ－a期、23号住居跡は東原Ⅲ－b期の時期で、そこには僅かな時間の開きが観られる。また、22号住居跡については時期判断しうるような資料が出土していないために不明であるが、2号住居跡に切られており、東原Ⅱ－a期以前に築かれたという事がいえる。Ⅳ次調査では1号、3号、4号、7号住居跡であり、1号住居跡は東原Ⅴ－a期、3号、4号住居跡は東原Ⅴ－c期、7号住居跡は東原Ⅳ－a期にそれぞれ位置付けられる。また、鹿本高校調査区における住居跡は、時期判断しうるような資料が出土していないために不明確である。

以上のように、住居跡相互にはある程度の年代幅をみる事が出来る。これらの住居跡は一定地域にまとまっており、さらに、祭祀資料を出土しているという事実から観て、長期間に亘り祭祀行為が行なわれていた地域という事が言えないだろうか。

青銅製品について

青銅製品は合計4点で、Ⅰ次調査時に巴形銅器と銅鏃の各1点、Ⅳ次調査より小形仿製内行花文鏡1点、鹿本高校調査より銅鏃1点を出土している。これらの青銅器についての説明は各項に論じているので避けるが、ここでは、その出土地点に主眼を置いてみた。

まず、Ⅰ次調査時に出土した巴形銅器は、2号住居跡の東側1mで検出された楕円形のピット上面より出土している。この地点はⅠ次調査において祭祀遺物が集中して出土した地点と非常に臨接している。また、銅鏃は8号住居跡より出土しているが、ここでは周囲に祭祀遺物の集中的な出土は観られなかった。Ⅳ次調査においては、土器溜め東端より小形仿製内行花文鏡1面が出土している。この出土地点は同調査時における祭祀遺物を集中的に出土した地域の東側7mに位置している。さらに、鹿本高校調査時出土の銅鏃は1号住居跡に臨接する地点で出土している。

以上のように、Ⅰ次調査時出土の銅鏃を除く他の青銅製品は、祭祀遺物を集中的に出土した住居跡に非常に臨接した地点で出土しており、祭祀遺物の集中状況と何らかの関連性があるものと思われる。

楕円形ピットについて

Ⅰ次調査で検出した2号住居跡の東側、巴形銅器の出土地点で確認された。ピットは楕円形で長径 3.5m、短径 1.7mを測り、長軸をほぼ東西に向けている。このピットより出土した資料は微量で、図化し得たものは1点だけである（第62図)。この資料は、東原Ⅲ－a期に位置付けられ、巴形銅器の出土状況から観ても、両者間には時間の開きがある事は明白である。また、このピットの性格については推測の域を出ないが、周囲の環境から観ても祭祀用土壙としての可能性は高いものと思われる。

おわりに

以上のことを前提として、方保田東原遺跡の祭祀遺構について観てみたい。当遺跡で、祭祀遺構と断定出来るものは皆無であるが、その可能性の強いものとして、祭祀遺物を集中して出土した住居跡と楕円形ピットを上げる事が出来る。これらの住居跡は、一つの集中地域内においても、ある

程度の時間差を認める事が出来る。この事は、長期間に亘り一定地域において祭祀行為が行なわれていた事を示しているものと推察される。また、楕円形ピットについても、巴形銅器との間には時間差が認められる。この事は、Ⅰ次調査における住居跡の時間差と一致するものと考えられるが、住居跡と楕円形ピットさらには巴形銅器が、祭祀行為を行う上で、同一時間に供用されたか、また、そこに僅かだが時間の開きがあったのかは不明である。

Ⅰ次調査とⅣ次調査の遺物集中地域の時間差は前記の通り、Ⅰ次は東原Ⅱ－ａ～Ⅲ－ｂ期に、またⅣ次は東原Ⅳ－ａ～Ⅴ－ｃ期に位置付ける事が出来る。この事は、長期間に亘り祭祀行為を行なっていたⅠ次調査集中地域が、何らかの要因によりⅣ次調査集中地域へ移行したものと推察される。また、鹿本高校調査区については、その年代が不明確なために推測の域を出る事は出来ないが、Ⅰ次、Ⅳ次調査集中地域に続くものか、または、一集落内において２箇所以上に祭祀行為が行なわれた地域があったという事も考えられる。

祭祀的要素が強いと思われる青銅製品の出土地点、また、出土状況については先に述べたとおりであるが、全ての青銅製品が各集中地域に非常に臨接した地点より出土している事、巴形銅器と小形仿製内行花文鏡が西を向けて立て掛けられた状態で検出された事等が上げられる。また青銅製品が一集中地域より１個出土している事については、住居跡等の時間差を考えれば単純に解釈するのは困難なようである。この他、当遺跡より土製勾玉４点が出土しているが、その内３点が遺物集中地域より１点の割で出土している。

以上、当遺跡における祭祀遺物の出土分布状態から祭祀遺構の割出しを行なってみたが、遺跡の規模から比較するとその調査区域は微量であり、今回の調査結果を遺跡全体のこととして当て嵌る事は出来ないが、祭祀行為を考える上での一助にはなると思われる。（倉原）

表８　祭祀遺物一覧表

番　号	調査次	出　土　地	器　種	部　位
1	Ⅰ	１号住居跡	壺	胴　部
2	Ⅰ	２号住居跡	鉢	口縁部
3	Ⅰ	２号住居跡	鉢	完　形
4	Ⅰ	15号住居跡	壺	底　部
5	Ⅰ	15号住居跡	壺	底　部
6	Ⅰ	22号住居跡	勾　玉	
7	Ⅰ	22号住居跡	オカリナ形土製品	
8	Ⅰ	23号住居跡	脚付甕	完　形
9	Ⅰ	23号住居跡	鉢	口縁部
10	Ⅰ	23号住居跡	甕	口縁部
11	Ⅰ	遺構に伴なわない	脚付甕	底　部
12	Ⅰ	遺構に伴なわない	鉢	口縁から胴部
13	Ⅰ	遺構に伴なわない	鉢	底　部
14	Ⅰ	遺構に伴なわない	埦	完　形

15	I	遺構に伴なわない	粘土塊	
16	I	遺構に伴なわない	粘土塊	
17	I	遺構に伴なわない	投　弾	
18	I	遺構に伴なわない	土製柄杓	柄
19	I	遺構に伴なわない	コップ形土器？	口縁部
20	II	A地区4号住居跡	コップ形土器	口縁部
21	II	D地区3号住居跡	器台か高坏	柱状部
22	II	遺構に伴なわない	土製品	鏡　？
23	II	遺構に伴なわない	鉢	底　部
24	II	遺構に伴なわない	粘土塊	
25	II	遺構に伴なわない	粘土塊	
26	III	No 2 ピット	粘土塊	
27	III	No 2 ピット	笠形土製品	半　欠
28	III	No 2 拡張ピット	脚付甕	完　形
29	III	No 3 ピット	壺	口縁部
30	III	No 4 ピット拡張部	蓋形土器	半　欠
31	III	No 5 ピット	鉢	底　部
32	III	No 7 ピット	土製品	丹塗り粘土板
33	III	No 9 ピット	土製品	
34	III	中央グリッド	甕	脚　部
35	III	中央グリッド	壺	胴　部
36	III	北側トレンチ	鉢	完　形
37	III	北側トレンチ	埦	完　形
38	III	北側トレンチ	鉢	口縁部
39	III	北側トレンチ	粘土塊	
40	III	農協東側トレンチV字溝内第2オレンジ層	鉢	口縁部
41	III	工場西側ちりすて場	土製柄杓	柄
42	III	資材廃棄用土壙東側断面	粘土塊	
43	III	近江工業内1トレンチ溝内	粘土塊	
44	III	近江工業内3トレンチ	甑	底　部
45	III	近江工業内3トレンチ	甕　？	脚　部
46	III	近江工業内3トレンチ	勾　玉	
47	III	近江工業内4トレンチ	埦	半　欠
48	III	近江工業内4トレンチ	高　坏	脚　部
49	III	近江工業内4トレンチ	粘土塊	
50	III	近江工業内5トレンチ	壺	底　部
51	III	近江工業内6トレンチ	土製柄杓	完　形
52	III	近江工業内6トレンチ	粘土塊	
53	III	近江工業6トレンチ溝底部	不　明	
54	IV	1号住居跡	円筒状の土製品	完　形
55	IV	3号住居跡	土製柄杓	完　形
56	IV	4号住居跡	土製品	
57	IV	4号住居跡	ジョッキ形土器	把　手
58	IV	4号住居跡	不　明	把　手
59	IV	4号住居跡	土製品	
60	IV	7号住居跡	埦	半　欠
61	IV	土器溜め	鉢	完　形

62	Ⅳ	土器溜め	コップ形土器	完　形
63	Ⅳ	土器溜め	壺	半　欠
64	Ⅳ	土器溜め	不　明	把　手
65	Ⅳ	遺構に伴なわない	土製品	完　形
66	Ⅳ	遺構に伴なわない	土製品	半　欠
67	Ⅳ	遺構に伴なわない	勾　玉	
68	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	完　形
69	Ⅳ	遺構に伴なわない	土製柄杓	柄
70	Ⅳ	遺構に伴なわない	脚付甕	底部付近
71	Ⅳ	遺構に伴なわない	土製柄杓	柄
72	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	口縁部
73	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	半　欠
74	Ⅳ	遺構に伴なわない	高坏？	脚　部
75	Ⅳ	遺構に伴なわない	脚付甕	脚　部
76	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	口縁部
77	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	半　欠
78	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	底　部
79	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	底　部
80	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	半　欠
81	Ⅳ	遺構に伴なわない	鉢	口縁部
82	Ⅳ	遺構に伴なわない	埦	口縁部
83	Ⅳ	遺構に伴なわない	埦	口縁部
84	Ⅳ	遺構に伴なわない	脚付甕	底　部
85	Ⅳ	遺構に伴なわない	粘土塊	
86	Ⅳ	遺構に伴なわない	異形土器	底　部
87	Ⅳ	遺構に伴なわない	蓋形土器	
88	鹿	1号住居跡	勾　玉	完　形
89	鹿	1号住居跡	土製歩揺	完　形
90	鹿	1号住居跡	鉢	口縁部
91	鹿	1号住居跡	鉢	底　部
92	鹿	1号住居跡	土製品	
93	鹿	遺構に伴なわない	鉢	口縁部
94	鹿	遺構に伴なわない	脚付甕	底　部
95	鹿	遺構に伴なわない	土製柄杓	付け根部
96	鹿	遺構に伴なわない	土製品	
97	鹿	遺構に伴なわない	鉢	胴　部
98	鹿	遺構に伴なわない	鉢	口縁部
99	鹿	遺構に伴なわない	脚付甕	底　部

第10章　付　　論

第１節　^{14}C年代測定結果報告書

京都産業大学理学部　山　田　　治

第２節　方保田東原遺跡出土木炭について

熊本大学教育学部　大　迫　靖　雄

第３節　方保田東原遺跡出土石器について

熊本大学理学部　長　谷　義　隆

第1節 ^{14}C年代測定結果報告書

京都産業大学理学部
山　田　　治

1. 試料名　**炭化米**　山鹿市方保田東原遺跡第III次調査近江工業内第5トレンチ2号溝底部出土
   測定番号　KSU−511
   測定値　　2210±30　B.P.

2. 試料名　**炭**　　山鹿市方保田東原遺跡第II次調査A−2号住居跡出土
   測定番号　KSU−512
   測定値　　1865±20　B.P.

註1．B.P. はBefore Presentの意味で、国際的約束によりAD1950を0としてそれ以前の年数を示しています。(いわゆる^{14}C年代)

註2．^{14}Cの半減期は国際的約束に基き5568年を用いています。公式記録にはこの値を採用して下さい。

註3．測定誤差は国際的約束により1標準編差（1σ（シグマ）と書く）で表すことになっています。この範囲に真の値が含まれる確率は、実験的諸誤差が無視できるとき68%です。2σ（上記の結果で±60年）を取ると95%、3σ（上記の結果で±90年）を取ると99.7%の信頼度を持つことになります。

註4．現在ではE. K. Ralph, et alによって与えられた年輪年代（dendrodate）が最も真の年代に近いと考えられますので必要あるときは参考として付記します。(Dendro-date400 BC)（250 BC〜430 BC)

参考文献; E. K. Ralph, et al, MASCA. Newsletter (1973)
E. K. Ralph, et al, RADIOCARBON (1974)
東村武信、考古学と物理化学（学生社）

第２節　方保田東原遺跡出土木炭について

熊本大学教育学部
大　迫　靖　雄

方保田東原遺跡Ａ－２住居跡(第II次調査)および近江工業内№５トレンチ溝底部(第III次調査)から出土した木炭について、その樹種の鑑定をおこなった。

これらの出土木炭はきわめて小片で、しかも完全に炭化している。したがって、外観上からその特徴をみることはきわめて困難であった。しかし、出土木炭の中には丸太の形状を残しているものもあり、放射組織の特徴などある程度みることができるものもあった。

いずれにしても、切片の作製は、かなり困難であったが、セロイジン包埋を行いプレパラートを作製し、顕微鏡観察を行った。この他、木炭の表面を実体顕微鏡によって観察することによって、各々の木炭の特徴を知ることができた。

以下、樹種鑑定した木炭について述べる。

方保田東原遺跡Ａ－２住居跡出土木炭

№１

住居跡出土木炭の中では最も大きく、繊維方向22.00㎜、半径方向13.55㎜、接線方向平均8.30㎜の形状を持っている。

写真１に木口の顕微鏡写真を示す。写真下部に大道管が環状にならび、環孔材であることを示している。また、孔圏外では道管の大きさが減じている。さらに、小道管は放射状にならび、円形で壁がはっきりみられる。さらに、外観上から接線方向で広放射組織が発達していることが観察される。

以上の結果から、本樹種はコナラ亜属（Lepidobalanus sp.）の一種に属する樹種と鑑定される。そのうち、小道管の状態から、クヌギ（Auercus autissima Carruth）または、アベマキ(Auercus varriabilis Blume) と鑑定される。

№２

繊維方向平均12.85㎜、半径方向14.85㎜、接線方向6.80㎜の形状を持っている。

写真２（ａ）、（ｂ）に木口面の顕微鏡写真を示す。（ａ）の下部に大道管が環状にならんでいることが観察され、本試料も№１と同じく、環孔材であることを示している。また、孔圏外では写真２（ｂ）で示されるように、小道管が放射状にならび、形状は円形で壁がかなり明確である。さらに（ｂ）左側にみられるように、広放射組織が存在することがみられる。また、外観上の観察からも広放射組織が発達していることがみられる。

以上の結果から、本試料も№１と同様、コナラ亜属（Lepidobalanus sp.）の一種に属する樹種

と鑑定され、小道管の状態からクヌギ（Auercus autissima Carruth）または、アベマキ（Auercus varriabilis Blume）と鑑定される。

№3

本試料は繊維方向に長い小片である。破損がはげしく、外観上からはまったく特徴をみることはできない。

写真3（a）、（b）に木口面の顕微鏡写真を示す。本顕微鏡写真から、道管が半径方向にならび、本試料は放射孔材であることを示している。さらに、本試料の接線方向（板目面）からの実体顕微鏡による観察から、広放射組織がみられる。

以上の結果から、本試料はアカガシ亜属（Cyclobalanopsis sp.）の一種に属する樹種であると鑑定される。しかし、種の同定は不可能である。

近江工業内№5トレンチ溝底部出土木炭

本試料の寸法は繊維方向18.60㎜、半径方向11.70㎜、接線方向17.75㎜で丸味が残り、それらの形状から半径約25㎜の小丸太であることがわかった。さらに、完全に木炭化しているが、形状は比較的よく保存されている。したがって、外観上の特徴もある程度観察可能である。

写真4（a）、（b）に木口面の顕微鏡写真を示す。本写真から、道管は放射方向にならび、本樹種は放射孔材であることを示している。さらに、広放射組織が観察される。したがって、本試料はアカガシ亜属（Cyclobalanopsis sp.）の一種と鑑定されるが、種の同定は不可能である。

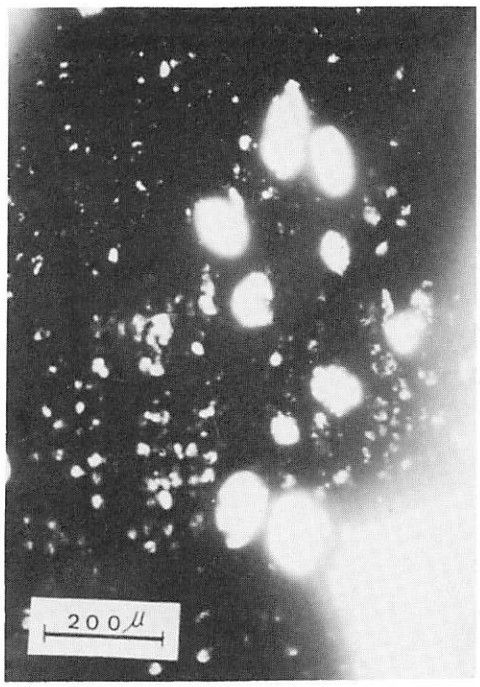
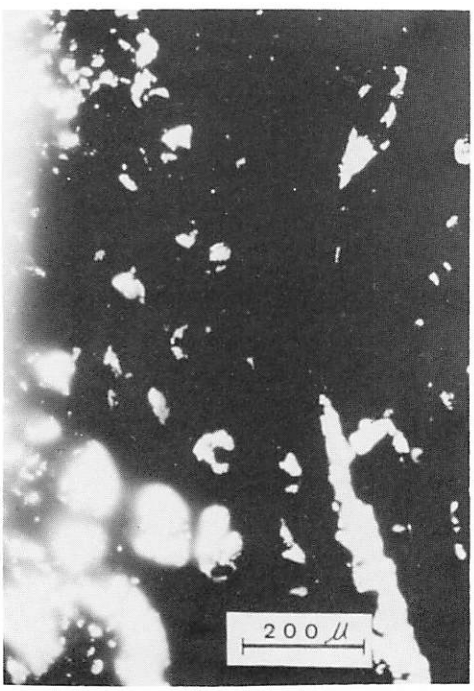
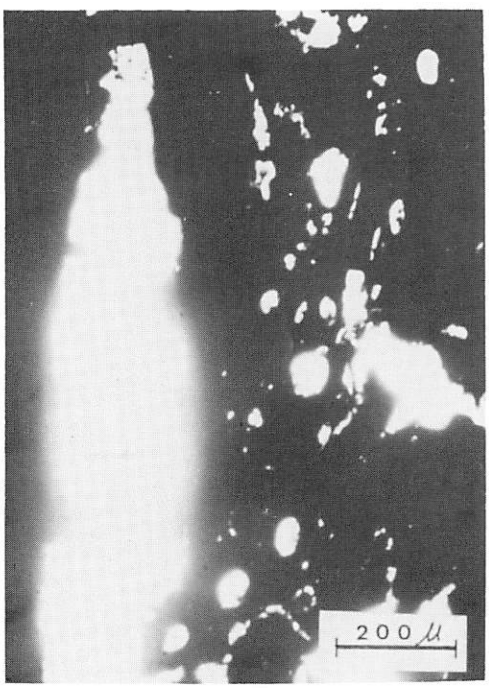


写真 1　方保田東原遺跡Ａ－２住居跡
出土木炭№1



(a)

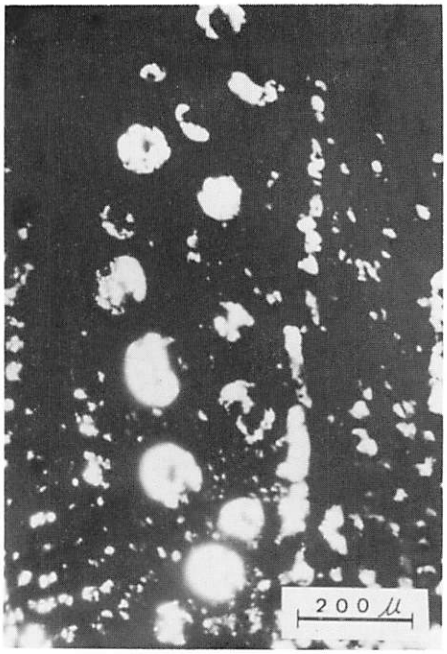


(b)

写真 2 (a), (b)　方保田東原遺跡Ａ－２住居跡
出土木炭№2

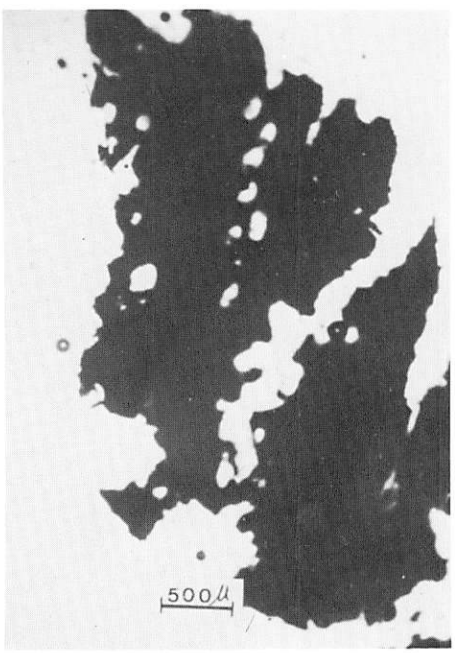


(a)

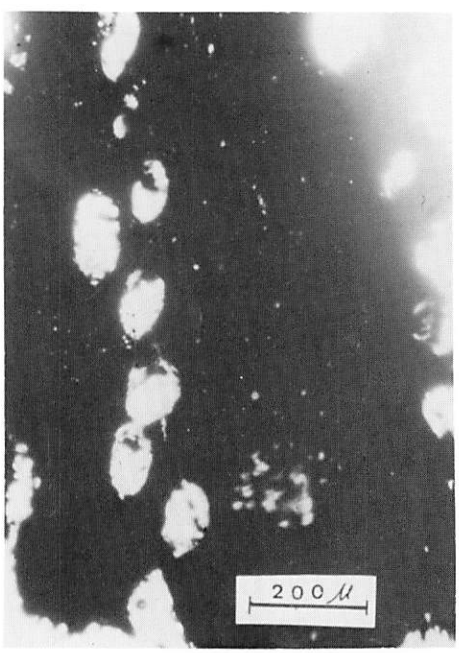


(b)

写真 3 (a), (b)　方保田東原遺跡Ａ－２住居跡
出土木炭№.3



(a)



(b)

写真 4 (a), (b)　方保田東原遺跡近江工業内№.８トレンチ溝底部出土木炭

第３節　方保田東原遺跡出土石器について

熊本大学理学部
長　谷　義　隆

構成鉱物種は、一般に薄片を作成した後、岩石顕微鏡（偏光顕微鏡）下で、その光学性を知ることにより鑑定できるが、試料の破壊をよぎなくされる。したがって今回は、この方法によらず、肉眼鑑定のみによった。

石器の材質の鑑定にあたっては、双眼実体顕微鏡（5 倍～30倍）を使用し、構成粒子の種類、大きさ（粒度）、配列に注目した。

石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石は、肉眼鑑定においても比較的要易に識別されるが、結晶片岩中の有色鉱物、その他微細結晶については肉眼のみでは鑑定できないので、色調、形状を示すにとどめた。

表９　方保田東原遺跡出土石器石材一覧

番号	石器名称	材質（岩石名）	岩石的特徴	調査次別	遺構名	挿図番号
1	石庖丁	粘板岩	暗緑色部と白色～透明部(石英)の略互層	I	１号住居跡	6－5
2	石斧	細粒砂岩	長石、石英からなる有色鉱物多数	I	６号住居跡	
3	石庖丁未製品	結晶片岩	暗緑色針～柱状結晶、長石、石英層状配列	I	６号住居跡	19－5
4	石斧未製品	結晶片岩	暗緑色針～柱状結晶、長石、石英層状配列	I	６号住居跡	19－7
5	砥石	アルコーズ質砂岩	石英、白雲母、岩質物細片含む	I	６号住居跡	19－6
6	石庖丁未製品	結晶片岩	暗緑色針～柱状結晶、白色～透明結晶、石英脈、暗紫色結晶スポット状	I	７号住居跡(P-5内)	21－8
7	石錘	角閃石安山岩	柱状有色鉱物（角閃石）	I	18号住居跡	44－4
8	石庖丁	粘板岩	長石、石英、石英粒アメーバー状に集合	I	遺構に伴わない	64－10
9	砥石	角閃石安山岩	柱状有色鉱物（角閃石）多い	I	遺構に伴わない	
10	砥石	アルコーズ質砂岩	石英（量的に多い）、斜長石、有色鉱物を含む）	II	Ａ－２住居跡	71－14
11	砥石	粘板岩	長石、石英	II	Ａ－２住居跡、落ち込み内	71－16
12	石錘	角閃石安山岩	柱状有色鉱物(角閃石)多い	II	Ａ－４住居跡、ピット内一括	76－10
13	砥石	アルコーズ質砂岩	石英、長石ほぼ等量、白雲母少ない	II	Ａ－４住居跡床面	76－11
14	石鏃	結晶片岩(?)	灰黒色石基中に乳白色針～柱状結晶、石英あり	II	Ａ　地　区	108－4
15	石斧未製品	結晶片岩	暗緑色針～柱状結晶、白色～透明結晶、石英	II	Ｂ－１住居跡	80－16
16	石庖丁未製品	粘板岩	暗緑色部と白色～透明部(石英)の略互層	II	Ｃ　地　区	109－6
17	石錘	角閃石安山岩	柱状有色鉱物含む	II	Ｄ－２住居跡	86－3

18	砥石	アルコーズ質砂岩	石英、長石ほぼ等量、白雲母少ない	II	D－3住居跡	88－3
19	石錘	角閃石安山岩	角閃石の表面は赤褐色に風化	II	D－3住居跡	88－4
20	石庖丁未製品	粘板岩	構成粒配列に弱い方向性あり	II	D地区	111－5
21	石庖丁	粘板岩	千枚岩状	III	北側トレンチ、黒色遺構内	127－9
22	砥石	アルコーズ質砂岩	石英圧倒的に多い、長石、白雲母やや少ない	III	南側トレンチ	133－31
23	砥石	アルコーズ質砂岩	石英、長石ほぼ等量、白雲母、ザクロ石(?)、有色鉱物	III	西側トレンチ	137－9
24	砥石	流紋岩(陶石)	長石、白雲母	III	西側トレンチ1号住居跡内床面	136－2
25	砥石	流紋岩(陶石)	長石、白雲母	III	中央グリッドNo.1住居跡	122－21
26	石庖丁	結晶片岩	白雲母、暗緑色斑状～薄雲状	III	No.4ピット拡張部	166－7
27	石庖丁	粘板岩	暗緑色部と白色～透明部（石英）	III	資材廃棄用土壙内	139－3
28	石鏃	結晶片岩	乳白色、暗緑色～暗紫色柱状～針状結晶(微細)時に長さ1mm	III	近江工業内No.1トレンチ	184－38
29	石庖丁	粘板岩	白色(長石、石英)石英アメーバ状に集合	III	近江工業内No.1トレンチ	182－29
30	砥石	流紋岩(陶石)	長石、白雲母	III	近江工業内No.1トレンチ	
31	石庖丁	粘板岩	千枚岩状	III	近江工業内No.1トレンチ	182－30
32	砥石	火山岩(?)	斜長石、有色鉱物	III	近江工業内No.2トレンチ	186－8
33	砥石	流紋岩(陶石)	長石、白雲母	III	近江工業内No.4トレンチ	191－16
34	砥石	流紋岩(陶石)	長石、白雲母	III	近江工業内No.6トレンチS－1	188－2
35	砥石	アルコーズ質砂岩	石英、長石、白雲母多い岩質物細片含む	III	近江工業内No.5トレンチ	262－57
36	砥石	流紋岩(陶石)	長石、白雲母	III	近江工業内No.5トレンチ	202－56
37	砥石	流紋岩(陶石)	長石、白雲母	III	近江工業内No.5トレンチ	205－77
38	石庖丁	粘板岩	暗緑色部と白色～透明部(石英)略互層	IV	土器溜めB－3区	248－210
39	石庖丁未製品	粘板岩	暗緑色部と白色～透明部(石英)略互層	IV	土器溜めD区一括	248－209
40	砥石	アルコーズ質砂岩	石英圧倒的に多い、長石、黒雲母、白雲母は少ない	III	近江工業内No.5トレンチ	205－78
41	砥石	アルコーズ質砂岩	石英多い長石、赤褐色雲母多し他有色鉱物	表採調査(木村記)	第1トレンチ	250－17
42	石製品	アルコーズ質砂岩	石英、長石ほぼ等量、白雲母、ザクロ石(?)有色鉱物	表採調査(木村記)	第1トレンチ	250－16

表10 各石器に用いられた材質（岩石）

石器名称	出土数	結晶片岩	粘板岩	アルコーズ質砂岩	角閃石安山岩	流紋岩(陶石)	その他(火山岩)
石庖丁(未製品含む)	13	3	10				
石斧(未製品含む)	3	2		1			
砥石	19		1	9	1	7	1
石錘	4				4		
石鏃	2	2					
石製品	1			1			

石器の種類とその材質（岩石）との関係

石器に使われた材質は、一般に石器の種類に応じて限定される。

上の表に示されるように、特に石庖丁、石錘、石鏃において顕著に認められ、砥石においてもその傾向は明らかである。石器は使用目的、形状、加工の程度や加工の仕方などによって決まり、これらの条件によって材質の種類も決まってくるものと思われる。

石庖丁

全体として薄くはげやすく、しかも薄くはげたものは加工、使用に際して細かくはげ落ちないこと、脆くないことが必要である。結晶片岩、粘板岩は薄くはげやすいが、変成の程度により切片自体は充分な強さを有している。

石鏃

結晶片岩中の緻密な部分を使用している。

石錘

薄くはげることのない、塊状に得られる角閃石安山岩を用いている。

砥石

材質として、アルコーズ質砂岩および、流紋岩（陶石）を最も多く使用している。アルコーズ質砂岩と流紋岩（陶石）を比較するとアルコーズ質砂岩が目が粗く、流紋岩（陶石）は目が細かい。

このように二種のものが多産する原因は、粗ずりにはアルコーズ質砂岩を使用し、仕上げ用には流紋岩（陶石）を用いていたからではないかと推察される。粘板岩、角閃石安山岩、およびその他（火山岩？）をわずかではあるが砥石として使用しているのは、どのような理由によるものか不明である。

石斧

出土数が少ないので確かなことを述べにくいが、粗雑な作業をする時には、丈夫なアルコーズ質砂岩によって作られた石斧を、より繊細な作業の場合には、結晶片岩を用いて作った石斧を使用したのであろう。

石製品

作用目的不明である。上表に示した材質から考えて砥石として使用するためのものであったかもしれない。

石器材料の供給地

出土地（山鹿市）周辺には、古生代後期二畳紀に形成されたいわゆる三群変成岩が広く分布する。現地調査を行っていない現時点では、正確にその供給地を認定することができないが、石庖丁、石斧および、石鏃の材料と同様の結晶片岩、粘板岩もこの地域に分布しているはずである。

一方、八方が岳、国見山を中心とする山地の上部は、新第三紀に活動した火山岩類によって構成され、輝石安山岩、角閃石安山岩等からなっている。石錘は、これら火山岩にその起源を求めることができるかもしれない。

砥石の材料であるアルコーズ質砂岩は、おそらく古第三紀の地層に由来するものであろう。古第

三紀の地層は、玉名・荒尾・大牟田市にかけて分布し、これらの地域のいずれかよりもたらされた可能性がある。また、砥石の材料となっている流紋岩は、変質作用を蒙って陶石化したものであり、このような岩石の産出が著しいのは天草上島、下島である。ただし、玉名・荒尾・大牟田地域の古第三紀地層中にも流紋岩の貫入体の存在する可能性があり、この地の砥石の材料の供給地を言下に天草上島、あるいは下島と断定できない。

石器材料の供給地の推定は、当時の交通、商取引、流通機構を考察する上で極めて重要な情報を提供するであろうが、岩質的に見た場合、類似の岩石は地質現象の所産として各地に分布することが多い。石器材料を薄片作成、粉末処理後、種々の分析を行うことなしに、肉眼鑑定のみによって供給地を推定することは、ほとんど不可能である。特に、この石器の材料としての岩石は、一般的なものであり、九州地域にも各地に分布している。

なお、石器材料の採取は、岩石の露出地から直接行われたものか、あるいは河床、河岸の転石を利用したものか等の検討も必要であろう。例えば、山鹿市を流れる菊池川の礫の種類を検討し、石器材料と同質の岩石の存在の有無を知った上で、供給の問題を考える必要があるのではないか。

例えば、角閃石安山岩を利用している石錘の表面を見ると斜長石は風化して、その部分が凹み、一方角閃石は風化に抗して突出している。露頭から採集した新鮮な岩石では考えにくい現象である。露頭から崩落し、河川によって運ばれるうちに風化しやすい斜長石は粘土化して表面部は流れ去り、角閃石はなお残っているため、細かな凹凸をもつ表面になったのではないか。

第11章　結　　語

第１節　遺跡の規模

１．遺跡の密度について

方保田東原遺跡は、過去Ⅰ～Ⅳ次にわたる調査と、その他４回の発掘調査が実施されたわけであるが、調査区域はほぼ全域に広がる状態で設定されているといえよう。（第３図、付図１参照）さらに、これらの調査区域から検出された遺構、遺物については表11に示したとおりで、調査面積はわずか2500㎡弱に80軒の住居跡と、その他多くの遺構が検出されたのである。このことから、未調査区域においても同様に遺構の存在が考えられ、遺跡全体における遺構の総数は膨大な数にのぼるものであろうと判断される。

２．遺跡の範囲について

これまでこの遺跡の範囲については、大まかなところでの線引きが行なわれていたといえよう。今回の調査においては、範囲確認は主要なる目的であったため、先に述べたように広範囲にわたる調査区域の設定を行なったのである。その結果、遺跡の北限については、Ⅰ－１トレンチで遺構が検出され、その下段に設けたⅡ・Ⅲ－１、２トレンチにおいては遺構の存在が認められず、Ⅰ－１、２、３トレンチを設定した段まで（台地上面より一段降下した畑地）遺構が存在することが確認された。さらに方保田川沿いに発達した湿地帯に続く台地北側斜面（現在段々畑となっている）には、遺構の存在は考えられず、これを北限と見なすべきである。

南限については、近江工業内に５本のトレンチを設定した結果、Ｖ字溝、住居跡といった遺構が存在していることが判明した。さらにここから南側約 120mには端山塚古墳が存在し、その盛土には多くの土器を含んでいる。また、この古墳は菊池川の流れによって、年々浸蝕されており、台地南端に位置している。このことから、遺跡南限は台地南端と同じであろうと判断された。

東限については、№１～７ピット、および東側トレンチを設定し調査したが、№１～７ピットではいずれも遺構の検出を見た。東側トレンチにおいては、柱穴が数個検出されたのみであった。これからも、東側トレンチはともかく、№１～７ピットより東側に延びる可能性は十分考えられる。この地から東へ約 300m離れた馬見塚の集落までは現在でも土器を採集することが容易で、遺跡としてはここまで広がるものと考えるべきである。さらに馬見塚の集落東側には、旧大道中学校校庭遺跡が広がっており、この遺跡も含めて考える必要があろう。

西限は、農協東側トレンチを１本設定し、西側への広がりを調べたが、ここには溝状遺構が東西に走ることが確認された。このことから、このトレンチ周辺にまで遺跡が広がり、さらに西側へ延びるものと判断された。また、このトレンチの西約 350mには、大道小学校校庭遺跡が存在しており、その間の方保田の集落の下にも遺跡が広がっているものと推察される。

以上のことからも、方保田東原遺跡の輪郭を考える場合、今日では大道小学校校庭遺跡、塚の本遺跡、旧大道中学校校庭遺跡、さらに方保田東原遺跡の遺跡が同一台地上の、東西1200m、南北35

0mの広がりの中に密集していると考えられているが、これらの遺跡の境界を見出すことより、同一遺跡として全体の広がりを考えるべきではなかろうか。無論、遺跡の中心部に関しては、青銅器が最も集中して検出された区域（今回調査を実施した範囲）と考えられよう。

3．集落の形態について

これまでの調査では表11に見られるように、住居跡80軒、埋葬施設21基、溝状遺構5本が確認されている。住居跡と埋葬施設とは多少時間的に差異が見られ、住居形成後埋葬を営んでいる。また、溝状遺構も住居跡の間を走っている。特に近江工業内第2号溝は上部幅2.2m、下部幅1.7m、深さ0.7mを測り、底からはII－b期の土器が出土している。ところがこの溝の埋没後に住居が営まれ、III－b期の土器が出土している。これらのことからも、当初遺跡が営まれた時は、所謂、環溝集落として形成され、その後遺跡の規模拡大に伴なって、溝の上、さらには溝の外側へと集落が広がっていったことを裏付けている。これまで全国で環溝と集落の全貌が明らかにされた例は少なく、県内においてはわずかに西弥護免遺跡のみである。[註1] しかし、この遺跡も宅地開発によって破壊され今日では残っていない。そのため、方保田東原遺跡が現状のまま保存されることは、今後の研究の上においても非常に重要な意味をもつものである。

表11　方保田東原遺跡調査年次別遺構一覧

	調査面積	住居跡	石　棺	石　蓋 土壙墓	木棺墓	土壙墓	溝　状 遺　構	土　器 溜　め	遺　　物
昭和30年 山鹿高校調査	20㎡	1	1						
昭和47年11月 予　備　調　査	20㎡	1	1						
昭和48年2月 I　次　調　査	1080㎡	25		1					
昭和49年5月 II　次　調　査	528㎡	10	2		9	6		2	巴形銅器1 銅鏃　1
昭和51年5月 石　棺　調　査	6㎡		1						
昭和55年10月 鹿本高校調査	82.5㎡	1							銅鏃　1 ガラス小玉1
昭和56年4月 III　次　調　査	558㎡	33					5	1	
昭和57年1月 IV　次　調　査	154㎡	9						1	小形仿製鏡1
計	2448.5㎡	80	5	1	9	6	5	4	

第2節　遺跡のもつ意義

1．遺跡について

方保田東原遺跡とその周辺の遺跡群については、第Ⅰ章第2節「歴史的環境」の中で紹介している。その中で、限られた区域内においてほぼ同時期もしくは相前後した時期の遺跡が集中している（第2図参照）ことを述べた。

菊池川流域において、この時期の遺跡が調査された例は、諏訪原遺跡[註2]、山下遺跡[註3]、津袋大塚遺跡[註4]桜町環溝遺跡[註5]、方保田遺跡[註6]、大道小学校校庭遺跡[註7]等が在る。これらの遺跡から出土した遺物を方保田東原遺跡出土土器編年と対比したら、次のような結果を得ることができた。

表12　方保田東原遺跡および周辺遺跡の存続期間

		方保田東原	大道小学校	方保田	津袋大塚	桜町環溝	諏訪原	山下
Ⅰ		↓	↓					
Ⅱ	a	↓	↓		↓	↓	↓	
	b	↓	↓	↓	↓	↓		
Ⅲ	a	↓	↓	↓			↓	
	b	↓	↓					
Ⅳ	a	↓	↓					
	b	↓		↓				
Ⅴ	a	↓		↓				
	b	↓						↓
	c	↓						
	d	↓						

これから方保田東原遺跡を中心とした地域と、他の地域の遺跡との間には遺跡存続の時間に大きな差異を認めることができる。

他の地域の遺跡は、単一時期もしくはわずかに幅をもって存続したのに対し、方保田地区における遺跡は長く存続している。さらに、この地区は、青銅製品が県下で最も多く密集して出土しており、このことについては第9章第2節「熊本県下における弥生時代青銅製品出土分布について」で述べている。

以上のことから、方保田東原遺跡を含めた方保田地区が、当時の社会情勢（倭国大乱）の中において、一大集落を形成し、なおかつ、中九州地域において最も社会的に優位な地域であったことを物語っているものと考える。

この優位性が古墳時代になって装飾古墳のメッカとして独特の文化を築いていく基礎となっていることは言うまでもない。

2．遺物について

方保田東原遺跡から出土した遺物の量は膨大な数にのぼる。それらの中には、他の地域から持ち込まれた資料が数多く含まれていた。北九州、東九州、中国、瀬戸内、さらに畿内方面からの資料が見られた。また国外からは、朝鮮半島の遺物の影響を受けた遺物も見られた。このことはとりもなおさず、これらの地域との交流が行なわれたことを裏付けており、原始国家成立の過程を考える上で興味深い点である。

また、遺物の中には祭祀関係、製鉄関係、石器製作関係、さらに土器づくりに関する資料が含まれていた。このことから、遺跡内における分業もしくは専業による製作段階を考えることが出来た。

農業、漁業（菊池川における）さらに狩猟といった生活基盤をもち、なおかつ生活必需品としての土器、石器、鉄器については分業し生産していたことを考えることができる。むろん他地域からもたらされた品物が存在することも忘れてはならない。（中村）

註

註1	「西弥護免遺跡発掘調査概報」西弥護免遺跡調査団	1980
註2	『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査概報－福岡熊本線（南関～植木）－』	1971
註3	松本健郎「中九州における古式土師器の新資料」『考古学雑誌』第60巻第3号	1974
註4	髙木正文「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集	1979
註5	隈昭志・杉村彰一「熊本県山鹿市桜町環溝遺跡調査報告」『熊本史学』34号	1968
註6	隈昭志・杉村彰一「方保田調査概報」『チブサン』13号	1968
註7	小原由昭「大道小甕棺調査」『チブサン』16号	1969

あ と が き

山鹿市立博物館館長　原　口　長　之

大正年代に作成されたと思われる「大道村郷土誌」という筆録がある。その「第４編　古墳」の項に次の記録がある。

大道村における古墳の数…A完全なるもの10、B半壊せるもの４、C全壊して現在認むべきものなきも往時ありしこと明らかなるもの４、D横穴０　計18

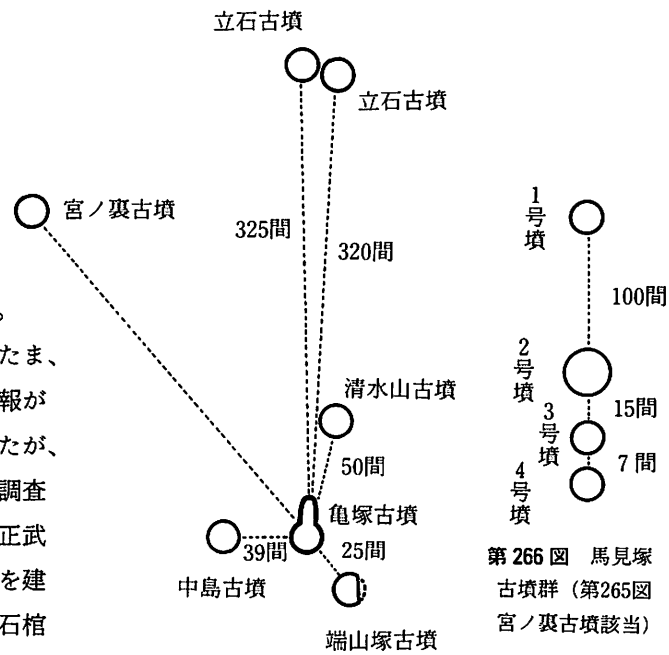
古墳の種類…円形古墳10、瓢形４

備考…他に多くの古墳を有せしが明治35､6年頃に至り、水揚工事の時、多くの塚を破壊して石棺を掘り出したるため現今その存在を認めず。

とあり、今回調査した方保田東原遺跡を含む方保田地区における古墳の分布図として第265図を、第265図記載の「宮ノ裏」の説明として第 266図を示してある。

当時のことであるから、地表に現われた高塚古墳だけが記録されているだけで、弥生の遺跡については注意されていないが、このように密集した古墳地帯であれば、それに先行する弥生、縄文の時代があってもいいわけであった。

たえず心にかかっていたところ、たまたま、「石棺が出た。見に来てくれ」という通報があった。当時、私は山鹿高校に勤めていたが、すぐとんで行った。場所は東原の、今度調査された地点のすぐ近くで、方保田、吉川正武氏の所有地で、その弟の高木義光氏が家を建てるため、約１mほど掘り下げたところ石棺が発見されたものであった。昭和30年12月11日のことであった。13日から調査にかかった。

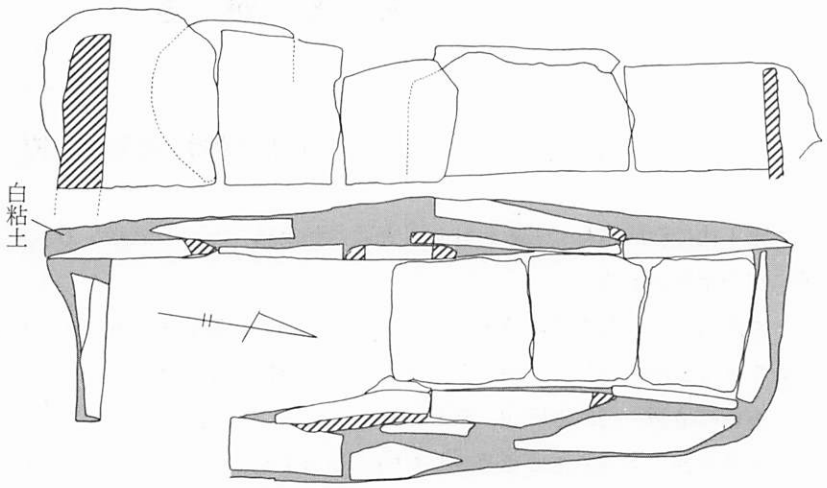


第 265 図　方保田地区における古墳群

第 266 図　馬見塚古墳群（第265図宮ノ裏古墳該当）

石棺は第267図に示す箱式石棺で、棺の底部には敷石があったが半ばを失なっていた。敷石の上に約１cmの厚さに川砂を敷きつめてその上に遺骸をおいてあったと思われ人骨の腐蝕による骨灰ようのものがあったが頭部の位置は確認できなかった。副葬品はない。棺の内壁に丹塗りのあとがあった。このような箱式石棺は当地方通有のもので、別に異とするに足りないが、棺身の四周を白粘土で巻き、上縁部の周囲に幅約３cm、厚さ約５mmの川砂をおいてあったのは特殊であった。

この調査をしているうちに、石棺から西北10mのところに住居址のあとと思われる柱穴が発見された。柱穴は6個あった。柱穴からすれば方形の床をもつ建物が想定された。その柱穴群の東南に最南端の柱穴から 210cmの地点に径1mの円形の穴があったが排土して調査する余裕がなかった。床面から多数の土器片が出たが、みな弥生終末期のものであった。当時、県文化財専門委員であられた故坂本経堯氏も参加された。



第267図　昭和30年調査石棺実測図

それから、30年近くの年月が流れた。第4次におよぶ調査がつみ重ねられて、報告書ができたことは嬉しい。旧濶の想いさえある。

報告書を読んでいただければわかるように、この一帯の古墳はほとんど消滅したが、弥生の遺跡はまだ生きている。生きているだけでなく、実に豊富にあることは疑いない。できればこの一帯を買い上げて保存したい。調査区域だけの買い上げでは価値は半減する。東側台地は、さいわいにして、まだ十分な自然景観をのこしている。許される限り広く買い上げたい。市だけでは無理であろうが国や県にとっては、たいしたことではないと思う。最末端ながら博物館にあって文化財行政を担当しておれば、なかなか言い辛いことであり、また、言うべきでないと思うがあえて申し添えたい。

買い上げは、なかなか難しいだろうが、せめてこの報告書ができたことは一応の心のなぐさみである。報告書作成に直接あたられた中村幸史郎、倉原謙治の両君、それを終始助けられた坂本重義、城よう子、田嶋美和子、原久美子の各位に深甚の謝意を表する。

また、この3か年に及ぶ調査期間中、中村、倉原の両君は調査に専念せざるを得ず、館務の一切は轟木正斗、次木真理子両君の負担になったことも忘れてはならない。

改めて申すまでもないが、市当局、県文化課のご協力、山鹿文化財を守る会その他文化関係の方々のご支援に対しあつく御礼を申し上げる次第である。

編　集　後　記

今回の調査を開始してから、報告書が出来上るまでに何日費やしただろうか。その期間中、博物館における業務には殆んど携わることができず、館長をはじめとし、職員の方々には迷惑のかけどうしであった。ここに記して感謝の意を表したい。さらに、本報告書を刊行するに当り次の各機関や、各氏に一方ならぬ御助言、御指導をいただき篤く御礼申し上げます。

機関（順不同）

熊本県教育委員会　日田市教育委員会　飯山市教育委員会　菊水町教育委員会　城南町教育委員会　熊本大学　長崎県立対馬資料館

個人（50音順　敬称略）

池田道也　石橋新次　緒方　勉　賀川光夫　川上勇蔵　城戸　誠　清田純一　黒田裕司
甲元真之　坂田邦洋　島津義昭　杉原荘介　瀬丸敬二　橘　昌信　高木恭二　高木正文
田中義和　武末純一　鶴嶋俊彦　富田紘一　豊崎晃一　西健一郎　野田拓治　野間重孝
平岡勝昭　広瀬正照　前田軍治　牧尾義則　松本健郎　松村隆文　山野洋一　幸　平和

山鹿市立博物館調査報告書第２集

方保田東原遺跡

昭和57年３月31日

編集　山鹿市立博物館
〒861-05熊本県山鹿市大字鍋田2085

発行　山鹿市教育委員会
〒861-05熊本県山鹿市堀明町1026-2

印刷　下田印刷
熊本支店　熊本市迎町１丁目４の16

図　　版



上空から見た方保田東原遺跡

図版2



1



2

1　北より望む方保田東原遺跡(昭48年撮影)　　2　第Ⅰ次調査遺構全景



1



2

1　2号住居跡　　2　3号住居跡

図版 4



1



2

1　4 号住居跡　　2　5 号住居跡



1



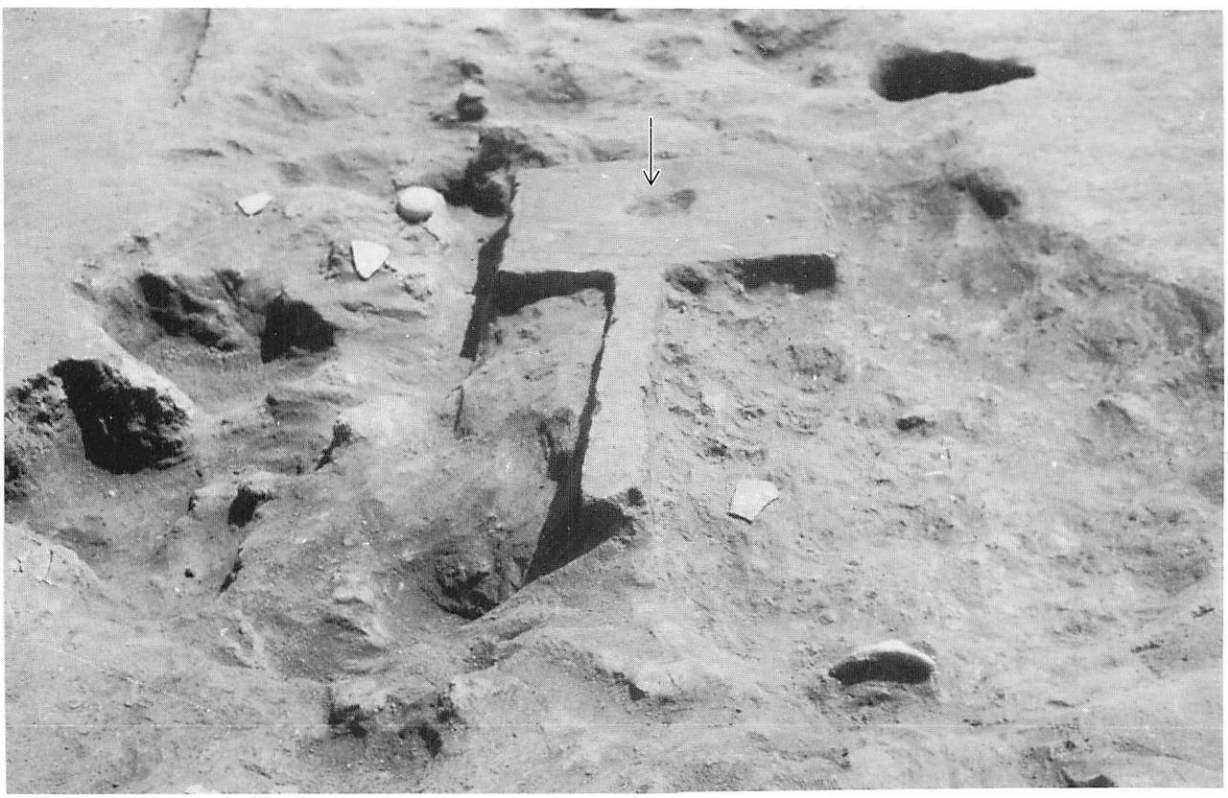
2

1　10号住居跡　　2　石蓋土壙墓

図版6



1



2

1　巴形銅器出土状況　　2　巴形銅器出土地点(矢印)



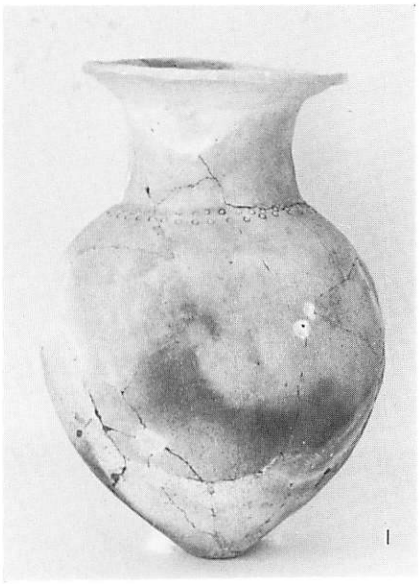
1



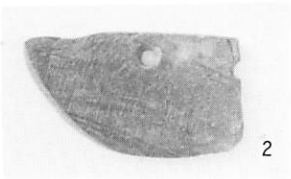
2

1　銅鏃出土状況　　2　異形土器出土状況

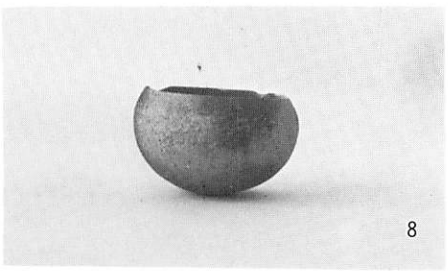
図版 8

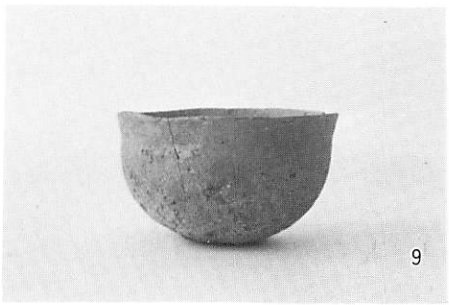




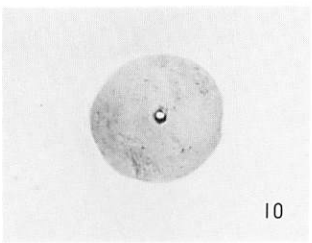


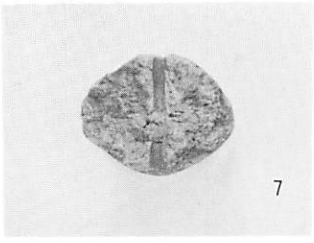


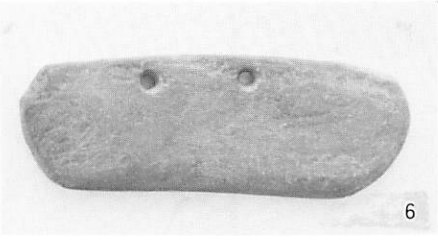




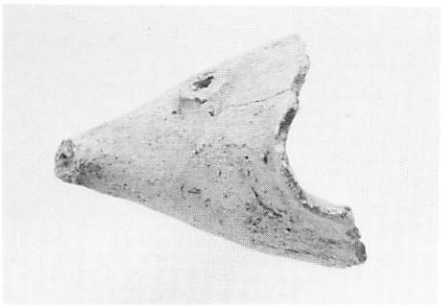




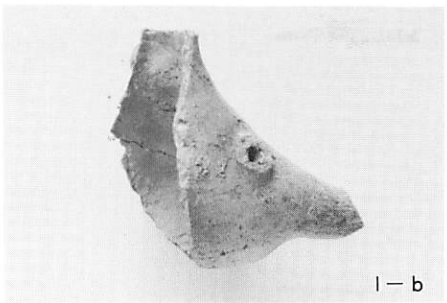




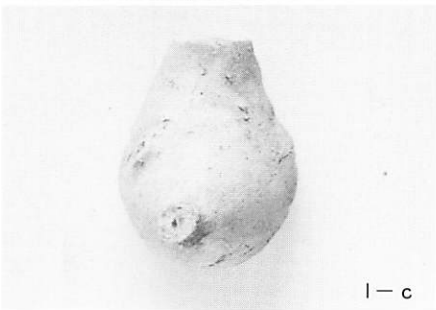
1 号住居跡（1，2）　2 号住居跡（3 ～ 6）　3 号住居跡（7 ～ 9）　4 号住居跡(10)
1 ～ 4 号住居跡出土遺物



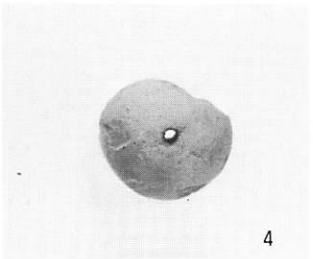
1－a



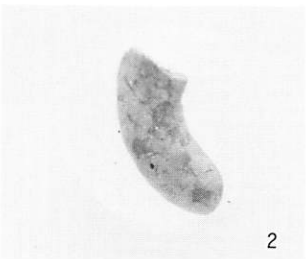
1－b



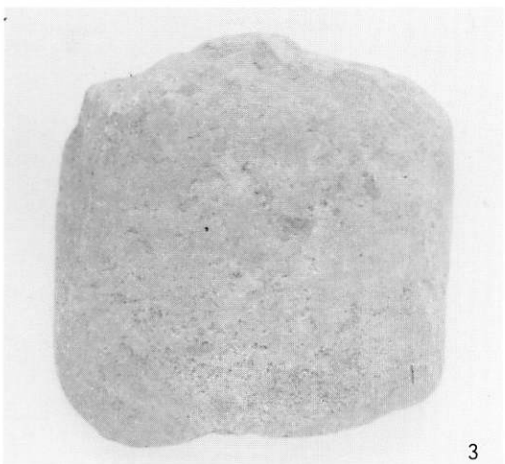
1－c



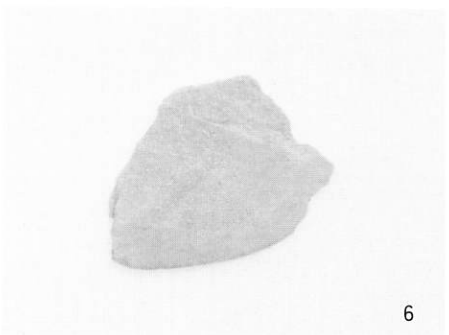
4



2



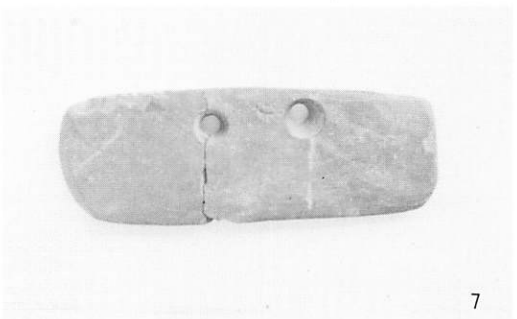
3



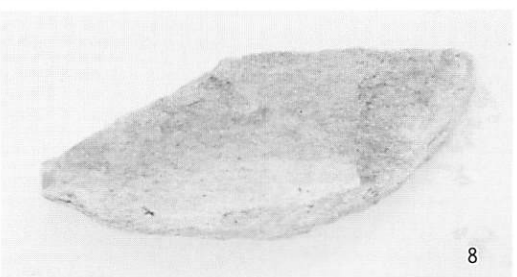
6



5

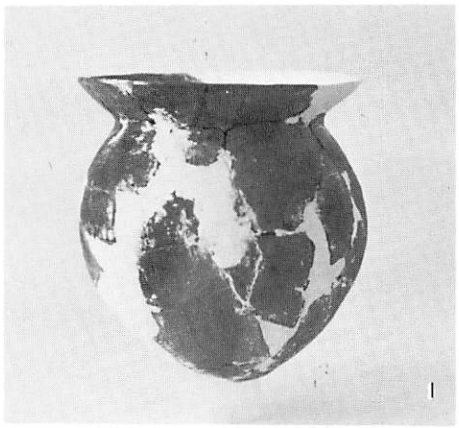


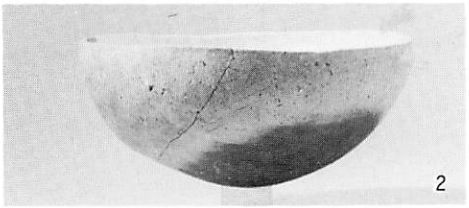
7

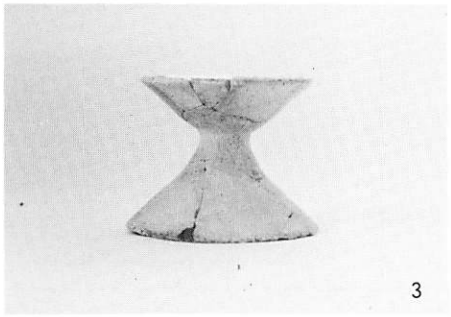


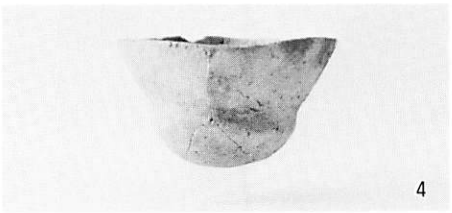
8

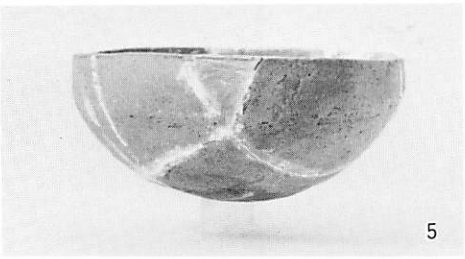
22号住居跡・6号住居跡・7号住居跡・8号住居跡
（1，2）　（3）　（4，8）　（5，7）
6～8、22号住居跡出土遺物

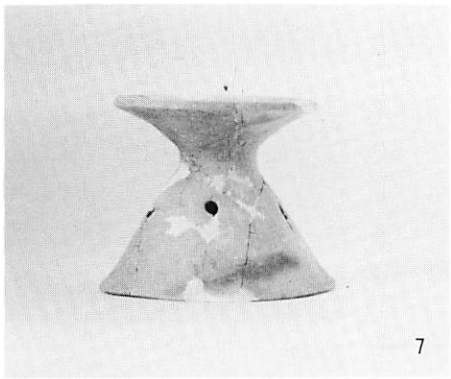


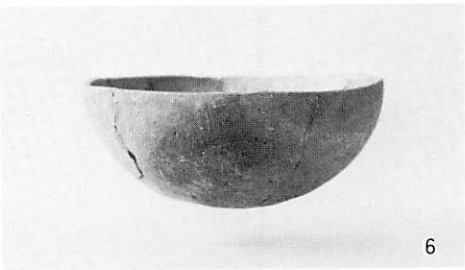


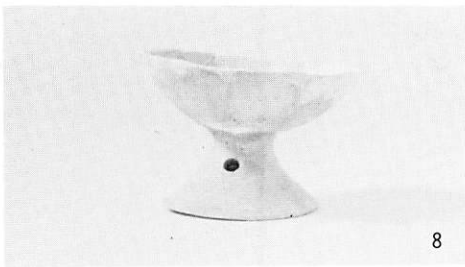








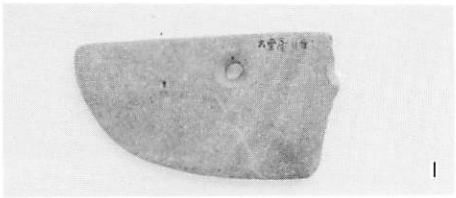


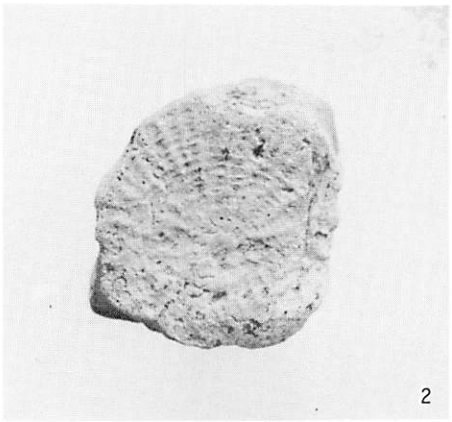




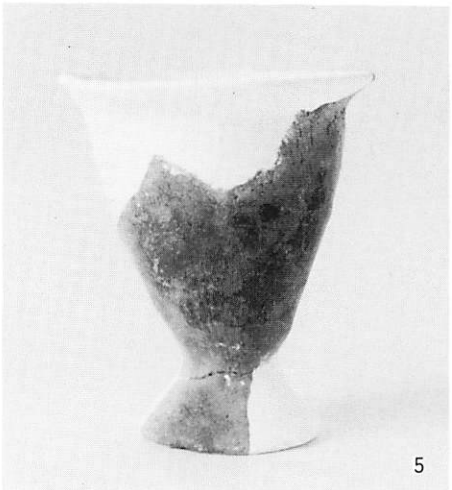


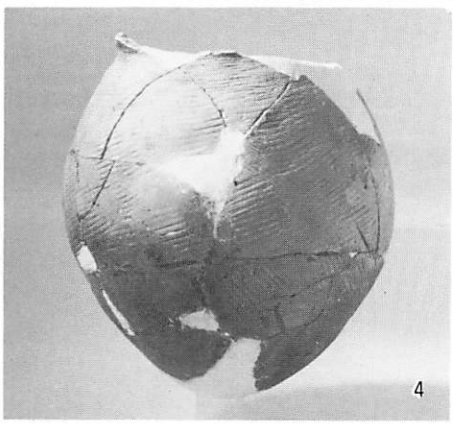
3号住居跡(1)　9号住居跡(2)　10号住居跡(3～10)
3、9、10号住居跡出土遺物

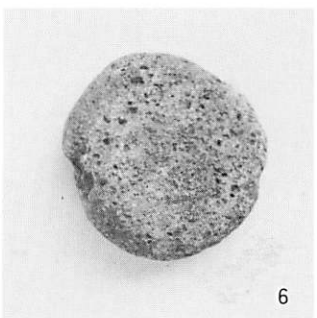

1


2


3


5

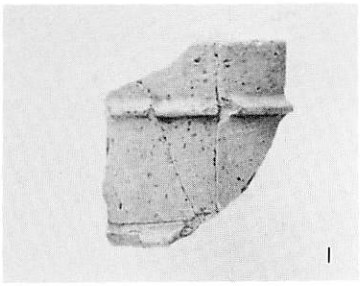

4

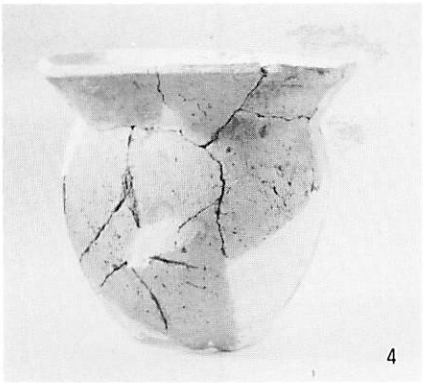

6

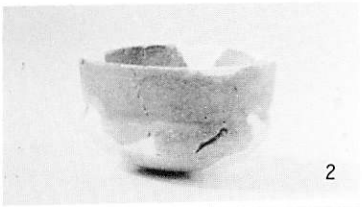

7

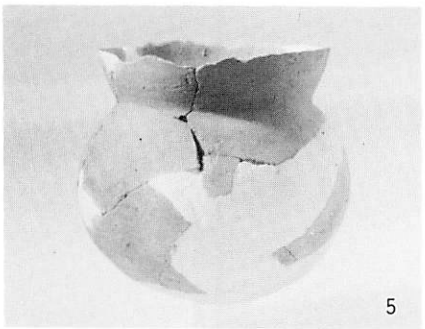
11号住居跡(1) 12号住居跡(2) 17号住居跡(3,4) 23号住居跡(5) 18号住居跡(6)
11、12、17、18、23号住居跡出土遺物、鉄器

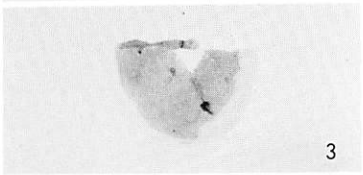
図版12

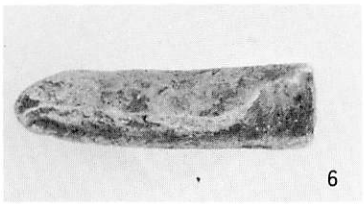

1

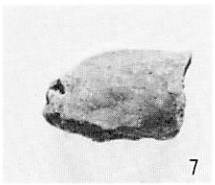

4

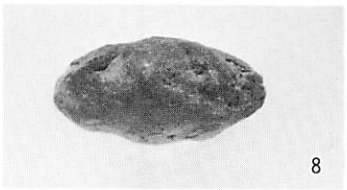

2

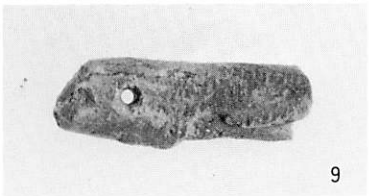

5

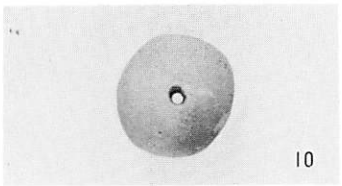

3

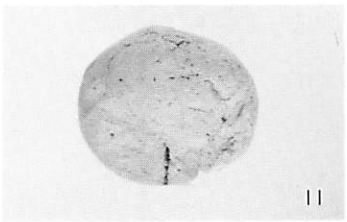

6

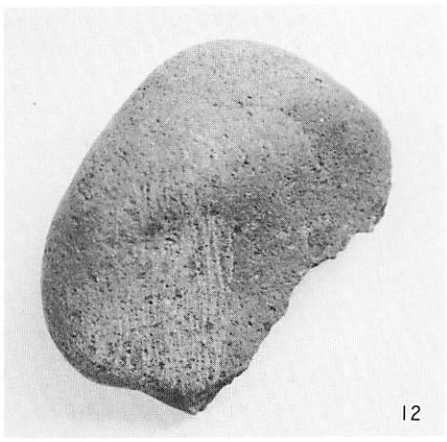

7

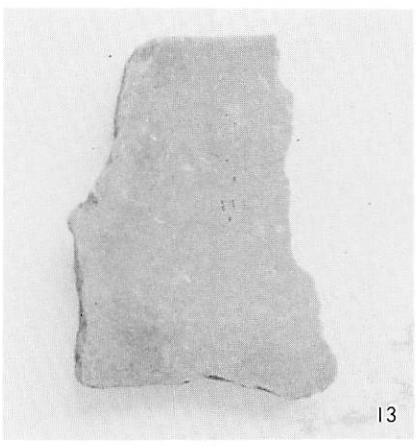

8


9


10

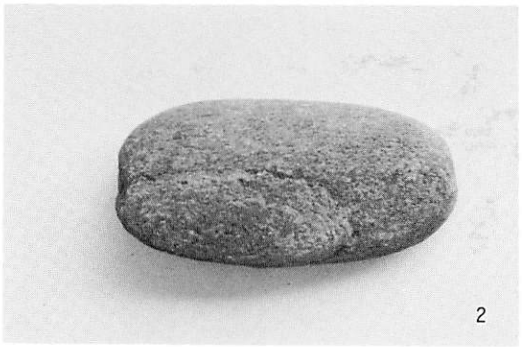

11

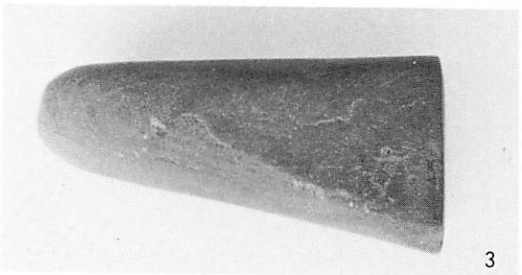

12

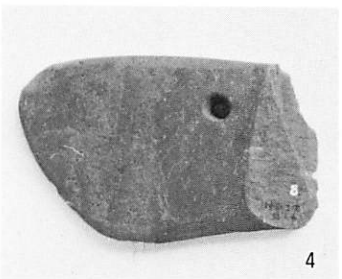

13

遺構に伴わない遺物


1


2


3


4


5


6

遺構に伴わない遺物、自然遺物（10号住居跡出土）

図版14



1



2

1　方保田東原遺跡遠景（昭49年撮影）　　2　A、B区遺構全景



1



2

A－1号住居跡遺物出土状況　　2 A－1号住居跡

図版16

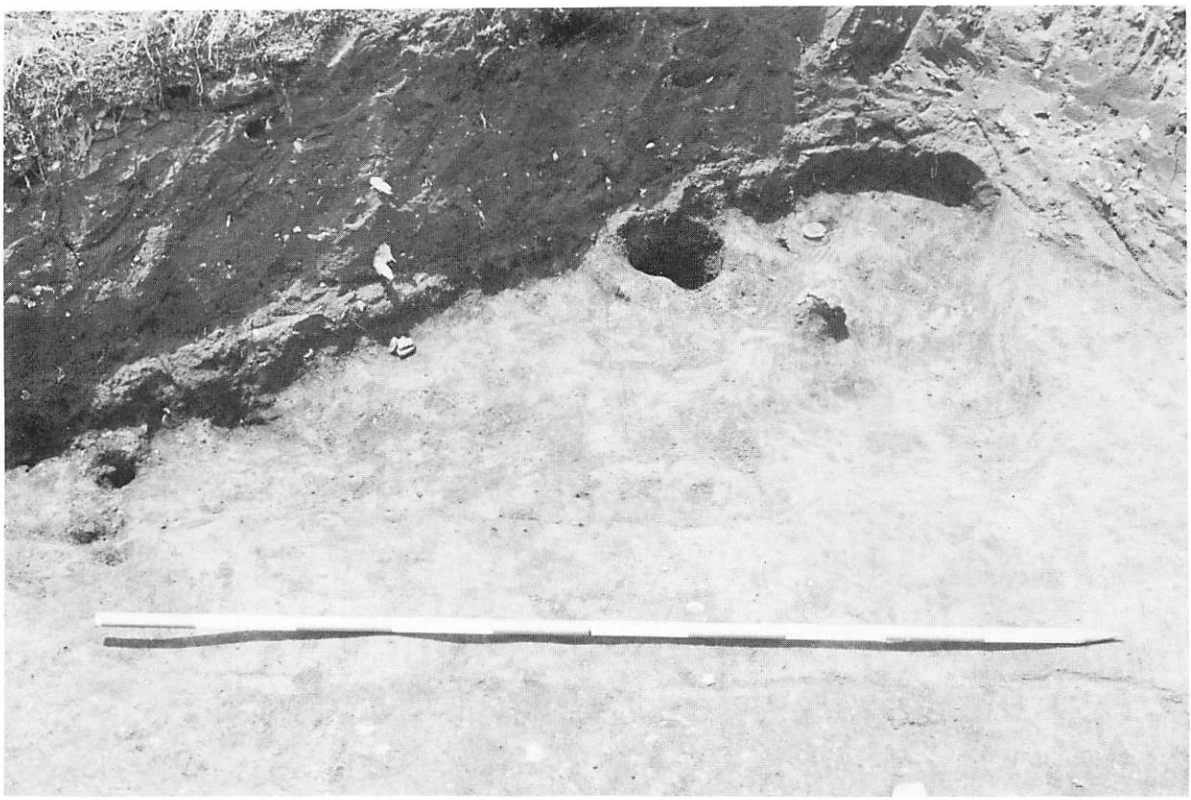


1



2

1　B—1号住居跡　　2　B—2号住居跡



1



2

1　D－1号住居跡　　2　D－2号住居跡

図版18



1

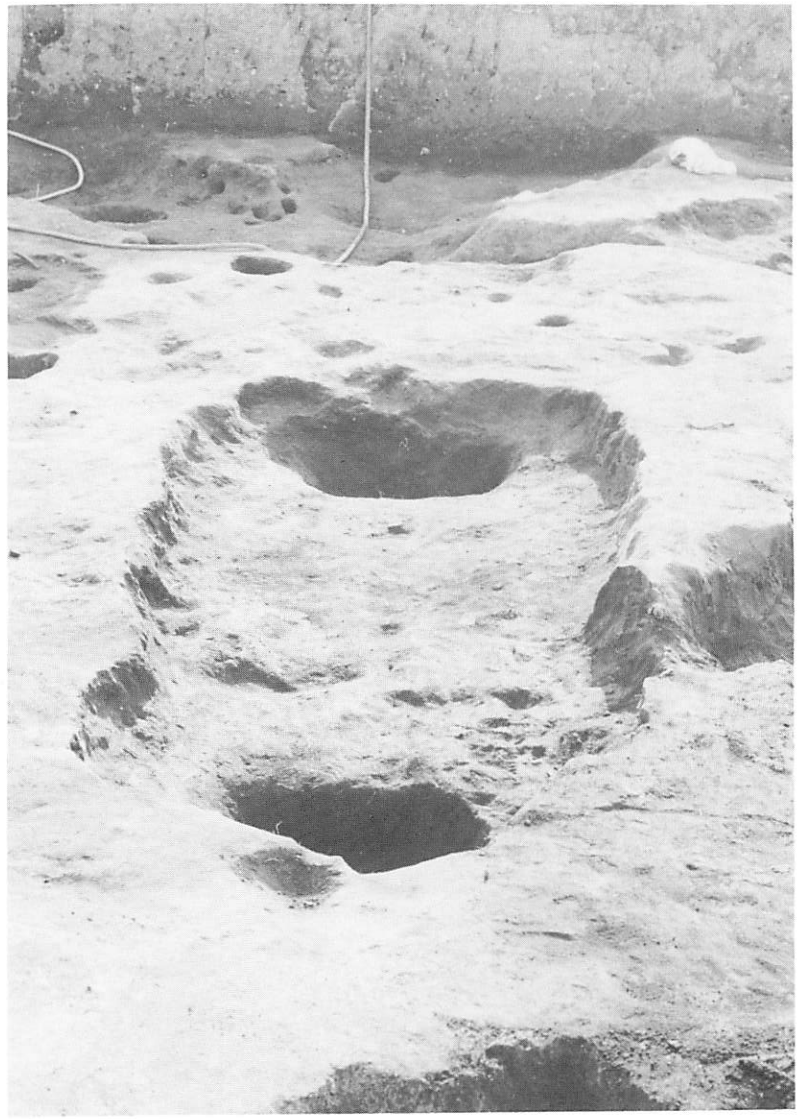


1　D—1号石棺　　2　D—2号石棺

2



2　C－3号木棺墓

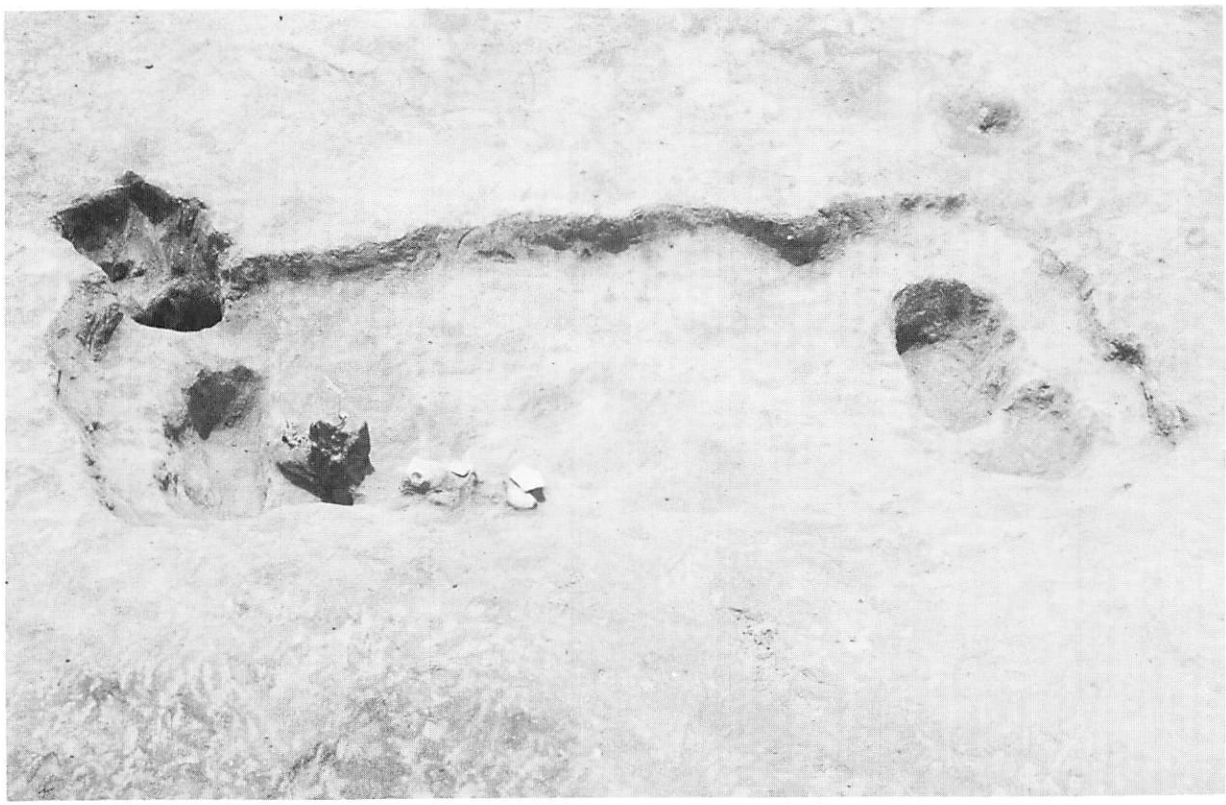


1　C－1号木棺墓

図版20



1



2

1　C－1、2号木棺墓　　2　D－1号木棺墓



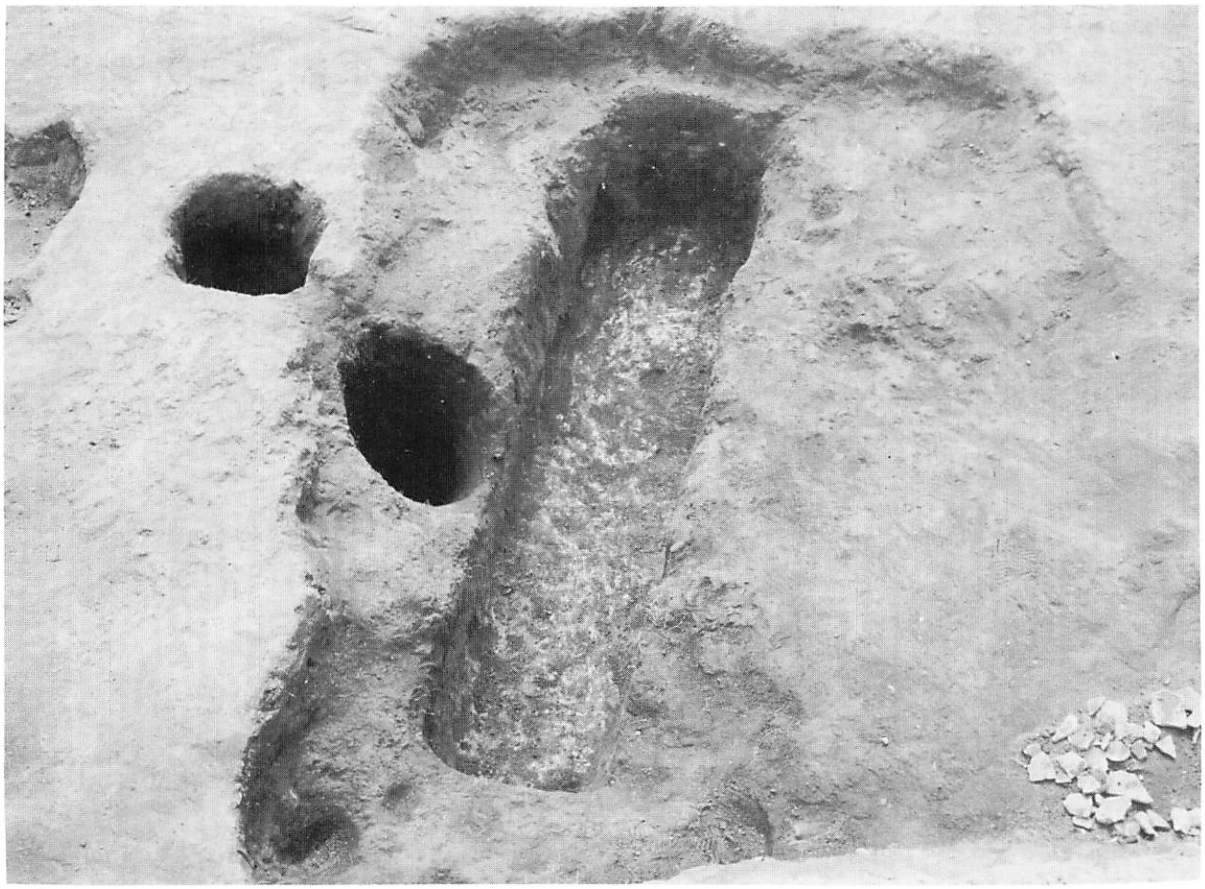
1



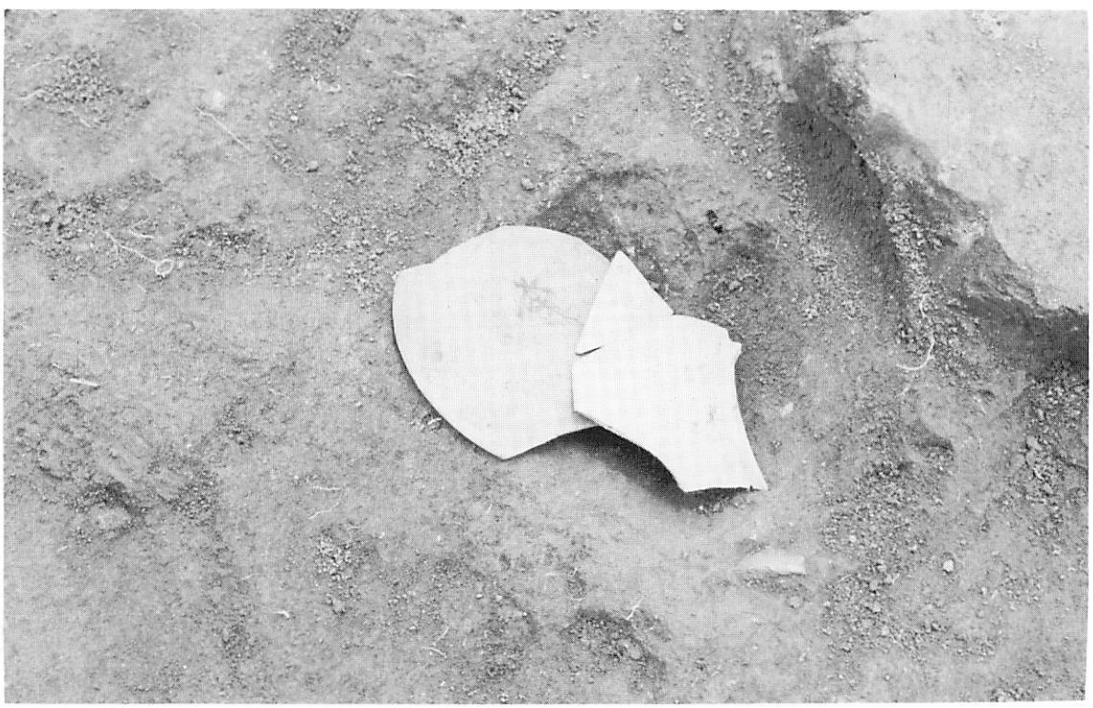
2

1　B－2号土壙墓　　2　B－1～4号土壙墓

図版22

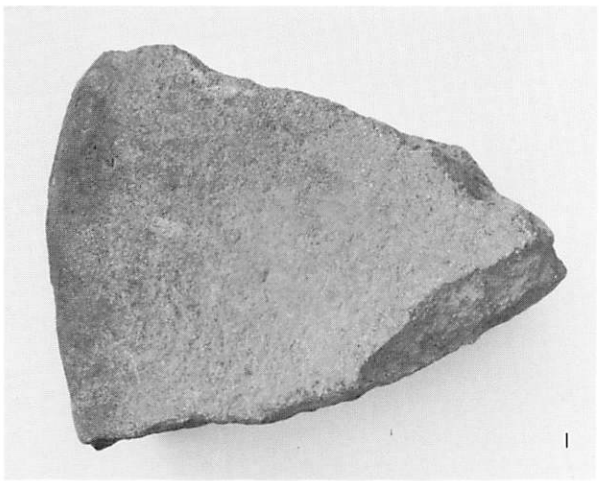


1



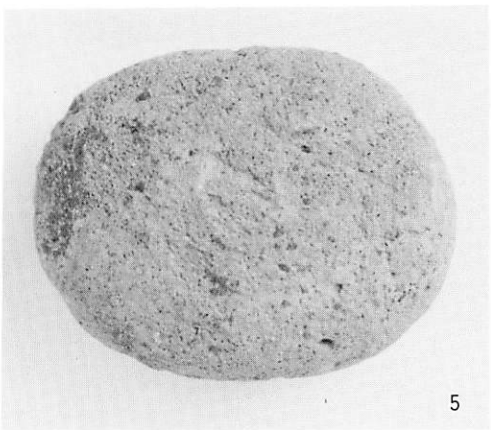
2

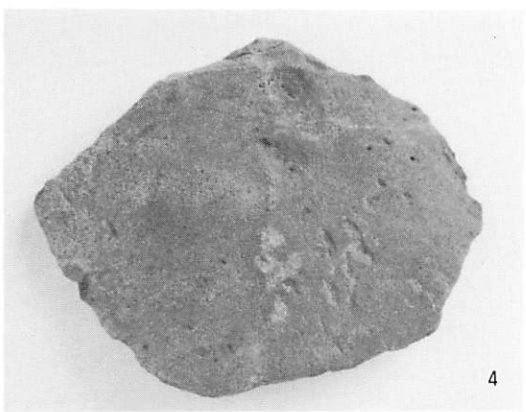
1　C—1号土壙墓　　2　墨書埦出土状況







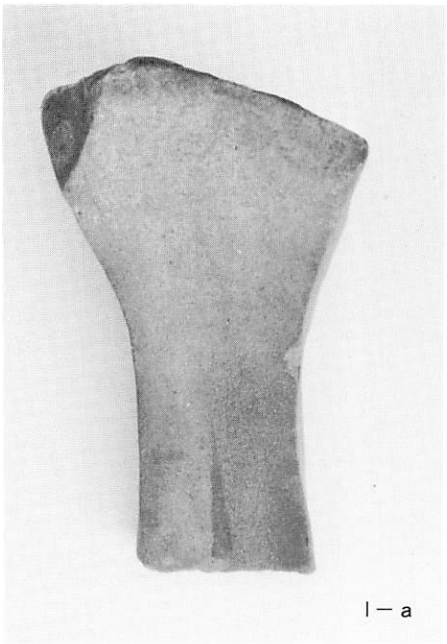




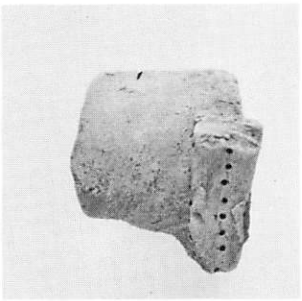


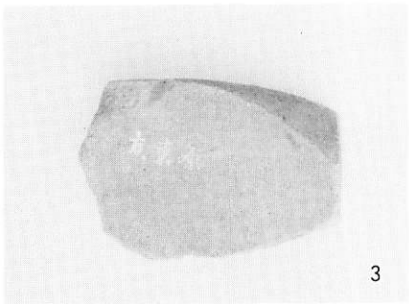
A－1号住居跡(1)、　A－2号住居跡(2～6)
A－1、2号住居跡出土遺物

図版24

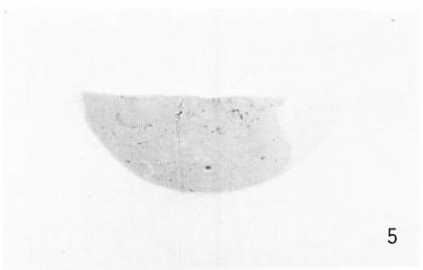

1－a

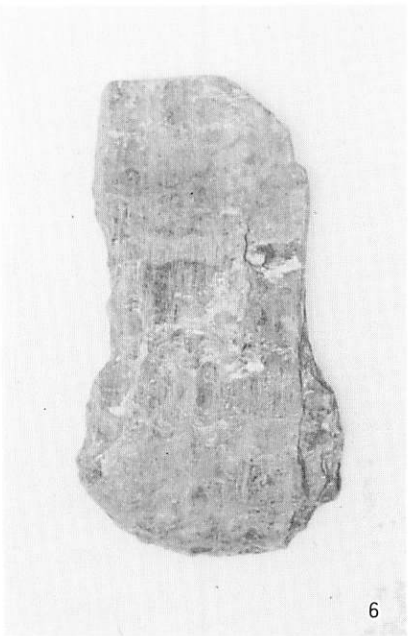

1－b


2

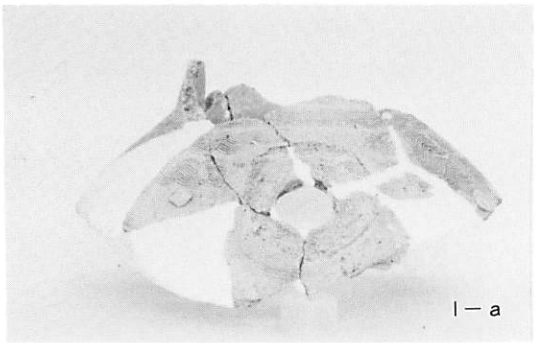

3

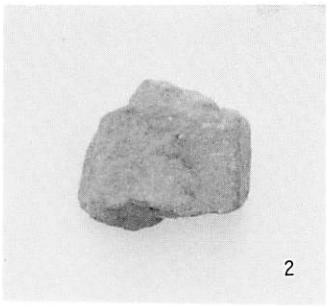

4

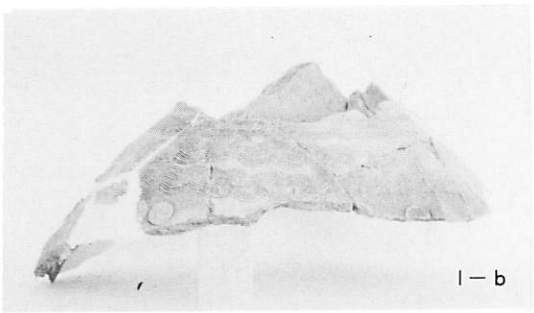

5

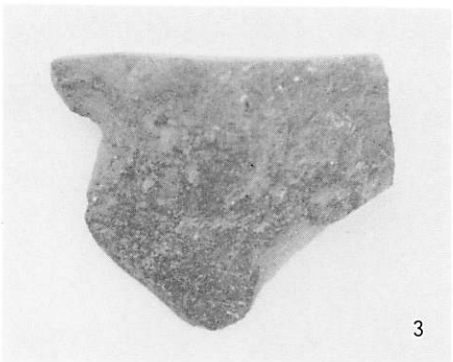

6

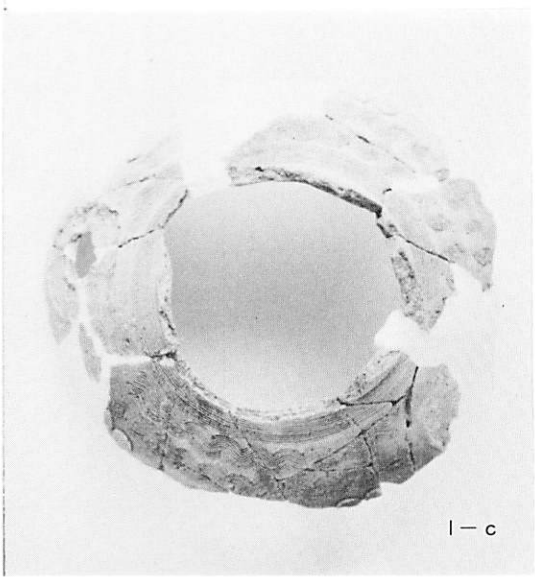
A－2号住居跡(1)、A－4号住居跡（2～4)、B－1号住居跡(5～6)
A－2、4号、B－1号住居跡出土遺物

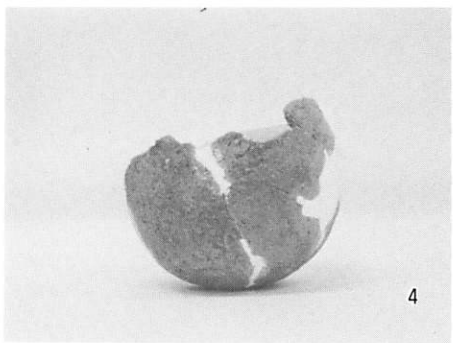


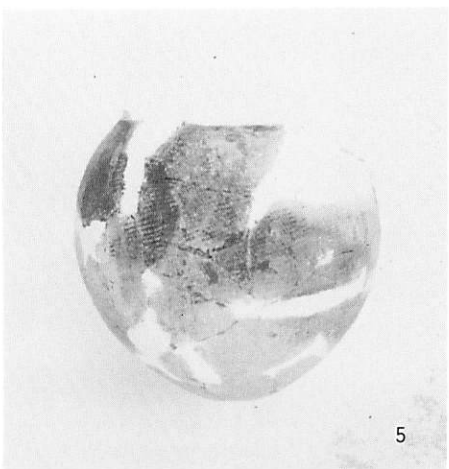








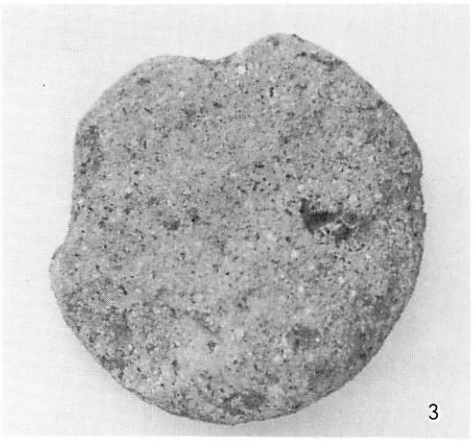


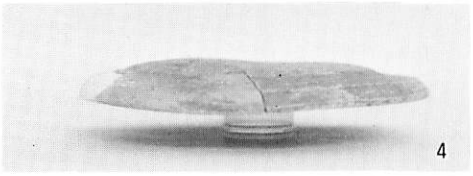


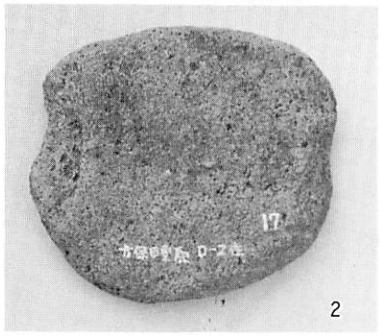
B－1、2号、D－1号住居跡出土遺物

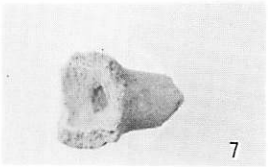
図版26

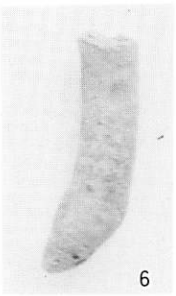

1

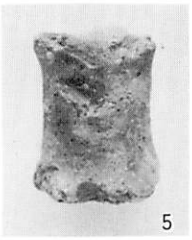

3

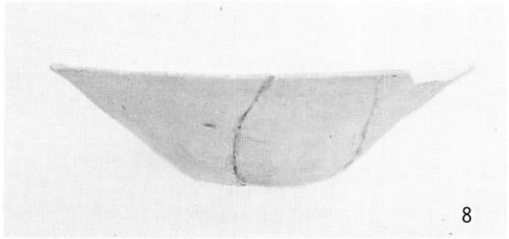

4

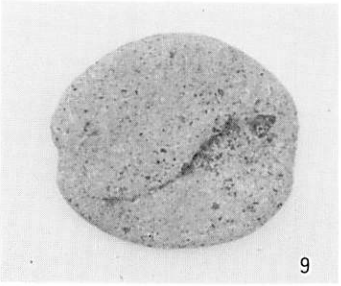

2

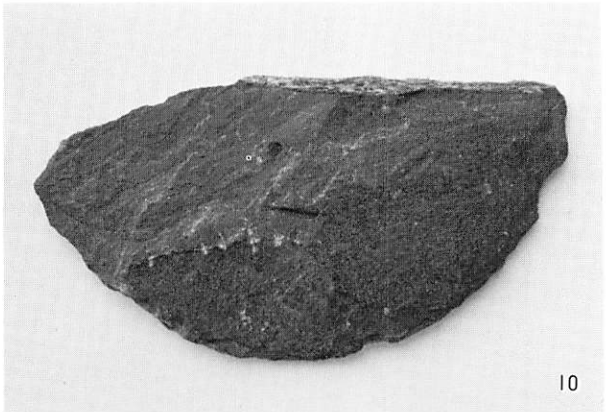

7

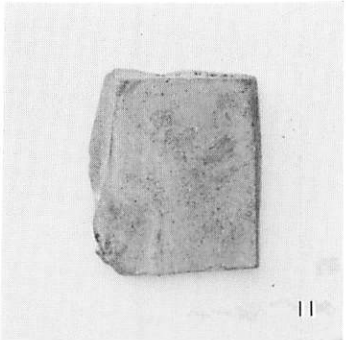

6


5


8

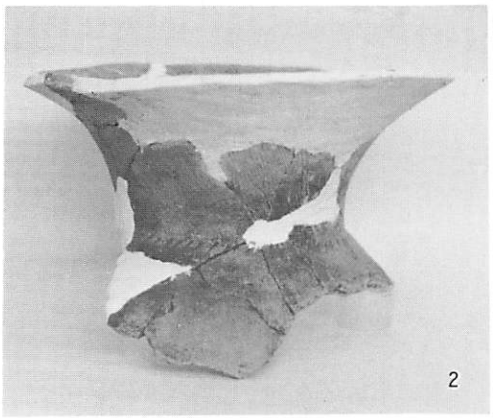

9

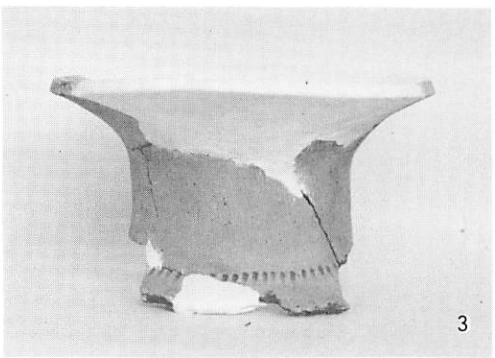

10

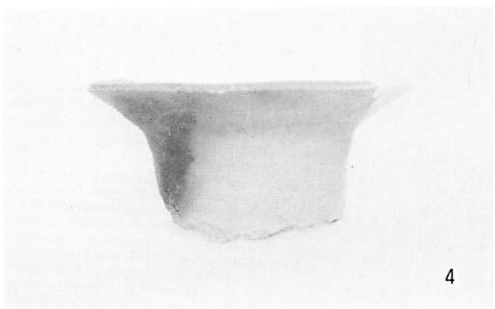

11

D－2号住居跡(1,2)　D－3号住居跡(3～5)　A地区内土壙墓(6)　B地区内土壙墓(7,8)
C地区内土壙墓(9)　D地区内土壙墓(10,11)
D－2、3号住居跡、II次調査区内土壙墓出土遺物

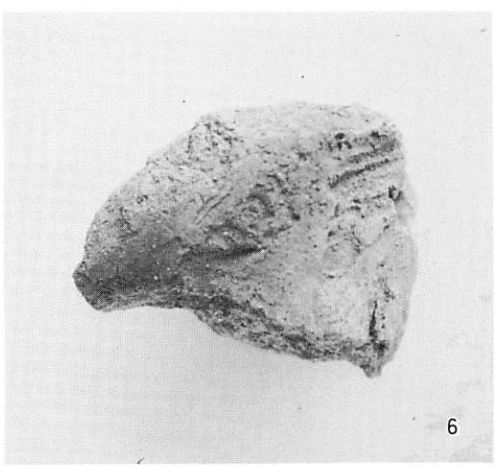

1

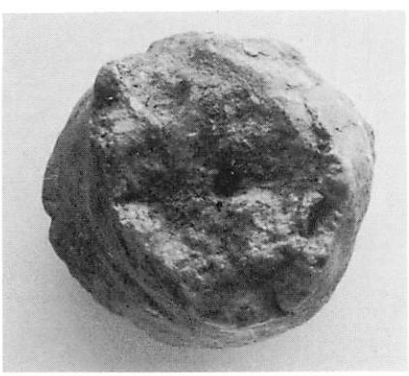

2

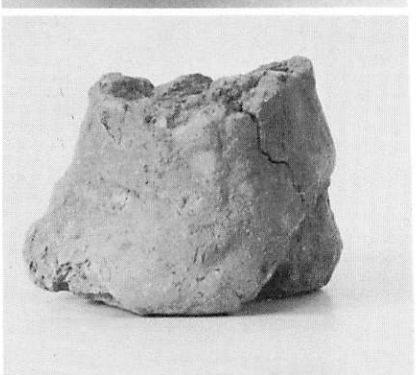

3


4

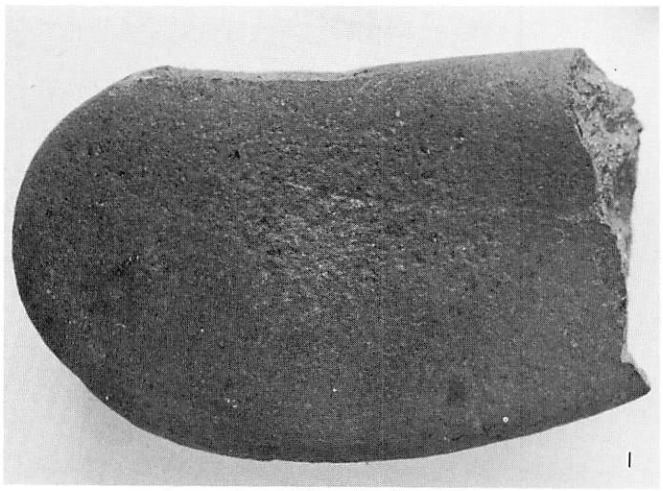

5

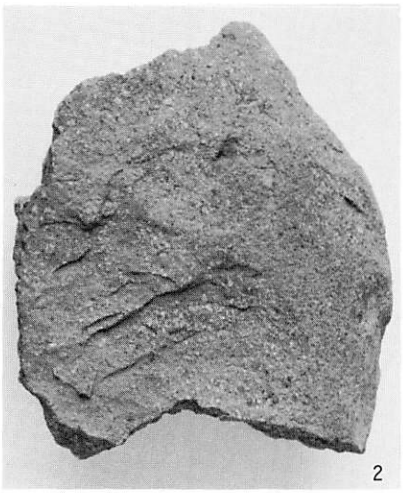

6

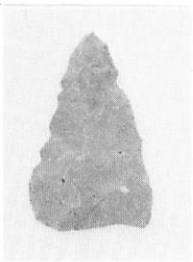

7－a

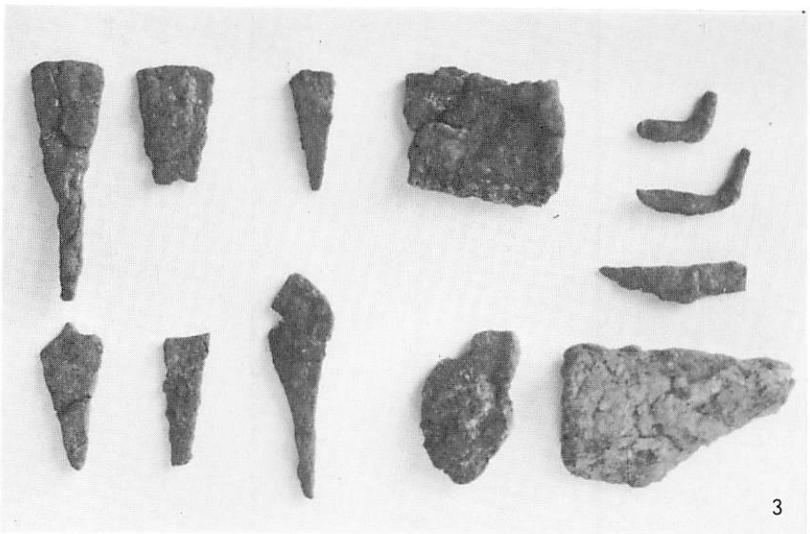

7－b

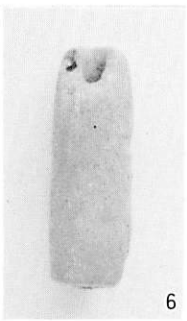
D地区内東側土器溜め出土遺物

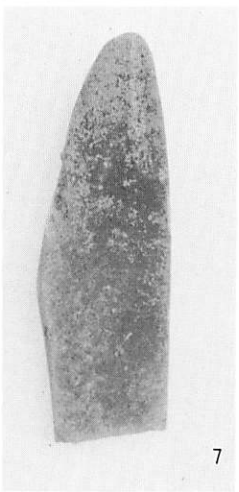


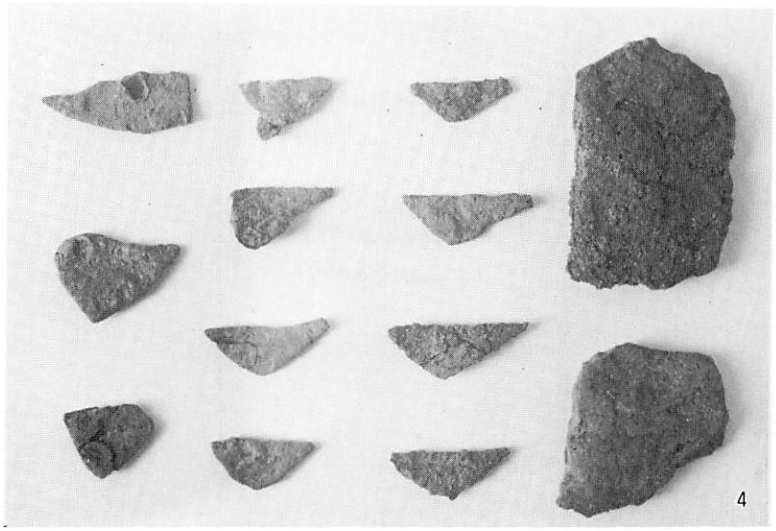








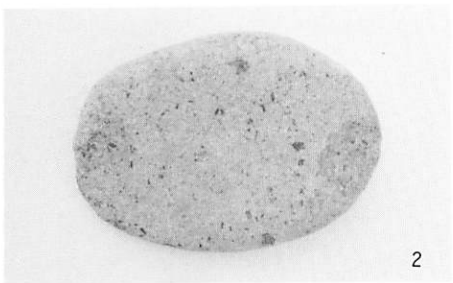


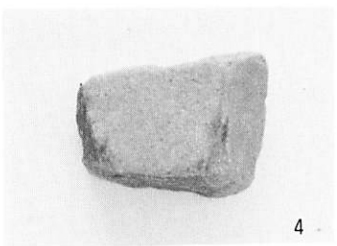


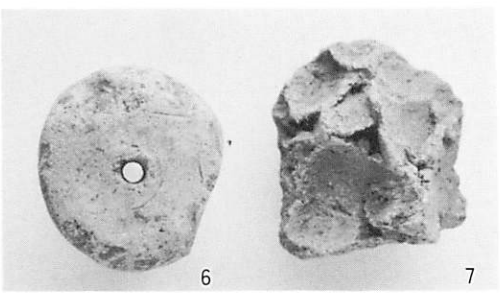
D地区内東側土器溜め出土遺物、鉄器、遺構に伴わない遺物

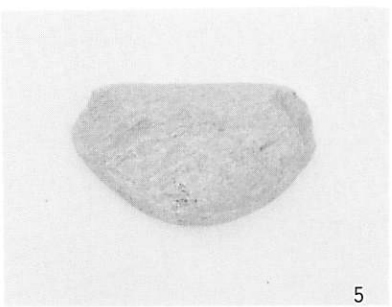

1


3

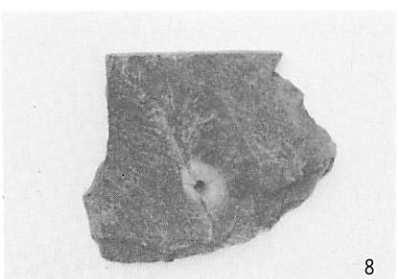

2

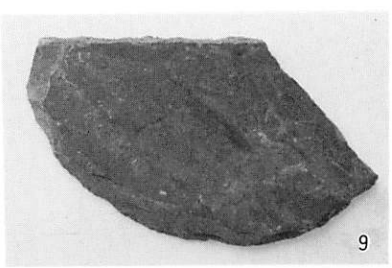

4


6 7

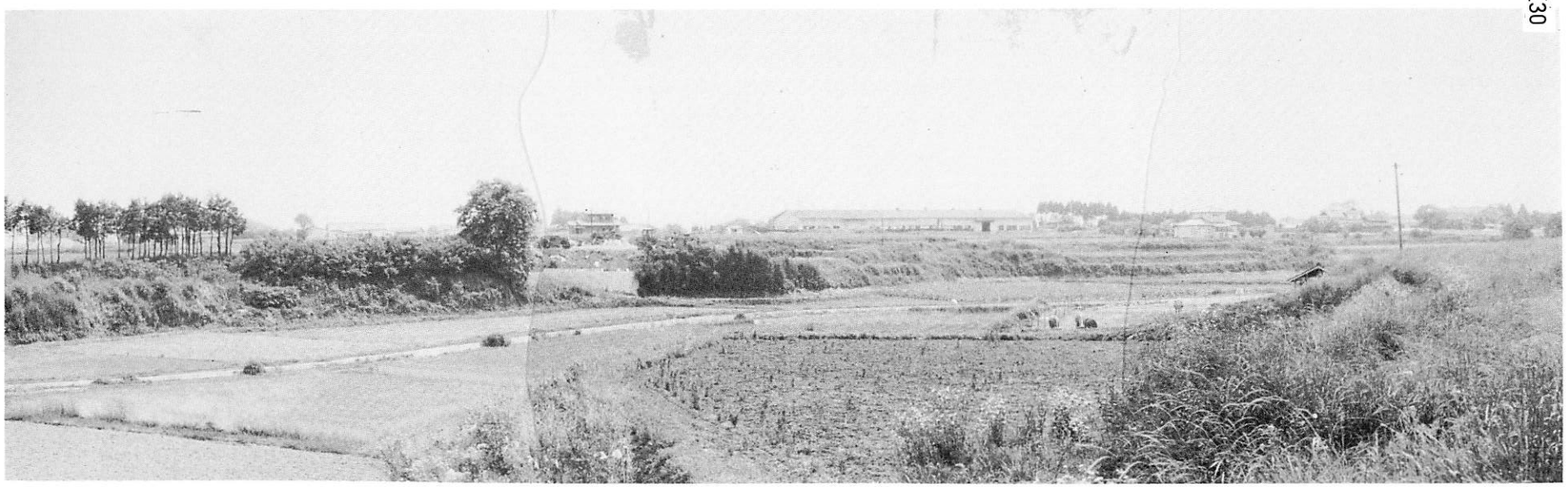

5


10

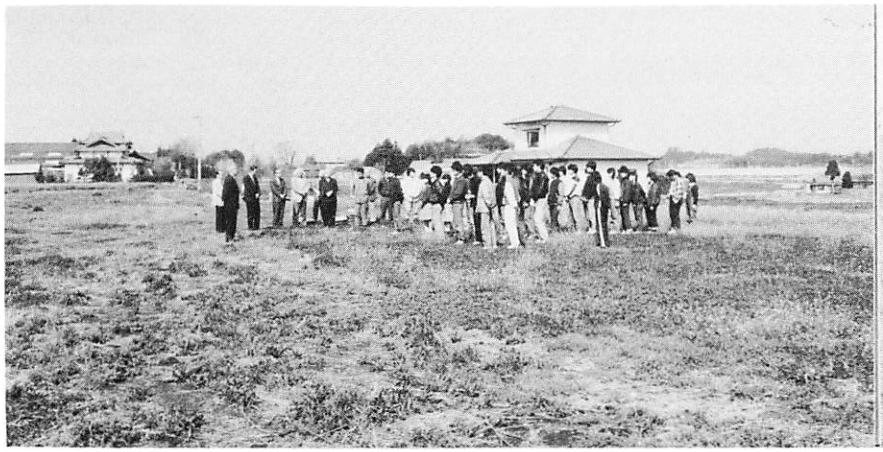

8


9

遺構に伴わない遺物



1　方保田川を挟んで対峙する方保田東原遺跡（昭和50年４月撮影）



2　結団式風景



3　発掘風景



1



2

1　北側より遺跡を望む　　2　遺跡より馬見塚古墳群を望む

図版32

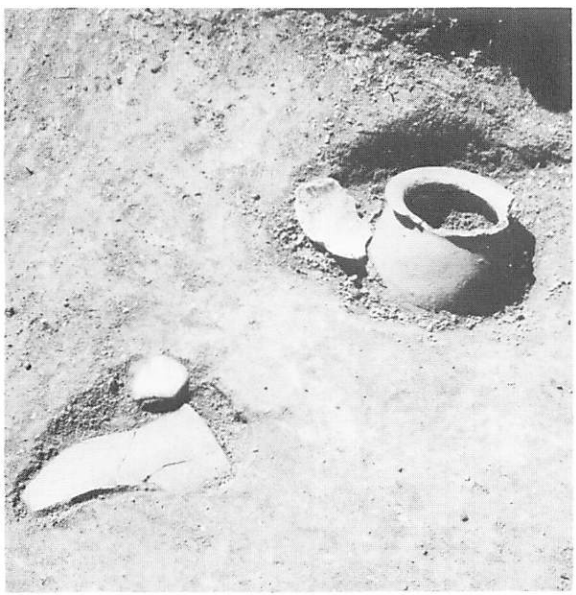


1

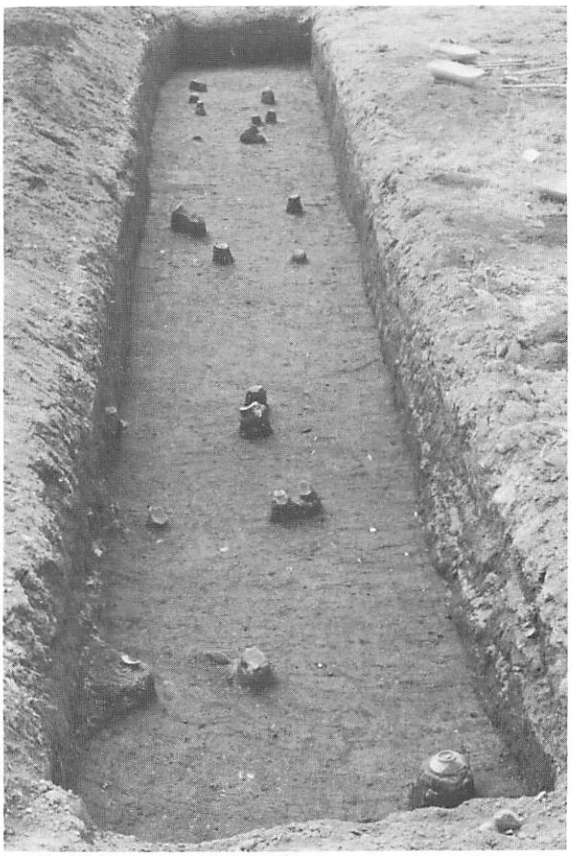


2

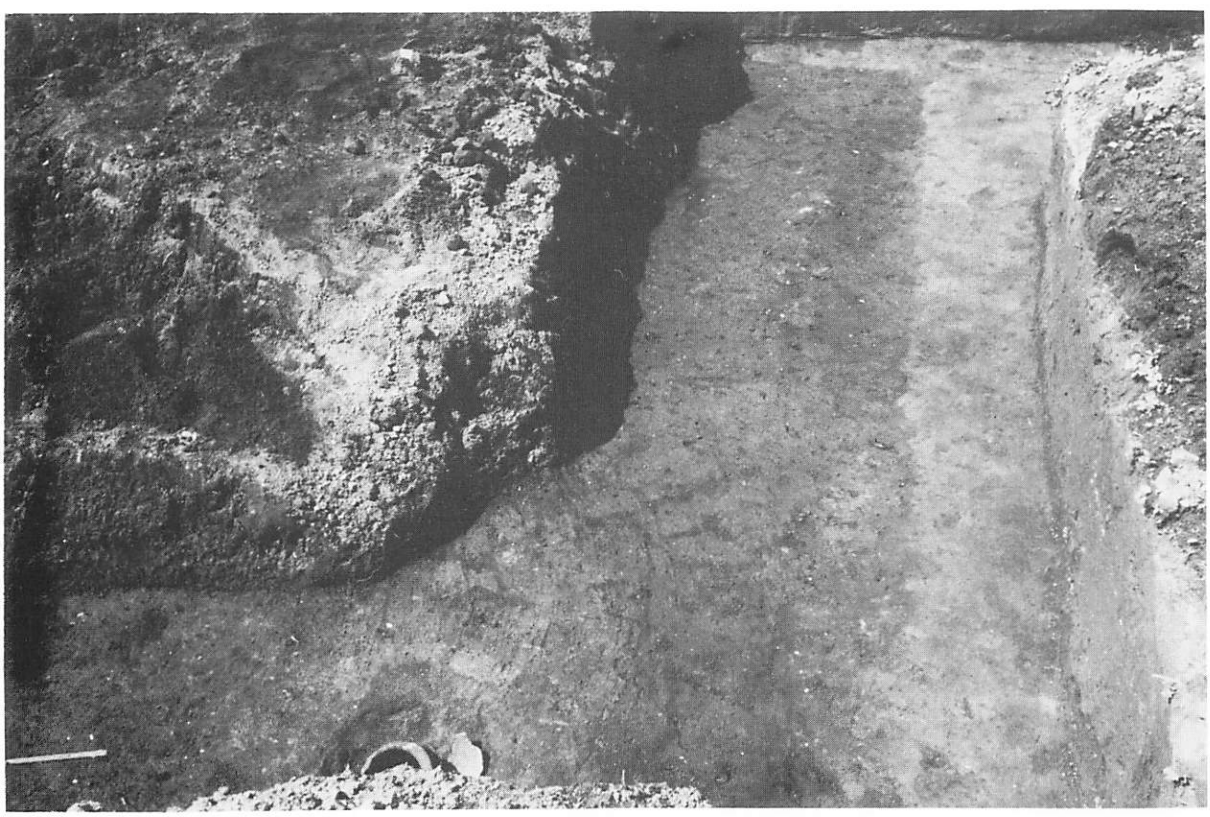
1　中央グリッド全景　　2　中央グリッド１号住居跡



2



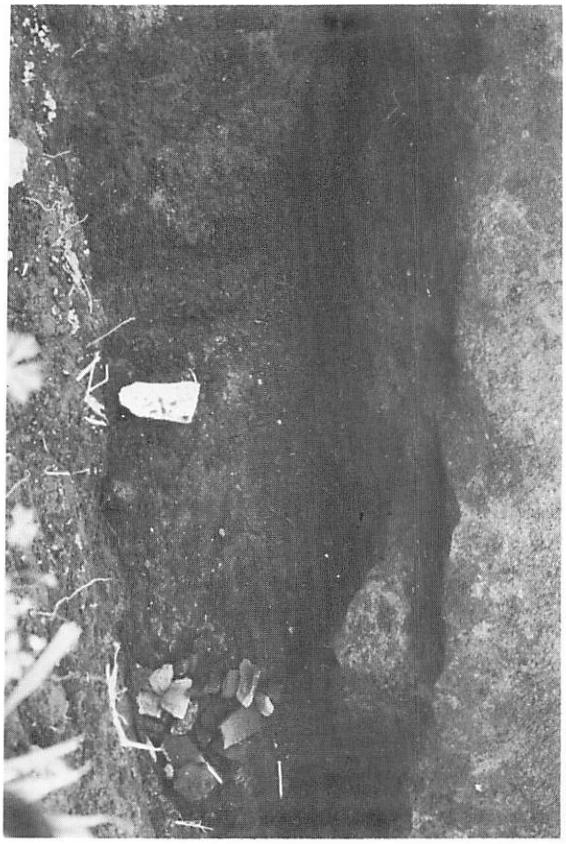
1



3

1　南側トレンチ全景　　2　南側トレンチ１号住居跡遺物出土状況　　3　南側トレンチ１号住居跡

図版34



2



1

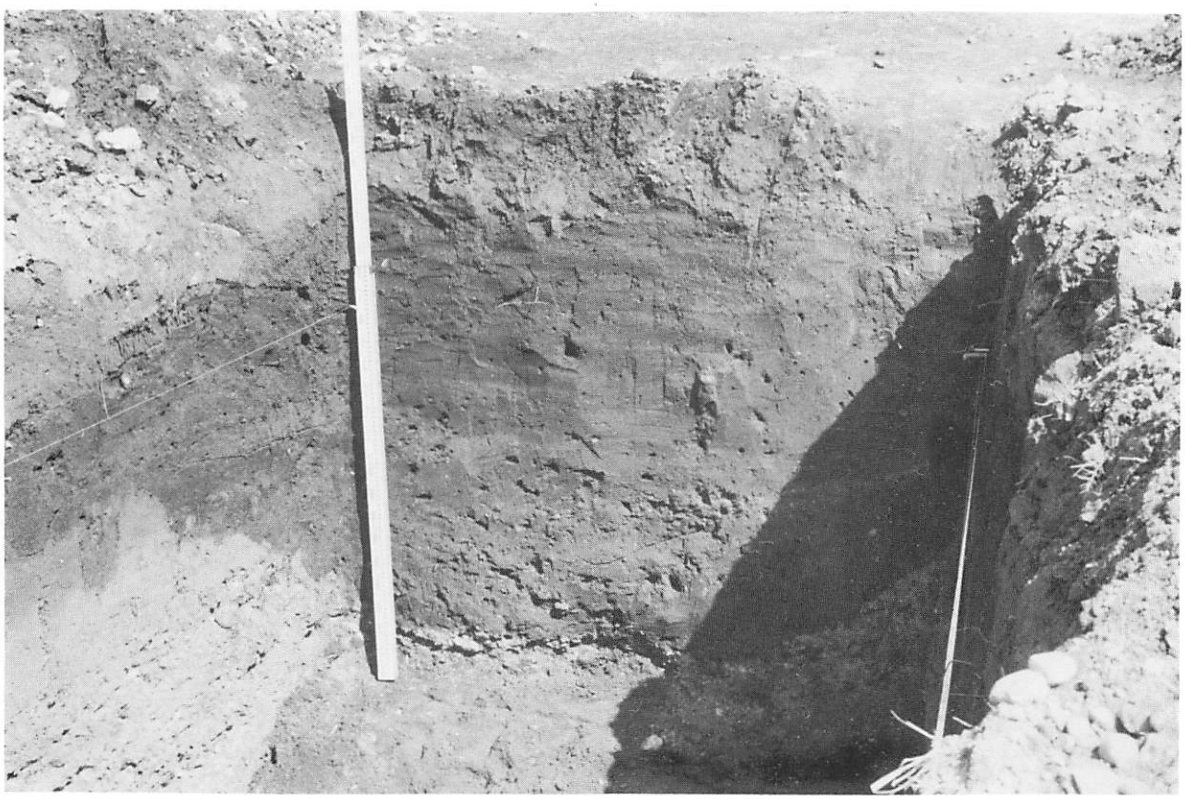


3

1　西側トレンチ全景　2　西側トレンチ1号住居跡砥石出土状況　3　西側トレンチ1号住居跡



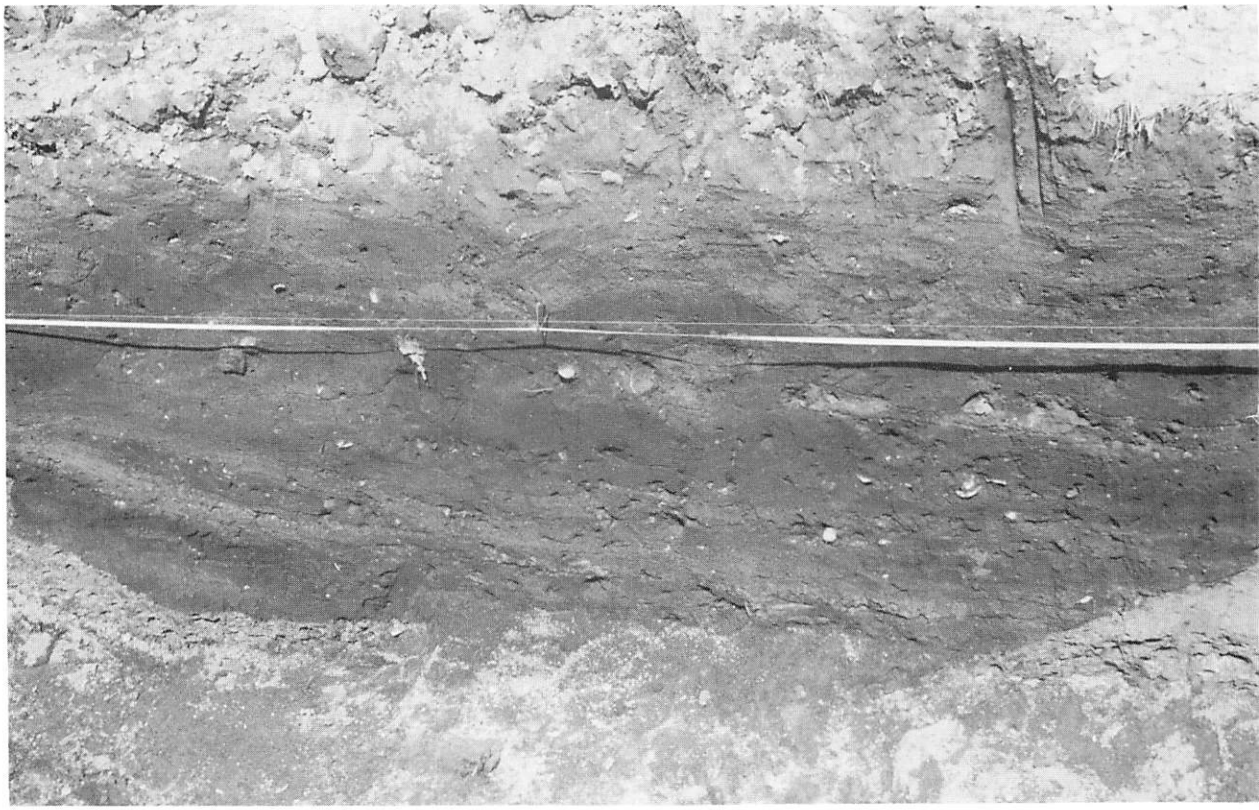
1



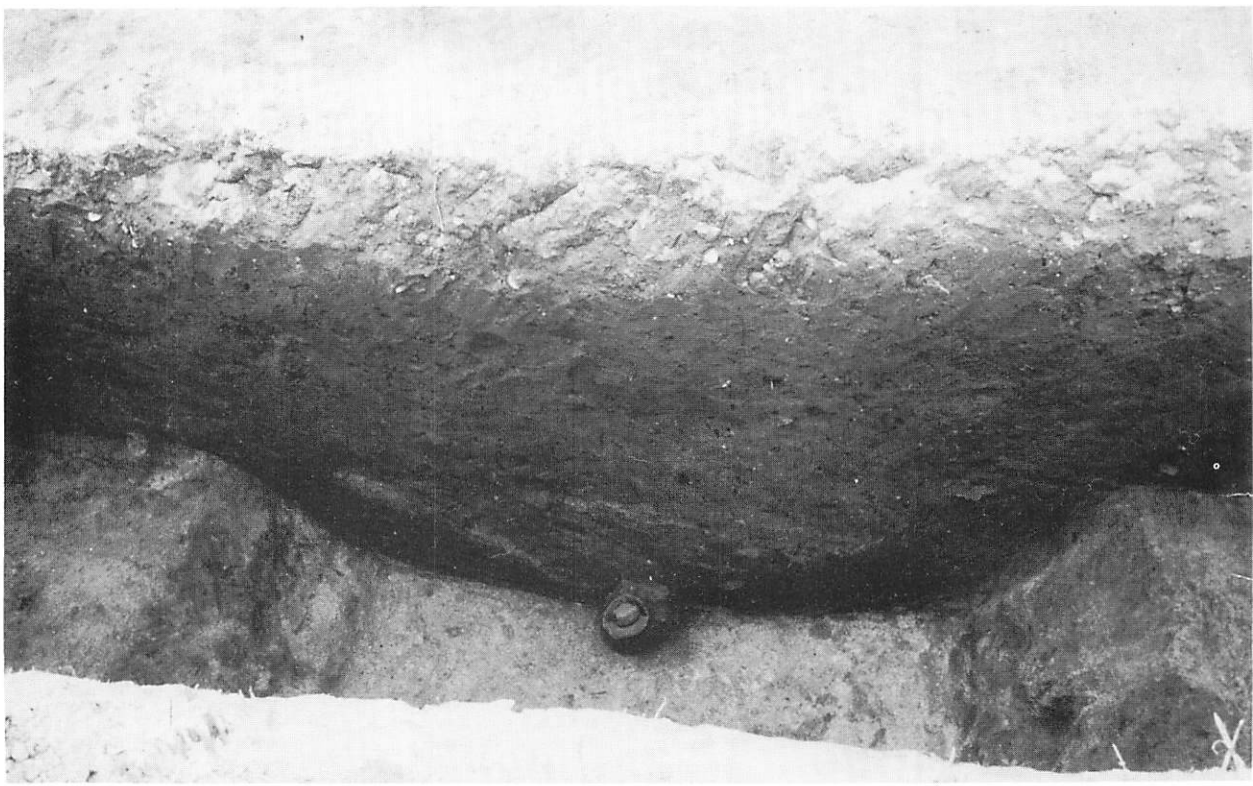
2

1　資材廃棄用土壙内溝東側断面　　2　同、北側断面

図版36

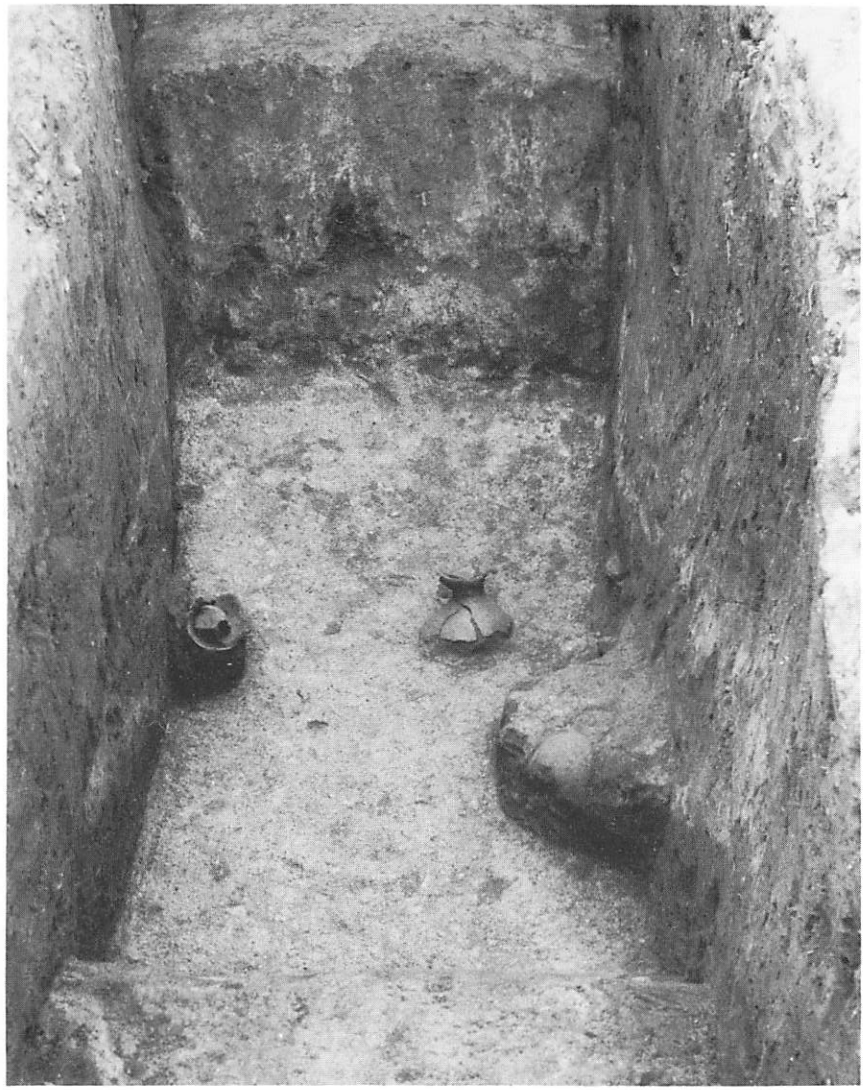


1



2

1　資材廃棄用土壙内溝検出状況　　2　農協東側トレンチ溝出土状況(西側より)

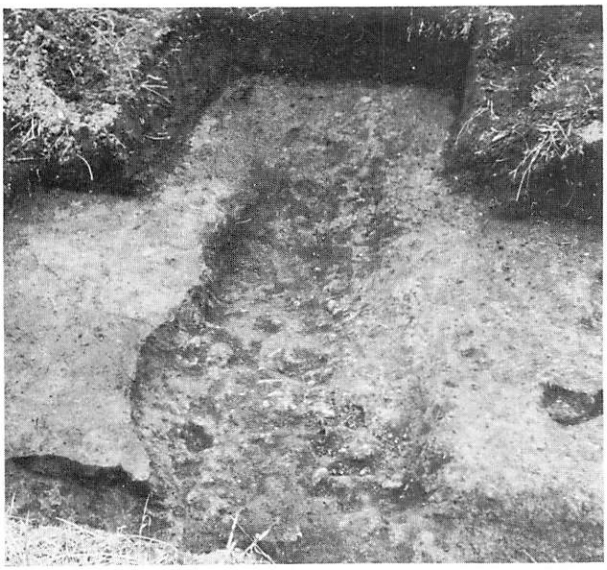




2

農協東側トレンチ溝出土状況

図版38



1

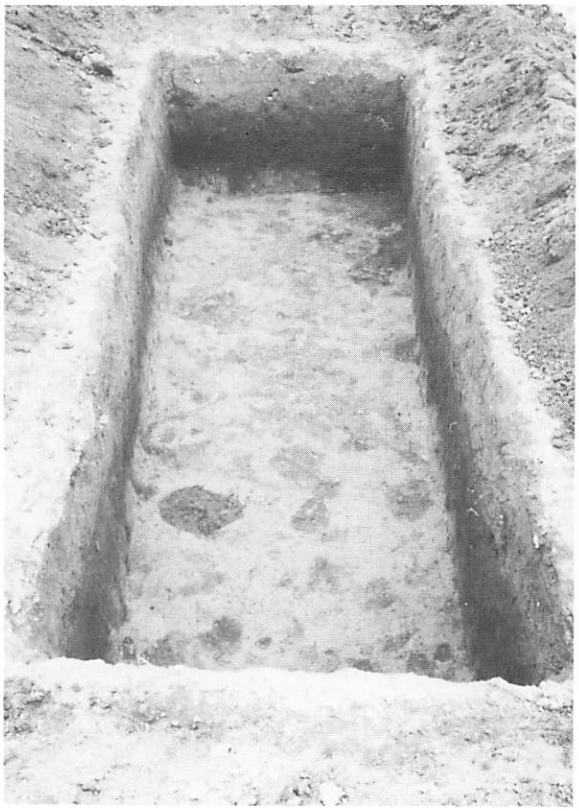


2



3

1 I—1トレンチ　　2 I—1トレンチ遺物出土状況　　3 I—2トレンチ遺物出土状況



1



2



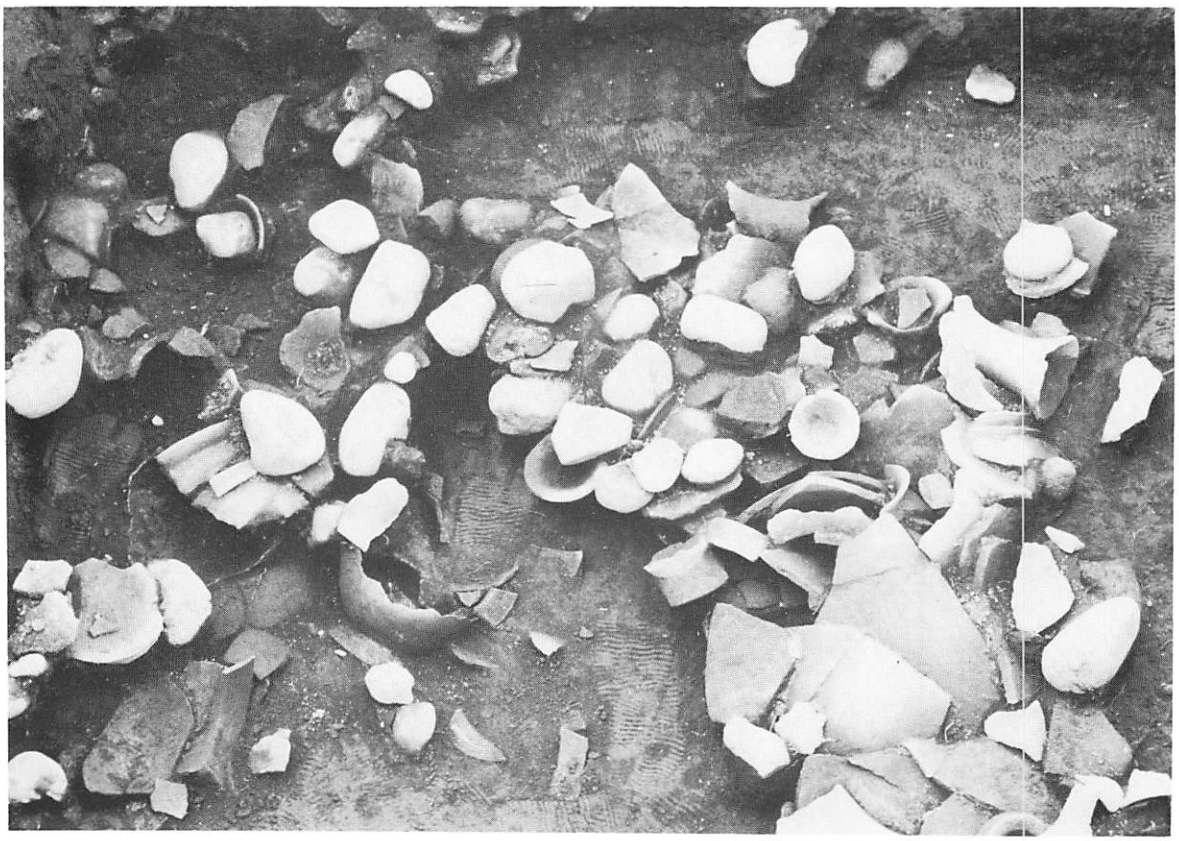
3

1　東側トレンチ全景　　2　No.1ピット遺物出土状況　　3　No.1ピット全景

図版40



1



2

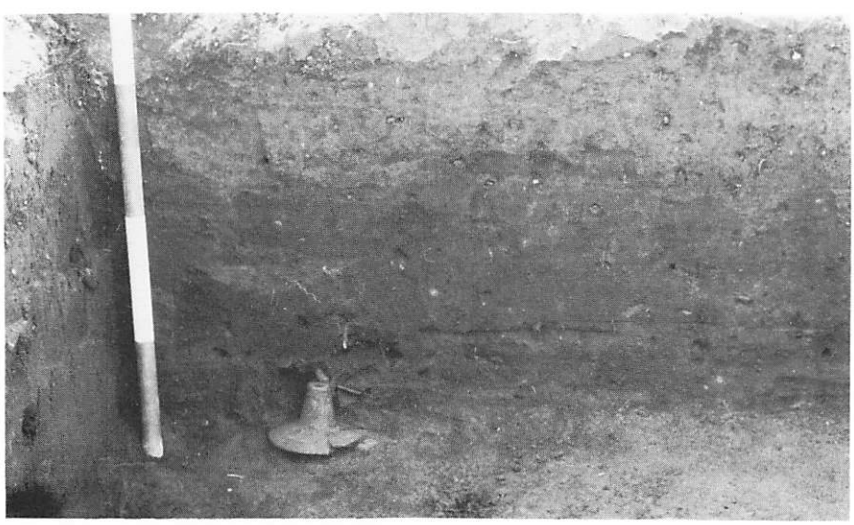
No.2 ピット土器溜め全景



1

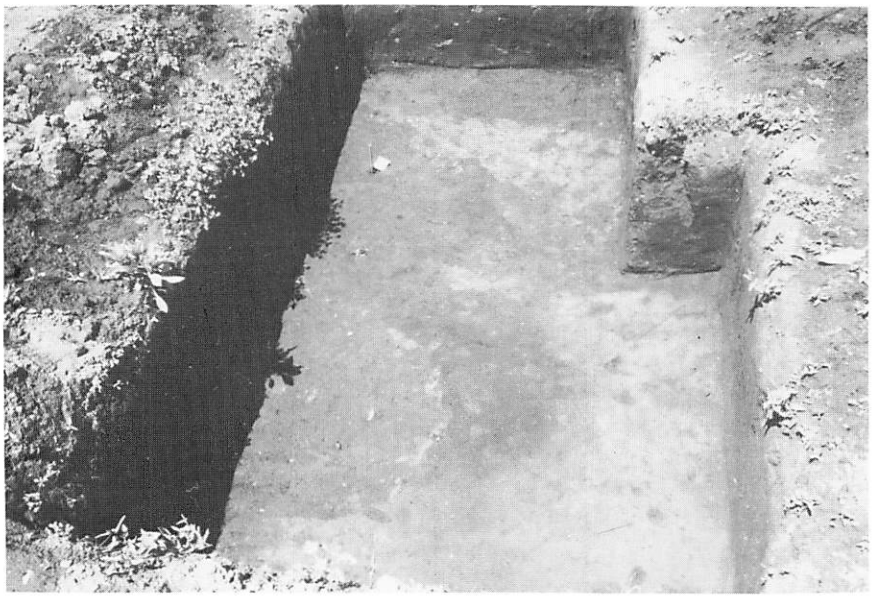


2

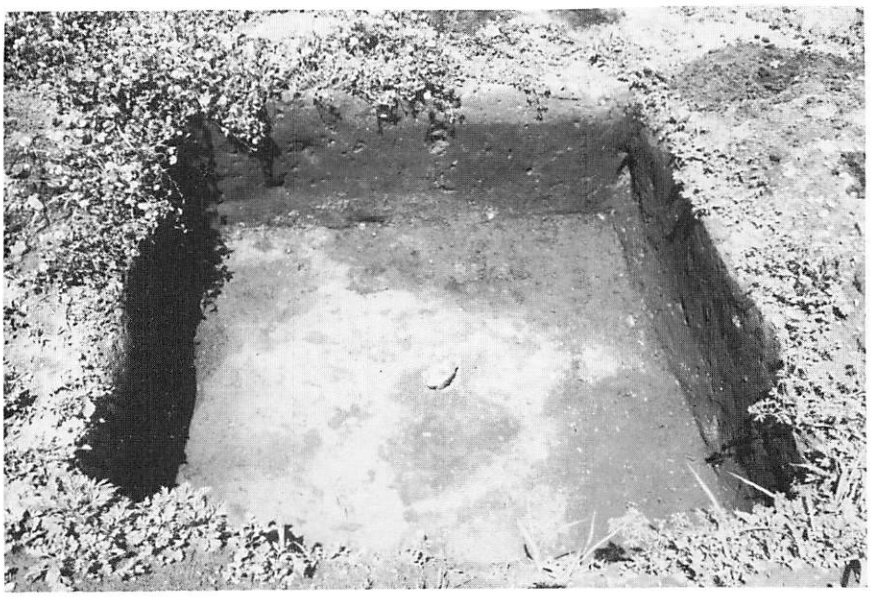


3

1　No.2拡張ピット　　2,3　No.3ピット全景



1



2

1　No.4ピット全景　　2　No.5ピット全景



1



2

1　No.6 ピット全景　　2　No.7 ピット全景



近江工業内第１トレンチ溝出土状況



1

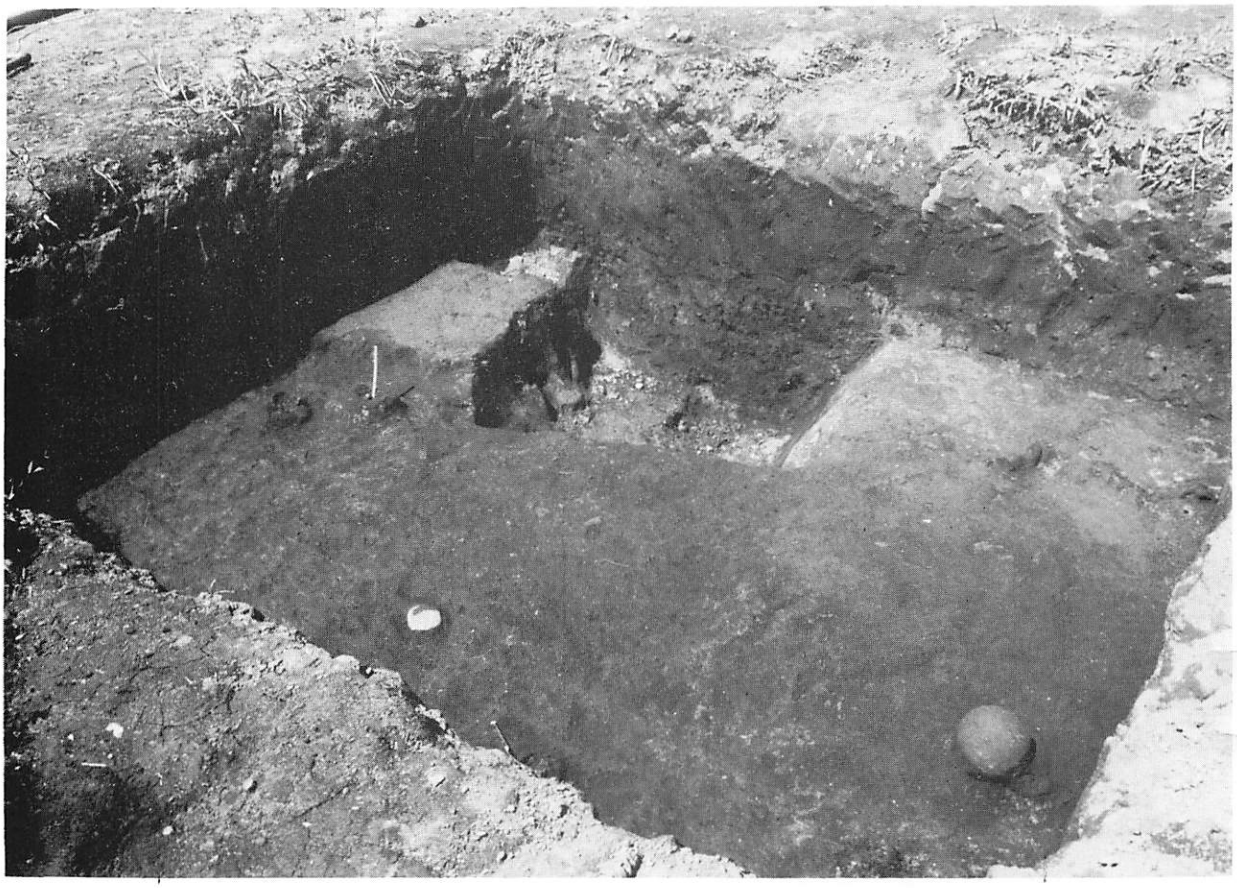


2

1　近江工業内第２トレンチ遺物出土状況　　2　同遺構状況

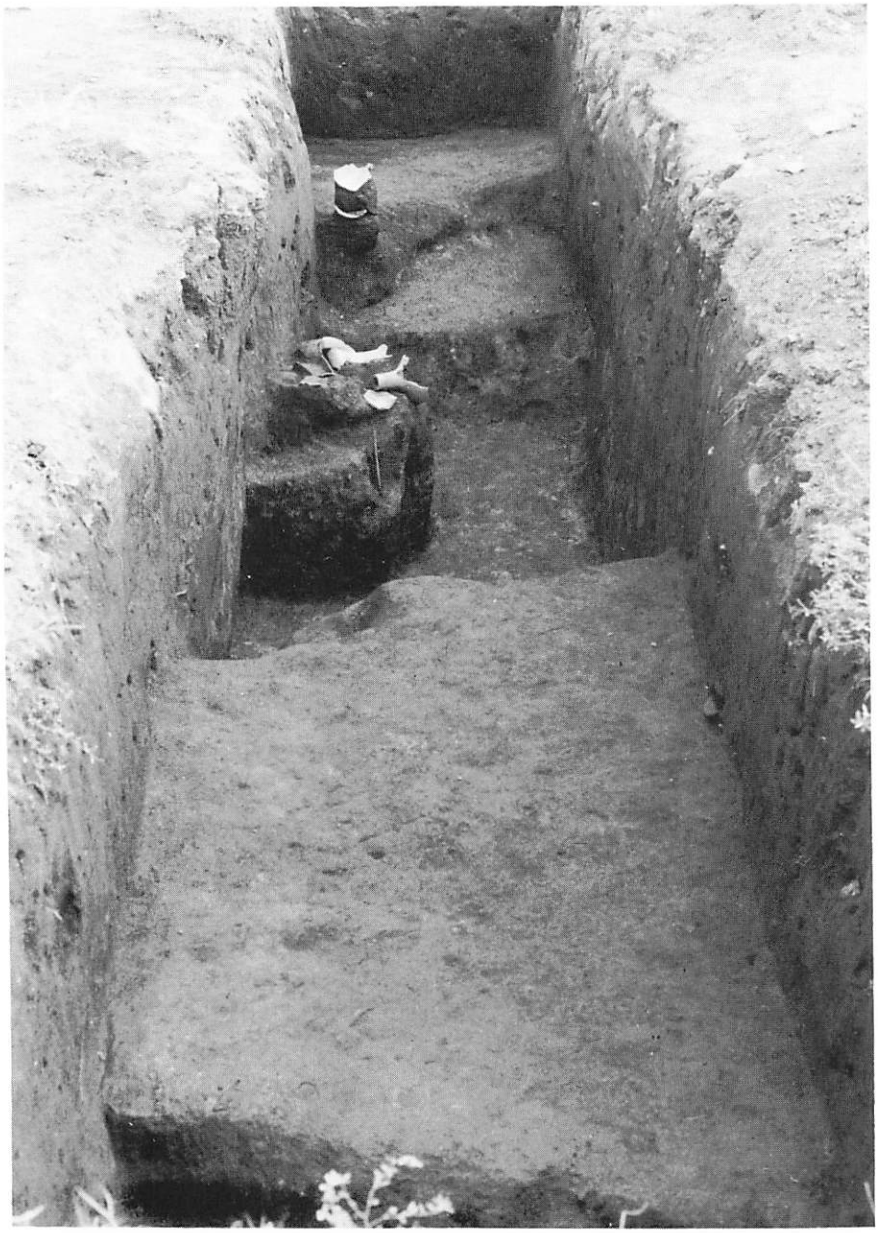


1



2

1　近江工業内第6トレンチスプーン出土状況　　2　同溝発掘状況



近江工業内第３トレンチ全景



1



2



3

近江工業内第３トレンチ遺物出土状況

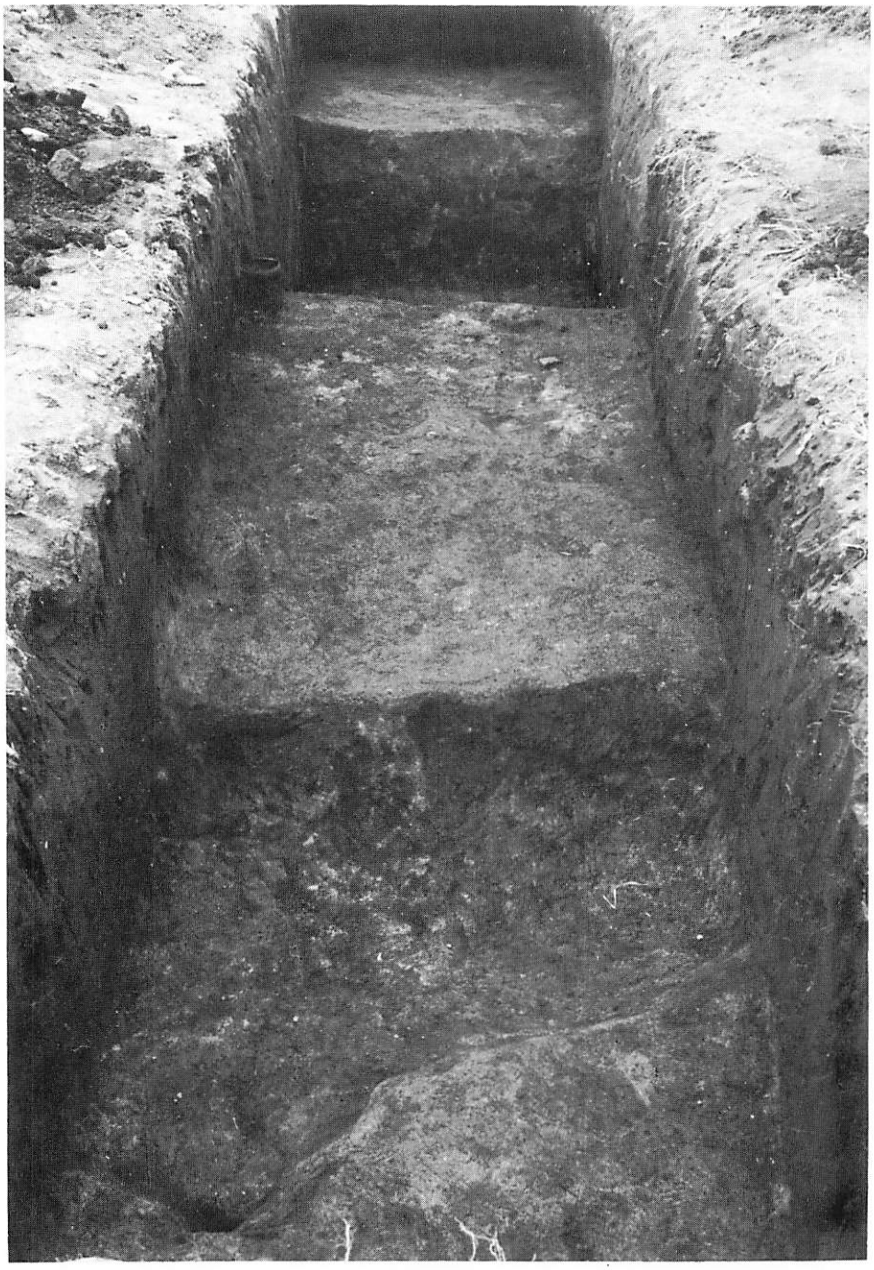


1



2

1　近江工業内第4トレンチ全景　　2　同遺物出土状況



近江工業内第５トレンチ全景



1

近江工業内第５トレンチ
北側溝底炭化米出土状況

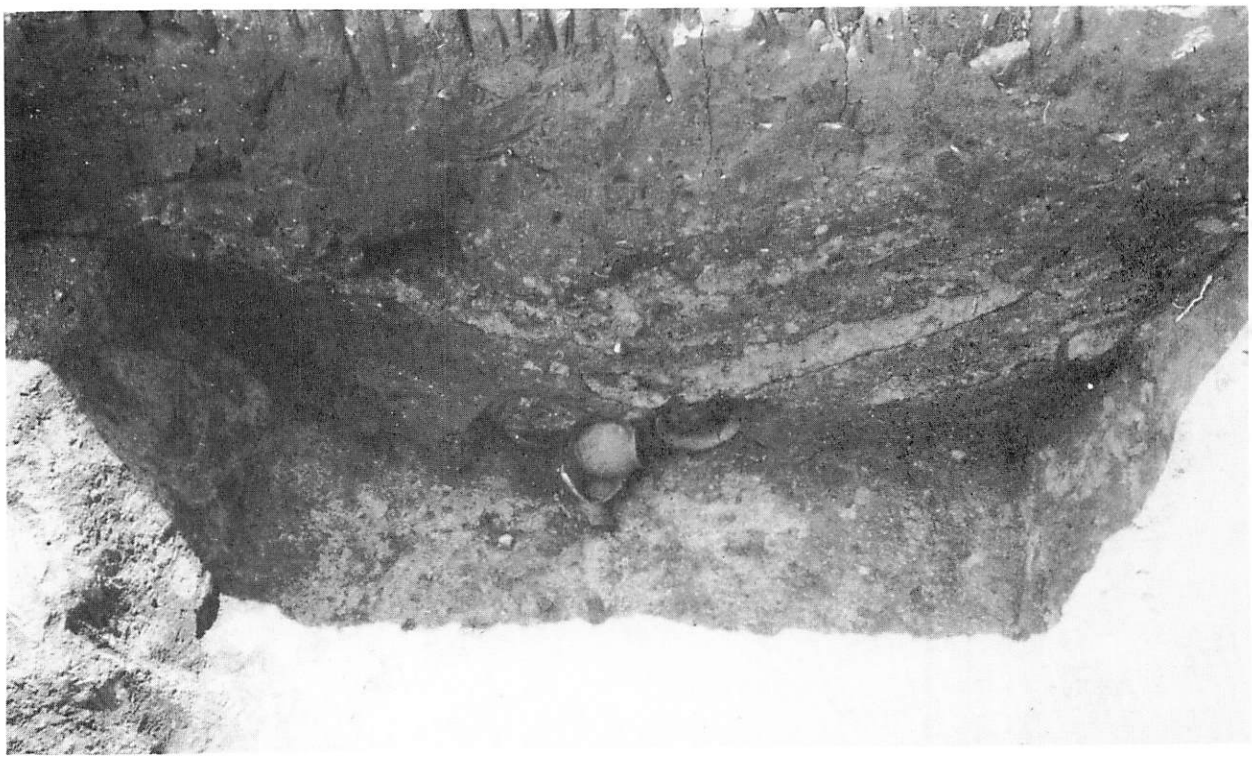


2



3

2　近江工業内第５トレンチ上面遺物出土状況　　3　同北側溝出土状況



1



2

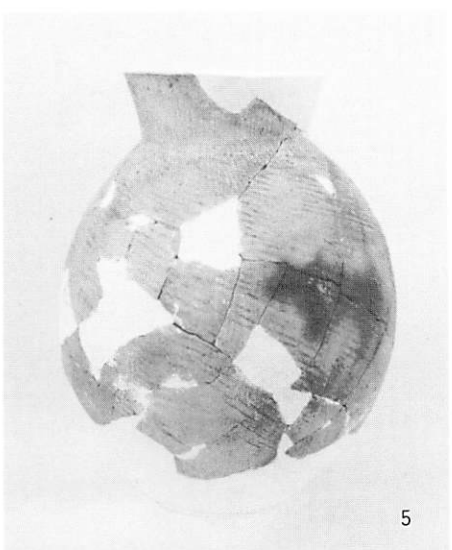
1　近江工業内第５トレンチ北側溝断面　　2　同遺物出土状況


1


2


3

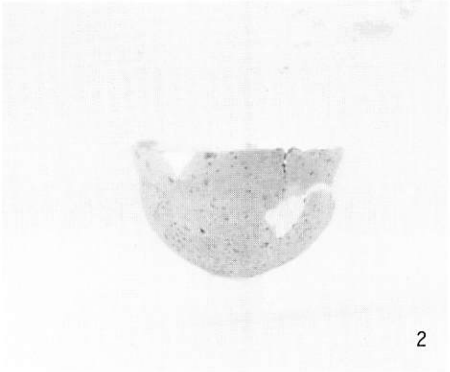

4

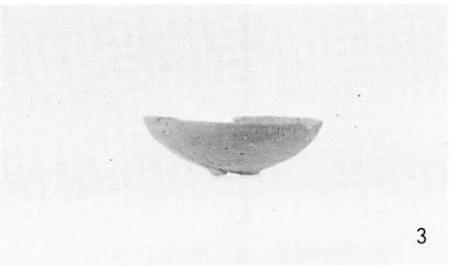

5

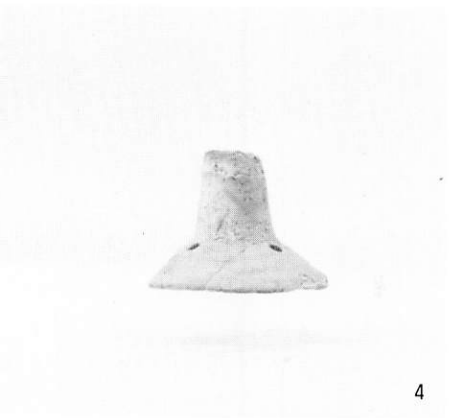

6

中央グリッド1号住居跡出土遺物

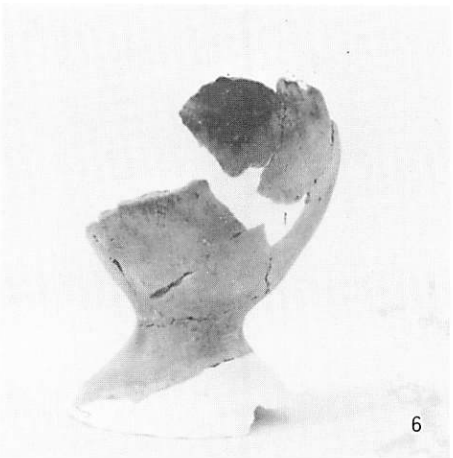

1


2


3

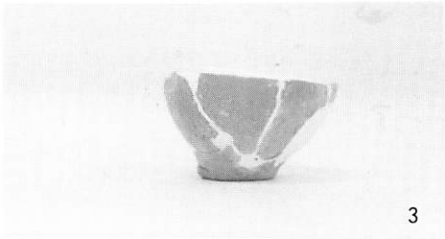

4


5

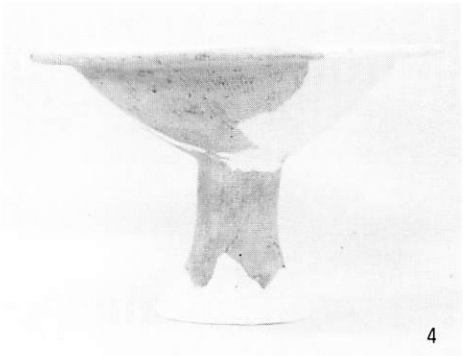

6

中央グリッド１、４号住居跡出土遺物

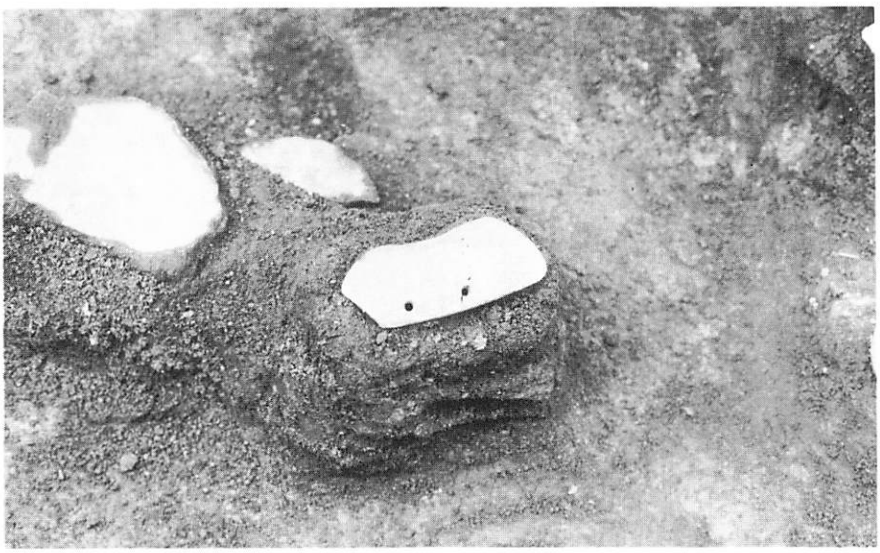

1


3


2


4

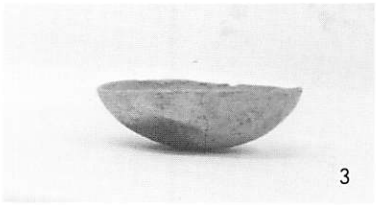

5


6

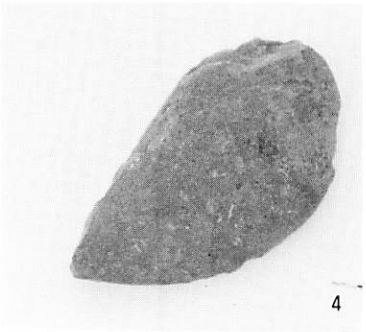
北側トレンチ、黒色ピット内出土遺物

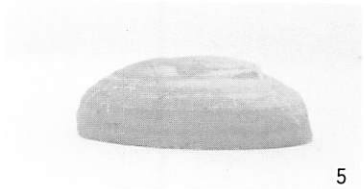
図版56

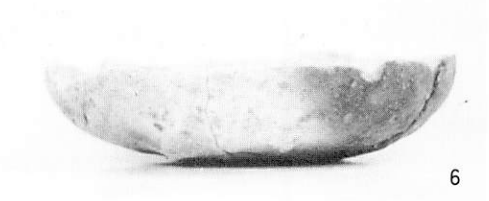

1


3

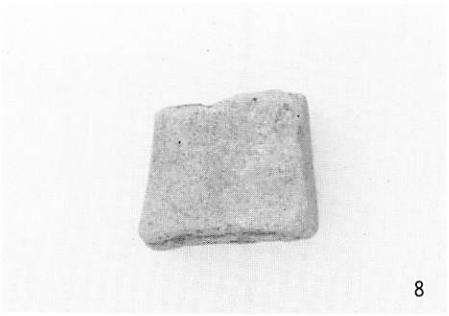

2

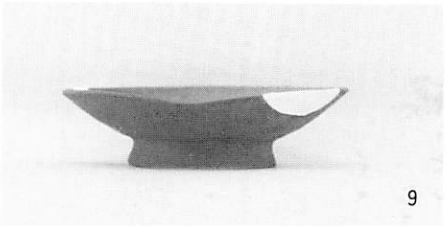

4


5


6

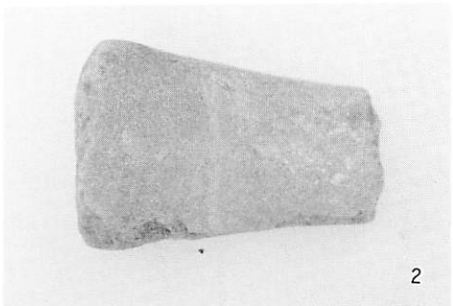

7

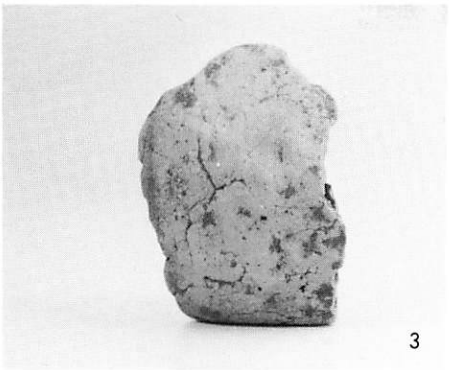

8


9

北側トレンチ・南側トレンチ出土遺物
（1～3,5,6）　（4,7～9）


1


2


3


4

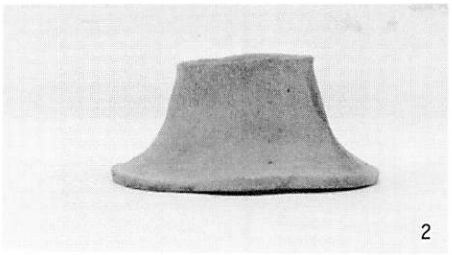

5

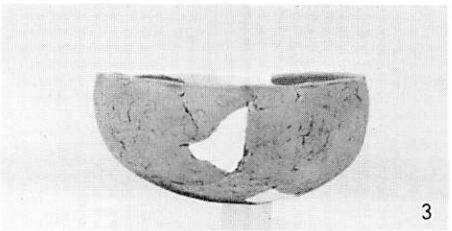

6

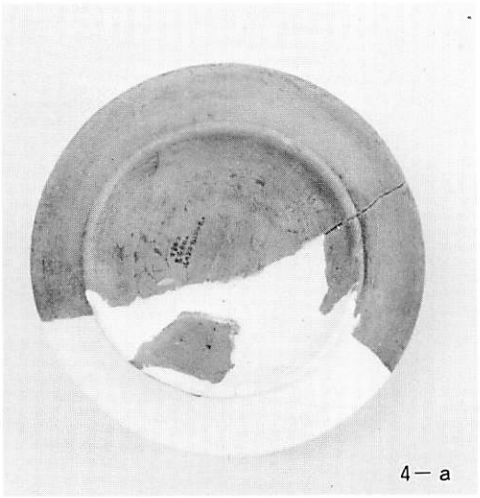
南側トレンチ住居跡・資材廃棄用土壙溝内、農協東側トレンチ溝内出土遺物
(1,2)　(3)　(4,5,6)

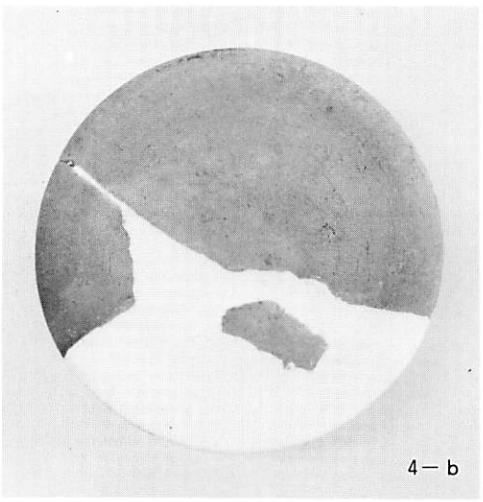
図版58


1

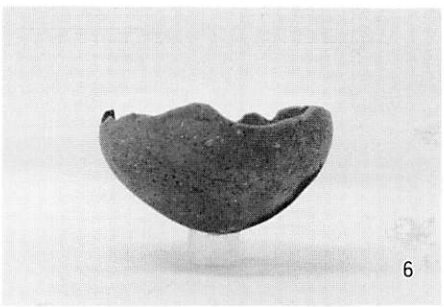

2


3


4－a

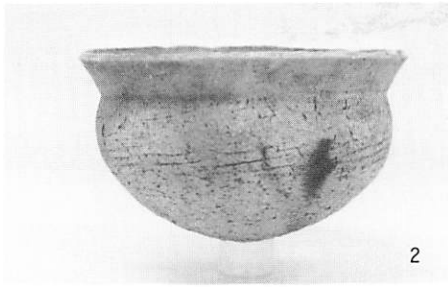

4－b


5


6

農協東側トレンチ、Ⅰ－1、2トレンチ出土遺物
(1～4)


1


2


3


4

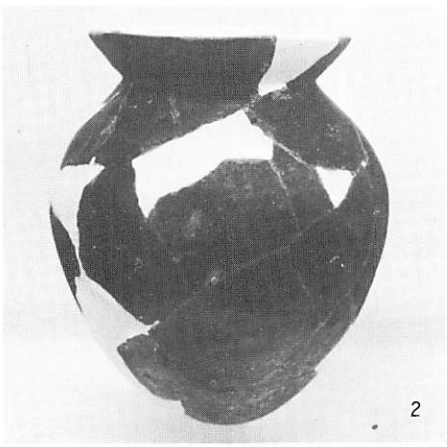

6


7


5

No.1ピット・No.2ピット出土遺物
(1～3)　(4～7)


1

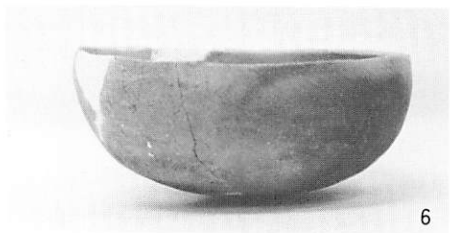

2

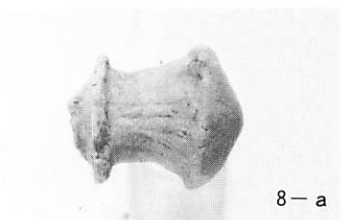

3

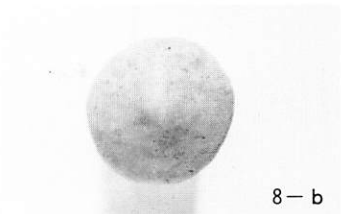

7

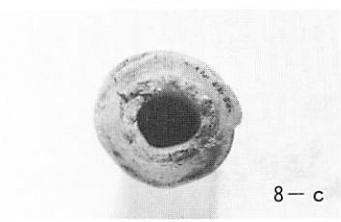

4


5

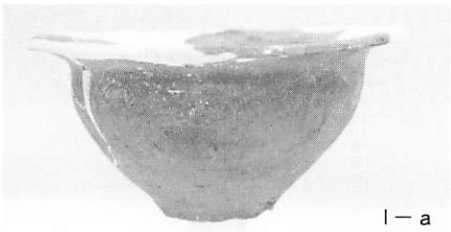

6


8－a

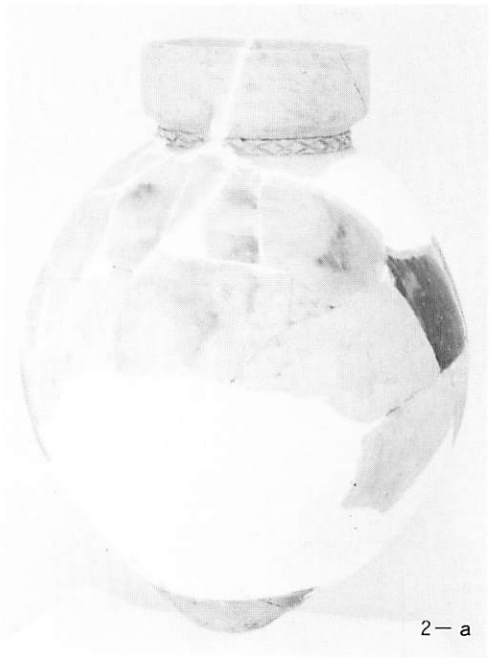

8－b

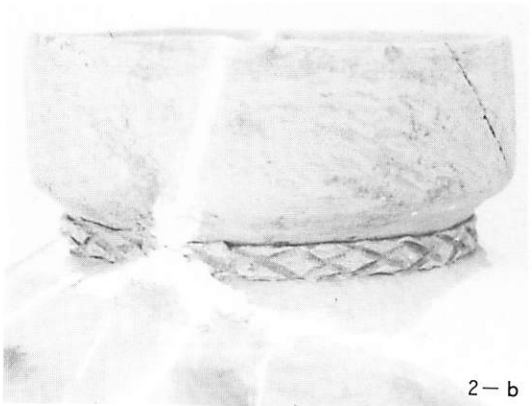

8－c

№2ピット出土遺物


1－a

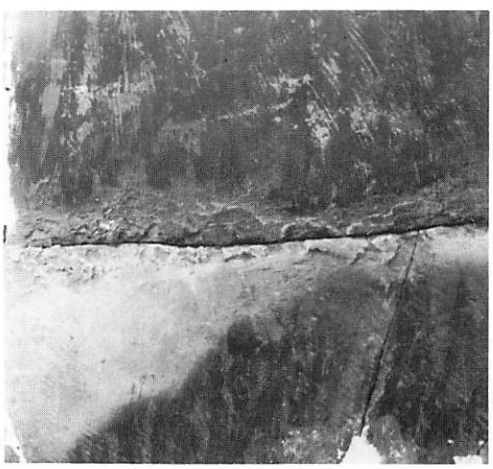

1－b


2－a


2－b


3　4

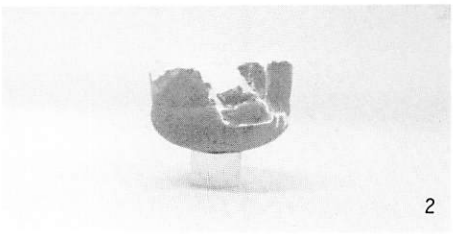

5

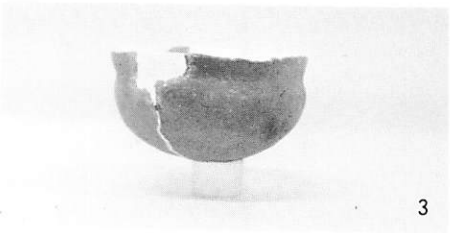

2－c

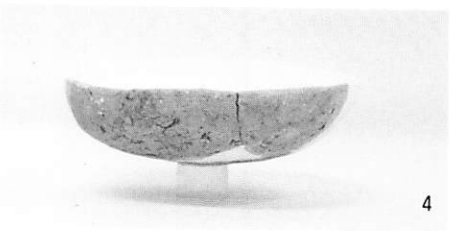
No.2 ピット出土遺物

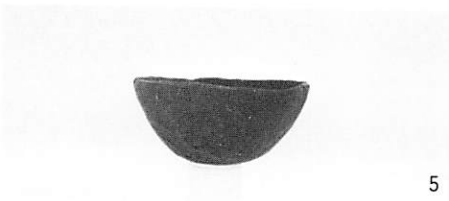
図版62

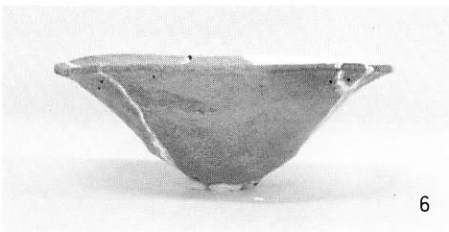

1


2

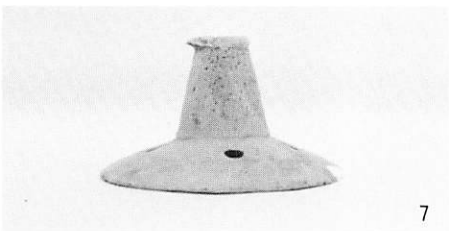

3

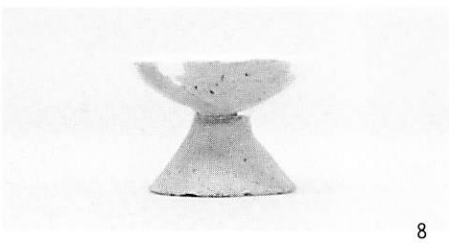

4

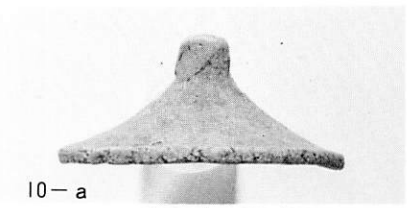

5

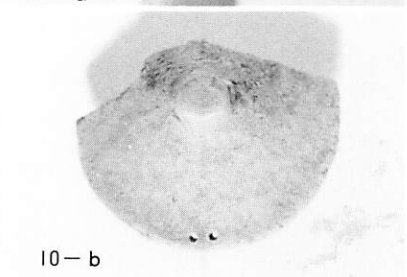

6


9


7


8

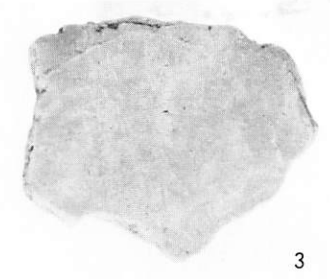

10－a

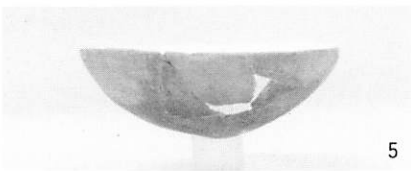

10－b

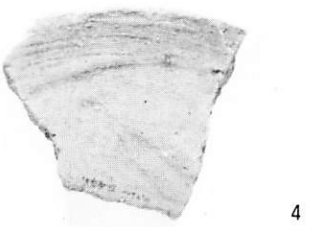
№2拡張ピット・№3ピット・№4ピット出土遺物
(1～5)　(6～9)　(10)

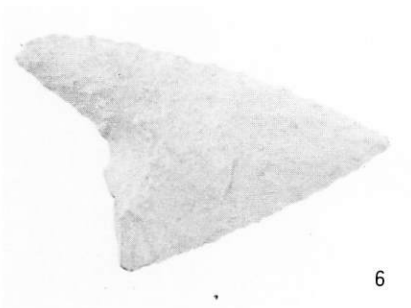

1

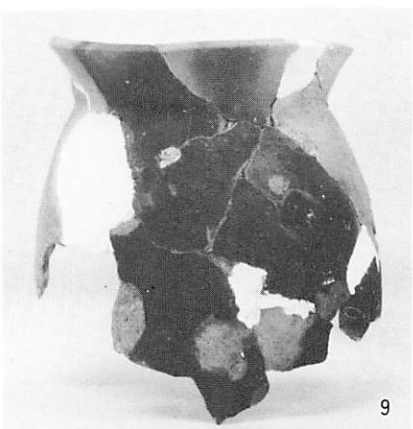

2

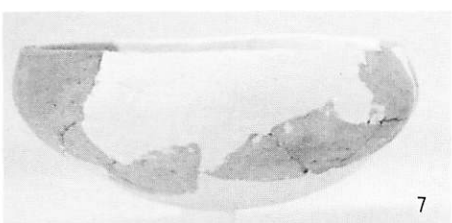

3

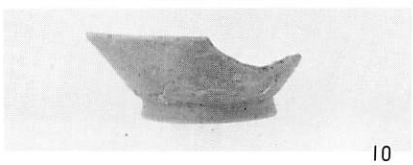

5

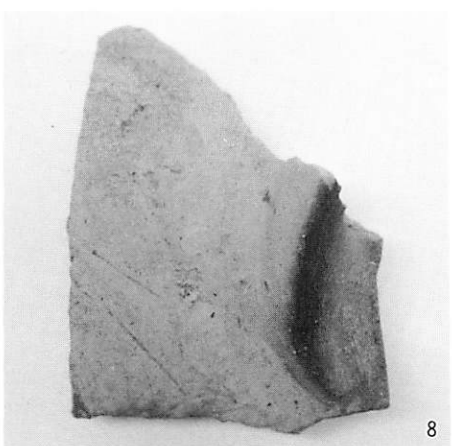

4

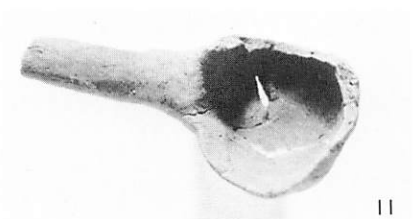

6

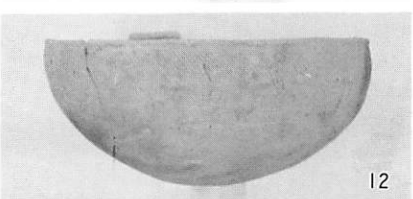

9


7


10


8

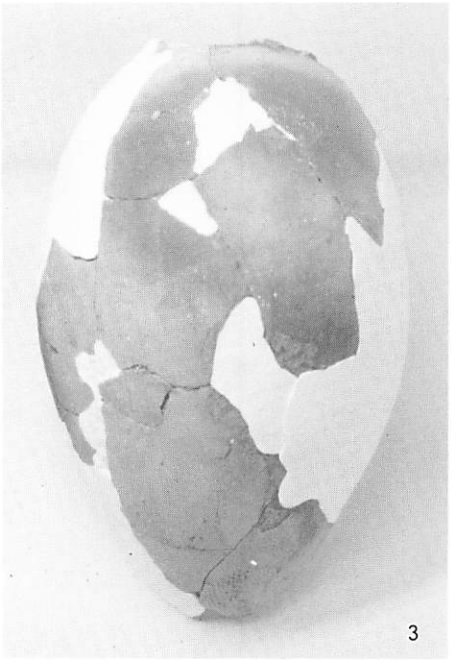

11

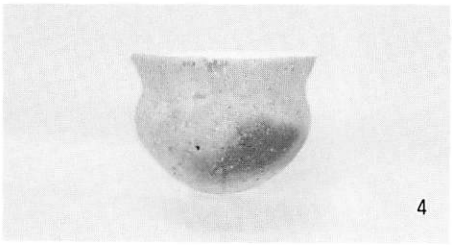

12

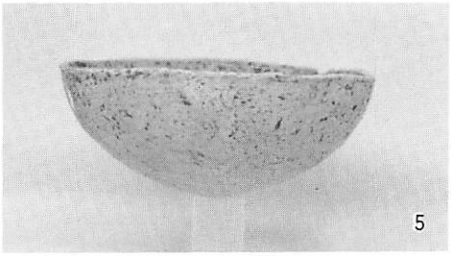
№5、6、7、9ピット・近江工業内第1、2、6トレンチ出土遺物


1

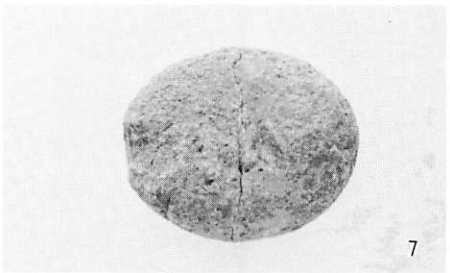

2


3


4

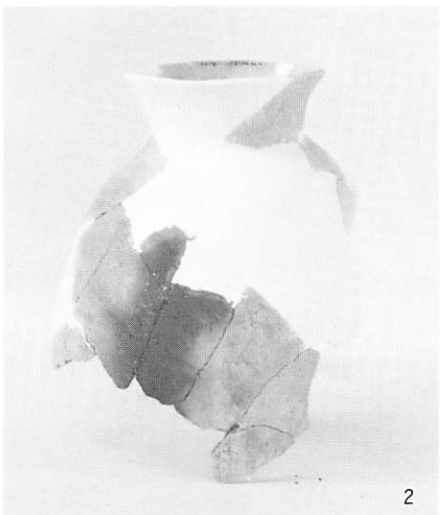

5

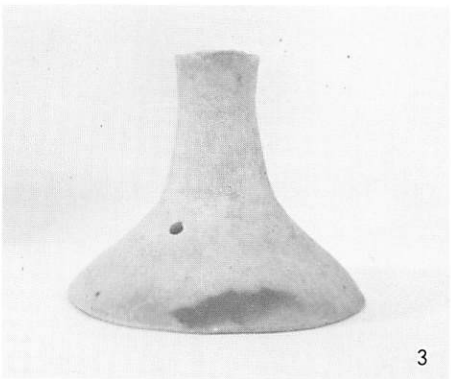

6


7

近江工業内第４トレンチ出土遺物

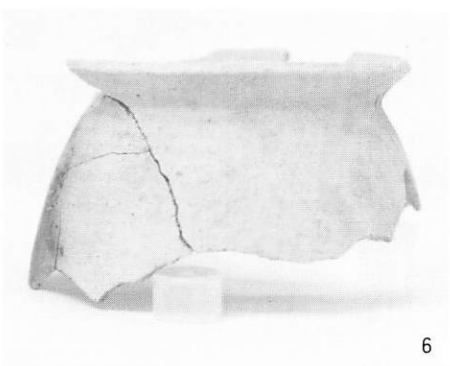

1

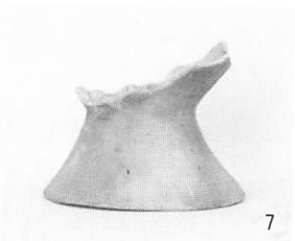

2


3


4


5

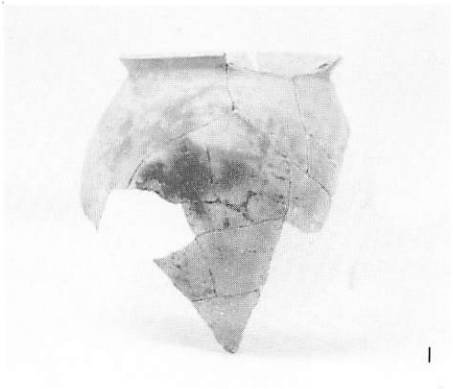

6


7

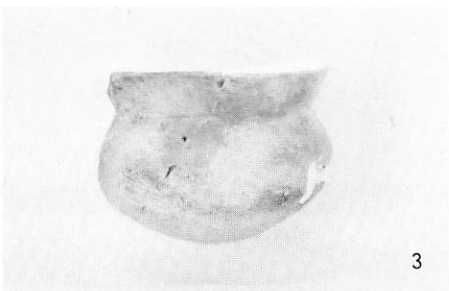

8

近江工業内第３、５トレンチ出土遺物

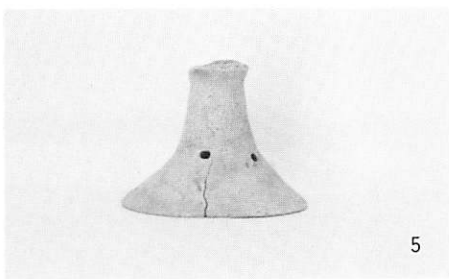
図版66





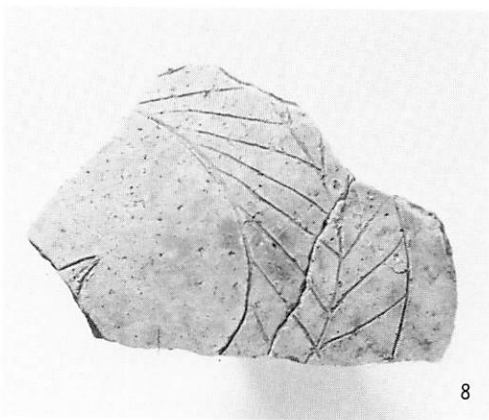


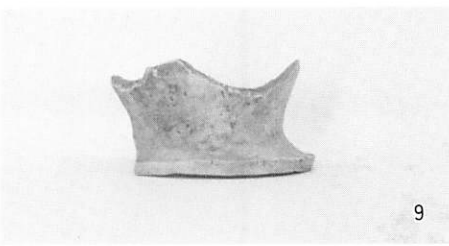




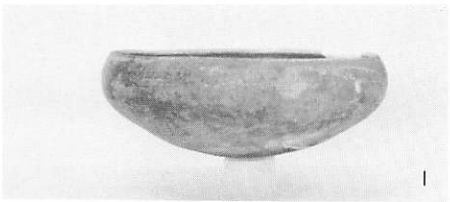


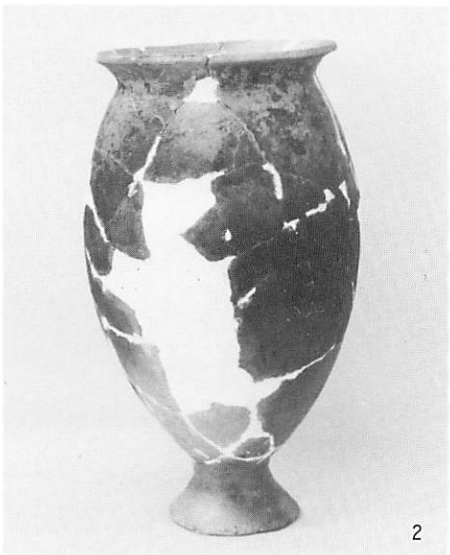


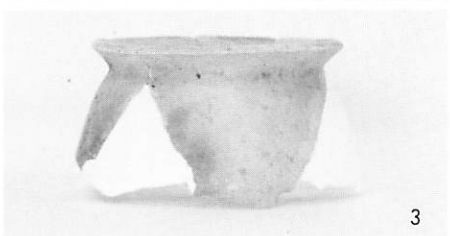




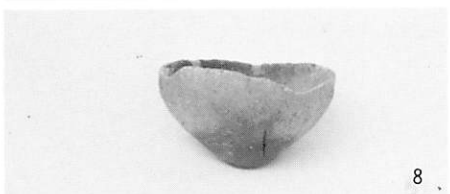
近江工業内第５トレンチ出土遺物


1

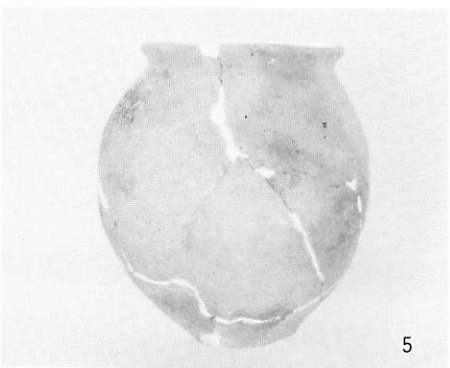

2

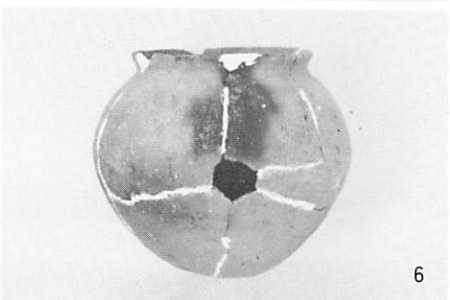

3

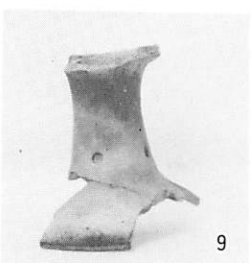

7


8


4

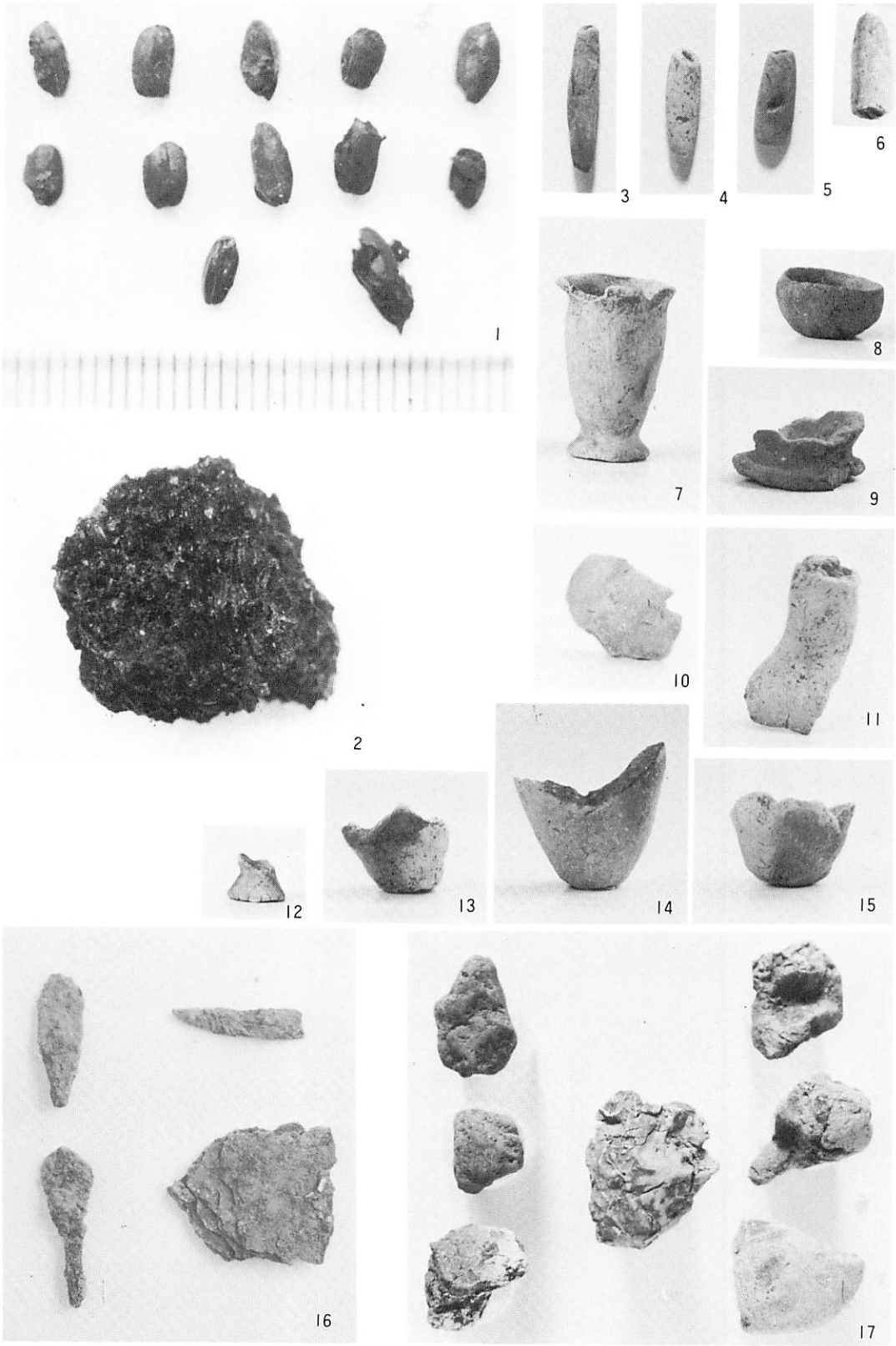

5


6


9


10

近江工業内第５トレンチ出土遺物



近江工業内第５トレンチ出土炭化米・土製品・鉄器



1



2

1　第1調査区遺構全景　　2　土器溜め全景（↑）印鏡出土地点

図版70



1



2

1　1、2、3号住居跡　　2　3号住居跡



1



2

1　4号住居跡　　2　5号住居跡

図版72



1



2

1　6号住居跡　　2　土器溜め



1



2

1　土器溜め断面　　2　鏡出土状況

図版74



1

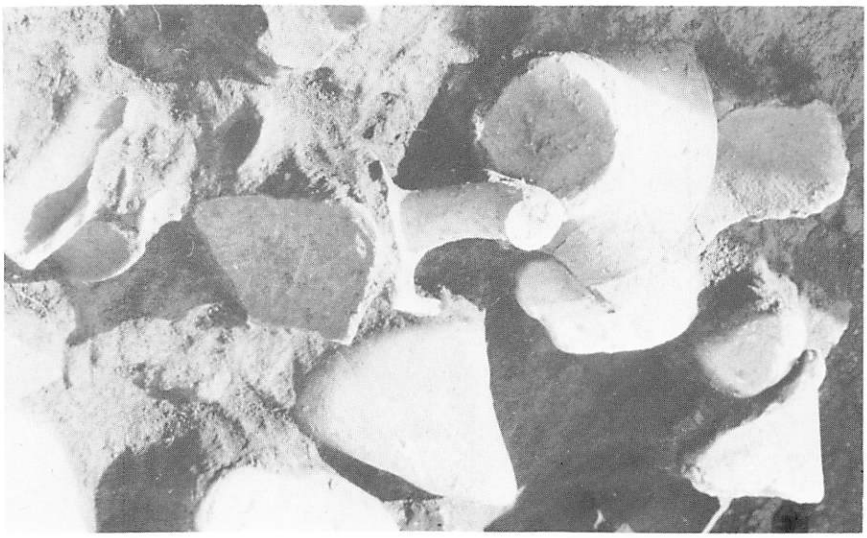


2



3

第1調査区遺物出土状況



1



2



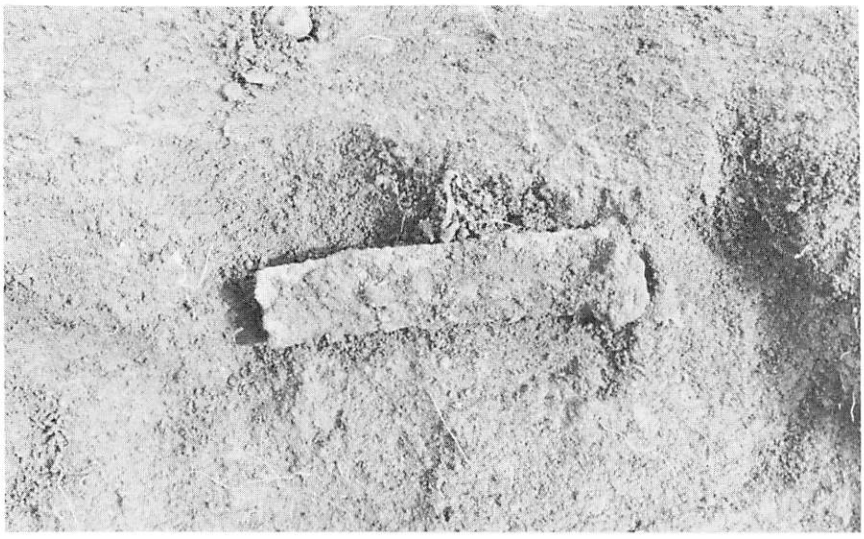
3

土器溜め遺物出土状況

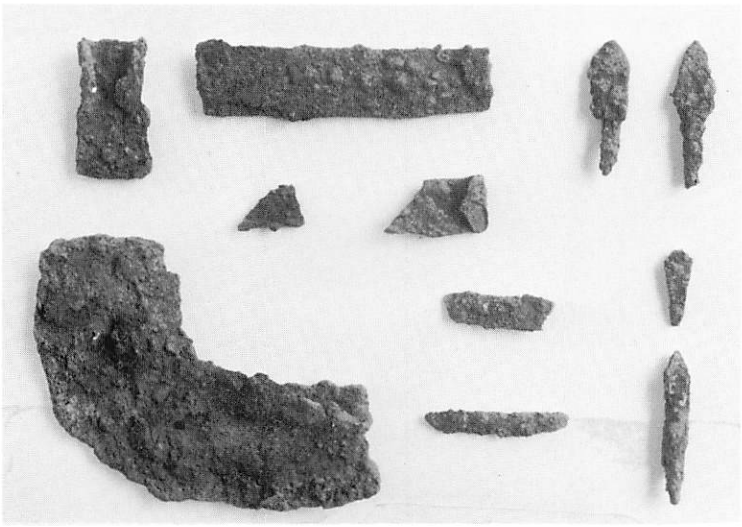
図版76



1



2

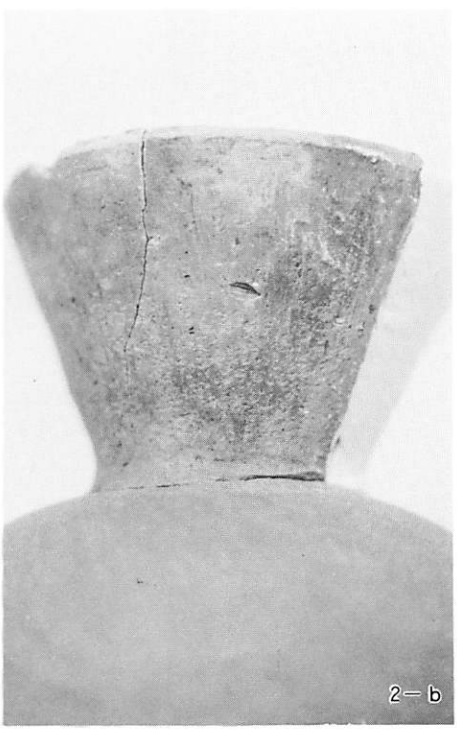


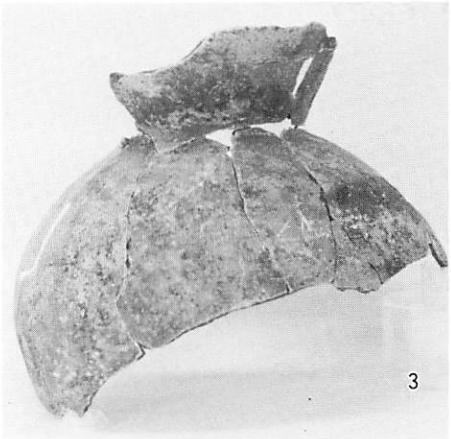
3

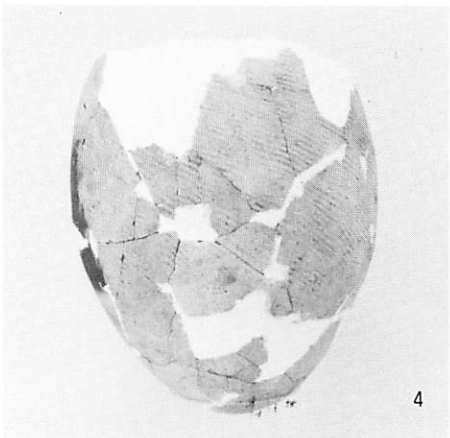
鉄器出土状況・鉄器

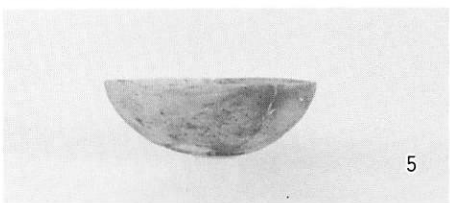

1

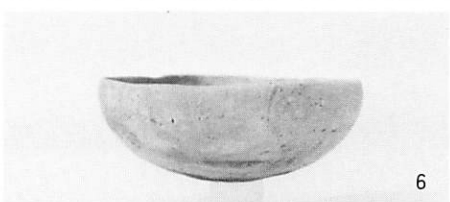

2－a


2－b


3

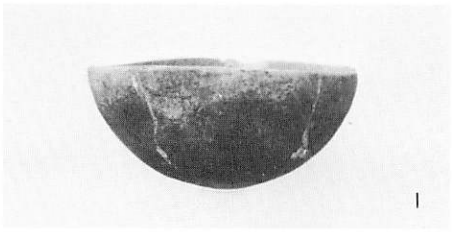

4


5

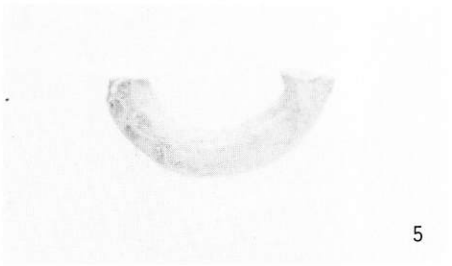

6


7

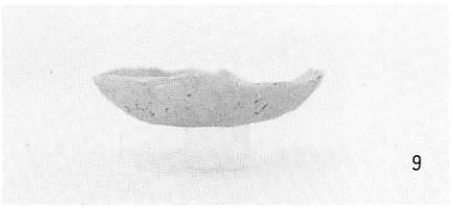
1、3、7号住居跡出土遺物

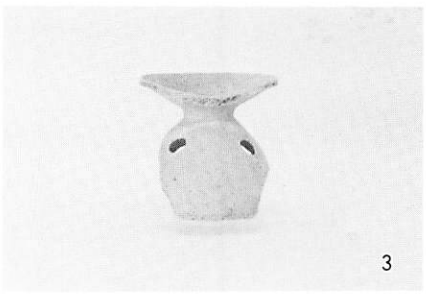

1

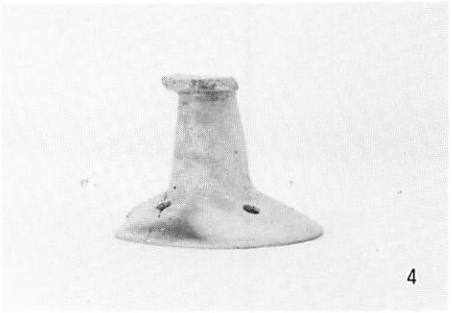

2


5


6


9

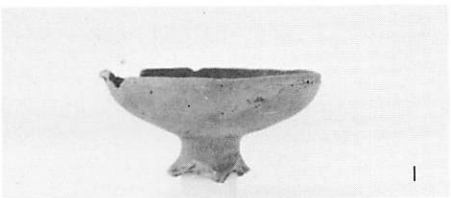

3


4


7

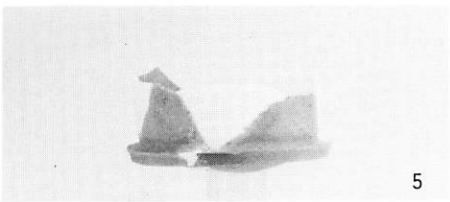

8

4、5、6、8号住居跡出土遺物

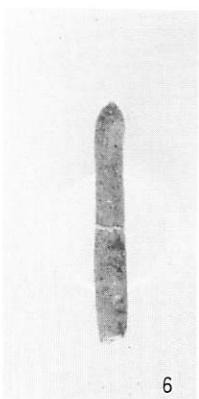

1


4

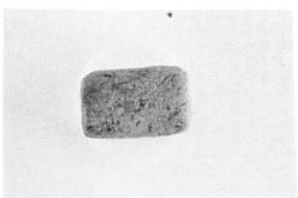

2

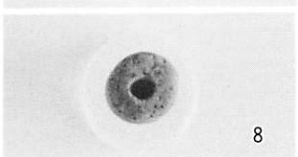

5

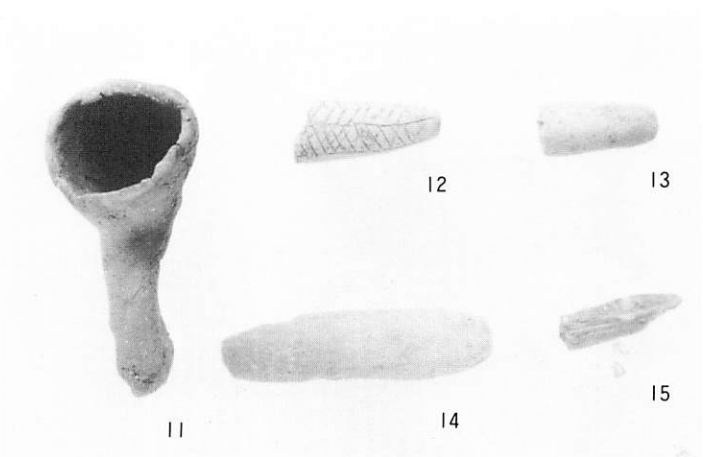

3

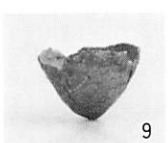

6


7




8


11
12
13
14
15


9


10


16
17
18

遺構に伴わない遺物・土製品

図版80

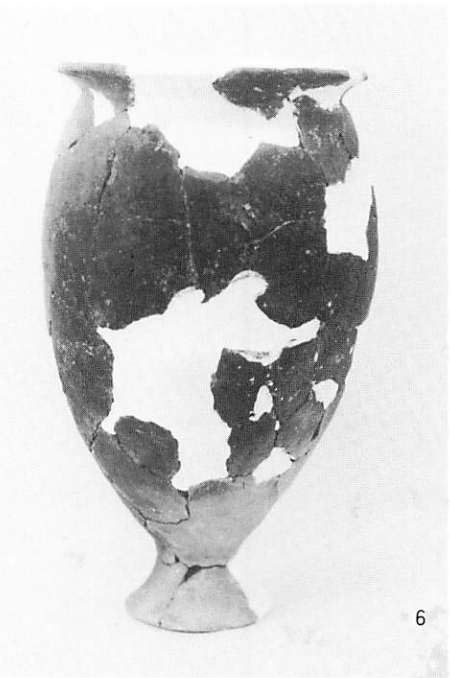

1


2


3

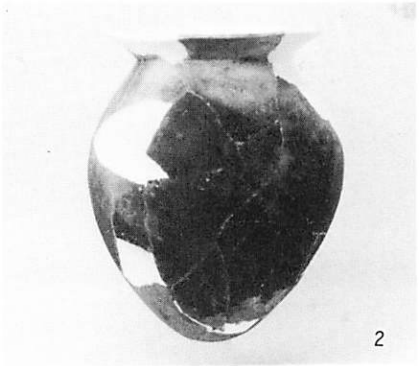

4


5


6

土器溜め出土遺物（甕）


1


2

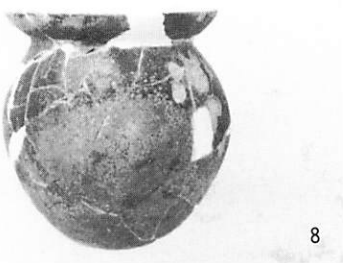

3


4

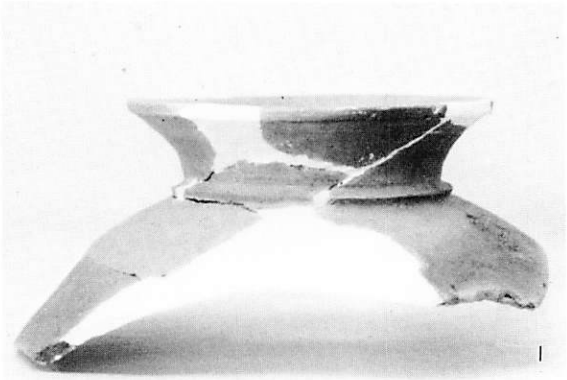

5


6


7

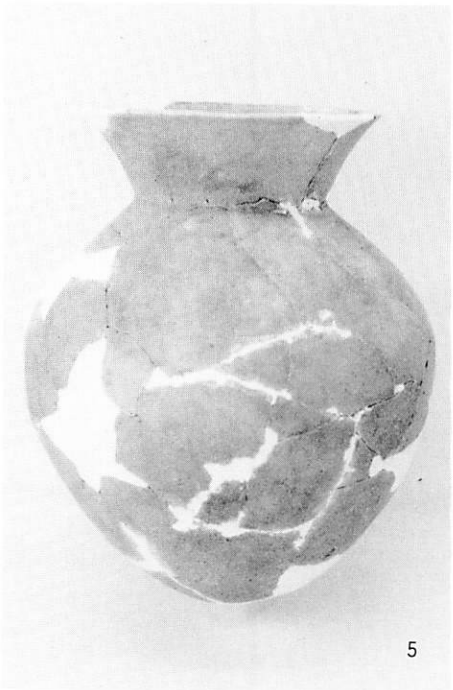

8

土器溜め出土遺物（甕）

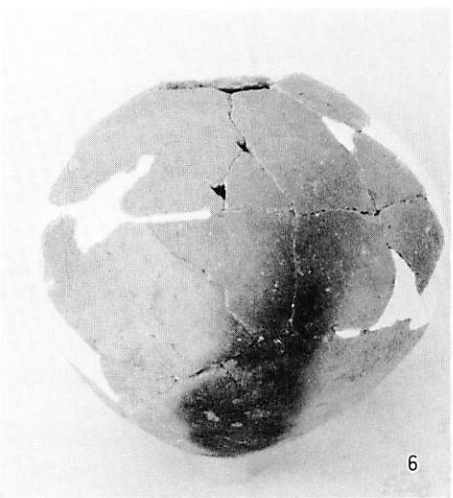

1


4


2

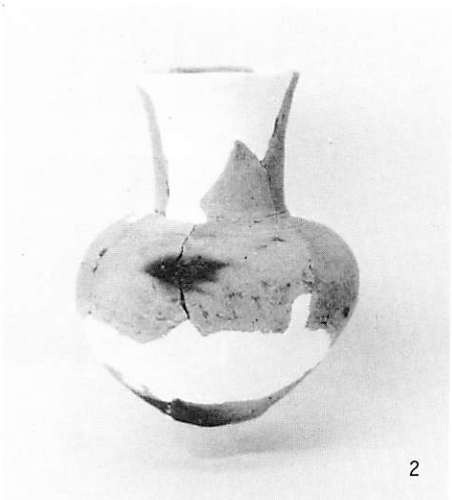

5

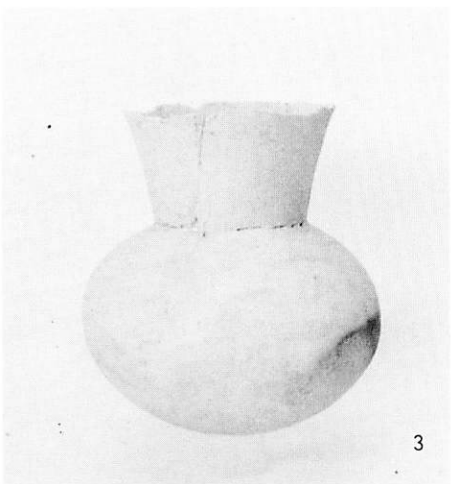

3

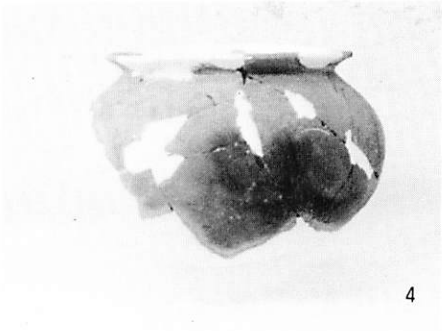

6

土器溜め出土遺物（壺）

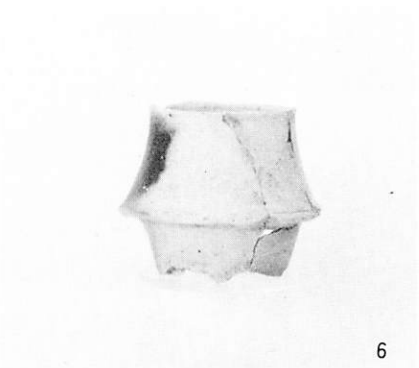

1


2


3


4


5

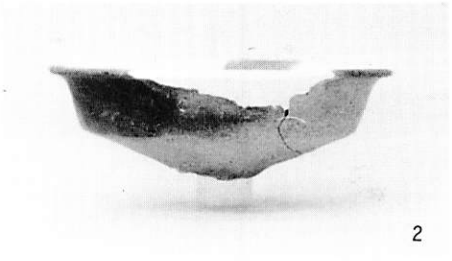

6


7

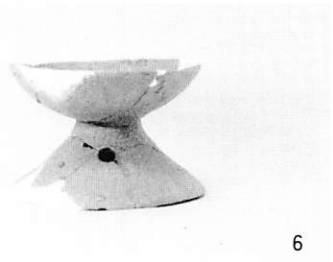
土器溜め出土遺物（壺）

図版84


1


2

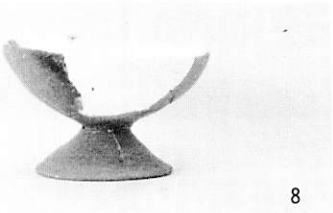

3


6

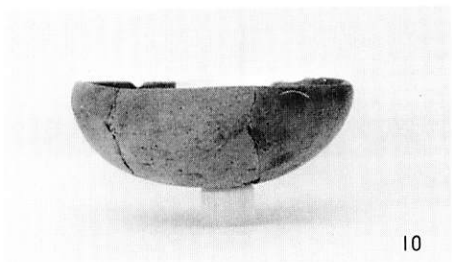

4

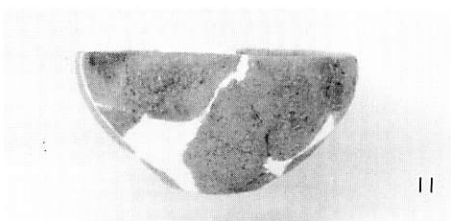

7

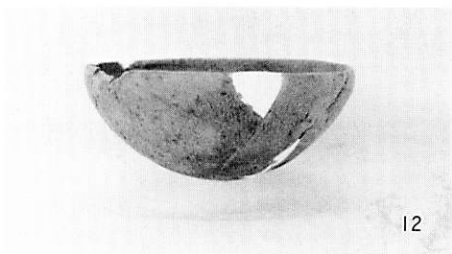

5


8

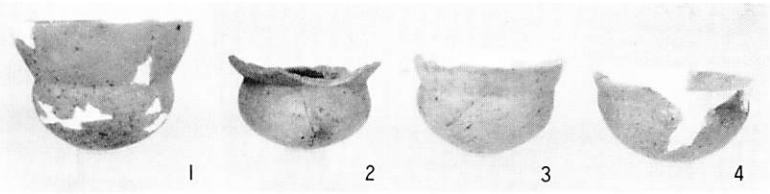

9


10


11


12

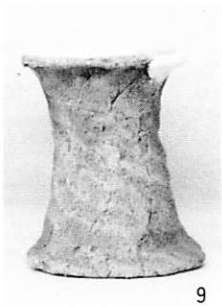
土器溜め出土遺物

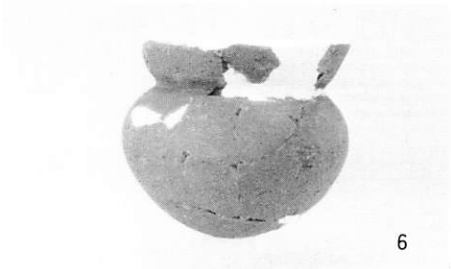


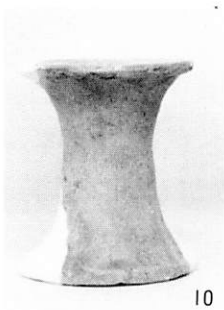


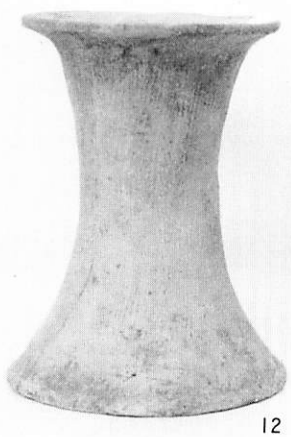


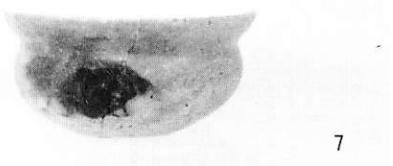




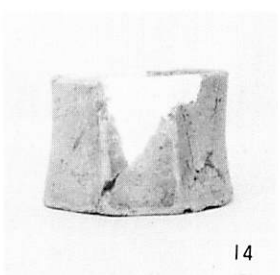


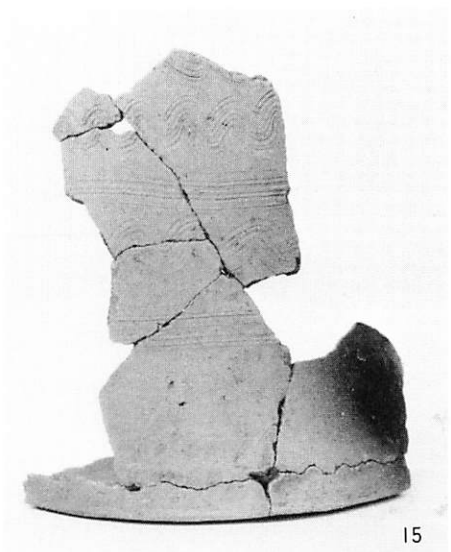








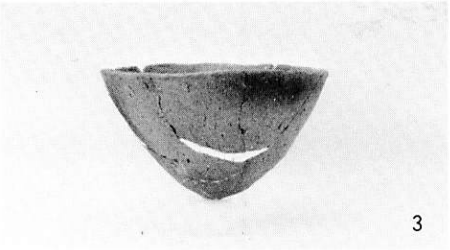


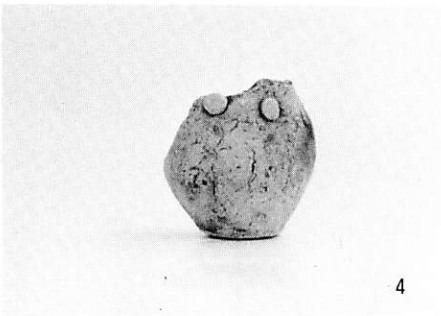


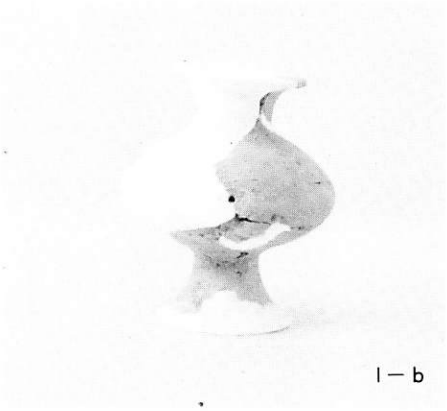
土器溜め出土遺物

図版86

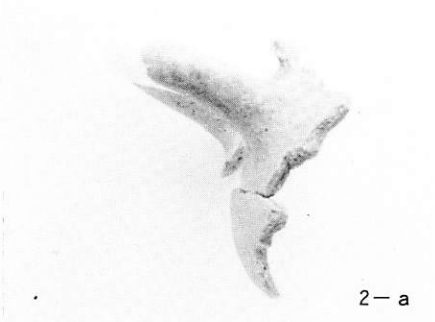

1－a

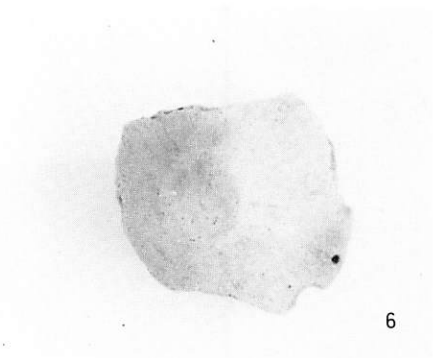

3

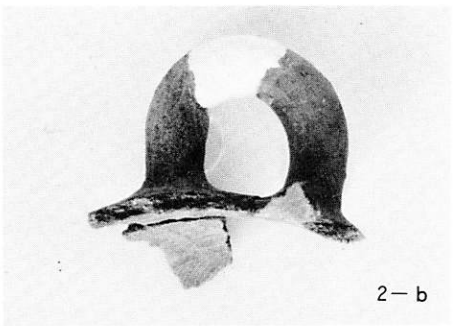

4


1－b


5

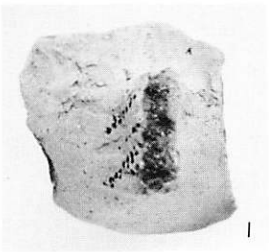

2－a

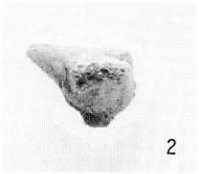

6

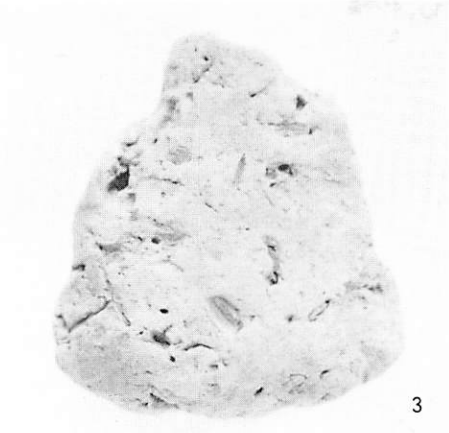

2－b

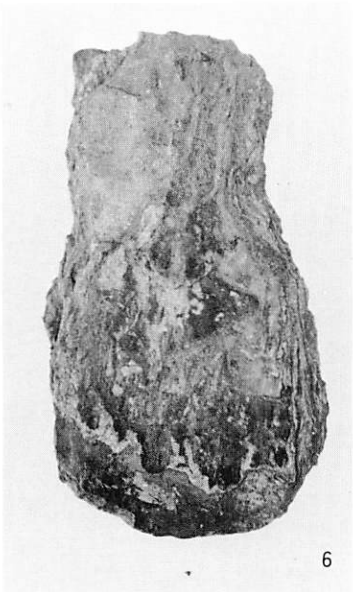

7

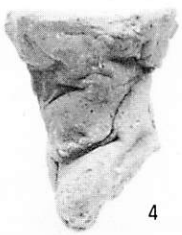
土器溜め出土遺物



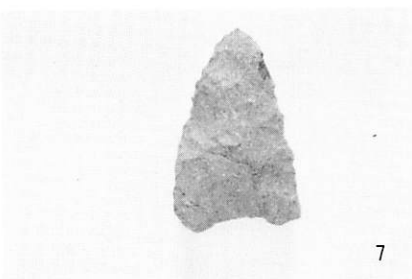




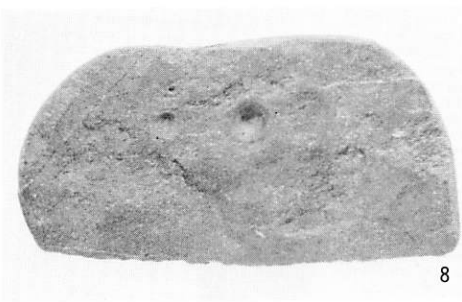




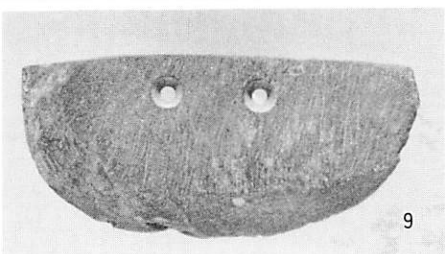






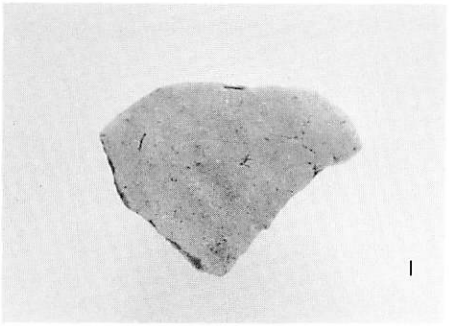


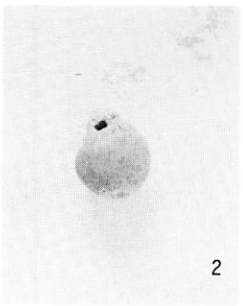


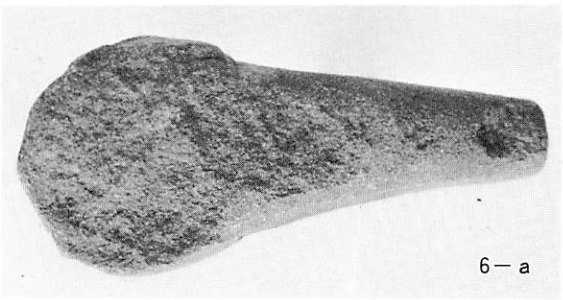


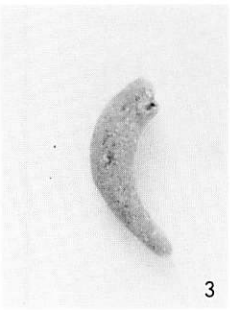
土器溜め出土遺物（土製品、石器）

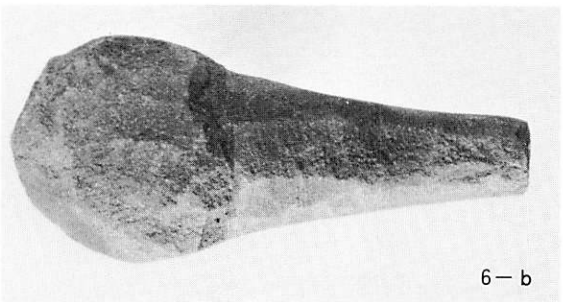
図版88

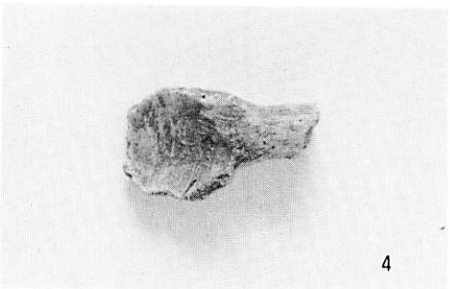

1

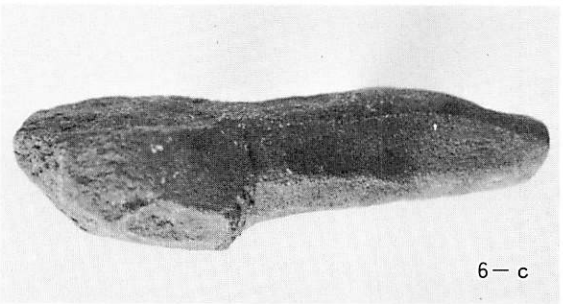

2


6－a

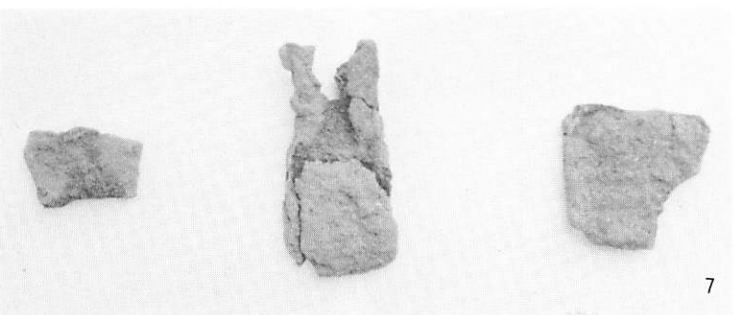

3

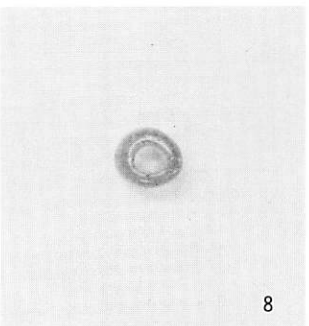

6－b


4


6－c


5

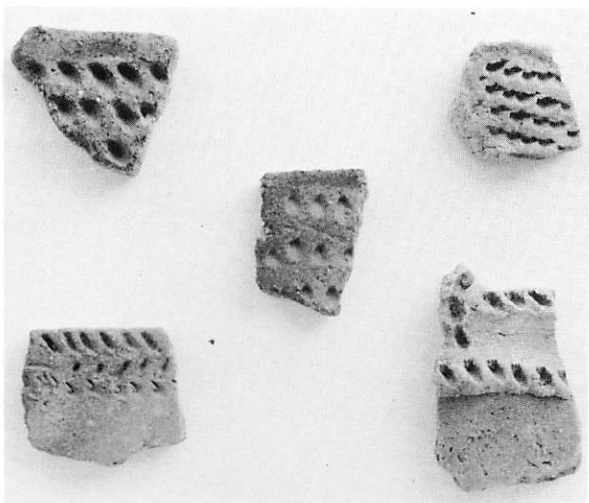

7


8

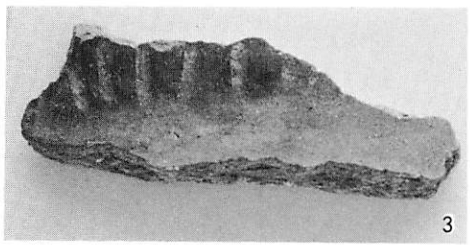
鹿本高校調査区出土遺物



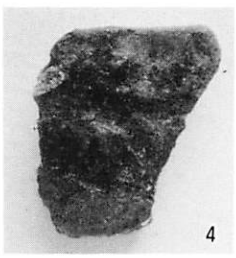
1



2



3



4



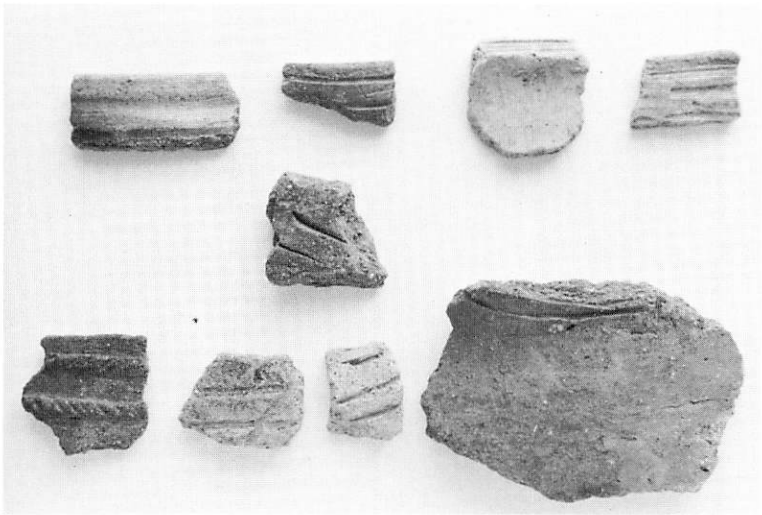
5

縄 文 式 土 器

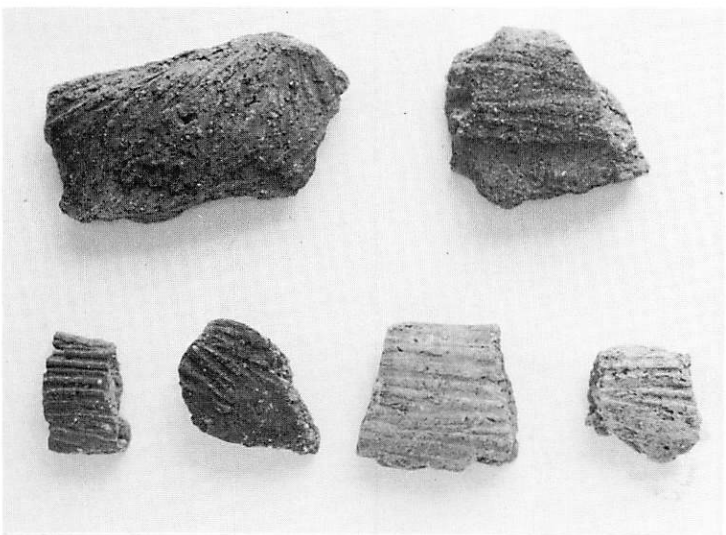
図版90



1

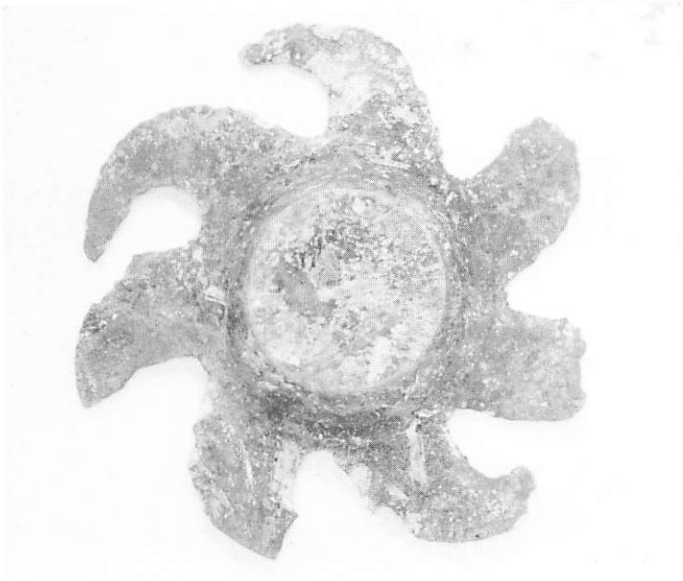


2

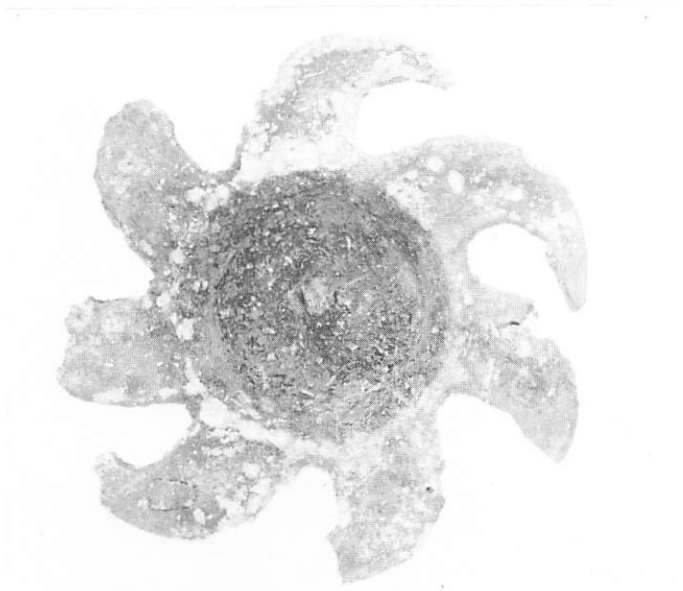


3

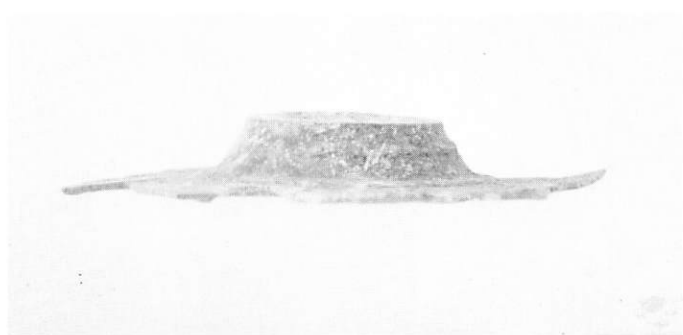
縄 文 式 土 器



1



2



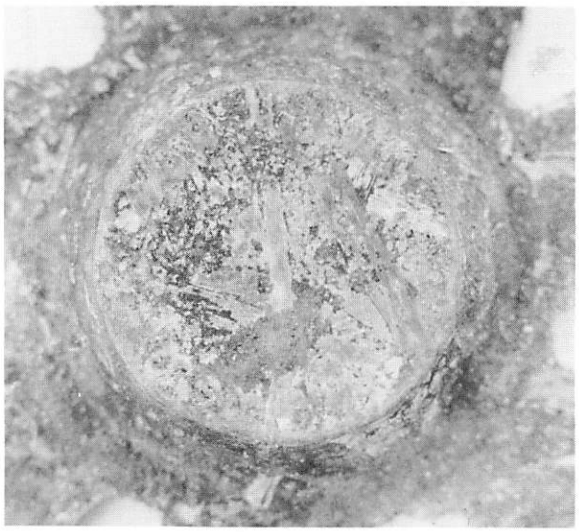
3

巴　形　銅　器

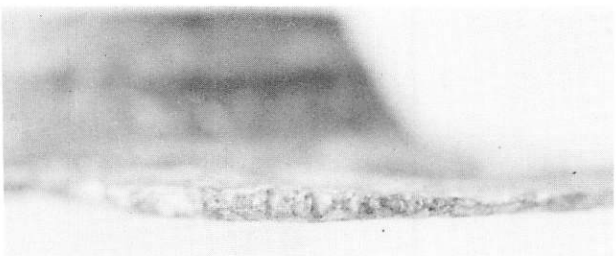
図版92



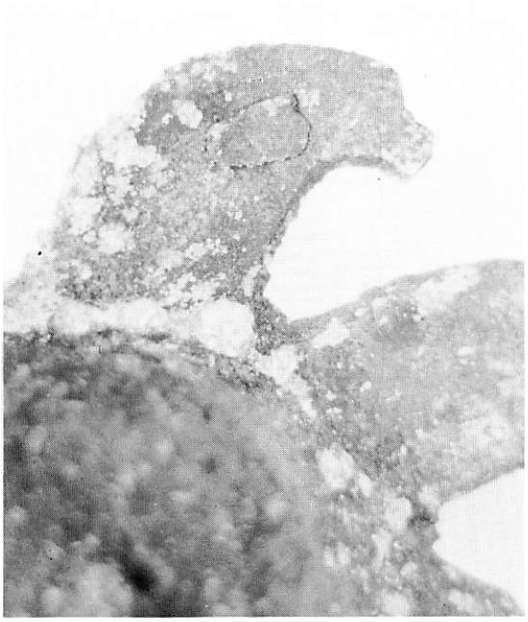
2



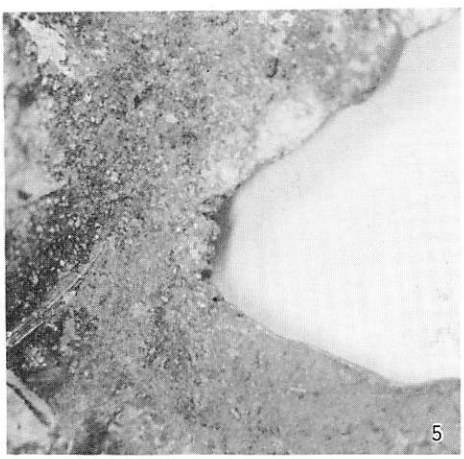
1



4



3



5

巴　形　銅　器



1－a



1－b

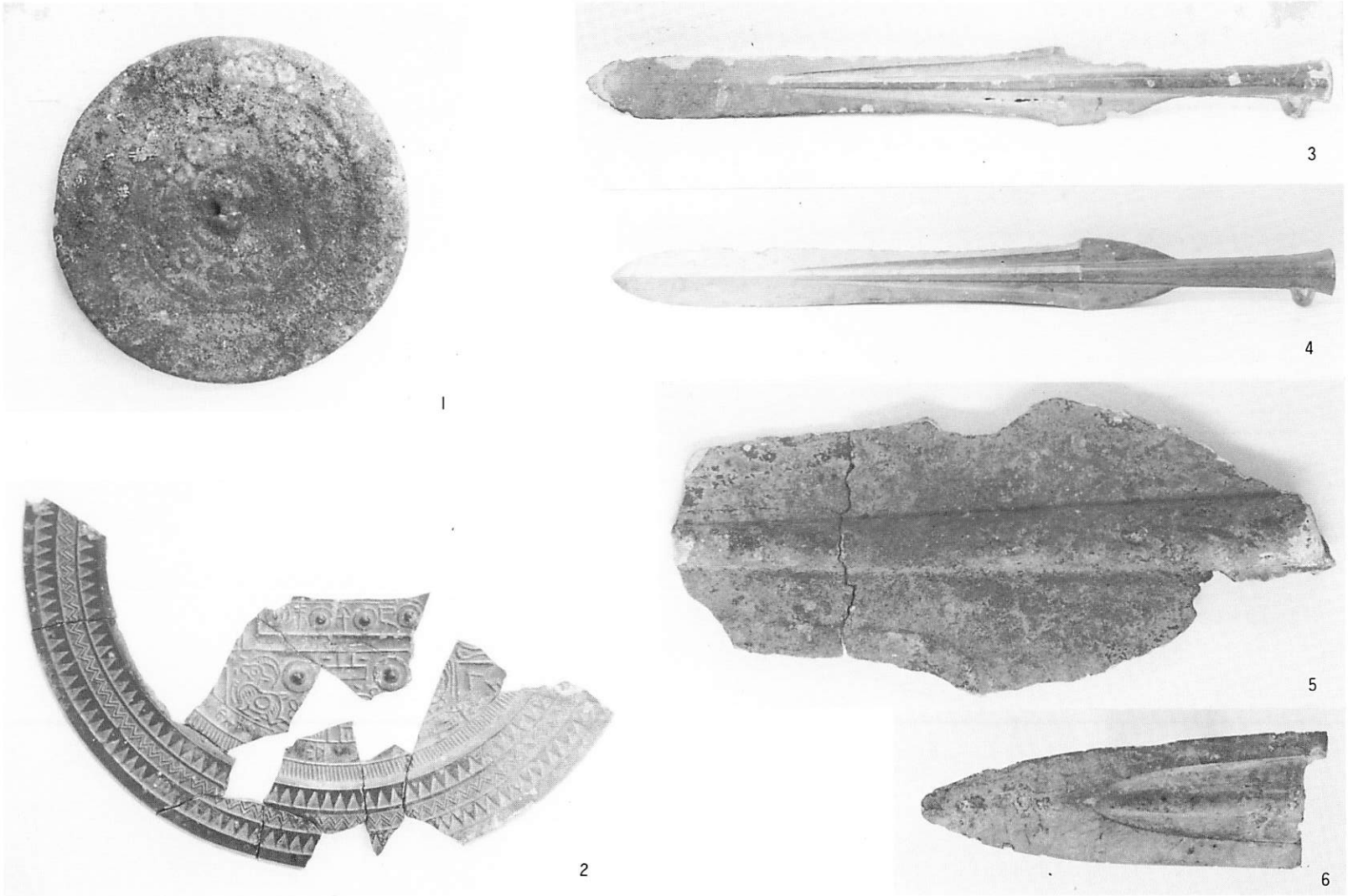


2



3

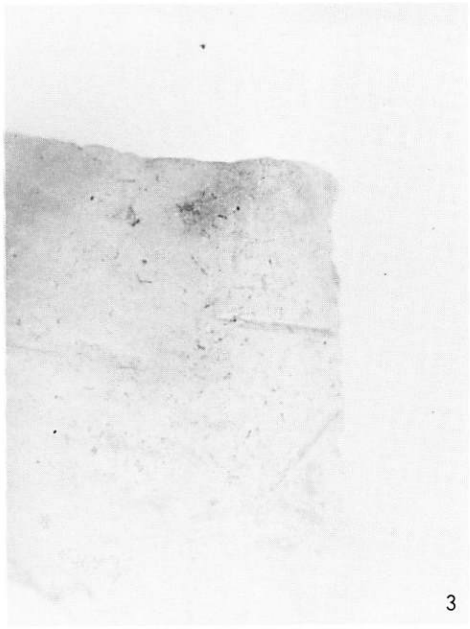
小形仿製内行花文鏡・銅鏃



菊池川流域出土青銅製品

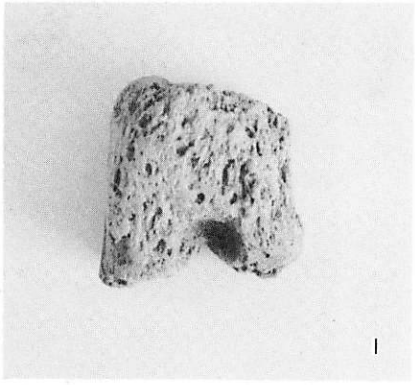

1

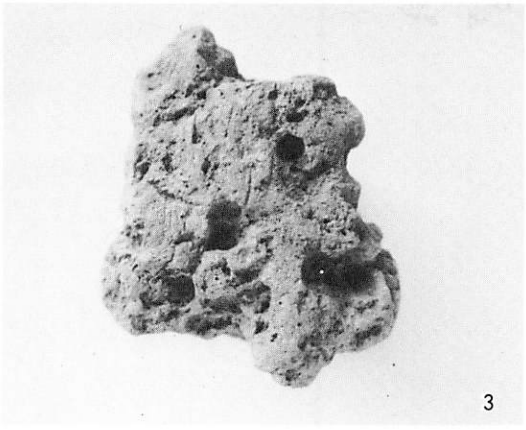

2

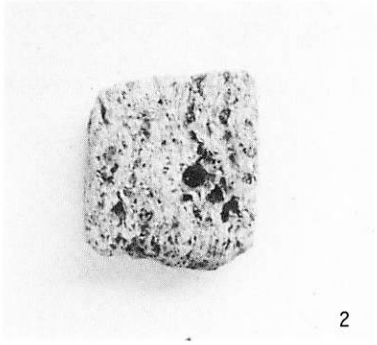

3

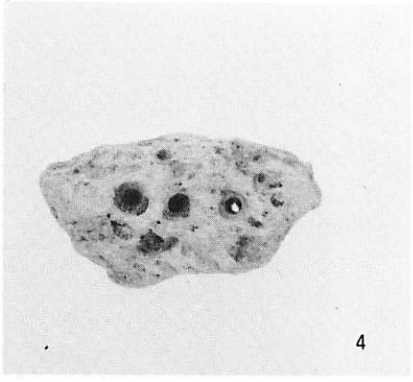

4

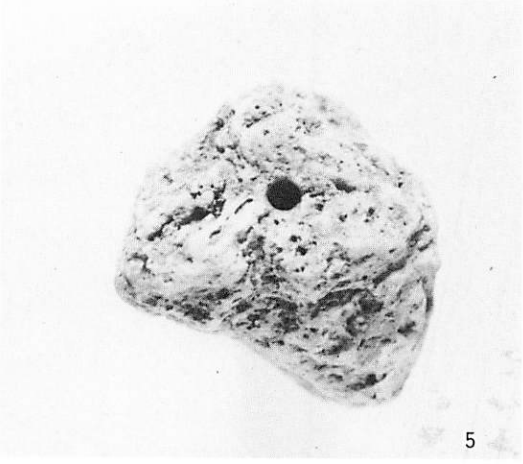
ヘラ記号をもった弥生式土器





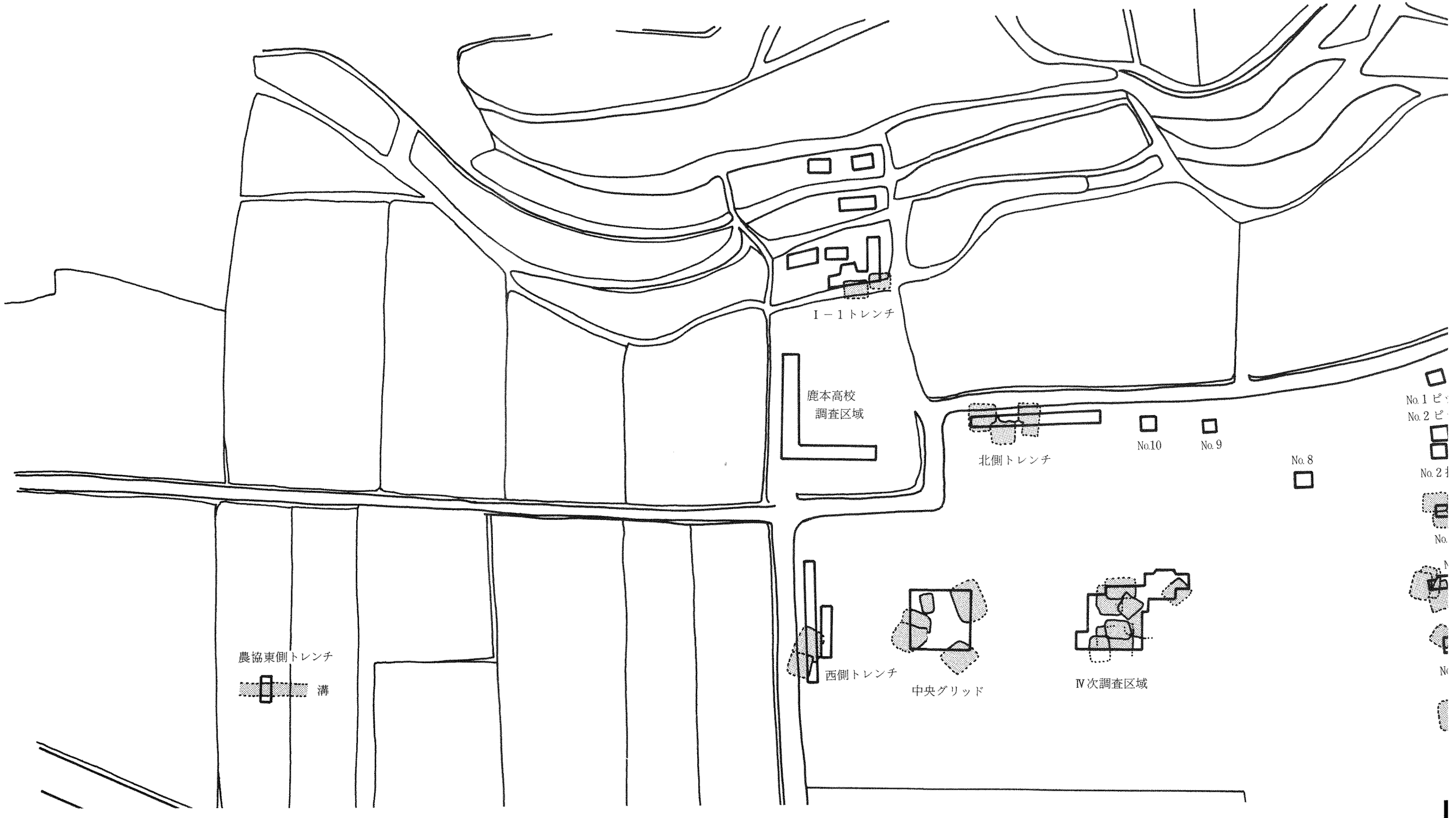




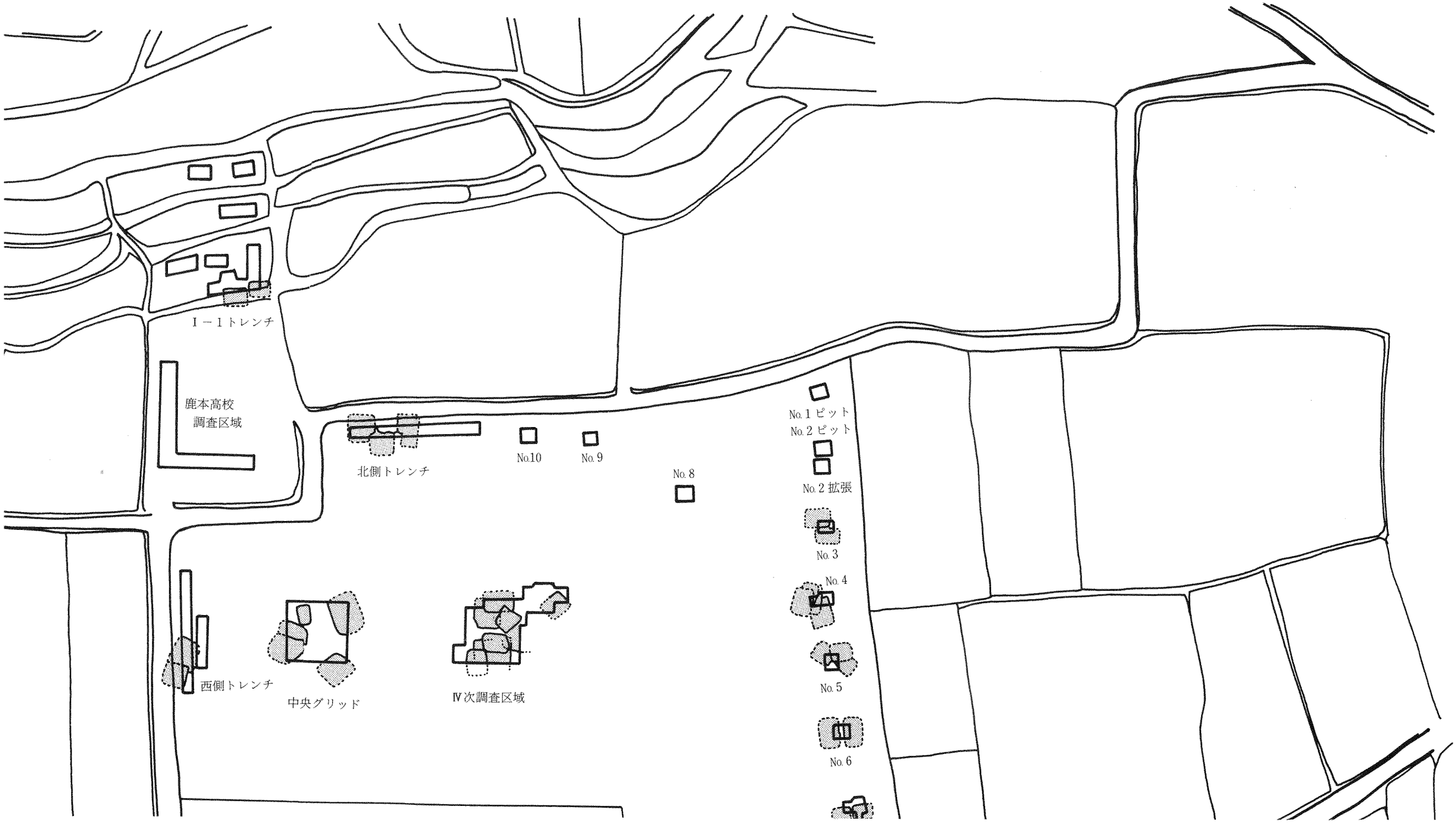


孔穴を有する軽石

付図1　方保田東原遺跡遺構配置図

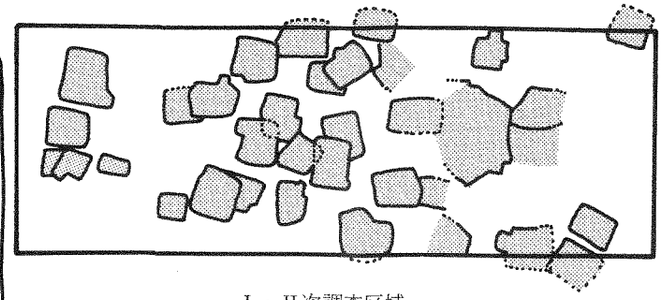


付図1　方保田東原遺跡遺構配置図

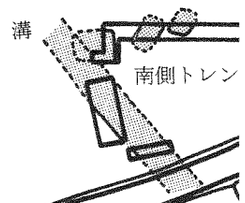


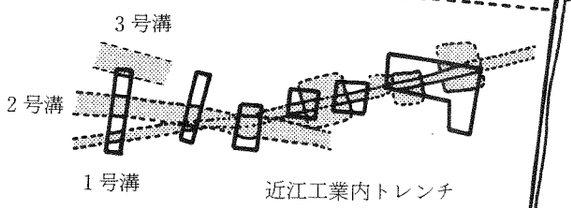
30年調査地点

51年調査地点

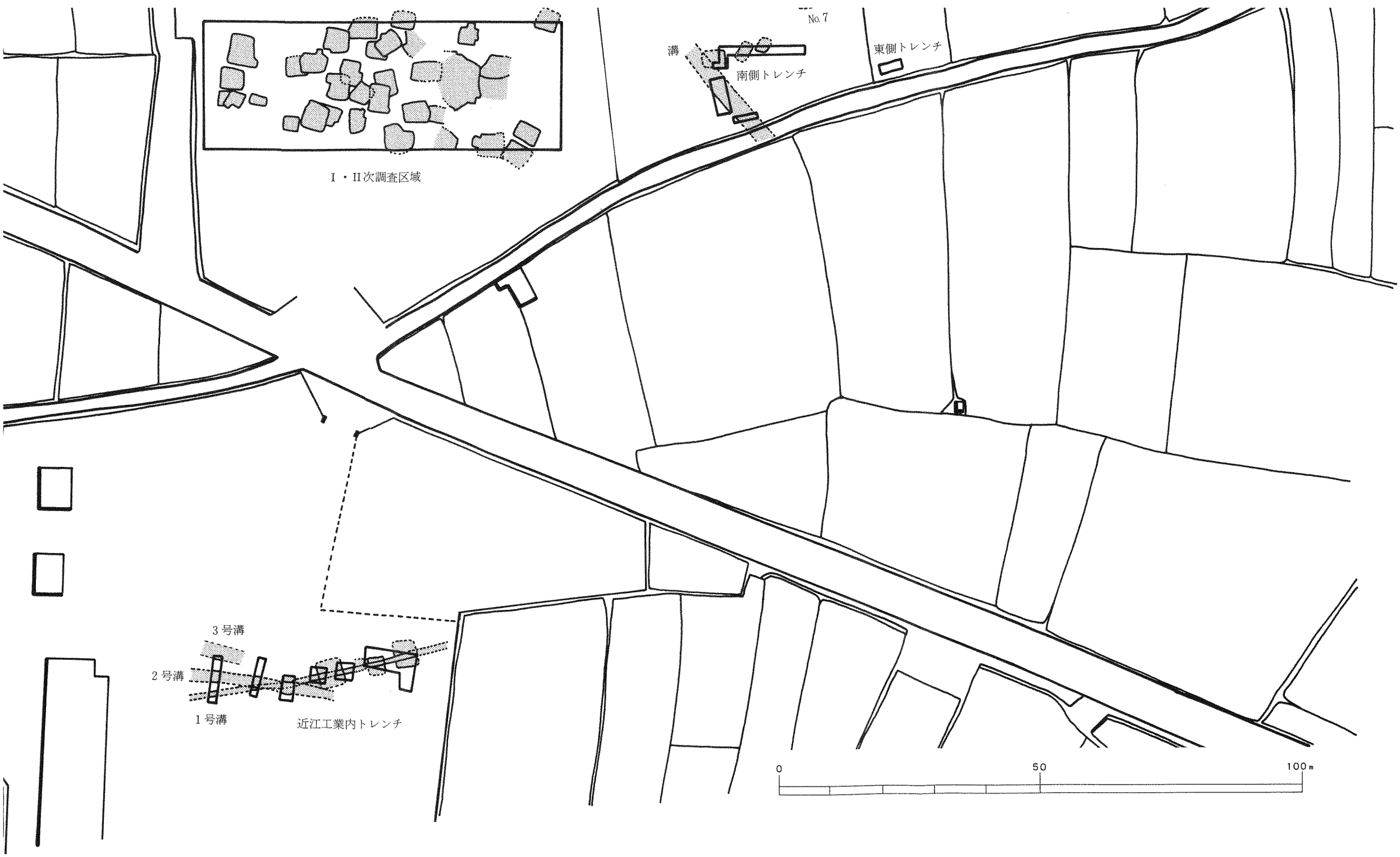


Ⅰ・Ⅱ次調査区域

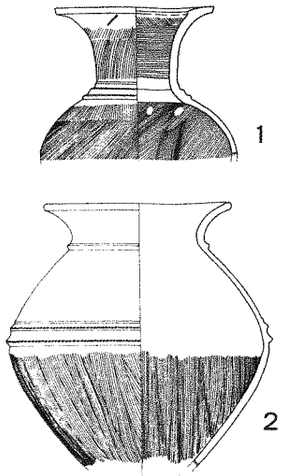
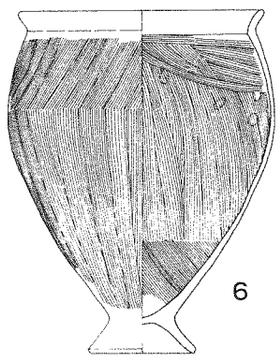
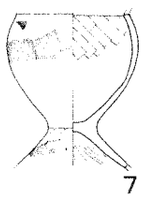
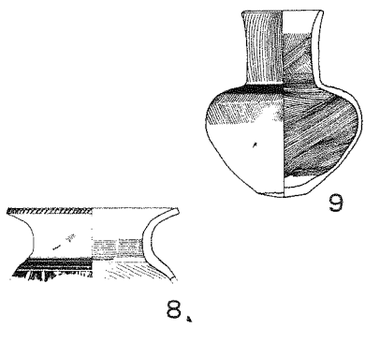
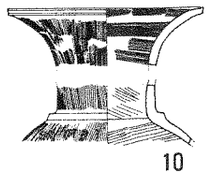
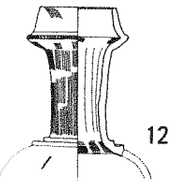
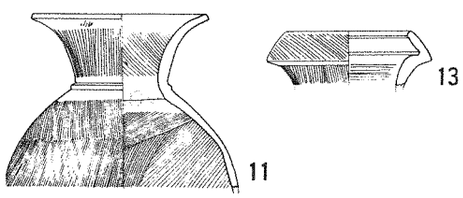
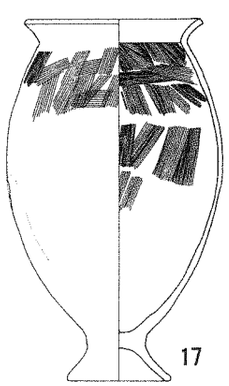
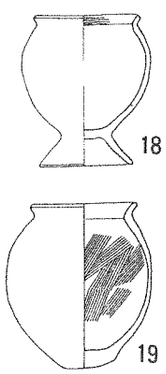
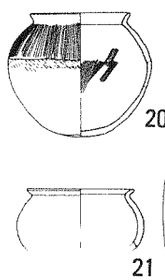
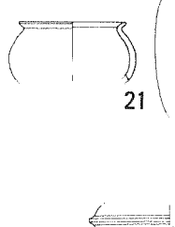
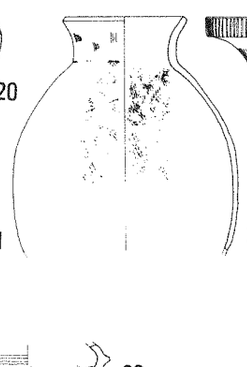
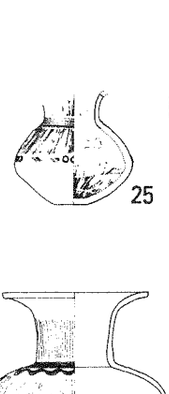
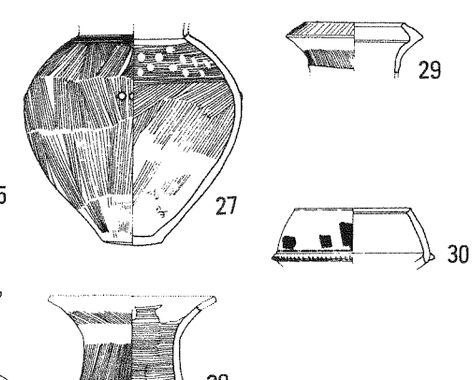
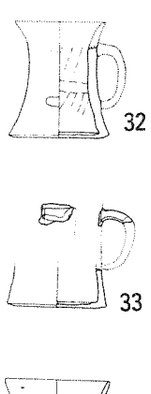




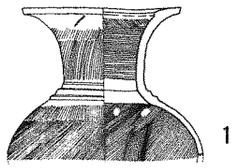
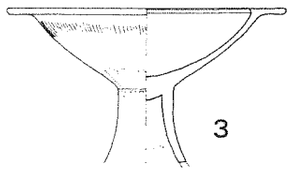
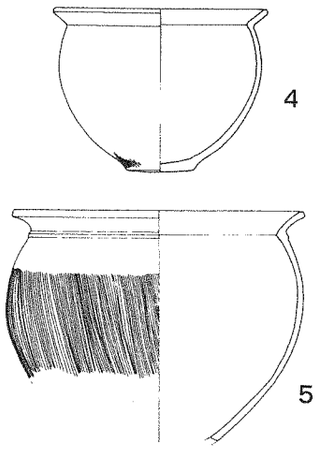
0


No.7
溝
南側トレンチ
東側トレンチ
Ⅰ・Ⅱ次調査区域
3号溝
2号溝
1号溝
近江工業内トレンチ
0
50
100m

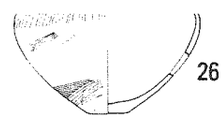
付図2　方保田東原遺跡出土土器の編年（案）

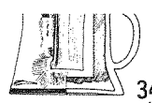
時期		遺構	甕	壺	ジョッキ	
I期		Ⅲ北側トレンチ黒色ピット（2~5） Ⅳ土器溜め(1)				
II期	a	ⅡA—4号住居跡（8.10.13.15） Ⅲ中央グリッド4号住居跡(8) Ⅳ土器溜め（6.9.11.12.14.15）	 	   		
	b	Ⅰ2号住居跡（25.27.40.42~44） ⅡA—1号住居跡（32） A—3号住居跡（21.22.24.29.31~33.41） D地区西側土器溜め（28.30.34.35） Ⅲ近江工業内2号溝底（17~20.23.36~38）	 	    		

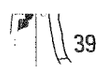
付図2　方保田東原遺跡出土土器の編年（案）

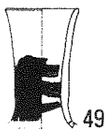
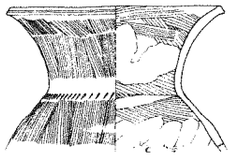
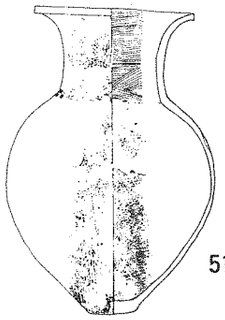
壺	ジョッキ	高　　坏	器　台	鉢
				

		Ⅳ土器溜め(26)		
Ⅲ期	a	Ⅰ1号住居跡(51) 14号住居跡(54) ⅡA—2号住居跡 (45.49.55) D地区東側土器溜め (50.52.57～59) Ⅲ近江工業内2号溝中 (46～48.53.56.60.61)		
	b	Ⅰ20号住居跡 (70.73) ⅡB—1号住居跡 (64.67.74.77.79) Ⅲ近江工業内2号溝上 (65.66.68.71.72.78.80) 近江工業内2号住居跡 (63.69.75) 近江工業内4号住居跡 (62.81)		
Ⅳ期	a	Ⅰ9号住居跡(91) ⅢNo.1ピット (82.83) No.2ピット(87) 中央グリッドⅠ号住居跡 (83.84) 農協東側トレンチ溝中 (89.90.92) Ⅳ6号住居跡(86) 7号住居跡(85)		
		Ⅰ3号住居跡 (97.105) 5号住居跡(99) 17号住居跡(102)		

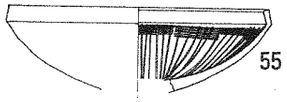
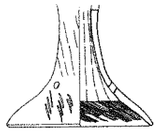
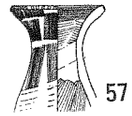
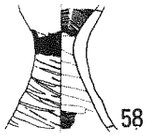


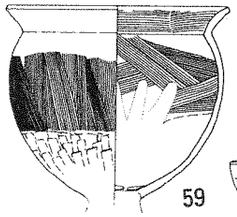


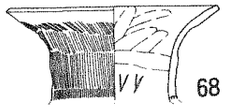
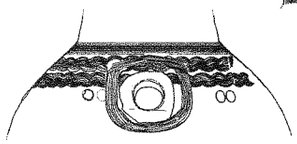
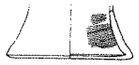
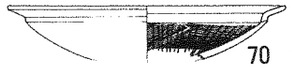
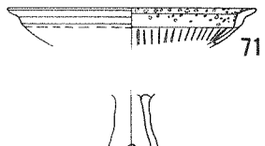
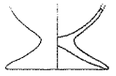
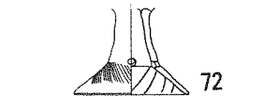


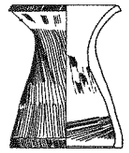





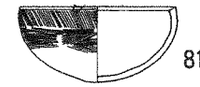
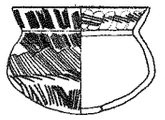


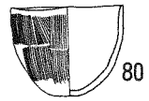





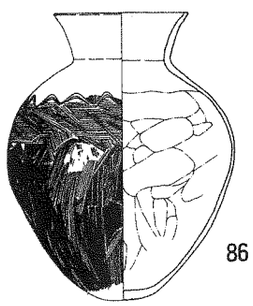


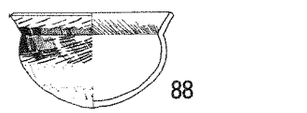
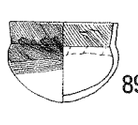
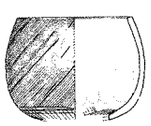










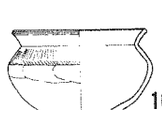
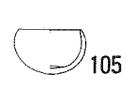



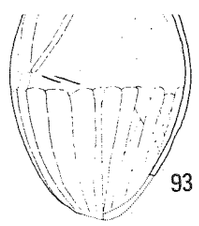
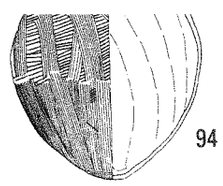
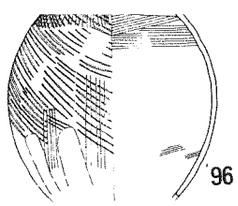
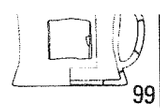
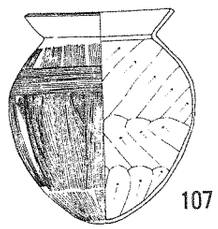
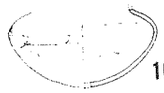
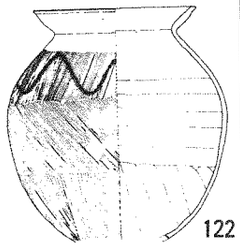
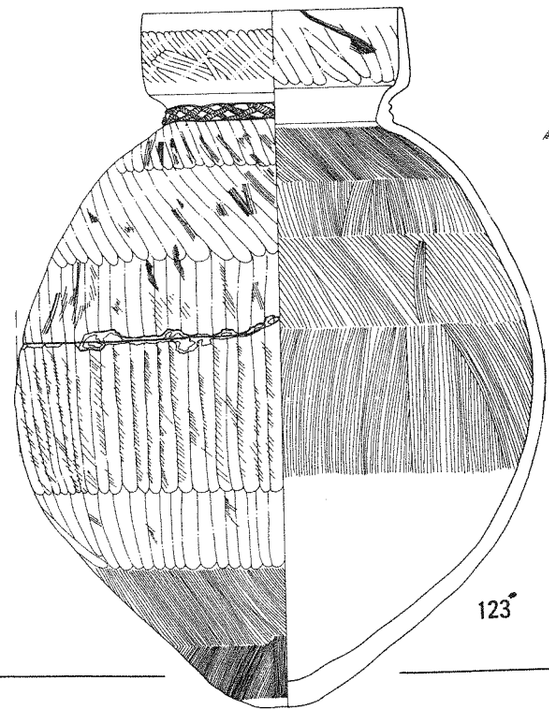
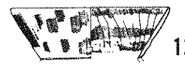
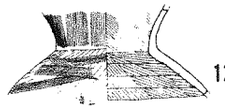
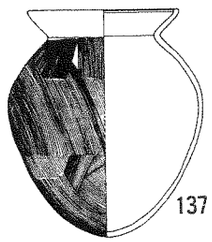
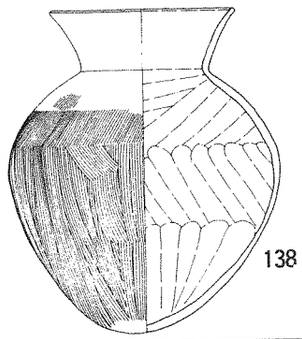
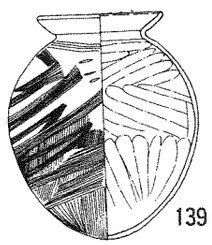
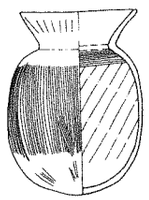


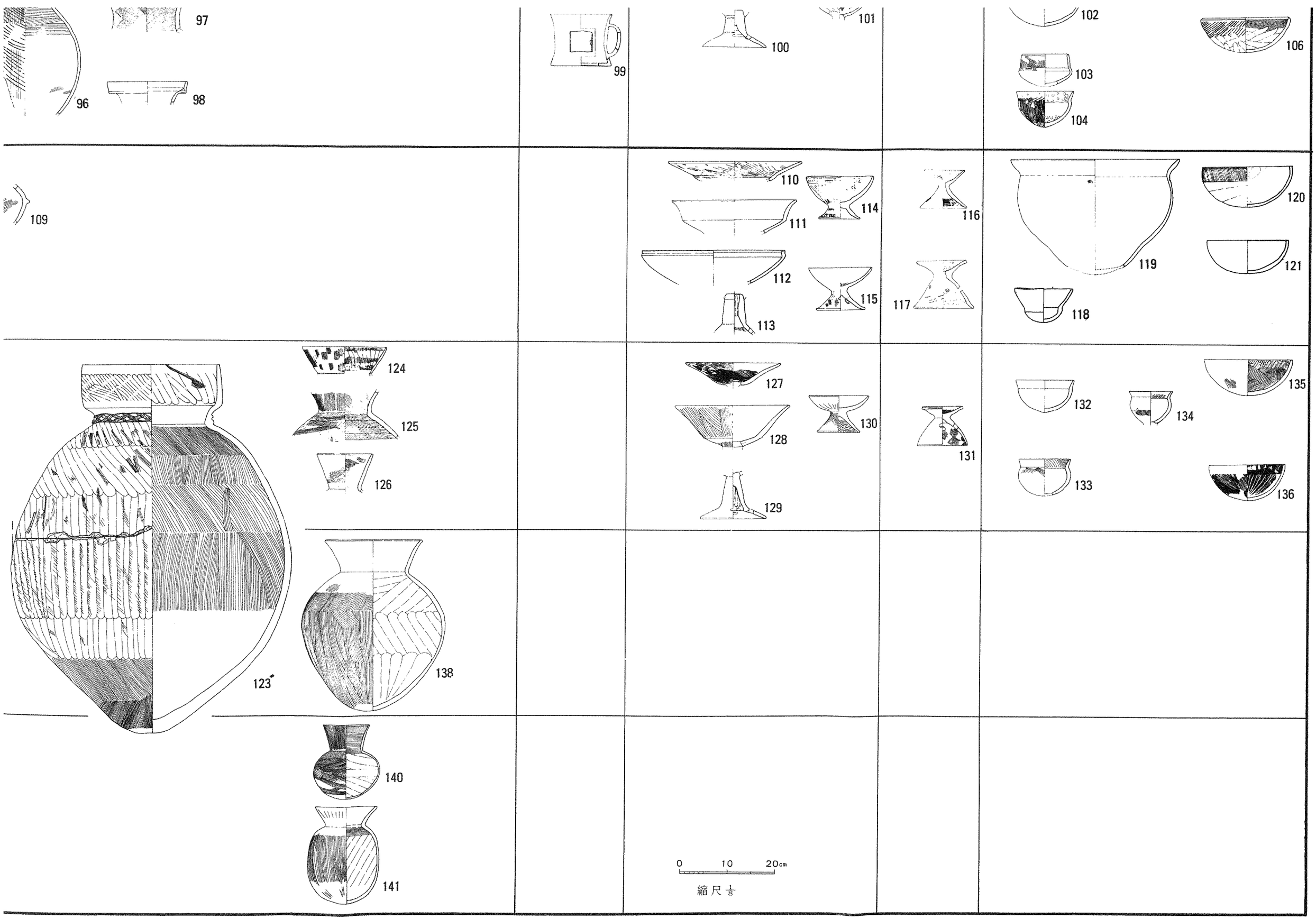




	b	II D—2号住居跡 (94) III中央グリッドI号 住居跡 (93.95.96.98.100. 101.103.104.106)	 93  94  95  96  97  98  99
V期	a	I 8号住居跡 (107.112.113) 10号住居跡 (108.111.114～ 121) IV 5号住居跡(109) 8号住居跡(110)	 107  109  108
	b	I 13号住居跡(124) 18号住居跡(128) IIINo. 2 ピット(123) No. 3 ピット(130) 近江工業内2号溝 上 (125.133.135) IV 3号住居跡 (126.127.134) 4号住居跡 (131.132.136) 土器溜め(122)	 122  123  124  125  126
	c	IIINo. 2 ピット(137) IV 土器溜め(138)	 137  138
	d	IIINo. 2 ピット(139) IV 土器溜め(140.141)	 139  140  141


96
97
98
99
100
101
102
103
104
106
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
138
140
141
0 10 20cm
縮尺 1/8

正誤表

『方保田東原遺跡(1)』 山鹿市博物館調査報告書　第2集　熊本県山鹿市教育委員会1982年

頁	行	図番	誤	正
16と17の間		第4図	遺構名記載漏れ	「B-1住」の右で「B-3土壙」の下の遺構は、「B-2住」
19	3		遺物(図版8-3～6、	遺物(図版8-3～7、
20	31		遺物(図版8-7～9、	遺物(図版8・9、
28	33		遺物(図版7-1、9-5・7、	遺物(図版7-1、9-5～7、
33	6		裾部に5個の円孔を	裾部に4個のの円孔を
38	11		16は丸底となっている。	6はは丸底となっている。
43	9		2、第9図-18、第11図)	2、第52図、第53図)
43	11		第11図は、頭部を欠損した	第52図は、頭部を欠損した
43	12		第12図は、熊本県下益城郡	第53図は、熊本県下益城郡
45	11		23　23号住居跡(第54図)	23　23号住居跡(第55図)
45	16		遺物(図版11-5、第55図	遺物(図版11-5、第54図
55	13		遺物(図版23-1・2、	遺物(図版23-2、
58	10		遺物(図版23-2～6、	遺物(図版23-1・3～6、
73	9		共に全面円塗りを	共に全面丹塗りを
73	14		10　A-1号木棺墓(第75図)	10　A-1号木棺墓(第76図)
79	2		(図版21-1、	(図版21-2、
79	6		遺物(図版26-7・8、	遺物(図版26-8
80	3		(図版21-1	(図版21-2
80	9		遺物(第101図-5～8…	遺物(図版26-7、第101図…
80	29		(図版21-1、	(図版21-2、
87	16		(図版29-1～3・	(図版29-2・3・
102	19		28cm弱、幅4cm内外	28cm弱、9は幅4cm内外
110	4		(図版35、…、第138図)	(図版35、…、第139図
110	16		遺物(第139図)	遺物(第138図)
123	31		20は復元口径14.3cm	20は復元口径28.6cm
129	36		52は…、器高14.5cm	52は…、器高19.7cm
133		第159図89の上の土器	(図番号　記載漏れ)	92
133		159図90	(底面の拓本)	(158図88の底面の拓本)
143	5		復元口径8.8cm、	復元口径13.7cm、
145	16		3は半欠の鉢で口径19.8cm	3は半欠の鉢で口径15.8cm
149	2		実測に耐えうるものは第181図5	実測に耐えうるものは第182図5
149	14		、21、22、24～28、183、184図)	、21～28、第183図、第184図)
151	15		土製柄杓(第217図－1)より、	土製柄杓(第217図－21)より、
153	6		第185図3は、丹塗りの土師器で	第186図3は、丹塗りの土師器で
153	14		第187図3は、ジョッキ型土器の	第188図3は、ジョッキ型土器の
163	24		できたが、第196図-13、198図-13	できたが、第197図-13、198図-13
164	5		伴なわない遺物には、第195図10・12、	伴わない遺物には、第196図10・12、
164と165の		第199図	(遺構名記載漏れ)	(左から1号溝、2号溝)
170	34		(2)その他の遺物(…、202図-17～22、	(2)その他の遺物(…、第202図-58・60～63、
170	35		203図-65、205、206図	第203図-65、第205・206図
180		218図3	遺物実測図なし	

頁	行	図番	誤	正
187	5	229図3	完形の鉢で径14cm	完形の鉢で径10.4cm
188	1		第231～232図）	第231～233図）
190	9		38は、器種不明。の土製品…	39は、器種不明の土製品…
205	2		83は、復元口径11cm	83は、復元口径19.0cm
205	21		92は、口径6.5cm	92は、口径12.7cm
229	19		付図1参照	付図2参照

※須恵器断面塗り忘れ:P.110　第138図2

図版

頁	誤	正
図版8	2号住居跡（3～6）	2号住居跡（3～7）
図版8	3号住居跡（7～9）	3号住居跡（8～9）
図版9	8号住居跡（5，7）	8号住居跡（5～7）
図版21	2　B-1～4号土壙墓	2　B-1～5号土壙墓
図版23	A-1号住居跡(1)	A-1号住居跡(2)
図版23	A-2号住居跡(2～6)	A-2号住居跡(1・3～6)
図版58	Ⅰ－1、2トレンチ出土遺物	Ⅰ－1、2トレンチ出土遺物（6、5）

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

　この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第 15 集　方保田遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

　底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

　なお、平成 17 年（2005）に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告第 14 集　馬見塚古墳群辻古墳
発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3
電話： 0968-43-1651
URL：https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/

電子書籍制作日：2025 年6月 19 日